
仮面ライダーディージェント～破壊の代行者～

水音ラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディージェント〜破壊の代行者〜

【Nコード】

N6130T

【作者名】

水音ラル

【あらすじ】

ライダー大戦から二年後…とある平凡な世界に住む須藤亜由美は夢を見た。

廃墟となった街中を歩く青年がロボットの様な姿へと変わる夢。

そしてその数日後、彼女の通う高校に須藤歩と言う自分とほぼ同じ名前の臨時教師がやって来た。

興味本位で彼を調べてみたところ、彼があ夢に出て来た青年だと言う事が発覚した。

そして彼のもう一つの名は…仮面ライダーディージェント。

仮面ライダーディケイドに代わり、自らの使命を遂行する者、仮面
ライダーディージェント。

自らの存在意義を求め、その歩みは何処へ行く。

第一話：代行者の誕生（前書き）

修正しました！

もう一度読み直してくれると嬉しいです！（＾O＾）／

第一話：代行者の誕生

仮面ライダーディケイド・門矢士かじやつかさが仮面ライダーキバひかりなつみ・光夏海ひかりなつみによって殺された瞬間、ディケイドライダーに内蔵されていたブックボックスが解放されていた。

そのブックボックスはディケイドが万が一破壊され、行動不能になった時に開かれるバックアップシステムであった。

そのバックアップはディケイドライダーに入っていたすべての情報を自身にダウンロードし、新たなライダーとして存在を構築していた。

そのライダーの名は：“仮面ライダーディージェント”

スーパーショッカーのアジト：そこで鳴滝は怪人たちを束ねるゾル大佐として怪人たちを集めていた。

ディケイドが死んだ今、彼の目的は達成されあとはこのスーパーショッカーという悪の組織を徐々に解体させるだけとなった。

鳴滝は元々、世界征服などという事を望んではない。彼の目的はあくまでディケイドの破壊であって、このスーパーショッカーもただディケイドへの対抗手段として作り上げたにすぎない。

ディケイドがいなくなった今、あとは各世界から集めた怪人たちを元の世界に帰し、すべてを元に戻すだけとなった。

「さあ、怪人達よ！ 己の世界に行き、自らの信念に従って動くのだあー！」

鳴滝はゾル大佐として怪人たちに向かって叫ぶ。
その言葉は逆に考えれば怪人たちがこれまで通りにやってこいという事で怪人たちの士気を高めるだけに過ぎない。

「グオオオオオオオオ！」

怪人たちはその号令に対して何の疑問も持たず、彼の言葉に返事をするように雄叫びを上げる。

ここにいる怪人たちは比較的知能の低い者ばかりだ。知能が高ければ鳴滝の命令を聞かず、反乱を起こす者たちが現れるかもしれないという鳴滝なりの配慮だ。

このまま徐々に怪人たちを帰していけばすべてが元通りになる。そのはずだった。

「おっと、悪いがお前達は、ここで消えてもらっせ」

アジト内に聞き覚えのある男の声が響く。鳴滝と怪人たちは声の聞こえたほうへ向く。するとそこには…

黒いコートにマゼンタカラーのインナー、目元が隠れそうなくらいの少し前髪が長い茶髪、そして若干キツそうな目に少しムスツとした口をした長身の男がいた。

鳴滝はその男を知っていた。忘れる筈がない憎き相手…

「き、貴様はデイケイド！？馬鹿な！何故生きてる！？」

鳴滝がその男の名と疑問の言葉を口にする。するとデイケイドと思われる男…門矢士が呆れたように小さく溜息を零すと鳴滝に言い放った。

「違うな、俺は確かに門矢士だがデイケイドじゃない」

「何い!？」

門矢士の返答に鳴滝はさらに疑問を口にする。奴はディケイド…破壊者でしかない。それ以外に何かあるというのか。そして更に門矢士は返答を続ける。

「俺はディケイドのバックアップシステムだ。この姿はディケイドライバーにあつた情報から構築させてもらった仮の姿だ」

そして門矢士は返答しながら一枚のカードを取り出し鳴滝たちに見せる。そのカードに描かれているライダーはディケイドに似て非なるもの……

「俺の名は破壊の代行者：仮面ライダーディジェントだ！ 覚えておけ!！」

門矢士：ディジェントはさらにメリケンサックにゴツゴツとした四角い機械のような物が付いたディジェント専用変身ツール…ディジェントドライバーを右手に出現させた小さな灰色のオーロラ…次元断裂から取り出して腹部に宛がった。

すると四角い機械の先端部分から帯が飛び出し、帯はディジェントの腰に巻きつくように一周し、ディジェントドライバーにカチリという音と共にドライバーの反対側に装着されてベルトを形成する。

更にディジェントはそこから流れるような動作でディジェントドライバーの持ち手部分を引っ張った。

すると四角い機械の部分が時計回りに90度回転し、上部にカードの挿入口が現れる。

「変身!」

「カメンライド……」

そう言い放ちながらカードを挿入口に装填すると、デージェントドライバーから電子音声と「ギョインギョイン」という待機音声が流れる。

そこから間髪いれずに持ち手部分を押し込むと、機械部分も再び90度反回転し元に戻す。

「デージェント！」

デージェントドライバーが元の形状に戻ると同時に電子音声が鳴り響き、デージェントの身体に変化が訪れる。

身体がアナログテレビの様な灰色の砂嵐とザーザーという音に包まれ、デージェントドライバーの機械部分の中央にある丸く青黒い部分から黒い四角い板：ライドプレートが数枚飛び出す。

その板はブーメランのように回転しながら灰色の砂嵐に包まれながら身体を再構築しているデージェントの頭部に4枚突き刺さる。残りのライドプレートは両肩に横に2枚つつ、両脚の脛部分に縦に1枚つつ突き刺さり、するとその突き刺さった部分から砂嵐が消えていき全身を一瞬だけ薄い水色に染め、そこからさらにその色を深くさせ藍色になる。

そして最後にDを鋭角に尖らせ、鏡合わせの様に反転させた黄色く大きな複眼が光る。まるでエレベーターの閉口ボタンの様な形だ。そして複眼が光ると同時に変化も完了していた。

その姿はディケイドに酷似した物だが、それでいて全く違うものだ。

深いインディゴカラーのシンプルな装甲と四肢と胸部に伸びる白い

ラインの入った黒いボディに黄色い複眼、中央の2枚のライドプレートは縦に突き刺さり、その角の一部には黄色い水晶のような物：シグナルポインターが付いていた。端の2枚は斜めに突き刺さっており、？字になる様に下の部分でつながっている。その頭部を全体的に見るとまるで下を向いた二本線の矢印のようだった。

「さて、デイケイドに代わって計画を再開させるか」

変身が完了するとデイージェントは軽く手をはたきながらそう言い放った。

「な、何なんだ…これは……」

鳴滝はそう呟きながら辺りを見渡す。

この場にいたすべての怪人はたった一人のライダーによって全滅していた。

グロンギやアンノウンは身体を爆散され、オルフェノクやイマジンはその身を灰や砂に還され、アンデッドは例え破壊してもすぐに復活するためご丁寧に封印用のブランクカードを生成してそのカードの中に封印した。

そしてデイージェントは新たな攻撃対象を見る。その黄色い複眼の先にいるのは…鳴滝……。

デイージェントは鳴滝にゆっくりと近づきながら次元断裂空間から1枚のカードを取り出す。そのカードは…ファイナルアタックライドのカード。

鳴滝は腰が抜けたのか上半身を必死に動かしながら後ずさる。

「往生際が悪いぞ、鳴滝」

そう言い放ちながらカードをディージェントドライバーに挿入する。

「お前は俺たちの計画には邪魔な存在だ。ここで倒しておかないと面倒だからな」

「ファイナルアタックライド……」

「おのれ……おのれディケイドオオオオ!!」

「だから、俺の名はディージェントだ」

目の前にいる脅威に怖気づきつつも叫ぶ鳴滝に溜め息を吐きつつも、ドライバーの持ち手部分を中央に押し込んでそれですべてを終えようとしたが……

「ディージェント……」

電子音声がそこで止まった。

鳴滝は疑問に思いつつディージェントの全身を見ると、ディージェントの身体からザアという静かな音とともに身体から粒子が飛び散り、消えつつあった。

「な、何だ!? 一体、何が起こって……」

ディージェントも自身に起こる現象に狼狽しつつも自身の中の入ってきた情報に驚愕する。

「馬鹿な……ディケイドが復活しただと?」

デージエントはデイケイドのバックアップだ。デイケイドに代わって計画を遂行することが目的だ。

だがデイケイドが復活したため、デイケイドドライバーからダウンロードした情報がすべてデイケイドに返還されようとしていた。つまり、それはデージエントの抹消を意味している。

「ク…クソツ…!!」

デージエントはまだ残っている情報から次元断裂を展開すると、その中へ逃げ込んだ。

一人残された鳴滝は何とか立ち上がると神妙な顔で呟いた。

「助かったか…だがデイケイドが復活してしまった…早急に対処せねばならんな……」

鳴滝は次元断裂空間を作り出すと、その中を潜ってアジトを後にした。

第一話：代行者の誕生（後書き）

初めまして水音ラルと申します。

とうとう無計画でやっちゃまったorz

この小説を書くこうと思ったのはあるライダー小説を書いている人の影響を受けてですね…その設定や世界観がすごい納得いく内容で、それだったら「こういうのもあってもいいんじゃない？」って思ったのが事の発端ですw w

できれば月一で投稿していこうかなって思ってますんで、よろしく
お願いいたしますm（　　）m（あと、出来れば感想も……）

第二話：生きる目的を得た青年（前書き）

思ったより早く出来たー！（。°。°。）

でもやっぱり大変だった…頑張った！頑張ったよ自分！！

とりあえず後書きの方に用語集をまとめてみたんで、そちらも見といてください（^o^）ノ

第二話：生きる目的を得た青年

とある世界…その世界はほぼ破壊された状態だった。

その元凶ともいえるべき一人の青年は廃墟の中を覚束無い足取りで歩いていた。

青年は研究員が着ている様な白衣を身に着け、その所々を崩れた建物の残骸に擦りつけたのか汚れてしまっている。髪は少し長めの黒髪を真ん中で分け、目はまるで死人のように虚ろで焦点が合っていないかも怪しい。

「僕が…僕がいたから…こんな…」

青年は物心ついた時から次元移動能力を持っていた。

この力を使えば、次元断裂空間を通じて様々な場所へ移動することができる。この力に目を付けた研究者達は、これを応用して軍事戦略として使おうとしていた。

例えば敵国の上空に次元断裂空間を展開させてそこから爆弾などを投下させれば、突然の事態に対処できないだろう。

しかもこの次元断裂空間は発生させた人間の任意で通ることを阻んだりすることができるため、敵側が次元断裂空間に攻撃してもこちら側に来ることはないのだ。

青年は少年だった頃からこの力が軍事関係に使われている事は知っていた。しかしどうにもできなかった。それが青年の存在意義だったから……。

彼に両親は居たが青年の力を気味悪がって研究者達に売り付けてしまった。もう両親の顔もほとんど覚えていない。

そして研究者たちが青年の力を応用して作った空間断裂装置が今のこの世界を作り出した結果だった。次元断裂空間を作り出す度にその世界にわずかな「歪み」を発生させる。

その「歪み」は少しだけならすぐに世界が修復していくため、全く問題はないのだが、連続して何度も起きると世界が対応できず大きな「歪み」を生んでしまう。

その「歪み」はやがて、他の世界：謂わば「並行世界」と繋がり、その世界の脅威がこちら側に流れ込んでくるのだ。そして今青年の目の前にもその脅威が存在していた。

獣人：とても言えばいいのだろうか。ライオンの顔をした二足歩行の生物がこちらにゆっくりと歩いてきながら右手の甲を左手の指で軽くなぞる動作の後、青年に向かって駆け出した。

この獣人は十中八九自分を殺そうとしているのだろう。しかし青年は何もせずにそこに立ち止まるだけである。

獣人はただ諦めただけだろうと安直な考えを巡らせながら自身の頭上に現れた天使のような光の輪に右手を突っ込み、そこからズルズルと片刃の大振りの剣を取り出す。そのまま上段からの一刀両断で青年を真つ二つにしようとした…だが。

『！？』

突如獣人の目の前に灰色の壁が出現した。剣は壁にぶつかり一瞬だけ白い雷のようなものが出たと思った瞬間はじかれていた。

弾かれた反動で踏鞴たたらを踏む獣人だったがすぐに態勢を立て直し、眼前のよく見れば半透明の壁越しから青年を睨みつける。しかしそれに対して青年はただただ虚ろな目でアンノウンをジッと見ているだ

けだった。

だがその睨み合いもすぐに終わる事になった。

「グオ！？」

突如目の前の壁が何の前触れもなく獣人にぶつかってきた。壁に前から礫にされるような形でどんどん青年との距離が開いていく。

「グオオオオオ！！」

何とか壁から離れようとするも、壁の移動するスピードが速すぎるうえにまるで接着剤でくっつけられたようにビクともしない。

不意に獣人が後ろを見ると、そこには途中で折れて鋭く上がった鉄筋がこちらに矛先を向けていた。恐らくビルが崩れた時に出来たのだろう。

いくら化け物といえど、この速度であれにぶつかれば一溜まりもないだろう。

青年はそう思いながらふとこんな考えが過ぎ^よった。

（まだ、死にたくないのか？ 僕は）

存在意義の無い自分がこの世界にいても全く意味がない。自分を必要としていた研究者達もすでに殺されてしまった。

そんな自分に生きる価値が一体どこにある？

そんな自虐的な思考の海に潜っていると、突然ある気配を感じた。

（…次元断裂？ 装置は全部壊された筈…なのにどうして？）

次元移動能力を持っている青年には次元断裂が起きればすぐにその気配を察知する事は造作もなかった。それは風が吹けばその風が何処から吹いているのか分かる事と同然の様に。

その次元断裂が発生したほうを向くとそこには異形がいた。

インディゴカラーに白いラインの入ったボデイ、下を向いた矢印の形に黒い板がついた顔…いや、マスクだろうか？そして黄色い大きな複眼は苦しそうに（表情はないがそう見えた）こちらを見ていた。その身体からは灰が風に散っていくように粒子が出ていた。

（何だろう…：今までの怪物たちと違う…：）

そのインディゴカラーの異形は苦しそうにこちらに近づいて来るが不思議と危険な感じはしなかった。

（やっと…：やっと見つけた）

インディゴカラーの異形…：ディージェントはそう眩こうとした。

しかしコレを構成する情報の殆どはディケイドに還元されてしまっており、声も出せなくなっていた。

あの後、スーパージョッカーのアジトから逃れたディージェントは次元空間を高速で移動していた。自分を使う事が出来る適合条件をもった人間を見つけて出すために。

最早ディケイド等・「Dシリーズ」に備わっている「ライドカードシステム」も完全に使えなくなってしまうている。

元々デージエントはデイケイドよりスペック的には強いライダーだ。しかしそのため「ライドカードシステム」を加える容量がなかったのだ。

そこで使われた方法が「デイケイドが破壊された際にライドカードシステムをデージエントにダウンロードする」というものだった。そうすることで容量は関係なくデージエントも「ライドカードシステム」を使えるようになる筈だった。しかしその全てがデイケイドに還元されてしまっただ。残されているのは「使命」だけだった。

デージエントは青年の手を取りそしてそこから自分に残った情報を青年に流し込んだ。

「ク！？ ウ…ウアアアア！？」

突然大量の情報を流し込まれた為、青年は頭を抱え苦しみ出す。しかしそれでもデージエントは青年に情報を流し込み続ける。

やがて全ての情報を流しこむとデージエントは完全に消滅した。ガシャンと腹部についていたデージエントドライバーだけを落とす。

「ハア、ハア…フウ」

青年は今自分の頭の中に入って来た情報に息を整えながら脅愕と納得をしていた。

（デイケイド…Dシリーズ…そして『Dプロジェクト』……）
『グオオオオオオ！！』

突然雄叫びが聞こえたほうを振り向く。そこには先ほどの獣人がいた。

その腹部には小さな穴がいていることからおそらくあの鉄筋に刺さった後、青年とディージェントが情報を交わし合った際に次元断裂が消えたのだろう。

（そうか…あの怪物はアンノウンというのか…）

手に入れた情報とあの怪物の情報を重ねながら青年は一人納得する。そして地面に落ちたディージェントドライバーを拾い取り、さらに次元断裂空間から一枚のカードを取り出し、そして誰にでも無く呟いた。

「僕にも目的が出来た…僕の…須藤歩すどうあゆむの生きる理由が出来た…変身

それは生きる目的の出来た青年…須藤歩の生きる希望を得た数分前の自分に対する返答と…

「カメンライド…ディージェント！」

仮面ライダーとして生きる決意をした言葉だった。

第二話：生きる目的を得た青年（後書き）

これまでに出てきた用語集

Dシリーズ⇨ディケイドやディエンドの様に並行世界を移動する移動する能力を持った仮面ライダーの総称。但し、次元移動能力を持っていないと適応できない。例え適応できたとしても、人によって次元移動能力の性質は微妙に違うので、100%使えるかは定かではない。

Dプロジェクト⇨Dシリーズの力で世界を一つに繋げる計画。詳細については本編で語っていくのでまた後日……

次元移動能力⇨空間と空間を繋げることができる能力。基本的に先天的に備わっているが、極稀にDシリーズと接触することで目覚める事もある。（例：海東大樹など）

次元断裂空間⇨空間と空間を繋げる事で出来る灰色のオーロラ。発生させた人物の任意で一切のものを受け付けない壁にもなる。但し、空間そのものにダメージを与える攻撃を受ければ簡単に碎ける。（例：Dシリーズによる攻撃、オーズのオーズバッシュなど）

第三話：破壊の代行者、来訪（前書き）

今回はコメディー成分が多めです。

どうしてこうなった……（。°。°）

本当だったらシリアスにするつもりだったのに……

第三話：破壊の代行者、来訪

須藤歩がデイージェントになって2年後……

とある何の脅威もない平凡な世界の2月9日……

その世界の朝、一人の少女は自分の通う岩森学校の冬服の制服の上に茶色いブレザーを身につけ、長い黒髪を真ん中で分け、後ろで束ねたポニーテールの少女・須藤^{すどうあゆみ}亜由美は走る時に生じる風でポニーテールを靡かせながら走っていた。

亜由美は寝坊して学校に遅刻しそうになっていた。急いで学校に行かなくちゃ……！そう思った時だ、突然辺り一面がドロドロとした灰色に包まれた。

「え！何！？何なの！！？」

突然の事態に戸惑うが、奥にポツカリと灰色ではない外の景色と思われるような空間が見えた。

「あ、ひょっとして出口！？」

歩はその方向へ走ると、その外の景色がブワツと広がり見覚えのある場所についた。

「え、ウソ……学校？」

気がついた時には学校の校庭にいた。幸いにも生徒たちは全員教室に入ってしまったようなので誰にも見られていないようだった。

「ってヤバ！早く入らないと！」

しかし教室の窓から何気なく外を見て先ほどの異常現象を見てしまった者が一人だけいた。

「何？今の……」

「亜由美！朝のあれは何！？」

高校の食堂で小声ながらも鬼気迫る口調で亜由美に朝の光景を目にしていた一人の女子が亜由美に問い質してきた。

「え？ひよつとして…見てた？」

「ええ、偶々外見てたらね。それあの灰色のカーテンみたいな何だったの！？答えなさい！」

「わ、私だって何なのかわかんないよ！？ただ、早く学校行かなきゃ…って思ってたら急に出てきて、それで気が付いたら校庭にいたの！」

「思ってたら…？」

目の前の女子はそう呟くと左手を口元にあてがい、思考の海に漂い始めた。

目の前の女子：藤崎加奈ふじさわかなは亜由美の友人だ。

亜由美より少し短い位の亜麻色の髪をツインテールにしているが、クセツ毛なのか左右の二つの束は蟹の鋏のように真ん中のあたりは

開いている。もし彼女に「蟹頭」などという単語を放とうものなら瓦をいとも容易く割れそうな威力のある脳天チヨップが直撃する事になるだろう。

彼女は気になることがあれば徹底的に調べなければ気が済まない性分だ。今回亜由美に起こった現象もまた納得するまで調べるつもりだろう。

将来、探偵とか似合いそうだな〜とかどうでもいいことを思っていると、閃いたのかこちらの方を向き、

「亜由美、学校が終わったらウチに来なさい！良いわね…!?!」

小声でまたも鬼気迫る口調で言い放った。しかも今度は命令ときたもんだ。

「ウ…ウン……」

亜由美はその迫力に怖じ気づきつつも何とか了承した。

「で、どうすればいいの？」

亜由美は加奈の部屋に入ってそう第一声を放った。

「私個人の見解としては、どこかの場所をイメージすればそこに行けると思っただけけど…何にも起きないんだよね〜」

とりあえず先ほどの現象は自分の意思とはあまり関係がないのではないかと思いきや、

「あんだね、それって授業中に思ってたんじゃないの？」

加奈が溜め息交じりにそう聞き返してきた。

「え？ウンまあ、そうなんだけど……あ、あと加奈の家に行く途中でも考えてみたけど……」

「おバカ！」

「イツタ〜〜！？」

亜由美の言葉を遮る様に加奈が亜由美に脳天チョップを喰らわせた。

「それは“あくまでイメージした”だけであって、“本当にそこに行こう”とは考えてなかったでしょ！？」

「え、ウン、まあ……」

亜由美は痛みに頭を抱え込みながらも加奈に返事をした。

確かに亜由美がイメージした場所といっても、行った事のないサハラ砂漠のど真ん中やら、パリのエッフェル塔といったものばかりだ。そして本当にそこに行きたいと思っていたわけでもない。もし本当に行ってしまったらサハラ砂漠で冬服のまま立ち往生する事になるだろうし、パリなんかに行けば言葉が通じず路頭に迷う事確定だ。もしイメージすれば帰れるとしても何処にもそんな確証はないし、もしかすれば突然使えなくなってしまうかもしれないからだ。

「いい？亜由美が本当に行きたいところをイメージするのよ」

「わ、分かった」

とは言ってもそんなの急に言われても思いつくわけがない。とりあえず神経を集中させて考え始める。

(あ、そう言えば喉渴いたな……)

しかしどうでもいいことを考えていた。

(とりあえず加奈んちの冷蔵庫に何かあるかな)

さらにどうでもいいことを考え出した……。

しかしそれが思わぬ結果(亜由美にとって)を齎もたらした。加奈の部屋に灰色のカーテンが現れたのである。

「出た!!!」

「ええ、ウソオ!??」

あんなどうでもいい事が出てくるとは思わなかった。亜由美は思わず驚嘆の声をあげてしまった。

「でも何か小さいわね」

「あ、確かに」

加奈の言うとおりその灰色のカーテンは子供が屈まないと入れないくらいの大きさしかなかった。

やはり別のことを考えていたからだろうか…そんな事を思っている。と、灰色のカーテンは亜由美たちから離れるように移動し、そして消えた。しかし先ほどまでカーテンがあつた場所には先程まで無かつたものがチョココンと置いてあつた。それは……

「あ、これ冬季限定イチゴ牛乳じゃん。ねえコレ飲んでみていいと思う?。」

「まあ亜由美が出したんだしね。いいんじゃない?。」

加奈からの了承を得てそのパックに付いていたストローの袋を破りストローを差し込み飲む。

「それにしても何処をイメージしたの?まさかどっかのコンビニとかから取り出したんじゃないでしょうね?。」

「ああそれは……。」

言葉が詰まった。亜由美がイメージしたのは藤原宅の冷蔵庫。そして加奈は亜由美と同じく甘党である。つまりこのイチゴ牛乳は加奈のものである可能性が高いのだ。

加奈はそんな亜由美の心情など気にもせず、ある事を思い出していた。

「どうしたの? この世が終わったみたいな顔して。あ、そう言えば私もそれ買ってたんだ……っけ」

そこで亜由美が今の表情をしている原因を思いついたのだろう。加奈は慌てて自分の部屋から出て行った。しかもその際『そこを動かすな』と凄まじいまでの眼力によるアイコンタクトを残して……。

「ゴメンナサイ……。」

頭に大きなタンコブを作った亜由美は加奈に土下座していた。結果から言えば加奈が冷蔵庫に入れていた冷蔵庫は消えていた。それを確認した加奈はダッシュで部屋に戻り、問答無用で亜由美に脳天チヨップ三連発をお見舞いしていた。そして現在に至る。

「まあ、結果から言えばあの灰色のカーテンは亜由美の任意で作りに出せるって事が解ったわね。代償は大きかったけど……」

「だからあ、ゴメンってえ……」

「口答えしない」

「プギユツ！」

再び亜由美に脳天チヨップ（弱）を喰らわせる加奈であったが、これで加奈の仮説は立証された。

やはりあの灰色のカーテンは亜由美の意思で作りに出されるようだった。しかしそうなるとなぜ亜由美にそんな異常な能力があるのかが謎だった。

「でも何であんたそんな能力持ってんの？」

「私だって知りたいよお」

脳天チヨップ（弱）とはいえ、やはりタンコブがある状態で食らえばそれなりに痛みが増すのであろう。亜由美は自分の頭をなでながら答えた。

「何か心当たりってないの？変な商人から怪しげな薬を貰ってそれを飲んだとか、夜道を歩いてたらUFOに拉致されて改造手術を受けたとか」

「さすがにそれはないでしょ！？そんな薬絶対に飲まないし、昨日

は学校から帰ったあとずっと家に居ました!」

加奈のボケとしか思えない仮説に全力で否定のツッコミをする亜由美だが、「あ、でも…」と何かを思い出したのかその心当たりを語っていった。

「変な夢を見たんだよね……」

「夢？」

亜由美の言葉に加奈は鸚鵡返しに聞き返した。

「ウン、辺り一面が廃墟でさ、その中を白衣を着た男の人が歩いてたんだよね」

亜由美はその夢の中の状況を思い出しながら、続けた。

「その人の顔はよく覚えてないんだけどしばらく歩いてたら、目の前にライオン男が出てきて、それが頭の上に天使の輪っかを出して……」

「ストオップ!!!」

あまりに奇天烈な夢の内容に加奈は思わず待ったをかけた。

「どういうこと!? 何でライオン男が出てきたの!? しかも天使の輪っかって何!? そのライオン男、実は天使だったっていうの!？」

「しょうがないじゃん、そういう夢だったんだし」

二人は知らないだろうが今話しているライオン男…もといアンノウンは本来神の使いであり、あながち間違った解釈でもない。

「まあ夢の話なんだし、一々ツツコンでたら話が進まないか。続けて」
「ウン」

加奈はこのままツツコンでは日が暮れると思ったのか亜由美に続きを促す。

しかし今はもう5時、この時期なら日が暮れるのも時間の問題かもしれない。

亜由美は自分が見た夢の続きを思い出しながら話していた。

襲いかかって来たアンウン、それを灰色のカーテンで撃退した白衣の男、そして男の前に現れた青黒いロボットのよう存在……。

亜由美が見た夢というのは別の世界に存在する須藤歩・デイジーエントの事だった。

須藤歩は亜由美の異次元同位体：つまり別の世界の須藤歩だ。

彼がデイジーエントから情報を流し込まれる際、次元断裂を出していた。そこに生じていた僅かな「歪み」がほんの一瞬だけ亜由美たちのいる世界と繋がったのだ。

その一瞬の間に歩の異次元同位体である亜由美に一部ではあるが膨大な量の情報が流し込まれたのだ。

彼女が灰色のカーテン：次元断裂空間を使えるのはその副産物でもある。しかし、今の彼女達にそれを知る術はない。

そう、今は……。

「ここか…僕の異次元同位体がいるのは……」

須藤歩は高層ビルの屋上に出現した次元断裂からその姿を現れると、夜闇に包まれる街並み眺めて呟いた。

彼の今の服は薄汚れた白衣ではない。

世界を移動する度に服装がその世界での役割に順じたものに変化していくのだ。

そして今回の彼の姿は茶色いスーツに黒靴を持った何処にでもいそうな社会人の格好だった。歩はおもむろに靴の中を漁ると手帳を取り出す。そして手帳の1ページ目を見るとそこにはこう記されていた。

「岩森高校 2月10日より臨時教職員として勤務…か……」

第三話：破壊の代行者、来訪（後書き）

須藤：蟹頭…ち、違いますよ！？断じて某蟹刑事なんて連想してませんよ！？

すべては偶然、そう偶然なんです！！

須藤だって通りすがりに近い言葉「素通りから来てるんですよ！？」

蟹頭については…スンマセン、何も言えません（T T；）

って言うか加奈ちゃんキャラ濃っ！！ホントだったらチヨイ役にするつもりだったのに…どうしてこうなった……

第四話：臨時教師・須藤歩（前書き）

何かこのままだと暫く学園物になりそうな気が……。・（）ガク
ガクブルブル

そしてチヨイ役で出した筈の新キャラ…：またしても濃くなってしま
ったorz

第四話：臨時教師・須藤歩

翌日、2月10日……

亜由美はその後、もうすぐ日が暮れそうになっていたので灰色のカーテンの話はここまでとし、帰路に着いた。

そして現在、朝のホームルーム前の亜由美たちのクラス・三年D組ではある一つの話題で持ち切りになっていた。

“野原先生の代わりに臨時の先生が来る”

亜由美たちのクラスの担任である野原は先月結婚したばかりだ。しばらくの間は新婚旅行を楽しむためその間、代理の教師がやって来るらしい。

一部のその教師を見た生徒たちの話だと、曰く「その教師は二十代前半である」

曰く「それなりにイケメンだけど、目が残念だった」

曰く「体の線が細く、見るからに草食系。もつとガッツリ来いガッツリと」といった物だった。

明らかに最後の情報は蛇足である。

やがてチャイムが鳴り、ガラリとドアが開いた。そこから入って来たのは：新婚旅行を前日に控えた野原であった。

若干教室にガツカリ感が漂っている教室の雰囲気気付いていないのか、「俺はしばらく嫁さんと楽しんでくるから、お前らも早く彼氏・彼女作れよ」ととても教師とは思えない発言をかましてきた。一部の生徒達は「ふざけんな！」と罵声を放っていたが、野原はそれを華麗に聞き流しこのクラスの者達が今一番望んでいる情報を連絡し始めた。

「で、だ…俺がない間お前らの臨時の担任になった先生を紹介する。」

「ではお願いします」と臨時教師がいると思われる教室の外に声をかけると、教室のドアを開け茶色のスーツを身に着け、少し長めの黒髪を真ん中で分けた若干細身の男が入って来た。

横顔だけで亜由美の席からでは顔全体は髪に隠れて良く見えないが、黒板に白のチョークで自分の名前を書き始める。徐々に書かれていく名前に亜由美を含んだ生徒達は軽い驚きを見せ始めた。

やがて名前を書き終え、生徒たち全員に顔が見えるように正面を向いた。

その顔は「なるほど」と事前の情報に納得できる顔付きだった。顔は基本的に端正なのだが、目だけはどこか虚ろだ。

亜由美の第一印象で言えば「死んだ魚の目」をしていた。

「今日からしばらくの間、皆さんの担任をさせて頂く事になった“須藤歩”です。よろしくお願いします」

「しっかし驚いたよな。亜由美とほぼ同じ名前なんてよ」

昼休みの食堂では昨日一緒に昼食を食べた加奈の他にもう一人加わった状態で学食を食べていた。

先ほどの男口調の亜由美の正面に居る黒髪を短く切り揃えたボーイッシュな印象を受ける少女の名は多々井^{ただいさつき}皐月。亜由美の友人の一人である。

普段は女子柔道部に所属してしており、昨日はその部活仲間と一緒に昼食を摂っていたのである。見た目はスレンダーであるが実際はそんなじよそこの不良だったら軽く蹴散らすくらいの实力を持っている柔道部のエースだ。

ちなみに現在絶賛彼氏募集中だったりするが少なくとも彼女と同等の实力を持っていなければ彼氏は務まらないだろう。

さらに蛇足だが今話題をしている臨時教師の情報で「体の線が細く見るからに草食系。もっとガッツリ来いガッツリと」と言ったのは彼女だったりする。

「確かに、あそこまで名前が一緒なんてすごい偶然よね」

「なんかあそこまで一緒だと他人事とは思えないんだけど……」

加奈が皐月の話題に頷き、亜由美はあの教師に違和感を覚えていた。名前が似ているというのもそうだが、それだけではないような気がするのだ。寧ろ、何処かで会った事がある気がする。

「あゝ確かに髪型も亜由美と同じ真ん中分けだったし、亜由美を男にしたら丁度あんな感じになるんじゃないかねえの？」

「私はあんな死んだ魚の目じゃありません!!」

「誰もそこまで言っていないと思うわよ、亜由美……」

「誰が死んだ魚の目だっつて？」

「ヒヤアーウ!？」

皐月と若干漫才染みたやり取りをしていると、突然背後から男の声が掛けられ、思わず素っ頓狂な声を挙げてしまう。

後ろをぎこちない動きでゆっくりと振り返るとそこには今話題となつてゐる渦中の人物が空の皿とのコップが乗つただけのトレイを持つて虚ろな目でこちらを見ていた。

「あ、歩センサー。チーッス」

「ああ、確か僕のクラスの……」

「多々井臯月ッス。もう昼メシ食い終わつたんすか？」

臯月も今気付いたのか、歩に挨拶をするがその挨拶は教師にするには余りにもフランク過ぎる。上の名前で呼ばないのは、亜由美と被つてしまつたための配慮だろう。

だが歩もただ「まあね」とだけ言つて返事を返す。

この教師は台詞こそフレンドリーなのだが、口調は抑揚がなく淡々としているため、素っ気ない言葉使いになつてしまつてゐるのだ。簡単に言えば、感情が籠つてない。

正直この温度差が亜由美と加奈にとって非常に居づらい空気を作つてしまつてゐるが、元凶の二人は全く気付いていないまま会話を続ける。

「そっいや、センサーって今いくつ何すか？」

「21だよ」

「へエ、意外と若いっすね。彼女とかがつてゐるんすか？」

「いた事はないね」

「亜由美とはどういう関係っすか？」

『ブフォア！？』

フランクに次々と質問を繰り出す臯月と素っ気なく一言で返事を返す歩のやり取りに、亜由美と加奈は気を紛らわすため軽く水を飲む

うとするが、皐月の思わぬ変化球によって思いっきり吹き出してしまった。

「ゲホッ、ゴホッ…な、何訊いてんの皐月！？何処でどうしてそういう質問になつたの!？」

咽ながらも加奈は皐月にツッコミを入れ、即座に脳天チョップをしますが易々と受け止められてしまう。

そして当の本人はキョトンとした顔で当然のように（本人にとって）答えた。

「え？だってここまで似てっともう生き別れの兄妹とか思うじゃん？」

「だからってねえ……」

「……………」

加奈はこのフランクすぎる大バカの代わりに謝ろうと歩の方を振り向くと、歩は難しそうな顔をした後亜由美の顔をジツと見つめた。その目はやはり虚ろではあるものの、真剣味を帯びた目つきだった。

「え？アレ？」

「な、何ですか？」

「アレ？ひょっとして、マジで？」

三者三様に驚いていると、歩はふと我に返ったように他の二人にも目配せをすると、「いや、何でもなし。流石に兄妹という事はないよ」と、軽く愛想笑いをしながらそう言うと、トレイを返却口に置き食堂を後にした。

「……………怪しいな」

「……ええ」

(やっぱり、あの人どこかで……)

やはり、あの教師は自分と何かが似てると亜由美は感じた。それは名前や容姿などの外面的特徴ではなく、もっと内面的な事で……。

「これは調べてみる必要がありそうね」

「へ？」

意識を戻すと加奈が左手を口元にあてがいながら、好奇心で目を輝かせていた。

「だなあ」

皐月もその目を加奈と共鳴させるかのように輝かせながら、とても女子がするとは思えない「ニタア」と擬音が付きそうな笑顔をその顔に張り付かせていた。

「え？え？？い、一応二人が何考えてるのか大体分かるんだけど、何する気？」

亜由美はこれからこの友人二人が起こそうとするアクションに嫌な予感を感じつつ訊ねると、二人の声は見事にハモツた。

『そりゃあやっぱ尾行でしょ(だろ)！』

「エエエエ……」

亜由美は二人が考えていた事が見事に的中してしまった事に思わず呆れ返ってしまった。

だがやはり自分もあの教師は気になる。流石に教師を尾行して停学

になる事は恐らくはないだろうが、良心的な意味で気が引ける。

「それって私も付き合わなきゃ…ダメ？」

『ダメ』

「だよねえ……」

どうやらこの尾行作戦に自分が参加する事はすでに決定事項になっているようだった。

「さて、どうするか……」

歩は職員室に移動する道中で思考に耽^{ふけ}っていた。

須藤亜由美が自分の異次元同体である事は知っている。そして彼女もまた自分と同じ次元移動能力を持っていることも。

歩は本来この世界に来る必要はなかった。あの日、デイージェントになってから二年間、歩はデイージェントが自分の元に来るまでに移動していた世界を辿りながら、仮面ライダーたちが存在する無数の並行世界の領域・「ライダーサークル」へ向かっていた。

デイージェントが自分を探すために様々な世界を高速で移動していたため、その素通りした世界に「歪み」が生じていたのだ。歩はその「歪み」を修復しながら「ライダーサークル」へゆっくりと、だが確実に進んでいった。

この世界は本来ディージェントが通ったわけではないのだが、歩にとっては「保険」として来ておく必要があったのだ。

この世界に居る自分の異次元同位体：須藤亜由美とシンクロしておくためだ。

この世界を渡れば次はいよいよ「ライダーサークル」の領域へ辿り着く。そこではどんな事態が起きるか分からない。そのためのシンクロだ。

シンクロしておけば万が一自分が死んだ後、ディージェントの情報が彼女にダウンロードされ、新たなディージェントとして計画を再開できるのだ。

但し歩も彼女の日常を壊すような事をしようとは思っていない。彼女が断れば能力の多用をしないよう忠告してそのままの世界・「ライダーサークル」へ向かうだけだ。

彼女は自分の持っている能力が「歪み」を生み出す事を知らない。もし彼女が能力を多用すれば、空間に綻びほころが出来て「歪み」が生じ、この世界の近くにある脅威：「ライダーサークル」の怪人が現れ、この世界を破滅へと導く事になるだろう。

歩としては亜由美とシンクロしてもらいたいのだが、前述の通り彼女の日常を壊したくない。そのため、彼女に中々話を切り出せずにいた。

期限は約二週間、それ以上この世界に滞在すればこの世界の住人ではない歩の存在に対して世界が拒絶反応を起こして「歪み」が生まれる。

それまでに説明しなければならぬ。しかし、どう切り出すか……そんな物思いに耽っていると、目的地である職員室の前まで辿り着

いた。

「まあ、あと二週間までに何とかすればいいか」

そう考えを締め括り、歩は職員室の扉を潜った。

第四話：臨時教師・須藤歩（後書き）

いや〜この調子だったら週一で更新できそうですね〜（・？*）
そして今回出た新キャラの皐月ちゃん：ダカラナズエコクナルンデ
イス！？（owow:;）

それから今回も出てきた「歪み」という単語、前回の用語集で説明
してなかったんで簡単に説明しますと、「ディケイド」の第一話の
「夏海の世界」の様に怪人で溢れ返ってしまうような状態の事をさ
します。

次回はとりあえず6月4日に投稿予定なのでよろしくお願ひします
m(――)m

後、オリジナルライダーを募集中です。主な内容はこちら

- ・作者のメッセーじボックス・感想に送ってください。
- ・主にディケイド系統のライダーを募集しますがそれ以外でもかま
いません。

- ・変身者、容姿などを詳しく教えてください。（但し、容姿を詳し
く書かなかった場合、作者が自分なりに解釈して容姿を作ります。
後、変身者の性格に若干のぶれが生じるかもです。）

以上です！感想もお待ちしておりますm(――)m
そういえば一応これバトルとかあるはずなのに戦闘描写がまだ一つ
もないって…（。；）

第五話：少女三人組による須藤歩尾行作戦（前書き）

何か我慢できなかつたんで予定よりも早く投稿しまーす！（@ @
）
ストック？何か何時の間にかメツチャ出来てたんだZ E
最初のころの弱気な自分は何処へ行ったのやら……。

そして今回、友人二人が大暴れします。

一応メインヒロイン亜由美のはずなのに…そのメインヒロインより
目立ってる友人二人って一体……（。 。 ;）

第五話：少女三人組による須藤歩尾行作戦

放課後、亜由美、加奈、皐月の三人は昇降口の物陰に集合していた。三人はそこで教師用昇降口から出てくる筈の今回のターゲットである臨時教師の須藤歩を物陰から覗き込みながら待っていた。

「でもさあ、本当に出てくるの？もしかしたらもう帰っちゃったんじゃない？」

「フッフ…それはないわよ亜由美。さつき職員室に明日の時間割の確認と称して入った時、歩先生はまだいたから」

「……その行動力には、もう脱帽しちゃうね。」

「お、二人とも、出て来たぜ」

皐月は教師用昇降口を指差しながら話している二人の会話に割って入る。

そこには茶色いスーツを着た男が黒い鞆を持って出てくる姿があった。

「いい？絶対に気付かれないようにするのよ」

「イエッサー」

「……ハア」

亜由美は暴走する二人の友人と、それを止められない自分の不甲斐なさ溜め息を吐きながら二人の後に続いた。

まず始めに向かったのは商店街だった。そこでターゲット（須藤歩）は卵や肉、野菜、米と言った一通りの食材を買い、商店街を後にしようとしていた。

「あ、商店街から出るみたいだよ二人と…も…って、どうしたのそれ？」

亜由美が二人の方を振り返ると、二人はサングラスにベレー帽とキャップタイプの帽子を付けて亜由美の後ろに立っていた。しかも二人とも制服を着ているから違和感バリバリだ。因みに加奈はベレー帽で、皐月はキャップタイプの帽子である。

「やっぱり形から入らないとね」

「その雑貨屋で売ってた。因みに会計2575円。驚きの安さだぜ？」

「いやそんな事どうでもいいからね！？やっぱり二人ともふざけるの！？それだったら私もう帰るよ！？」

亜由美はとうとう堪忍袋の緒が切れたのか帰る宣言を二人に申し渡す。

「あゝ悪かった悪かったって。だから帰るなんて寂しい事言うなよ。アタシ達、友達だろ？」

「サングラスと帽子を付けて、首から下が女子高生の制服の人に友達なんて言われたくありません！！」

「あ、二人とも！早くしないと見失うわよ！急いで！」

「イエッサー！」

「あ、ちょ、引っ張らないでよおおお！」

亜由美は皐月に腕からガツシリとホールドされて引っ張られてしま

う。しかも相手は不良の一人や二人を簡単に蹴散らしてしまうような奴だ。
そんな格闘系少女に抗える訳もなく、そのままズルズルと引き摺られていった。

何とか見失わずに済んだ三人は住宅街に来ていた。そこでターゲット（須藤歩）は何の変哲もないマンションへと入って行った。

「あそこが敵のアジトみてえだな」

「そのようね」

「いやいや敵って何よ敵って…一体何と戦ってるんですか……」

加奈と皐月は物陰から相手の様子を窺っていたが、亜由美はその背後から二人の様子を見ていた。

今の二人は不審者以外の何者でもなかった。

正直、知り合いと思われたくない。

「で、この後どーすんの？」

亜由美はこの尾行作戦の指揮官（必然的になっていった）にため息を吐きながら訊ねていた。もう相手の住んでる場所も分かったんだし、今日は此処までにした方がいいんじゃないかと思っていた。しかし、そんな亜由美の希望は打ち砕かれた。

「そうね…じゃあ今度はあそこの管理人に先生の事を訊いてみましょうか」

そう言いながら加奈は先程ターゲット（須藤歩）が入って行ったマ
ンションを指差す。

「そこまですんの!？」

「当然でしょ。じゃないと私の気が済まないの」

「それにはアタシも賛成だな」

「臯月まで!？」

「オフコース」と言いながら亜由美にサムズアップをする臯月。そ
の姿に亜由美はガツクリと肩を落とした。

臯月は基本、面白そうな事があればとことん喰い付く性分だ。

今回は加奈の「気になる事があれば分かるまで調べなければ気が済
まない」という性分と見事に合致してしまったのだらう。

そうなってしまうと二人のブレーキ役である自分でも止められない。

「じゃあ、そろそろ行くわよ!」

「イエッサー!」

「エエッ!？ちよ、待ってー!」

最早、小判鮫の様に二人にくっ付いて行く事しかできない自分に正
直泣きたくなっていた。

こうなつては二人が何か問題を起こさない様に見守るだけだ。

管理人から話を訊いた後、「今日はもう遅いからここまでにしまし

よう」「という加奈の号令により、「須藤歩尾行作戦」はようやくお開きする事になり、現在三人は帰路についていた。

「やっぱり謎よね、あの教師……」

「ああ……」

「……ウン」

早速加奈が代表として管理人に須藤歩について訊いてみたところ、このような返事が返ってきた。

曰く「つい一月ほど前に越して来たのだが、その時の事はよく覚えていない。多分歳の所為かのお？」

他にも「今日ここを通るのを見た事はあるが、昨日より前にここを通っていた所を見た記憶が全くない。歳は取りたくないのお」というものだった。

所々知らない情報が入っていたが、その中には大きな矛盾があった。

あのマンションは裏口の非常階段を使えば外に出る事は出来るが、内側から鍵を掛けているため外から入る事が全く出来ず、入る際にはあの管理人がいる出入り口から必ず入らなければならないのだ。いくらあの管理人が歳でボケていたとしても、全く記憶にないというのはいくらなんでも不自然だった。

しかも管理人があそこに居ない時は常時作動させている監視カメラで居なかった時の分を早送りではあるが必ずチェックしている。そのカメラは裏口の非常階段にも備え付けられてあるのだが、そこに須藤歩が写っていた事は一度もないのだ。

越してきた後一ヶ月間留守にしていたというのならば話は別だが越

して来たばかりの人間が、ましてや社会人になったばかりの年齢である須藤歩がそんな事をする理由がない。

「一度実家に帰ったんじゃないの？」という皐月の見解が出たがそれはない。

何故なら彼には保護責任者、つまり親がいないのだ。

移住届に保護責任者が書かれていない場合、親・里親がいない事になっっているのだ。そんな人間に帰る場所があるはずない。

此処までの情報を得られたのも藤原加奈という将来名探偵候補No.1（と、亜由美は思っている）の手腕によるものだろう。

「もう加奈、高校出たら探偵稼業やっちゃいなよ」

「イヤよ、そんな給料不確定な仕事。なるんだったらやっぱり公務員よ」

「ええ、天職だと思うのに」

「勿体無い」と言わんばかりに盛大にため息を零すが、それでも加奈の意思は変わらないだろう。

実は加奈の父は刑事なのだが、彼女は将来そんな父の様になりたいと思っっているそうだ。

まあ、探偵も刑事も亜由美にとっては似たようなもののだが加奈には何の上下関係もない探偵になってもらいたいものだった。その方が加奈らしい。

「……っと、アタシん家はこっちだから、この辺で帰らせてもらおうぜ」

そう言っつて皐月は二手に分かれた道の左側へと歩みを進めていくが、途中で振り返ると「ニカツ」とまるで太陽の様な笑顔で手を大きく

振りながら明るい声で叫んだ。

「何か分かったら教えてくれよ〜!」

そう叫んだあと再び自宅へと駆け出していった。

「まったく…こんな時間に大声出したら近所迷惑でしょうが……」

「ウン、そうだね」

「全くだね」

二人が顔を向い合せ苦笑をするが、そこに一つ抑揚のない淡々とした声加わっていた。

二人がその声に聴こえた方向にバツ!と振り向くとそこには今回、加奈たちが面白半分で跡をつけていた須藤歩が立っていた。

「え!?何時の間に!?!」

「そんなに警戒しないでよ。本当は君と二人っきりで話をしようと思っただけ、そっちの子も知ってるみたいだから良いかな?」

「知ってるって、何を?」

警戒する二人に対して歩は「ん〜そうだな〜」と言いながら頭をガリガリ掻いた。

やがて考えがまとまったのか、掻くのをやめると話を切り出した。

「まずはこれを見せた方が理解してもらい易いかな?」

そう言いながらポケットの中から一枚のカードを出した。そのカードにはピンクと黒の細かい縦線が走っており、中央の大きな黒い円の中には白い矢印にも顔にも見えるマークが描かれていた。

それを裏返すとマークの元になったものと思われる下を向いた矢印の様なものが付いた青黒いロボットの様なものが描かれていた。

「それって…！」

亜由美はそのカードに描かれていたものに驚愕した。なぜならそれは……

「知ってるんじゃないかな？キミがロボットだと思ってるこのカードに描かれている…仮面ライダーディージェントを……」

夢の中で見た、謎の存在そのものだったから……。

第五話：少女三人組による須藤歩尾行作戦（後書き）

そろそろ戦闘描写書けるかな。

とりあえずこれからは一週間以内に投稿するつもりです（＾皿＾）

感想もお待ちしております（＠＾＾）／

第六話：誤解と脅威の襲来（前書き）

ここで一つ…顔文字は作者のポリシーです！（・・）
感想もお待ちしております（^O^）ノ

第六話：誤解と脅威の襲来

「仮面：ライダー？」

亜由美は初めて聞く、だが、何処か聞き覚えのあるその単語に疑問の声を漏らした。

「どうやら少しだけどその情報も入っているみたいだね」

「え？」

「聞いた事がないのに何故か聞き覚えがあるんでしょ？それくらいの思考は読めるよ」

そう言いながら歩は二人に見せていたカードをポケットにしまった。そんな歩に亜由美はある仮説を思いつき歩に問い質した。

「えー！？ひよつとして私の考えている事が解るの！？」

「少しだけね。流石に深層心理とかそういう細かいところは無理だけどね」

「じゃ、じゃあ、その…プライベートとかは……」

「それは今考えてなければ読めないよ」

つまり、それは亜由美が着替えているところとかを思い出していれば目の前に居るこの死んだ魚の目をした無表情男に見られてしまうという事か。

亜由美は考えないように必死に別の事に頭を回そうとするが、人間考えると言われればどうしてもそちらに考えが向かってしまうものである。

「ああ、そんな無理しなくていいよ。思考は僕からも君からも遮断

「できるから」

「それは早く言ってお下さい!!」

亜由美はそんな人の気も知らないで抑揚のない口調で答える歩に思わずツツコンでしまった。

「って言うか、貴方は一体何者なんですか？さっきのカードに描かれていたロボット…仮面ライダーディ何とかって言うのとの関係あるんですか？」

「ディージェントね。仮面ライダーディージェント」

加奈は亜由美たちのやり取りに嘆息を零し、自分が気になっていた重要事項を歩に問い質した。

それに対し、歩はまた頭をガリガリと掻きながら加奈にもう一度名乗った。

「そして僕はその仮面ライダーディージェント。正真正銘、さっきのカードに描かれていた君たちが言うロボットだよ。まあ、正確にはロボットじゃなくてパワードスーツなんだけどね」

その時、亜由美は思い出していた。あの夢の続き…あの青黒いロボットが現れた後、白衣の男の手を掴んでそのまま腰に着けた機械だけを残して消えていったのを……。

そして再び襲いかかって来たライオン男にその機械を付けてロボット…ディージェントに変わって迎え撃つたのを……。

「じゃあ、あの夢に出て来た男の人って…先生だったの？」

「そう言う事になるね。後、僕の用事を説明しようと思うんだけど、口だけで説明しても信じてもらえないかもしれないし、これを使った方がいいかな？」

そう淡々と言いながら右掌を上に向けると、その上に灰色のカーテンが現れた。

「え！？ウソ！？」

亜由美は自分と同じように灰色のカーテンを出す事の出来る歩に驚愕するが、歩はその様子に気にした様子もなくその中から出てきた四角い機械に持ち手部分の付いたデージェント専用変身ツール・デージェントドライバーを取り出した。

それを腹部に当てると、持ち手とは反対部分から帯が飛び出し歩の腰回りをぐるりと一周して持ち手部分の根元にカチリという音ともにくっ付いた。

そしてくっ付くと同時に右手側にある持ち手部分を引っ張る。すると四角い機械部分が時計回りに90度回転し、上部にカード挿入口が現れる。

「やっぱりここは、変身せずにこのカードを使った方がいいかな？」
そう言うと先ほど取り出したカードとは別のカードをポケットから取り出すと、それをカード挿入口に装填した。

「ツールライド……」

挿入すると同時にカードを認識した電子音声と、待機音声が流れる。

Dシリーズにはそれぞれ成長記録機能が付いている。

Dシリーズ装着者が何らかの経験をすることを条件に、それに応じた機能やライドカードが追加されるのだ。

今使ったカードも歩がこの二年間、様々な世界を渡って手に入れたカードの内の一枚だ。

「ビジョン！」

持ち手部分を押し込むと電子音声が鳴り響く。すると周りの空間が黒く歪み始めた。

「ワ！ワワワ！？」

「何したの！？」

「落ち着いて。これはただの幻覚だから」

歩が狼狽する二人に話している間にも周りの景色は変わり続ける。やがて周囲一帯が黒一色に変わると、彼方あちこち此方から小さな光が瞬き始める。

まるで宇宙空間の様だと感嘆しながら二人は辺りを見渡していると幾つかの光が此方に近づいて来るのが見えた。

その近づいてくる光がやがて視認できる距離まで来ると、二人は驚愕した。

「え！？地球！？」

「それも、こんなに沢山！？」

その近づいてきた光…地球は全部で九つ。それらが三人の足元に輪を作るように並ぶと、歩は説明を始めた。

「世界は無数に存在する。でもある一部の領域にある世界が融合を始めた」

歩は指をパチンと鳴らすと足元にある九つの地球が互いに距離を縮

めるように輪を小さくし始めた。

やがて互いに触れ合う距離まで来ると、その触れた部分から粒子を出しながら崩れ始めた。

そして九つの地球が一か所に重なると、粒子を大量に放ちながら完全に消え去った。

「世界が融合しようとするれば、世界が互いに拒絶反応を起こして消滅してしまう。そこで僕達Dシリーズは世界が拒絶反応を起こさないようにするために世界を渡っているんだ。謂わば潤滑油だね」

『……………』

二人は歩の余りにも壮大すぎる話の内容に開いた口が塞がらなかった。

そんな非現実めいた事、俄かに信じがたいがこんな今の時代では出来ないような立体映像付きで説明されては無碍にはできなかった。そこで加奈は一つの疑問が浮かんだ。

「待つて。今“僕達”って言いました？という事は先生の他にもそのDシリーズってというのがいて、それが世界を救うために活動しているって事ですか？」

「そういう事になるね。でも殆どのDシリーズは好き勝手に行動してるから実際のところは僕だけだね」

「……………それで先生、先生のここに来た目的は何なんですか？先生の言葉から推測するに、ここがその融合を始めた世界じゃないみたいですけど……………」

加奈は亜由美の目の前に立つように移動し、歩を睨みつけるように言い放った。

その言動に歩は一瞬だけ目を見開いたがすぐに戻すと、面白そうにニヤリと笑った。しかしそれでもやはり目が虚ろなため、何処か無

気味に見える。

「……へえ、よく解ったね」

「伊達に刑事の娘はやってませんからね。それで、亜由美に何の用事なんですか？」

「え？ 何？ どういう事？」

二人のやり取りに付いていけてない亜由美に加奈は軽く溜め息を零した後、軽く説明を始めた。

「アンタねえ、解んないの？ 先生は最初『二人つきりで話したかったけど、君も知ってるみたいだからいいかな』って言ったのよ。そして知ってるって言うのはあの灰色のカーテンの事。つまり最初から灰色のカーテンを使えるアンタを狙ってんのよ」

その言葉に亜由美は寒気を感じる。

もしかしたら歩は自分の持っている能力の本来の持ち主でそれを取り返しに来たんじゃないだろうか。

もしその方法が命に関わるようなものだとしたら……。

二人は歩から距離を摂るように少しずつ距離を取るが、ここは歩が作り出した宇宙空間。幻覚と言っていたからある程度距離を取ってしまえば消えるかもしれないが、そんな確証はないし、亜由美の灰色のカーテンで逃げようにも上手くいく可能性は薄い。

そんな二人の様子に歩は軽く嘆息すると、弁明し始めた。

「何か勘違いしてるみたいだけど、別に獲って喰おうとかは思っていないよ。ただ協力して欲しいだけで……」

そこまで言った途端、周囲に変化が訪れた。

周りの空間が最初の時の様に歪み始め、徐々に本来の景色に戻り始めたのだ。

それを好機と見たのか、加奈は亜由美に言い放った。

「亜由美！カーテン出して逃げるわよ！場所はとりあえず私んち！」

「あ、ウン！」

亜由美はすぐに昨日入った事のある加奈の部屋をイメージし、灰色のカーテンを呼び出して加奈と一緒にその中へ逃げ込んだ。

「あ、待って！あまりそれは使わない方が……」

歩が何か言いきる前に二人は灰色のカーテンの中に消えていった。

「一体、何が起きて……」

徐々に色付いて行く空間の中で、歩は考え込んでいた。

「ツールライド・ビジョン」のカードは少し特殊だ。

このカードを使えば自分がイメージしたものを具現化してまるで本物の様に見せるカードのだが、今回は「Dプロジェクト」の情報を一部イメージしてそれをあの二人に見せたのだ。

しかし効果が切れるのが早過ぎる。

もしまだ正常に機能していた時に亜由美が次元断裂空間を展開して

いたのならば、空間そのものにダメージを与えてビジョンの効果が破壊されていたが、彼女が展開したのは効果が切れ始めた時だ。その前に展開していた気配は一切なかった。

だが、一つだけビジョンの効果を自動的に消す条件があった。その条件とは……

「何らかの脅威が近づいた時」……でも、まだここに来て二十四時間も経っていない。そんなに早く『歪み』が生じるわけが……」

『お、エモノはっけーん』

「ッー！」

周りの景色が完全に元に戻ると、突如くぐもった声が聞こえ、そちらの方を振り向くとそこには脅威がいた。

ステンドグラスの様なカラフルな表皮に、羊の様な捻じれた大きな角を持った怪人……ゴートファンガイアだ。

ファンガイアは「キバの世界」と呼ばれる「ライダーサークル」の世界の一つに存在するその世界の脅威だ。

人間から生命力……ライフエナジーと呼ばれるエネルギーを糧に生きる、人間を家畜としてしか見ようとしなない種族だ。

「そんな……いくら何でも早過ぎる……」

歩が驚愕と疑問が入り混じった声を零す（しかし表情には素入れほど出てないが）と、ゴートファンガイアはその声に気付かず何やらぼやき始めた。

『へッへッへ、此処にはホントーにキバも王もいねえみてえだな。』

やっぱり付いて来て正解だったぜ』

“付いて来て正解だった”：その言葉に違和感を覚えた。その言葉が本当だったとしたら、誰かがこの脅威をこの世界に連れ込んできたという事になる。

「連れて来たのは、一体誰だい？」

歩は抑揚のない声でそう淡々と問い質すと、ファンガイアはその表情を訝しげに歪めた。

『ハア？ 下等生物が何ほざいてんだ？ お前には関係ねえだろおが』

どうやらこのファンガイアは相当人間を見下しているようだ。人間よりも強靱な肉体を持つが故の慢心だろう。

「……どうやら、力尽くで聞き出すしかないみたいだね」

そう言いながらすでに装着されているデージェントドライバーの持ち手部分を引っ張ってカード挿入口を展開し、ポケットの中からデージェントのカードを取り出す。

このデージェントは他のDシリーズと比べ、変身すると「歪み」が生じ易いため極力控えたいのだが、この目の前の脅威を放っておけば被害は更に広がるだろう。放ってはおけない。

『オイオイ、人間如きがオレ様に勝てると思ってるのかあ？』

「まあね。でも少なくとも君の所のキバや王くらいには強いよ？
僕は」

その淡々とした口調が癪に障ったのか、ファンガイアは荒々しく口調で叫んだ。

『デメエー一体何様のつもりだ!!』

その問いに対し、歩は「んゝそうだなゝ」と呟きながら、頭をガリガリ掻く。

やがて考えが纏まったのか掻くのをやめると、ファンガイアに向かってこう答えた。

「自分の存在意義を探す仮面ライダーだ。別に覚えなくていいよ」

そう吐き捨てるよう答えるとカードを装填し……

「カメンライド……」

「変身」

そう呟いて音声コードを言い放ち、持ち手部分を押し込んだ。

「デージェント!」

歩の身体がアナログテレビのような砂嵐とザーザーという灰色と音に包まれ、デージェントドライバーの機械部分の中央にある丸く青黒い部分からライドプレートが数枚飛び出す。

ライドプレートはブーメランのように回転しながら灰色の砂嵐に包まれている歩の頭部に4枚突き刺さり、残りのライドプレートは両肩に横に2枚づつ、両脚の脛部分に縦に1枚づつ突き刺さる。

するとその突き刺さった部分から砂嵐が消えていき全身を一瞬だけ薄い水色に染め、そこからさらにその色を深くさせ藍色に染め上げる。

そして最後にDを鋭角に尖らせ、鏡合わせの様に反転させた黄色く

大きな複眼が光ると、すべての変身過程が完了した。

深いインディゴカラーの装甲と四肢と胸部に矢印を描く様に伸びる白いラインの入った黒いボディに黄色い複眼、下を向いた二本線の矢印の様な形を作っているライドプレート。

しかし中央に突き刺さっている2枚のライドプレートのその角の一部に以前付いていた黄色いシグナルポインターは、ブランク状態を示す灰色になっていた。

歩はディージェントへの変身が完了すると同時に両手をそれぞれグローブを嵌め直す様な動作を取った。

「さてつと、まずは半殺しにして聞き出そうかな？」

そして、淡々とした口調で何気に恐ろしい事を呟いて、目の前の脅威に立ち向かって行った。

第六話：誤解と脅威の襲来（後書き）

まさかのファイズ名物・勘違い劇場……

そんな予定、全然なかったのに……。 ;) ガクガクブルブル

そして次回はいよいよ戦闘描写です！乞うご期待！

第七話：戦闘開始（前書き）

イヤ〜今回は長かったあ（´・`・*）

そしていよいよ戦闘描写です。

でもその前に皋月ちゃんサイドの話を行います。

ではドウゾ！（＾O＾）ノ

第七話：戦闘開始

皐月は亜由美たちと別れた後、ランニングしながら自宅への帰路を辿っていた。

「めっざっせ！ぜっんこっく！せ・い・は〜」

適当に今思いついた歌を口遊くちやせみながら走っていると、突然目の前に灰色のカーテンが何の前触れもなく現れた。

「おわぁっと！何だぁ!？」

突然の異常現象に思わず急ブレーキをかけて踏み止まると、灰色のカーテンの中から三十代後半と思われる黒髪をワイルドに刈り上げ、黒い革ジャンを着た男が現れ、灰色のカーテンはそのまま後ろに下がっていきやがて消えた。

「何だ何だぁ？新車のストーカーか？」

そう言いながら身構える皐月を余所に、男は何の反応も示さず皐月に歳不相応な乱暴な口調で話しかて来た。

「この世界を壊そうとする悪魔が来てるぞ」

「はぁ？」

その言葉に皐月は訝しげに眉を顰めるが、男はさらに言葉を紡ぐ。

「気付いてねえのか？お前が今日追っかけ回してた須藤歩とかいうヤツが普通じゃねえことに」

「え……………あ!？」

男の行った事に一度頭を悩ましていると、ある事に気がついた。歩は商店街で一通りの食材を買っていた。その中には2kgはありそうな米も買っていたのだ。それに加えてその他の食材を合わせれば相当の重量になる。

そのはずなのに、歩は何も持っていないかのように普通に歩いていたのだ。

あの細身であんな重い荷物を軽々と持って歩くなんて不可能だ。

(歩ってホントはスッゲー武術家なんじゃねーのか?)

皐月はそんな事を勘繰っていたが実際には、あの時歩は自分の周囲の空間を演算して荷物の重量を皆無にしていただけで、皐月が思っている様な事は一切ない。

寧ろ研究施設で実験対象にされていたくらいだからどちらかと言うとインドア派である。

「で、だ…この世界の『基点』でもあるお前にその悪魔を倒してもらいてえんだよ。一応その為の力もくれてやるし、その後はそれを好きに使っても構わねえよ」

「で、その悪魔つてのが歩ってことか……………でも何で歩が悪魔何だ?」「さつき言っただろ。この世界を壊そうとする悪魔つてな」

世界を壊す…それがどういったものなのか皐月にはよく解らないが、少なくとも碌なことじゃないのは確かだ。

「じゃあ歩は悪いヤツってことだな?」

「そうだったってんだろ」

「フーン…ウソだな」

「何？」

男は臯月の反論に眉の皺を寄せながら訝しんだ。

「確かに歩は死んだ魚の目をしてっから悪そうなヤツには見えるぜ。でも歩と話してる時はそんな悪いヤツには見えなかった。アタシから言わしてみれば、歩はただちょっと引っ込み思案なだけの良いヤツだぜ？」

臯月の良い所は人を見る目があることだ。少し関わっただけでもその人がどんな人間なのか第一印象ですぐにわかる。

さらに彼女の友人が少しでも非難されれば、身をもってその友人を守る。だからこそ彼女には亜由美や加奈を始めとした親友が沢山いるのだ。

男は不満げに「チッ」と舌打ちすると、再び彼の背後に灰色のカーテンが現れた。

「警告はしたぞ。後はどうなってもシラネエからな」

そう吐き捨てる、男はその灰色のカーテンの中に消えていった。

「フウ、何だっただんだアイツ？ 新手の宗教勧誘か？」

『ギヤアアアアアア！』

「って今度は何だあ！？ 辻斬りか!？」

先程の男について考える暇もなく、突然聞こえてきた断末魔に臯月は驚くが、すぐに気持ちを切り替え、その断末魔が聞こえてきた方向へと駆け出した。

皐月が断末魔の聞こえた方向へと駆け出す数分前……

歩が変身したデージェントとゴートファンガイアは激しい戦闘を繰り広げていた。

『グアアアアア！！　ク、クソ！』

しかしそれは一方的なものだった。

突然エモノがキバの鎧の様なものを身に着け、こちらに駆け出してきたので、自身の魔皇力で生成した片刃剣で大振りに斬りかかろうとしたのだが、振り下ろす寸前に片刃剣を持った右手を掴んで動きを止めたかと思うとそのまま腹に膝蹴りをかまされ、その怯んだ隙を突いてわずかに距離を取ると、そこから思いつきり回し蹴りを放って吹き飛ばしたのだ。

（フザケやがって！　だったら、これならどうだ！）

ゴートファンガイアは体内から魔皇力を放出し、それをデージェントの背後に集中させて牙状の半透明の弾丸を二本作り出した。

その弾丸…ドレイン・ファンク吸命牙は本来人間からライフエナジーを吸い取るために使う…謂わば人間で言う「箸」だ。

基本的に人間からしかライフエナジーを吸い取れないため、同族であるファンガイアやキバには効果がない。しかしそれでも敵に突き刺してダメージくらいは与えられるだろう。

相手も背後の気配に気づいたのか、後ろを振り向く。それと同時に吸命牙を発射するが、相手はその拳で簡単に砕いてしまう。

（よし！掛かったな！）

しかしそれこそが狙いだった。背後に気を取られている一瞬、その一瞬だけでよかったのだ。

その一瞬の内にまだ後ろを向いているこのエモノとの距離を縮め、その手に持った片刃剣で斬りかかった。

だが……

「…フツ！」

『アガツ！？』

エモノはこちらに振り向かずにかウンター気味の裏拳をゴートファンガイアの鳩尾みぞおちに打ち込んだ。

その際に片刃剣を落としてしまい、地面にぶつかった瞬間、片刃剣はガシヤアンという音とともにまるでガラス細工の様に砕けてしまった。

ファンガイアが自身の魔皇力で作り上げた武器は常に魔皇力を注ぎ続けなければならない。そうしなければ武器を形成している魔皇力が空気中に飛散してしまい、劣化ガラスの様に非常に脆くなってしまうのだ。

『ナ、なぜだあああ！？』

「一応、この姿になれば周囲の状況が詳しく解る様になるからね。」

ゴートファンガイアは鳩尾を抑えながら後ろに数歩下がりがりながら疑

問の声を漏らす。

それに対してこのキバの鎧の様な物を身に着けた下等生物であるはずの人間は淡々と答るだけだった。

Dシリーズは元々、変身する際には装着者の持つている次元移動能力を常に潜在意識の中で演算し続けなければならない。それによって自身を覆う装甲を形成しているのだ。

しかし演算し続けるといつてもあくまで潜在意識。つまり息をする事と同じ様に無意識の内に使っているのだ。

それでも次元移動能力のほんの一部なので変身した状態でも次元断裂空間を展開する事が出来るのだが、ディージェントの場合は変身している間は次元移動能力をすべて演算に使っているので、次元断裂空間をカードの取る出し以外で展開する事が出来なくなる。その代りに身体能力や空間把握能力に特化しているのだ。

『ク、クツソオオオオ！！バカにしてんじゃねええええ！！』

「……ハッ！」

ゴートファンガイアはディージェントの淡々とした口調を挑発として受け取ったのか、我武者羅に殴り掛かって来たが、ディージェントは迎い討つようにその拳を思いつきり殴った。

しかもその際に、Dシリーズ特有の万能変換エネルギー・シックスエレメントを自身の拳に纏わせた。

シックスエレメントはその対象にした物質に対し、最も有効な属性に変質する特殊エネルギーだ。

シックスエレメントはファンガイアに最も有効な属性：魔皇力に変換され、ファンガイアのその拳ごと二の腕のあたりまで打ち砕いた。

『ギヤアアアアア！！』

ゴートファンガイアはそのあまりの激痛に断末魔の悲鳴を上げる。

他のDシリーズやキバが同じ事をやってもこつはならないだろう。Dシリーズの中で最もパワーの高いディーゼントだからこそできる芸当であろう。

「静かにしてくれないかな？ 近所迷惑だよ」

『へブツ！？』

ディーゼントはゴートファンガイアの断末魔を挙げる大きく開いた口の上段蹴りを叩き込む。それによって口を塞がれてしまったゴートファンガイアは断末魔を中断させられ、仰向けに倒れ込んでしまった。

更にディーゼントはその倒れて位置が低くなった頭をまるでサッカーのシュートを決めるように蹴り飛ばした。その時左の角に余りの威力で罅ひびが入ってしまう。

「うーん、本当は折るつもりだったんだけど、手加減すぎたかな」

否、手加減をしすぎたために罅が入る程度で済んだ様だ。

（こ、こんなのキバや王どころじゃねえ！それよりヤベエじゃねえか！！）

「さて、そろそろ教えてくれないかな？君をこの世界に連れて来たのは誰か」

『ヒイツ！？く、来るな！コツチに来るなあああ！！』

ゴートファンガイアは目の前のキバや王をも超えうる存在に完全に

怖気づいてしまい、二手に分かれた道の左側へと逃げ込んでいった。

「ハア…だから近所迷惑だつてば……」

ディージェントはそう溜め息を零しながら、ゴートファンガイアの後を追った。

「えーと、確かコツチだったよなあ？」

皐月は先程の断末魔の正体を突き止めるため、来た道に戻っていた。その道を進む毎に、先程亜由美たちと別れた場所に近づきつつある事に気付いた。

「亜由美と加奈、無事かなあ……」

『ギヤアアア！来るな！来るなあああ！！』

徐々に不安を募らせていると、曲がり角の方から先程の断末魔を上げていたと思われる人物の声が聞こえてきた。

最初は気付かなかったが、その声は男性のものだがどこかくぐもった声だった。

「おっ！こりゃあヒーローの出番だな！」

しかし、そんな事は気にも止めず、皐月は曲がり角の手前で立ち止まると手を合わせて指をバキボキと鳴らして身構えた。

「さあ来い!!」

やがてその曲がり角から断末魔を上げていたと思われる人物が何かに怯えながら飛び出してきた。

しかし、それは人とは形容しがたい姿をしていた。

まず目に付くのが赤や黄色、緑と言ったカラフルなステンドグラスの様な皮膚。それが夜闇に浮かぶ月光によってキラキラと光を反射している。

次に目に付いたのは羊の様に大きく捻じれた角。しかし左の角には大きく罅が入ってしまったている。

そして最後に目に付いたのは右腕。二の腕から下がなく、その先の断面からは無数の皮膚より細かく小さなステンドグラスの模様がのぞいていた。

(何じゃありやあ…?)

そのカラフリヤー(皐月命名)は皐月の存在に気がつくところちに駆け出してきた。

「え?え!?!」

突然の事態に皐月は対処できず、その太く大きな左腕に拘束されてしまった。

「は、放せ!放せよ!?!」

何とか振り解こうとするが、相手の力が予想以上に強く、中々抜け出せない。

それでも何とか振り解こうと必死にもがいていると、このカラフリ

ヤー追われていた原因と思われる存在が曲がり角から現れた。

青黒い体に、顔に下を向いた矢印を張り付けた様なロボットが此方と向かい合った。

(たくつ！今日は一体何なんだよ！？夢か！？夢オチなのか！？)

皐月が軽く現実逃避を始めところで、しかし事態は更に深刻になっていく。

『う、動くなあ！？』

『グッ！？』

ロボットが駆け出そうとするがその前にカラフリヤーは叫びながら皐月を拘束する腕を更にきつく締め上げる。

皐月はそのあまりに強すぎる力に思わず苦悶の声を漏らしてしまう。

『う、動くなよ！？ 少しでも動いたらコイツの首をへし折るぞ！』

『？』

『……随分と三下がしそうな事をするね』

『う、うるせえ！』

『グッ！？アッ…！』

ロボットが流暢な、しかし淡々とした口調でカラフリヤーの余りの小物ぶりに嘆息すると、その腕にさらに力を込め、そのせいで皐月の首が閉まってしまい上手く息ができなくなってしまう。

『……分かった。どうすればいい？』

『え…？へ、へへ…じゃあまずはその鎧を外してもらおうか』

カラフリヤーはロボットの余りの物分かりのよさに一瞬頭が付いていけてなかったようだが、状況を理解すると、鎧を取るように命令した。

その際、わずかに拘束する腕を緩め、皐月は漸く息がせむちできるようになる。

（ああ、死ぬかと思った…でも鎧って何の事だ？それにあのロボットの声どっかで……）

「分かった……。多々井さん、この事は誰にも言わない様にね」「え？」

突然ロボットに声を掛けられて戸惑うが、その口調と声に聴き覚えがある事に気がついた。

ロボットは腹部に付いたゴツゴツとした機械の持ち手部分を引っ張ると、軽く下に回す。するとカチリという音が聞こえ、今度は上に軽く回した。

するとベルトを形成していた帯が外れ、持ち手の反対部分に収納される。

それと同時にロボットの身体は藍色のアナログテレビの砂嵐の様なものに包まれ、それが晴れるとそこには須藤歩が立っていた。

「あ、歩！？」

まさかとは思っていたが、本当に歩だとは思っていなかった皐月は思わず驚嘆してしまう。

それに対しカラフリヤーは卑下た笑みを零し、更に歩に命令した。

『ヘッヘッへ…それじゃあ今度はその鎧を作る機械をこっちに投げ渡してもらおうか。そんな時にこのメスブタを解放してやるよ』

……ブチッ

臯月の中で何かがキレた。コイツ、今何て言った？メスブタ？

臯月は中学生の頃…太っていた。そしてその頃のアダ名が「メスブタ」だった。

そしてその当時好きな男子生徒がおり、何かとアプローチを掛けていたのだがその男子生徒に、「俺、お前みたいなメスブタ趣味じゃないんだよね」と言われて見事な大失恋をしたのだ。

その後は茶道部（茶菓子が食べられるという理由で入部した）から柔道部に転入部し、そこで何かを振り切るかのように我武者羅に特訓に励み、高校に入る頃には今の様なスレンダーボディになっていたのだ。

その振り切りっぷりは某赤い振り切る刑事もビックリするほどの凄まじいものだったそう。

そんな黒歴史に触れた事など全く気付いていない二人（というか一人と一体）は互いに物々交換する態勢に入っており、歩はその手に持った機械の塊とポンと軽く投げ、カラフリヤー…否、乙女の敵に投げ渡した。

乙女の敵はその機械を受け取るために隻腕から臯月を解放したのだ。が…その瞬間、臯月の逆襲が始まった。

こちらに放物線を描く様に飛んでくる機械の塊をキャッチしたのだ。

「な…！？」

「そおおおおりやあああああ！！」

解放した人質の突然の行動に驚く乙女の敵を余所に、その足元に足払いをしかけた。

した。

『イデデデデ！?』

「そろそろ本当に教えてくれないかな…? 君をこの世界に連れ込んだのは誰だい?」

デイーゼントは囁くように…淡々とした口調で再びゴートファンガイアに質問をした。

その口調が何処か冷たさを孕んでいるように感じたのか、ゴートファンガイアは怯えながらも答えた。

『ヒツ! し、神童しんどうだよ! 神童しんどうってヤツが俺をココに連れて来たんだ!』

「神童…?」

デイーゼントはそんな名前は聞いた事がなかった。

デイケイドに還元されてしまった情報の中に入っていたのかと勘繰るが、臯月はその人物に心当たりがあるのかゴートファンガイアに問いかけた。

「そいつって、ひよっとして革ジャン着た口の悪いオッサンだったか?」

『あ、ああ! そうだよ! 答えたんだから放してくれよ!』

「……何で知ってるんだい?」

「さっきアタシん所に来たんだよ。訳分かんない事言ってどっか行つたけど」

臯月の質問にデイーゼントは驚くが臯月は簡単に説明した。

『お、おい! もういいだろ! ? 放してくれよ! ?』

「ん？ああ、そうだったね」

未だに拘束していた事に気がついたのか、ディージェントはゴートファンガイアを解放する。

ゴートファンガイアは立ち上がって必死にこの場から逃げ出そうとした。

だが……。

「ファイナルアタックライド…ディージェント！」

『ウグオ！？な、何だコリヤ！？ク、クソ！離れねえ！』

突然ゴートファンガイアの目の前にディージェントのマーク…ライダースクレストが描かれたカードを模したビジョンが現れ、ゴートファンガイアに張り付いた。

「悪いけど、世界の脅威をこのまま野放しにしておくわけにはいかない。それに、答えたら放すとも助けるとも言っていないよ？」

『ヒイヒイ！？か、帰してくれええええ！！』

「断る」

クイツと左手の指を此方側に招く様に動かすと、ビジョンがゴートファンガイアを磔はりつけにしたまま此方かなりのスピードで近づいてきた。

それと同時にディージェントは右手を後ろに構えるとその右手にシックスエレメントを集約させる。

「ファイナルアタックライド」の効果によって通常よりも多大なエネルギーを集める事が可能になったため、右手は藍色のテレビの砂嵐のようなノイズで包まれていく。Dシリーズによって異なるエネルギーの塊だ。

「フウウウ……ハア！」

全く身動きが取れずに此方に押し込まれる形でビジョンに前から磔にされたゴートファンガイアの背中に渾身の一撃・デイメンジョンパンチを叩き込んだ。

『ギャアアアアア！！』

デイメンジョンパンチが命中すると、ゴートファンガイアは断末魔の悲鳴を残してガラス細工の様に粉々に砕け散った。

第七話：戦闘開始（後書き）

皐月ちゃんの前に現れた新キャラ神童さん…そうです。今作品の鳴滝ポジションの人です。

歩の闘い方えげつねえ…何あれ、何処の悪役だよ（、；）

そして今回一番目立ったのが…皐月ちゃああああん！！何無双しちゃってんのおおおお！！？

そりゃ確かにあの羊が悪いけども！いくら何でもやり過ぎっす！！

（。。；）

おかげで照井さんが友情出演しちゃったじゃないですか！

…ま、書いてて楽しかったからいつか（^。^）

次回もよろしくお願いしま〜す（@^^）ノ

感想やオリジナルライダーもお待ちしております。

第八話：崩れ行く世界（前書き）

さあ、いよいよ亜由美編もクライマックスだぜえ！！（、、）

第八話：崩れ行く世界

歩は皇月の家まで一緒に歩いていった。

あの後変身を解き、この世界で宛がわれた移住先へ帰ろうとしたところ、

「あ！ちよつと待てよ！こんな夜中に乙女一人置いて帰る気か！？さっきの奴みたいなのがまた出てきたらどうすんだよ！？取り敢えず、アタシん家まで付き合えー！」

と言われてしまい、渋々付いて行く事になったのだ。というか、その口調で「乙女」というのはどうなのだろうか……。

しかし、皇月の言い分も一理ある。

歩はまだ会った事はないが、皇月や先ほど倒したゴートファンガイアが言っていた神童という男があの一体だけを連れてくるとは考え難い。しかも皇月の話だとその男は次元断裂空間を使ってどこかへ消えたというのだ。

普通、Dシリーズを持たずに異次元移動を行うのは不可能だ。

だとすればその男は自分と同じDシリーズ適合者なのだろうか？いや、その可能性は低い。

何故ならDシリーズ：仮面ライダーは怪人と対を成す存在、謂わば水と油だ。その仮面ライダーが人を襲う手助けをするために怪人を連れ込むなんてありえない。

だとすれば、あの者たちと同じ存在なのだろうか……。

「……で、あのカラフリヤーは何だったんだよ。それにさっき歩が

着けてた鎧って何なんだ？」

隣から皐月が質問をしてきた。カラフリヤーとは何なのだろうか……何となくファンガイアの事であるのは分かるのだが……。教えるのは簡単だが、そう易々と教えて良いものではない。

別の世界の情報はその世界にとっては毒でしかない。その別の世界の技術が世界のバランスを壊す事など造作もないのだ。自分のいた世界が辿った結果が良い例だ。

しかも、彼女はこの世界の「基点」だ。その影響力はかなりのものだろう。

「基点」とは、その世界を構成する基盤となる存在だ。例えるなら、小説やテレビの主人公の様なものだ。

「ライダーサークル」にもその「基点」となる存在があり、その「基点」の名を取って「クウガの世界」や「ブレイドの世界」といった感じに名付けられる。そのように呼ぶのならここは「皐月の世界」と言えるだろう。

「おーい、さつきからずっと考え込んでねえで何か言えよ」

どうやら相当考え込んでいたようである。皐月も痺れを切らしたのかももう一度歩に話しかけて来た。

こういうタイプはいくら話をはぐらかそうとしてもしつこく質問してくるだろう。

取り敢えず誰にも言わない様にきつく言うておけばいいだろうし、もし何らかの要因で情報が漏れたらすぐに修復すればいい。

今の歩にはそれくらい力はあつた。決して自分の世界の二の舞は踏ませない。

「ああ、ゴメンゴメン。じゃあ教えるけど、この事は他言無用だよ。」

そう前置きを置くと歩は先ほどの非現実的な出来事と、自身の出自と正体を話そうとした。

「じゃあまず……」

「あ、ちよつと待った」

歩は話を切り出そうとした途端、皐月から待ったの声を掛けある一軒の民家を見た。

その民家はどこにでもありそうなく普通の家なのだが、その家の表札には「多々井」と書かれていた。

「アタシン家に着いたからどうせなら上がってから話そうぜ。」

「また明日という訳には……」

「ダメ」

「だよねえ……」

結局そのまま多々井家にお邪魔する事になり、皐月の部屋で二人つきりで話す事になってしまった。

因みに家上がった時に皐月の両親と会ってしまい、「皐月が男を連れて来た！」だの「アラアラ、明日は嵐かしら」などと騒がれてしまい、更に追い打ちをかける様に皐月が「二人つきりで話す事があるから絶対覗くなよ」と言い出したため更に騒がれてしまい、誤解を解くのに一時間近く掛かってしまった。

そこから更に夕食にも誘われてしまい、皐月に大体の事を説明し（その際も度々茶々が入って来た）、家に帰ってこれた頃には夜中の十時になっていた。

翌日、2月11日……

歩は臨時担任を任された3年D組のクラスに入ると、驚く事に亜由美と加奈が来ていた。

学校に行けば必ず自分に会う事になってしまうにも関わらず普通に登校していたのだ。

歩は疑問を抱きつつもとりあえず今は臨時教師として勉を取っていく事が最優先と考え、亜由美たちには昼休みにでも話を訊く事にした。

昼休み、食堂に行くとき亜由美、加奈、皐月の三人で学食を食べているところを見つけた。

歩が学生で溢れ返る人波と喧噪の中を潜り抜けながらその席に近づくとそれに気付いたのか皐月が手を振りながら声を掛けて来た。

「あ、おい歩！一緒に食わねえ!？」

「……………」

「ってあれ？皐月、先生にタメ口になってない？」

その言葉に加奈は訝しげにこちらを見ていたが、亜由美はそんな加奈を気にも止めず皐月に疑問の声を漏らした。

「そう言えばなつてたね。まあ、別に僕はそれでも構わないけど」
「あゝ、何かコツチの方がしっくり来るからなあ。それと後歩、お前もアタシの事下の名前で呼べよ。上の名前で呼ばれると何かしっくりこねえんだよ」

「アンタって本当にフランクねえ……」

加奈はそう軽くツツコムと、自分と向かい合う様に空いている席に座った歩の目を見ながら真剣に言い放った。

「昨日、亜由美と話し合った結果、勘違いしてるだけなんじゃないかって事になりましたね。結局こうして来る事になったんですよ。それに、いくら亜由美を狙ってるとしても、こんな人目の多い場所でそんな危険を犯すとは思えませんからね」

「ああ、成程なるほどね。それと後、君はまだ誤解してるみたいだけど、昨日言った通り僕はただその彼女に協力してもらおうと思ってるだけだからね」

「?…おい、一体何の話をしてんだ？」

「ああそれはええつとおゝ」

どうやら亜由美は誤解してるだけだと思ってくれたらしいが、加奈はまだ疑っているようだ。

隣で皐月が話の内容について行けず、亜由美に聞こうとしている様だが、亜由美も言ってしまったでもいいのかと悩んでいるようだった。

「ああ、別に言っても大丈夫だよ。その子も知ってるし」

「え!?!」

「あ、ひよつとして歩が実は宇宙人だったって話か?それだったらもう聞いてるぜ」

「宇宙人って何!?宇宙人って!?!」

「いやゝ、だってこの世界の人間じゃないんだろ?だったら似たよ

うなモンじゃん」

「うう…上手く否定できない自分が悲しい……」

「まあ、僕もそれで大体合ってるって言っちゃったしね」

「……それで先生、一ついいですか？」

亜由美と皐月の会話に軽く口を挿^{はさ}んでいると、加奈が話を切り出してきた。その目は自分の目と全く真逆の強い意志を持った目だった。

「もし亜由美に何かあつたら私はあなたを許しません。例え世界の危機で亜由美がその人柱にならなければならぬ事態になつても、私は亜由美の親友として彼女を守ります」

その言葉には言われた本人も皐月も、そして歩も驚いていた。

歩の目はやはり虚ろで何の反応もなさそうに見えるが、実際にはその言葉は歩の心にズッシリと押し掛かっていた。

歩がしようとしている事は正しくそれなのだ。

ただ自分の使命の為に一人の少女を犠牲にして己が使命を果たそうとするただの自己満足。

それを目の前の少女は許さないとやってきたのだ。しかも、自分の身を挺しても守るとも……。

それは仮面ライダーたちの絶対の使命。それをライダーでも何でもないただの少女が言つてのけたのだ。

歩は加奈のその意志の強い眼から視線を外してこの会話の渦中にいる亜由美に目を向ける。

この世界の自分は相当恵まれている。もし自分にもそんな友人がいたのならば、たとえ次元移動能力を持っていたとしても心のどこかは救われていただろう。

「そうか…この世界の僕は良い友人を持つたね……」

その咳きも誰にも聞かれることもなく、食堂の騒がしい喧噪の中に消えていった。

「シンクロ？」

「そう。僕とシンクロしてくれれば、Dプロジェクトをより確実に進める事が出来るんだ」

食堂では、食事を食べ終わった後もこの4人で話し合っていた。内容は亜由美とのシンクロについてだ。

それは別に強制ではないし、加奈に言わしてみれば、ただの歩の個人的な用事であるのだが、亜由美は悩んでいた。

確かに亜由美が居なくても何とかかなりはするが、もし亜由美がいない所為で助けられなかった人が出て来たとなれば……。

そう思うと無碍にはできないし、万が一歩が死んだとなれば、一体誰が世界を救うというのか……。

他のDシリーズは歩の話の話を聞く限りでは余り当てには出来ない。

加奈と皐月は無理はしなくていいと言ってくれてはいるがそれでも……。

キイイイイン……

そんな風に悩んでいると、突然どこからか耳鳴りがして来て下を向いた頭を上げた。歩も聞こえたのかある一点を見ながら険しい表情をしていた。

亜由美もそちらを向くと食堂のガラス製の出入り口が目に入った。

しかしよく目を凝らしてみると、ガラスの鏡面化した部分に青い大きな虫の様なものが一瞬映った様な気がした。

「亜由美？」

「おい二人とも、どうしたんだよ？」

加奈たちは気付いていないようだったが、食堂にも異変が起きていた。

「あれ？響子何処に行ったんだろ？」

「ん？おい大悟ドコ行ったんだ？便所か？」

「あれ？さつきまで居たはずなんだけど……」

食堂から徐々に人が減っているのだ。それも不自然な事に誰にも気づかれずに……。歩は軽く舌打ちをすると、突然歩の口からは出そうにもない大きな声で叫んだ。

「全員、食堂から出る！！」

突然の大声に食堂が静まり返ると異変はその姿を現した。

『グギャギャギャギャ！！』

「きゃあああああ！！」

「うわあ！な、何だあ！？」

「ギャアアア！放せ！放してくれえええ！！」

突如、出入り口のガラスや窓、水の入ったコップや果てはステンレス製のトレイの中から亜由美が先ほど一瞬だけ見た青い大きな虫が大量に現れた。

ミラーモンスター…鏡の中に存在するその世界の裏側の世界・ミラーワールドに潜む「龍騎の世界」に存在する脅威だ。
今この食堂は完全に彼らの餌場になり、生徒たちは次々とミラーモンスターの餌食になってゆく。その様相は正に地獄と化していた。

「うっぷ……」

「亜由美！？大丈夫！？」

「やっぱりこの世界での変身は無理があつたか……」

亜由美はその阿鼻叫喚の地獄絵図に吐き気を催していた。

それを心配する加奈を余所に、歩は自身の行動の甘さを悔やんでいた。

この世界は「ノンポジション」…つまりどの「サークル」にも属さない何の脅威もない世界だ。

「ノンポジション」の世界は別の世界との干渉率が低く、多少の事では「歪み」は発生しないのだが、次元移動能力によって無理矢理干渉すると、そのイレギュラーな存在に世界が対処できず、他の世界との境界線が曖昧になってしまう。

しかもこの世界の場合は、須藤歩による強制干渉の他に、神童という男がファンガイアを連れ込む際に展開させた次元断裂空間、さらに2回に及ぶディージェントへの変身の際に発生させた「歪み」によって別の世界との道が繋がってしまったのである。それも、この世界の近くにある「ライダーサークル」と繋がってしまう程の……。

ミラーモンスターたちの一部が此方に気付いたのかソソソと近づいてきた。

変身すれば何とかなるだろうが、こつこつと困まれている上に、亜由美たちがいるのでは巻き込んでしまう。このままでは不利だ。

「…三人とも、僕から離れない様にね」

「え？」

「うわぁ！？何か出たぁ！？」

「落ち着きなさい皐月！」

亜由美たちが此方に日理向く前に、歩は次元断裂空間を展開させて、その中に亜由美たちを巻き込んだ。

「悪いけど、ディナーはお預けだよ」

ミラーモンスターに振り返り向きながらそう言つと、自分も次元断裂空間の中に逃げ込んでいった。

次元断裂空間を抜けた亜由美たちは繁華街に来ていた。本来なら比較的安全であるはずの歩の部屋にまで移動しようと思っていたのだが、「歪み」が大きすぎるためか上手く演算する事が出来なかったのだ。

そしてこの商店街も、食堂の地獄絵図と何ら変わらない景色が広がっていた。

巨大な蟹や蜘蛛が建物を壊しながら街を闊歩^{かつぽ}し、上空に浮かんでい
る黒い捻じれた板からはゴキブリと人を掛け合わせたような怪物が
大量に出て来て冬空を覆っていた。

「そんな…街が……」

「先生、どういう事が説明してもらえますか？」

亜由美が街の惨状に悲観しているのを余所に、加奈が歩に質問をしてきた。いや、もはや尋問に近いだろう。加奈は歩の事をまだ信用しているわけではないのだから……。

「『ライダーサークル』の脅威がこの世界に流れ込んで来たんだ」

「その原因は何ですか？貴方の所為じゃないんですか？」

「……………」

歩は答えられなかった。自分の所為だけではないとしてもこの事態を作り上げてしまった原因の一つなのだから。

また壊してしまうのだろうか…自分の所為でまた……。

「お、おい二人とも！喧嘩してる場合じゃねえだろ！？アレ見ろアレ！！」

皐月によって一度中断され、皐月の指差した方を見ると、そこには四人の人間がいた。だが、歩にはそれが人間ではない事は分かっている。

何故ならそれは……。

「え！？ウソ！？」

皐月の声に反応した亜由美もそちらを見て驚いていた。

そこには歩を始めとした四人が立っていた。だがその四人は不気味な笑みを浮かべながら此方に近づいてくる。

「皆は離れてて」

「なあ、アレも世界の脅威とかいうヤツか！？」

「ウン。アレは人間に擬態している。アレは……………」

歩が言いきる前に目の前にいる自分たちに変化が現れる。急に四人の身体が盛り上がりながら変色し、緑色の蛹かぶのような怪物に変化した。

そこからさらに体内から熱を発し始めると赤く変色した体皮を破り捨ててそれぞれ蜂あしりや蠍さそりといった昆虫を彷彿とさせる怪物に変化した。

「え!?!何!?!どうなってんの!?!」

「アレは『カブトの世界』の脅威…ワームだね……」

そう言いながらディージェントドライバーを取り出し、もう一度由美たちに離れるように言うと、ディージェントドライバーにディージェントのカードを挿入した。

「変身」

「カメンライド…ディージェント!」

歩の身体が灰色のノイズに包まれ、それが晴れると同時にディージェントへの変身が完了する。

それと同時に歩の変化を警戒していたワームが痺れを切らして襲いかかって来た。

第八話：崩れ行く世界（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

加奈「…って何か始まったわよ!?何これ!？」

皐月「イヤ〜なんでも作者が前から考えてたみたいで、この後書きを使っているんな裏話をカミングアウトするみたいだぜ」

加奈「へえ〜作者にしては考えるわね」

カンペ（それはどういたしましてf（^ ^*）ポリポリ）

加奈「って作者いた!？何か外でカンペ持つてる!!」

皐月「ああ、何か外でこつちにいろいと指示を出すらしいぜ。そんでそつからアタシたちが盛り上げていくってわけだ。」

加奈「でも何で私たちなの？亜由美にも来てもらえばいいのに」

カンペ（実はこの亜由美編が終わった後、加奈ちゃんと皐月ちゃんの出番がないかもしれないのでその救済処置です（^・^）ノ）

加奈「そんな重要な事言いながら手を振るなあああ!!永遠の別れみたいじゃない!!」

皐月「あ、でもさつき収録前に聞いたんだけど、ひよつとしたら別の世界のアタシたち（リイマジネーション）として出てくるかもしれないらしいぜ」

加奈「何でそんな重要な事聞けちゃってんの!？」

皐月「結構目立ってたからだって。作者的にはアタシのキャラが書きやすいから気に入ってたんだとさ」

加奈「何それ自慢!？」

皐月「いんや、豆知識」

カンペ（取り敢えず今回はこの「あとがきラジオ」の簡単な説明と読者への応募について話そうと思います）

加奈「ああ、それってひょっとして何時ぞやの後書きで書いたオリジナルライダーの募集の事？」

カンペ（そうです。未だに一通も来ないのでここでもう一度詳しく説明した上で募集しようと思います）

加奈「…なんか今、すっごく悲しい事聞いた様な……」

皐月「放っておいてやるうぜ。上の作者のカンペ見てみるよ。余りの悲惨さに顔文字が入ってないんだぜ。いつもは必ず入れてんのに」

加奈「ああ!本当だ!!!」

カンペ（TへT）プルプル）

加奈「作者ああああ!泣かないでええええ!!ゴメン!私が悪かった!!!」

皐月「とりあえず、このラジオの説明は終わってるから、オリジナルライダーの募集について話そうぜ」

加奈「…ゴホン、それもそうね。それでは説明します。まずこの作品に出してもいい・出したいと思う自分の考えたオリジナルライダー

ーを感想・メッセージボックスにお書きください」

皐月「出来るだけ詳しく書いてくれよ〜じゃないと作者のセンスで書かれちゃうからな〜」

加奈「次に募集するのは主にDシリーズ（主にディケイド系統）ですがそれ以外でもかまいません」

皐月「ま、要するに何でもいい訳だ。ぶっちゃけライダーじゃなくてもいいんだぜ。例えばリ○カルな○はとかでもいい訳だ。ま、作者が知らない作品とか結構あるからストーリーとか詳しく教えてくれないといけねえけどな」

カンペ（因みに作者はリ○カルな○はは知っています（＾○＾）／）

加奈「因みに前回の募集で書いてなかった事ですが、他の作品のライダーとのコラボも募集中です。その作品の作者様のご意見で本編で本格的に書くか、もしくは番外編で特別出演するかを決めさせていただきます。また、その逆に私たちが自分の作品に出したいと思っっている方は作者に一度連絡した上でお書きください」

皐月「そおいや、この作品のタグにも『コラボ募集中』とか書いてたしな」

加奈「まあ今回はこんなところかしらね」

皐月「そうだな、今んとこ感想もないみたいだけどこれから伸びてくれるといいな」

加奈「では今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「皆の応募、待ってるぜ〜！」

第九話：ライダーサークルへ……（前書き）

遂に亜由美編集完結！（^^）／

この後は募集したものが集まるまでの間、サイドストーリーでも書いていく予定です。

第九話：ライダーサークルへ……

「本当に変身したわね……」

「…ウン」

亜由美たちはディージェントに変身した歩と、先ほどまで自分たちに化けていたワーム4体の死闘を遠くから見ている。

加奈には歩の事が解らなかった。

何の関係もない亜由美を自分の都合で利用して、しかも下手をすれば命に関わる事に巻き込まれるかもしれないのにあの男は死人のような目で淡々と協力しろと言ってきたのだ。

そんなに亜由美を人柱にしたいのかと思っただ矢先にこれだ。

別の世界の脅威が現れ、それから亜由美たちを守る様に戦っているのだ。しかも、自分を含めて。

「あの人は本当に何をしたいの？」

「は？何言ってるんだ加奈。そんなの決まってるだろ」

ふと口に出してしまった疑問が聞こえたのか皐月がその答えを口にした。

「歩は皆を守ろうとするヒーローだよ」

その頃、ディージェントはワームたちと1対4という不利な状況に

も関わらず優勢にしていた。

蜘蛛型のワーム…スパイダーワームにパンチを繰り出しているうちに蠍型のワーム…スコープオンワームが背後から斬りかかるようにするが、それを右に側転して避ける。そしてスコープオンワームの攻撃はデイジーエントの前に居たスパイダーワームに当たってしまう。

側転して体制を崩している隙を付いて蜂型のワーム…ワस्पワームが右腕についている40センチはある針で突き刺そうとするが、デイジーエントはそれを予測していたのか、自分の目前まで迫っていた針を右手で掴み取ると、右側から黒い玉の様なものを何発も弾丸の様に吐き出していたダンゴムシ型のワーム…アルマジリディウムワームの前にを出し、盾代わりにして黒い玉を防いだ。

盾にしたワस्पワームをアルマジリディウムワームの方へ蹴り飛ばして一時的に怯ませると、一枚のカードを脳内のクラインの壺から取り出し、ドライバーに装填した。

デイジーエントドライバーにはカードを収納する為のライドブツカーが備え付けられていない為、変身している本人が独自に造り上げた異空間であるクラインの壺にカードを収納するしかないのだ。

「アタックライド…スラツシュ！」

「…ハア！」

『ギユワァー!?!』

カードの効果を発動させると、再び斬りかかって来たスコープオンワームの大振りの攻撃でがら空きになった脇腹に手刀を叩き込んだ。すると、まるでバターの様にスコープオンワームの身体が切り裂かれて行き、完全に切り裂かれると同時にスコープオンワームは一瞬

苦しそうに呻くと緑色の爆炎を撒き散らしながら爆散した。

「スラッシュ」のカードはデージェントの攻撃に斬撃の効果を加させる事ができるカードだ。

本来ならばデイクライド専用のライドブッカー・ソードモードなどの斬撃系の武器の威力を上げるカードなのだが、デージェントには専用武器が備わっていないので身体能力に直接付加させて効果を発揮させているのだ。

それを見ていた他のワームは身体に力を溜める様に構えると、次の瞬間姿を消した。

姿を消したかと思うと、デージェントの体は何か弾かれた様に宙に浮かんだ。

更に空中でも弾かれ、それが何度も繰り返される。

(コレがクロックアップか…思ってたより速い……)

デージェントは弾かれながらもそう冷静に今の状況を分析した。

クロックアップ…「カプトの世界」に存在するライダーやワームが持つ特殊超高速移動能力である。

ワーム成虫体の体内や「カプトの世界」のライダー専用変身ツール…ライダーゼクターから生成されるタキオン粒子と呼ばれる超光速運動エネルギーを体表面に纏う事によって自身を通常の時間流から切り離し、ほぼ時間の止まった空間を移動することを可能とする能力である。

但し、タキオン粒子を常に体表面に纏わせていると肉体に大きな負担が掛かるため、数秒から一分の間しか発動できないという欠点もある。息を長時間止める事と同じである。

やがてクロックアップの効果が切れたのか、3体のワームは再びその姿を現した。

3体のワームはまるで嘲笑うかのように「キルキル」と口元の顎を鳴らしていたが、デーリエントが再び起きあがったのを見て再びクロックアップの準備を始めた。

デーリエントはその間に一枚のカードを取りだしていた。

「これなら少しは何とかなるかな？」

「アタックライド…ダッシュ！」

そう言いながらカードを発動させると、今度はデーリエントの姿が消えた。しかし消えたと言っても僅かにデーリエントの残像が見える為、ワームたちのクロックアップよりは遅いようだ。

一瞬姿を見失ってしまったワームたちは動揺して思わずクロックアップの準備を中断させてしまい、それと同時に今度はワームたちが吹き飛ばされる。

スパイダーワームとワスプワームはなんとかクロックアップを発動させるが、デーリエントの攻撃によって倒れ込んでしまった為、出遅れたアルマジリディウムワームはデーリエントの速度が上がった事で威力も増した踵落としを胸部に食らい爆散した。

その隙を付く様にクロックアップをした残りの2体のワームは挟み撃ちをする様に襲いかかってくるが、デーリエントはその攻撃を両手で受け止めた。

『ギユディッ!?!』

『ギユヂュツ、ギユ、ギユイイイ！?』

「又ウウウ…ハアアツ!!」

困惑するワームたちを余所に、デイージェントは2体の腕を持ったまま回転し、一か所に投げ飛ばした。

デイージェントが発動させたカード…「ダツシュ」は高速移動を可能にするカードのだが、クロックアップ程のスピードが出せるわけではない。

それでもクロックアップの速度にある程度ついて行けるようになるので、後は自分の空間把握能力で何とか対処できるのだ。

2体のワームは投げ飛ばされた場所で蹲っているだけの様で、その間にデイージェントは新たなカードを使っていた。

「アタックライド…ブラスト!」

「…ハッ!」

電子音声が響くと同時にデイージェントは右掌をワームに向けると、そこから藍色の拳ほどの大きさの光弾を複数撃ち出した。

『ギユワアアアア!』

2体のワームは光弾に直撃すると、奇怪な声を上げて爆散していった。

「……ヒーロー？」

加奈は皐月の返答に眉間を寄せた。だってそうだろう。とてもではないがああな男がヒーローなんて柄には見えない。

「そ、ヒーロー」

「どうしてそう思うの？」

亜由美も自分と似たような事を思ったのか皐月に聞き返してきた。それに対し皐月は簡単な事の様に言っただけだ。

「だって歩は世界を救うのが使命だって言っただけだぜ？ だったらもう立派なヒーローじゃねえか」

「でも…その為に亜由美を危険な目に……」

「別に無理にっわけじゃねえし、そこは亜由美次第だと思うぜ」

「私…次第……」

確かに皐月の言うとおりだ。亜由美はただ自分がしたい様にすればいいのだ。自分が世界の危機にどうしたいのか……。そう思っていると戦闘を終えたのか歩が変身を解いた状態でこちらに歩いてきた。

「終わったよ」

「……先生、一ついいですか？」

「なんだい？」

「これって元に戻るんですか？」

亜由美は今のこの街…いや、世界の惨状を見て歩に問いかけた。

その問いかけに歩は一瞬だけ難しい表情をしたがすぐに何時もの無

表情に戻って淡々と答えた。

「それは…分からない。ここまで歪んだ世界に来るのは初めてだから」

「……そうですか」

「でも……」

亜由美がその返答に落胆していると歩は更に続けた。

「『ライダーサークル』を渡ってその世界の『歪み』を修正すれば、何とかなるかもしれない」

「…っ！それって、やっぱり亜由美を……！」

「待って加奈！もう決めたから……」

歩に異議を申し立てようとする加奈を止めると、亜由美は決意を新たにした。そう、世界を…日常を取り戻すために……。

「私とシンクロしてください。それで、世界が助かるなら……」

歩は驚いていた。加奈の話聞いてから、してくれそうにないとは思っていたが、まさか、本当にしてくれるとは思わなかった。

彼女は何でもない極々普通の高校生だ。急に非日常的な事態に巻き込まれるというのに自分から申し立てて来たのだ。

「そうか…分かった」

そう言つて亜由美に近づこうとした時だった。

『ギユウウウギギギギギギ！！』

上空を埋め尽くしていた黒い影：ダークローチがこちらに迫つて来たのだ。それも、大量に……。

ダークローチは「ブレイドの世界」に存在する「統制者」と呼ばれるモノが世界をリセットするために使う手段だ。

本来ならば「ブレイドの世界」に存在する脅威・アンデッドの「ある一体」だけが存在していなければ現れる事はないのだが、どうやらその一体と「統制者」がこの世界に流れ込んできてしまったようだ。

「おおああああ！なんかメチャクチャ来たああああ！？」

「ちょ、先生！何とか出来るんですか！？」

「これは…ちよつと難しいかもね……」

「イヤですよ！？あんなGの大群に圧死されるなんて！折角覚悟決めたのに！！」

そんな事を話している間にもブラックローチの大群はどんどん迫ってくる。

もう一度変身しようにもあんなに多くいては自分は何とかなるが、亜由美たちまでは守りきれない。

次元断裂で何処かに飛ばそうにもやはりあの数の暴力には勝てないし、逆に自分たちを飛ばそうにもここまで歪んだ状態ではどこに飛ばされるか分からない。

万事休すかと思つたその瞬間……

世界が、止まった……。

「え？アレ？」

亜由美は何が起こったのか確認するために周りを見渡してみると、周囲の何もかもが完全に止まっていた。

街を闊歩する巨大な蟹も、空を覆い尽くす黒い影も、そして加奈や臯月までもが……

「加奈！？臯月！？どうなってるのこれ！？」

「どうやら、世界が完全に凍結してるみたいだね……」

「え！？先生！どうなってるんですか！？何で私たちだけ動けるんですか！？」

「次元移動能力者：『ワールドウォーカー』は世界の干渉を受けない。今回の場合は僕と亜由美さんだけが世界から切り離されてるんだ。そして、こんな大掛かりな世界操作ができるのは……」

「探しましたよ。デージエント」

突如、亜由美と歩しか動いていない世界に誰かの声が響いた。

その声の聞こえた方を見ると、そこには自分より少し年上に見える一人の青年が立っていた。

綺麗に整えられた茶髪、幼さの残る優しい顔立ち、クリツとした大きな瞳：言っては悪いかもしれないがとても可愛い印象の青年だ。しかしその表情は険しく、何処か威厳さえも漂わせていた。

「え？誰？」

「くれおん紅渡。今の『キバの世界』の基になった『オリジナル』だよ」

亜由美の当然の質問に歩は淡々と答えたが、再び疑問になる言葉を残していた。

「え？ “今の” ってどういう事？ それに『オリジナル』 って？」

「『キバの世界』と一言で言ってもその『キバの世界』は無数に存在する。他のライダーの世界も同じだよ。そして、『オリジナル』っていうのはその無数に存在する世界に派生する前のルーツ…つまり最初の仮面ライダーキバだね。」

「へ、へ〜……」

この説明でもかなり簡略化されているみたいだが、話が壮大すぎる上に意味不明な単語まで出て来た為に、正直良く分からなかった。

「それにしても、まさかまだ動いてるとは思いませんでした。デイケイドが復活した時に消滅したのかと思っていましたが……」

「まあね。あの時僕がいなかったら完全に消えていたよ」

「そう考えれば貴方には感謝するべきですね」

「いや、こちらでも感謝しているよ。もし来なかったらあの後どうなっていたか分からないからね」

この二人は一体何の話をしているのだろうか……。

亜由美にもある程度ディージェントの情報が入ってはいるが、それでもほんの一部だ。

それにしてもよく話す…友達か何かなのだろうか。

「…ねえ、ひよつとして知り合いなんですか？」

『いや（いえ）、今回が初対面だよ（です）』

「そこまでハモッておいて初対面と言いますか!？」

もしかやと思つて質問してみたが、二人は初対面とのたまつてきた。そこまで息ピッタリで何を……。

「でも知つてはいるね。デイージェントドライバーの情報の中に入つていたからね」

「僕も、貴方の事は知っています。でも知つたのはつい最近の事ですが」

「つい最近…?」

「ええ。つい先月…といつてもこの世界では昨日の事ですが、『ライダーサークル』に近づいてくるDシリーズの気配があつたのでもしやと思つたんです」

「成程。で、態々(わざわざ)『ノンポジション』のこの世界まで来たという事は……」

「はい。そういう事です」

「あの〜私にも分かりやすく説明してくれませんか?」

二人の会話に全くついて行けていない亜由美が痺れを切らしたのか、割り込んできた。

二人は一度、亜由美の方を見てから目配せをする様に互いに目を合わせる、亜由美にも話した。

「ん〜そうだね〜、じゃあこれからの方針を説明しところかな?」

「そうですね。では僕から説明させて頂きます」

歩が頭をガリガリ掻きながらそう言つと、渡が前置きを置いて説明を始めた。

「まず、これからデイージェントには『ライダーサークル』に行つてもらいます。そこでそれぞれ九つの世界で発生している『歪み』を修正してもらいます」

「あ、ちょっと待って。さっきの先生の話だと一つの世界でも幾つもあるんですね？じゃあどの世界に行けば良いんですか？」

「基本的に行くのはクウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバの九つで、取り敢えずどの『リイマジネーション』…つまり派生した世界でも良いんだよ」

亜由美の質問に歩はまた頭をガリガリ掻きながら淡々と答えた。

「じゃあ9回世界を渡ればいいの？」

「まあそう言う事なんだけど、同じ世界に来てしまう事があるかもしれないから必ずしもそうじゃないんだよ」

「しかし、九つの世界を1回以上回れば何も問題はありません。そして、すべての世界を渡った後は僕たちが何とかします。それでこの世界に流れ込んできた脅威も消え去ります」

詰まる所こういう事だ。

まず一つの世界の「歪み」を修復したとする。そしてその修復した世界が「アギトの世界」だったとすれば、その修復した「アギトの世界」が他の「アギトの世界」と繋がるための道を作るので、後は行ってもいいし行かなくてもいい。

そしてそれを繰り返して九つすべての世界の「歪み」を修復すれば、後は渡たち『オリジナル』がそれらの世界を繋げて拒絶反応を起こさずに融合させる事で世界の融合崩壊は止められる。

これがディケイド達Dシリーズによる「Dプロジェクト」の一端である。

「では、後は頼みましたよデージェント。その間この世界は凍結させておきます」

「ウン。分かったよ」

「加奈… 皐月… 待っててね、必ず帰って来るから……」

大体の説明が終わり、歩たちはこの世界を後にしようとしていた。本来ならば亜由美をこの世界に置いて行き、歩が去った後にこの世界と一緒に凍結させるはずだったが、凍結されると亜由美との繋がりを遮断されてシンクロ出来なくなるため、歩が保険として必要だと渡に説明し、渡もそれに了承し同行する事になったのだ。

そして今、この展開させた次元断裂空間の先に続く「ライダーサークル」へと亜由美と一緒に歩を進めていった。

「デージェント」

突然渡に呼び止められて振り返ると、そこには真剣で、それでいて険しい表情を作った渡が此方を見ていた。

「決してデイクライドの二の舞を踏まないようにしてください」

「…？ウン、分かった」

歩にはデイクライドの二の舞とは一体何の事か分からなかったが、おそらくデイクライドに還元されてしまった情報なのだろうと深く考えずに相槌を打ってこの世界を後にした。

「本当に大丈夫なのかなあ……？」
『そんなに心配すんなって渡ぐ。今回の為に、今まで色々準備してきたんだろ？』

歩たちが去った後、渡は一人嘆息していた。そこに一匹の小型の蝙蝠型のモンスター……キバツトバツト三世が現れ、渡を励ましてきた。今の渡は先程の様に角が立かどっておらず、何処か臆病な印象を受ける青年になっていた。

「うん……そうなんだけど、ひよつとしたら本来の目的を忘れてるんじゃないかなあって思っちゃって……」

『あゝ確かにあの反応だと忘れてそうだしなあ』

「でも、僕たちの目的は変わらないよ」

そう言って正面を向き次元断裂を展開させると、その中へと進みながら言葉を紡いだ。

「僕たちの世界を、取り戻す……その為だったら、何でもしてみせる……」

そう言い残すとこの世界を凍結させたまま次元断裂の中に消えた。

第九話：ライダーサークルへ……（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

加奈「さあ、遂に終わりました『亜由美編』！この後は作者が前書きで言った通りサイドストーリーを書く間にオリジナルライダーを本格的に募集します!!」

皐月「募集要項については前話の後書きを見てくれよ」

加奈「それでは早速、裏話をしていこうと思います！作者！お題をお願いします!!」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） 皆の名前の由来について

皐月「名前の由来か〜。じゃあ登場順に行ってみつかないかな。歩については第三話の後書きで作者が説明したから省いて、亜由美について言ってくぜ」

加奈「亜由美の場合は歩と同じ字にしようと思ってたらしいわよ」

皐月「でもそれだと読者が混乱しちゃう上に一タルビを打つのも面倒だからって理由で亜由美になっただけらしいぜ」

亜由美「ちょっと作者!どっいう事よ!?!面倒って!?!」

皐月「ありゃ?亜由美も来てんのか?」

加奈「何か外で作者の首掴んで揺さぶってるみたいだけど次行くわよ」

皐月「オツケ」

加奈「じゃあ次は私、藤原加奈の名前の由来ね」

皐月「あゝそおいやぁお前の名字って藤原だったなあ。すっかり忘れてたぜ」

加奈「忘れないでよ！私たち友達でしょ！？」

皐月「ハハツ、ワリイワリイ。で、名前の由来って何なんだ？」

加奈「うゝ……とりあえず私の名前の由来は、作者が執筆中に流してた音楽の中に『ゝゝかな』っていうフレーズが飛んで来たかららしいわよ。これを作者から聞いた時はさすがにへこんだわよ……」

カンペ（スンマセン（；――））

皐月「で、次はアタシの番な訳なんだが、作者から聞いてねえんだよな。何でも加奈に教えたからそっちに聞いてくれって……で、何なんだ？あたしの名前の由来って？」

加奈「……皐月、怒らないで聞いてね？」

皐月「オウ。だから何だよ？」

加奈「作者の話だと私と同じように執筆中に流してた音楽に『ただいま』ってフレーズが出たかららしいわよ」

皐月「何だよ。それくらいじゃ怒らないっつーの」

加奈「でもその後が問題なのよ……実は『多々井皐月』って名前にする前の最初の案が……『多々井真子』……」

皐月「orz」

加奈「ああ！落ち込まないで！？元気出して皐月！！」

皐月「かんつぜんにダジャレじゃねえか……」

加奈「だからそんなに落ち込まないで皐月！！何か今なら地獄兄弟に仲間入りできそうなくらいの負のオーラが出てるわよ！？」

カンペ（因みに下の名前の『皐月』は、作者の誕生月の『葉月』だと結構活発そうに感じたんでそれにしようと思ったんですが、それだと何か作者とダブるので次に活発そうな印象のある誕生月の『皐月』にしましたf（＾＾；）

加奈「ホラ！作者もああ言ってるわよ！活発そうな元気な子にしようと思ったって言うてるわよ！！」

皐月「……あ、何か立ち直って来たぜ。それから作者、後でちょっと楽屋に来い」

カンペ（。。。；）ブルブルガタガタ

加奈「さて、今回のあとがきラジオは此処まで！！」

皐月「しばらくはサイドストーリーを書いてく見てえだけど、1〜2週間くらいまでするらしいぜ。その間に募集してくれっとな作者も助かるっよ」

カンペ（よろしくお願いしますm（＿）（m）

加奈「それでは次回の更新をお楽しみに！！」

皐月「また見てくれよ〜！」

サイドストーリー：1（前書き）

さあ、歩たちが次の世界に行く前に、かなり重要な過去話をします
！（？）

短いんですけどちゃんと見といてくださいねー！！

原作と何気にズレてますけどあんまり気にしないでくださいm（

）m

サイドストーリー：1

これは2年前、須藤歩がディージェントになるより更に前の2年前に起きた、「最初のライダー大戦」のほんの序章の物語である。

「お兄ちゃん、本当に行っちゃうの？」

とある洋館の出入り口、その館の住人の一人である少女：門矢小夜かじやさよはこの館から出て行こうとするたった一人の肉親である兄：門矢士に不安そうな震えた声で問いかけていた。

その声に士は振り返ると穏やかな笑顔を見せ、小夜のサラサラの黒髪を優しく撫でながら諭す様に答えた。

「心配するな小夜。すぐに戻る。お土産に写真を取って来てやる」

彼女の兄、士は不思議な能力を持っていた。

彼は灰色のオーロラのようなものを作り出す事ができ、度々その中を行き来し様々な場所へと足を運んでいた。

小夜を館に残して……。

そして彼は今、旅に出ようとしているのだ。それも、別の世界に……
彼女は本当は兄に出て行ってもらいたくない、ずっと一緒にいて欲しいと思っていたが、自分のそんな我儘に付き合わせて彼を縛り付ける事なんて出来なかった。

小夜は士の去って行く後ろ姿に涙目で鼻声になりながらも声を振り絞った。

「お兄ちゃん…！」

小夜の声に土が振り返る。その顔はとても優しげなもので、本当に言いたいことが言えなかった。

「待つてるから……」

そう言う事しかできなかった。

「じゃ、行つて来る」

そう言い残して土が去っていき更に静寂を増した館にとっても小さな声が響いた。

「必ず…帰ってきてね……」

小夜と別れた土はすぐに灰色のオーロラ…次元断裂を展開すると、その中に歩みを進めて行き、やがて広い建造物の中に姿を現した。その中は魔の巣窟と化していた。蜘蛛や蜥蜴とかけといった何らかの生き物を模した怪人たちが自分を見つけると、まるで道を開く様に二手に分かれ、ある一か所に続く道を歩いて行つた。そこには巨大な玉座が存在し、その後ろには双頭の赤い鷲わしのレリーフがあり、その胸部には金色で「DCD」と書かれていた。

ここは大シヨツカー本部。世界の征服を企む巨大組織である。そしてこの大シヨツカーの大首領…門矢土はその玉座にドカリと座るとこの場に居る一人の名を呼び出した。

「地獄大使、計画の方はどうなっている」
「はっ！ほぼすべての準備が完了しました！」

黒い東洋騎士甲冑を身にまとい、黒く大きな隈を作った壮年の男：
地獄大使は士の質問に八キ八キと答えた。

士の言う「計画」とは、自分の持つ次元空間移動能力を使って他の世界を侵略する計画、通称「Dプロジェクト」の事だった。

しかし自分の持つ能力だけでは別の世界との道は開けない。そこで発案されたのが「次元移動能力をさらに増幅させ、尚且つ自身の身を強化する装置の開発」だった。

そのための装置：ディケイドライバーも完成し、他のDシリーズの開発も着々と進められていた。

「よし、じゃあ始めるぞ！別世界への侵略を！」
『グオオオオオオオオオ！』

士の号令に怪人たちの雄叫びが返す。士は更にもう一人の人物を呼び出した。

「死神博士！ディケイドライバーを渡せ！」
「はい！大首領様！」

そう言って士に近づいてきたのは、長い白髪に白いスーツ、更に黒いマントを身に着けた老人：死神博士だった。

死神博士はとても老人とは思えないキビキビとした足取りでその手に持ったディケイドライバーを士に渡した。

「よし。他のDシリーズはどうなっている」

その手に持ったディケイドドライバーを見ながら満足そうに頷くと、他のDシリーズ…特にディエンドドライバーの開発進行過程を聞いた。ディエンドドライバーは戦略面においてかなり有効なDシリーズだ。それさえあれば計画は更にスムーズに進められる。そう思って死神博士に問いかけたのだが、死神博士はどこか言い辛そうに口をへの字にして押し黙っていた。

「どうした、早く言え！」

「は、はい！それがディエンドドライバーを開発していた結城丈二が完成したディエンドドライバーを持って逃走しました…！」

「結城丈二か…あいつは何時か裏切るとは思ってはいたが、この土壇場で裏切るとはな……！」

結城丈二は大シヨツカーの科学者だ。しかし彼はかつてともに研究していた友人でもある助手を大シヨツカーに殺されてこの研究者として利用されていたのだ。いつか復讐を企てるのも当然のことだ。

「まあいい。逃走した結城丈二はデストロンの者たちが追え！その間に俺たちは別世界への侵略を仕掛ける…！」

『グオオオオオオオオ！！』

士は再び号令を掛け、次元断裂空間を展開させるとその中へ次々と怪人を送り込む。

この計画を終えたら帰るのだ。小夜の…たった一人の肉親のいる我が家に……。

サイドストーリー：1（後書き）

この回の「あとがきラジオ」は本日19時より出張版として別に書
きますm()m
お楽しみに！(^o^)/”

あとがきラジオ出張版〜ディージェントとキャラクターの設定〜(前書き)

さて、それでは前回書いた通りに出張版、始まります！(？、ど
二人とも、準備は良いですか！？

加奈「ええ、大丈夫よ」

皐月「バッチリだぜ」

それでは始まりますよ！3……2……1……スタートオ！！

あとがきラジオ出張版〜ディージェントとキャラクターの設定〜

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがきラジオ！出張ば〜ん！！」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

加奈「さあ、今回からサイドストーリーが始まりました！」

皐月「その間もこのあとがきラジオは続けてくぜ！そして今回はかなり長くなったんで出張版として書いてくぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！！」

カンペ（・・・） 仮面ライダーディージェントの設定について）

皐月「ああ、歩が変身するヤツだな」

加奈「これは私たちよりも本人が説明した方がよさそうね」

皐月「というわけで今回のゲスト！本作品の主人公・須藤歩に来てもらったぜ〜！」

歩「どうも、よろしくね」

加奈「相変わらずテンション低いわね〜。もっと上げて行きなさい！」

皐月「加奈は上げ過ぎだと思っけどな」

加奈「ウツサイわね！本編での活躍が初登場くらいしかないんだからこれくらい良いでしょ！！」

歩「いやいや、僕への説教はかなり効いたよ」

加奈「効いた様に見えなかつただけど……」

歩「ほら、僕って感情表現希薄だから」

梶月「お〜い二人ともそろそろお題に入ってください。作者も急かしてるし」

カンペ（。。。#）早く早く！

加奈「あ、本当ね。じゃあ頼んだわよ歩」

歩「ウン。とりあえずディージェントのスペックについて説明するね。」

身長：182cm

体重：73kg

パンチ力：10t

キック力：15t

ジャンプ力：一飛び40m

走力：100m走7秒

その他：空間把握能力

半径50mまでの状況を瞬時に把握・理解する事が可能。

とまあ、こんな感じだね」

加奈「他のライダーと比べるとかなりパワーが高いわね」

梶月「でもスピードは比較的低い方だな」

歩「まあ、スペックなんて正直飾りだしね。『劇場版 仮面ライダーディケイド オールライダー対大ショッカー』でも門矢士がかなりパワーのあるクウガ・ライジングアルティメットの攻撃を生身で受けてたのにピンピンしてたしね。アレって絶対骨とか折れてるよ」

カンペ（メタな発言はやメテ！？。。。；）

加奈「ネタ自重！」 脳天チヨップ炸裂

歩「ハッ！」 受け止めた

皋月「まあ歩のメタ発言はともかく、次の解説行くぜ。次は容姿だな。歩と加奈が鏝迫り合いを始めたから手元の資料をアタシが読んでくぜ。」

・容姿

複眼の色は黄色でエレベーターの閉口ボタンみたいな形をしている。

ボディは深いインディゴカラー（藍色）で胸部にケータイのメールマークみたいな形に伸びる白いラインが入っている。（あと四肢にもファイズみたいに白いラインが走ってる）

マスクには下を向いた二本線の矢印の形を作ったライドプレートが刺さっている。

中央に突き刺さっている2枚のライドプレートに付いてるシグナルポインターの色は灰色（つまりブランク状態で

、他のライダーの能力やファイナルフォームライドなどの効果が発揮できない）。

・ベルトの形状

四角くてメリケンサックみたいな持ち手が付いている。

色は白が基調で、藍色のラインが菱型の線と、二本線で作った十字で出来た四方向を向く矢印を描いている。

中央には青黒い石、トリックスターが付いている。

以上だぜ！」

加奈「そおい！」 脳天チヨップが決まった
歩「イタツ」

皐月「お、決着がついたみたいだな。それと歩、一ついいか？」
歩「何だい？」 タンコブ出来てる

皐月「この資料にインディゴカラー（藍色）って書いてあるんだけど、何でわざわざ英語にしたんだ？」

歩「これは作者に聞いた方がいいかもね」

加奈「少しは痛がりなさいよ……」

歩「コレでも十分痛がつてるつもりなだけどね」

カンペ（普通に藍色だとデイケイドやデイエンドとかけ離れてる印象があつたんで英訳してデイケイド達に近い存在にしようと思つたんです。因みにデイケイドはマゼンタ、デイエンドはシアンです）
（ハハッ）

歩「だ、そうだよ」

加奈「随分と安直だけど、中二臭い発想じゃなくて良かったわ」

皐月「ただ単純にカッコいいとかな」

加奈「じゃあ、今度は名前の由来ね」

皐月「どういう意味なんだ？ディージェントって？」

歩「ディージェントって言うのは『ディー Dear Agent』、つま

り『ディー代行者へ』という文を繋げて『ディー Deagent』にしたそうだよ。デイエンドと同じ名前の作り方だね」

カンペ（因みにデイエンドの場合は『Die（死）』と『End（終わり）』の造語だそうです）——（カキカキ）—— サイドストーリー書いてる

加奈「後、名前の候補には『ディーカウント』とか『ディーストロイ』

つてのもあつたらしいわよ」

臯月「ま、今後そう言うヤツが出てくるかどうかは分かんねえけどな」

歩「さて、次は『ライドカードシステム』だね」

臯月「歩、その『ライドカードシステム』って何だ？」

歩「『ライドカードシステム』って言うのはDシリーズが持つてる特別な能力で、そのカードを使って他のライダーの能力を使えるんだよ」

加奈「あれ？でも歩って他のライダーのカードって使ってたっけ？」

歩「最初は持ってたんだけどデイケイドが復活した時にカードが全部そつちに還されちゃったからね。今使ってるカードは素体（デイジェント）の時に使える僕だけのオリジナルカードだよ」

臯月「どうやって手に入れたんだ？」

歩「『ライダーサークル』に行く道中で寄った世界でいろいろとやってね、その時にデイージェントドライバーが作ってくれたんだよ。状況に合わせてね」

加奈「『ビジョン』のカードは分かるけど、『スラッシュ』とか『ブラスト』が必要な状況ってどんな状況よ……」

歩「ま、戦わなきゃいけない状況だったって事だよ」

加奈「さて、今回は出張版という事でもう一つお題行くわよ！」

臯月「オ〜！」

歩「え？それって大丈夫なの？その内ネタ切れとか起こすんじゃない……」

…」

カンペ（その時はその時に考える！（。A。））

歩「…ハア」

加奈「それでは作者！次のお題をお願いします！！」

カンペ（。・。・） 皆のキャラクター設定について）

皐月「おお〜コリヤ確かに長くなりそうだな。さすがは出張版なだけはあるな」

加奈「それじゃあまずは主人公の歩の設定からね…ってあれ？歩どこ行つたの？」

皐月「なんでも『質問が終わつたから帰る』ってよ。亜由美も本編に置いて来ちまつてみたいだし」

加奈「あらそうなの？まあとりあえず説明していきましょつか。

須藤歩（仮面ライダーディージェント）

年齢：21歳

身長：176cm

体重：56kg

髪型：少し長めの真ん中分けにした黒髪（城戸真司より少し短い感じ）

顔付き：目が虚ろでそれ以外は結構端正

性格：あまり感情が表面に出てこない。皐月曰く『引っ込み思案』

その他：物心ついたところから次元移動能力の実験対象として研究施設で世間から隔離された生活を送っていた。

しかし19歳の頃に自分の能力で開発された次元断裂発生装置が暴走し、『ライダーサークル』の脅威が歩の世界に流れ込んできたため、自分の居場所と存在意義を失ってしまう。

その時に現れた最初のデイジーエントによって『Dプロジェクト』の内容を伝えられ、暫くはその使命を果たしながら自分の存在意義を探し出すことにした。

因みに話し方は独特で、台詞だけならかなり友好的だが、口調に抑揚がなく淡々としているため、感情が籠っていない様に聞こえる。

とまあ、こんなところね……」

皐月「さすが主人公、説明長いぜ……」

加奈「ハア、疲れたあ……じゃあ次は皐月が説明して」

皐月「オウ、任せろ！次は亜由美だな……」

須藤亜由美

年齢：18歳

身長：161cm

体重：47kg

髪型：ポニーテールで前髪は真ん中分けの黒髪

顔付き：作者曰く『結構可愛い』

性格：意外とのんびり屋で重要な時でもどうでもいい事を考える事がある。年上には基本敬語だが、ツッコミを入れる時も敬語になっ
てしまう

その他：本作品のメインヒロイン。岩森高校3年生で何処にでもいる普通の高校生。

また、歩の異次元同位体であり歩の保険として世界を救う旅に出る事になる。

今後の話の展開では、亜由美がデイジーエントになって世界を救う可能性もある。

……だってさ」

加奈「何それ壮大すぎる……」
皐月「じゃあ次は加奈の番だな」
加奈「これは自分で説明するわね。…といっても手元の資料通りに
言わなきゃいけないんだけど……」

藤原加奈

年齢：18歳

身長：155cm

体重：…ってこれは言わないわよ！？断じて!!」

カンペ（…チツ（、ー、…））

加奈「作者後で脳天チヨップね…で続きだけど……」

髪型：少し短い亜麻色の髪をツインテールにしてるが、クセツ毛の
為左右の二つの束は蟹の挟みたいに真ん中が開いている

顔付き：少しツリ目でいつも怒っている印象があるが基本的に美人
の部類に入る

性格：気になることがあれば徹底的に調べなければ気が済まない性分
その他：亜由美の友人で彼女とは小学生からの付き合い。

刑事の父親を持ち、将来は自分も刑事になろうと思っっている。

怒らせると、瓦を割れそうな威力のある脳天チヨップをかましてく
る。

…とこれで以上ね」

皐月「一部省いてたけどな」

加奈「…脳天チヨップ、逝っとく？」

皐月「いや、遠慮しとく。ってか字が違う字が」

皐月「さて、じゃあ最後はアタシだな」 タンコブ出来てる

加奈「まったく…余計なこと言わなきゃいいのに」

皐月「だって何かツツコンどかないといけない様な気がしてよ」

加奈「言い訳はいいから、ほらチャツチャと説明する」

皐月「へ〜イ、じゃあ読むぜえ」

多々井皐月

年齢：18歳

身長：169cm

体重：48kg

髪型：短く切り揃えた黒髪

顔付き：少し日に焼けた肌に天真爛漫な印象を受けるそれなりに整った顔

性格：男勝りの口調で、結構サバサバした性格。面白そうな事があれば必ず首を突っ込む。

その他：亜由美の友人の一人で亜由美たち三人組の中ではムードメーカー的存在。

中学生時代は…ってオイ作者、これをアタシの口から言わせる気が…」

カンペ（。 。 ;）ブルブルガタガタ）

加奈「え？どうしたの皐月？」

皐月「いや、何でもねえよ。とりあえずアタシと亜由美たちが知り合っただのは高校に入ってからだな。それで以上説明終わり!!」

カンペ（因みに詳しく知りたい方は第七話をお読みくださいm）
ー）m）

皐月「オイコラ作者！なにこっそり教えてんだああああ!!」

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「感想や質問、オリジナルライダーの募集・コラボ企画も待つてるぜー!!」

加奈「さてそれじゃあ作者、ちょっとこっち来ようか？」

皐月「まあ心配すんな。半殺しにする程度に留めてやっから」

カンペ（ノオオオオオオ!!）（@ @・・）（

あとがきラジオ出張版〜デイーゼントとキャラクターの設定〜(後書き)

いやあ〜終わったた終わったあ(´・、*´)
あ〜楽しかったあ。

え？加奈ちゃんたちの折檻はどうなったかって？

逃げましたよそんなもん!!(´。°#´)

一応ここは普通の次元とは全く違うんで追っては来れないだろうし

……

加奈「作者！見つけたわよ!!」

ゲツ加奈ちゃん!?(´。°;´)

それに臯月ちゃんまで！何でここに!？

臯月「歩に頼んでここまで連れて来てもらったんだよ！さあ作者！

乙女の裁きを受けるおおおお!!」

ぎゃあああああ!!

歩「まあ、自業自得だよね…ん？何だろう、紙が落ちてる。なににな…」
に…『次回の更新は6月10日0時更新予定ですm(´ー´)m』
…顔文字が付いているから作者のメモかな？取り敢えず皆さん、6月10日にまたお会いしましょう」

サイドストーリー：2（前書き）

いやあこの調子だったら後2〜3話くらいで終わりそうですね
（´・？*）

その間に応募集まっていればいいけど…この作品一度も感想来た事
ないんですよね…来るかな？（´・・・？）

サイドストーリー：2

計画を始動させて一カ月後、ようやくすべての世界：「ライダーサークル」を制覇する事が出来た。

しかし、どう言うわけか世界征服の邪魔になる存在：仮面ライダーを倒した傍から世界が消滅してしまうのだ。

但し、その代わりと言ってもいいのか倒したライダーはデータ化されてDシリーズ専用のカードになり、そのカードを使う事でそのカードのライダーの力を使う事が出来るのだ。

どう言う事なのか聞き出したのだがこのDシリーズを造ったのは結城丈二だ。それ以外の人間が知る故もない。

死神博士の仮説では「すべてのライダーをデイケイドライバーに記録させればそのライダーのデータを基に世界を自分の思い通りに構築できるのではないか」との事だった。

つまり、後は世界を一つに融合させる様に構築するだけという事になる。しかしどうやって構築すればいいのか：やはり結城丈二を探しだして聞き出すしかなさそうだった。

「遂にこの時が来たか……」

結城丈二は遠方から見える大シヨツカー本部を見ながらそう呟いた。

デイエンドライバーを完成させてそれを持って逃亡し出してからの一ヶ月間、結城丈二はあるカードを作り出すために各ライダーの世

界を渡っていたのだ。それも大シヨツカーに世界を消滅させられてしまう前に行かなければならなかったのだ、鉢合わせしない様にするのは非常に困難だった。

そんな時、ディエンドライバーの成長記録機能がこの状況に適したカードを作成したのだ。

そのカードの名は「インビジブル」。このカードのおかげでカードの作成には手間取る事はなかった。

そして結城丈二が作るうとしていたカードというのはその世界の「基点」となるライダーのある意思をディエンドライバーに記録させる事で作成される。

そしてその意志というのは、「何かを守りたいという心」だ。

その意志をデータ化されたライダー達に送り込む事によってディケイドライバーの中から出す事ができる。

その為にはこのカードをディケイドライバーに挿入させる必要がある。その為にここに来たのだ。

「では行くか……」

そう呟いて結城丈二は大シヨツカー本部へと歩みを進めた。

「何！？結城丈二が此方に向かっているだど！？」

「はっ！先ほど偵察していたシヨツカー戦闘員が結城丈二を発見したとの事です！」

士は驚いていた。まさか自分からノコノコと戻って来るなんて、余りにも不自然だ。

何らかの目的があるとするならば、やはり自分の首を取る事なのだろうが一体どうやって……。

「いかが如何なさいますか!？」

目の前の報告してきた地獄大使が問い掛けて来た。確かに何かあるのは確かなのだがそれはこちらも同じこと。結城丈二からディケイドライバーについて聞き出すのだ。
さらに、あの男に裏切りの制裁を与えるために……。

「良いだろう。何を企んでるか知らないが、俺が自ら奴に制裁を与えてやる」

結城丈二はある一室に通されていた。その一室で両腕を鎖で吊るされ、目の前のこの大シヨツカーの大首領・門矢士を睨みつけた。

「何だその目は」

結城丈二の目が気に入らなかつたのか、士は結城丈二の顔に裏拳を浴びせると、この一室…拷問部屋の一角に置かれた西洋剣を手に取った。

それを大きく振りかぶると結城丈二の右腕に思いつきり振り落とした。

「ぐああああああ!！」

右腕を斬り落とされた激痛に思わず悲鳴を上げる。その斬り落とされた腕は未だに鎖に縛られたままで、まるで振り子の様に揺れていた。

「で、態々戻って来た理由は何だ？やはり俺の首か？」

「……………」

士の問いかけに何も答えず、再び睨みつけるだけだった。

士は何も答えない結城丈二に軽く溜め息をつき、こちらの話を切り出した。

「まあいい、俺もお前には用があったからな。で、その用って言うのがこれだ」

そう言いながら次元断裂から白を基調とした掌大のバックル…デイケイドライバーを取り出すとそれを腹部に宛てがう。するとベルトの側面から帯が飛び出し、士の腰に巻き付いた。更に右腰に次元断裂が現れ、そこからデイケイド専用カード収納可変型武器・ライドブッカーが現れると同時に右腰に備え付けられる。

そしてそのライドブッカーから一枚のカードを取り出した。そのカードの名は…デイケイド。

「変身」

士が音声コードを言い放つと同時に、事前に展開していたカード挿入口にカードを挿入する。

「カメンライド…デイケイド！」

電子音声が鳴り響くと同時に士の周囲に9体の灰色の人の形をした

ビジョンが現れ、それが土に重なり土の身体が灰色に包まれる。その身体にディケイドライダーの中央に備え付けられた赤黒い石…トリックスターからライドプレートが複数飛び出し、土の顔に縦一列に突き刺さる。突き刺さった瞬間、その身体を一瞬だけ真紅に染め上げると徐々に淡くなっ行って行き、やがてマゼンタカラーに変わった。そこに立っていたのは、緑色の複眼に、バーコードの形状でマスクに突き刺さったライドプレート。

マゼンタカラーの装甲、胸部に斜めに走る白いラインで作られた十字。

そして顔に突き刺さったライドプレートの中央の一角に黄色いシグナルポインターが光り輝いていた。

仮面ライダーディケイド…「Dプロジェクト」の要となる存在である。

「この力ですべてのライダーの世界を渡ったはずなんだが、どういふことかライダーを倒した途端世界が消滅してな」

そう言いながら身体の調子確かめるように自分の腕を捻りながら、結城丈二の周囲を回り、やがて背後まで来るとゆっくりと近づいてその大きな複眼で結城丈二の顔を睨みつけた。

「そこでお前に聞きたい。どうすれば世界を一つに出来る？このディケイドライダー…いや、Dシリーズはお前が造ったものだ。何か知ってるんじゃないのか？」

「…ッハ」

「何が可笑しい…？」

結城丈二が鼻で笑う事に不機嫌になりながら髪をグイッと掴みあげる。それに一瞬苦悶の表情になりながらも結城丈二は答えた。

「お前たちじゃあ、世界を一つにする事なんて出来やしない」
「フン、偉そうな口を」

デイケイドはその掴んだ髪を更に引つ張り、結城丈二の表情が再び苦悶に歪められる。

「そんなに早く死にたいのか？悪いが今はそんな生易しい事は出来ないな。楽になりたかったら吐け！世界を一つに融合させる方法を……！」

今度は乱暴に顔を掴みこちらに無理矢理振り向かせるが、結城丈二は右腕の痛みで脂汗をかきながらも、余裕の表情でデイケイドに言い放った。

「悪いが……お断りだ……！」

「な、何！？」

突如、結城丈二は自分の残った左腕を次元断裂に包み込ませると、デイケイドライバーのすぐ目の前に通過させた左腕を現した。そして、その手の中には一枚のカード……。結城丈二はすばやくデイケイドライバーを片手で展開させると、そのカード挿入口に一瞬でカードを挿入させた。

「ツールライド……」

しかし……

「……………」

何も起きなかった。

一体何をしたのかと思い、結城丈二に振り向こうとした時…変化が起きた。

デイケイドライバーに一瞬だけノイズが走ったのだ。更にそこから変化が起きる。

「カメンライド…」

「何…？」

「クウガ！」

「ぐあ！？」

突如デイケイドライバーのトリックスターの中から電子音声と共に白い光の固まりが飛び出して来たのだ。

その衝撃でデイケイドが踏鞴たたらを踏む。

「貴様…！あのカードは一体……」

「アギト！」

「うぐあ！？」

再び電子音声と共に白い光の固まりが飛び出して来て、今度はその衝撃で仰向けに倒れ込んでしまった。

その様子に結城丈二は失った右腕を抑えながらニヤリとニヒルな笑みを浮かべて答えた。

「俺がお前に使ったカードは、ウイルスだ」

「ウイルス…だと…!?」

「リユウキ!」

「うおっ!?」

ディケイドは何とか立ち直ろうとするが再び光が飛び出して来た衝撃でバランスを崩してしまった。

「そのウイルスはライダーたちの強い意思で作られたカードだ。その強い意思にデータ化されてしまったライダー達が反応し、ディケイドライバーの呪縛から解放されようとしている」

「何い!?」

「ファイズ!」

「ぐう!!ク、クツソ…!」

今度は前屈みになって立ち上がろうとしたが、再び襲って来た衝撃で膝を着いてしまう。

そしてそのまま次元断裂を展開すると、この場から逃げるように姿を消した。

しかしその中に白い光も紛れ込んでしまっていた。

それを見届けた結城丈二はやり遂げた達成感に満ち溢れた笑顔で次元断裂を展開し、その場を後にした。

ディケイドが辿りついた場所は何も無い荒野だった。

「ブレイド！」

「うぬううう……！！！」

そこでは未だに次々と解放されるライダーのデータの塊である白い光の飛び出す衝撃で苦しんでいた。

「ヒビキ！」

「うあああ……！」

「カブト！」

「うぐ……！！こ、これは……！」

そしてある事に気がついた。飛び出してきた光がまるで自分を囲むようにその場に留まり始めたのだ。そしてその光が徐々に形を成して来ていた。

「デン・オー！」

「ぬあああ……！！！」

その光はやがて収まって行き、まるでデジタルの荒れた画素の様な塊になり、その画素の塊は徐々に見覚えのある形を作り出していた。

「キバ！」

「うわあああ！」

その形とは、自分がこの一ヶ月間戦ってきた、世界を守る戦士達……
仮面ライダーだった。

サイドストーリー：2（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

加奈「さあ、今回も始まりました！あとがきラジオ〜!!」

皐月「今回の司会も、アタシたち二人でお送りして行くぜ〜!!」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします〜!!」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） NGシーン（ ）

皐月「NGシーンか〜。な〜んかいやな予感がすんな〜」

加奈「ええ、確かにね〜でもやらないと進まないし、早速この装置を使ってみるわよ！」 何かの機械持つてる

皐月「お？何だそれ？」

加奈「これはDリーダーと言って、作者がこの企画の為だけに造った装置よ。これで今までのNGシーンを記録したカードを読み込ませる事で、その状況を再現できるのよ！」

皐月「おお〜なんか凄そうだな！」

加奈「それじゃあ早速行くわよ！えい！」 カードをスラッシュして読み込ませた

「エピソードライド：NG・エイト！」

歩は臨時担任を任された3年D組のクラスに入ると、驚く事に亜由美と加奈が来ていた。学校に行けば必ず自分に会う事になってしまうにも関わらず普通に登校していたのだ。投稿してきている事に疑問を持っていると、加奈が近づいて気で自分にしか聞こえない様な声で歩の疑問に答えた。

……以下省略……

歩はその少女の目を見ながら「そうか……」とだけ答えて、教卓の上立った。

加奈はそんな歩を見てムツとするが、そのまま仕方なく自分の席に着いた。

「じゃあ出席を取ります。秋田……」

「ヤアアーヤアアアー！すどおーあゆむうー！けつとおーを申しこおーむー！」

『……………(。・。・)』

場の空気が凍った。

そしてこのクラスの全員が上記の顔文字の様な顔(歩含む)をしていると、この空気を作り上げた元凶が更に言葉を紡いだ。

「歩！昨日テメエが帰った後思い出したんだが、お前メチャクチャ強えよなあ！？だったら、アタシと勝負しろおー！」

その元凶…多々井臯月は柔道着に白いハチマキを身に着け、更に右手には筆ペンで「果たし状」と書かれたB4プリントを持っていた。

「…取り敢えず、一旦席に着こうか。服はそのままでもいいから」

「でも後で着替える様にね」と優しく付け加えながら、皐月の肩をポンと叩いた。

皐月「何ッじゃこりやああああ!!?」

加奈「皐月! あんた何しちやつてんの!?!」

皐月「アタシが聞きたいわああああ!!?!」

カンペ(このNGシーンは書いたは良いものの、この後どう話を引っ張ればいいのか分からなくなった為、お蔵入りしてしまった物ですf(皿^;))

皐月「そのまま一生お蔵入りになっていればよかったのに:orz」

加奈「ああ! また!?! 落ち込まないで皐月!?!」

カンペ(今回は皐月ちゃんがノックダウンしてしまった為ここまでとします(;^^)ノ^^)

加奈「ええ!?! ちょ、これで終わり!?! じ、次回の更新もお楽しみに〜! つて皐月!?! それどっから取り出したの!?!」

皐月「何かもう…地獄に落ちたくなくて来たぜ……」 ホッパーゼクター持ってる

加奈「待って皐月! 早まらないで!?!」

カンペ(因みに次回の更新は6月13日を予定しております) (^o^)/)

加奈「ちよ、作者も報告しないで臯月を止めてええええ!!」

サイドストーリー：3（前書き）

さあいよいよ水音ラル説のライダー大戦も佳境に入ってきましたよ
お！（・・）

果たして、ライダーたちはどう立ち向かうのか！？
ではどござー！（・・）

サイドストーリー：3

「ハア、ハア…ク、クソ…！」

「あ、あれ？ここどこだ？確か俺、殺されたんじゃない？…ってああ！何でコイツ、倒れてんだ！？」

解放されたライダーの一人、まるで西洋の騎士甲冑の兜のような仮面を付けた赤い龍の意匠を施されたライダー…龍騎は目の前の状況に困惑する。

つい先ほどまでこの目の前の見た事のないライダーに圧倒的に倒されていた筈なのだが、今その存在は何故か息を荒くして倒れていたのだ。

「ハア…ウルセエぞ、城戸^{きと}。また殺されてえのか？」

「…って何いきなり物騒な事言っただよ巧^{たくみ}！？…ってアレ？何で俺、こいつの名前知っただ？」

すぐ横に居た顔の面積のほとんどを占める大きな円を真ん中から黒い細長い角で二つに割った様な黄色い複眼（の字の様な形）を付け、赤いラインが四肢に伸びた黒いボディに、銀色の装甲を纏ったライダー…ファイズが先ほどから横で騒ぐ龍騎を毒舌で宥めた。それによって余計に騒がれてしまったが…。

基点となるライダー達は全員情報を共有していた。

それはディケイドライバーにデータ化されていた間、互いの存在が非常に不安定になり、一時的に混ざり合ってしまった為だ。

例えるなら複数の絵の具を混ぜ、その後その混ぜた分量だけ分けただけの状態と言えば良いのだろうか。

「フツ…成程な。如何やらお前達もライダーの様だな。それも、別世界の……」

そう自信過剰な印象を受ける口調で、メタルレットのボディにカブトムシを模したマスクと青い複眼のライダー…カブトが納得した様子で呟いた。

「へえ〜別の世界の鬼かあ〜。でもそつちじゃあライダーって言うんだな。良し！じゃあこれからは俺もライダーって事で！ヨロシク……！」

「シュツ！」と右手でピースと敬礼を合わせたような独特のポーズを付け加えながら、紫色でノツペリとした顔の鬼改めライダー…響鬼がこの場に居る全員に挨拶をした。

「あ、はい！こちらこそよろしくお願いしますヒビキさん！」

「あの、そんな事をしてる暇はないと思うんですけど……」

「……全くだ」

それに律儀に答えたのは、金色の身体に赤い複眼を持つ竜を彷彿とさせるライダー…アギトだった。

しかしアギトの二つ隣に居る、真紅の身体に黄色く鋭い複眼の蝙蝠を模したライダー…キバがそのやり取りに冷静にツツコミを入れ、それに金色の鈍重そうな鎧を纏い、これまた重量のありそうな大剣を肩に担いだ、コーカサスオオカブトの様な大きな角を二本携えたライダー…ブレイド・キングフォームが静かに同意した。

「へっ！確かにそうだな。こっからが俺たちの本当のクライマックスだぜえ！！全員、行くぜ行くぜ行くぜええええええ！！」

そう雄叫びを上げながら、まるで赤い桃を真ん中で二つに割った様な複眼に電車の線路の様な形のクラッシュヤーと赤いシャープな鎧を身に着け軽量の片手剣を持ったライダー…電王が啖呵たんかを切り、それに続く様に他のライダー達もディケイドに特攻を始めた。

だが……。

「待つて！皆！！」

それを止めたライダーがいた。

赤く燃えるような体と複眼を持った、クワガタの様な印象を持つライダー…クウガだ。

「うわつとつとつとと…何だよいきなり！？これから良い所だつてのによお！！」

いきなりの待ったの声に思わず先頭を切って走っていた電王が前のめりになりながらも、何とか態勢を立て直してクウガに異議を申し立てた。

それに対しクウガは真剣な面持ちでこの場に居るライダー達に言い放った。

「皆は下がつてて…俺一人でやる……」

「ハア！？何言つてんだテメエ！！オイシイ所を横取りする気かあ！？」

「いや、待て野上のがみ…いや、赤鬼か……」

「誰が赤鬼だ一つ目え！！」

「一つ目じゃねえつつうの！良く見る！ちゃんと分かれてっだろ！……とにかくだ、ここはあの人に任せようぜ」

電王はクウガの申し立てに激昂するが、それをファイズが止めた。途中、変な漫才が入ったが……。

とにかく、ファイズには分かるのだ。あの人が、これからどんな気持ちで戦おうとしているのか……。

「…あ！ひょっとして五代さん！！まさか！？」

龍騎もどうやら勘付いた様だが、電王には理由が全く分からず、どんだんイライラを募らせて行った。

「だああああお前らあ！！ちゃんと俺にも分かるように説明しろおおおお！！！」

「分からないのか？あいつはこれから一人で罪を背負おうとしているんだ。それも、俺達の為に……。」

そう電王に説明したのはカブトだった。

何故か右手を天に向けるポーズを取ってはいるが何か意味があるのだろうか？

「お祖母ちゃんは言っていた…戦うという事は、罪を重ねる事だと

……。」

「ハア…？」

「成程、そういう事ですか……。」

「ほお、中々良い事を言うね、青年」

「ってお前等には分かるのかよ！？」

未だに意味をよく理解できない電王を余所に、アギトと響鬼が納得していた。

「フ…当然だ。俺は天の道を往き、総てを司る男だからな。そして、

俺のお祖母ちゃんの教えに匹敵するものは存在しない」

「お前も調子に乗んなああああ！！後、お前の祖母ちゃんって何モンだああああ！！？」

自画自賛するカブトとそれに吼える電王。このままだと收拾が着かないと思ったのか、キバが提案を持ちだした。

「あの…！それでしたらこうしたらどうですか？ここは五代さんに任せて、もしそれで駄目だったら僕たちが参戦するという事で……」

その提案に電王はしばらく呻りながら考え込んでいたが、それに了承したのか舌打ちを打つと、その場から距離を取った。

「たくつ、分かったよ。しばらくは様子見しといてやる」

「モモちゃん……ありがとう！」

「モモちゃんって言うな！気色フリイ！！」

この場を預けてくれた電王に感謝するクウガだったが、呼び方が気に入らなかつたのかまた激昂されてしまった。

一体何がいけなかつたのだろうか…可愛いのに……。

そんな事を考えている内に他のライダーたちもこの場から離れて行く。そんな中、ブレイドがクウガに近づいて来てその赤い複眼でクウガを睨みながら言い放った。

「もし俺が少しでもアンタが劣勢と見做みなしたら、すぐに俺も加わるからな…いいな？」

「うん。それだけでも十分だよ」

ブレイドの恐喝に近いドスの利いた言葉に全く臆することなく、クウガはブレイドにサムズアップすると、ブレイドは「フン」と鼻を

鳴らして他のライダー達がいる場所へと歩いて行った。
それを見送ったクウガは目の前の脅威を見つめた。

目の前の脅威は人間だ。しかしそれでも自分の世界にいた未確認生命体や自分と同じ様な力を持っている。人を傷つける力を……。そして、ここにいる人達の殆どは人を傷つけた事のない者ばかりだ。中には自分と同じように戦う事を罪と分かって背負い続ける者や、戦い続けなければ生き残れないような過酷な世界で、戦いを止めるために戦うという矛盾に気付いても尚戦い続ける者もいる。そんな彼らに人を殺す罪を背負わせたくなかったのだ。そのためなら、自分を犠牲にしたっていい。皆の笑顔を守り、守るためなら……。

「茶番は終わりか？ だったら、さっさと始めるぞ。もう一度お前らを破壊してやる」

目の前の脅威：ディケイドも手を軽く二回はたたきながら、既に態勢を立て直し、もう一度自分たちを壊そうとしていた。
壊してたまるか……！ 皆の笑顔を……壊して……！！

クウガは身構えると、その腹部にあるベルト：アークルに着いている赤く輝く石に力を込め黒く変色させた。

「超変身……！」

そう叫ぶと同時にクウガの身体に変化が訪れた。
全身に黒炎と紫電を纏わせ、徐々にその身体を黒く変色させるとやがて全ての変化を終えた。

彼の身体は漆黒に染まって二股に分かれた金色の角は四本になり、所々に金色の線が隆起した筋肉をなぞる様に走っている。

これこそがクウガの最強の姿であり、究極の闇を齎す姿…クウガ・アルティメットフォームである。
しかし、今のクウガは決して闇を齎す事はない。何故ならその瞳が闇に染まらず、未だに赤く輝いているからである。それは、人を…皆の笑顔を守りたいという意思の残った証…。

突然の変異に周囲にどよめきが走る。情報としては知っていたが、まさかここまで圧倒的な気迫を持っているとは思わなかったのだ。

「おい、何だその姿は……？前に戦った時はそんな姿、見た事ないぞ」

その変化には流石のディケイドも驚いていた。

あの時クウガは戦うことに躊躇してしまった為、一度もこの姿になつていなかったのだ。

「あの時はこの力を使う事に戸惑ったけど…もう覚悟は決めた！うおおおおおお！！」

そう言い放つと同時にディケイドに雄叫びを上げながら突っ込んで行った。

皆の笑顔を、守るために……。

サイドストーリー：3（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

加奈「いよいよサイドストーリーも大詰めね」

皐月「ああ、一体どうなるんだろっな？」

カンペ（それは神（作者）のみぞ知る）。A。（）

加奈「誰が上手い事言えと言ったああああ!!」 水の入ったペットボトル投げた

パソコン ペットボトルが窓に当たった音

カンペ（この調整室とそこの収録室とでは次元が違うのだよ）
（ヾ）

加奈「ああ〜作者のあのドヤ顔がムカつく〜!!」

皐月「まあ作者は放つといて今回はアタシ達だけでしよっぜ。作者の指示は無視してさ」

カンペ（ちょ!?!）。。（）

加奈「ああ、それいいかもね。それじゃあ早速行ってみましようか」

皐月「と言うわけで、作者の資料室から色々取って来たぜ」

カンペ（ええええ！？ちよ、待って！！その中にはネタばれとかが
…（。。（。；））

加奈「心配ないわよ。今の時点での話しかしないから」

皐月「お、これなんて面白そうじゃなえか？」 一枚の資料を手に取りながら

加奈「え、なにになに？」

皐月「仮面ライダーってよお、変身した後大体何かのポーズを取るよな？」

加奈「ええ、ディケイドの手をたく仕草とか、龍騎の『っしゃ！』っていう掛け声とかね。それがどうかしたの？」

皐月「ああ、そんで歩にもそういうモーションを付けようと思ったんだってさ」

加奈「そう言えば、そう言うモーションしてたわね。確か手袋を強く着ける様な感じだったかしら？」

皐月「ああ、でもその前に別の案があつてよお」

加奈「うん、どんなの？」

皐月「なんでも王蛇みたいに首を捻る動作だったらしいぜ。こっ、手を後ろ首に添えながら、ゴキゴキって」 実際にやってみせてる加奈「…歩のあの戦い方がいい、そのボツになったモーションといい、もうアイツ王蛇でいいじゃん」
皐月「どっちかつつと、ストライクの方だな」

カンペ（。ー。ー） 因みにストライクとは、アメリカ版龍騎の王蛇の事です）

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「次回の更新は6月16日らしいぜ」

加奈「それでは皆さん！」

皐月「また見てくれよう！」

サイドストーリー：4（前書き）

取り敢えずこれでサイドストーリーも一区切りつきましたね〜（
？*）

それではクウガVSディケイド！かなり鬱な感じになってますので
ハンカチをご用意ください！（／　？）。。。・

サイドストーリー：4

「何だよ…これ……」

龍騎は誰にでも無く呟いた。今、目の前で繰り広げられる攻防…いや、力と力のぶつかり合いに息を飲んでいた。

「うわああああ!!」

「ぐあ!クソ!調子に乗るな!!」

クウガが泣き叫びながらディケイドを殴り飛ばし、ディケイドはそれに反撃するように殴り返す。

最早そこには善も悪も関係ない。ただの殴り合いという名の、殺し合いだった。

「…ク」

キバは見るに堪えなかったのかつい下を向いて目を逸らしてしまうが、響鬼がキバの肩をポンと叩き、諭す様に行った。

「目を背けちゃ駄目だよ。少年」

「ヒビキさん……」

「良く見ておけ、アレがこれから俺たちがしようとした『罪』の姿だ」

響鬼の言葉に続く様にカブトが呟いた。

「五代さん……」

「やめてくれ！やめてくれよ五代さん！！ライダー同士で戦うなんて間違ってる！アンタだって分かってんだろ！？罪を背負うんだつたら俺も一緒に……」

「止せ城戸！これはあの人が決めた事だ！！ここでお前が割って入れば、あの人の想いを踏みにじる事になるぞ！！」

アギトが拳を握りしめながら辛そうに声を漏らしている横では、龍騎がクウガに訴えかけている。

それを止める様に、今にも駆け出しそうな龍騎の肩をファイズが掴んでいた。

「でも巧！あのままだと、五代さんが……！」

「それでも……！俺達の為にやってるんだ！今の俺達には……見守る事しかできねえんだよ……！」

「『俺達の為』……か。まるで、あの時の俺みたいだな……」

龍騎はファイズに異論を唱えようとしたが、ファイズに却下されてしまった。

そしてブレイドは、今のクウガの姿に慨視がいしかん感を覚えていた。

ブレイド…剣崎一真はアンデッド、つまり世界の脅威そのものだ。
しかし、元からアンデッドだったわけではない。自らアンデッドに
ならなければならなかったのだ。

剣崎には一人の友人がいた。しかし、その友人はアンデッドだった
のだ。それも唯のアンデッドではない。

最後の一体になった時、世界を強制的にリセットしてしまう特別な
アンデッド…「ジョーカー」だったのだ。

剣崎の世界では最終的に「ジョーカー」である剣崎の友人…相川始
が残ってしまい、世界が滅びようとしていた。

世界の崩壊を止める方法はただ一つ…「ジョーカー」である相川を
封印する事だった。

しかし、やはり剣崎には出来なかった。彼にも守るものがあり、人
との共存を望んでいた彼を封印する事が……。

しかし、封印しなければ世界が崩壊してしまう…どうすれば…！

そんな時にある事を思い付いたのだ。自分をアンデッドに変えて二
体のアンデッドがいる状況にすれば世界はリセットされずに済むと
……。

今、剣崎が変身しているブレイド・キングフォームは自分の世界に
於いてもかなり特殊だ。

通常のブレイドに変身するのなら何も問題はないのだが、キングフ
ォームの場合は「スピードスト」と呼ばれる種類の13体のアン
デッドと融合する事で初めて変身できる。

しかし、その代償も大きい。何度も変身し続ければ、そのアンデッ
ドたちと徐々に混ざり合ってしまう、最終的にアンデッドになって
しまうのだ。

剣崎はこの特性を利用したのだ。

そして終ついにアンデッドになってしまったが、世界と一人の友人を救う事が出来たのだ。

今、こうして常にキングフォームに変身できるのはその為だ。

その後はアンデッドになってしまった事で抑える事の出来ない闘争本能によって人々を傷付けられない様にする為、剣崎は…人々の前から姿を消した……。

しかしそれから5年後、突如別の世界の脅威が攻めて来たのだ。

それに抵抗する暇もなく、いま目の前で死闘を繰り広げる一人である破壊者…デイケイドによってすべて壊されてしまったのだ。

世界も、仲間も、そして自分が救おうとした相川も……。

だからこそ剣崎には許せなかった。自分の守って来た物を、何もかも破壊したデイケイドが……。

アンデッドとなってしまう事でその狂暴性が増した今の自分を差し引いても、自分の手でヤツを……デイケイドを壊してやりたかった。

（だが、今はまだあの人に任せておいてやる……。あの人には悪いが勝ってくれよ……お前は俺の手で殺してやる……）

ブレイドは憎悪を込めてクウガと戦っている悪魔デイケイドを見つめた。

その間にも戦いは熾烈を極めていた。

デイケイドの上段蹴りをまるで岩石の様に硬くなった右腕で受け止めると、カウンターの蹴りで吹き飛ばした。その時も泣きながら…

…。

クウガ：五代雄介は本当は戦うのが好きではなかった。それでも戦うしかなかったのだ。誰かの笑顔を守るために……。

昔、クウガの力を得て間もない頃、一人の少女が泣いているところを見た。

その少女は両親をその世界の脅威である未確認生命体：グロンギに殺されてしまったのだ。それも、単なるゲームの余興として……。そんな理由で彼女の両親の命を奪い、彼女の笑顔さえも消し去ってしまったグロンギが許せなかった。

だが、それでも五代にはグロンギ達と戦う事に戸惑いがあった。グロンギは古代の原住民：つまり人なのだ。その人とはかけ離れた姿形を前にしても、五代はやはりそれを人として見ていたのだ。

やはりどんなに悪に染まった人間でも、殺すことに戸惑いがあったのだ。

しかしそれでも戦い続けた。その哀しむ顔を「仮面」に隠しながら……。

「グ…だったら、これならどうだ！」

「アタックライド…インビジブル！」

デイケイドがカードの効果を発動させると、その身体は虹色の光学迷彩の様なノイズに包まれ、姿を消した。

「アタックライド・インビジブル」のカードは使用者を視認できない様にするカードだ。そのカードの効果によってクウガは相手を見失ってしまい、周りを見渡し始めた。

(占めた…！そこだ！)

ディケイドはライドブッカーに収納された刃を展開させてソードモードにすると、クウガの死角になっている背後から斬りかかった…だが……。

「はあぁっ！！」

「うぐあぁぁ！？な、何い！？」

クウガは即座に振り替えると見えない筈のディケイドを的確に殴り飛ばしたのだ。

クウガ・アルティメットフォームはその名の通りクウガの究極形態だ。

純粹な肉弾戦に特化した赤のクウガ・マイティフォームから始まり、跳躍力に特化した青のドラゴンフォーム、五感を特化させた緑のペガサスフォーム、攻撃力と防御力に特化した紫のタイタンフォーム…それら全ての長所を兼ね揃えているのだ。

今ディケイドを的確に捉える事が出来たのも、ペガサスフォームの特性である「五感強化」によるものだ。例え視認できなくても視覚以外の感覚で位置を正確に把握する事が出来たのだ。

「うう…く、ひつく…うあぁぁ！」

「クソ！戦いたいのか戦いたくないのかハッキリしやがれ！」

「アタックライド…イリユージョン！」

クウガは嗚咽を漏らしながらディケイドに歩み寄ると再び殴る。

それを何とか受け流したディケイドは距離を取ると「アタックライド・イリユージョン」のカードを使った。

電子音声が鳴り響くと共に、ディケイドの身体から二つのマゼンタカラーのノイズの塊が飛び出し、ディケイドの分身体を形成した。その3体のディケイドはそれぞれパンチ、キック、ライドブツカーソードモードで三方向から攻撃を仕掛けたが……

『ハア！』

「ぬう！」

『何！？』

3体のディケイドは声を重ねながらその攻撃を見事に直撃させたのだが、クウガはそれを耐えきった。

「うっううう… ああああああ！！」

『グアアアアアア！！』

クウガが力を込める様に僅かに屈むと、アークルから生成されるエネルギーが体内に溜まっていき、それを吐き出すように雄叫びを上げると身体から黒い爆炎が噴き出した。

それに至近距離から直撃してしまった3体のディケイドは吹き飛ばされ、分身体は一定以上のダメージを受けてしまった為、マゼンタカラーのノイズに包まれると消えてしまい、再び一体のみとなってしまった。

「……………もう面倒だ。コイツで決めてやる」

そう言いながら取り出したのは…ファイナルアタックライドのカード。

これで決めるつもりなのだろう。

「はああああ……………」

クウガもそれに応える様に右拳に黒いエネルギーの塊を溜め始めた。

「ファイナルアタックライド…ディディディケイド！」

カードの効果を発動させると、ディケイドも同じく右拳にマゼンタカラーのエネルギー…シックスエレメントを纏わせる。

「……これで決まるな」

「おいクワガタア！ここまで来たら負けんじゃないぞー！」

クウガとディケイドから観戦していたカブトが呟き、電王も最初の事などそつち除けでクウガを応援し始めた。

「はあああー！」

「フンッー！」

そして二人のライダーの拳と拳がぶつかり合った。

その際の二つのエネルギーの衝突で周囲を衝撃波が包み込んだ。

「うわっ！？」

「うおおおう！？」

キバと電王がその衝撃波に思わず驚くが、その衝撃波の中心では両者譲らずに闘せめぎ合っていた。

「ハアアアア…！」

「う、うぐぐ…！」

「な！？」

しかしそこで変化が訪れた。クウガの赤く輝いていた目が徐々に黒ずんできたのだ。それと共にどんどんディケイドを押し込んでいく。本来今のクウガの姿：究極の闇は全てを無に還す存在。そしてその目も本来は赤ではなく黒。これまでクウガの目が赤かったのは、クウガ：五代雄介の闇に染まりきらなかった心の現れだったのだ。それが今、完全に闇に染まろうとしていた…だが……。

「う、うおおおおああああああああ！！！」

「グ、グアアアアアア！！！」

黒くなるうとした目が一瞬で赤に戻るとその瞬間、一際大きな爆発が起きた。

「う、五代さん！？」

そうアギトが叫ぶが、返事が帰って来る事はなく、その爆心地には変身が解けて気を失っているディケイド：門矢士しかいなかった。

サイドストーリー：4（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

カンペ（突然ですがゲストが来ておりますヾ（。ー。）（

皐月「ゲスト？」

加奈「誰かしら？」

真司「おじゃまします」

巧「…邪魔するぜ」

加奈・皐月「おおおおお!!」

加奈「というわけでサイドストーリーで活躍中の城戸真司さんと、

乾巧さんに来て頂きました！」

真司「よろしく〜！」

巧「って言うか、何で俺等なんだ？」

皐月「何でもこのサイドストーリーの後に書く本編に龍騎とファイズの話の順番に出すかららしいぜ」

カンペ（因みにサイドストーリーは今回で一旦終わりです（^・^）

/ これ以上はネタばれに繋がるので、終盤辺りにまた書きま

す（- -） カキカキ） 本編執筆中

真司「えええええ！？俺たちの活躍ここで終わり！？つてか終盤つて何時になるんだよ！？」

加奈「あ、因みに城戸さんは本編に出すらしいわよ。何でもTVスペシャル版の話を基にするらしいから」

臯月「ついでに言つとくと巧は出ねえらしいぞ。完全にオリキャラで構成するんだとよ」

巧「城戸は出て、俺は出ねえのかよ…！orz」

カンペ（ゴメンネたつくんf（。；））

巧「たつくんつて呼ぶんじゃねええええ！！」

臯月「さて、今回のあとがきラジオはここまでだぜ！」

真司「ええええ！？ちょ、今回早くないか！？もつと続く筈だろ！？」

巧「いや、よく考える城戸：後書きが長い方が不自然なんだ。その所為で一話丸ごと使つて出張版とか出たくらいなんだぞ……」

加奈「確かに、この後書きラジオつてかなり長いわよねえ……」

臯月「まあ、その面白いんだけどな」

加奈「その代わり、次回も引き続き城戸さんと巧さんを迎えてお送りしていきます！」

臯月「皆からの感想も待ってるぜ〜！」

真司「じゃあまた次回〜！」

巧「因みに更新は明日の0時らしいぜ……」

第十話：ライダーバトル、参戦（前書き）

さて、遂に本編始動しました!!（、、ゞ
ちなみに今回は龍騎編突入と言う事で一挙二話!（・・）
続きは十二時更新予定です!!
それでは、スタートオ!!（・・）

第十話：ライダーバトル、参戦

龍騎の世界……

この世界は今、滅びようとしていた。

しかし、物理的な消滅ではない。「基点」の消滅による概念的な消滅だ。

それは例えるなら、小説の主人公が存在しないポツカリと空いた空虚の様なものだ。

「蓮^{れん}…お前にも、答えは分からなかったんだろ……」

蝙蝠を模した騎士の姿をしたライダー…ナイト・サバイブがポツリと呟いた。

「ファイナルベント」

周囲にはこの世界のライダー達が自分を取り囲むようにそれぞれに備え付けられている召喚機にカードを装填している。そのカードの名は「ファイナルベント」…この世界のライダー達が使う自身の能力を一時的に急上昇させて一撃必殺の攻撃を放つ為のキーだ。

「ファイナルベント」

今この世界の裏側…「ミラーワールド」ではこの世界の「基点」となる人物…城戸真司^{きとしまさし}が親友…秋山蓮^{あきやまれん}の形見であるカードデッキを使い、ナイトに変身していた。

「ファイナルベント」

彼の本来の姿は龍騎である筈なのだが、それはこの激しい「ライダーバトル」の中で壊されてしまった。

「ファイナルベント」

「ライダーバトル」…それはライダーの力を宿したカードデッキを持った人間たちが繰り広げる殺し合いである。その最後の生き残った一人にはどんな望みも叶えられる力が与えられる。

「ファイナルベント」

その力を手にしようと、ライダーになった者達は戦いを繰り広げた。だが、真司はこの戦いに意味を見いだせなかった。確かに望みを叶えられるというのは実に魅力的ではあるが、真司にとってはこんな殺し合いをしてまで手に入れる力とは思えなかったのだ。

「お前は答えを見つける為に戦っていたんだ。だったら、俺も戦う…！」

「ファイナルベント」

しかし今、戦う理由を見つけた。

「お前の探していた答えを…見つける為に…！」

友の為に、戦う決意を……。

「ファイナルベント」

この場にいるナイトを除いた全てのライダー達が「ファイナルベント」のカードを装填し終えた。

「うらああああああー!!」

ナイトは雄叫びを上げながら、ライダー達に突っ込んでいった。

ライダー達が戦いを繰り広げる数十分前……

この世界に次元断裂空間を通ってやって来た亜由美と歩は繁華街を歩いていた。

「へえ、ここが別世界かあ。何か思ってたのと違うなあ。それにしてもアツツイ……」

亜由美は周囲を見渡しながらそうぼやいたが、それは街中の雑踏の中に消えてしまった。

別の世界と言ったらもつとファンタジーなイメージを持っていたのだが、一見すると何の変哲もない現代日本だった。

変わっている所と言えば亜由美がいた世界では2011年の2月だったのに対し、この世界は2002年の9月だという事ぐらいだろうか。

この世界ではまだ残暑が続く9月だという事で、上着は脱いで自分の次元断裂空間に保管している。

この方法はい先程、歩から訊いたのだが、こんな使い方があるなど正に目から鱗だった。

「まあ、ファンタジーな世界もあるよ。一応」

「へえ、そうなんだあゝ…ってアレ!? また心読まれた!？」

「僕が最初に訪れた世界がかなりファンタジーだったから全部そうなのかと思つてたけど、別にそんな事はなかったね」

「そして無視しないでください!！」

心を読まれた事に動揺するもそれを華麗にスルーしながら話を続ける歩に思わずツツコンでしまった。ホントに一体何なのだろうか、この人は……。

そう思っていると歩のある変化に気が付いた。

「アレ? 先生、何時の間に着替えたんですか？」

「ん? ああ、コレね。Dシリーズの中にはその行つた世界で何らかの『役割』を与えられるタイプがいるんだよ。その時にこういった『役割』に適した格好になるんだよ」

今の歩の格好は茶色いスーツではなくなっていた。

白のTシャツに水色の袖なしパーカーを羽織つた、ラフな格好になっていた。

更に肩には大きめのアナログカメラが担がれている。

そして歩はおもむろにパーカーのポケットに手をつ込み財布を取り出すと、その中から一枚の名刺を取って一瞥すると亜由美に渡した。

「ん? ナニナニ? 『フリーカメラマン・須藤歩』…これが今回、先生が与えられた役割？」

「まあ、そう言う事になるね。でも『役割』って言ってもあくまで形だけだから態々それに従わなくてもいいんだけどね」

そう言いながら再び歩き出すと、ふと思い出したのかこちらに振り向いて来た。

「あ、それとこの世界じゃ『先生』じゃないから普通に『歩』で良
いよ。タメ口でも構わないしね」

「ああ、それもそうだね」

そう言いながらテコテコと付いて歩く亜由美に更にとんでもない事
を言い出した。

「それから僕たちの関係はあまり人に聞かれても大丈夫なように当
り触りのない兄妹という事にしようか。別に呼び方は『お兄ちゃ
ん』とかでも良いよ？」

「ブツ!？」

思わず嘖いてしまった。まさか『兄妹』ならまだしも、『お兄ちゃ
ん』という言葉が歩の口から出るとは想定外だった。しかもそれを、
自分に言えと……。

「ちよ、何言っちゃってんの!? 流石に『お兄ちゃん』とは言いま
せん!! ひよっとしてアレ!? 歩いて妹キヤラとかに萌えるキヤラ
だったの!? 私の事、そんな目で見てたの!？」

両腕で自分を抱き、歩から後退りながら早口で捲まくし立てる亜由美に、
疑問符を頭の上に浮かべながら首をコテンと傾げるが全然可愛くな
い。寧ろ虚ろな目と相まって不気味だ。

「何の事がよく分からないけど、妹って言うのは兄の事を『お兄ち
ゃん』って呼ぶのが普通だって聞いた事があるんだけど……」

「確かにそう言う呼び方する子っているけど、そう言う子は大体幼

いかブラコンか二次元のキャラです！！私はそんな呼び方はしません！！」

「あの…そんなに叫ぶと周りに迷惑なんだけど……」

「誰の所為だと思ってるんですか！？」

周囲には人だかりができ始め、「痴話ゲンカか？」とか「仲の良い兄妹ねえ」と言った言葉が聴こえてくるが、亜由美はそんな事など気にも止めずにツツコミを絶賛発動中だった。

「ハア……ん？」

亜由美の果てしなく続くツツコミに溜め息を吐いていると、歩の中にある情報が入ってきた。

それはデーゼントドライバーから送られてくるこの世界に関する情報で、その内容は衝撃的なものだった。

“この世界の「基点」となるライダーが消えた。”

その内容に歩は表情には出さなかったものの驚愕していた。

この世界がまだ「ライダーサークル」に存在する世界である為、まだ完全に「基点」が消えたわけではない様だが、それでもこの世界が滅びるのは時間の問題だろう。

歩は周りを見渡すと、路地裏の方へ人目も気にせず一目散に走り出した。

「あ！？ちょっと、歩！？」

「しばらくこの辺で待ってて！出来るだけ早く戻る！」

歩が珍しく大声で答えて路地裏に消えて行くと、亜由美はある事に気がついた。

周囲には自分を囲むようにしてこちらを見ている人ばかり……。更にその中から「彼氏逃げたな」だの「フラれた？」等と言った雑言が聴こえて来た。

「……！！……あの人は私の兄です！決して彼氏なんかじゃありません！！」

亜由美は羞恥で顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「確か、この辺りかな？人気もない様だし……」

歩は路地裏を走っていると、開けた空き地に辿りついていてた。

辺りを見渡していると割れて破棄された鏡を見つけ、それに近づくとそれと呼応するように耳鳴りが聴こえ出し徐々に大きくなっていく。そしてその割れた鏡を覗き込むと、そこには巨大な蜘蛛のような怪物……ミラーモンスターがその場にいた一人のライダーを捕食している姿があった。

その周囲には他にもこの世界のライダーが何人か見受けられ、そのミラーモンスターを倒そうと奮闘している。

「コレがこの世界のライダー達か……情報としては知っていたけど、本当にかかなりの数があるんだね……」

歩は彼らがライダーである事は分かるのだが、その名称を知らない。歩はディーゼントドライバーからライダーの情報を得ていると言っても全て知っているわけではない。

ライダーの情報はあくまでデイケイドからダウンロードしたものが殆どだ。

デイケイドが復活する前だったら分かったかもしれないが、今の歩には「基点」となるライダーの存在感知とその「基点」が変身するライダーの情報：及び、世界の脅威の知識しか分からないのだ。

その情報にないライダーが捕食されるのを歩は黙って見ていた。歩の目的はあくまで「歪み」の修正。つまりこの世界での事件には一切干渉する気はないのだ。

人が死ぬ所を見るのは気が引けるが、もし介入すればこの世界で本来起こるはずだった事象が起きない事になり、それによって新たな「歪み」が発生する可能性があるのだ。

歩は無表情の虚ろな目で、しかし拳を血が滲み出るくらいになるまで強く握りしめていた。

そんな時、変化が訪れた。

突然ライダー達と離れた場所にいたこの世界の「基点」：城戸真司が鏡の中に映る様にそのライダー達に近づいてきたのだ。

恐らく、先程まで龍騎として戦っていたようだが、デッキを壊されてしまった為、変身が解除されてしまったのだろう。

すると城戸真司はその右手に持った龍騎のものとは違うデッキを前に翳^{かき}してベルト：Vバックルを腹部に出現させる。

本来なら鏡やガラスと言った鏡面化する物の前で翳さなければベルトは出現しないのだが、ミラーワールド全体が鏡となっている為、その制限がなくなっている様だ。

城戸真司は上半身を捻って左腕を前に突き出すと、ライダー達が持つ「覚悟」を意味する言葉を叫んだ。

「変身！！」

その掛け声とともに上半身を戻す勢いで右手のカードデッキをVバツクルに装填した。

すると城戸真司の身体に銀色の鏡像が重なって行き、その姿を蝙蝠と騎士を掛け合わせたライダーに変えた。

その瞬間、城戸真司が変身したライダーの情報を歩は持っていないが、**「基点」**が変身した事により、歩の中に新たな情報が入ってきた。

「世界が…変わった……？」

この世界は「龍騎の世界」であって「龍騎の世界」ではない派生した世界に変わったのだ。今のこの世界の名は……

「『ナイトの世界』…か……」

更に変身した蝙蝠と騎士を掛け合わせたようなライダー…ナイトはカードデッキから一枚のカードを引き抜くと、ナイト専用武器兼召喚機・ダークバイザーを構える。

引き抜いたカードは「サバイブ・疾風」…「龍騎の世界」における強化ツールである。

そのカードに反応して、ダークバイザーは細身の西洋剣の形状から蝙蝠の羽を模した青い盾型の召喚機…ダークバイザーツバイに姿を変え、その中にカードを装填した。

「サバイブ」

電子音声が鳴り響いたその瞬間、ナイトの周りに突風が巻き起こり、ナイトの姿を変えて行く。
その甲冑は青く、より鋭利なものになり、所々に金色の装飾が施されている。

仮面ライダーナイト・サバイブ…それがこのライダーの…城戸真司の今の名だ。

「ファイナルベント」

ナイト・サバイブはファイナルベントの効果を発動させると、契約モンスター・ダークライダーを呼び出した。

契約モンスターはこの世界のライダー達の力の根源になる存在で、他のミラーモンスターや人間を捕食させることを条件に、その契約したライダーに自身の力を与える。

但し、長期間エサの配給を断れば契約破棄と見做されそのミラーモンスターに必然的に戦わなければならなくなる。

これがこの世界で『ライダーバトル』を行わせる一つの要素になっているのだ。

ナイトはダークライダーを「ファイナルベント」の効果でバイクモードに変形させ蜘蛛型のミラーモンスターをそのバイクの突進で倒した。

そしてバイクから降りると後を追って来たライダー達がナイトを取り囲んでそれぞれが「ファイナルベント」のカードを次々と発動させて行く。

そこで歩が動いた。

「…そろそろ行つた方が良いかもね」

どのあたりが歪んでいたのかは分からなかったが、そこには確かに歪みが生じていた。

その証拠にナイト・サバイブを取り囲んだライダー達がこの世界の「基点」であるナイトを消そうとしている。消すわけにはいかない。

歩はデイージェントドライバーとカードを次元断裂から取り出し、装着・装填させる。

「変身」

「カメンライド…！ デイージェント！」

灰色のノイズに包まれ次の瞬間にはデイージェントへの変身を完了させると、左右の手首を順番に握りながら、まるでグローブを強く着けるような仕草の後、鏡に近づいて行きその中に吸い込まれるように消えて行つた。

Dシリーズはその世界に順じた能力を得る事がある。

今回の場合は「龍騎の世界」のルールである「ミラーワールドへの介入」と言う能力を得た事でこの世界に限りミラーワールドへ入る事が出来るのだ。

「…うづああああああ…！」

ミラーワールドへ入った直後、ナイトが周囲を取り囲むライダー達に単騎特攻を仕掛けている姿が目に入った。

アレはどう考えても無謀だ。ナイトの「ファイナルベント」は既に使われている為決定打を与える事は出来ないし、更に周囲には「ファイナルベント」を発動させたライダー達…このままでは「基点」が壊されてしまう。

そう思ったデージエントの行動は早かった。次元断裂からカードを一枚取り出し、既に展開済みのカード挿入口に挿入して即座に持ち手部分を押し込んだ。

「アタックライド…キャンセル！」

電子音声が鳴り響くとデージエントの身体から衝撃波の様なものが出て周囲一帯に広がる。

衝撃波と言っても物体に直接干涉するわけではなく、ある特定のものを相殺するのだ。そのあるものとは……………

「何故だ？発動しない……………」

「だりやああああ！！」

「ぬおおお！？」

“何らかのツールを使って発動させる能力の無効化”だ。

但し、その効果範囲は広いが、効果が発揮されるのは発動させた一瞬だけなので、使うタイミングが難しいのが欠点だ。

しかしそのおかげでライダー達の「ファイナルベント」は無効化され、ナイトが目の前にいる豪華な装飾を施された鷲を模した様なライダーに攻撃を与えることに成功させた。

「うおおおおりやああああ!!」

「ぬうううう…!!」

「一体、何が起きて…ってアレ？アンタ、一体誰？」

ナイトが驚を模したライダー…オーデインを押し込む様子を見ながら、メカニカルな風貌の緑色のライダー…ゾルダが考え込んでいると、見た事のない矢印を顔に張り付けた様な青黒いライダーの姿を見つけた。

その声に次々とナイトとオーデインを除いたライダー達がそちらを振り向く。

その青黒いライダーは、ゆったりとした動作でライダー達を指差しながら言い放った。

「自分の存在意義を探す仮面ライダーだ。別に覚えなくていいよ」

しかし、その口調は抑揚のない淡々としたものだった。

第十話：ライダーバトル、参戦（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月と！」

真司「真司と！」

巧「…巧の」

加奈・皐月・真司「あとがき〜ラジオ〜!!」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

真司「おい巧！お前ちよつとノリ悪いぞ！」

巧「ウルセエよ！何で俺がこんなことしなきゃなんねえんだよ！」

加奈「あ〜はいはい。喧嘩しないでくださいね〜」

皐月「取り敢えず今回は前回言った通り、真司のアニキと巧が来てるぜ〜」

巧「おいちよつと待て。何だそのアニキって」

皐月「だってよ〜カッコいいじゃん」

真司「いや〜そう言ってもらえると何か照れるな〜」

加奈「確かに、今回の話の最初のシーンはかなりカッコよかったわね」

皐月「だろ〜やっぱ加奈もそう思うよなあ」

カンペ（頑張つて調べた甲斐ありましたf（^^*））

巧「……………」

真司「つてあれ？お〜い、巧〜？」

加奈「あら？何だか拗ねちゃったみたいね」

皐月「まあ終盤辺りで何か活躍があるかも知れないからそんな拗ねるなつて」

巧「拗ねてねえよ！後、城戸も言ってたけど、終盤って何時になんだよ！？」

カンペ（　・　・　）　初期設定について

加奈「如何やら今回はこの資料みたいね。どれどれ……うわぁ……」
真司「如何したんだ？」　横から覗き込んで

真司「…これはちょっと酷いな」

臯月「どうしたんだアニキ？」

真司「いや、実は亜由美ちゃんの設定なんだけどな……」

臯月「オウ、亜由美がどうしたんだ？」

加奈「実は最初の設定ではいじめられっ子で自殺しそうになった所を歩が無理矢理連れ回すつもりだったみたいわよ」

巧「…それはヒデエな」

カンペ（申し訳ありませんm（??；）m（

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

臯月「感想と！」

真司「質問と！」

巧「…コラボも募集してるぜ」

真司「だから巧！もうちょっと元気に行こうって！」

巧「ウルセエ！もう二度と来るかこんなトコ！！」

臯月「あぁ～何か怒ってんなぁ～」

加奈「まあ取り敢えず、次回もお楽しみに～！」

第十一話：現れた「歪み」（前書き）

さあ、今回は王蛇戦に力を注いでみましたよお！（・・）
ではお楽しみください！

第十一話：現れた「歪み」

「へエ、自分の存在意義”ねえ”。それにしても、今まで見た事ないライダーだね」

「ふん、そんな事はどうでもいい。俺を楽しませてくれるんならなあ!!!」

ゾルダがぼやいていると、その横にいた紫色のコブラを彷彿とさせるライダー。王蛇が見た事のない青黒いライダーに特攻を仕掛けた。

王蛇はその手に持ったドリル状の剣・ベノサーベルで攻撃を仕掛けるが、青黒いライダーはその単調な攻撃を軽く横に引いて避け、そこから続く連撃も軽々と避けて行く。

まるで予測できているかのような動きだ。いや、実際に予測できているのだろうとゾルダは推測した。

「ちょこまかとお…ぐお!？」

青黒いライダーは王蛇に蹴りを入れて距離を離すと、Vバックルとは違う形状のベルトの持ち手部分を引いてバックル部分を90度回転させると、一枚のカードを何処からともなく取り出し、それをバックルに装填させ持ち手部分を押し込んだ。

「アタックライド…スラッシュ！」

「はああああ!!!」

「…フンッ!」

「何!？」

これまた聞いた事のない電子音声が鳴り響くと、再び攻撃を仕掛けるべく突っ込んできた王蛇のベノサーベルにあるう事が手刀を叩き込んだ。

普通ならここでその手刀ごとあの青黒いライダーを吹き飛ばしている筈なのだが、青黒いライダーはそのまま王蛇のベノスネーカーと鏝迫り合いを始めたのだ。

その際に聞こえる筈のない金属と金属のぶつかるキチキチという音が聞こえてくる。

恐らく、先程使ったカードが関係しているのだろうとゾルダが冷静に分析していると、オーディンとナイトの戦況も変わってきている事に気がついた。

「らああああ… って消えた!？」

「ここだ!」

「ぐあああ!？」

オーディンの能力である瞬間移動によってナイトが劣勢になり始めたのだ。

それに続く様に他のライダー達も攻撃に加わって行く。

「フウン… やっぱり皆そっちの方に行くんだねえ。ま、俺もあつちに加わる気はないけど」

そうぼやきながらVバックルに装填したデッキから一枚のカードを取り出し、それを自身のハンドガン型召喚機：マグナバイザーに装填した。

「シュートベント」

電子音声が鳴り響き、手元に携帯式大砲・ギガランチャーを出現させ、それをレイヨウを模したライダー…インペラーの跳び蹴りによって吹き飛ばされたナイトに狙いを定め、引き金を引いた。

「ぐわああああ！！」

発射された砲弾に直撃して激しく身体をスパークさせながらナイトは近くにあった割れたガラスの方向へ吹き飛び、その中に吸い込まれるように消えてしまった。

「た〜まや〜ってね。さて、じゃあアッチはどうするかな……」

そう言いながら再び王蛇と青黒いライダーの方を見た。

王蛇に変身している男…浅倉威あさくら けいは凶悪犯だ。その為、他のライダー達よりも戦闘意欲が強く、一度喰いつけば正に蛇の様に離れない上に、戦闘まじりの邪魔をされればその邪魔をした者まで攻撃を仕掛けてくると言う、ある意味最悪のライダーだ。

その為、先程から他のライダー達はナイトを攻撃していたのだが、先程のゾルダの攻撃でミラーワールドから弾き出されてしまった為、全員どうするか迷っている様だ。

「ちよつとちよつとお、何してくれちゃってんスかあ？折角の獲物が逃げちゃったじゃないツスかあ」

「それは悪かったね。加減が分からなくなってるね」

「それはそうと、どうすんのよアレ……？」

インペラーがゾルダに文句を言っていると、女性的なフォルムをした白鳥を模したライダー…ファムが王蛇と見た事のない青黒いライダーを指差しながらぼやいた。

確かにあのままでは王蛇の方が負けるだろう。かと言って助太刀し
ようものなら後が怖い……。

「暫くは様子見としようか。あのライダーは我々とは違う様だから
な」

オーデインがそう高らかに宣言すると全員が納得したように頷き、
あの謎のライダーの事が解るまで観戦する事となった。

「ハッ！」

「うお！？……中々やるなあ……」

「それはどうも、浅倉威さん」

「ッ！？貴様、何故俺の名を……」

デージエントは手刀を大振りして王蛇を弾き飛ばすと、王蛇は即
座に態勢を立て直し首をグルリと回しながらドスの効いた声で呟い
た。

それを褒め言葉と受け取ったデージエントは返事を返すと、王蛇
は自分の名を知っている事に軽く驚いていた。

デージエントはこのライダーについて情報を持っていなかったが、
戦闘を続けて行く内にデージエントドライバーがこのライダーの
情報と世界の情報を照らし合わせ、このライダーに関する情報を手
に入れていたのだ。

「それは企業秘密です」

「ふん…そうかよお！」

デイーゼントが軽くあしらうと、王蛇はそれほど深く考えずに再びデイーゼントに斬りかかった。

それを再び右手の手刀で受け止め、拮抗状態となる。

互いに睨み合いながら鏢迫り合いをしようと、そこでデイーゼントが仮面の奥で「…フ」と小さく笑った。

「……何が可笑しい？」

「誰が右手だけと言いましたか？」

「何っ…！？うぐお…！」

王蛇は勘付くが対応に遅れてしまった。

デイーゼントは左手の手刀で王蛇の胴体を斬り付けたのだ。

デイーゼントの「スラッシュ」のカードはあくまでデイーゼントの攻撃に斬撃を付加させる為のカード。つまり、斬撃を放とうと思えばどの部位を使っても構わないのだ。

王蛇との距離が離れると、今度は回し蹴りに斬撃の属性を付加させて斬り付ける。

それによって攻撃の射程範囲外に出してしまうが……

「ハアアアア！」

「ぐおああ…！」

蹴りによる斬撃を飛ばしての中距離攻撃を仕掛けた。

王蛇は攻撃特攻型のライダーであるが、その攻撃は殆どが近距離戦だ。

王蛇の装着者である浅倉威なら例え距離を取られてもゴリ押しで相

手との距離を取る事も出来るだろうが流石にこつも連続攻撃を浴びてては近づき様がないだろう。

「ぐううう…ハア……」

そして、王蛇はとうとう膝を突いて倒れてしまった…だが、ここで終わる程このライダーは弱くはない。

軽く息を整え、首を回してゴキゴキと鳴らしながら王蛇は立ちあがった。

その顔は仮面で見えないが、凶悪な笑みを浮かべている事が雰囲気です。

「面白い事やってくれるじゃねえか…いいぜえ、もっと俺を楽しませてくれよお…なあ、青黒お……」

「青黒じゃなくてディーゼントです。でも、僕の用も済んだのでそろそろ退かせてもらいます」

ディーゼントはそう淡々と答えると、一枚のカードを脳内にあるクラインの壺から取り出し、器用にそのカードを持った右手でディーゼントドライバーの持ち手部分を引いてカード挿入口を展開させた。

今は既にメカニカルな風貌のライダーの砲撃によってナイトがミラーワールドから弾き出されてしまっている。

それに暫く他のライダー達もこちらを観戦している様で、ナイトを追う素振りを見せていない。

これ以上時間を稼ぐ必要はないだろう。

「ハッ！そう簡単に逃がすと思うかあ？らああああ！！」

王蛇は鼻で笑って、カードを使わせる前にケリを着けようと突っ込んでくるが、やはりディージェントがカードを装填する方が早かった。

「アタックライド…インビジブル！」

王蛇の攻撃が当たる寸前、ディージェントの姿がアナログテレビの電源を切った時の様な残光を残して消え、王蛇の攻撃は空を切った。

「どうやら今使ったカードは『クリアーイベント』だった様ですね」

白虎を模したライダー…タイガが先程、青黒いライダーが使ったと思われるカードを推測し、誰にでも無く呟いた。

「いやあ…惜しかったツスね、センパイ」

「……………」

「アレ？あの、センパイ…？」

インペラーが暢気に王蛇に声を掛けるが王蛇は無反応で、ベノサーベルを振り下ろしたままの格好でワナワナと震えていた。それに疑問を持ったインペラーがもう一度声を掛けるが……………

「うらあああああ！！」

「うわあっ！ちょ、落ち着いてセンパイ！」

攻撃対象をインペラーに変えた王蛇が激昂して襲いかかった。

「ああ、あんな事があつた後に声なんて掛けるから……」

「……馬鹿が」

「アレは止めた方がよろしいんでしょうか？」

「放っておけ」

ゾルダと龍騎を真つ黒に染めた様なライダー……リュウガがインペラーの安直な行動に呆れていると、タイガがオーデインに止めるべきか聞くがそれを却下し、更に続けた。

「この『ライダーバトル』はあくまで最後の一人になるまで戦う事を目的としている。ここで一人減った所で、『ライダーバトル』を止めようとするあの愚か者を消すのに何の問題もない」

「そうですか、分かりました」

オーデインの命令にタイガは簡単に引き下がると、王蛇とインペラーを見た。

その時には丁度王蛇の攻撃がインペラーの腹部にあるデッキに直撃している所だった。そしてその衝撃でインペラーのデッキが砕かれてしまった。

「うわっ！え、ウソ！？俺のデッキが……！」

デッキが壊れた瞬間、インペラーに変化が起きた。

インペラーの身体から粒子が噴き出し、その装甲が消えて行くのだ。そして完全に装甲が消えても尚粒子は噴き出し続け、インペラーの装着者であつた佐野満^{さのみつる}までもが徐々に透明になつて行く。

人間はミラーワールドの中では活動できない。それは人間が海底や宇宙などで活動できない事と同じであり、ライダーの力はその活動

できない領域で活動する為の特殊スーツと言っているだろう。
そしてミラーワールドはその世界の存在ではない者に対し拒絶反応を起こし、その存在を排除しようとする。

その現象が今日の前で起きている佐野満の消滅だ。

「イ、イヤだ…オレは、まだ、死にたく……」

「さっさと消えろ。お前を見てると、イライラするんだよ…うらあ
ああ…！」

王蛇がそう吐き捨てると、ベノサーベルを思いっきり佐野満に振り下ろして一刀両断にした。

「ギヤアアアアアア！！」

佐野満の身体は斬られた箇所から更に粒子を噴き出し、断末魔と共に消滅した。

「これで残ったライダーは八人。まずは愚か者のナイトを消す」

オーデインの号令を聞き、ライダー達はそれぞれ現実世界に戻る為、ミラーワールドを後にした。

そしてその場にはオーデインとリュウガだけが残り、リュウガがオーデインに問い掛けた。

「あの青黒いライダーが神童とか言う奴が言っていた“悪魔”か？
確かに他のライダー達とは違うな」

「ふむ。だが神童がお前に与えた力があれば奴を倒す事など造作もないだろう。だから頼むぞ……」

そこで言ったん言葉を区切ると、その目の前にいるライダーの二つ

の名を紡いだ。

「仮面ライダーリュウガ・城戸真司」

第十一話：現れた「歪み」（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

チャ〜チャラチャツチャツチャ〜ン

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会はいつも通りアタシ達でお送りしていくぜ〜！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします!!！」

カンペ（ ） ・ ・ ・ （ 君達三人の初めてあつた頃の話 ）

加奈「ああ〜あの話ね〜」

皐月「懐かしいなあ〜」

加奈「それじゃあ早速見てみましょうか。この間使ったDリーダーを使って」 Dリーダー持つてる

皐月「じゃあ今度はアタシにやらしてくれよ。何かブレイドみたいなやり方でカツコいいよなそれ」

加奈「ええ、いいわよ。ハイ」 Dリーダー渡した

皐月「それじゃあ行くぜ〜」 ティツ！」 カードをスラッシュして読み込ませた

「エピソード・ライド…ミニストーリー・ファーストコンタクト！」

岩森高校入学式の日……

その日、亜由美は隣にいる小学校からの付き合いの親友・加奈と一緒に通学路にある桜並木の中を歩いていた。

「いやあ〜まさか加奈が私と同じ高校に通うなんてね〜。てっきりもつと上の高校に行くのかと思ってたよ」

「いや私アンタが思ってるほど頭良くないわよ？まあ確かに成績だつたら上から数えた方が早いかもしれないけど」

亜由美と加奈は何でもない雑談をしながら岩森高校の校門まで来ると、互いに顔を合わせ改めて挨拶をした。

「それじゃあ、高校でもよろしくね、加奈」

「こちらこそ、よろしくね、あゆ……」

『そおおおおりやあああああああ！！』

『ぎゃああああああ！！』

「って何今の声！？台無しなんだけど！？」

「行ってみよう！」

突然の絶叫によって小学生の頃から毎年続けている二人の新年度の挨拶は、見事にブチ壊された。

早速元凶を探すべく亜由美と加奈は校門を潜った。

「テメエエ……いい度胸してんじゃねえか。前まで散々言いたい放題言いやがってよおお……」

「ちよ、ちよつと待って！俺達ってこれが初対面じゃないの！？」

「まだ言つかあああああ！！」

「ぎゃああああああ！！」

亜由美と加奈はその現場に絶句した。

二人の女子と男子が喧嘩をしていたのだ。但し、女子による一方的な……。

「アタシの事を忘れたとは言わせねえぞ！小笠原、太一おがさわら たいちいいいいいい！！」

「だから何で俺の事知ってんの！？キミ誰！？」

その喧嘩腰の女子は一言で言えば、美人だった。

短く切り揃えた黒髪に、スレンダーな長身。更に少し日に焼けた肌が彼女を健康的に見せている。

そしてその顔は笑えば太陽の様に輝くのだろうが、今は般若の如き怒りの形相をしている。

相当目の前の男子に恨みを持っているのである。

「忘れたってんなら教えてやる！アタシはお前の中学と同じ出身の多々井臯月だあああああ！！」

「多々井……ってあの多々井かああ！？いくらなんでも変わり過ぎだろ！？だつて昔まであんなにふと……」

「ちえすとおおおおお！！」

「ぶふおあ！？」

男子が言いきる前に多々井臯月と名乗った女子が跳び膝蹴りを男子の顔面にお見舞いしていた。

「つて言うかチェストって胸部の事よ…おもいつきし顔面じゃない」「え！？ツツコムとこそこの！？」

加奈がどこかズレたツツコミをし、それを亜由美がツツコミ返した。

因みにこの残虐ファイト（亜由美・加奈命名）はあと30分近く続いたという……。

皐月「いやあ、あのときはスッキリした〜」 満面の笑み

加奈「一体何があったの結局？私達には全然教えてくれないし……」

皐月「乙女には一つや二つの秘密くらいあるもんだぜ？」

加奈「乙女で……」

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「皆に感想、待ってるぜ〜！」

第十二話：「基点」との邂逅と人形（前書き）

いやあ、今回は難しかった（C）（- - -）
特にあとがきラジオ：ヤバい、そろそろネタが尽きてきた……。

歩「だから言ったのに……」

サーセン……m（- - -）m（- - -）

第十二話：「基点」との邂逅と人形

デージーエントが戦闘を離脱する数分前……

「あゆむうゝ、どこおゝ？」

亜由美は絶賛路頭に迷っていた。

あの後、人目を避ける様にその場から離れ、歩を追う為に路地裏に入ったは良いものの、完全に見失ってしまったのだ。

路地裏は意外と入り組んだ構造になっており、もはやどう走って来たか分からない有様だ。

その目には涙がたまっており、家に置いてかれた一羽のウサギの様な可愛さと寂しさを醸し出している。

そして、そんな小動物を放っておく肉食動物などそうそういないだろう。

「お、いたぜ！さつき騒いでた女！」

「ヘツヘツへ…お嬢ちゃん迷子かい？だったらオレ達が案内してやるうか？」

後ろを振り向くとそこはいかにも不良ですと言っている様な格好をした男二人組がいた。

どうやらこの二人は先程の亜由美と歩のやり取りを見ていて、その後を着けて来た様である。

「さつきの男捜してんだろおゝ？だったら、オレ達も手伝ってやるよ」

「イヤイヤ、そんな事より昔の男の事なんて忘れてよゝ俺達と遊ぼうぜ〜」

「いや、だからあの人は彼氏とかじゃ……」

不良二人組は時代遅れな感じのする古典的なナンパを仕掛けて来た。流石2002年だななどと暢気な事を考えていると、すぐ近くに捨ててあった割れたガラスから人が飛び出して来た。

「キヤツ!？」

「うおっ!？」

「何だあ!？」

三者三様に驚きその人物を見ると、どうも男性の様だった。歩より少し長い感じの茶髪で、その顔はかなり整っているのだが、今は苦しげに歪めている。如何やら気を失っている様で、時折「う……」と呻いている。亜由美は自分でも無意識の内に、この男性に声を掛けていた。

「え、えつとお……だ、大丈夫ですか？」

「オ、オイ……今のは何……」

「ツールライド……リセット!」

「へ?」

「って誰だデメエ!？」

突然聞き覚えのある電子音声が聞こえ、不良二人組の方を振り向くと、そこには歩が何時もの死んだ魚の目で立っており、腰には何故かディーゼントドライバーを着けていた。

「今見た事は忘れてもらおうよ」

「おい、どういう事…へブ!？」
「何してヴァ!？」

不良二人組が言いきる前に歩が二人の頭を鷲掴みにすると、まるで糸の切れた人形のようにバタリと倒れてしまった。

「エ!?!何やったの!?!」

「何も問題はないよ。今の記憶を消させてもらったただだから」

「そ、そうなんだ……。ところで歩、今この人がガラスから出て来たんだけど、『歪み』と関係あるの？」

「それについては一旦この場から離れてからにしようか。この世界の移住先に行くよ」

そう答えると、歩は倒れた男性を担いでその場を後にする様なので、その後続いた。

「う、うううん……」

真司は呻き声を上げながら、ゆっくりと瞼を開けた。その目に最初に映って来たのはどこか見覚えのある天井だった。

視線を横にずらしてみると、これまた見覚えのある玄関が見に入った。

「あれ?ここ…俺のマンション?でも、確か追い出されたんじゃない…」

「…」
「今は僕が使わせてもらってるよ」

突然の声に、痛む身体を何とか起き上がらせてそちらをみると、そこには青年と少女の二人組がいた。青年の方は自分より少し短めの黒髪で、その目は虚ろでまるで死人の様だった。

対して少女の方は長い黒髪をポニーテールにしており、この辺りでは見かけない高校の制服を着用していた。何処となく青年と似ているが、その目は青年とは正反対で好奇心旺盛と言ったところだろうか。

「ねえ歩、起きたんだからそろそろ説明してよ」

「それもそうだね」

「あ、あんた達は一体……」

二人は何やら話している様だが、真司にはその内容が全く掴めない。すると青年の方が軽く愛想笑いをしながら抑揚のない淡々とした口調で衝撃的な発言を口にした。

「そんなに警戒しなくていいよ。仮面ライダー龍騎改め、仮面ライダーナイト・城戸真司君」

「何でそれを……!?まさか、あんたもライダー!?!」

「ええ!?!この人が龍騎なの!?!でも改めナイトってどういう事!?!」

真司は何故、自分が仮面ライダーである事をこの目の前の青年が知っているのか驚くが、もしかしたらあの時戦っていたライダーの中に混じっていたのではないかと勘繰った。もしそうだとしたら、この青年は今すぐにも自分を殺しに掛かるだろうがそんな気配は微塵も感じられない。

少女の方も何やら騒いでいる様だが、龍騎の事は知っている様だが、自分が龍騎であった事は知らなかった様だ。

「二人とも落ち着いて。これから一つずつ質問に答えて行くから」
青年は騒ぐ二人を宥め、質問に答えて行く様だった。

「じゃ、じゃあ…まず俺からの質問だ。あんた達は一体誰なんだ？
そっちの娘はライダーじゃないみたいだけど、あんたはライダーな
んだろ？」

「まあ、その通りだね。僕の名前は須藤歩。仮面ライダーディージェ
ント。で、そっちの娘は須藤亜由美。僕の妹だよ」

「え、ええーと…は、初めまして」

真司の質問に青年…須藤歩は簡潔に答えた。しかし、その喋り方は
独特で、台詞だけなら友好的に感じるのだが、口調に抑揚がなく淡
々としている為、感情の入っていない…例えるなら只の人形の様だ
った。

そしてもう一方の少女は辿々しくはあるものの、きちんと挨拶をし
て来た。

兄妹でもここまで差が出るものなのかと思いつつ、もう一つの質問
をした。

「やっぱり、お前も俺と戦うつもりなのか？それとも、俺と一緒に
戦ってくれるのか？」

「いや、どちらでもないよ」

『へっ。』

この答えには少女…須藤亜由美も予想外だったようで自分と同じよ
うに思わず呆けた声が出てしまっていた。

「何で？この世界の『歪み』を解決するのが目的なんじゃないの？」

「確かにそうだけど、彼の言っている事はあくまでこの世界の事象だからね。この世界の事象には一切関わるつもりはないよ」

「なあ、一体何の話をしてんだ？」

「この世界」だの「歪み」だの訳の分からない話をする二人に問いかけると、歩が頭をガリガリ掻きながら、「ん〜そうだね〜」などと言いながら何から話そうか考え始めた。

やがて、考えが纏まったのか、頭を掻くのをやめると、その虚ろな目で真司を見つめた。

何というか、まるで死体と目が合ってしまったような感覚だ。正直怖い……。

「じゃあ話すけど、信じてもらえないかもしれないよ？」

「信じるよ。少なくとも俺は」

そう答えると歩は「そうか」と呟いてから話し始めた。この世界……いや、「ライダーサークル」の融合崩壊の危機を……。

「じゃあ、あんた達は世界を守るために旅している宇宙人ってわけだ」

「まあ、大体そんな感じだね」

「何だろう…：すごく、デジャブが……」

真司の微妙にズレた結論に亜由美は慨視感を覚えつつ、頭を抱えていた。と言うか、それでいいのだろうか……。。

「それで、その『歪み』ってのは一体何なんだ？」

「それは僕にも分からない。でも、この世界に『歪み』があるのは確かだよ。『セカンド・オリジナル』なら、尚更ね」

「『セカンド・オリジナル』？」

亜由美と真司の声がまたハモツた。今まで聞いた事のない単語だ。

「『オリジナル』とほぼ同じ歴史を辿っている『リイマジネーション』の事だよ。僕はその『オリジナル』の情報を持つてるから、この世界がその歴史から大きく外れている事が分かる」

「つまり、本来だったら起きる筈じゃなかった事が起きてるってことね？」

「そう言う事だね」

「……なあ、聞いてもいいか？」

歩が簡潔に話し、亜由美がそれを自分なりに解釈していると、真司が恐る恐ると言った感じで訊ねて来た。

「その…『オリジナル』だったら、最後、どうなったんだ？ 戦いは止められたのか？ それとも、今もずっと戦っているのか？」

真司は「オリジナル」がディケイドによって消滅している事を知らない。「オリジナル」が消滅したからこそ、今の無数の「リイマジネーション」が存在するのだ。その事実を伝えたら、真司はどう思うのだろうか……。

そんな事を考えていると、歩が口を開いた。その質問に対する歩の答えは……

「それは教えられない。あくまでその世界はこの世界の、もしこうなっていたらどうなったかと言う“IFの世界”。この世界の問題

は、この世界の人間が解決しなくちゃいけない。そこに“IFの世界”の情報を与えれば、そこに新たな『歪み』が生まれてしまう。だから教えられない」

そう抑揚のない口調で歩は答えると「話は終わりだ」と言わんばかりに、玄関の方へ歩いて行った。

(本当は、“教えられない”んじゃないくて、“教えたくない”んじゃないの?)

亜由美はそんな考えが過ぎった。

亜由美はまだ歩の事を全部知っているわけではない。

ただしばらく一緒に行動しただけで分かる。歩は本当はとても優しく、でもそれを素直に表に出せないだけなんだと。

皐月が歩の事を“引っ込み思案なだけの良いヤツ”と言っていただけはある。

きつと歩は誰も傷つけたくないのだろう。

「何処行くの?」

「夕飯の支度をするから、材料を買ってくる。真司君はここにいた方がよいよ。多分、他のライダー達が探してるだろうからね」

「お、おう…分かった……」

亜由美の質問に簡潔に答え、真司に軽く警告をすると、歩はこのマンションの一室を後にした。

歩は繁華街に向かう人気の少ない道中、突然立ち止まると、ボソリと呟いた。

「…そろそろ姿を現したらどうですか？神童さん」

そう呟いた途端、歩の目の前に次元断裂が現れ、その中から黒い革ジャンを着た三十代後半と思われる男・神童が姿を現した。

神童は歩を忌々しげに睨み付けると吐き捨てる様な口調で話しかけて来た。

「チツ、次元移動能力だけは相当高い様だな。Dシリーズ適合者だからってわけじゃなさそうだが……」

「この能力は元からです。ちゃんと顔を合わせるのとは今回が初めてですね」

「初めまして」と歩が言いながらお辞儀をすると、神童は更に憎たらしそうに顔を歪めた。

「……まるで人形みてえなヤツだな。感情が全く入っちゃいねえ」

「よく言われます。それで、僕に何の用ですか？これから夕飯の買い出しに行かないといけないんですけど……」

「ウルセエ、テメエの事情なんざ知ったこつちやねえんだよ」

歩の言葉を遮って歳不相応な乱暴な言葉遣いで罵言を吐くと、更に言葉を続けた。

「この世界に少しばかり細工をさせてもらった。そいつで精々苦しみな」

「それだけですか？でもそれだったら自分でやればいいじゃないで

すか。何故態々そんな危険な事を……」

「ウルセエな、俺は世界に直接干渉できねえんだよ。それに、テメエらDシリーズさえ壊せりゃ世界がどうなるうが知ったこっちゃねえよ」

「……その為に『ノンポジション』の世界に脅威を連れて来たんですか？」

歩はその言葉を聞くと、拳を握りしめながら言い放った。

神童の言っている事が確かなら、世界が崩壊する事を分かった上で、別の世界の脅威を送り込んだ事になる。

「ああそうだよ。テメエらDシリーズの所為で俺の世界は完全に破壊されちまつたんだ。だからそのお返しにテメエらDシリーズは俺が完全に破壊してやるよ。」

「……もし世界を壊すんだったら、その前に貴方を壊します」

「ハッ！まさに悪魔だな、流石はディケイドの強化版バックアップなだけはあるぜ」

「今は『ライドカードシステム』も殆ど使えませんがね」

「……チツ、人形が」

神童の軽い挑発に、歩は何でもない事のように淡々と返した。

その反応に神童は不快気に舌打ちすると、次元断裂を再び展開してその中に入りながら続ける。

「一つ教えといてやる。テメエらを使って世界を復活させようとしている馬鹿がいるらしいが、そんなんじゃ世界は復活しねえ。一度壊れたらもう二度と戻らねえんだよ」

「世界を復活……？一体何の事ですか？」

「何？……ハッ！そう言う事か！やっぱお前はタダの人形だな！！」

神童は「バハハハハ！」と豪快に笑いながら次元断裂空間を通じてこの世界から消えた。

「世界を復活……『オリジナル』は自分の世界を復活させようとしている……？でも、それはこの『Dプロジェクト』と一切関係ないはず……」

歩はブツブツと呟きながら繁華街へ歩いて行った。

『Dプロジェクト』はあくまで世界の融合を円滑にさせるための計画だ。例えば世界を一つに融合したとしても、『オリジナル』の世界が復活するわけではない。

何故なら融合すれば同じライダーが複数存在する事になるからだ。それは最早『オリジナル』のいた世界とはいえない。

「まあ、その内『オリジナル』に聞こうかな」

そう考えを区切ると、歩は丁度目の前に見えたスーパーの中に入っていた。

「どうだ、見つかったか？」

「いえ、まだ見つかりません」

「何処だ…あの青黒は何処に行ったあああ……！」

「落ち着けて犯罪者、その内見つかるさ。それにしてもあの青黒、相当好かれちゃったねえ……」

その頃、ミラーワールドではナイトと謎の青黒いライダーを、オーデインを始めとしたライダー達が探していた。

オーデインがタイガに訊ねるが未だ芳しくなく、王蛇は血眼になってナイトよりもあの謎のライダーを探している様だが、中々居場所が攫めずかなり気が立っているようだった。それを宥めながらゾルダはこの犯罪者の標的にされた謎のライダーに少しばかり同情していた。

「そろそろ日が暮れますね…今日はここまでにして体力を温存させた方がいいのではないでしょうか？」

「それもそうね。今日はもうお風呂に入って寝たいわ。こう何度も現実とミラーワールドを行ったり来たりしてたら身が持たないわ」

タイガがそう提案すると、ファムもそれに同意する様にぼやいた。

この世界のライダーはミラーワールドから出ると、強制的に変身が解除されてしまう。

それは現実世界とミラーワールドの環境の違いによる、身体の負担を軽くする為のものだ。必要のない場所で宇宙服を着ているのと同じ事で、無駄にそれを着けていれば体力を消耗していくだけである。

「では、そうするとしよう。お前達は現実世界に帰り、体力の回復に努める。私も現実世界に戻る」

そうオーデインが号令を掛けると、ライダー達は散り散りに現実世界へ帰っていった。

そしてオーデインは隣にいるリュウガにも声を掛けた。

「お前はそのまま搜索を続ける。ミラーモンスターでもあるお前なら、まだ動けるだろう」

「……ああ、分かった」

そう言うとリュウガもこの場を後にした。

そしてオーデインは自分の現実世界へ帰る為の鏡へと歩み寄りながら誰にでも無く呟いた。

「まさか神童の与えた力でミラーモンスターをライダーに変えるとはな……だがそのおかげで我々の中でも最強の力を持っている。神崎もさぞ驚いているだろう……」

やがてオーデインは鏡の中へ吸い込まれて行くようにミラーワールドから消えた。

第十二話：「基点」との邂逅と人形（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

真司「真司の！」

加奈・皐月・真司「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「さあ今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「今回はゲストとして真司のアニキにも来てもらってるぜ〜！」

真司「よろしく〜!!！」

加奈「さて、それじゃあ今回のお題行ってみるわよ！それじゃあ作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（・・・） 今書いている外伝について

真司「外伝？何かやんのか？」

皐月「ああ、何でも第十話のところで歩が言ってた『最初に行った世界』の話を書こうかと思ってるらしいぜ」

加奈「でもその話の基になる原作をあまり見てなくて二次創作で大体の流れを掴んでるくらいらしいわよ」

真司「それって書けるのか？」

カンペ（正直微妙です（へへ〜））

皐月「それでその原作ってのが……」

加奈「ええ…アレなのよね……」

真司「へ？アレって何だ？」

加奈・皐月「リ〇カルな〇は（しかも第三部）」

真司「うわぁ…この小説サイトじゃ、結構有名どころ……」

加奈「まあやるかどうかは読者の感想次第だそうよ」

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「感想と！」

真司「質問も待ってるぜー！」

第十三話：食卓戦争のち思わぬ協力者（前書き）

さあこのタイトルにある思わぬ協力者とは一体誰なんでしょうか！
？（・・・）

分かったアナタは今日は良い事があるかも！？（適当です）
今回はかなり長いですがそれではどうぞ！！（・・・）

第十三話：食卓戦争のち思わぬ協力者

「ウマツ！？お前の作ったチャーハンウマイな！」

「それはどうも」

「それにしても、二人とも料理上手いね……」

現在、亜由美達は真司が元居たマンションの一室（今は歩の移住先）で夕食を取っていた。

そこで歩が作ったチャーハンと、真司が作った餃子を食べているのだが、どちらもかなりの絶品だった。

一応、歩が料理を作れる事はもと居た世界で尾行した時に大体察しはついていたが、まさかここまで上手いとは思ひもしなかった。しかも真司まで上手いとは……女性としての尊厳を失いそうだった。

「そついや、何でお前、俺が餃子作れる事知ってたんだ？」

「さつきも言ったと思うけど、僕は『オリジナル』……つまり並行世界の君の情報がある程度持っている。その情報の中に『餃子を作る腕は一品』っていう情報が入っていたからね。それで一度食べてみたいと思ってたんだ」

「やっぱもう一人の俺も、餃子作るの上手いんだな……」

「って言うか、まず歩がそんなに食通だとは思わなかったんだけど……」

亜由美の言う通り、既に歩は真司の作った餃子の大半を食べていた。その顔でグルメとか……違和感あり過ぎなんだけど……。

「人を見かけで判断しちゃいけないよ」

「ってまた人の心を勝手に読むなあああ……！」

「あんたら仲良いなあ……。……ってアレ？あんたら兄妹なんじゃない

のか？何か亜由美ちゃん、さつき知ったみたいなさ言ってたけど……」

「え？え〜とお……それはあ〜……」

「ああ、確かに兄妹とは言ってたけど、本当に兄妹ってわけじゃないよ。彼女は僕の異次元同位体……つまり並行世界のもう一人の僕なんだよ。でもそんな事言っても変な目で見られるだけだから、当たり前触りのない兄妹って事にしてるんだよ」

「ってそんなアツサリとバラしちゃいます！？それから歩！さつきから真司さんの餃子取り過ぎ！私にも回してよ〜！！」

歩は説明しながらも、真司の作った餃子の入った大皿を現在進行形で絶賛独占中だった。

それに対して亜由美がとうとう強行手段に入り、餃子を奪取しようとするが、亜由美が箸で掴んだ最後の餃子を歩も箸で無表情のまま掴み、そのまま両者睨み合い、拮抗状態に陥った。

「あ〜、良かったらおかわり作ろうか？明日の分の作り置きもあるし……」

「ああ、お願いね」

「って歩、まだ食べる気ですか！？よくそんなに食べて太りませんか！？」

「僕は太りにくい体質なんで」

「この乙女の敵い〜！！」

仲の良い兄妹ゲンカをBGMに真司は再びキッチンに立ち、餃子を焼き始めた。

「それで、これからどうするかなんだけど、まずはそれぞれのライ

ダーにコンタクトを取ろうと思うんだ」

夕食を食べ終え、更に食器洗いも済ませた頃（因みに食器洗いは亜由美が担当だった）、歩がそう淡々と話を切り出した。

その理由としては、まずデーゼントである歩がライダー達と交戦する事により、デーゼントドライバーから送られてくるそのライダーの情報と照らし合わせて、何処に『歪み』があるか調べるとの事だ。

『セカンド・オリジナル』であるこの世界であれば、『オリジナル』とほぼ同じ歴史を辿っているので、『歪み』があればすぐに分かるらしい。

「なあ、それって俺も来た方が良いのか？」

「そうだね。流石に僕でも多対一で挑まれたらかなり厳しいからね。少しでも戦力が多いに越したことはないよ」

真司の質問に歩はアツサリと肯定すると、更に続けた。

「詳しい作戦についてはまたその時にでも話すよ」

「それって単に決まって無いんじゃないの？」

「そうとも言う」

「そんなにサラッと認めないください！悲しくなってきました！！」

「でも、無駄に作戦が合っても邪魔になるだけだしね。相手がどういう手を使ってくるかも分からないし」

「まあ、それもそうだけど……」

歩の曖昧な回答に亜由美は茶々を入れると、歩は何も隠すことなくハッキリと無計画と言ってしまう。

そんな想定外の返答に思わずツッコミを入れてしまいが、正論を言われて言い返せなくなってしまった。

そこで真司が手を上げてある提案をしてきた。

「なあ、こう言うのはどうかな？ライダーの何人かを仲間に引き入れるとか」

『……………』

「あ、あれ？ダメだったか？」

真司の言っている事は確かに戦力の増加に繋がるが、この『ライダーバトル』に参加している者たちは自分の私利私欲のために戦っている者が殆どだ。そんなライダー達が今は戦うことを決めているが今日まで『ライダーバトル』を止めようとしていた危険分子に付くとは到底思えない。

「あの～真司さんってまだ『ライダーバトル』を止めようとしてるとかって思われてるんじゃない？」

「それに自分から『ライダーバトル』を止めないと宣言しても信じてもらえないだろうしね。少なくともあの中に自分の“願い”を放棄してまでこちら側に付くような人間がいるとは……………」

「いや、ここにいますよ」

『！？』

声の聞こえた方向を三人が振り向くと、玄関の前で立っている深緑色のビジネススーツを着たインテリ風の男が立っていた。その男はどこかキザな印象の口調で更に続けた。

「あのねえ、何そんなに驚いちゃってんの？ちよつと前まで住んだ家を調べるなんて、このスーパー弁護士・北岡秀一きたおかひでゆいいちにとっては朝飯前なの」

「き、北岡さん！？」

「え、誰！？」

「少なくとも、仮面ライダーであることは間違いないね」

「ご明答。アンタがああ青黒？そんなに強そうには見えないねえ」

歩の推察に簡単に答えながらそのインテリ風の男：北岡は懐からある物を取り出した。

その取り出された物は緑色のカードデッキで、中央には牛の意匠が施されている。

それはこの世界のライダーの証であるカードデッキだ。

歩は立ち上がって無表情のまま北岡に近づいて行った。

「お？何、やる気かい？悪いけどそんなつもりはこっちには無いんだよねえ」

「いえ、そうじゃありません。少しそのデッキを触らせてもらっていいですか？」

「へ？」

北岡が返事を返す前に、歩がそのカードデッキに一瞬だけ軽く指先で触れてからそのまま離れると、衝撃的な発言をした。

「仮面ライダーゾルダ、装着者は北岡秀一……“願い”は不老不死になつて自分の不治の病を治す事……ですな？」

「な、何でそれ知ってんの！？その事はウチの秘書しか知らない筈なのに……！？」

「僕はそのライダーにコンタクトを取ればその人物の事は大体分かるんです。それで、何故僕達に協力しよう？そちら側が有利な筈ですが……」

淡々と感情の籠っていない声で答える歩に、一瞬僅かながら恐怖を覚えた北岡だが、気を取り直す為に軽く咳払いをすると、その理由

を話し出した。

「そりゃあ、君みたいに強いライダーがいるからに決まってるでしょ？それに君、何か“願い”を叶える為に『ライダーバトル』に参加してるわけでもなさそうだしね」

北岡の言い分だところ言う事だ。

他のライダー達とはあくまで「ライダーバトル」を止めようとするナイトを倒す為だけに徒党を組んでいるだけで、ナイトを倒せばその後は敵同士になる。

それならば、あの王蛇をも圧倒する實力を持ち、尚且つ「ライダーバトル」に興味のないディージェントに付いて他のライダーを減らしてもらった方が効率が良いとの事だった。

いわゆる所謂、“漁夫の利”である。

「オーデインや王蛇なんかと戦うのは骨が折れるからねえ」と付け加えながら説明する北岡に、歩は「そうですか」と素っ気なく返し、別の質問を始めた。

「確かに僕は“願い”なんて興味ありませんし、あくまでイレギュラーの排除が目的です。そのイレギュラーがライダー達の中に紛れ込んでいるのは確かなんですけど、貴方は違うようですね。先程のコンタクトで分かりました」

「イレギュラー？そんなのがいるの？」

「ハイ。そのイレギュラーの所為で大変な事になるかもしれないんです。何か心当たりはありませんか？」

二人の問答を後ろから見ながら亜由美と真司は頭を抱えていた。

北岡の突然の協力やら不治の病やらは勿論だし、歩の順応力の高さ

の所為で話に上手く付いて行けてないのだ。

そんな二人に気付かず、北岡は何か心当たりがないか考えている様だが、やがて何か思い出したのか答え始めた。

「そう言えば、あの黒い龍騎は今日初めて見たなあ」

「黒い龍騎…ですか？」

「そ。ライダーってのは皆個人的な格好してんのに、あのライダーだけはまるで龍騎の模造品みたいな感じだったから…もしかしてそいつがイレギュラーってヤツじゃないの？」

「成程…そうですね…」

そう呟くと歩は後ろで未だ後ろで頭を抱えている二人の方を振り向き、ついさっき思い付いたであろう作戦を声高らかに宣言した。但し、抑揚のない淡々とした口調で……。

「よし、それじゃあまずは黒い龍騎から探って行こうか」

「いや、その口調でその台詞はどうなんだよ……」

「多分、あれでも元氣一杯に言ってるつもりなんだと思いますよ？」

歩の妙なテンションに二人は溜め息を吐きながら今後の展開に一抹の不安を覚えていた。

因みにその後、北岡が「今日の終電終わっちゃったから泊めて。それも最高級のベッドで」などと太ましい事この上ない態度でのたまってきたが、それを亜由美と真司が全力で拒否し、北岡は近くのホテルに泊まる事になったという。

翌朝……

真司と歩は身支度を済ませると、北岡と事前に話しておいた集場所に向かう事になった。

因みに亜由美は留守番だ。その理由は……

「それじゃあ行ってくるけど、あまり外に出ない方がよいよ。関係者と分かったら人質にしようとするライダーが出てくるかもしれないからね」

「家から出る前の開口一番がそれですか!？」

「いきなり物騒だな歩は!？」

と言つ理由からだ。

軽い漫才(?)が入ったものの、二人はマンションを後にした。

「それにしても大丈夫なのか？」

「何が？」

「いや、何がって…これから北岡さんと合流するんだろ?そこで他のライダーが待ち伏せしてたらどうするんだよ?」

「その心配はないよ」

「どうして?」

真司は罨を張っているかもしれないと警戒していたが、歩は一切気にしていない様子だった。

歩はその理由を淡々と答えて行つた。

「まず集場所はどこだったか覚えてるよね?」

「ああ、確か今結構人気の喫茶店だろ?それがどうしたんだ?」

「人気があると言つ事は人の目が多いという事。そして仮面ライダー

「の存在は公おおやけに曝してはならないという暗黙のルールがある。つまり一般人の多い場所でライダーに変身して襲い掛かって来ると言う事はまずないという事だよ」

「な、なるほど……」

などと話し合いながら歩いていると目的の喫茶店に辿りついた。窓側の席には既に北岡が座っており、こちらに気付いたのかキザッたらしく手を振っていた。正直なんかムカつく素振りだった。

店内に入り、店員に待ち合せの旨を伝えると北岡の席まで案内された。

「やあ、待ってたよ。別に畏とかは張ってないからそんなに警戒しなくて良いよ」

「本当だろうな……?」

「間違いないね。近くにライダーの気配はしないからね」

未だに警戒する真司だったが、歩はそんな気は全くない様だった。

「へえ、あんまり警戒してないんだねえ。俺の予想だと君には結構怪しまれてると思ってたのに……」

「こんな裏切り行為に近いのを覚悟の上で近づいてきたという事は、少なくとも協力すると言うのは本当の様ですしね」

「成程、かなり頭が回るみたいだね。やっぱりこっちに付いて正解だったかな」

席に付きながら歩は淡々と説明するが真司はどうにも腑に落ちなかった。

（でもコイツ…蓮を殺そうとしてたんだよな……そんな簡単に信用

しちまっつていいのか?)

前のナイト装着者・秋山蓮は自分と一緒にいた為に裏切り者として殺された。

その中にはこの目の前の男も含まれ、当の本人は何の罪悪感もなくキザッたらしくコーヒを飲んでいる。

そんな事を思っていると、「さて…と」と言いながらコーヒーカーブから口を離し、話を切り出した。

内容はあの黒い龍騎の事の様だ。

「今朝軽くナイトと青黒の搜索について他のライダー達と集会を開いてただけど、やっぱりあの黒い龍騎だけは素性が掴めなかつたよ。他の奴らだつたらちゃんの変身者の顔は分かるのにそいつだけは何も分からなかつたし、他の奴らも知らないみたいだつたね」

「そうですか」

「何?その反応?もうちょっと愛想良くしようとか思わないわけ?」

「僕は感情表現が希薄なんでこれくらいの反応しかできないんです。それで、他に分かつた事はありますか?」

歩の素っ気ない態度に北岡は眉に皺を寄せるが、すぐに諦めてもう一つ判明した事を述べた。

「まあ、いいけどね。それで後分かつた事なんだけど、どうもその黒い龍騎はオーデインと一緒にいる事が多いみたいだよ?」

「オーデイン?どんなライダーですかそれは?」

「アレ?知らないの?驚みたいな金ピカのライダーだよ。そしてそのオーデインってのがリーダー格なわけ」

「リーダー格……」

そう歩が眩くと、何やらぶつぶつと独り言を呟き始めた。
「細工」だの「神童」などと言った単語が聞こえてきたが、一体何を考えているのか分からなかった。

だが、そんな歩の思案も中断せざるを得ない事態が起きてしまった。

キイイイイイン……

『ハツハアツ！見つけたぞ北岡あ！城戸お！そんでそっちのヤツは青黒だなあ！？会いたかったぜえええ！！』

「な！？今の声って……！」

「どうやら、勘付かれていたみたいですね……！」

「あつちやあ……まさか、こんな堂々と奇襲を掛けてくるとはね。コイツの事舐めてたよ」

突如耳鳴りと狂気を孕んだ叫びが聞こえ、その音が聞こえて来たであろう外……否、窓ガラスを見ると、窓ガラスの鏡面化した部分に王蛇と紫色の巨大なコブラ型ミラーモンスター・ベノスネーカーがこちらを見ていた。

ベノスネーカーは王蛇の契約モンスターだ。そしてそのミラーモンスターが強ければ強いほど、ライダーも強くなる。

王蛇の実力からして、このベノスネーカーはかなり上位のミラーモンスターだ。

『いいからお前らもこっちに来い！楽しい祭りの始まりだあああああ
ああ……！』

そう叫ぶと同時にベノスネーカーが真司たちをミラーワールドへ引き摺り込もうとガラスの中から飛び出してきた。

その一連の状況を見てしまった客や店員はパニック状態になり、店内は騒然となってしまう。

「でもお断りします」

『ジャオオオオ！？』

『あ あ？』

「な、何だこれ！？」

「これ、ひよつとしてアンタがやったの？本当に人間？」

「一応これでも人間です」

“一応”って何だよ“一応”って！？」

しかし歩が感情の籠っていない声で呟くと、真司達とベノスニーカーの間にドロリと灰色に濁った板の様な物が現れ、ベノスニーカーはその板に思いつきりぶつかってしまった。

歩の存在が最早、人間かどうか怪しむレベルになってしまったが……。

『チツ！俺をイライラさせるなあああ！！』

そう叫びながらベノスニーカーを一度引き戻すとそのまま勢いを付けて灰色の板に突っ込ませて来た。すると灰色の板に罅が入り始める。

「拙ますいですね。次元干渉の演算がこちら（現実世界）とあちら（三ライワールド）で違うからこのままだと防ぎきれません」

「こりゃあ早く逃げた方が良いね」

「お、おい！ここにいる人達はどうするんだよ！？」

真司の言う通り、ここには未だパニックに陥った人達がいる。

相手はあの浅倉威だ。下手をすればここにいる人達にも襲い掛かっ

て来るかもしれない。しかもこうも切羽詰まった状況では避難させる事も難しい。

「ハア…分かったよ。協力するって言っちゃったしね……。それじゃあお願いしますよ、先・生？」

「先生って何ですか？それにあまり期待しないでくださいよ？」

「え？え？？」

すると北岡が軽く溜め息を吐きながら懐からカードデッキを取り出した。

それに倣^{なら}う様に、歩も手元に出した小さな灰色の板からこの世界のライダーの物とは違うバツクルと、一枚のカードを取り出した。

突然の二人の戦闘態勢に付いて行けなくなってしまう真司だが、二人に声を掛けられてようやく付いて来れた。

「ちょっと、言い出した本人が何ボケつとしちゃってんの？コイツ倒すんでしょ？」

「このまま逃げれば被害が広がる一方だからね。黒い龍騎の前に、王蛇を倒すよ？」

「……ッ！お、おう！！！」

真司と北岡が灰色の板越しに王蛇のいる窓ガラスにデッキを向けてVバツクルを出現させて装着し、歩がバツクルを腹部に宛がうとバツクルから帯が伸びて腰に巻き付き、ベルトを形成させると、バツクルの持ち手部分を引っ張った。

「僕が変身したらこの次元断裂も壊れるから気を付け下さいね」

「ふ〜ん、次元断裂って言うんだね、この壁。ま、どうでもいいけど」

（蓮…頼む、一緒に戦ってくれ！！）

『変身（！！）』

「カメンライド…ディージェント！」

真司はデッキに想いを込めながら共に闘う二人と言い所にライダーに変身した。

友の答えを、見つける為に……。

第十三話：食卓戦争のち思わぬ協力者（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） 今回のネタ話

加奈「ネタ話って事はまたあのDリーダーを使うわけね」

皐月「持って来たぜ〜。それじゃあ前はアタシがやったから今回は加奈だな」

加奈「それじゃあ行くわよ！セイヤアー!!」 カードをスラッシュした

皐月「？何かオーズみたいになってる!？」

「エピソードライド…ミニストーリー・マナー！」

「そう言えばさあ、歩」

「何だい？」

現在、夕食を終えた亜由美は食器を洗いながら後ろで寛ゆるいでいる歩に話しかけていた。

因みに歩は真司とババ抜きをしている。ここまで真司の前戦全敗で

ある。

「よし！これだ！ってああ！？またババかよ！！」

「步って2年間も世界を渡ってるんだよね？じゃあお金とかがどうしてるの？」

亜由美の質問も尤もだ。一体歩はどこから収入を得ているのだろうか？

この話には真司も喰い付いて来たようで、目の前の歩を凝視している。

「確かに、それって気になるな。どうしてたんだ？」

「それなら簡単だよ。この世界に最初に来た時に話したよね？“この世界で何らかの役割を与えられる”って」

「うん、それがどうしたの？」

「その時にお金も入って来るんだよ。これくらい」

「どれどれ……って、え……」

「どうしたんですか、真司さん？」

亜由美も気になり、一旦食器洗いを中断してそちらを振り向くと、歩の財布を持って固まっている真司が目に入った。更に近づいてその歩の財布の中を見ると……

「……………え」

亜由美も固まった。

歩の財布の中にはなんと厚さが2センチはありそんな札束がギッシリと詰まっていたのだ。

「どうしたの、二人とも？」

「…歩、お前亜由美ちゃんと食器洗い代われ」

「え？何で？」

『いいから代われこの死んだ魚ああああ…!!』

二人がなぜ怒ったのかも分からず歩は渋々（内面で）食器洗いをする事になったのであった。

因みにその間二人は楽しくババ抜きをしましたとさ

加奈「何というご都合主義……」

皐月「働かざる者食うべからず」だな」

カンペ（皆さんもちゃんと働いて稼ぎましょうね！

シ）本編書いてる

（ ）（ ）ノ

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「皆からの感想・質問待ってるぜ〜！」

第十四話：V S 王蛇（前書き）

最初のシーンが…もう自分で書いてて訳分かんなくなっ
て来たぜ…

…（@ @…）

伝わるのかこれ…？

第十四話：VS王蛇

ミラーワールドに存在する隔離空間……

この隔離空間はミラーワールドであるにも関わらず、どの鏡からも入る事の出来ない空間。

ここに入る事が出来るのは、ミラーワールドの原理を理解しているこの世界のライダーシステムを作った神崎士朗かんざきしろうとその配下であるオーダーインだけだ。

暗闇の中である筈なのにそこに存在する無数の鏡が視認でき、その鏡は無限に広がっている。

そんな空間でオーダーインと薄茶色のロングコートを着た無表情の男・神崎はその無数にある内の一枚に映し出されているライダー・リュウガを見ていた。

仮面ライダーリュウガ…もう一人の龍騎とも呼べる存在で、神童と言う男がミラーワールドに存在するもう一人の「城戸真司」に存在確立の演算処置を施した結果、生まれたライダーだ。

「ふむ、確かにこのイレギュラーの力は凄まじいな」

「そうであろう。この力があればお前の望むものもすぐに手に入るであろう」

神崎の目的は神崎の妹である神崎優衣かんざきゆういに新たな命を与える事だ。彼女は十年前前に事故で死んでいる。それをミラーワールドに存在する神崎優衣と融合させた事によって今は何とか生き返らせる事が出来たが、それも一時的なものであり彼女の命の灯火が消えるのも時間の問題だろう。

神崎は人の欲望をミラーワールドへ溜め込む事によってその欲望をミラーワールドに最後に残った人間の好きな形に変えて実現させる事が出来る事を発見した。

そしてその欲望の塊・“願い”を作り出す為にミラーワールドに人間を介入させるライダーシステムを開発し、人が最も欲望を再現させる方法である“戦闘”をさせる為に「ライダーバトル」を行わせた。

その“願い”を利用し、神崎優衣に新たな命を与えようとしたのだ。

「しかし、これでは駄目だ」

「何？」

「この『ライダーバトル』はそのライダー達の強い欲望によって成り立っている。それも純粹な……。その中に歪んだ欲望を加えてはこの『ライダーバトル』は成り立たない」

「歪んだ欲望…だと？」

神崎には判る。あのリュウガがこの世界の法則とは別のベクトルで存在している事が。

そんな異端分子をこの世界に放り込めばまるで紙に水を注いだように世界の構成力が非常に脆くなり、やがて崩壊するだろう。

「そうだ。しかもこの歪んだ欲望はミラーワールドどころか現実世界までも歪めてしまう程の異端分子だ。神童と言う男もそれを解っていてリュウガに存在確立の力を与えたのだろう」

オーデインは神崎のその言葉に驚愕した。善かれと思ってやったことがこうも裏目に出るとは思わなかったのだ。

「だが…その異端分子がなければ別の世界から来たという“悪魔”にこの世界を破壊されたのかもしれないのだぞ？」

「アレはむしろ歪みを感じしてこの世界に来た、と言った方が正しいな。リュウガを存在確立させなければアレもこの世界に来る事はなかった筈だ」

「ぬうううう……！」

オーデインは仮面の奥で歯軋りをした。自分がこの男の為にやった事は無駄だったのかと……。

「ならば、この『ライダーバトル』は、終わると言うのか……！？」

「いや、そうでもないだろう」

「何だと？」

神崎はリュウガの映った鏡から目を離し、別の鏡を見た。

そこには王蛇と戦っているナイトとゾルダの他に、もう一つのイレギュラーとも呼べる存在が映っていた。

「俺はこのイレギュラーに運命を賭けてみようと思う」

「運命を？」

「俺はこの別の世界から来たという“悪魔”を信じる事にする。この世界の歪みを消す……とな」

そう言っつて神崎はこの鏡越しから戦いを見守る事とした。

現在、歩達はそれぞれのライダーに変身してミラーワールドへ介入しそのままミラーワールド内の喫茶店から飛び出して人気のない繁華街で激闘を繰り広げていた。

「ソードベント」
「ソードベント」

「はあああああー!!」
「うおらああああー!!」

ナイトと王蛇が同時に「ソードベント」を発動させ、互いに手に持った剣で剣劇を繰り広げた。

「ハツハアアア!どうしたあ!?もつと俺を楽しませろおお!!」
「ぐっ……!!」

ナイトのソードベント・ウイングランサーは剣というより槍と言った方が正しく、一撃の重みは王蛇のベノサーベルより上であるが、王蛇の猛攻によって徐々に劣勢になり始めて行った。

「あっちの援護をお願いしますか?こちらは自分で何とか出来るんで」

「良いけどホントに大丈夫?こんなデカブツ相手で……」

デージエントとゾルダは王蛇の契約モンスター・ベノスネーカーと戦っていたのだが、ナイトが劣勢になり始めたのでゾルダにナイトの援護を頼んだ。

「大丈夫ですよ。まだカードを一枚も使ってないんで」
「おおーそりゃ頼もしいね。それじゃあ遠慮なくあっちに行かせてもらうよ」

ゾルダが援護に向かったのを見送っていると、ベノスネーカーがデ

イージェントに咬み付こうとして来たが、それを既に予想し、イージェントドライバーを展開させ、一枚のカードを挿入した。

「アタックライド…ダッシュ！」

『ジャオツ!?!』

「ハアツ！」

『ジャアアアアツ!?!』

ディージェントは一瞬でベノスニーカーの死角に回り込み、姿を見失って動きを止めたベノスニーカーの側頭部に跳び蹴りを浴びせた。そしてその一撃が相当効いたのか、ベノスニーカーは地面に溶け込む様に姿を消して逃げた。

「アドベント」の効果で呼び出されたモンスターは、一定以上のダメージを受けると、その場から逃げ出すという特性を持っている。それは倒されればライダーとの契約が解除されてしまう為のカードに備われている処置だ。

「シユートベント」

そんな電子音声が聞こえてナイト達の方を見ると、両肩に巨大なビーム砲・ギガキャノンを装着したゾルダが王蛇に砲撃を放っているところが目に入った。如何やら援護には成功したようである。

「そんなに楽しみたいんだったらもう一発喰らってみる？」

「ぐ、北岡あ…！」

「北岡さん、ありがとうございます！」

「礼はいいよ。それじゃあ先生、お願いしますよ？」

「だから先生って何ですか？」

ゾルダはキザツたらしく王蛇に挑発すると王蛇は低く唸りながら声を漏らし、ナイトの礼を軽く流すとディージェントの方を向いて追撃を要求してきた。何故先生なのかよく分からなかったが……。取り敢えずカードを取り出して挿入しようとしたが……

「スチールベント」

王蛇がディージェントより一瞬早くカードを発動させ、ディージェントの手元にあったカードが王蛇の下に転送されてしまった。

本来Dシリーズの「ライドカードシステム」は「龍騎の世界」のライダーシステムと異なる為、「スチールベント」の効果は受け付けない筈なのだが、Dシリーズに備わっている“世界のルールに順じた能力を得る”機能によってこの世界のライダーシステムに適應してしまった為、「スチールベント」の影響を受けてしまったのだ。

そして「スチールベント」は相手の使おうとしたカードを奪い取るカードだ。但し、発動させる直前に使わなければならない為、使いどころがディージェントの「キャンセル」のカードよりも難しい。それをいとも簡単に使いこなした王蛇の戦闘センスは驚異的と呼べるだろう。

「ほお、『ブラスト』か……。遠距離からチマチマ攻撃するつもりだったかあ？」

王蛇はディージェントのカードをチラつかせると、そのまま破り捨ててしまった。

破られたカードはその場で粒子化し、消えてしまう。

「あつ！」

「中々えげつない事やってくれるじゃない」

「いえ、そうでもないですよ」

ナイトがカードを破られた事の叫び、ゾルダが王蛇の外道っぷりに呆れを飛び越して感心するが、デージエントは何て事もなく再び次元断裂を展開して一枚のカードを取り出すと、その絵柄を王蛇に見せた。そのカードは、先程王蛇が破り捨てたカード…「ブラスト」だった。

「チツ！もう一枚持ってやがったか……」

「いえ、少し違いますよ」

「何？」

カードシステムを使うライダー達は一度カードを使ったらもう一度変身しなおさなければ同じカードを使用する事は出来ない。それはDシリーズにも言える事なのだが、デージエントの場合はカードの枚数が他のDシリーズより少ない為、それを補うために成長記録機能がその場で使用したカードを復元・再使用を可能とさせたのだ。これは歩が2年間世界を渡って来た中で得た能力でもある。

「説明も面倒臭いんでここでは省かせてもらいますよ」

デージエントはそう答えながら今度こそデージエントドライバーにカードを挿入・発動させた。

「アタックライド…ブラスト！」

「…ハッ！」

「チイイッ！」

デージエントは掌時から藍色の光弾を連続で撃ち出すが、王蛇はそれを、デージエントの周囲を回る様に走って避けた。その光弾は地面に着弾すると小爆発を起こし、後には小さなクレーターが出来ていた。

王蛇は走りながら自分のコブラを模した杖型の召喚機・ベノバイザーを取り出し、その中に一枚のカードを装填した。

「アドベント」

その電子音声と共に、何かがデージエントに向かって飛来してくるが、それをブラストを一時中断し避けた。

そしてその飛来して来たものを見ると紅色のエイの様なミラーモンスターの様だった。

「あつ！あれって手塚てつかの………！」

「如何やら、倒した後に無理矢理契約させたみたいだねえ」

「ふん…使わない手はないだろう………」

如何やらあのミラーモンスターは別のライダーの契約モンスターだったようだが、王蛇がそのライダーを殺して無理矢理奪ったようだ。そのエイ型ミラーモンスターは旋回して再びデージエントに迫って来た。

もう一度ブラストを撃とうにも一度中断してしまった為、効果が切れてしまっているので仕方なくそれを受け流して何とかかわすが、再び旋回して襲って来た。

「これじゃあカードを出そうにも出せないね………」

デージエントは無感情の声ではあるものの、内心では焦っていた。

デージーエントには確かに空間把握能力が備わっているが、あくまでその空間の状況が把握できるようになるだけだ。それはその空間にいる人間や知能の高い怪人の思考も含まれた上で演算されている。

しかし、このミラーモンスターのよう知能が低いとその動きを読む事が出来ないのだ。

「早く何とかしないとね……」

デージーエントは誰にでもなく小さく呟いた。

「チッ！中々当たらねえな……だが、それでいい、もっと俺を楽しませてくれるならなああー！」

「たくつ、本当にバトルマニアだねえ、アイツ……」

「俺達も加勢しますよ、北岡さん！」

「アドベント」

王蛇の狂言に呆れながらばやくゾルダを尻目にナイトがアドベントのカードをダークバイザーに装填するとナイトの契約モンスター・ダークウイングが現れエイ型モンスター・エビルダイバーに飛び掛かって言った。

それによってデージーエントの拘束が解放されるが背後から王蛇が迫っていた。

「あ、歩！危ない！」

王蛇のベノサーベルがディージェントに迫るが、王蛇を一瞥する事もなく裏拳を王蛇の顔面に当てていた。

「ぐおっ!？」

「……………え？」

「この姿になると周りの状況が詳しく解るようになるからね」

「それを早く言えつつの！心配するだろうが!!」

呆然とするナイトを余所に淡々と説明するディージェントに思わずツッコミを入れてしまった。

「ぐっ…ふざけ……………」

「ハッ！」

「どうぐおっ!？」

王蛇が顔を抑えながら何か言いきる前にディージェントが王蛇の腹に掌底を入れて吹き飛ばすと、灰色の板を出現させて、その中からカードを二枚取り出してバツクルに装填していた。

「ツールライド…アンチ・キル！」

「ファイナルアタックライド…ディージェント！」

吹き飛ばされた王蛇が態勢を整えた瞬間、ディージェントのマークらしきものが描かれた光の壁が現れ、王蛇の身体に後ろから張り付いた。

「ぐっ!？何だ…これは…!？」

「それでは止めの一発、行きますよ?」

淡々とそう呟くとクイツと左指を招く様に動かした。するとそれに
応じるかのように光の壁が王蛇を張り付けたままディージェントに
近づいていく。

その際にディージェントの右足に藍色のテレビのノイズの様なもの
が溜まっていった。

「フウウウ……ハア!!」

「グガアアアツ!!」

ディージェントの渾身の回し蹴り…ディメンジョンキックが決まり、
爆音とともに王蛇はミラーワールドから姿を消した。

「や、やったな…歩……」

「そうだね」

ディージェントがグローブを嵌め直す様な仕草を取っていると、ナ
イトが近づいてきて称賛してきたが、何処かつかえがある様子だ
った。

その気持ちは何となく分かる。ナイト…真司も自分と同じように人
を殺したくないのだと……。

歩は自分の持っていた力の所為で自分の居た世界を破壊してしまっ
た。それは研究者達が歩の力を利用したからに他ならないが、それ
でも自分がいなければ破壊されずに済んだ筈だ。

だから、もう誰も傷つけないのだ。自分の力で、破壊したく…
…。

「……やっぱり、人を殺すのは気が進まない？」
「う…あ、ああ……」

ディージェントが訊ねてみると、ナイトはバツが悪そうに頷いた。
やはり人を傷つけたくない様だ。

「大丈夫だよ。別にあのライダーは死んでないから」
「……え？」

ナイトはディージェントが何を言っているのか分からない様で、呆けた様な声を漏らした。

「ど、どういう事だよ…あいつ、確かに歩の一撃喰らって……」
「このカードを使ったからね」

そう言いながら先程使ったカードを次元断裂から取り出した。そのカードの名は…「アンチ・キル」

「アンチ・キル」のカードはどんなに致命傷を与える攻撃をしても、決して決定打とならなくなるカードだ。喰らっても精々気絶する程度で済むようになる。

「え、何で…？お前、確かにあの時倒すって……。それに、浅倉はどこ行っただよ」

「確かに“倒す”とは言ったけど殺すつもりはないよ。僕の目的はあくまで『歪み』の修正だけだからね。後、王蛇だったらあそこの窓にぶつかって現実世界に戻ったよ」

そう言ってディージェントは王蛇が突っ込んで行った洋服店らしき店の窓を指差した。

「そ、そうか…よかった……」
「ちよつとちよつとあ、どう言う事よ、生きてるって」

ナイトはそう小さく呟くと安堵の息を吐くと、ゾルダが文句を言いたそうに問いかけて来た。

「僕の目的はさつき居たとおりです。それ以外の行動をとるつもりはありません」

「あのねえ、何で俺が君達に付いてると思ってるわけ？ハア…こりやとんだはずれクジだな」

「どうします？あちら側へ戻りますか？」

「分かつて聞いてんの？だとしたらアンタ、相当タチ悪いよ？」

自分の取った行動に後悔しているゾルダにデイーゼントが淡々と訊ねると、軽く毒を吐いてきた。

今さらあちら側へ戻っても裏切り者として始末されるだけだろう。つまり、ゾルダのとする行動は一つしか残されていなかった。

「漁夫の利を狙っていた人とそう大差ないと思いますけどね」

「ハハツ、それもそっか。こりゃあ自業自得だな」

それを更に言い返すと、ゾルダは苦笑するしかなかった。

「ここまで来ちゃったらもう後戻りできないし、最後まで付き合っ
てあげるよ」

「よろしく願いますね」

「期待して…いいんだよな……？」

ナイトはこの共に戦ってくれる二人に不安と期待を混ぜ合わせたな

んとも形容しがたい言葉を呟いた。

「ぐうううう…クッソオ…」

浅倉は繁華街のど真ん中で仰向けに倒れていた。

あの時、青黒いライダーが「ファイナルベント」に近いカードを使う前に使っていた「アンチ・キル」とか言うカードのおかげで死なずに済んだ様だが、それは自分にとって屈辱でしかない。

「ぬううう…うがああああ!!」

浅倉は痛む身体を怒号と共に無理矢理起き上がらせた。周りには野次馬がこちらを奇異な目で見ているが知ったこっちゃない。幸いカードデッキは壊されていない。もういつその事ここで変身して周りの人間を片っ端から殺して行こうか……。

キイイイイン……

そんな考えを巡らしていると、聞き慣れた耳鳴りが先ほど自分がミラーワールドから出て来た窓ガラスの方から聞こえて来た。

「あゝあ？」

浅倉はその窓を見ると、そこには城戸真司が平然と立っていた。

「お前…城戸か……？」

浅倉は違和感を覚えていた。浅倉の知っている城戸は常に落ち着き

がなく、騒がしい男の筈なのだが、目の前に立っている城戸と思しき男は自棄に落ち付いており、普段の城戸からは想像できないような冷たい目でこちらを見ていた。

何より、変身もせずにミラーワールドにいる時点で不自然だ。そしてその城戸はニヤリと冷たい笑みを浮かべた。

『来い、遊んでやる』

そう言うと城戸はガラスの奥へと歩いて行き見えなくなった。

そんな城戸の不自然な行動な素一切気にも止めず、浅倉は凶悪な笑みを浮かべた。

「いいぜえ…お前が誰だろうがどうでもいい…俺を祭りに連れてってくれるんならなああ……！」

そう狂言を吐きながら王蛇は移動して行く耳鳴りを追って繁華街を後にした。

後ろで見ていた神童の気配にも気付かずに……。

「そうだ。その調子でライダーを消せ。そしてディージェントとか言う悪魔…いや、人形もな」

そう言い残すと誰にも気付かれる事もなく次元断裂を展開してその場を後にした。

第十四話：VS王蛇（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（・・・）
（ディージェントが今までで使ったオリジナルカードについて）

加奈「ああ〜確かに原作にはないカード使ってるわね」

皐月「じゃあ手元の資料見ながら説明してくか」

加奈「それじゃあまずは最初に使ったカード・『ビジョン』ね」

皐月「手元の資料だと戦闘用のカードじゃないって書いてあるな」

加奈「ええ、何でも使用者のイメージしたものを映像化させるカードらしいわよ。実体はないけどね」

カンペ（・・・）
（因みにツールライドのカードはすべて戦闘用ではありません）

皐月「じゃあ次のカードは『ダツシュ』だな」

加奈「このカードはただ単純にディージェントの移動スピードを上げるだけらしいわよ」

皐月「でもクロックアップとかファイズ・アクセルよりは遅いらしいぞ。因みにスピードは通常の600倍だとさ」

加奈「結構速いわね…でもファイズの1000倍とかよりは遅いか。それじゃあ次のカードの説明ね。」

皐月「今度は『キャンセル』のカードだな」

加奈「まあこのカードは『コンファインメント』の広域版だと思えばいいらしいわよ」

皐月「最後は今回使ったカード・『アンチ・キル』だな」

加奈「コレって思いつきりアレよね…リ○カルな○はの非殺傷設定……」

皐月「作者もそれをイメージして作ったんだと。何でもただ単純に倒せばいいってわけじゃないと思ったからだとか」

加奈「でもそのおかげで次回の王蛇にとんでもない死亡フラグが付いちゃったけどね……」

カンペ（浅倉さん、ご愁傷様ですm（|＿|m；））

皐月「さて、今回はここまでませ！」

加奈「質問や感想、お待ちしております！」

第十五話：見つけた答えと力の苦悩（前書き）

前半コメディ、後半シリアスです。A。()

特に後半はかなり鬱になってますのでご注意ください！

下手したらサイドストーリーの最後の鬱を超えるかも…。()。。()

しかも一部厨二臭いってどういう事よ…。()、。()

第十五話：見つけた答えと力の苦惱

王蛇との戦闘を終えた後、真司達は一度現実世界に戻り、人気のない裏道を歩いていた。

「それで、これからどうするの？」

「黒い龍騎を探します」

「どうやって？」

「決めてません」

「おいっ！それじゃあ探しようがねえだろ！？」

歩のまさかのノープラン宣言に真司がツツコミを入れてしまった。

自分は何時の間にツツコミが定着してしまったのだらうと心の奥底で思っていたりしたが、考え出すと埒むちが明かないので深く考えない事にした。

「でも、何の意味もなくこんな所を歩いてるわけじゃないよね？」

「え？」

「まあ、そうですね」

「お、おい！二人とも、俺にも分かる様に説明してくれよ！！」

真司はもう何度目になるか分からない会話の置いてきぼりにされ、
またもやツツコミを入れてしまった。

正直もう泣きたい。

そんな真司を見て北岡は深く溜め息を吐き、歩は頭をガリガリ掻きながら何から話すか考えている様だった。

「ハァ、まだ分かんないの？何の為にこんなところほつつき歩いてると思ってるの？」

「ん、確かに黒い龍騎を探す方法は決まってるけど、ライダー達を見つける方法は分かっているからね。今はそれを実際にやってみようよ」

「へ？」

つまり二人の説明によると、あえて人気のない場所を歩いてライダー達に自分たちを襲わせるようにおびき出すそうさ。要するに真司達は釣り針に付けた餌なのだ。

その餌に黒い龍騎が喰い付いてくるかどうかは分からないが、その餌に喰い付く可能性は高い。

「でも、それだと残りのライダー全員で襲いかかってくる場合もあるんじゃないか？」

「十中八九そうなるね」

「おいっ！それじゃあヤバいだろ！？」

「でも、あつちはさつき追っ払った浅倉を除いて後四人。それに、

こつちにはコイツがいるし、大丈夫でしょ？」

「そんなに期待しないで下さいよ？さつきだって結構危なかったんですから」

「いやいや、あんなにヒョイヒョイ避けててよくそんな事言えるね」

真司は流石にこちらの方が不利なのではないかと思っただが、それは北岡の一言で一蹴された。

“それに、こつちにはコイツがいるし、大丈夫でしょ？”

確かにコイツは強い。別の世界からやって来た仮面ライダーだ。

別の世界のライダーがどんな奴なのか聞いてみたが、「別の世界の情報はこの世界にとって毒でしかないから教えられない」と言われ、てしまい聞けなかったが、一つだけ教えてくれた。

“皆、何かを守るために戦っている”と……。

ひよっとしたら、そんなヒーローの様な存在こそが本当の仮面ライダーなのではないだろうか？

この世界の様にライダー同士で自分の願いを叶える為に戦うのではなく、互いに手を取り合って大切なものを守る存在こそが……。
だったら、信じてみようじゃないか。この目の前にいる何かを守る為に戦う一人である、仮面ライダーを……。
目が死んでるけど……。

「今何か、失礼な事考えなかった？」

「え！？いやいや！そんな事ないぞ！絶対！！」

キイイイイイン……

そんなやり取りをしていると、どこからか耳鳴りが聞こえて来た。どこから聞こえて来たのか探っていると、道の端にカーブミラーを見つけた。

そして、そのカーブミラーの中には二つの白い影…タイガとファムが映し出されていた。

『どうやら、本当に裏切ったみたいですね……』

『北岡、この罪は重いわよ』

「悪いね。ここまで来たらもう後戻りができなくなってるね」

「どうやら二人だけみたいだね。この二人も軽く叩きのめすよ」

「叩きのめす”って…お前本当に物騒な言い方するよな……」

二人のライダーと北岡のやり取りを尻目に、真司は無表情で恐ろしい発言をする歩に軽くツツコミと溜め息をついた。

『さあ早くこっちに来なさい。いくら自分を弁護しても意味ないわよ』

「このスーパー弁護士でも弁護できないとはねえ…ま、そんなつもりはないんだけどね」

『残りの二人は僕が相手をするよ…これくらい英雄には造作もないからね』

「それじゃあ、第二ラウンド行くけど大丈夫？真司君？」

「……………」

「…真司君？」

デッキを取り出し、戦闘準備を整える北岡を見ながら、歩は真司に問い掛けた。しかし、何の本能も帰ってこなかった事に不思議に思い、真司の方を振り向くと、何やら真剣な面持ちで俯いていた。やがて、真司はポツリと呟いた。

「俺、やっぱり人を殺したくない……。でも、ライダーとして戦うって決めたんだ。だから決めた」

そう言っつて真司は顔を上げて歩の方を見た。その目は虚ろだが、その心はきつと真司と同じ信念を持っているのだろう。目の前のライダーも、何かを守る為に戦っているんだ。だったら自分だってできる筈だ。

「俺は人を守る為にライダーとして戦う！そしてその為だったら、ライダーを守ったっていい！！それが…俺の見つけた答えだ…！」

人を守る為に戦う…これこそが蓮の代わりに見つけた答えだ。

「そうか…それが君の見つけた答えなんだね」

「ああっ!!」

真司には歩が一瞬だけ微笑んだ様に見えた。今は既に何時もの無表情に戻っているが、そんな気がした。

そして歩がカーブミラーを見ながら灰色の板の中からバックルとカードを取り出し、もう一度訪ねて来た。

「それじゃあもう一度聞くけど、準備はいい？」

「おう！」

そう力強く返事をしながら、真司もデッキを取り出し、カーブミラーに翳してVバックルを装着した。

『変身(!!)』

「カメンライド…ディージェント！」

三人はライダーに変身し、再び激戦の地・ミラーワールドへと入っていった。

場所は変わり、ミラーワールド内の何処かの工場跡地……

「ぬぐおおあああ!?!」

「どうした?もつと遊ぶんじゃないのか?」

ディージェント達三人がタイガ・ファムと戦闘を繰り広げている頃、

王蛇は龍騎に酷似した黒いライダーと戦っていた。

王蛇がベノサーベルで斬りかかろうとしたところ、この黒いライダーにカウンターを喰らって殴り飛ばされてしまったのだ。

先程から何度も攻撃を仕掛けようとしたのだが、この黒いライダーは最低限の動きだけで避け、王蛇の間だらけになった身体を蹴る、殴るなりして反撃の間を一切与えなかったのだ。

王蛇は積まれた機材の瓦礫に埋もれてしまっていたが、その中からゆっくりと起き上がり首をグルリと回すと、仮面の奥で凶悪な笑みを浮かべた。

「ここだ…俺が求めていた祭りの場所は…ここだあああ！！ハアハハハハアツ！！！」

王蛇は狂喜した。やっと見つけた自分の居るべき戦場まつりを見つけた事に。

彼の言う祭りとは、狂気に満ち溢れた戦場の事である。ここはまさにそれなのだ。

圧倒的なまでの力の差。それはあの青黒いライダーと戦っていた時にも感じていたが、狂気が全くと言っていいほどなかった。あれでは自分の求めていた祭りとは言えない。

だが、ここはどうだ？目の前の敵は自分よりも強大な力を持ち、尚且つ純粹に自分を殺そうとしている。

この様な場所が今まであっただろうか？いや、人生で初めて最後になるかもしれないほどの…祭りだ！

「ハツハア！！さあ、もつと来い！！最高の祭りの始まりだあああッ！！！」

「ファイナルベント」

王蛇は「ファイナルベント」を発動させ、ベノスネーカーを背後に、黒いライダーに特攻して行った。

それを見ていた黒いライダーはデッキから一枚のカードを取り出し、やはり龍騎の召喚機に酷似した籠手型の召喚機にカードを装填した。

「ファイナルベント」

その電子音声は通常の物より低く、くぐもった声であったが今の王蛇にとってはどうでもいい。

黒いライダーの背後に龍騎の契約モンスター・ドラグレッダーを漆黒に染めた様なミラーモンスターが現れ、黒いライダーの周りを囲む様に飛び始める。すると、黒いライダーが浮かび上がり、その両足には黒い炎が燃え盛っている。

王蛇は黒いライダーとの距離を半分ほど縮めたところで後ろに一回転しながらジャンプし、ベノスネーカーの目の前まで来たところで、ベノスネーカーが毒液を王蛇に向けて大量に吐き出した。

「ファイナルベント」の効果によって、毒液の体制が極限まで高まっている為、自分がダメージを喰らう事はなく、逆にその毒液を利用してその吐き出した激流に乗って黒いライダーに連続蹴り・ベノクラッシュを放った。

同じく黒いライダーの方も、飛び蹴りの体制を構えた途端、黒い龍が黒いライダーの背後から黒炎を吐きだし、その勢いに乗ってこちらに迫って来た。

ここで自分が勝とうが負けようがどうでもいい…この祭りを楽しめたのならば、その後はどうなってもいい…！

王蛇と黒いライダーの蹴りがぶつかり合った瞬間、そこで王蛇…浅倉威の意識は途絶えた。

「はあっ！やあっ！」

「うわっ！ちよっとタンマ！せめて距離取らせてよ！」

「うるさい！」

人気がない裏道を映し出したミラーワールドの中では、ゾルダ達三人と二人の白いライダーが戦っていた。

現在ゾルダはこの目の前にいる唯一の女性ライダー・ファムと戦闘を行っているのだが、ファム専用のレイピア型召喚機・ブランバイザーでこうも連続突きを繰り返されては、中々距離を取れない。

ゾルダは狙撃特化型ライダーだ。その為強力な砲撃を撃ち出す事は長けているのだが、接近戦に於いてはどうしても他のライダー達に劣ってしまう。

対して、ファムはパワーは低いものの、その軽いフットワークによるヒット&アウェイによる戦法を得意とするバランス型ライダーだ。このままでは相性が悪いので残りの二人と交代して欲しいのだが、二人も目の前の一人…いや、一人と一体に苦戦しているようだった。

「フッ！ハッ！」

「うおっ！？ちょ、アブなッ…！」

『グルオオオオッ…！』

「……攻撃が不規則過ぎて読めない」

ナイトとデージエントはタイガとの戦闘を有利に進めて行ったのだが、タイガに「アドベント」のカードが使われた事で形勢が逆転してしまった。

「アドベント」のカードで呼び出された、タイガをそのままミラーモンスターにした様な契約モンスター・デストワイルダーが加わり、さらにそれがデージエントに襲い掛かって来た事で劣勢になって来たのだ。

デージエントは先程の王蛇との戦いの時に知能の低い相手の動きを予測できないと言う弱点がある事をナイトは知っている。しかもあれほど猛攻されてはカードを取り出す暇もないだろう。

せめて自分がある契約モンスターの相手をすれば何とかなるのだが、タイガはその事を知ってか知らずか、ストライクベントで装着したデストワイルダーの両腕を模したクロー・デストクローで猛攻を仕掛けてくるのでなかなかチャンスを見えない。

「歩！何かいいカード持ってねえのかよ！？」

「あるにはあるけど、そのカード使ったら、真司君も巻き込むよ？下手したら、消し飛ばかも……」

「どんなカードだよそれ！？お前って本当に物騒の塊だな！？」

「ほらほらどうしたの！？僕の英雄としての礎になりたくなかった！？」

「しま…ぐわあああつ…！」

ナイトがデージエントに何かないかと攻撃を避けながら訊ねてみたが、またもや物騒な単語が飛び出して来てついツツコンでしまった。その隙を突かれてタイガのデストクローの攻撃に直撃してしまい、デージエントから更に距離が離れてしまう。

ゾルダから援護してもらえばこの状況を打破できるのだが、あちらも相当拙い状況に陥ってしまっている。

「だあーもう！せめて、人手が増えれば……ん？人手……？そうか！このカードがあった！」

立ち上がりながら、ない物強請りものねたをしていると、あるカードの存在を思い出した。

すぐさまタイガが再び迫って来る前にそのカードを引き抜き、ダイクバイザーに装填した。

「トリックベント」

タイガの攻撃が直撃する寸前、ナイトの身体が二つに分かれた。

「何!？」

そこから更に分裂して四体になり、更にもう一度分裂して八体になった。

「トリックベント」の効果は自身の分身体を作り上げる事。しかもその作り出せる分身は全部で七体。これで数の上ではこちらの有利だ。

八体のナイトはそれぞれ、タイガに四体、デストワイルダーに二体、ゾルダと戦っているファムに二体襲い掛かった。

「そう言えば、そんなカード持ってたの忘れてたよ」

『ってあるのかよ!？』

ディージェントは今思い出したのか二体のナイト（そのうち一体は本体）にデストワイルダーを抑えてもらっている隙に一枚のカードを取り出し、二体のナイトによるダブルツッコミを余所にバツクル

に装填した。

「アタックライド…イリユージョン！」

「何…？キャツ！？」

「お？へえ〜中々変わった『トリックベント』だねえ」

電子音声名鳴り響くと、デーリエントの身体から灰色のテレビのノイズの様なものが飛び出し、それがファムに激突すると、徐々に形を成して来てデーリエントの姿となり、ゾルダと二体のナイトと共に応戦し始めた。

「『トリックベント』まで持っていたのか……」

そう言いながらタイガがこちらに歩いて来た。如何やら四体もいたナイトの分身体はやられてしまったようだ。

いくら分身体が本体よりは弱いと言えど、あの数を相手に勝つという事はかなりのものだろう。

「厳密には少し違うけど、その解釈で大体合ってるかな？」

そう言いながらデーリエントはグローブを強く嵌めるような仕草をしながらタイガの前に立った。

「それじゃあそのミラーモンスターの相手を頼むよ」

「っしゃ！任せろ！！」

「さっきまで僕の契約モンスターに押されてた君が、僕に勝てると思ってるの？」

「まあね。少なくとも、負けるつもりはないよ」

「言ってくれるね、英雄になるであろう僕に……」

デージエントはデストワイルダーをナイトに任せ、タイガの前に立ち塞がった。

タイガは先程まで自分の契約モンスターに負けていたデージエントに軽い挑発をするが、デージエントの挑発をもとめない淡々とした口調に、タイガは静かに怒りの炎を燃やしている様だった。

「さっきから気になってたんだけど、どうしてそんなに英雄になりたいの？」

「君には関係ないさ。そもそも、それが人に物を尋ねる言い方？」

「僕って感情表現が苦手だからこれくらいの言い方しかできないんだよね」

「…その減らず口、今すぐ叩き直して上げるよ！」

そう言つてタイガはデージエントにデストクローによる攻撃を仕掛けたが、その特攻を軽く受け流し、そのままタイガの背中を抑えて、腹に膝蹴りを打ち込んだ。

「がっ…！？」

「……ハア！」

予想外の攻撃によって蹲ひざまづったタイガの首根くびねっこを持ち、更にその仮面を思いつきり殴り飛ばした。

「うわあっ！な、何でこんなに強いんだ…！？弱い筈じゃ……」

「それは知能の低い敵が相手だった時ね。知能が低いと空間把握能

力の演算から除外されちゃうから」

「クソッ！僕にも、そんな力があれば、英雄になれるのに……」

タイガのその言葉を聞いた瞬間、デージェントの動きが止まった。その時、デージェントの仮面の中の表情は完全に冷めきった物になっていた。

「……この力が本当に欲しいと思ってるの？」

「ウンそうだよ！！その力さえあつたら僕も君みたいな英雄に……」

「ツールライド…アンチ・キル！」

「アタックライド…スラッシュ！」

デージェントは二枚のカードを連続で発動させながらタイガに歩み寄り、タイガが言いきる前に手刀で思いっきり斬り付けた。

「うぐあああつ！！」

「……何で、そんなに強くなるうとするんだい？それに僕は英雄なんかじゃない」

「ひっ！？」

タイガはこの目の前にいる見た事のないライダーに恐怖を覚えた。間違いなく、このライダーは怒っている。自分の力を欲しかったことに……。

しかし、それはその力が必要だからと言った感じではない。まるで自分の力が好きじゃないかのような感じだった。

デージェント…歩には理解できなかった。そこまで強くなって何がしたいのか。無駄に力があつたから、自分の世界を壊してしまっ

たのに……。

ホントウハ、コンナチカラナンテイラナカッタ……。

「うああああー!!」

デージェントは無言で更に蹴りによる斬撃を浴びせ、タイガを吹き飛ばして距離をとった。

「とにかく、君にはこの力どころか、そのライダーの力は大きすぎる…ミラーワールドから出て行ってもらおうよ」

「ファイナルアタックライド…デージェント…デージェント!」

電子音声が鳴り響き、タイガの身体をビジョンに拘束させて身動きできなくした。

「ま、まさか…『ファイナルベント』!?!、イヤだ…まだ、僕は英雄になれてない…!」

「僕には何故そこまで英雄になるうとしているのか分からない…」

「え、英雄になれば、皆僕の事を見てくれる…!皆、僕を好きになつてくれるんだよお!」

「好きになる、か……意味が分からない」

そう冷淡に呟いて左指をクイツと招く様に動かした。それに応じる様にビジョンがタイガを磔にしたまま此方に迫って来る。

「フウウウ…ハ」

「やめろ!歩!」

「ッ!?!」

突然、身体の動きが止まった。構えた手刀は既に突き出した状態になっており、その手刀の数センチ先にはタイガのカードデッキがあった。そしてビジョンもディージェントの動きに合わせたかのようにそこで止まっていた。

徐々に頭が冷えて来たのか、タイガをよく見てみれば灰色になっており、形状も質素なものに変わっていた。

恐らくナイトがタイガの契約モンスターを倒した事で力を失ってブランク状態になったのだろう。

「どうしたんだよ歩！今のお前、何か変だったぞ！？本当にミラーワールドから追い出すだけだったのか！？」

「……………」

ディージェントは何も答えられなかった。本当に自分は殺さないつもりだったのか？

気が付けば「アンチ・キル」の効果が何時の間にか切れていた。いや、「切っていた」の方が正しいのだろう。

だとしたら、自分は本当に……………？

「……………一度、帰る」

「あ！おい待て、歩！！」

踵を返して、ミラーワールドから出て行こうとするディージェントをナイトが呼び止めるが、全く反応せずどこか覚束無い足取りでフラフラと歩いて行く。

「ファイナルアタックライド」の効果を解除してビジョンを消すと、タイガは支えを失った様にバタリと倒れてしまった。先程攻撃が当たる直前にショックで気絶してしまったのだろう。

「東條！？ちつ、どきなさい！」

「うおつと！？」

「東條、大丈夫！？くつ、ここは一先ず退かせてもらうわ！」

ファムがゾルダとの戦闘を中断してタイガに駆け寄って来て、様子を窺うが気絶していることを確認すると、タイガを背負い、その場から立ち去って行った。

女性型ライダーと言えども、スペックは大の大人のそれを優に超えるからこそできる芸当だ。

「ねえ、一体どうしちゃったの？アンタの分身体が突然消えるし、アンタがタイガを殺そうとしてるし、黒い龍騎以外に用はないんじゃないかったの？」

「……………」

ゾルダがディーゼントに近寄って話しかけるが、一切耳を貸す事はなくゾルダを素通りして行った。

「ちょっと、無視しないで何か言ったらどう……………」

「待ってください、北岡さん」

「何よもう、一体どうしちゃったのアイツ？」

ディーゼントの肩に手を掛けようとしたゾルダをナイトが止めると、ゾルダは不満げに声を漏らす。ナイトには今のディーゼントの気持ちは何となく分かる気がした。

「多分アイツ、自分が怖いんだと思います」

「怖い？」

「アイツ本当は、誰も殺したくないんだと思います。俺と同じように……………」

「ふうん、成程。それで今自分が人を殺しそうになっていた事が怖いと」

「はい、多分……」

そんな話をしている間にディージェントはミラーワールドから姿を消していた。

第十五話：見つけた答えと力の苦惱（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） デイジーエントの必殺技について

皐月「ああ〜そういえばちゃんと技名が出てたのって七話と前回の所しかないなあ〜」

加奈「と言うわけで今回は今までに出てきた必殺技を説明して行きますー！」

皐月「それじゃあまずは最初に出て来た必殺技からだな」

加奈「『ディメンジョンパンチ』ね。相手をビジョンに張り付けて動けなくして、そのまま自分の所に突っ込ませながらパンチをするって技みたいね」

皐月「作者の話だと殆どの技がビジョンに張り付けるらしいぞ」

加奈「因みにキックの場合は手刀を相手に突き刺すみたいね、『スラッシュ』と併用した場合は手刀を相手に突き刺すみたいね」

皐月「作者曰く『ディメンジョンステイング』だそうだ。今回出て

来た奴だな。不発だったけど」

加奈「歩大丈夫なのかしらね？何かすつごく落ち込んでるけど」

カンペ（正直やり過ぎた感が（話のネタ的な意味で）……）。；
）

臯月「要するにネタ切れしそうなんだな？」

加奈「ああ言う葛藤って結構中盤辺りにするものよね、確か……」

カンペ（サーセンm）——m.（）

臯月「さて、今回のあとがきラジオはここまでませ！」

加奈「皆さまからの感想・質問もお待ちしております！」

第十六話：真司と真司（前書き）

今回は前回のデイーゼントとは違う視点の話を真司の回想として
加えました（??）

ややこしかったらスンマセンー。 ;) チラチラ

第十六話：真司と真司

とある廃棄工場の中……

リュウガは目の前に倒れている王蛇を何の感慨もなく見つめていた。王蛇のバツクルにセットされていたカードデッキに徐々に罫が入り、やがて「パリン」と言う音と共に碎け散り消えてしまった。

それと同時に王蛇の纏っていた装甲も同じ様に碎け散り、装着者であつた浅倉威がその姿を見せた。

その身体からは粒子が噴出しており、徐々に浅倉威の質量を失わせて行く。

その顔には苦悶の色は一切映っておらず、逆に清々しい顔で目を閉じていた。

やがて完全に浅倉威の存在が消えると、リュウガはポツリと呟いた。

「まだまだ…俺はもっと強くなれる……。その為には、アイツの身体が必要だ……」

そこで言葉を区切って踵を返すと、リュウガはその名を口にした。

「城戸真司……」

亜由美はこの世界の移住先であるマンションで一人、留守番をしていた。

特にやる事もないので部屋の掃除をしていたら、玄関のドアがガチ

ヤリと開いて歩と真司が入ってきた。

「あ、歩、真司さん、おかえり〜」

「あ…おう、ただいま……」

「……………」

「アレ？歩、どうしたの？」

歩の様子がどうも変だった。見た感じは普段と大差ないのだが、何処か元気がないというかそんな感じだ。

「……………」

「あ！ちよつと！無視しないで……」

「あ〜！今日は亜由美ちゃんの作ったチャーハンが食べてみたいな〜！取り敢えず作ってよ！」

亜由美は何があったのか聞くが全く耳を貸す様子もなく無視し、それにカチンときて文句を言おうとしたが、真司がと何やら慌てた様子だったが夕飯の準備を頼み込んで来たので、とりあえず歩への尋問は後にして今日の夕飯を作る事にしたが、夕飯を作っている間も歩はどこか変だった。

帰って来てからずつと壁の方を向いて何故か体育座りをしているし、時々何やらボソボソと囁いていたが小さすぎて聞き取れない。

夕食の時も、昨日まで真司の餃子を独占していたと言うのに、今回はチャーハンだけをチビチビと口に行っているだけだった。

これはまさしく異常だ。

「あの…真司さん、歩どうしたんですか？」

「ああ、それがさ……」

真司はその時の事を思い出しながら亜由美に語った。

デーエージェントがタイガと戦闘をしていた頃……

「ソードベント」

「ソードベント」

『うおりやああああ！！』

『グガウウウ！？』

二体のナイトはウイングランサーを装備し、デストワイルダーを圧倒していた。

ナイトの現在の装着者である真司は決して弱いわけではない。ただ^{ライダー}人間と戦う事が嫌いなだけで、その実力は世界の脅威であるミラーモンスターとの戦いにおいてこそ本領を発揮するのだ。

「っしや！これで止めだ！」

「ファイナルベント」

「ファイナルベント」

ナイトがカードを一枚カードを引き向いてダークバイザーに装填させると、分身体のナイトも同じようにカードを引いて装填させていた。

するとナイトの契約モンスター・ダークウイングが飛来し、更に「トリックベント」の影響を受けて二体に分裂した。

『ハアアアアア………』

二体のナイトがデストワイルダーに二方向から駆け出し、その背中にそれぞれ分裂したダークウイングが張り付き、マント状に変化する。

『タアアアアア！！！』

『グガアアアアアツ！！！』

マントに変化した所で大きくジャンプし、ウイングランサーを相手に向けて高速で落下していく。

それを避けようにもナイトの連続攻撃で身体が思うように動けないデストワイルダーは二方向から迫りくるナイトの必殺技…「飛翔斬」に直撃してしまい、爆散した。

『っしや！！！』

そう掛け声を上げてガッツポーズをすると丁度「トリックベント」の効果も切れたのか分身体がまるで鏡が砕けたかのように姿を消した。

その同時刻……

「シュートベント」

「二人の分身体、消えなくなかったら避けてね」

「はい」

「ええ！？ちよ、北岡さん！？」

「へ？つてどわあああ！？」

「きゃああああ！！！」

ナイトとデーリエントの分身体の計三体がファムの動きを止めている内にゾルダは「シユートベント」を発動させてギガランチャーを装備し、分身達の退避も待たずに砲撃を放った。

デーリエントの分身体は事前に分かっていたのか既に射程範囲外に退避しており、残りのナイトの分身体の内の一体が射程範囲から逃げ切る事が出来ずにファム共々喰らってしまった。消えてしまった。

「ちよ、北岡さん、酷いじゃないですか！！俺の分身、一体当たりましたよ！？」

「ちゃんと警告したでしょ？」

「だからつてあんなすぐに撃ちます！？それと歩！お前始めっから分かってたたる！？」

「もし避けなくても、分身体だから大丈夫だと思う」

「コ、コイツ等冷たい……！！」

どちらの分身体も意識は本体と繋がっているので本人と大差ない筈なのにこの二人（デーリエントの分身体含む）の余りの冷たさに思わず泣きそうになった。

するとそこでナイトの分身体が消えた。どうやら「トリックベント」の効果が切れたようである。

「お、どうも城戸の方は終わったみたいだねえ」

「そのようで……っ！？」

「つてアレ？こっちも？」

突然デーリエントの分身体が何かに驚いて硬直したかと思うと、

藍色のノイズに包まれ消えてしまい、ゾルダは溜め息をついた。

「ハア〜ちよつとちよつとお、まだ片付いてないのにこつちも時間切れ？ホンツト、今日はついてないよお」

「よそ見してる場合？」

「へ？うおつとお！？」

ゾルダが愚痴を溢している間にファムが態勢を立て直したようであり、再び接近戦で挑まなければならなくなったしまった。

「も〜またあ？しつっこいなあ……って、ん？どうやら、あつちでも何かあつたらしいね」

ふと視線に何かが目に入りそちらを見ると、光の壁にタイガが張り付いた状態になっているのが目に入った。

あの光の壁はゾルダの記憶が正しければ、デージエントの「ファイナルベント」の筈だ。

しかし、何故かデージエントは攻撃が決まる直前で固まっており、それにナイトが何やら話し掛けている様子だった。

ナイトがデストワイルダーを撃破した頃……

「歩！こつちは終わったぞ！そつちはどう……な……っ！」

ナイトがデージエントの方を振り向くと、デージエントがタイガに止めの一撃を刺すべく、デージエント特有の「ファイナルベ

ント」を発動させている姿が目に入った。
タイガは契約モンスターが倒された事でブランク体になっていた。
あんな状態で「ファイナルベント」を喰らおうものなら、一溜まり
もないだろう。

恐らく「アンチ・キル」を発動させているとは思いが、デージエ
ントからは殺気が溢れている。
明らかに殺しそうな勢いだ。

「好きになる、か……………意味が分からない」

ゾクリ、と背筋が凍るような冷たい言葉を吐きながら左指をクイツ
と招く様に動かして光の壁を引き寄せた。
間違いない、デージエントは殺す気だ……………！

「フウウウ…ハ」

「やめろ！歩！！」

「っ！？」

思わず叫ぶとデージエントの手刀がタイガを刺し貫く寸前で止ま
り、タイガはショックで気を失っていた。

「どうしたんだよ歩！今のお前、何か変だったぞ！？本当にミラー
ワールドから追い出すだけだったのか！？」

「……………」

ナイトは駆け寄って問い質すが、デージエントは何も答えなかつ
た。

まるで自分でも何をしようとしていたのかわからなかったようだ。

「……………一度、帰る」

「あ！おい待て、歩！！」

デージェントはそう言って「ファイナルベント」の効果を解除して光の壁を消すと、ナイトの声に、全く反応せずにフラフラと歩いてミラーワールドから出て行った。

「……………って言う事があってさ」
「そうなんだ……………」

亜由美は真司から一部始終を聞くと、歩を見ながらそう誰にでもなく呟いた。

何があつたか分からないが、とにかく歩にとって許せない事があつたのだろう。

それでその時の怒りに任せてそのライダーを思わず殺しそうになつた事に落ち込んでしまい、誰にも言えずに心の内に溜め込んでしまつている。

歩の性格上、何か悩んでいてもそうなってしまうのは間違いない。だとすれば、自分の取るべき行動は一つだ。

亜由美は自分の分のチャーハンを素早くかきこむと、卓袱台ちゃぶだいをバンと叩いて歩の意識をこちらに向けた。

「歩、ちょっと来なさい」

そう言って返事も待たずに歩の腕を掴んで無理矢理立たせると、マンションの部屋から出て行って部屋には真司一人だけが取り残され

た。

「何かあの二人って、兄妹って言うより親子みたいだな……。それにしても亜由美ちゃんのチャーハン…あんまり美味くないなあ…。いや、食べなくはないんだけど……」

そうばやきながら真司はチャーハンを食べながら二人が帰って来るのを待つ事にした。

後ろのベランダの窓からこちらを窺うもう一人の自分の存在も知らずに……。

マンションの外に出た二人はすぐ近くにある駐輪場で向き合っていた。

歩の方は何時もの死んだ魚の様な目だったが、亜由美の方は真剣みを帯びた僅かに怒りを表した目で歩を見ていた。

「歩、私は何言いたいか分かる？」

「……………」

歩には亜由美が何を考えているのか分からなかった。

亜由美は完全にこちらとの繋がりを遮断してしまっている為、思考が読めなくなってしまうっている。そんな状態では分かる筈がない。

「じゃあ歩、ちょっとだけ目を閉じてて」

亜由美に言われるままに歩は目を閉じると、暫くしない内に左頬に強く突き刺さるような衝撃を受けた。

何事かと思いい目を開けると亜由美が手を振り抜いた状態でこちらを睨んでいた。

「何で誰にも言わないの！？そんなに苦しいんだつたら、誰かに言えばいいじゃない!!」

一瞬、何の話をしているのか分からなかったが、漸く理解した。自分が悩んでいることを相談しなかった事に怒っているのだ。

「……僕には、誰に言えればいいのか分からない…それに、言っても誰も聞いてくれない」

歩は幼少の頃から研究施設で育てられた。そこでの実験でどんなに苦しくて泣き叫んでも、研究者達はまるで雑音程度にしか感じていなかった。

自分の声は誰にも聞こえない、聞いてもらえない。それが歩の中の常識だった。

「だったら、私が聞く！歩言つたよね!? “兄妹” って!! 家族だったら、それくらい頼つたつていいでしょ!?!」

「家族……?」

歩には家族がないも同然だった。両親の顔も今では全く思い出せないし、自分を育ててきた研究者達は歩の事をただの研究材料程度にしか思っていないかった。

「そう! 家族だったらそれぐらいして当然でしょ!?!」

その時、歩の中に何か溢れて来た。歩にとっては形容しがたい、
何かが……。

「……………ッ！」

「ええ！？ちよ、泣いたあ！？な、泣かないで歩！ゴメン！何か言
い過ぎたー！」

「いや、大丈夫……………そう言う事言われたの、初めてだから……………」

亜由美から顔を背けて目元を拭くと、歩は何時もの雰囲気に戻って
亜由美に向き直った。

「その…ありがとう……………」

その小さな声には確かに感情が入っていた。感謝と言う、気持ちか
……………。

「どういたしました」

その言葉が届いたのか、亜由美はニコツと笑うとそう返した。

キイイイイン……………

そんな二人の耳に突然耳鳴りが聞こえてきた。

「！？歩！今の音って……………！」

「多分ライダーだね。真司君が危ない」

「戻ろうー！！」

何時もの抑揚のない淡々とした口調に戻った歩と亜由美は急いで部
屋に戻っていった。

亜由美が歩を連れて外に出て間もない頃……

キイイイイイン……

「ッ!？」

突然真司の耳に聞き慣れた耳鳴りが聞こえた。

どこから聞こえて来たのか鏡面化している部分を中心に探していると、ベランダのマンションの窓が目にとまった。

そこには一見、自分以外何も映っていない様子にも見えるが、そうじゃない。

映し出された自分……そのものが不自然なのだ。

窓ガラスに映った自分の姿が突然ニヤリと笑った。

「え!？」

決して自分で笑ったわけではないのにその映し出された自分だけが笑ったのだ。

『よう、俺……』

「な!？」

窓ガラスに映った自分が突然自分に話しかけてきた事に驚くが、更に驚愕する事態が起きた。

窓ガラスに映った自分が近づいてくると、そのままヌルリとガラス

から這い出てきたのだ。

「お、お前は一体……」

「俺はもう一人のお前さあ」

その声は城戸真司そのものだったが、とても真司が出すとは思えない狂気を孕んだ声だった。

真司は近寄って来るもう一人の自分から後退りながら距離を取るが、やがて壁にぶつかってしまい、逃げ切れなくなってしまった。

「そんなに怖がるなよ……俺はお前なんだぞ」

「な、何の用だよ……!?!」

真司は怖気付きながらも何とか言葉を発すると、もう一人の真司は更にその顔を狂喜で歪めて目的を述べた。

「なあに、簡単な事だ……俺を受け入れる。俺と一つになれば、最強のライダーが生まれるんだぞ。お前が望んでいる物も簡単に手に入るんだ。どうだ、欲しくないのか？」

「べ、別に俺に望みなんて……」

「蓮を、生き返らせたくないのか？」

「……!」

蓮は……自分を庇って死んだ。自分がいなければ、蓮は死なずに済んだかもしれないのだ。

「奴は、お前がいたから戦う事に躊躇してしまった。お前がいなければ、奴は裏切り者として殺されずに済んだかもしれないんだぞ？ お前には責任がある。奴を生き返らせる責任がな」

だったら、生き返らせてやりたい…！自分の命に変えても…！！

「わ、分かった」

「フ…それでいい……」

真司は頷くと、もう一人の真司は右腕を自分の胸下に翳した。するとその腕から徐々に粒子化して行き、真司の中に入り込んでゆく。

「ぐ、ぐあ…あああああ…！！」

粒子が身体の中に入っていく毎に、真司の意識がどす黒い何かに塗りつぶされていき、やがて真司の意識が途絶えた。

「真司さん！」

「これは…！？」

歩と亜由美が戻ってきた頃には、時既に遅く、粒子の塊が真司の中に入っていくところを目にした。それと同時に真司がガツクリと倒れた。

「真司さん！大丈夫！？」

「待って！行かない方が良い！」

「え…！？」

「フ…フッフッフ…フハハハハハハ！！」

真司に駆け寄ろうとする亜由美の腕を掴んで止めると、真司の身体

がピクリと動いた。
その動きは徐々に大きくなって行き、やがて大きな高笑いを出した。

「とうとう手に入れたぞ！人の身体…！俺は最早鏡の中の幻ではない！！」

「え！？どうなってるの！？」

「この世界の『基点』であるライダーが…消えた……。あれはもう、真司君じゃない」

その声は真司の物でありながら真司の物ではなかった。本当の真司ならこんな狂気に満ちたことを口走るわけがない。

「そつだ、俺の名は仮面ライダー……」

真司らしき者が右手を前に翳すと、その手の中に粒子が集まって行き、一つのカードデッキを形成した。

その黒いカードデッキには黒い禍々しい龍の意匠が施されていた。

「リュウガ。この世界、最強のライダーだ」

そう真司らしき者…リュウガが宣言すると、カードデッキを鏡面化した物に翳したわけでもないのにVバックルがリュウガの腹部に装着された。

リュウガの身体自体がミラーモンスターであり、鏡でもある為、自分の身体を鏡面として応用したのだ。

「お前がディーゼントだな？ある男との契約でな、俺がライダーとしての力を得る事を条件にお前を消せとの事だ。聞く所によると

お前は“破壊の代行者”らしいな。どれほどのものか試してやろう……変身」

リュウガがカードデッキをVバックルに装填すると、リュウガの身体に次々と銀色の鏡像が重なって行く。

それと共にリュウガの身体が乱反射を起こした鏡の塊の様になって行き、最後の鏡像が重なると同時に鏡の塊が漆黒に染まりその姿をライダーへと変えた。

バーゴネットから覗く赤く輝く複眼だけは龍騎そのものではあるが、漆黒の装甲が相まってその複眼もどこか禍々しくもある。

今ここに、この世界の最強であり「歪み」の根源でもあるライダーが君臨した。

第十六話：真司と真司（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） 今回と前回の話の流れについて

皐月「これってぶつちやけ作者の書いてみた感想だよな？」

加奈「言わないであげてよ、そろそろこのラジオのネタが尽きそうなんだから……」

皐月「ふう〜ん、まあいいや。とりあえず、まず前回の話からだな」

加奈「作者の話だと後半のディージェント対タイガのあたりから話が大きく二つに分かれたそうよ」

皐月「歩がブチギれるかそうじゃないかって事だな」

加奈「ええ。それじゃあそのボツになったシーンを見てみましょうか」

皐月「って事はDリーダーの出番だな。今回はアタシが使わしてもらうぜ。タアアアツ！」 カードをスラッシュした

「エピソードライド…NG・ファイフティーン！」

ディージェントはデストワイルダーをナイトに任せ、タイガの前に

立ち塞がった。

タイガは先程まで自分の契約モンスターに負けていたディージェントに軽い挑発をするが、ディージェントの挑発をもともしない淡々とした口調に、タイガは静かに怒りの炎を燃やしている様だった。

「さつきから気になってたんだけど、どうしてそんなに英雄になりたいの？」

「君には関係ないさ。そもそも、それが人にものを尋ねる言い方？」

「僕って感情表現が苦手だからこれくらいしかできないんだよね」

「…その減らず口、今すぐ叩き直して上げるよ！」

そう言つてタイガはディージェントにデストクローによる攻撃を仕掛けたが、その特攻を軽く受け流し、そのままタイガの背中を抑えて、腹に膝蹴りを打ち込んだ。

「がっ…！？」

「……ハア！」

予想外の攻撃によって蹲つたタイガの首根っこを持ち、更にその仮面を思いつきり殴り飛ばした。

「うわあっ！な、何でこんなに強いんだ…！？弱い筈じゃ……」

「それは知能の低い敵が相手だった時ね。知能が低いと空間把握能力の演算から除外されちゃうから」

「ク、クツソオ…！」

ディージェントのその淡々とした物言いにタイガは激情して突っ込もうとするが……

「ファイナルアタックライド…！ディーディディージェント！」

即座に「ファイナルアタックライド」のカードをディージェントド
ライバーに挿入し、タイガの目の前に出現して貼り付いた。

「ぐう!?こ、これはまさか…『ファイナルベント』!?イ、イヤ
だ…僕は、まだ英雄になれてない…!」

「僕には何故そこまで英雄になるうとしているのか分からない…」

「え、英雄になれば、皆僕の事を見ってくれる…!皆、僕を好きにな
つてくれるんだよおお!」

「好きになる、か…!意味が分からない」

「ツールライド…アンチ・キル!」

そう冷淡に呟いて更にもう一枚のカードを取り出して発動させ、右
足にシックスエレメントを充填させながらタイガに歩み寄った。

「…ハアッ!」

「うわあああああ!」

渾身の回し蹴り…「ディメンジョンキック」が決まり、タイガは吹
き飛ばされ壁にめり込んだ。

「カツ…ハア…」

そしてそのままガクリと気を失った。

それを確認するとグローブを強く嵌める様な仕草をしながら、後ろ
を振り向いた。

「さて…と、真司君と北岡さんはどうなったかな…」

そう呟きながら残り二つの戦いがどうなったの確認する事にした。

加奈「うーん……何かほとんど同じだけどシツクリこないわね」

皐月「まあこっちの方が良いって言う読者もいるかもしれないけど
な」

加奈「さて、今回のあとがきラジオは尺の都合でここまで！」

皐月「残りは次回のあとがきラジオに持ち越すぜ！」

加奈「それでは皆さん！」

加奈・皐月「また次回！！」

第十七話：龍騎士の影（前書き）

遂に佳境に入ってきました龍騎編！（・・・）
果たしてリュウガに勝つ事が出来るのか！？
それではスタートオ！！（・・・）

第十七話：龍騎士の影

「さあ来い、“破壊の代行者”。その力を見せてみる」

「ね、ねえ歩！真司さんどうなっちゃったの！？あのライダー何！？」

「『歪み』と融合している…しかも『基点』と融合したせいで更に『歪み』が強くなってる。そしてあのライダーがこの世界の『歪み』そのものだよ……」

歩には分かる。最初にこの世界に来た時に見た、蜘蛛型ミラーモンスターと戦っていた時よりも更に強くなっている事が。

しかも「基点」である城戸真司と融合してしまった為、この世界の「基点」となるライダーが消えてしまっている。この世界が「ライダーサークル」から除外されるのも時間の問題だろう。

そもそもサークルと言っても距離的な概念ではなく、分類上の概念であり、そのカテゴリーの中にライダーが含まれている世界の総称を「ライダーサークル」と呼ぶのだ。

「さあどうした！？俺にその力を見せてみるお！！」

「チツ、一旦逃げるよ」

「ウ、ウン！」

歩はこの狭い場所で戦うのは不利だと判断して、次元断裂に亜由美を連れて逃げ込んだ。これで自分達以外を入れない様に演算すればリュウガは追ってこれない……筈だった。

「逃げるなあ！！」

「な……！！？」

「キヤアア!?!」

何とリュウガは次元断裂を殴って強制的に破壊してきたのだ。ワールドウォーカーかDシリーズでなければそんなことは不可能な筈なのにどうして……!?!

そこでふと思い出した。王蛇がベノスネーカーを突進させて次元断裂にダメージを与えた事に。

次元断裂を発生させるにはその空間を演算しなければ不可能だ。しかもその演算法はかなり困難。つまり現実世界とミラーワールドの空間を同時に演算するのは不可能なのだ。

更に目の前のライダーは現実世界の住人とミラーワールドの住人のハイブリッド。その攻撃が空間そのものにズレを生じさせて当然なのだ。

次元断裂を破壊された衝撃で別の世界との道が出来てしまい、亜由美がその中に吹き飛ばされてしまった。

「キヤアアアア!?!」

「亜由美っ!?!」

必死に手を伸ばすがそこで次元断裂空間が消えてしまい、噴水のあの夜のオフィス街へと飛ばされた。

雑踏や車の音がしない事から、どうやらここはミラーワールドの様だ。

歩は空間演算を行えば変身せずともミラーワールドで活動できる。上手く空間演算の出来ない亜由美がここに来なかったのは不幸中の幸いだろう。

もし亜由美もミラーワールドへ来てしまっていたら、すぐに粒子化して消滅していただろう。

「さっきの小娘は別の場所へ飛ばされた様だな。まあいい、これで邪魔者はいなくなったわけだ。さあ、早く変身しろ」

如何やらリュウガも次元断裂を破壊した衝撃でここまで飛ばされて来たようだ。

こちらに変身してこの「歪み」を修正したいのだが、そうはいかない。

今のリュウガは「歪み」であると同時に「基点」でもあるのだ。

もしリュウガを倒せばこの世界が消滅してしまう。

「アンチ・キル」のカードがあるものの、あのカードは自動的にデージェントのスペックを抑えてしまう。目の前の相手にそんな手加減をしながら勝てるかどうかも怪しいので使えない。

だが、一つだけ方法がある。真司をリュウガから引き剥がすのだ。真司は決して死んだわけではない。あくまで身体を乗っ取られただけで、リュウガに意識を抑えつけられているだけだ。

それを何らかの方法で取り戻させれば「基点」を消さずに済む。

「ま、方法は戦いながら考えるか……変身」

「カメンライド…デージェント！」

歩はそう呟くと覚悟を決めてデージェントに変身すると、グローブを強く嵌める仕草の後、リュウガに特攻した。

「ハアッ！」

「そうだ、それでいい」

リュウガがそう呟きデージェントのパンチを受け止め、デージェ

エントの腹に蹴りを入れようとするが、当たる直前で後退し、その攻撃をかわす。

更にディージェントドライバーの持ち手部分を引いてカード挿入口を展開させると、一枚のカードをクラインの壺から取り出して装填した。

「アタックライド…ブラスト！」

「…ハッ！」

「フン、そんなもの、このカードで十分だな」

ディージェントは藍色のエネルギー弾を放つが、リュウガはそれを軽々と避けながらカードデッキから一枚のカードを引き抜いて左腕に備え付けられた黒い龍の頭を模した籠手型の召喚機・ブラックドラグバイザーに装填した。

「ガードベント」

その通常の電子音声よりくぐもった声が聞こえると。龍の腹部を模した大型の黒い盾、ドラグシールドがリュウガの左手に現れ、それでエネルギー弾を防ぎながら突っ込んできた。

「らあああああー!!」

「クッ……!!」

その突進をブラストを中断して側転して避けるが、リュウガはそれを予測していたのか既に一枚のカードを引き抜いており、それをブラックドラグバイザーに装填した。

「ソードベント」

「フンツ！」
「ハツ！」

リュウガの右手に片刃の黒い剣が現れ、それでデージエントに斬りかかるが、デージエントはそれを白羽取りして何とか抑える。抑えて身動きが取れなくなった隙に足払いをして態勢を崩され、腹を踏みつけられ剣を連続で叩きつけてきた。

「おらあ！らあ！らあああ！！！」
「うっ！ぐっ！ぐあっ！」

剣を叩きつける毎にデージエントの身体から激しく火花が飛び散り、徐々に装甲を削っていく。

「くうっ！」
「何！？」
「ハアツ！」

その状況を打破するために剣を素手で掴み取ると、その剣ごとリュウガを投げ飛ばした。伊達にデージエントのパワーは低くない。その代償として手からは血が流れてしまっていたが、装甲を次元移動能力の潜在意識演算によって自動修復させる。あくまで装甲だけなので生身である歩の手からは未だに血が出ているのだからそんな事は後回しだ。

「チツ！」
「ストライクベント」

リュウガは剣と盾を投げ捨てると、新たにカードを引き抜き、そのカードを発動させ、右腕に腕全体を包む形状をした籠手・ドラグクローを装着した。

それと同時にリュウガの背後からリュウガの契約モンスター・ドラグブラツカーが水面から出てくる様に、アスファルトの中から出てきた。

リュウガはドラグクローを後ろに引く様に構えると、それに合わせる様にドラグブラツカーが口の中に黒炎を溜め始める。

デージェントはその黒炎が吐き出される前に一枚のカードを発動させた。

「アタックライド…キャンセル！」

「ハアア……ッ!? 何だと!？」

その電子音声が鳴り響くと同時にドラグブラツカーと右腕に備え付けられたドラグクローが一瞬で黒い粒子の塊になり散っていった。

「フン…成程、『コンファインベント』か……随分と舐めた事をしてくれるじゃないか」

「それはどうも。ところで、今真司君はどうなってるんだい？」

リュウガの挑発を適当に返すと、気になる事を聞いてみた。

「そんな事を聞いてどうする? アイツは最早、俺の身体の一部だ。奴の意識が消えるのも時間の問題だろう」

「そうなる前に、真司君の意識を取り戻させてもらおうよ」

「フハハハ! 出来るものなら…やってみるお!！」

「ソードベント」

リュウガはもう一度「ソードベント」を発動させて手元に出現させた。

リュウガは最早その存在自体がライダーである為、同じカードをデージェントと同じように何度でも復元させて使う事が出来るのだ。

「アタックライド…ダッシュ！」

「チイッ！逃げるなあ！！」

「真司君、聞こえるかい？」

デージェントは「ダッシュ」の効果を発動させ、一瞬でリュウガの背後に回り真司に語りかける様に呟いた。

「君はあの時言ったよね？“人を守る為にライダーとして戦う”って。だったら何で『ライダーバトル』を続けようとしてるんだい？」

「とらああ！！」

「君のあの時の言葉は嘘なんかじゃないんでしょう？だったら、目を覚ませ……！！」

デージェントは抑揚のない淡々とした声ではあるものの、語気を強めて言い放った。この世界の本当のライダーの名を……。

「仮面ライダー龍騎・城戸真司……！！」

「ハアアア……ッ！？が、ぐあ……！！な、何だ！？身体が……！？うああっ……！！」

突如リュウガが動きを止め、身体を抑えながら苦しみ出し、更にリュウガの体に異変が起こった。

リュウガの胸から人の手が飛び出して来たのだ。その手は、更に出ようと動き始め、腕全体を出し始める。

「ま、まさか…俺から離れようと言うのか…!?この力を捨ててまで…!!」

リュウガが苦しみながら言葉を発している内に、胸から人の頭が出てきた。そしてその顔は、正真正銘、城戸真司だった。

「俺から…離れる…!!」

真司がそう叫ぶと、まるで磁石の様に真司とリュウガが弾き飛ばされた。

弾き出された真司をディージェントはキャッチすると一目散に近くの噴水に飛び込んでミラーワールドから脱出した。

「ぐううう…クッソオオオオ…」

リュウガは悔しそうに唸るが、身体が思うように動かず真司とディージェントが逃げて行った噴水を睨んでいた。

「大丈夫?真司君?」

「あ、ああ…何とかな…」

真司達は変身を解除して人目の付かない廃ビルへと逃げ込んでいた。真司の身体を倦怠感が襲い、上手く動かなかった為、歩が真司を担

いでここまで運んできたが流石にここまでくれば人を巻き込む事もないだろう。

「お前の声…聞こえたぞ……」
「……ウン」

真司の独白に歩は相槌を打って続きを促した。

「俺、やっぱり間違ってた。あんなヤツの口車に乗せられて、『ライダーバトル』を続けそうになっていた……」
『見つけたぞお……！』

廃ビルの窓から声が聞こえて来てそちらを向くと、丁度リュウガがミラーワールドから出て来ている所だった。

しかし、その装甲は解除されず、ライダーのままだ。と言う事は、「基点」と分離してしまっても力はそのまま受け継いでいると言う事だ。

「貴様…何故俺から離れる…！？この力で『ライダーバトル』に勝てば、蓮を生き返らせる事が出来るんだぞ！？」
「もう、お前には騙されない…！」

真司はそう言っけてリュウガを睨みつけた。

「お前のやってる事は、ただ自分の為にしかない事だろ…！俺は人を守る為に戦うんだ！それが、蓮の代わりに見つけた答えなんだよ…！」

「……フン、馬鹿め」

「何…？ガッ！？」

「真司君！？」

そうリュウガが呟くと、一瞬で距離を縮め真司の首を掴んで持ち上げた。

その一瞬の出来事に、歩は追い付けなかった。

「もうお前は必要ない……ここで死ね……」

「ウ……ガッ……ッ！」

リュウガは真司の首を強く絞めつけ始めた。間違いなく殺す気なのだろう。

「チッ……変身」

「カメンライド……ディージェント！」

「ハッ！」

「ぐあっ！」

歩はすぐさまディージェントに変身し、リュウガの顔面を殴り飛ばして真司から引き剥がした。

真司は気管が絞まって咽ていたが、何とか無事なようだ。

「大丈夫？」

「ゲホッ、ゲホッ……ああ、助かった……！」

「貴様あ……」

「アドベント」

リュウガは「アドベント」を発動させてドラグブロッカーを呼び出し、その禍々しく光る赤い複眼でディージェントを睨みつけた。

「お前も一緒にこの世界から消してやるっ……ここがお前の死に場所だ……！」

「悪いけど、ここで死ぬ予定は全くないよ。代わりにここが君の死に場所だよ」

「またお前物騒な……いや、もういい。何か一タツツコムのも疲れしてきた……」

リュウガの死刑宣告を何ともせず危ない発言で言い返すデイジーエントにまたもツツコミそうになったが、最早諦めた。とにかく今は、この目の前の敵を倒すことが先決だ。

早速ポケットからカードデッキを取り出すと、そのカードデッキが変わっている事に気付いた。

その施された意匠が蝙蝠から本来持っていた龍の意匠……龍騎のカードデッキに変わっていたのだ。

「あれ……何で？」

「多分リュウガと一時的に融合したからだろうね。君が本来持つべきカードデッキに変わったんだと思うよ」

「じゃあ、ナイトはもうないのか……？」

「まあ、そうなるね。でもその龍騎のカードデッキが元はナイトだったのは間違いないよ」

真司は蓮の形見が無くなってしまったのかと不安になるが、ナイトが完全にこの世界から消えたわけじゃないと分かると、少しだけ安心した。形が変わろうと、ナイトが……蓮が存在していた事に変わらないのだ。

(まだ、一緒に戦ってくれるよな……蓮……)

カードデッキを両手で握りしめながら今は亡き友に思いを馳せた。自分が龍騎だろうとナイトだろうと、やるべき事は一つだ。

「いくぜ、歩。アイツ倒すぞ」

「初めから僕の目的はそれだよ」

真司に淡々といつも通りに答える歩に苦笑しながらもすぐに気持ち切り替え、目の前の脅威を見据えた。

歩の話によると、あれがこの世界を壊す原因となる物なのだそう。絶対に壊させない。この世界の人と…ライダーを守るために…！

真司はリュウガが出てきた窓ガラスにカードデッキを翳してVバツクルを装着した。

そして右腕を左上に真っ直ぐ伸ばして構え、戦う「覚悟」を示した言葉を口にした。

「変身！！」

そう叫んでカードデッキを？バツクルに装填すると、真司の身体に鏡像が重なり、その姿を西洋の騎士を彷彿とさせる仮面を付けた赤い龍の意匠を施されたライダーへと変えた。

これこそが「城戸真司」と言う人間が本来変身すべき姿…仮面ライダー龍騎である。

その瞬間、ディージェントの中でこの世界の情報が再び書き換えられた。

「基点」となるライダーが変わった事でこの世界は「龍騎の世界」に戻ったのだ。

そして龍騎は右手を仮面の前で握りしめ、「っしゃ！」と気合を入

れてディージェントの横に並んだ。

それに合わせる様にディージェントもグローブを強く嵌め直す仕草をしてから、龍騎と目を合わせて互いに頷くと、ともにリュウガに特攻を仕掛けた。

この世界の「歪み」を正すために……。

第十七話：龍騎士の影（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!！」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「今回は前回に引き続き、作者が書いてた時の裏話をしていくぜ！」

加奈「因みに前回のはアレね。第十五話の時の裏話」

皐月「ああ、どっちで話を進めるかって話だったな」

加奈「それで今回は第十七話の時の話をしていく事になるわけね」

皐月「そう言う事だな」

加奈「それじゃあ早速していきましょうか。作者、どんな事があったの？」

カンペ（まず前回の話で書ききれなかった上にどう加えればいいのか分からなかった真司サイドと北岡サイドの話を歩が戦っていた時と同じ時系列で進めようと思いましたf（^^;））

皐月「ああ、アニキの回想シーンな」

加奈「でもあれでゾルダの回想シーンが入っていたのは違和感があったんじゃないの？」

カンペ（ぶつちやけ、その通りです……m（|）m（|）でも書いときたかつたんです!！（。A。;））

皐月「理由は？」

カンペ（第十五話でのファムがタイガを助けに行く時の間の話を入れておきたかったから……。?・;）

加奈「隠れなくてもいいいわよ作者。別に怒らないから」

皐月「それじゃあ次の裏話行くぜ」

カンペ（。・。） 亜由美ちゃんの説教シーンについて。そこに資料が置いてあるから適当に読んでっつて）

加奈「ああ、これね」

皐月「どれどれ……フーン、なるほどな」

加奈「この資料によると、この話書いてた時本気で泣きそうになっ
てたらしいわよ」

皐月「こんなハートフルなもの書く事になるとは思わなかったんだ
と」

カンペ（あーあー聞こえない聞こえない）*。。（）

加奈「どうせだから今回の裏話も行ってみましょうか」

皐月「そうだな。作者、何かないのか？」

カンペ（次回のファイズ編への伏線張つとききました（？）
言つと亜由美ちゃんが会う事になる新キャラの……）

加奈「新キャラ？」

皐月「新しい章に入るんだし、新キャラが出て当然なんじゃないの

か？」

カンペ（実はその新キャラと言うのが、なんと募集したオリキャラなんです！（^^）しかも今後も何度か話に絡んでくる予定の！（、、*））

加奈「おお〜！それはスゴイ！」

皐月「一体どんなヤツなんだろうな？」

カンペ（そのうちこのあとがきラジオにもゲストとして呼ぶ予定なのでしばしお待ちを！（）。（）ノシ）

加奈「たのしみね〜。それじゃあ今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「次回もまた見てくれよ〜！」

第十八話：復活の龍騎士（前編）（前書き）

今回で龍騎編最終回にしようと思ってたんですけど、いつもの倍くらい文字数になってしまったんで半分に分けて更新しますm（

ー m（

まあ、今日の十二時にもう半分を更新する予定なんですけどね f（

^^（

第十八話：復活の龍騎士（前編）

「ソードベント」

「アタックライド…スラッシュ！」

「うおりゃあああ！！」

「…フツ！」

「フンツ！甘い！！」

龍騎とディージェントがそれぞれ斬撃でリュウガに斬りかかるようにするが、リュウガが右手を大きく振ると、後ろで待機していたドラグブラッカーがその手の動きに合わせる様に龍騎とディージェントをなぎ払おうとして来た。

「っ！？避けるよ！」

「オ……グエツ！？」

ディージェントがそう叫びながら避け切れそうにない龍騎の首根っこを掴んで無理矢理引き下がった。
その際、龍騎からカエルが潰された様な声が出たが、ディージェントは何とも思っていない様子だった。

「ゲホツ…お、おい歩！今首絞まったぞ！！もっと別の方法はなかったのかよ！？」

「思い浮かばなかった」

「そんなハツキリ言うな！！」

「暢気に話してる場合かあ！！」

「へ？うおおおお！？」

デージェントと軽い漫才に入ってしまった間にリュウガがドラグブラッカーを突っ込ませて来てそれをギリギリで横に跳んで避けた。
ドラグブラッカーが壁に激突し、大きな穴をあけていた。あんな突進を喰らえば一溜まりもないだろう。

「それじゃあ、まずはあの契約モンスターから何とかしようかな？」

「アタックライド…ダッシュ！」

そう淡々とした口調でデージェントは呟きながら一枚のカードをバツクルに装填した。

その瞬間、デージェントが目で追う事が困難なスピードでドラグブラッカーに突っ込こんで行った。

「はやっ!?!」

「ハアッ！」

『グアアオオアアアア!?!』

デージェントはドラグブラッカーに一瞬で近づき、その顎を思いつきり蹴り上げた。

その衝撃でドラグブラッカーが倒れるが、すぐに態勢を立て直すと逃げ出した。

これはあの王蛇の契約モンスター・ベノスネーカーにも見られた現象だ。例え最強のライダーだとしても、この世界の法則に順じたライダー。この世界でのルール通りに動かなければならない。

これでリュウガが再び「アドベント」か契約モンスターを呼び出して行う攻撃系カードを使って来ない限り現れないだろう。

「チッ、やってくれるな……」

「ソードベント」

リュウガは軽く舌打ちすると、「ソードベント」のカードを一枚取り出し、ブラックドラグバイザーに装填してドラグソードを装備すると龍騎に斬りかかった。

「ううああああー!!」

「うおっとおおお!?!」

その攻撃を龍騎は自分の持っているドラグソードで何とか受け止めると、そのまま鏢迫り合いに入った。

「ぐぬうううう……!!」

「くおおおお……!!」

「もう一人、忘れてるよ」

「アタックライド…スラッシュ!」

「何…!?!?ぐあああ!?!」

リュウガの背後からデージェントが手刀で斬りかかり、リュウガは直撃して屋外へと吹き飛ばされた。

……龍騎を巻き込んで。

「うおおおお!?!おい歩!何で俺まで吹っ飛ばすんだよ!?!」

「このほづが相手に効率よくダメージが与えられるからね。それに吹き飛ばされた程度じゃ、大してダメージはないでしょ?」

「ぐ…正論言つて来やがった……!!」

デイージェントの非道っぷりに龍騎は怒鳴り散らす、合理的正論を淡々と言われてしまい、上手く言い返せなくなってしまう。それでも何か言い返そうとデイージェントを睨みつけると、その姿が一瞬だけナイトと被った。

(え……?)

仮面の上から意味もないのに目を擦って再度見みると、その影は消えていた。

だが、今見た幻影は只の見間違いではないのだろう。

(そうか…コイツ、少しだけ蓮に似てるんだ……)

龍騎はデイージェント…歩に何処か蓮の面影を重ねていた。

それは見た目とか性格とかではなく、もっと根本的な部分でだ。

蓮は昏睡状態に陥った恋人を助ける為に「ライダーバトル」で戦い続けた。

しかし、いざ人を…自分を殺そうとなると、それを戸惑ってしまった。それが原因で裏切り者として殺されたと言っても過言ではないだろう。

そこが似ているのだ。歩も人を殺しそうになった自分にひどく嫌悪感を抱いて塞ぎこんでいた。

きっと歩も人を殺したくないのだろう。自分や、蓮と同じように…。

「ぐう…貴様ああ……」

リュウガが唸りながら態勢を立て直しながらディージェントを睨みつけた。

「この調子だったら何とか勝てそうだね」

『それはどうかな?』

「アドベント」

「な……!?!」

突然背後からくぐもった声と電子音声が聞こえたかと思うと、何か
がディージェントの両腕を掴み、後ろへと引き摺りこんで行く。

何が自分を掴んでいるのかは空間把握能力のおかげで見なくても分かる。金色の大鷲型のミラーモンスターだ。

しかし、今の声が誰なのかは分からない。恐らく、声がくぐもっていたことからミラーワールドから話しかけて来たのだろう。

自分が現実世界にいる時にミラーワールドから近づかれては、空間把握能力の範囲外なので感知する事が出来ない。

だとすれば、このミラーモンスターは後ろで佇んでいるであろうライダーの契約モンスターなのだろう。

「歩……!」

「リュウガは任せた!出来るだけ早く戻る!」

そう龍騎に言い残してディージェントは後ろにあったのである窓ガラスに吸い込まれて行った。

「チツ、オーディンめ…余計な事を……」

「お前が呼んだんじゃないのか!？」

「あんな奴に頼らずともお前らなど俺一人で十分だ。それよりも、続けるぞ…らあああ!!！」

「うおつと!?!おらあ!!！」

「ぐふお!?!」

リュウガは気を取り直して龍騎へ斬りかかるが、それをなんとか受け止めると、ノーガードになった腹部を蹴り付けて後ろへ吹き飛ばす。

「ちいいい…だったらこれだ…!」

「ストライクベント」

そう言いながらリュウガは「ストライクベント」のカードを取り出し、ブラックドラグバイザーに装填した。

すると、リュウガに右腕にドラグクローが装着され、窓ガラスの中からドラグブラックカーが飛び出し、リュウガの背後に待機。そしてリュウガがドラグクローを後ろに引く様に構えると、それに合わせる様にドラグブラックカーが口の中に黒炎を溜め始める。

「く…だったら、俺も……」

「ストライクベント」

龍騎も同じく「ストライクベント」を発動させ、龍騎の契約モンスターである、ドラグブラッカーを真っ赤に染め上げた龍・ドラグレッダーが現れる。

龍騎とドラグレッダーはリュウガとドラグブラッカーと同じ構えを取った。

「はあああああ！！」

そしてほぼ同時に互いのドラグクローを前に突き出すと、後ろに控えていた二頭の龍が炎の塊を吐きだし、激突する。

その瞬間、爆発を起こして龍騎のみが吹き飛ぶ。如何やらリュウガの方が強かったようだ。

「うおおああああ！？」

「ハッハッハッハッハ！如何やら俺の方が上の様だな！！」

リュウガは龍騎の吹き飛ぶ様を見て嘲笑した。

やはり俺の方が強い、俺は決してコイツの虚像なんかじゃない。俺こそが城戸真司だ！！

「で、でも……まだだ！俺は諦めない！！」

「……貴様、何故諦めない！？」

しかし龍騎は立ち上がり再び自分に挑もうとして来た。

リュウガの方が優勢だと言うのに、目の前の自分は決して諦めようとしなない。それが実に不愉快だった。

コイツが自分を作り出したと言うのに、コイツは決して自分を受け入れようとしなない……。

ならば俺は一体何だ？只の幻だとしても言うのか？ふざけるな！そんな事、絶対に認めない！！

「俺はお前が何で俺と同じ姿をしているのかなんて知らない…！でも、これだけは分かる…お前をこの世界にいさせちゃいけないって事が…！」

「チツ！お前が俺を生み出したと言っのに…偉そうな口を…！」

「ファイナルベント」

リュウガは「ファイナルベント」を発動させると、ドラグブラツカ―が自分を囲まむように飛び、リュウガの体が浮かび上がる。更にその両足は黒い炎に包まれて行く。

「この一撃で…貴様を消してやる。そして俺がお前の代わりに『ライダーバトル』で勝利してやろう…そして自分の存在を手に入れる…！」

「お前だけは…お前だけは絶対に勝たせない…！」

「ファイナルベント」

「ふうう…あああああああああ…！はあああああ…！！！」

龍騎も同じく「ファイナルベント」を発動させ、気合を入れて叫びながら独特の構えを取って覚悟を決める。

その龍騎の叫びに呼応するようにドラグレッダーが現れ、ドラグブラツカーの様に龍騎の周りを囲む様に飛び始める。

龍騎にはこのライダーが一体何者なのか、何故自分と同じ姿なのか分からない。

ひよっとしたら自分と同じ人間かもしれない。

人を殺すのは怖い…でも、やるしかない。人とライダーを守るため

に：自分を倒す！！

「たあああああ！！！」

「やあああああ！！！」

赤きライダーと黒きライダーの必殺の蹴り・「ドラゴンライダーキック」が同時に繰り出され、互いの蹴りがぶつかり合った瞬間、二人のライダーは爆炎に包み込まれた。

デージェントはミラーワールドへと引き摺りこまれてそこで漸くこの不死鳥型モンスター・ゴルドフェニックスから解放されるが、それと同時に銃撃がデージェントの装甲に当たって火花が散った。銃撃がした右方向を見ると、そこにはゾルダがこちらへ銃口を向けている姿が目に入った。

更に左にはファム、そして後ろにはオーディンが自分を囲むように立っていた。

「悪いね、アンタを倒せば今回の裏切り行為は水に流すって言われてさ。悪く思わないでくれよ？」

「そうですか。ところで、タイガはどうなりましたか？」

デージェントは自分の今の状況をそっちのけで、今ここにいないタイガの事を尋ねた。

確かあの後、ブランク体になったタイガをファムが連れて逃げて行ったはずだ。

「相変わらず素っ気ないねえ……。東條だったらその娘が殺したよ。“無駄足にしかならないライダーなんて助けるな”ってオーデインが言ってるね」

「そうでもない私が殺されるしね、たまったもんじゃないわ。それにしてもアンタ、今の状況分かってんの？3対1のこの絶望的な状況で勝てるでも思ってるわけ？」

「まあね。一応こういう状況用のカードもあるし」

デージエントはそう返しながら次元断裂からカードを二枚取り出した。

一枚は「アンチ・キル」のカード。そしてもう一枚のカードは周囲一帯の敵を殲滅する為のカードだ。とてもではないが味方や一般人がいる状況では使えない。だが、今がこのカードの使い時だろう。

デージエントドライバーの持ち手部分を引いてカード挿入口を展開させて、最初に「アンチ・キル」のカードを入れて効果を発動させる。

「ツールライド…アンチ・キル！」

「何をするつもりか知らんが、そうはさせんぞ」

「ソードベント」

オーデインは自分の錫杖型召喚機・ゴールドバイザーにカードを装填し、ゴールドフェニックスの翼を模した双剣・ゴールドセイバーを装備すると、特殊能力である瞬間移動でデージエントの眼前に現れ斬り付けようとする。

だが同じ空間にいるならばその相手の行動はすべて把握できる。その斬撃をバックステップで避けると、もう一度持ち手部分を引いてもう一枚のカードを入れた。

「アタックライド…スクリーム！」

電子音声が鳴り響き、三人のライダーはどう行動するつもりなのか身構えた。

ディージェントの攻撃パターンは専用武器を一切使わずに肉弾戦のみで戦う事は今までの戦闘から判明している。

ならば「ブラスト」などと言う「シュートベント」でなければ接近戦を挑んでくる事は必然。

ディージェントの様子を窺うが、特に行動を起こす気配はない。ただ、深呼吸するように体を仰け反らせているだけだ。しかし、その考えが甘かった。

突如、ディージェントの仮面の口に当たる部分に線が入り「シャツ」と言う音と共にその部分の装甲が左右にスライドしてその仮面の内側に隠されていたのである。銀色の横に長い四角形に？字の線が入ったクラツシャーが展開したのだ。
更にそのクラツシャーが徐々に高熱を帯びて赤くなっていく。

「…！いかん！離れる…！」

「スウウウ…ガアアアアアア…！」

「うおおお…！」

「きゃああああ…！」

オーディンが感じた時には既に遅く、ディージェントが息を最大限にまで溜めてその息を一気に吐き出すように…吼えた。

その瞬間、周囲の窓ガラスが割れ、ディージェントを中心に衝撃波が発生し、オーディンを除いた二人のライダーが巻き込まれた。

龍騎は倒れているリュウガを見ていた。やがてその身体から粒子が噴き出し始め、装甲が消えて行く。

そして装甲が完全に粒子となって消滅すると、自分と同じ姿の城戸真司が現れた。

「ハア…ハア……な、何故だ…！俺の方がお前よりも強いと言うのに…何故俺が負ける…！？」

もう一人の城戸真司は苦しそうに問い掛けてきた。その間にももう一人の城戸真司の身体からは粒子が噴き出している。龍騎はその問いに答える様にポツリと口を開いた。

「お前には、何か守るものがあつたのかよ……？」

「何…だと……？」

「俺は人とライダーを守るために戦っているんだ！何もかも壊してまで自分の願いを叶えようとするお前にだけは…俺は絶対に負けない…！！」

「ク…ソオ……！！」

龍騎の言葉にそうリュウガは吐き捨てると、身体からより激しく粒子が噴き出し、完全に消滅した。

「勝つ…た……」

龍騎はそう呟くと力尽きて倒れてしまい、それと同時に変身も解除された。

第十八話：復活の龍騎士（前編）（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（）．．（） 皆にとって歩はどんな人？

加奈「あ〜確かに亜由美とかつて歩の事どう思ってるんだろ？」

皐月「というわけでお題となる本人とここに初めて出演する亜由美に来てもらったぜ！」

歩「ここに来るのは出張版の時以来だね」

亜由美「やっと…やっと出れた…!!」 感極まって泣いてる

加奈「何泣いてんの亜由美？」

亜由美「だって！何時も二人が楽しく話してんのを外ですつと見てたんだよ!?!?あんなの寂しすぎる!!」

皐月「ああ〜そっぴゃあ前に外で作者の首掴んで騒いでたなあ」

カンペ（おかげで昇天しかけました（）。（））

歩「それはそうと、僕ってどう思われてるの？」

亜由美「ウ〜…よし!じゃあ歩の悪口を言っこの鬱憤を晴らす!」

歩「?ちよ…!!」

加奈「あ、それ良いわね」

皐月「それじゃあ一人三つづつな。行くぜ」

亜由美「引きこもり、陰険、空気読まない」

加奈「自分勝手、危険物質、正体不明」

皐月「強い、ヒーロー、だけどやっぱ引っぱり込み思案」

歩「orz」

亜由美「落ち込んだあああ!？」

加奈「ゴメン!言いすぎた!」

皐月「最後のが余計だった!スマン!」

カンペ() () 因みに今回倒れてしまつて来れなかった真司は『物騒、目が怖い、なんだかんだで優しい』だそうです)

亜由美「作者追い打ち掛けんなあああ!」

加奈「でも最後のは真司さんグツジョブ!」

皐月「な、なあ歩!お前つて料理上手いんだろ!?だったら今度作つてくれよ!」

亜由美「皐月、それナイス!私もチャーハン以外も食べてみたいな」
「!」

歩「僕: 本当はチャーハンしか作れない……」 泣きそう

亜由美・皐月「しまったああああ!」

加奈「あーもう!作者!これもう收拾つかなくなっちゃったからもう終わらせていいわよね!?!いいでしょ!?!答えは聞いてない!」

カンペ(ちょ……!!!(。・。))

加奈「それでは皆さん!十二時の更新でお会いしましょう!その頃には治まってると思いますから!それでは!」

第十九話：復活の龍騎士（後編）（前書き）

これにて龍騎編・完結！（・・）

そして遂に新キャラが！？

それではスタートオ！（・・）

第十九話：復活の龍騎士（後編）

デージェントは自分のアタックライドの効果で出来上がったクレーターの中心に立っていた。

そのクレーターからは大量の熱気が立ち込めており、所々が余りの高温で赤みを帯びている。

デージェントの使った「スクリーム」のカードは、自分の声を衝撃波として放つ広範囲殲滅用カードだ。

その声の振動による大気摩擦で物体を灼熱化させて粉碎してしまう……まさに、デージェントの“とっておき”だ。

「そ、そんな、大声出せたの？今まで、そんな雰囲気じゃ、なかったのに……」

「人を見かけで判断してはいけませんよ」

ゾルダはクレーターの中で倒れながらもデージェントに問い掛けるが、あっけらかんとした態度で淡々と答えた。

「は、ははは……やっぱり、アンタは敵に回すんじゃ、なかったよ……」

ゾルダはそう苦笑交じりに言うと、ガツクリと気を失った。

「アンチ・キル」の効果によって気絶する程度で済んでいる。それはファムも同じ様で、既に気絶しているようだった。

「むう……まさか、これ程とはな……」

クレーターの外から声が聞こえ見上げてみると、そこにはオーディ

ンが佇んでいた。
どうやら何をするのか感づいて瞬間移動で効果範囲外へ逃げたのだらう。

「確かに神童が言った通り、ここで排除せねばならぬようだ……」
「神童さんを知っているんですか？」

「奴がリュウガを作った様なものだからな」

「……貴方はアレがこの世界を壊す存在だと言う事は知っているんですか？」

「ああ、神崎から聞いた。この世界を崩壊させる存在だとな。だが神童からはお前の事も聞いているぞ、“破壊の代行者”」

「……またその名前ですか」

「お前は確かに“悪魔”の様な存在だな。神崎はお前の事を認めている様だが私は違う。貴様はここで排除しておく必要がありますのだ」
「……そうですか。でも、僕もここで死ぬつもりなんて一切ありません」

「ツールライド…アンチ・キル！」

デージエントはそう淡々と答えると、「スクリーム」を発動させた事によって効果が切れてしまった「アンチ・キル」を再び発動させた。

「フン、またそのカードか。どうやらそのカードは殺傷力を抑えるカードの様だが、そんなハンデを持った状態で私に勝てると思っっているのか？」

「そのつもりです。僕の目的はあくまで『歪み』の修正……この世界のライダーを破壊するわけにはいかないのです」

「アタックライド…スラッシュ！」

デーエージェントは更に「スラッシュ」を発動させ、クレーターを駆け上りながらオーデインに接近し、手刀で斬り付けようとするが瞬間移動でかわされてしまい見失ってしまう。
だが、ここまでは予想通りだ。姿を見失ったと言っても相手が自分の近くにいればどの位置にいるかは把握できている。
ここで更に二枚のカードを取り出し、その中の一枚だけをバツクルに挿入して発動させる。

「アタックライド…ブラスト！」

「…ハアッ！」

「ぐぬう！？」

カードを発動させると同時に右側に現れたオーデインを蹴りつけ、さらに「ブラスト」の効果で足からエネルギー弾を撃ち出してオーデインを吹き飛ばした。

そして、取り出しておいたもう一枚のカードをバツクルに挿入した。

「ファイナルアタックライド…ディディディエージェント！」

右手をオーデインに突き出し、その右腕を左手で抑えて構える。

その間にデーエージェントのライダーズクレストが描かれたビジョンがオーデインを拘束した。

「くう…！う、動けん……！」

ビジョンはデーエージェントの演算能力によって作られたシックスエレメントと次元断裂の塊だ。

そのビジョンは拘束した相手の演算能力を狂わせ、使用不能にして

しまう作用を持っている。
それはオーデインも例外ではなく、瞬間移動をして逃げる事は不可能だ。

「それでは止めの一発、行きますよ？」

デージェントがそう呟いている間に右手にシックスエレメントが溜まって行き、やがて腕全体を藍色のノイズが包み込んだ。

「フウウウ……ハア！！」

「ぬうおおおあああああ！！」

デージェントの「プラス」との併用によって使う事が可能になる必殺技・デイメンジョンバスターがオーデインとその背後に張り付いているビジョンに直撃する。

ビジョンはその砲撃を受けるとそれを吸収して更に光り輝いて行き、砲撃が終わると同時に一際強く輝いたかと思うと、次の瞬間には大爆発を起こした。

例えるなら、シックスエレメントが空気だとすれば、次元断裂空間はそれを入れるゴム風船だ。

シックスエレメントを次元断裂空間に大量に注ぎ込んだために次元断裂空間がその許容量を超えて空間を歪めるほどの大爆発を起こしたのだ。

「……久々に使ったけど、やっぱり威力が高いね」

デージェントはこの威力に正直引いていた。

この攻撃は何らかのサークル内であれば世界が崩壊せずに済むのだが、流石に「ノンポジション」の世界でしようものならすぐに崩壊

してしまう程に強力な為、中々使えずにいたのだ。
たとえサークル内であっても何度も使つていい物ではないが……。

「さて、と…後はこの三人を現実世界に帰してから真司君の所に行こうかな。向こうも丁度終わったみたいだし」

気を取り直してそう呟くと、まずはゾルダとファムを担いでミラーワールドから出て行った。

「ぐぬぬ…く、くそ……！」

デーエージェントがミラーワールドから出た直後、オーデインが意識を取り戻していた。

ここまで早く目を覚ます事が出来たのも、神崎がオーデインしか「ライダーバトル」で勝てないほどにスペックを最大限に高めて作った為だろう。

「まさか、この私が負けるとは…神童の行っていた事は本当だったのか……」

「チツ、この役立たずが」

突然頭上から声が聞こえ、倒れた体を鞭打って何とか立ち上がるとそこには神童が立っていた。

「貴様は…！と言う事だ、神崎から聞いたぞ、あのリュウガがこの世界を崩壊させるほどの異端分子だと…！」

「何言つてんだ？俺はアレを使えば簡単に終わらせる事が出来るって言っただけだぞ？」

「お、おのれええええ！！！」

「ファイナルベント」

神童はそう言つて極悪人の様な笑みをオーディンに向けると、オーディンは激情して「ファイナルベント」を発動させた。だが、これが神童に狙いだった。

「馬鹿が、甘えんだよ」

「ファイナルベント」の効果によって呼び出されたゴルドフェニックスを瞬時に次元断裂をキューブ状に展開してその中に閉じ込めた。更にそのキューブの面積が徐々に小さくなって行き、ゴルドフェニックスがその場から消えた。

それと同時にオーディンの身体が灰色になって行き、形状も質素なものになってしまう。これはミラーモンスターとの契約が消えた事を意味していた。

「そ、そんな…事が……」

「お前の契約モンスターは別に死んだわけじゃねえよ。次に奴が行く世界に餌として送り込んでやっただけだ。ま、どうせ神崎とかいうヤツがまた新しく作り直すだろうけどな。バハハハハ！！！」

嘲笑する神童をオーディンは悔しそうに睨みつけるが、先程のダメージに加え、ブランク体になった為に力が失われてしまい、意識がどんどん薄れて行く。

このままでは終われない……！そう思った時だ。

「何をやってるんですか？神童さん」

最後にミラーワールドであるにも関わらず、神童と同じように生身で立っている青年が目に入った所で、オーデインの意識は途切れた。

デージェントは二人のライダーを現実世界に戻した途端、この世界のルールによって変身が強制解除されてしまい、そのまま変身せずにミラーワールドへと入って行った。

空間演算を使えば、この「龍騎の世界」に限り、ミラーワールドへ例え変身せずとも介入する事が出来るのだ。

それに態々変身せずとも、空間演算を行えばオーデインを担いでミラーワールドから出る事くらい造作もないのだ。

そして再びミラーワールドへは行ってみると、そこには神童とブランク体になったオーデインがいた。

間違いなく神童がオーデインに何かしたのだろう。

「フン…来たか、人形」

「何をしたんですか？神童さん」

「チツ、やっぱり人形には何を言っても駄目だな」

会話が全くかみ合っていない事に軽い苛立ちを見せた神童は舌打ちして更に続けた。

「大した事じゃねえよ。コイツの契約モンスターをお前の連れてた小娘が流された世界に送り込んでやっただけだ。どうした？早く行かねえと喰われちまうぞ？」

「……確かに、この世界にはもう『歪み』は存在してませんからね。すぐに迎えに行きますよ」

そう淡々と答えると、神童は忌々しげに顔を歪めた。

「チツ、一々癪に障る野郎だ……！俺が世界に直接干渉出来りゃあ、一発殴つときたい所だぜ……！！」

そう言い残して次元断裂空間を展開してその中に消えた。

歩は頭をガリガリ掻きながら今後の行動を考えた後、一先ずこの気絶したオーデインを現実世界に帰す事にした。

「……ん……」

真司は気を失っていると、何かに呼ばれた様な気がした。

「し……君」

その声は何処か聞き覚えがある。そうだ……この感情の入ってない声は……

「真司君、大丈夫？」

歩だった。歩は真司の上半身を起こして声を掛けて来ていたのだ。真司はその姿を認識すると今できる精一杯の笑顔を作った。

「歩…俺、勝ったぞ……」
「ウン、知ってるよ」

歩が抑揚のない声でそう答えると、真司は更に続けた。

「アイツ、何者だったんだろうな……。何で俺の姿をしてたんだろうな……」

「……それは知ってるけど、教えられない。自分自身で答えを見つけてね」

「ハハツ…歩は厳しいなあ……」

真司はそう苦笑しながら答えた。

知っていると言う事は「オリジナル」である自分が一度通った道と言う事だ。だったら自分で見つけないとな。そう思っていると、歩は更に続けた。

「それから、僕もそろそろ別の世界に行かないといけなから、せめて君を安全な所に運んでからこの世界を出るよ」

「そっか…じゃあ行く時になったら俺を起こせよ……。見送りくらいしてやりたいから……」

そこまで言うと、真司は深い眠りについた。相当疲れていたのだろう。何せ一度「歪み」に身体を乗っ取られていたのだから。

その寝顔はとても安心しきった表情で、歩はそれを確認すると、亜由美を迎えに行かなければならない筈なのに、ゆっくりとした足取りで真司を背負って自分の移住先へと歩いて行った。

少しでも疲れを取ってもらえるように……。

翌朝、真司は目を覚ますとそこは自分が住んでいたマンションだった。何やら良い匂いとジャツジャという何かを炒める音が聞こえ、起き上がってキッチンを見ると、歩が料理をしている姿が目に入った。

この匂いからしてどうやら作っているのはチャーハンの様だが……朝からチャーハンというのはどうなのだろうか……。

「おい歩、何やってんだよ。それに、亜由美ちゃんはどこ行ったんだ？」

「あ、真司君。起しちゃったみたいだね。亜由美だったらもうこの世界にはいないよ。別の世界に飛ばされた」

「っておい！それって大丈夫なのかよ！？そんな暢気にチャーハン作ってる場合じゃねえだろ！！」

歩はチャーハンを作る手を止めずに衝撃的な発言をした事に、最早恒例となりつつある真司のツッコミが炸裂した。

「それなら大丈夫だよ。僕は亜由美と少しだけ繋がってるからここに飛ばされたか分かるし、飛ばされた世界の時差がここよりかなり遅いみたいだから今行っても向こうではまだ一時間も経っていないよ」

「そ、そうなのか？」

歩は「ウン」と返しながら事前に置いておいた三枚の皿に均等にチャーハンを盛ると、一つにラップをして残りの二つを卓袱台ちやぶだいに乗せて座った。

その右手には包帯が巻かれており、恐らく昨日の戦いの時に負ってしまったのだろう。

「それじゃあ、朝食にしようか」

「なあ歩、お前ってひよつとしてチャーハンしか作れねえだろ？」

「真司君も餃子しか作れないでしょ？」

今気になった事を言ってみたら、見事に言い返された。人が何気に気にしてる事を……。

「うるせえよ！？てかもう一つのチャーハンは何なんだよ！？」

「アレは真司君の昼食用だよ。これから先、大変だろうけど頑張つてね」

「え？お、おう……」

その不意打ちの様な優しい言葉に面喰ってしまったが、取り敢えず朝食を食べる為に席に着いた。歩の口調や表情はともかくとして……。

「そうそう、君に一つ助言をしておくけど、リュウガ…黒い龍騎は完全に死んだわけじゃないよ」

「え？そうなのか？」

朝食もそろそろ食べ終わりそうになって来た時に、歩がそう切り出して来た。

「ウン、あれはある人物がこの世界にいるもう一人の君に力を与えて生まれた物だからね。態々そんな事をしなくても、時が来ればい

ずれ生まれて来る物だったんだよ」

「……じゃあ、何時かまたアイツと戦わなくちゃいけないって事が」
「そう言う事。でも、君ならきつと大丈夫だよ」

今の彼なら大丈夫だろう。

この城戸真司という存在が本来変身する筈の龍騎に戻ったのだ。
これでこの世界の「歪み」は完全に消えて、本来の歴史線に戻っている。

もうこの世界に来る事もないだろう……だからこそ、こうして最後に話しておきたかったのだ。この世界の真司と……。

朝食を食べ終わった歩は、立ち上がって玄関まで歩いてドアを開いた。

そこのは外の景色ではなく、歩の出す灰色の板の様なドロリとした空間が広がっていた。あそこから別の世界に行くのだろう。

「もう行くのか？」

「ウン。あ、そう言えば、亜由美が君の事心配してたよ。何か言っておきたい事があつたら伝えておくよ」

「え？あ〜じゃあ『心配かけてゴメン。俺はもう大丈夫だから』って伝えておいてくれ」

「分かったよ」

歩がそう言つて灰色の空間に入りそうになった時、真司はある事を思い出した。

「あつ！ちよつと待ってくれ！」
「？何だい？」

真司が歩を呼び止めると歩の前に立って右手を互いの顔の前に出した。

「？」

「ハア、お前なあ、こういう時はこうするんだよ」

歩は真司が何をしたいのかよく分からずに首を傾げていると、真司はその様子に溜め息を吐いて歩の右手を掴んで自分の右手と合わせた。

「……………！」

歩は真司の手から包帯越しに伝わって来る不思議な暖かさに驚きながら真司を見ると、真司はニカツと笑ってこう言った。

「俺もこの先、いろいろと大変かもしれないけど、それはお前だつて同じだろ？だったら、お前もガンバレよ！！」

「……………ウン、ありがとう」

真司の快活な笑みにうつされて、歩も微笑んだ。そしてその言葉は本当に感情の籠った声だった。

「じゃあ、行って来る」

「おう！行つて来い！！」

歩は何時もの口調に戻って軽く手を振りながら灰色の空間に入って行くと、真司は大きく手を振りながら歩を見送った。

歩が次に行くべき…亜由美が飛ばされた世界は…「ファイズの世界」だ……。

「う……ア、アレ？ここ、どこ……？」

亜由美は目を覚ましすと、コンクリートがむき出しの天井が目に入った。

身体を起こして辺りを見渡すと、元はホテルの一室であつたのである。ポロポロの部屋だつた。

「え〜と、何があつたんだっけ……。あ、そうだ…真司さんが『歪み』に飲み込まれて、それから逃げようとしてた時に吹き飛ばされたんだっけ……。じゃあ、ここはどこ？まだ“龍騎の世界”？」

何があつたのか思い出していると、自分の身体に毛布が掛かっていた事に気がついた。

という事は誰かが掛けてくれたのだろうか…？だとしたら歩はもうここに来ているのだろうか…？

そんな事を考えていると、この部屋のドアが開いて一人の男が入って来た。

しかし、その男は歩ではなかった。
長い黒髪を後ろで縛り、ダークレッドのロングコートを羽織った男
だった。その表情は若干鋭い目つきと相俟って、険しい印象を与え
ている。

「……………」

男は亜由美を見るとその目を一瞬だけ驚いたように丸くさせるがす
ぐに元に戻り……踵を返し部屋から出ようとした。

「ちよつと待ったあああ！何で出ようとするんですか！？アナタが
私に毛布掛けてくれたんでしょ！？せめてそこは“起きたか”くら
い言ったらどうですか！？」

男の行動にそうツツコムと、男はその動きを止めて振り返ると、亜
由美を不思議そうな目で見た。

「俺が…怖くないのか…………？」

「何で初対面で会った人をいきなり怖がらなくちゃいけないんです
か！？そりゃヤーさんみたいな顔してたら怖がってたりしますけど
も！そんなに怖がる要素なんて見つかりません！！！」

先程起きたばかりだと言うのに中々にキレのあるツツコミを繰り返
す亜由美はその流れで自己紹介に持ち込んだ。

「私は須藤亜由美！貴方は誰ですか！？」

亜由美がそう自己紹介をすると、男も口籠りながらも自分の名前を
口にした。

「みなほ皆葉…みなほこうたろう皆葉好太郎…」

今ここに、新たな出会いが生まれ、新たな物語が紡がれようとしていた。

第十九話：復活の龍騎士（後編）（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月と！」

真司「真司の！」

加奈・皐月・真司「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「龍騎編、遂に完結!!！」

皐月「というわけで今回はゲストとして真司のアニキに来てもらってるぜ〜!!！」

真司「なあ…さっき収録する前に歩に会ったんだけど、アイツどうしたんだ？何かスツゲー泣きそうな顔してたけど……」

加奈「う…それは聞かないで下さい……」

皐月「あの時はマジでやり過ぎたと思ってる…スマン……」

真司「？」

加奈「そ、それはそうと作者！今回のお題をお願いします！」

真司「流した!?!？」

カンペ（ ） （ ） （ ） 龍騎編を振り返ってみて

皐月「これはつまり大まかな回想と作者が書いてみた感想だな」

真司「何でも作者はTVスペシャルである後どうなったかをイメージしてこの話を書いてたみたいだな」

加奈「その中の候補にはもう一つの結末も考えてたみたいけど、ナイトが主人公でもかっこいいんじゃないかって思ってたこっちの結末にしたらしいわよ」

皐月「でも結局は龍騎に戻ったけどな。やっぱりアニキは龍騎じゃないとな」

真司「何かその言い方、ファイズみたいになってるぞ」

加奈「ファイズと言えば、今回出てきた新キャラも気になるわね」
皐月「アレが作者の言ってた募集キャラか？今のところどんな奴かはよく分かんねえな」
真司「でも悪い奴じゃなさそうだよな」
加奈「ま、何はともあれ、これからの活躍に期待ね」

皐月「さて、今回のあとがきラジオはここまでだぜ！」

真司「質問と！」

加奈「感想もお待ちしております！」

カンペ（それでは皆さん、7月3日16時更新予定のファイズ編でお会いしましょう）^^^／（

第二十話：麗しき赤き閃光と拒絶の野獣（前書き）

オリジナルライダーを募集してくださいました伸剣さん、どうもありがとうございます！！（・・・）

水音ラル流に書いた好太郎君を気に入って頂ければ幸いです！
それではファイズ編、スタートオ！（・・・）

第二十話：麗しき赤き閃光と拒絶の野獣

ファイズの世界……

その世界にある人の一切通る事のない山中にあるトンネルの中で、一人の中年男性が壁に凭れ掛かって荒い息を上げていた。

「ぜえ…ぜえ…な、何で、はあ…俺が、ぜひい…こ、こんな目に…ぜえ……」

「見つけたぞ」

女性独特の高く凜とした声がトンネルの中に響き、男は「ひっ!？」と小さく悲鳴を上げながらトンネルの出口を見た。

そこには黄色く発光する大きな円を真ん中から縦に割った様な複眼が付いたマスク。

黒いボディースーツの四肢に走った赤く光るライン。そのラインは腹部に備え付けられている横倒しになった携帯電話へと繋がっている。そして胸部を包み込む銀色の装甲のパワースーツを身に付けた人影が右手にバイクハンドルの部分だけを握って立っていた。

仮面ライダーファイズ…この世界に存在するライダーの一人である。

そのパワースーツは胸部が膨らみ、腰が括くびれている事からその装着者が女性であることが分かる。

そのライダーはツカツカと男に近づいて行くと、男に変化が現れた。

「く、来るな…！クツソオ…!!」

男の顔に象の模様の様な痣あざが浮かび上がり、更に男の身体が灰色に

変色しながら盛り上がりつつ行き、その姿を人と象を掛け合わせたかのような異形：オルフェノクへと変えた。

オルフェノクはこの世界の脅威であり、人類の進化系とも言われる存在だ。

人間が死んだ際に極稀に覚醒し、その人を超えた圧倒的な力に溺れて人を襲い始め、その襲った人をもオルフェノクに変えてしまう事もありうる灰色の異形である。

『うあああああ！！』

その象を模したオルフェノク：エレファントオルフェノクは我武者羅にファイズへ突っ込んで行くが、ファイズはその突進を横に軽く避けながら腹部に供えられた携帯電話型変身ツール・ファイズフォンの表面に付属されているメモリーカード型キー・ミッションメモリーを引き抜き、右手に持ったバイクハンドルのメモリー挿入口に挿入した。

「レディ」

電子音声が鳴り響くと、バイクハンドルの根元から赤い光線：フォトンブラッドが噴き出し、エネルギーブレードが生成される。

ファイズ専用武器の一つ、ファイズエッジである。

フォトンブラッドは強力な毒性を持つ、あらゆる生命体に有毒な流体エネルギーである。

それはこの世界の脅威でもあるオルフェノクにも有効であり、ファイズが逆袈裟にエレファントオルフェノクを斬り付けたあとからは、物質分解を起こした灰が飛び散っていった。

「はあああつ！」

『ぐがああつ！何故だ！？なぜ俺の日常を奪おうとする！？俺はただ普通に生活したいだけだ！それなのにこんな姿にされた上に、逆らうなら死ねだど！？ふざけるな！！』

エレファントオルフェノクはその攻撃に怯みながらも、必死に語りかけた。

いつもの様に平穩に暮らしていたら、今の自分に似たような怪物に突然殺され、気が付けばそいつと同じ化け物になっていた。

その直後「貴方は選ばれた人類だ」などと言われ、人を殺すように命令してきた。それを頑なに拒んだ途端、目の前にこのパワードスーツを付けた女が現れ、襲い掛かって来たのだ。

こんな理不尽な事があってたまるか…！

「貴様はオルフェノクでありながらその使命を拒んだ。そんな反逆者を裁くのが私の仕事だ。怨むんだったら自分の運命を怨むんだな」

『ぬうううう…ウガアアアアアアア！！』

ファイズはファイズエッジをヒュンヒュンと軽く振りながら冷酷な答えを発した。

その発言に止めどない怒りが湧いてくると、その身体は何倍にも巨大化し、下半身は象の胴体と四肢が形成される。

エレファントオルフェノク・激情態である。

「激情態か……実に惜しい人材だな」

激情態はオルフェノクの中でもたまに見かけるが、その姿になったオルフェノクは戦闘力が数段強化される。ただ、怒りに身を任せて本能のみで暴れるので攻撃が単調になってしまふのが欠点だ。

殆どの者がそうで、その力を制御できる者は一握りしかない。

このエレファントオルフェノクも例外ではなく、本能のみで暴れている。

『ウウウウウ…バオオオオオ！！』

エレファントオルフェノクはその大木の様な足でファイズを踏み潰そうとするが、ファイズは前転してその攻撃を掻い潜りながらファイズエッジに付けたミッションメモリーを引き抜いて刀身を解除すると、今度は右腰に付けた懐中電灯型ツール・ファイズポインターを取り出してそれをメモリー挿入口に挿入した。

「レディ」

そしてそれを右足の脰脰（うけうで）に装着すると、ファイズフフォンを腹部に着けたまま開き、エンターキーを押した。

「エクシード・チャージ」

その電子音声が鳴ると、ファイズフォンからフォトンブラッドが右足のラインを通じてファイズポインターに送り込まれる。

それを立ったまま右足を一步踏み出した状態で確認すると、その巨体ゆえにトンネルの中では上手く身動きが取れないエレファントオルフェノクに向かって助走と付けてトンネルの天井ギリギリまでジャンプした。

「はっ！やあっ！…！」

『バオオオオウ！？』

ファイズは空中でエレファントオルフェノクに右足で回し蹴りを放つと、ファイズポインターから赤い光線が放たれ、それがエレファ

ントオルフェノクの中身に命中すると、光線が円錐状に展開し、拘束・ロックオンした。

「はあああああつ!!！」

『バオオオオオオオ!!！』

回し蹴りの勢いで空中で一回転すると、そのポイントに吸い込まれる様に飛び蹴りを放った。

その飛び蹴りがポイントに触れた瞬間、ポイントがドリルの様に高速回転し、エレファントオルフェノクを貫いた。

ファイズの必殺技の一つ・「クリムゾンスマッシュ」である。

完全に貫いてエレファントオルフェノクの前方に着地すると、その巨体に の文字が浮かび上がり、青い炎に包まれると、灰となって崩れていった。

(アレがファイズか…でもあれが『基点』という訳じゃないみたいだね)

灰色のビジネススーツを身に付けた歩は、トンネルの出口の物影に隠れながらその戦いを見ていた。

しかしこの世界の情報では彼女がこの世界の「基点」ではない事は明らかだ。

この世界の名は……

「“デルタの世界”…か……」

「ッ!誰だ!?!」

「……見つかったみたいだし、そろそろ亜由美を迎えに行こっかな？」

そう呟くと次元断裂空間の中に溶け込むようにしてその場から消えた。

「いない…クソ、逃げられたか…!!」

ファイズはすぐさま声が聞こえてきたトンネルの出口まで駆けつけたが、既に逃げられたあとだった。

もし一般人にこの光景を見られようものなら、自分の所属する組織の素性が公に広がる危険性がある。早急に対処しなければ…!

しかし、気になる事もあった。ここは山中で、隠れる場所などいくらでもあるが、自分のオルフェノクとしての感覚さえ使えばそんな物など無いに等しい。

だと言うのに、先程の気配や臭いがまるで煙の様に完全に消えているのだ。とても一般人どころかオルフェノクに出来る芸当ではない。

「とにかく、この事は正幸まひゆきに報告した方が良さそうだな」

そう言ってファイズフォンを取り外して開き、オフキーを入力すると、全身を包んでいたパワードスーツが赤く発光し、変身が解除された。

中から現れたのはウェーブ掛かった首筋まである茶髪に、鋭い目つき、プリツとした柔らかそうな唇、更に黒いレディスーツを身に付けたクールビューティーとも称されそうな美女だった。

その女性は軽く髪を掻き上げると、自分がここまで来るために乗って来た黒をベースとした赤いラインが所々に入ったバイク・オートバジンの左部分にバイクハンドルを差し込んでから跨り、ヘルメットを被るとその場を後にした。

既にエレファントオルフェノクの灰の山は風に吹かれて跡形もなく消え、何事もなかったかのようにその場を沈黙が支配した。

皆葉好太郎は現在の状況に戸惑っていた。

人が自分に寄って来ない事などあの時から日常茶飯事なのだからもう慣れたが、その逆の展開が訪れるとは夢にも思わなかった。

今自分の背後にはテコテコと自分の後ろから高校生くらいの少女が後を付いて来ているのだ。

この少女は自分がこの世界に来た時に倒れているところを発見して、気まぐれで保護したのだが、少女は自分から離れるどころか付いて来ているのだ。

「……何故俺に付いて来る？」

「え？うーん、何ですかね？多分、助けしてくれたから、じゃないですか？」

自分の質問に少女…須藤亜由美はそう答えた。

助けたから、付いて来た……？そんな理由で？自分がアレを持っている限り、向こうから自分に寄って来る事など無い筈なのに……。ならアレの副作用が消えたのか？いや、それはない。何故ならこの亜由美という少女を除いて、周りが自分を避けているからだ。

好太郎はある理由で“人から避けられる体質”になっている。それこそ満員電車に乗るうものなら自分の入った車両だけ貸切も同然の状態になったり、子供に近付いただけで大泣きされたり、今だって周囲の人間が自分から避け、目も合わせない様になっている。その筈なのにこの少女だけはそんな素振りは一切見せず、自分に付いて来る……この女、一体何者だ？世界の脅威というわけではなさそうだが……。

「あの、一つ聞いていいですか？」

「……何だ？」

「じじってどこですか？」

「……」

亜由美の口から予想外の質問が出て来た。

そんなの、こつちが知りたい。俺はこの世界に来たばかりなんだぞ？

「……知らん。というか、お前はここの人間じゃないのか？」

「ああ〜でもこれって教えてもいいのかな？歩もあまり関わらない方がいいって言ってたし」

「歩？誰だそれは？」

「私の兄。今いろいろあつてはぐれちゃって、探してるんです」

「……だったら、俺に関わってないで探しに行ったらどうだ？」

「う〜ん…そうしたいんですけど、この辺りの事よく分かんないから、せめて知り合いと一緒にいた方が安心なんじゃないかって思ってる……」

「知り合い？誰の事を言ってるんだ？」

「好太郎さんの事。だって互いの名前知ってますよね？」

（……どうしてこうなった）

好太郎は自分の浅はかさを後悔した。

これは例えるならアレだ。捨て犬がかわいそうに見えてエサをあげたら懐いて後を付いて来てしまった感じだ。

『ぎゃあああああ！！』

そんな事を悶々と考えていると、丁度差し掛かった路地裏の隙間から悲鳴が聞こえてきた。

この世界にも脅威が存在している事は知っている。だとすれば、誰か襲われたのだろうか。

いくら自分が全てに拒絶される存在だとしても、助けられる命を放っておく事など出来ない。

好太郎は路地裏に入ってその悲鳴の聞こえた場所まで走りだした。

「あつ！ちよつと、待つてくださあゝい！」

「何故付いてくる！？危ないからどっか行け！！」

「誰かが襲われてるかもしれないのにほっとけません！それにこのまま私の事撒くつもりだったんじゃないですか！？」

「チツ！勝手にしろ！！」

好太郎は追って来る亜由美を怒鳴り散らすが、如何やら簡単には離れてくれないらしい。

それでも、この先に待ち受けているであろう脅威と、自分のあの姿を見ればどうせ逃げ出すに決まってる。

そう、全てを拒絶するあの姿を見れば……。

歩はバイクに乗って亜由美の気配を追っていた。

このバイクはディーゼントドライバーの成長記録機能が手に入れた情報によって構築したディーゼント専用のバイク・マシンディージェンターだ。

インディゴカラーのボディに黒いラインが所々に矢印を描く様に走っており、前方にはディーゼントのマスクと同じ二本線の大きな矢印が下を向いた状態で入っているのが特徴だ。

今まで殆ど乗る機会がなかったが、こうして久々に乗るのは実に一年ぶりだったりする。

因みに免許証はこの世界に来た時に役割と同様に手に入れた。

「…………どうやら、この先にいるみたいだね」

歩は路地裏への入り口で止まるとヘルメットを外してバイクから降り、次元断裂空間を展開してその中に飲み込ませると、マシンディージェンターは跡形もなくその場から消えた。クラインの壺へ入れたのだ。

クラインの壺は無尽蔵に貯蓄できる異次元空間であり、その概念と演算法さえ理解していれば、ワールドウォーカーなら誰でも使う事が出来るのだ。

他のDシリーズに付属されているカードホルダーにもこの概念が使われている。

歩は路地裏へ入ろうとした所で別の気配がする事に気付いて立ち止まった。

(この気配…まさか…………)

歩が感知できる気配は三つある。一つ目は自分の異次元同位体…つ

まり亜由美の事だ。

二つ目は今自分がいる世界の「基点」。しかしこれはコンタクトを取った人物が「基点」であるかどうか分かる程度の物だ。

そしてもう一つは…自分と同じ存在・Dシリーズだ。

この先からはDシリーズと亜由美の二つの気配がするのだ。

何故亜由美がDシリーズと一緒にいるのかは分からないが、少なくとも他のDシリーズは、Dプロジェクトを知らずに好き勝手に世界を回っている連中が殆どだ。

最悪の場合はこの計画をよく思っていない者がいて、戦うことにもなるかもしれないだろう。

「……………」

歩は険しい顔をしながら、バイクから降りてからもずっと着けていたグローブを強く嵌め直すと、そのDシリーズと亜由美の気配がする路地裏へと入って行った。

亜由美と好太郎は悲鳴の発信源である開けた場所に辿り着いた。

そこには腰を抜かして倒れている男性と、灰色の人より一回り大きい猿の形をした怪物がいた。

男性はその灰色の猿を見上げながら、必死に逃げようとしており、灰色の猿はその様子をただ見ているだけだった。

「大丈夫ですか!？」

「た、助け……………」

「!？」

亜由美は男性に駆け寄りながら声をかけると、男性はこちらを向いて助けを乞おうとしてきたが、言いきる前に男性の身体が灰になって崩れた。

「そ、そんな…どうなつてんの…？」

「……お前がやったのか？」

『あつたりめえだろうが。他に誰がいるんだよ？』

亜由美が目の前で起きた現象に驚愕しながら、元は男性だった灰を見つめてみると、好太郎が灰色の猿に地面に響くような低い声で問いかけていた。
それにあっけらかんと言った態度で灰色の猿が答えると、好太郎は更に続けた。

「何故こんな事をした……」

『そんなの決まってるだろおが、仲間を増やす為だよ。偶にあるんだよ、俺達オルフェノクが人間を殺したら、そいつもオルフェノクになる事が』

「……なら、これを見た俺達もこうする気か？」

『そりゃそうだろ、これが俺の仕事だからな』

“仕事”…そんな言葉で人を殺した事を割り切った灰色の猿に亜由美は嫌悪感を抱いた。

それは好太郎の方も同様で、その目は憤怒の色に染まっていた。

「……そうか、なら俺がこれからする事も、その“仕事”だな」

『ああん？何する気だあ？』

「お前を…消す……」

『消す？……お前、もしかして今噂になつてるデルタか？』

「違うな、俺は……」

そこで言葉を区切ると好太郎は、ロングコートの内ポケットからトリケラトプスの横顔を模したグレーのゴツゴツとしたバックルを取り出し、それを腹部に宛がうと、トリケラトプスの後頭部に当たる部分から帯が飛び出して好太郎の腰を一周すると、ベルトを形成した。

(え！？アレってもしかして…！？)

亜由美には見覚えがあった。形は違うものの、歩のディーゼントドライバーに酷似しているのだ。

更に好太郎は、右ポケットから一枚のカードを灰色の猿に見せながら言い放った。

「全てを拒絶する者だ」

そのカードにはディーゼントに酷似した赤黒いライダーが描かれていた。

好太郎はそのカードをバックルの上部に設けられているカード挿入口に挿入した。

「カメンライド……」

挿入されるとトリケラトプスの口の部分が滑らかに動いてカード認証音声を発し、「ギョインギョイン」という待機音声が流れだした。

更に好太郎は左足を前に出すように広げて低く構え、右手を鉤爪の形にして自分の顔の前まで上げて相手に鉤爪を向けた状態から自分の方に反転させると唸るように呟いた。

「変身…！」

「デイズエクト！グオオオオオオ！！」

「キャツ！？な、何！？」

右手の甲でバツクルの突起部分である角を振り下ろす様に叩きつけると、再びトリケラトプスの口が動いて認証音を発し、恐竜のような雄叫びが衝撃波の様に周りに広がって行く。

この感覚は物理的な物ではない。強いて挙げるならば精神面に響いて来るような…“恐怖”という感情だ。

その雄叫びと共に、好太郎の身体に変化が起きた。好太郎の身体が灰色のドロリとした、まるで溶岩を彷彿とさせる様な次元断裂に包み込まれる。

更にトリケラトプスの赤く輝く目から無数の黒い刃物の様な物が飛び出し、腕・脚・背中・そして頭部に突き刺さる。腕と脚に付き刺さった黒い刃物は外側に突き出る形に備われ、背中には縦二列に突き刺さり、まるでステゴザウルスの背中のような形になっている。

そして頭部には他のものより二回り大きい黒い刃物が前に突き出す形に二本突き刺さり、黒い刃物が突き刺さった箇所から一瞬だけ鮮やかなマグマの様なオレンジ色に染まるが、すぐにマグマの温度が下がったかのようにダークレッドに変色する。

そして最後に二本の角が若干上部に刺さった紫色の大きな複眼が禍々しく光り、その全ての変化を完了させた。

ダークレッドの装甲に、身体中に突き刺さった黒い刃物の所為で若

干見えづらいが、黒いボディースーツの四肢にジグザグに走った白いライン。

トリケラトプスを彷彿とさせる黒い二本角に、肉食竜の如く口が裂けるほどに広がった銀色のクラッシュャー。

その姿はまさしく仮面ライダーであり、どこことなくディージェントに酷似した姿だった。

「グウウ…ガアツ！」

低く唸り声を上げたかと思うと、右拳を思いっきり地面に叩き付けた。その際、「ドゴン！」とまるで隕石でも落ちて来たかのような音が大気を震わせ、地面に拳サイズの穴を作っていた。

（もしかして、好太郎さんが歩の言ってた…他のDシリーズ…！？）

「さあ…遠慮なく暴れようか……」

ゆっくりと顔を上げながら好太郎だったDシリーズと思われるライダーは低く呟いた。

その声はまさしく、何もかもを拒絶する絶対者の声だった。

第二十話：麗しき赤き閃光と拒絶の野獣（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

巧「……巧の」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達と仮面ライダーファイズの主人公である乾巧をゲストに迎えて行くぜ！」

巧「また来ちまったよ……」

加奈「まあそんなに尖がらないで下さいよ。本編には出れない代わりにこつちでは出れるんですよ？」

巧「それが嫌なんだよ！お前らのテンションは高いし、作者が無茶振りして来るし、付いて行けねえんだよ!!」

皐月「まあそう言うなって巧。今回は作者もそんな無茶振りしないで今回の話をまとめるだけでいいってよ」

加奈「まあ、ネタ切れともいうけどね」

カンペ（サーセンm）——m.（）

巧「……そう言う事だったら俺からいくつか言いたい事がある」

加奈「え、何ですか？」

皐月「言ってみろ」

巧「あのファイズって明らかに俺のリイマジだよな！？何で女になつてんだよ!!」

カンペ（スマン、オリジナリティを出したくてつい……f（^^；））

巧「オリジナリティにもほどがあるだろうが!!」

皐月「まあ落ち付けて巧」

加奈「でもカツコいいじゃないですか。出来る女って感じで」

巧「カツコいいってのは別にかまわねえけど女ってのが俺のプライドが許せねえ!!」

加奈「……乾さん、これ以上の女性への冒瀆は許しませんよ?」

脳天チヨップスタンバイ

皐月「あ…巧、お前逃げた方がいいぞ」

巧「ウルセエ!まだ言いたい事が山ほど……」

カンペ() () 放送事故の為、しばらくお待ちください()

加奈「さて、それじゃあ後半部分の話をしましょうか」

巧「 タンコブが出来て机に突っ伏してる

皐月「ああ…あ…言わんこっちゃない……」

加奈「後半は読者の方が応募したオリジナルライダーの変身シーンだったわね」

皐月「ああ、作者曰く、『自分の頭の中にもこんな感じのボツキヤラがいたからイメージしやすかった』らしいぜ」

カンペ() () 因みに共通点は「無口・一匹狼・イメージ

カラーがダークレッド・戦闘中は狂った様な感じになる」です)

巧「ほぼ全部じゃねえか……」

皐月「お、巧。大丈夫だったか？」

巧「大丈夫なわけあるかよ……ついさつき木場が見えたんだぞ……！」

皐月「まあ加奈の脳天チヨップはかなりキツイからなあ。もう人間業じゃねえよ」

加奈「皐月も逝つとく……？」

皐月「いや、遠慮しとく。それとあと字が違うぞ」

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「オリジナルライダーを応募してくれた伸剣！ありがとうな！！」

巧「そこは呼び捨てするんじゃないやねえ！！ちゃんと“さん”を付ける

“さん”を！！」

皐月「巧だつて付けないだろ？」

巧「ウルセエよ！！」

加奈「まあとにかく、伸剣さん、どうもありがとございました！これからも応援よろしくお願い致します！！」

第二十一話・荒れ狂う恐竜とデルタ乱入（前書き）

さあいよいよディジエクトのバトルシーン！（・・）

果たしてその実力とは！？

それではスタートオ！！（・・）

第二十一話：荒れ狂う恐竜とデルタ乱入

スマートブレイン：表向きは日本が誇る世界的に有名な大企業ではあるが、裏ではオルフェノクを統括する秘密組織である。

この組織の目的は、全人類をオルフェノクに統一させ、新たな人類として繁栄して行く事だ。

そしてそのオルフェノクを統べる為に生まれて来るであろう“王”を守るために造られたのが、この世界の仮面ライダーとも言えるファイズを始めとするライダーズギアと呼ばれるベルトだ。

その内のファイズのベルトの装着者でもある犬飼美玖いぬかいみくはそのスマートブレイン本社にある社長室へ入り、スマートブレイン代表取締役である岸辺正幸きしへまひらゆきに仕事の完遂とその最中に起こった不可思議な現象について報告していた。

「以上が報告になります」

「よろしい。下がっていいぞ」

「はい、失礼します」

そう言つて踵を返して社長室を後にしようとした美玖だが……

「ああ、そうだ。一ついいかね？」

「はい、何でしょうか？」

突然正幸に声を掛けられ振り返ると、その焦げ茶色の垂れ下がった前髪から覗く若々しい瞳を子供っぽく輝かせながら、先ほどとは正反対の言葉遣いで話しかけて来た。

「やっぱり二人っきりの時はこう言う話し方やめない？ 堅っ苦しくて疲れちゃうんだよねえ」

「……ハア、社長、何時までもそんな関係じゃいられないんですからしつかりしてください」

美玖と正幸は大学時代からの付き合いだ。

二人ともオルフェノクである事を隠すためにあまり人付き合いはしなかったのだが、ある事件をきっかけに互いがオルフェノクだと知り、妙に親近感が湧いたのが始まりだった。

それから暫くしない内にもう一人オルフェノクであった今のデルタが仲間に入り、一緒にこの会社に入社し、正幸はなんとその天性とも呼べる手腕で瞬く間に社長という重役にまで上り詰めたのだ。

そして美玖と今のデルタはその正幸の秘書としてこうしてオルフェノクが過ごし易い世界にする為にこうして活動しているのだ。

オルフェノクは元は人間だ。更に言えば次世代への切符を手にした新たな人類と言ってもいい。

しかし、そんな彼らはその異形極まりない姿から人々から疎まれ、恐怖の対象にされた。

それが原因で人を襲う様になったオルフェノクが大半を占めている。何故こんな姿になったのか。どうしてこうも嫌われなければならないのか。

そんな苦悩が彼らの精神を蝕み、やがて心までもその姿に相應しい怪物にさせる……まさに「フランケンシュタインの怪物」そのものだ。

彼らは待っているのだ。いつか生まれて来るであろうオルフェノクの“王”の誕生を。そしてその“王”が全ての人類が共存できる世界を創造するその時を……。

「そうは言ってもねえ、大学からの仲じゃない。あの頃はもっと燃え盛るような恋もしたって言うのにさあ」

「あ、あの時の事は忘れる……!」

「そうそう、そんな感じの美玖が一番似合ってるよ」
「う、うるさい！」

正幸の発言に顔を真っ赤にしながらい昔の口調に戻ってしまう美玖を見て、正幸は苦笑と共にある一つの質問をして来た。
もう一人の仲間である、今のデルタの事だ。

「ところで、まだ章治しょうじの事は忘れられないの？」
「……………」

その言葉を聞いた途端、美玖の表情が険しくなった。
今のデルタ…三木章治みつきしょうじは自分達の前から突然姿を眩ました大切な仲間だ。そして美玖は彼とは恋人関係にあった。

彼が何故自分達の目の前からいなくなつたのか分からない。だが、世間ではこんな噂が流れていた。

“黒いパワードスーツを付けた人物が灰色の怪物を倒して回っている”と…………。

黒いパワードスーツというのは間違いなくデルタの事だろう。

そしてそのデルタが倒しているというのはオルフェノク達の事なのだ。それもスマートブレインに所属しているしていないに関わらず…………。

今まで一緒にいた彼が何故こんな奇行を始めたのかなんて分からない。

ひよっとしたらそのデルタは章治ではなく別の誰かかもしれない。そんな淡い期待を抱いていた事もあったが、それでもし本当にデルタが章治だったら自分は耐えられるだろうか？耐えられるわけがない。

だから決めたのだ。章治を敵として…デルタを奪った反逆者として

この手で倒すと……。

「……忘れられるわけがないだろ。それでも私は奴を倒して、デルタを取り戻す。それが最優先事項だ」

そう言つて美玖は今度こそ社長室から出て行つた。

その後ろ姿を見届けた正幸は「やれやれ」と言つた感じに苦笑して椅子に凭れかかった。

「それにしても“突然消えた人の気配”、か……。今日で二件目だよ、それ……」

正幸は先程美玖から聞いた不可思議な現象と美玖が来る前に報告があつた内容を重ねていた。

この社内でトイレに行つた社員が何故か何時まで経つても戻つて来ず、不思議に思ったその社員の友人が様子を見に行つたのだが、どこにも見当たらなかつたのだ。

一応、この会社には殆どの場所に監視カメラが設置されている為、それでその社員が入つたトイレの入り口のカメラを確認してみたのだが、その社員の友人が入るまで誰も入って……い……なかつたのだ。

その社員が何らかの能力を持ったオルフェノクならば話は別だが、彼は極々普通の一般社員だ。

当然この会社の裏の姿を知っている筈がない。

(一体、何が起きてるんだ……?)

そう考え込む正幸の後ろにある外の景色を一望できる窓ガラスには神童によつてこの世界に迷い込んだゴルドフェニックスの姿が映つていた。

（気配が強くなった…という事は、変身した…？）

歩は路地裏を出来るだけ気配を消しながら走っていた。

Dシリーズであるという事は次元移動能力を持っているという事だ。

次元移動能力は人によって差があり、その性質が微妙に異なる。

例えば歩の様に特定の気配を感知できる者もいれば、亜由美の様に局地的な空間移動ができる者など様々だ。

歩はこの先にいるDシリーズが気配の感知に特化したワールドウォーカーであることを踏まえてこうして気配を消ながら進んでいたのだ。

やがて開けた場所の手前まで行き着くと、その物陰から顔を出して様子を窺った。

そこには刃物状のライドプレートを体中に突き刺した刺々しい印象のダークレッドのライダーと、それを驚きながら凝視している亜由美、そして猿の生態系を持った灰色の異形…モンキーオルフェノクがいた。

ダークレッドのライダーを見た瞬間、ディージェントドライバーから歩に新しい情報が送られて来た。

あのライダーに関する情報だ。

（仮面ライダーディジェクト…Dプロジェクトの際に障害を寄せ付けない為に造られた“アプローチアウトシステム”。しかし副作用が原因で実用が見送られたDシリーズ…か……。それだったら何故装着者が……）

ディケイドを除くすべてのDシリーズは、基本的にディケイドのサポートの為に造られており、それぞれに何らかの役割が与えられている。

例えばディエンドであれば、ディケイドが暴走した時に全ての情報を削除して再始動させる“データリセットシステム”であり、ディージェントであれば、ディケイドが万が一破壊された際にその代役としてDプロジェクトを完遂させる事を目的とした“バックアップエージェンシーシステム”である。

但し、後者の場合は後から付けられた物なのだが……。

(アレが味方なのかどうかわからないし…暫くは様子見だね……)

そう考えてそのディジェクトの戦闘を暫く見守る事にした。

『何だお前？新しく開発されたライダーズギアの装着者か？』

「……ウウウウ」

モンキーオルフェノクの問いかけにディジェクトは何も答えずに、低く構えた状態で唸っているだけだった。

『オイ、何か言ったらどう……』

「ガアアッ!!」

『うおおっ!?!』

何の反応も示さないディジェクトに業を煮やしたモンキーオルフェノ

クはもう一度問いかけようとしたが、その低く構えた姿勢から口ケツトダツシユの様にディジェクトは突っ込んだ。

それに一瞬怯んで反応が遅れたモンキーオルフェノクを体当たりで壁に叩き付け、その壁には大きく穴を開けた。

「ガアツ！ガアアツ！！」

『ぐおっ！ぐえっ！？ク、クソ…！』

ディジェクトは止まる事を知らず踏みつける様に蹴りを入れて、モンキーオルフェノクを更に壁に埋め込ませる。

だがモンキーオルフェノクが悪態を吐くと、突如壁から灰色の鞭の様な物が突き出して来て、ディジェクトをシバいて怯ませた。

その隙にモンキーオルフェノクがディジェクトから距離を取る為に離れる。

その尻尾は異常なまでに伸びており、叩きつけられていた壁に突き刺さっていた。恐らくこの鞭はモンキーオルフェノクの尻尾が変質した物なのだろう。

『まったく、ナメたマネしてんじゃねえぞ』

モンキーオルフェノクはそう言いながら尻尾をクネクネと動かすと、壁から突き出ていた鞭もその動きに合わせて引っ込んで行き、壁から尻尾が抜け出て元の長さに戻った。

「グウウウ……」

ディジェクトは対して効いた様子もなく、低い唸り声を上げながら右腰に備え付けられたカードホルダーから一枚のカードを取り出し、それをトリケラトプスの横顔を模したバツクル：ディジェクトドライバーの上部に設けられているカード挿入口に挿入して右手の

甲で叩きつける様にトリケラトプスの角部分：ライドホーンを押し倒した。

「アタックライド…ファング・シヨルダー！」

トリケラトプスの口が滑らかに動いて認識音声を発すると、両肩に突き刺さったライドプレートがマグマを彷彿とさせる灰色のノイズに包まれてその形状を大きな刃に変形させた。

それを腕を交差させるようして掴むと、モンキーオルフェノクに向かってブーメランのように投げ飛ばした。

「グアウツ！」

『のくおっ!?!』

投げ飛ばされた二枚の刃・シヨルダーファングはモンキーオルフェノクを斬り付けると、クルクルと回転しながらディジェクトの手元に戻って来て、それを掴むともう一度モンキーオルフェノクに向かって投げ飛ばした。

「フンツ！」

『クツソ！ナメンなよ!!』

モンキーオルフェノクは再び迫りくるシヨルダーファングを尻尾を伸ばしてまるで鞭の様に使って迎撃した。

弾かれたシヨルダーファングは地面にカランという乾いた音を立てて落ちると、ドロリとした灰色のノイズに包まれて消え、ディジェクトの両肩にノイズが現れてそれが新しいライドプレートの形成した。

（あの尻尾が面倒だな………だったらこのカードを使うか………）

デージェクトは別のカードを取り出して発動させた。

「アタックライド…リジエクシオン！」

『ハンツ！今度は何をやる気かシラネエがさせつかよー！』

モンキーオルフェノクは何か行動を移される前に先手を打って尻尾をデージェクトに突き刺そうとした。

この尻尾は先程の様に、コンクリート製の壁を持つらぬくほどの貫通力を有している。そんな物をまともに喰らえば、いくら頑強な装甲でも一溜まりもないだろう。だが……

「……物理干渉を拒絶する」

そう呟くと、デージェクトを貫こうとした尻尾がその身体に触れた瞬間、弾かれて明後日の方向へと向かって行き、何も無い壁へと突き刺さった。

『な、何だ！？何で弾かれた！？俺に貫けない物なんて……』

「ガアツ！！！」

『へ？ぐぼあっ！？』

モンキーオルフェノクが言いきる前にデージェクトは地面を蹴って先程の比ではないスピードでモンキーオルフェノクに突っ込んで行った。

その体当たりを再び喰らうと、まるで反発した磁石の様に弾かれて壁に激突して再び跡を作っていた。

（な、何だ今の突進…！？普通じゃなかったぞ！？）

「リジエクシヨン」のカードは宣言した一つの対象を一切受け付けなくする効果を持ったカードだ。

デিজエクトが“物理干渉”を宣言した為、今のデিজエクトに触れた物体はすべて弾かれてしまうのだ。

『チイツ、クソ！』

「ちょ、ちよつと好太郎さん！危ないじゃないですか！！」

『…………お？へへへ』

「っ！？しまった！！」

「え…………うわっ！？」

モンキーオルフェノクは舌打ちすると、すぐ横で亜由美が好太郎に文句を言っている事に気づいて悪どい笑みを浮かべた。

デিজエクトは亜由美に手を掛ける前にもう一度ショルダーファングを発動させようとしたが、やはり向こうの方が早く、その細い首筋に尻尾の先を向けた。

デিজエクトは変身時に発生する“周囲にいる人間を強制退場させる”特殊周波によって、今まで一般人を巻き込む事はなかった為に、何も考えずに何時も通りに戦っていた所為で近くに亜由美がいるのを忘れていたのだ。

「チツ！」

『へっへえ、動くなよ？少しでも変な動きを見せたら、コイツの首に風穴が開くぜ？』

「う……………」

「クツ……………」

モンキーオルフェノクは亜由美を人質にとって脅して来た。

それに対しデージェクトは、あのオルフェノクの卑怯な手口と、不甲斐ない自分に悪態を吐いた。

「……そろそろ動いた方がいいかもね」

「動くな……」

「っ!？」

物陰からその戦いを観ていた歩は頃合いと見て、次元断裂を展開してそれでモンキーオルフェノクを弾き飛ばそうと空間演算を始めようとしたが、後ろから誰かに何か固い物を背中に押し付けられてしまった。

「動いたら即座にパーンやで」

「……誰ですか？あのオルフェノクの監視役ですか？」

そのエセ関西弁の声はどこか飄々としているが、恐らく本気で撃つ気なのだろう。

歩は今後ろに押し付けられているのが拳銃だと判断すると、この人物がスマートブレインの社員である事を推測した。

この世界の情報によれば、スマートブレインに所属しているオルフェノクが使命に順じた行動を取っているか稀に監視役を張っている事があるらしい。

しかも最近では、デルタがオルフェノクを殺して回っていることから、監視の目が厳しくなっているという。

もしこの後ろにいる男がその監視役であれば、デルタに対処できる

ほどの実力を有したオルフェノクという事になる。

「……その言い草やと、スマートブレインの事を知ってるみたいやな。ナニモンや？」

「僕はただ知り合いを探していただけです。丁度あそこで襲われていたのを見つけたので何とかしようと思っただけなんです。」

「……ほくそうかい、そう言う事ならウチに任せえな」

男は一拍置いて納得したのかそう言うと、歩の背中から堅い物を押し当てられた感触が消えた。

その人物の方を振り返ると、そこには赤いヘッドホンを首に掛けたパンクな格好で、明るい茶髪をカチューシャでオールバックに留めた糸目の男が、何やらアタッシユケースを開いてその中の物を取り出しているのが目に入った。

それはベルト状の黒い機械・デルタドライバーだった。

それを自分の腰に巻きつけると、ジーパンにねじ込んでいた拳銃のグリップの形状をした黒い携帯電話型変身ツール・デルタフォンを口元に近付けてある音声コードを呟いた。

「変身」

(デルタフォン…成程、この人が……)

「スタンディング・バイ……」

歩が考察している間に、男はデルタフォンが音声コードを認識した電子音声を発すると、丁度右腰に備わられたデジタルビデオカメラ型マルチウェポン…デルタムーバーにデルタフォンを差し込んだ。

「コンプリート」

デルタフォンがセットされた事を認識して電子音声が鳴り響くと、ホルスターから白い光のライン…フォトンストリームが男の身体を幾何学模様を描く様に伸びて来て、やがてその身体を一瞬光に包み込まれた。

光が収まると、そこには黒いパワードスーツに身を包んだライダーが立っていた。

変身時に走ったフォトンストリームの跡が、その装甲の至る所に幾何学模様を描いており、鳥の翼を模した白いラインで描かれたシヨルダーアーマー。

橙色の円を三分割にし、その内の上の部分が逆三角形の白いラインで形作られた複眼のそのライダーはトトンと不規則なリズムで軽くステップダンスをすると、歩の方を向いて手を合わせた。

「この事は誰にも言わんこいてえな。その代わりに、あそこの嬢ちゃんを助けたる」

そう言うのと右腰に付けたデルタフォンを軽く前に傾けてデルタムバーごと外すと、拳銃のグリップの形をしたデルタフォンと連結して大型の黒い拳銃の形状になり、それを口元に近付けて「ファイア」と呟いた。

「バースト・モード」

その音声を認証したデルタムバーをそこからモンキーオルフェノクに銃口を向けて引き金を引いた。

『どうぐおっ!?!?』

その撃ち出されたエネルギー弾は寸分変わらずにモンキーオルフェノ

クの背中に命中し仰け反らせ亜由美を解放した。

「危ないからそこで待ってえな、兄ちゃん」

命中したのを確認すると、その物陰から飛び出して、デイジエクトとモンキーオルフェノクの戦闘に乱入して行った。

(デルタ…この世界の『基点』となるライダーか……。でも、あの人はどこがおかしい……)

歩は口に出さずにあの黒い仮面ライダー…デルタを見てそう結論を出した。

確かにあのライダーなら何とか出来るだろう……だが、あの男からは何か得体の知れない物を感じていた。

それが一体何なのか、今の歩には分からなかった。

第二十一話・荒れ狂う恐竜とデルタ乱入（後書き）

今回の「あとがきラジオ」は出張版として本日夜9時頃に更新しま

すm(´ー´)m

お楽しみに！（＾）（＾）／

あとがきラジオ出張版〜募集ライダーとオリキャラの設定：フェイス編〜（前書

さて今回のあとがきラジオ出張版は募集キャラである好太郎君も交えてフェイストリオのキャラ設定を書いて行きますよ〜！（・・）

それから事前に謝っておきますが伸剣さん…送って頂いた設定を微妙に変更してますんでご了承ください……m（|_）m（;）

それでも喜んで頂けたら幸いです。

それではスタートオ！（・・）

あとがきラジオ出張版／募集ライダーとオリキャラの設定：ファイズ編／

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがきラジオ！出張ば〜ん！！」

加奈「さあ久々にやって参りましたあとがきラジオ出張版！」

皐月「今回はファイズ編に入ってから出てきたオリキャラ達と一緒に
お送りして行くぜ〜！」

加奈「それではゲストの紹介です！まずは伸剣さんから頂いた募集
キャラ・皆葉好太郎さんで〜す！！」

好太郎「……なあ、俺って確か“人から避けられる体質”何じゃな
かったか？」

カンペ（これぞ、後書きクオリティ！（。A。））

好太郎「この小説のタグってそういう事か！？」

皐月「まだまだ行くぜ〜次は最初に出てきたオリキャラ・犬飼美玖
だ〜！」

美玖「おい、ここは一体どこなんだ？さっき正幸から章治の居場所
が分かったと言われて来てみれば……どこの収録現場だここは」

正幸「いやあ〜、ああでも言わないと来ないでしょ？美玖って飲み
会に誘っても全然来ないタイプだし」

美玖「って正幸！？何で貴様もここにいる！？」

正幸「そりゃ勿論パーティーの為だよ。何でも作者が俺達の歓迎会を
するからだとかで」

美玖「歓迎会だと！？そんなのに行っている暇があったら章治を探
せ！！！」

章治「ここにおるで〜、おひさ〜」

美玖「って本当にいた！？章治！何故勝手にいなくなったりした！？心配したんだぞ！！」

章治「それはココで言うたらネタばれになるんで堪忍なあ。それにしても心配してくれてたん？美玖ってやっぱり優しいわ」

美玖「な…何を言ってるんだ貴様は！！」 顔真っ赤

加奈「そして紹介もしてないのに勝手に出てきちゃった二人は岸边正幸さんと三木章治さんです！！」

皐月「因みにファイズ編の主人公ポジションは章治らしいぜ。そうは見えないけどな」

章治「ヒドッ！作者！この子ちょっとヒドいで！どっという教育させとんねん！！」

カンペ（スマン、許せ（A、；））

章治「ヨシ許す！！」

好太郎「許すのか！？」

正幸「まあ章治って昔からサバサバした性格してるからね」

加奈「それでは皆さんにはこれから自己紹介をして頂きます！まずは好太郎さんからどうぞ！！」 資料を渡しながら

好太郎「ん、何だ？この資料の通り読めという事か？いいだろう、では読むぞ

皆葉好太郎（仮面ライダーディジェクト）

年齢：20歳

身長：178？

体重：60？

髪型：黒髪の長髪で、後ろで縛っている

顔つき：目つきが若干鋭い

性格：クールな一匹狼であるが、意外にシャイ。口数は少ないが目

元の変化で心情が分かる（つまり嘘がつけない性格）

詳細：世界を一人で渡る旅人。ダークレッドのロングコートがトレードマーク。

元々はとある世界の住人であったが、デিজエクトドライバーをある場所で見つけ、それに触れた瞬間、次元移動能力を得た。

その後ベルトの副作用によって“人から避けられる”体質になってしまい、自分の世界を出ざるをえなくなった。ただし例外もあり、ワールドウォーカーや世界の脅威にはあまり効果が表れない。

それ以来、自分の体質を治す方法を探すための旅に出てあらゆる世界を回っていた。

長い間、人とのコミュニケーションがなかったため人付き合いが苦手になっていくが、心の中では人ともっと仲良くなりたいと思っている。

旅を始めた頃はあまりの孤独感から人間嫌いになっていた過去もあるが、旅しているうちに克服したようであり、今は慣れた様子。趣味はそれぞれの世界の名所を観光すること。

以上だ。次は俺が変身するDシリーズの説明だな……

仮面ライダーデジエクト

基本カラーはダークレッドで複眼の色は紫。

頭部と体全体に鋭利なライドプレートが斜めに刺さっており、外見の印象は“刺々しい”。（モチーフは恐竜。特に頭部の大きなライドプレートはトリケラトプスの2本角のように見える）

「拒絶者」とも呼ばれる存在。Dシリーズの一人。様々な並行世界を渡ることができ、ライドカードシステムも装備しているが、使えるのは自分専用のカードのみであり、それ以外は使用できない。荒々しい接近戦を得意とし、その戦いぶりはまるで恐竜の如し。

戦闘中低く唸り声を上げるのが特徴的。

スペック

身長：190?

体重：80キロ

パンチ力：10トン

キック力：13トン

ジャンプ力：一飛び45m

走力：100m5秒

デージェクトドライバー

トリケラトプスの横顔を模したバツクル。カラーはグレーで、目にあたる部分に赤いトリックスターが埋め込まれている。

ベルトの上部にカードの挿入口があり、カードを挿入したあと、右部分にある「ライドホーン」を叩くことで効果を発動する。また効果音が鳴る際、恐竜の口元が喋っているように滑らかに動く。

元々Dプロジェクトにおいて、障害となる存在を近寄せない様にする為に開発された“アプローチアウトシステム”であったが、常に発せられる特殊周波によって装着者を“人から避けられる”体質にしてしまうという副作用が備わってしまい実用を見送られたベルトであった。

ライドカードシステム

デージェクト：仮面ライダーデージェクトに変身する為のカード。変身時ベルトから恐竜の雄叫びのような音声が発生し、常に放出している特殊周波が更に強く放出され、周りにいる人間を強制的にその場から退場させる。

リジエクション：一つ対象を宣言する事によって、あらゆる物体や現象を拒絶・反射できるアタックライド。

但し、特殊なカード故に使いすぎると演算が間に合わず、使用者に多大なダメージを与えるという欠点がある。

フアング ○○○：ライドプレートを鋭利な刃に変質させるアタックライド。種類は三つでアーム・シオルダー・レッグ。(ライド時に○○○部分にどれかが付け足される)アームとシオルダーフアングは二つ出現し、シオルダーはブーメランのように相手へ投げつけられる。レッグは右足だけ。(モデルはWフアングジョーカー)

ファイナルアタックライド：事前にフアング系統のアタックライドを発動させる事でディジェクトの必殺技を発動。相手との間にビジョンを10枚展開させる。

い、以上だ……。流石にここまで読むのは疲れるぞ……」

皐月「おつかれ。それにしても、随分と詳しく書いてくれたな伸剣も……」

加奈「まあ一部作者が変更した部分もあるけど……。それから皐月、ちゃんと“さん”を付けなさい！」 脳天チヨップ

皐月「好太郎ガード!!」 好太郎を前に突き出した

好太郎「ぐお!？」 脳天チヨップ直撃

加奈「ああ!ご、ごめんなさい!!大丈夫ですか!？」

正幸「アハハツ、楽しそうだね。じゃあ今度は美玖の番だね」

美玖「本当にするのか?まあここまで来たら仕方ない…読んでやる

……

犬飼美玖(仮面ライダーファイズ、ウルフルフェノク)

年齢：25歳

身長：167?

体重：51？

髪型：ウェーブ掛かった首筋まである茶髪

顔つき：鋭い目つきでプリツとした柔らかそうな唇の美女

性格：生真面目で誰にでも厳しいが親しい間柄では何故かよくイジられる。因みに猫舌。

詳細：スマートブレインに所属する社長第一秘書であり仮面ライダーファイズ。

社長である正幸と第二秘書である章治とは大学時代からの付き合い。大学時代は正幸と付き合っていたが、今は章治と付き合っている。

理由は……なあ、これは本当に言わないと駄目か？」顔真っ赤で涙目

カンペ（あ、別に無理しなくていいですよf（へ・）（

加奈「何この人可愛い……」

正幸「だからイジリがあるんだよね」

章治「せやな」

好太郎「……ッ！！」あまりの痛みに悶えてる

臯月「大丈夫か好太郎？」

好太郎「大丈夫なわけがあるか……！こんな痛み、始めてだぞ……！！」

章治「そおいや正幸、最近新しい治療薬作ったっちゅう話聞いたんやけど、それ今持ってへん？」

正幸「ああ、でもこれオルフェノク用だから効くかどうか分かんないよ？」

好太郎「それはやめろ！灰化したらどうするんだ！？」

章治「大丈夫やって、正幸はこう見えても何でもできるんやで？それに、もしお前が灰化したら……皆でその灰集めてスマートブレインの総力を持って盛大な葬式挙げたる」

好太郎「何だそれは！嫌がらせか！？」

美玖「そもそもお前は今失踪中だろうが……！それから正幸！今度は

お前の番だぞ！！」

正幸「はいはい、分かってるよ。」

岸边正幸（仮面ライダーカイザ、仮面ライダーオーガ、ホースオルフェノク）

年齢：25歳

身長：184？

体重：64？

髪型：焦げ茶色で長めのサラサラとした髪

顔つき：優しげで子供っぽい好奇心旺盛な目で若干童顔

性格：基本的にはサツパリとしているが、仕事方面ではかなり厳密で優秀

詳細：スマートブレインの代表取締役であり世界中の大半のオルフェノクの管轄を担っている謂わばオルフェノクのボスの存在。

何かを考える時は回るタイプの椅子に乗ってクルクル回る癖がある。大学時代は美玖と付き合っていたが、ある出来事がきっかけで別れてしまい、章治と付き合う事になっても『美玖が幸せそうだったからいつか』で済ましている。

とまあ、こんなところかな？」

皐月「何かすっげえ強そうだな……」

加奈「しかも変身できるライダーが二種類って……実はこの人、ラスボス？」

カンペ（ ）（ ） いえ、今のところそんな予定はないです（

正幸「今のところって……なんだかすごく不安なんだけど……」

章治「ま、気にすんなや。その時はウチがカツコよく倒したるから」

正幸「不吉な事言わないでよ！今一瞬そのシーン想像できたよ！？」
美玖「それはともかく次は章治だな」

正幸「美玖まで!？」

好太郎（不遇だな……）

章治「はいな、ほな行くで」

三木章治（仮面ライダーデルタ、キャタピラーオルフェノク、??
?）

年齢：25歳

身長：179?

体重：62?

髪型：明るい茶髪をカチューシャで纏めたオールバック

顔つき：細長い目でシャープな輪郭

性格：常に飄々としていて、エセ関西弁で話す。

詳細：スマートブレインに所属していた元社長第二秘書兼ライダーズギア開発部主任。

ライダーズギアを造った張本人であり、仮面ライダーデルタ。

趣味はブレイクダンスを踊る事で、戦闘にもこの動きを取り込んだトリッキーな戦法を得意としている。

ある真相を知ってしまったからはスマートブレインから抜け出し、オルフェノクを倒しながら放浪している。

美玖とは恋人関係で、抜け出した今でも彼女の事を心配している。

「どうや?未だ謎な部分がウチの魅力を存分に引き出すやろ?」ド
ヤ顔

美玖「何をふざけた事を抜かしているんだ貴様は!!」顔にオル
フェノクの痣が浮かび上がってる

章治「うわああ堪忍!堪忍してやああ!!」 皇月の後ろに隠れ

てる

臯月「何でアタシの後ろに隠れんだよ！？せめて好太郎の後ろに隠れるー!!」

好太郎「お前は俺に一体何の恨みがある!？」

章治「ちゃんとガードしてえなあー!!」

臯月「ふざけんな!!」 背負い投げして投げ飛ばした

章治「のわおう!？」

加奈「流石にそれは大人げないと思いますよ？」 冷たい目

章治「そんなダメなヤツを見る様な目で見んといて!？」

美玖「お前は元から駄目な奴だろぅが……ま、まあ……私を心配してくれてたのは、その……う、嬉しいぞ……」 頬染めながら

章治「デレキタアアア!! 正幸、写メや写メ!!」

正幸「章治、写メじゃ甘いよ。こういう場合は……デジカメだ!!」

デジカメ装備

章治「さっすが正幸! 分かつとるわ!!」

美玖「お、お前らなあ……!!」

加奈「ダメな大人がいる……」

好太郎「ああ言う大人には絶対になるなよ……特に臯月」

臯月「っていうか、何でアイツ、デジカメなんて持つてるんだよ……」

カンペ（私が貸しました（^皿^））

加奈・臯月・好太郎「お前が犯人かああああ!!」

加奈「さて、今回のあとがきラジオ出張版はここまで!」

梶月「向こうで何かファイズトリオがプチライダー大戦起こしてっけど、そろそろネタ的にきついからな」

好太郎「大戦って言うが…アレ明らかにファイズの一方的暴力じゃないのか？」

ファイズ「章治！正幸！お前らはどれだけ私をイジれば気が済むんだあああ！！」　ブラスターフォームになつてる

デルタ「ぎゃあああ！堪忍！堪忍やあああ！！」

オーガ「オーガに変身しても防ぎきれないって…どんだけ！？」

加奈「ところで好太郎さん、あとがきラジオに出演してみてどうでしたか？」

好太郎「……まず一つ言える事は、お前らテンション高すぎる」

梶月「そのせいで好太郎ツッコミばっかだったよなあ」

好太郎「ウルサイ！！」

カンペ（伸剣さん、どうもスンマセンでした……m（）——m（））

美玖さんの事をたっくんの性転換バージョンと考えている方もいらつしやるかと思いますが、全くの別キャラと考えてくださいね。

例えるならキオンとキョ○子の違いですf（ーーー）

あと実は美玖さんに渡した資料には書いてなかった事なんですけど、美玖さんは皆さんの思ってる通りツンデレです。

だってその方が萌えるじゃないですか（´・`・*）
スタイルもかなり抜群なんですよ。じゃないと胸部の装甲があんなに膨らむわけが……

美玖「やはり貴様！そう言う事が！！」

つてあれえええ！？何でここにいますか！？（）。。（；）

美玖「私の説明文で何処か足りない所があると思ってな、それならばという奴に頼めば作者の所まで案内してもらると言われて来てみれば…何プライベートを暴露しようとしてるんだああ！！」

歩「……………」 作者にサムズアップしてる

ええ！？ちよ、歩！そのサムズアップは何…ぎゃああああ！！

歩「本当に自業自得だよね…あ、また紙が落ちてる。ええと『次回
の更新は7月8日18時予定です（00）b』って書いてある…
…この顔文字なんだろ？サムズアップしてるからクウガかな？取り
敢えず皆さん、7月8日18時にまたお会いしましょう」

第二十二話・拒絶する理由（前書き）

はいつ、ディジェクトの設定を勝手に解釈させて頂きましたあ！伸
剣さんスンマセン！！C〃（シ；|ー|）シ
それでも気に入って頂ければ幸いです。

第二十二話：拒絶する理由

正幸は社長室にあるデスクチェアに座ってクルクルと回っていた。これは昔からしている何か考える時の癖で、美玖にも「いい大人がそんな事をするな」と耳にタコができるほどに注意されているのだが、やはり正幸にとってはこうしてる時が一番頭が冴える。寧ろこの考え方がなかったらここまで上り詰められなかったと豪語出来るくらいだ。

（やっぱりオルフェノクがウチの社員を……いや、でもそれなら灰が残っているはず……だとしたら、トイレに流した？そう考えれば辻褃が合う……。なら、美玖の場合は何だ？とても気の所為とは思えないし……鹿か何かの動物？でも美玖はあの気配は人間だったと言っていた……オルフェノクだったとしても一体何故？まさか、章治か……？確かに失踪してからはまったく気配が分からなくなった……何らかの能力を身に付けたのか？）

正幸は今日この会社で起きた事件に関して推理していた。回転速度が徐々に速くなって行き、最終的には傍から見れば残像が見えそうになって来た頃、突然机をガツと掴んで止まった。

「フウ……それじゃあまずは一件目から調べるか……二件目に関しては多分見つからないだろうけど一応そのあたりを搜索してみるかな、章治の居場所が分かるかもしれないし」

「態々調べに行かなくても、一件目だったらお前のすぐ近くまで来てるぞ。後二件目はデルタとは一切関係がないぞ」

突然背後から話しかけられそちらを振り返ると、黒いジャケットを着て黒髪をワイルドに刈り上げた三十代後半くらいの男が立っ

た。

「……え〜と、どちら様で？面接ですか？」

「んなわけあるか阿呆。それよりも来るぞ」

「え？来るって何が……」

『キユウアアアア！！』

「つてええええ！？」

その正体不明の男が正幸の軽い冗談を毒舌で返しながら警告すると、その瞬間その男の後ろにある窓ガラスから金色に輝く巨大な鳥が飛び出して来た。

その姿は神々しく、まるで神話に出て来る不死鳥の様だ。

「お前はあつち行つとけ」

『キユイイイイ！？』

その不死鳥はこちらに突っ込んでくるが、神童がボソリと呟いた途端、突然その進行方向に半透明の灰色に濁った壁が現れ、それにぶつかると痛そうに鳴いて窓ガラスの中に吸い込まれるように消えた。

「な、何今の……新種のオルフェノク？」

「いや違うな…今のはミラーモンスターと言ってな、異世界の怪物だ」

「い、異世界…？そんなファンタジーな場所なんてあるんですか？」

「ああ。そしてそれをこの世界に送り込んだ異世界のライダーズギアを持った奴がこの世界に来てるぞ」

「あ、貴方は一体……」

「俺の名は神童。お前にはそのライダーを消してもらいに来た」

神童と名乗ったその男はこの世界にやって来た“悪魔”と称される

ライダーを消せと言ってきた。

その存在自体がこの世界を歪めてあの様な別の世界の怪物を引き寄せて世界を壊してしまうらしい。

しかもこの世界にはそんな“悪魔”が二体も来ているそうだ。

眉唾物な話だが、今を見てしまえばとても嘘とは言い切れない。

この男がやった事であると言う仮説もあるがまずは先程のミラーモンスターという怪物を何とかするべきだろう。

「それで、アレはどうすれば倒せるんですか？」

そう言いながら灰色の壁越しに窓を指差した。そこにはただ外の風景が広がっているだけだが、恐らくまだいるのだろう。

自分のオルフェノクとしての本能がそう言っている。

「なあに簡単な事だ…その“悪魔”を消せばいい。そうすればアレもこの世界から消える」

この男を完全に信じたわけではないが、別の世界のライダーというのにも興味がある。

だったらそいつのライダーズギアを奪って研究の為のサンプルにするのも悪くない。

正幸はニヤリと笑ってその男と目を合わせた。その顔はオルフェノクを管理するにふさわしいカリスマ性を持った表情だ。

「いいでしょう。そのライダーは必ず倒してみせますよ。ただし、

その“悪魔”とやらのライダーズギアは頂きますがね」

「ハッ！使いこなせるかどうか知るらねえけどな！ま、やるだけやってみな！バハハハハ！！」

神童はそう言って豪快に笑いながら先程から出ている灰色の壁の中

に溶け込む様に消えると、その灰色の壁も周囲に溶け込むように消えて行った。

どうせだったらあの不死鳥もついでに連れて行って欲しかったがまだ気配がする……。

自分で何とかしろという事なんだろうが、実際何とか出来るもんだから文句も言えない。

「ハア…さてつと、まずはこの状況を何とかしましょうかねえ」

そう気を取り直すとデスクの引き出しを引いてその中に入っていたスマートブレインのロゴマークの入った銀色のアタッシュケースを取り出し、その中からメカニカルなベルトを取り出すと腰に装着した。

更にもう一つ入っていた黒地に金の装飾が施された携帯電話を取り出し、「000」と打ち込んでパチンと閉じると、「スタンディング・バイ」という、ファイズやデルタの電子音声よりも低く、くぐもった電子音声が鳴った。

、それに認証コードを唱えてベルトの正面に設けられている装填口に差し込んだ。

「変身」

「コンプリート」

ベルトが認証コードと携帯電話：オーガフォンがセットされた事を認証すると、電子音声を発してセットされたオーガフォンから幾何学模様を描く様に金色のフォトンストリームが流れ出し、正幸の身体を包み込む。

やがて一際強く輝いて正幸の身体を包み込むと、その中からは金色のラインが入った黒い大柄な装甲に黒いマント、更に の形の王冠

を被った様なマスクに、その中心には赤い一つだけの複眼が光っていた。

仮面ライダーオーガ：正幸が変身するライダーの一つであり、「帝王のベルト」とも称されるライダーズギアによって変身するこの世界の最強のライダーでもある。

オーガは両手を広げてまるで迎え入れるかのような威厳のあるポーズを取ると、宣言した。

「さあ来い、不死鳥……この帝王が貴様を地に墮としてやろう……」

その声はまさに大地を統べる帝王に相応しい全てを畏怖させる声だった。

「コイツは、一体……?」

デジエクトは突然乱入してきたデルタを見て硬直していた。

今まで旅してきた中でデルタは何度か見た事はある。

このデルタの装着者が誰なのかは分からないが、少なくとも味方をしてくれているのは確かだろう。

だが、コレが本当に味方なのかは分からない。コイツからは何か得体の知れない物を感じる……何となくそう思えるのだ。

「そつだ！アイツは無事か……!?!?」

デジエクトは亜由美の存在を思い出して彼女に近づこうとしたが、動きが止まった。

今まで人から避けられ、忌み嫌われてきた。しかも今は変身中だ。この姿で近づこうものなら、彼女に余計な恐怖を与えてしまう。

そう思うと近づくと事が出来なくなつた。いくら彼女が向こうから近寄ってきてくれたとしても、この姿では嫌われて当然だろう。

このまま去って、後はこのデルタに任せた方が安全なんじゃないだろうか……。

そう思ってここから逃げ出そうとしたその時だった。

「好太郎さん大丈夫ですか！？ひよつとしてどこか痛むんですか！？」

なんと彼女の方から近づいてきたのだ。

それには流石に驚いたが、何よりも彼女の首筋からは、ほんのわずかだが血が出ていた。恐らくあの時に尻尾の先端が当たっていたのだろう。

自分は何ともないのにこの少女は自分の事などそっちのけで心配して来たのだ。

「……何故だ」

「え？」

デジエクトの小さな囁きに亜由美が聞き返して来た。

「何故そこまで心配する！？お前こそ大丈夫なのか！怖くないのか！？この姿を見て…何も感じないのか！？」

デジエクトは叫んだ。折角人に避けられる事に慣れてきたのに…そんな風に優しくされたら、甘えてしまっじゃないか！また人を

好きになってしまっじゃないか！そしたらまた…裏切られて人を嫌
いになってしまっじゃないか！！

…。
なのはどうして…この少女は自分を恐れ、離れようとしなのか…
…。
そう思っている時だ。

「だって、好太郎さん、悲しそうじゃないですか……」

「悲しい？俺がか……？」

「ウン、あんなに悲しそうに戦っていたら、心配するじゃないです
か…それに……」

そこで亜由美は言葉を区切ると、ディジェクトの…好太郎の本当の
気持ちを見抜いてきた。

「本当は、誰かと一緒にいたいんじゃないんですか？」

「…っ！！」

亜由美の言葉は的を射ていた。

ディジェクトのあの戦い方は本当は誰も寄せ付けない猛獣のように
振舞う為のものだ。

誰も近寄ろうとしない拒絶する野獣となる事で人を…いや、自分の
心を守って来た。

そうすれば人を巻き込まずに済む。誰も傷つけなくて済む。そして
…自分の弱い心を壊さなくて済む。

その結果が今の自分なのだ。

本当はこの少女の言う通り、人と仲良くなりたかったが諦めた。
自分がこの力を持っている限りそんな事は不可能なのだ。

この力は、“拒絶する力”……。いくら手放そうと試みても、気が
付けば自分の手元に戻ってくる。

そんな呪われた物の所為で自分の居場所を失ってしまった。

元の世界での暮らしも、友達も、家族も……。

「俺は…俺は……!!」

「ほい、次はあんさんの番やで」

『ッ!?!?』

気が付けば、デルタは戦闘を既に終えており、こちらに銃口を向けていた。

デルタが銃口を向ける数分前……

「はっ! やっ! ほっ!」

『どわっ!?!? 何だコイツ! ふざけてる様にしか見えねえのに強ええ!?!』

デルタはモンキーオルフェノクを翻弄していた。

彼の闘い方は独特で、その動きは一見デタラメにしか見えないが、実は一切無駄が無いのだ。

回し蹴りに入っただかと思うとそこでフェイントをかけて引っ込めて蹴り付け、そこから前転して両足で蹴り飛ばす。

更に立ち上がった所で両手で手刀を浴びせた。

その動きはまるでブレイクダンスを踊っているかのようだ。

「はいなあああ!!」

『うおおあっ!?!? チクシヨウ! やっぱデルタ強え!!』

「なっはっはあ! この正義の味方・デルタ様に盾突こうなど、一億

年と二千年早いわあ!!」

『そのフリーズ、どつかで聞いた事あるぞ!?!』

デルタは余裕でふざけた事を言いながらも次々にモンキーオルフェノクにダメージを与えていった。

『テ、テメエ!社長から聞いてるぞ!!何で裏切った!?!』

モンキーオルフェノクは防戦一方になりながらもデルタに叫んだ。やはりこのオルフェノクはスマートブレインの社員の様だ。だが、その問いかけに素直に答えてやる義理はない。

「どっせい!!」

『グアツ!!』

デルタはモンキーオルフェノクの顔面に掌底を喰らわせて後ろに下がると自分が今答えられることだけを言った。それは……

「すまんがこれはトップシークレットってヤツや。平社員に教えるわけにはいかんでアンタはここで……」

真実の秘匿とそしてもう一つを一旦区切ってデルタフォンを引き抜いて口元に近付け……

「“チェック”メイトや」

「エクシード・チャージ」

モンキーオルフェノクへの死刑宣告を言い放った。

認証コードである“チェック”を認識したデルタフォンを通してベ

ルトから白いラインを通ってフォトンブラッドが、デルタフォンに送り込まれていく。

デルタフォンが白く発光したのを確認すると、モンキーオルフェノクに向かって引き金を引いた。

そこから撃ち出された光弾はモンキーオルフェノクに命中すると、人の背丈くらいはある三角錐状に展開してその動きを拘束・ロックオンした。

次にデルタフォンを右腰にセットすると今度は右足にフォトンブラッドが送り込まれる。

それと同時にデルタはモンキーオルフェノクへ駆け出してポイント目掛けてドロップキック・「ルシファーズ・ハンマー」を決めた。

「とおりやああああ！！！」

『ぐあああああ！！！！』

ポイントに命中すると、それはドリルの様に高速回転をしながらデルタと一緒にモンキーオルフェノクの身体を貫通した。

デルタがモンキーオルフェノクの後ろに着地すると、貫いた箇所への文字が浮かび上がり、モンキーオルフェノクの身体を赤い炎が包み込んで灰化させた。

デルタは元々、一番最初に造られたライダーズギア：つまりプロトタイプであり、その設計は武装を極限まで減らす代わりに身体能力を極限まで上げている。

その為、フォトンブラッドの色も危険度の高い状態を示す白になっており、そのフォトンブラッドを受けたオルフェノクが絶命する際に体外へ出されるフォトンブラッドは、危険度の低い青い炎ではなく、もう一段階危険度が高い赤い炎に包まれるのだ。

このデルタギアを始めとしたライダーズギアは章治が考案・作成したもので、その中でもデルタギアは章治専用であり、原点にして頂

点と言っても過言ではない。
まあ、最近では正幸がこれの設計を改良して新しいライダーズギアを造ったらしいが……。

オルフェノクが完全に消え去るのを見届けたデルタはこの場にいるもう一体の敵と思わしき人物…赤黒いライダーに銃口を向けた。

「ほい、次はあんさんの番やで」
「!?」

見た事のない種類だが、恐らくはこのライダーもスマートブレインの手先なのだろう。

正幸が自分を捕える為に開発した新型ライダーズギアというのがデルタの推測だ。

その見た事のない赤黒いライダーは黒髪のポニーテールの中々に可愛い顔立ちをした高校生くらいの少女の近くで何やら唸っていたようだが、こちらに銃口を向けられている事に気付くと一枚のカードを取り出してきた。

しかし何かさせる前にそれを撃つてそのライダーの手からカードを弾き飛ばした。

「さっきのカードは何や？身分証明書じゃあなかったみたいやが…ひょっとして何らかの能力を発動させるためのカードキーか？」

「ク…ッ！」

「その反応やと、凶星みたいやな…正幸も随分と斬新なモンを造ったなあ…さ、その嬢ちゃん放して大人しくお縄に着きいな」

「そこまでにしておいて下さい」

その抑揚のない淡々とした声が聞こえた方を向くと、先程の目が死んだ青年が手をパンパンと叩いてこちらに近づいてきた。

「あ、歩!？」

亜由美は突然この場に現れた歩に驚いていた。

ここにいると言う事は、あの黒いライダーを何とかしたという事なのだろうが、真司が見当たらない。

と言う事はここは“龍騎の世界”とは違う別の世界なのだろうか…？

「この世界では二時間振りくらいかな？」

「真司さんは!？」

「無事だよ。それから『心配掛けてゴメン。俺はもう大丈夫だから』
だつてさ」

「そっか、良かったあ……」

「悪いけど嬢ちゃん、今の状況、全つ然良くないで。その兄ちゃん、どう言う事や？状況が全く掴めへんで？やっぱりアンタもスマートフォンとブレインの手先かいな？」

「……お前がコイツの兄か？だがお前、普通じゃないな……一体何者だ？」

突如乱入してきた黒いライダーと好太郎が変身したライダーが同時に歩に質問をしてきた。それに対して歩は何時もの癖で頭をガリガリ掻きながら何から話そうか考え始めた。
前から思ってたんだけど、そんなに掻いてたらハゲるよ？

その考えを読んだのか定かではないが、そこで掻くのをやめると、黒いライダーの方を向いて質問に答えた。

「うーんそれじゃあデルタの人から…僕とこの人は敵じゃありません。僕の妹にずっと付き添っていてくれてたんです。因みに彼が使っているライダーズギアもスマートブレインの物とは全然違いますよ」

「……ほお、う、そうかい。ま、今の所は信じたるわ。その赤黒は他のライダーズギアとちゃうし、アンタとは初対面みたいやしな」
デルタと呼ばれたライダーはそう言いながら好太郎から銃を下げる。すると今度は好太郎の質問に答え始めた。

「今度は君の番だけど、どうやら君は僕の敵じゃなさそうだしね。教えておくよ」

そう言いながら歩はポケットからディージェントのカードを取り出して好太郎に見せた。

「なっ！？そのカード…お前、まさか…！？」

「その通り。僕はDシリーズ“バックアップエージェンシーシステム”…仮面ライダーディージェント。初めましてだね、Dシリーズ“アプローチアウトシステム”…仮面ライダーディージェクト……」

今ここに、この世界の「基点」となるライダーと、二人のDシリーズが邂逅した。

第二十二話：拒絶する理由（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

美玖「……美玖の」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「今回はファイズ編におけるメインヒロインポジションの犬飼

美玖に来てもらったぜ〜！」

美玖「なあ…何故私を呼んだんだ？」

加奈「それは今から出題される作者のお題で分かりますよ！それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（　・　・　）　美玖さんへ質問しよう

美玖「はあ！？どう言う事だ！この間の出張版とやらで一通り説明した筈だぞ!？」

皐月「何でもまだ説明し足りない所があるらしいぞ」

加奈「本当だったら最後の後書きの方で作者が美玖さんに渡した資料に書かれていなかった事を暴露する予定だったんだって」

皐月「書いてたら絶対に読んでくれないだろうからってさ」

美玖「クツ！貴様、謀ったな!？」

カンペ（はて、何のことやら　）　3　（　）

美玖「コイツ…惚けやがった……!!」

加奈「さて、それではこの質問から……」　資料を手に取りながら

美玖「クソ……!こうなったらやけだ。ドンと来い!!」

皐月「おお、男らしいな」

加奈「『美玖さんのスリーサイズは？』」

美玖「いきなり何を聞いてるんだ貴様はあああ!!」

皐月「何かこのイジられ方、巧にそっくりだな…さすが異次元同位体……」

加奈「では三秒以内にどうぞ!3、2、1、はいっ!」

美玖「クツ…!上から97・54・88だ!これで満足だろ!!」

皐月「おお!すっげえグラマーじゃん!」

加奈「まさに女性の理想の体型ですね」

美玖「ほ、褒めても何も出んぞ…」 顔赤い

カンペ（アレ?たしか美玖って89・53・82じゃなかったっけ? by正幸）

カンペ（それいつの情報やねん、遅れとるで by章治）

加奈・美玖「って何かいたあああ!?!」

皐月「ああ、詳しい話も聞きたいからって作者が招待してたらしいぜ」

美玖「作者きつさまああ!?!」

カンペ（スタコラサツサC〃）（ by男性陣三人）

美玖「逃げるなああああ!?!」 収録室から出て行った

加奈「ああゝあ行っちゃった…まだ質問あるのに……」

皐月「ま、それは次回に回そうぜ」

加奈「それもそうね。では今回のあとがきラジオはここまで!」

皐月「感想や質問も待ってるぜ!」

第二十三話・不死鳥に立ち向かうは大地の帝王と紅蓮の閃光（前書き）

今回はスマートブレインサイドを主軸に書きました！（？、ゞ
それではスタートオ！！（・・・）

第二十三話：不死鳥に立ち向かうは大地の帝王と紅蓮の閃光

美玖は社長室から出た後、自分に宛がわれた秘書室に戻って企画書を作成していた。

いくら裏切り者のオルフェノクを始末する事を目的としていても表向きは普通の会社だ。こういう作業も必要になって来る。

コンソールをカタカタと無言で打っていると、ふと向かい側の空いた席が目に入った。

あの席は本来第二秘書である章治の物で、彼が失踪してから半年以上もの間、誰も使っていない。

そのデスクには埃が一切積っておらず、まるで新品の様にニスが光沢を放っている。

（章治…今どこにいるんだ……？）

美玖は章治がいつ戻って来てもいい様に、毎日デスクを掃除していた。

たまに章治のデスクに入っている書類が必要になって引き出しを開けた時に、いかがわしい本が出てきたりもしたが、そんな本は即行で処分した。

（フフ…章治が帰ってきたらどんな反応をするんだろうな……って、な、何を考えてるんだ私は！？）

美玖は章治が帰って来た所を想像していた自分に気がつくくと、顔を真っ赤にしながら首を横にブンブン振って考えを改めた。

（奴はもう反逆者だ！必ず私の手で倒す！！）

章治の事を考えない様に乱暴にコンソールを叩いて行くが、再びその手が止まった。

そもそも今書いているこの企画書は章治が立案したものだ。

章治は何時もふざけているようにしか見えないが、その実、仕事は意外と優秀でこう言う企画や開発プロセスを考える事に関しては、最早正幸とは違う種類の天才だ。

しかもその発想でライダーズギアを生み出したほどだ。

章治が誰も思いつかない様な発想を次々と生み出し、それを実現できるように正幸が調整し、そして美玖がその企画を実行に移す…まさに最高のチームワークだ。

そのおかげでここまで三人が上りつめる事が出来たと言ってもいい。しかし、章治が失踪して以来、徐々に会社の株が落ちているのも事実だ。

そう考えると、やはり章治には戻って来てもらった方がいいのだろうか……。

(まったく、本当に優柔不断だな…一体どうしたいのだ、私は……)

「プルルルル……」

そんな自虐気味な考えに耽っていると、デスクの隅に置いてあった内線電話が鳴りだした。

場所は社長室…つまり正幸からだ。

先程の報告で何処か不備があったのだろうか…？

そう思いながら受話器を取って通話ボタンを押した。

「はい、何でしょうか社長」

『あ、もしも美玖く？今空いてる？』

「……切るぞ」

『わああああゴメンゴメン！ちょっと待って！！大事な話だから！』

「ドゴオオン……キュアアアア！！」

そのふざけた口調に思わずブチ切れそうになった所を何とか抑えて電話を切るうとしたら、受話器の向こうから何かが壊れる音や鳥の鳴き声が聞こえてきた。

そこから導き出せる結論は一つだ。

「もしかして、襲撃か…？」

『そうそう、今オーガに変身して戦闘中なんだけど苦戦しててね。悪いけどってわあああつとお！？』

スマートブレインの考えをよく思っていないオルフェノクによる襲撃である。

いくら大半のオルフェノクを統括する組織と言っても、それに反発する者は必ず出てくる。

そう言った反逆者を始末するのが美玖や章治と言ったライダーズギアの装着者の役目ではあるのだが正幸も美玖や章治に引けを取らない実力を有している。

しかもオーガに変身しているのであれば尚更赴く必要もないだろう。アレは章治が残したデルタの設計図を基に正幸が改良した新型ライダーズギアだ。身体能力特化型のデルタをも勝るスペックだし自分で何とか出来るだろう。

そう思って断ろうと正幸との会話を続けた。

「……それだけ余裕で電話できるんなら私が行かなくても大丈夫だろ。自分で何とかしろ」

『いやね、最初はそう思ってたんだけどってうわあっ！掴まれた！え、ちよっ何！？まさか引き摺り込む気！？そうはさせるかああ』

あああ！！」

その正幸の叫び声の後、「ガチャーン」というガラスが割れた音を最後に何も聞こえなくなった。恐らく外に投げ出されたのだろう。

正幸はライダーズギアを二種類持っている。

一つは一对一の戦闘に優れたカイザギア。

もう一つは今正幸が使っている大型の激情態オルフェノクや、軍隊などの殲滅戦に特化したオーガギアだ。

オーガに変身していたという事は、相手は激情態となったオルフェノクなのだろうが、あそこまで苦戦しているというのは珍しい。些^{いさ}か心配になってきた……。

「ハア……まったく、どいつもこいつも世話の焼ける……」

そう愚痴を零しながらも企画書を保存してからパソコンの電源を切ると、スマートブレインのロゴマークが入った銀色のアタッシュケースを持って秘書室を後にした。

目指すはオーガが落ちて行ったと思われる屋外だ。

「……なあ」

「何だい？」

「何で俺の隠れ家なんだ？」

「お、なんやご近所さんやったんか」

「いや、ご近所って表現はどうかと……」

現在、好太郎達はあの邂逅を終えた後、好太郎の隠れ家である廃墟となったホテルのロビーに集まっていた。

その原因は「そんじゃ、ウチの秘密基地に行くで〜」とデルタだった男：三木章治が言い出したことから始まった。

最初は自分達の事を疑っていたが、灰色のビジネススーツを着た男：須藤歩と名乗った目の虚ろな男が敵じゃない証拠として自分のデジエクトドライバーに似た変身ツールを章治に渡して見せたところ、そのテクノロジーがスマートベレインの物とは全く違うベクトルの物だと判断して、案外アツサリと信じてくれた。

そしてしばらく彼を先頭に路地裏を進んでいたのだが、好太郎と亜由美にとつて何やら見覚えのある場所へと続いて行き、最終的には自分の隠れ家に行き着いてしまったのだ。そして冒頭の会話に至る。

「細かい事は気にしたらあかんで嬢ちゃん。世の中何も考えずに楽しく生きんとなあ〜」

「これは楽しく生きすぎですー!!」

「まあ、二人は無視してこっちはこっちで色々と話しておこうか」

「あ、ああ……じゃあまずは“Dシリーズ”とか言っていたな……それってどういう事なんだ？」

歩は章治と亜由美の漫才を軽くスルーし、それに促される形で好太郎は今自分が一番気になっている事を質問した。

今まで仮面ライダーと呼ばれる存在がいる世界を渡り歩いて来たが、まさか自分と似たようなものがあるとは思ってもしなかった。

その質問に対して歩はまるでロボットの様な口調で答えた。

「Dシリーズって言うのはある計画の為に開発された並行世界を移

動する力を持った仮面ライダーの事だよ。僕はその計画を実行中なんだ」

「“ある計画”？何だそれは」

「あれ？好太郎さん知らないんですか？」

「は……？」

章治との漫才に一区切りつけた亜由美が突然問いかけてきた。

何やら知ってて当然の様な感じだが、好太郎には心当たりが一切ない。

「ああ、彼のDシリーズにはその計画の情報が入っていないから知らなくて当然なんだよ。知ってるのはメインシステムであるディケイドと、そのバックアップである僕だけだね」

「なあなあ、一体何の話をしとるんや？そもそもさつきアンタが見せてくれたライダーズギアと言い、ロン毛が変身しとったあの恐竜みたいなライダーと言い、アンタら一体何モンやねん」

この会話に章治も喰い付いてきた。

歩は何か考える様に頭をガリガリ掻き始めたが、そこで何か思い出したのか突然やめて、今度は腕を組んで右足で床をトントンと叩き出した。

それに何故か亜由美が苦笑いを浮かべていたが、歩はその仕草もやめると、章治に問い掛けて来た。

「話してもいいですけど、眉唾物ですよ？信じてくれますか？」

「まあ納得できる内容やったらな」

その答えを聞くと、頷いて話し始めた。Dプロジェクトと呼ばれる計画の内容を……。

スマートブレイン内にある大きな庭園で、オーガは辺りを見回していた。

ガラスの中へ引きずり込まれそうになった時、咄嗟とつさの判断で短剣型ツール・オーガストランザーにミッションメモリーをセットして、フォトンブラッドで生成された金色の長剣を形成すると、それを思いつき後ろのガラスに叩きつけて割った。

その結果、行き場をなくした鳥型のミラーモンスターはそのまま勢いで外へと飛んで行った。

オーガを掴んだまま……。

しかしオーガはすぐさまオーガストランザーをミラーモンスターに叩きこんで怯ませ、その際オーガを掴んでいた足が緩んでそのまま庭園へと落としたのだった。

(うーん、いるとしたらやっぱりあそこの窓かなあ……)

オーガはオルフェノクの本能を頼りに、ミラーモンスターの潜んでいそうな所の目星を付ける。

辺りには人が一切いない。すぐさま近くにいたオルフェノクの社員に避難命令を出したのだ。これで社員を巻き込む心配もなく戦える。

「社長！ご無事ですか!？」

その聞き慣れた頼もしい仲間の声が聞こえた方を向くと、そこにはファイズに変身した美玖の姿があった。

やはりなんだかんだ言っただけで心配して来てくれたのだろう。

「大丈夫だよ。それよりも気を付けて、何時出て来るか分からないよ」

「もしかしてステルス系の能力を持ったオルフェノクですか？その上、激情態となると…少々厄介ですね……」

「いや、オルフェノクじゃない…らしいよ？」

「え？」

『キュアアアアツ!!』

オーガの謎めいた言葉に聞き返そうとしたファイズだったが、突然今オーガが戦っている相手がガラスの中から現れた。

それも決してガラスを割って出てきたわけではない。まるでガラスに映った景色の中から飛び出して来たのだ。

例えるならとあるホラー映画であったテレビから幽霊が出て来るような感じだ。

しかし現れたその姿は神々しい不死鳥の様なオルフェノクだった。

しかもその色は灰色ではなく金色だ。

その不死鳥はそのまま此方へ突っ込んできた。

「危ない!!」

「キヤアツ!!」

オーガはとつさの判断でファイズを突き飛ばし、自分もその反動で後ろへ下がる。

そしてその間を不死鳥が突っ切っていった。

「な、何ですかアレは!？」

「ミラーモンスターって言うらしい。気を付けて、鏡面化してる所から襲ってくるよ」

オーガが説明している間に、不死鳥は旋回してちょうど自分達の真

上にあるスマートブレイン本社ビルの中へと吸い込まれるように消えて行った。

それを確認したファイズとオーガはどこから襲われてもいい様に互いに背を合わせて、自分達の視野に映る物を神経を研ぎ澄ませながら見渡した。

「クツ…何て非現実な…夢でも見てるのか？」

「できれば、俺もそう願いたいよ……」

「そうですね…だったら、夢で終わらせますよ」

そのオーガの愚痴に答えながらファイズは左手首に装着されたリストウォッチ型コントロールデバイス・ファイズアクセルに備え付けられていたミッションメモリーを取りはずして、それをファイズフオンにセットされたミッションメモリーと取り換える形で差し込んだ。

「コンプリート」

変身する際に流れる電子音声が鳴り響き、ファイズの形状が変化しに行く。

胸部装甲・フルメタルラングが展開して両肩に装着され、その装甲に隠されていた赤黒い動力炉がむき出しになる。更にそこから漏れ出した視認できない小さなフォトンブラッドの粒子がファイズの全身を覆って一瞬白く輝くと、全体の色を変色させた。

四肢に伸びるフォトンストリームのラインは白くなり、黄色い複眼は真っ赤に変色している。

仮面ライダーファイズ・アクセルフォームである。

この姿でいられる時間は三十五秒、しかも本領を發揮できるのはその三十五秒の中で十秒間だけしかないが、それで十分だ。

「っ！来たっ！噴水だ！！」

背後からオーガが叫んできた。

如何やらミラーモンスターは鏡面化した水面を利用して来たようだ。どこまでも底の知れない相手だ。

だが、それもここまでだ……。

オーガの声を合図に、ファイズアクセルのスタートボタンを押した。

「スタート・アップ」

その電子音声が鳴ると、赤いデジタル式の数字が十秒間のカウントを取って行く。

その間に迫りくるミラーモンスター。

しかし、突如そのミラーモンスターの視界から二人の姿が消えた。

『キュア！？』

「はああっ！！」

『ギユアアアア！？』

ファイズはあの一瞬でオーガを抱えて高速移動をしたのだ。

そしてミラーモンスターの真横にオーガを降ろしてすぐに反対側に回ってその側頭部に飛び蹴りを放った。その間の時間は一秒にも満たない。

ファイズ・アクセルモードは発動させている十秒間の間、通常の数倍のスピードでの活動が可能になるファイズならではの特殊形態だ。但し、その間は胸部が展開している為に防御力が落ちてしまい、更にフォトンストリームが常に大量に噴出している為使用者への負担が大きい。その為の十秒間という規制だ。

このファイズギアは元々、章治が美玖に合わせて特注で造った物だ。美玖は自分のオルフェノクとしての姿にコンプレックスを抱いているのだが、それを章治が解消しようと思い、造ったのがファイズギアなのだ。

「次は俺の番だね」

「エクシード・チャージ」

ファイズが飛び蹴りを与え、再び高速で移動し始めた事で見えなくなった間に、オーガが自分の腹部に備え付けられているオーガフォンを開いてエンターキーを押して電子音声で鳴り響くと、オーガストランザーから伸びているフォトンブラッドで形成されているエネルギーブレードが巨大化した。その大きさはオーガの約十倍以上はあり、それを大きく振りかぶると……

「おおおおらあああああ!!」

ファイズの攻撃によって怯んだミラーモンスターにギロチンの様に首に叩きこんだ。

オーガの必殺技・「オーガストラッシュ」である。

『キイイイアアアアアア!!』

甲高い断末魔の悲鳴を上げながら、もがくミラーモンスターを必死に抑えるが、フォトンブラッドで形成されたエネルギーブレードが徐々に崩れ始めた。解放されるのも時間の問題だろう。

「クツ…、これでも決定打にはならないみたいだね……でも、ここまでだよ……」

そこまで言い切った瞬間、ミラーモンスターに照準を定めた無数の赤い円錐状のポインターがミラーモンスターを囲むように展開した。オーガがミラーモンスターを抑えている間にファイズがエクシード・チャージを連続で発動させたのだ。

これもアクセルフォームだからこそできる業である。

「スリー」

アクセルフォームの制限時間が三秒を切った所で、ファイズアクセルがタイムアップまでのカウントを始める。

「そのまま抑えておいてくださいね、社長」

「分かってるよ」

「ツー」

一度止まって姿を現したファイズは、オーガに軽く指示を出した。

オーガもその内容を言われずとも理解しており、ファイズは軽くマスク越しに微笑むと目にも止まらぬ速さでポインターを次々にミラーモンスターに打ち込んでゆく。

「はあああああっ!!」

『ギユアアアアッ!!』

「ワン」

オーガのオーガストラッシュのエネルギーブレードが完全に崩壊し、

ファイズの連続でクリムゾンスマッシュを打ち込むアクセルフォー
ム版クリムゾンスマッシュ・「アクセルクリムゾンスマッシュ」が
全て命中してファイズが着地した瞬間……

「タイム・アウト」

時間切れを告げる電子音声が鳴った。

「リフォメーション」

更に別の電子音声が鳴り響くと、肩までせり上がっていたフルメタ
ルリングが元の位置に戻り動力炉を隠すと、その事でフォトンブラ
ッドの流出が止まり、ファイズのカラーリングが元に戻った。

『ギユア、アアアアッ!!』

「なっ……!?!」

「何だと!?!」

しかしその総攻撃を全て受けて尚、不死鳥は倒れなかった。しかし
その身体からは粒子が噴き出しており、その身体を徐々に消してゆ
く。

その通常とは違う現象に二人は驚いていると、ミラーモンスターは
その大きな翼を必死に羽ばたかせてガラスの中に吸い込まれるよう
に消えて行った。

辺りを静寂が支配し、殺気が消えたことから、恐らく逃げたのだろ
う。

「異世界の怪物とは言っていたけど……幾らなんでも非常識すぎる…

……」

「“言っていた”?という事は誰かから聞いたんですか?」

「ああ、実はね……」

静寂を取り戻した事に一安心して二人は変身を解除すると、正幸のぼやきに美玖が反応して正幸はその大まかな話をした。

「……つまり、その“悪魔”とやらがアレをこの世界に送り込んでいるわけですね？」

「まあ、その神童って言う人が嘘を吐いてなければね。それにしても、いやに素直に信じてくれたね……」

「何時からの付き合いだと思ってるんですか、そんなの目を見れば嘘かどうかなんてすぐに分かりますよ」

そう言つて美玖は微笑んだ。

彼女は普段厳しいがやはりこつこつという顔をしている時はやっぱり可愛い。

まあ、そんなことを本人に言えば照れ隠しに殴られるだろうが……。

「ところで美玖、臭いで感知できる？」

「いえ、無理ですね。アレには生き物としての臭いが一切ありません」

美玖はウルフオルフェノクという狼の特性を持ったオルフェノクだ。彼女の嗅覚は人間よりはるかに優れている。

この能力を使えば、臭いを感知して相手の居場所を突き止める事が出来るのだが、ミラーモンスターにはそう言った臭いが無い様だ。

それに、以前この能力で章治を探しだそうとした事もあったのだが、何故か章治の臭いが完全に消えてしまったというのだ。まるで初めからそんな人間がいなかったかのよう……。

一体どんな手品を使ったのかは知らないが、必ず見つけ出してみせ

る。

「ダメかあ、あそこで章治がいたら仕留められたんだろうなあ」
「……………」

確かに、あの時デルタ…章治がいれば状況は変わっていたかもしれない……。

だが美玖はそれを良しとしなかった。

何故お前はそこまで章治を信用できる…？ 奴は私たちを裏切ったんだぞ！？

思い出すのは五カ月ほど前…章治が失踪してから一カ月ほど経過した頃のことだ。
大雨が降っていた日の夜、道端でバツタリと彼に会った事があったのだ。

『章治！どこに行っていたんだ！？心配したんだぞ！！』

彼は何故かデルタに変身しており、何も返事をせずに此方を振り向いた。

その背後にはデルタを見つけたであろうスマートブレイン所属のオルフェノクが立っていた。

『お前がデルタを見つけたんだな？よくやったぞ』

『み、美玖…さん』

なぜかそのオルフェノクの歯切れが悪い。一体どうしたのだろうか？

『に、逃げて…くだ…さ、い…………』

そこまで言い切るとそのオルフェノクは赤い炎に包まれて灰となつて崩れた。

その灰は大雨の所為で水を吸ってグズグズの塊になってしまった。

『章治…これは一体どういう事だ…………お前がやったのか…………？』
『……………』

美玖の問いかけに章治であろうデルタは何も答えなかった。
そのまま立ち去ろうとゆっくりと歩み始めた。

『ま、待て！待って！章治！…！』
『来るな！…！』

その後を追おうとした時、ようやく喋った。

しかし、彼の口から出たのは普段の彼からは出る事が無いような怒鳴り声だった。

『もう、ウチに関わらん方がええで……………』

『章治…それってどういう……………』

『スマン…今は言えんのか…………。でも、これだけは言える……………』

そこで美玖に振り返って残酷な言葉を口にした。

『ウチはこれからはお前らの敵や。悪く思わんでくれよ？』
『……………ッ！』

この世で一番愛した人からの完全な拒絶…それは美玖の心を変えるのに十分だった。

『しょ…うつ…！くつ…うつ…！ひつく…』

声をかけたかったが、嗚咽で声が出なかった。
その間に彼はその場から離れて行った。

その事はすぐに正幸に報告し、すぐさまデルタ搜索に厳重態勢での活動を促し、現在までデルタと戦い続けてきたのだ。

「ひよつとして怒った？」

「…何でそう思うんですか？」

「そんな顔してる」

「…社長…いや、正幸…」

「ん？何だい？」

美玖は正幸に上司としてではなく、親友として問い掛けた。

「アイツ…章治の事を怨んでないのか？奴は私たちの仲間を殺してるんだぞ？」

「…確かに、それは許されることじゃないね」

「だったら…」

「でも…」

正幸は美玖の言葉を遮って更に続けた。

「章治が意味もなくこんな事をするはずがない。きつと俺達のためにやっってるんだよ」

「私達のため…？」

「そう、章治はきつと何かに気付いたんだよ。それが何なのかは俺にも分かんないけど、それが解決すればきつと俺達の所に戻って来るよ。だからさ、美玖もアイツの事を信じてやるつよ。二番目の俺の事が信じられるんだからさ」

そう言つて無邪気な子供の様な笑みを見せた。昔はこの笑顔に強く惹かれて惚れた事もあつたし、今でも惹かれそうになる。

「う、うるさいっ!!」

「ほぐうつ!？」

顔を真つ赤にしながら正幸の腹を一発殴ると、早足にその場を立ち去つて行つた。

しかも何気に鳩尾…かなり痛い……。

「ハ、ハハツ…ホント、美玖つて照れ屋だよ…ね………ツ!？」

誰にでも無く呟きながら美玖の後ろ姿を見た瞬間、正幸は思わず息を詰まらせた。

彼女は気付いていない様子だったが、美玖の背中から少しだけ灰が零れていたのだ。

オルフェノクは進化した人類だ。しかし肉体がその急激な変化に付いて来れない為、寿命が非常に短い。

そして、そんなオルフェノク達の末路は灰になると決まっている。

今まさに、美玖の寿命が尽きようとしているのだ。

(そんな…!？まさか、章治はこの事に気付いて……)

今ここで美玖にその事を言えば、彼女に余計な不安や心配をさせる。

今するべき事は…章治を一刻も早く見つけ出す事だ。

（章治なら何とか出来る筈だ…アイツなら美玖を救う事が…！！）

正幸は美玖とは反対方向に歩いてある場所へと向かった。章治の手掛かりが掴めるであろう、あの場所へ……。

第二十三話：不死鳥に立ち向かうは大地の帝王と紅蓮の閃光（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月と！」

美玖「……美玖の」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「今回は前回言った通り、美玖への質問の続きだぞ〜！」

美玖「……なあ、本当にやめてくれないか？もう正直きついんだ」

カンペ（ボドボドですか？（OMO））

美玖「何だボドボドって！？ボロボロの事か!？」

加奈「まあそこまで言うんだったらこれで最後にしておきましょうか」

皐月「でも読者から何か質問があったらまたやるかもな。次の章に入っても」

美玖「ちょ……!!」

加奈「それじゃあ最後の質問という事だし、これなんてよさそうね一枚の資料を手に取りながら」

美玖「まさかとんでもない無茶振りとかじゃないだろうな……?」

皐月「……いや、そうでもなさそうだぜ？」 資料を横から覗きながら

美玖「それなら別にかまわないが…嫌な予感しかしないな……」

加奈「最後の質問はこれです。『美玖さんから見て乾巧ってどんな人?』」

『……………っ!?!?』

皐月「ああ、確かに気になるなあ……どう思ってた？」

美玖「そうだな……一言で言うなら……不良だな。しかもかなり口の悪い」

「……っ！……っ！……」

加奈「他には？」

美玖「アレがもう一人の私だと思うとな……正直、一緒にされたくないな」

巧「オイコラア！さつきから聞いてりゃあいい気になりやがってええええ！！」収録室に勢いよく入って来た

加奈「って本人いたああああ！？」

美玖「さつきから調節室の方が騒がしいと思っっていたらそう言う事か！？」

皐月「いやあ、なんでも巧もいた方が面白いんじゃないかって思っ
て呼んだんだと」

カンペ（で、たっくんから見て美玖さんどう思う？—M O —）

巧「だからたっくんって呼ぶんじゃないやねえ！！それからその顔文字はブレイド編までとつとけ！！」

美玖「ブレイド？何だそれは？」

加奈「ああ、その内分かると思いますよ」

皐月「美玖に解り易く言えば、異世界のライダーって言った方が早いかな」

美玖「なるほど、異世界のライダーズギアか……興味深いな……」

巧「フィリップみたいない方になってるぞそれ！大体、なんで女なんだよ！？全っ然似てねえ！！」

美玖「何だと……！？女で何が悪い！！このひねくれ男！！」

巧「んだとカタブツ!!」

加奈「やっぱりこの二人って似てるわね」

巧・美玖「どこが!？」

皐月「そう言う短気な所」

巧・美玖「orz」 うなだれた

加奈「おお、うなだれるタイミングも完全に一致」

皐月「やっぱりなんだかんだで同一人物なんだな」

カンペ（まあ私としては別キャラとして見てますけどね<…:V…:
>）

巧「今度はカリスで来やがったか!だからそれはブレイド編まで取
つとけつつうの!!」

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで!」

皐月「質問と!」

美玖「…感想と」

巧「…コラボも待ってるぜ」

美玖「おい貴様!何で私と同じ喋り方をする!!」

巧「知るか!大体、この喋り方は俺が先だったんだよ!お前こそ真
似してんじゃねえよ!!」

美玖「何だと!？」

巧「やるかコラ!？」

皐月「ああ、もう鬱陶しいなあ…。取り敢えず加奈、後でこい
つらに脳天チヨップかましておいてくれ」

加奈「まかせて」

巧「それだけは絶対にやめろおおおおお！！」

第二十四話：代行者VS拒絶者（前書き）

はい、タイトルからも分かる通りあの二人が戦います。(。A。;)
果たしてどうなる事やら…… () | ;)
それではスタートオ!! () . . ()

第二十四話：代行者VS拒絶者

歩が好太郎と章治に一通り自分達の事とDプロジェクトの事を話し終えると、章治はしばらく黙っていたその口を開いた。

「ほお〜う、めっちゃ胡散臭い話やなあ〜」

「で、ですよね〜……」

「よし信じたる」

「…って信じてくれるんですか!?!」

亜由美は章治の信じてくれなさそうな雰囲気から諦めかけたその時、まさかの180度真逆の答えが返って来た。まさかそう来るとは思いもしなかった。

「そりゃそうやで。科学者たる者まずはそれを信じて実証せんとなつてられんからな」

「…っていうか、科学者だったんですね……」

とても彼の格好からはそんな事など想像できない。むしろストリートダンサーと言った方がシックリくる。

「まあな!それにな、このライダーズギアかてウチが造ったもんなんやで!」

「そうだったんですか!?!」

受付カウンターに置いてあったアタッシユケースを持ち上げながら自慢げに言ってきた。

こんなハイテクな物を造れるとか…この人見かけによらなすぎる…

…。

「それで、その歪みっちゆうモンがこの世界にあるからそれを消しに来た、と……」

「そうです、何か心当たりはありますか？」

章治は亜由美との話に一区切りつけると、歩に自分たちが来た目的を再確認して来て、それに歩が抑揚のない声色で訊ねた。

「……いんや、特にないなあ」

「……そうですか」

章治の返答に歩は素っ気なく答えたが、亜由美はその章治の様子に違和感を覚えた。

彼の目が真剣なのだ。「これ以上関わるな」と言っているかのよう……。

歩もそれを察したのかそれ以上の追及をしなかった。

しかし章治が「歪み」に関わりがないとは言い切れない。

好太郎もその雰囲気に勘付いたのか目を鋭くして無言で章治を睨み付けていた。

その雰囲気によって周りが沈黙に包まれてしまう。

「え、え〜とお…取り敢えずもうすぐ日が暮れるし、何か食べに行きませんか？」

その押し黙った空気に耐えきれず亜由美がそう切り出した。

夕食と言っても亜由美にとっては三時間ほど前に「龍騎の世界」で既に済ませたはずなのだが、この世界ではまだ夕方の五時だ。

食生活のバランス崩れそうだなあなどと考えながら今後の旅が不安になって来た所で、章治が一つ意見してきた。

「なあ嬢ちゃん、メシつつつてもどこで食うねん？ウチ、お尋ねモンやからファミレスとか入れへんで？」

「え？じゃあ何食べて生活してたんですか？」

「そりゃあもう、そこらへんにおったネズミとかトカゲを焼いて…

…」

「わああああ！やめてっ！それ以上言わないで下さい！！」

章治のかなり野性的な食生活に思わず鳥肌が立った。

一体どこの放浪者ですかアナタは！？イヤ、実際放浪者ですけども！！

そんな事を心の中でツツコンであると、歩は納得したように頷いて章治に尋ねて来た。

「“焼いて食べてた”って事は、少なくとも火はあるんですね」

「そやで、このタテモンのガス供給パイプをイジリゃあ、ウチに取って朝飯前よ！」

「……それって犯罪じゃないのか？」

「好太郎さん、ツツコミが不足しています！！歩！変なところに納得しない！！それと何気に章治さんの言葉の続き言つのやめて！！？鳥肌…！鳥肌が…！！！」

この時点でボケとツツコミが綺麗に分かれてしまった。

一応好太郎はツツコミ側ではあるが、無口なため実質自分一人だ。

正直、もう泣きたい……。

「それじゃあ何か食材でも買ってくるよ。何か欲しい物は？」

「あ、じゃあビール頼むわ。ひっさびさに飲みとうなって来たしなあ」

「二人とも無視しないで！？」

もう、ホントに泣きたい……。

「分かりました。それじゃあ行つてきます」
「……待て」

歩が廃墟となつたホテルから出て行こうとした時、好太郎が呼び止めて近寄つて来た。

好太郎はその無表情で険しい目つきで歩を見据えながら言い放つた。

「何？何か欲しい物があるの？」

「そうじゃない……お前にはまだ聞きたい事がある。少し付き合え」
「……ウン、いいよ」

歩は頷きながら了承すると「ついて来い」と言つて隠れ家から出て行つた好太郎の後に続いた。

「……なんだろ、すつごく不安だなあ」

好太郎の雰囲気には亜由美は言い様のない不安に駆られていた。

歩はどこか子供っぽい所がある。それは“龍騎の世界”で彼が落ち込んでいた時に感じた事である。

それを思い出すとなんというかアレだ、小学校に入つたばかりの息子が学校でイジメにあつていないか心配する母親の様な心情になつて来る。

「……つてお母さんか私は！！」

「ええツツ」
「ミすんなあ嬢ちゃん……それにしても、ビール飲めるんかいな……」

そして章治は亜由美とはまた違った不安に駆られている様子だった。

好太郎につられてやってきたのは今隠れ家として使っているホテルの地下駐車場だった。

そのコンクリートに囲まれた空間に二つの足音がカツカツと音を鳴らしている。

その内の一つが止まると、もう一つの足音も一拍置いて止まった。

「それで、話って何だい？」

「お前、アイツが『歪み』だって気付いてるんじゃないのか？」

歩が尋ねると、好太郎はこの空間に響く、低い声で聞いてきた。

好太郎もまた、亜由美と同じく感付いていた。

彼は「歪み」の感知に特化したワールドウォーカーだ。

彼にはダイジェクトドライバーによる副作用によって人が寄って来る事はないが、世界の脅威はその副作用の影響を受けないので近づいて来る。

亜由美が傍にいたのに、彼女が世界の脅威だと勘違いしなかったのが何よりの証拠だ。

これは歩には無い特性だが、彼のあの反応を見れば大体察しがつく。彼が「基点」であり「歪み」であるという事に。

「ウン、多分そうだろうね」

「だったら何故放っておく？いくら奴が『基点』とはいえ、『歪み』をそのままにしておくわけにはいかないだろ。それにこの世界の元

々の『基点』はファイズの筈だ。ここでデルタを倒しても『基点』がファイズに変わる事で解決できるだろ」

歩が淡々と肯定すると、好太郎がもつともな言い分を言って来た。

確かにこの世界は「ファイズの世界」のリイマジネーションである「デルタの世界」だ。

もしここで「基点」であるデルタを倒しても、本来の基点であるファイズがその役目を果たすのだ。

しかし、歩はそれに賛同しかねた。

「僕は何の事象もなくライダーを破壊するわけにはいかない。それに彼は人間だからね。殺す気にはなれない」

それは歩の否定的な言葉だった。歩はこれまで人を殺した事がないし、これからも殺すつもりはない。それがオルフェノクでもだ。

例え世界の脅威となってしまう者達と言えど、彼らは元は人間だ。そんな彼らを殺す事には気が引けたのだ。

以前ゴートファンガイアを倒した事があつたが、アレは元から異形だったのでそれほど罪悪感はなかったからだ。

「偽善だな」

好太郎は目を鋭利な刃物の様に鋭くさせて、そんな歩の考え方を切り捨てた。

好太郎は今まで「ライダーサークル」の中をいくつも渡って来たが、そんな甘い考え方を持った事がない。

敵は敵、それ以外の何者でもない。ましてや「歪み」となれば尚更だ。

好太郎はそういう「歪み」を何度も見て来たし、その「歪み」が世

界を壊す瞬間も見た事がある。
だからこそ決めたのだ。「歪み」が何であろうが徹底的に拒絶し、
破壊するだけだと……。

「何故殺そうとしない？アイツ等は最早ただの怪物だ。そんな奴ら
に慈悲なんて与えてどうする？むしろ殺してやって罪を着せない様
にしてやる方が慈悲だろ」

「……確かにそういう考え方もあるね。でも彼らの中には人間とし
て生きようとする人達もいる。そんな彼らの命を奪う事なんて出来
ない。それは章治さんにも言える事だよ」

「……もう、これ以上何を言っても無駄の様だな」

互いの意見の食い違いに好太郎は苛立ちを覚えながらロングコート
の中からディジェクトドライバーを取り出し、腹部にセットした。
力尽くで分からせるつもりなのだろう。

「“バックアップエージェンシーシステム”だか何だか知らないが、
そんな甘い事を何時までもぬかしてたらこの先やっていけないぞ。
俺がその根性を叩き直してやる…変身」

「カメンライド…ディジェクト！グオオオオオオ！！」

カードをバックルに挿入し、ライドホーンを叩きつけてディジェク
トへの変身が完了すると、地面を思いっきり殴りつけて穴をあけた。
その衝撃音がコンクリートの壁や床に反響し、やかましい位に鳴り
響く。

その騒音の中でディジェクトは顔をゆっくりと上げ、紫色の複眼で
歩を睨みつけた。

「お前も変身しろ。お前が言うこの“アプローチアウトシステム”・
デージェクトが貴様のその甘ったるい考え方を拒絶してやる」

その宣戦布告に歩は軽く溜め息を吐くと、クラインの壺からディー
ジェントドライバーを取り出し、腹部にセットした。

「本当は戦いたくないんだけど、やるしかないみたいだね。僕が勝
つたら頼みを聞いてもらうよ…変身」

「カメンライド…デージェント！」

歩も同じくカードをバツクルに挿入して変身すると、グローブを強
く嵌め直す動作の後、デージェクトに向き直った。

今まさに、二つのDシリーズが激突しようとしていた。
世界を救う主導権を賭けて……。

歩達が出て行ってしばらくした後、「ヒマやし、ダンスの練習でも
するかあ〜」とぼやいた章治がロビーの待合席の下に置いていた大
型のCDラジカセを取り出してそれをしばらく操作すると、そのC
Dラジカセから、ハードロックな曲が鳴り始めた。

そしてその曲に合わせて章治は踊り始める。
その動きは激しく、荒々しいものの、何処か繊細で無駄のない動き
だった。

素人目から見てもその動きはかなりうまく、プロのダンサーに匹敵
しそうなものだった。

あの灰色の猿との戦闘中もこれに似た動きで相手を翻弄していたことから、彼のバトルスタイルはこのブレイクダンスを基に作られたという事が分かる。

「よっ、ほっ、はっ」

(一応この人が『基点』なんだよね…でも何だろう、それだけじゃない気がする……)

亜由美は章治のブレイクダンスをホテルには似つかわしくないボロボロのソファアに座ってそのダンスを観賞しながら、そんな考えに耽っている内に、曲が終盤に近付いてきた。

それに合わせて曲のテンポが速く激しくなり、それに合わせて章治の動きもより速く、複雑なものになって行く。

やがて「ジャン！」という音を最後に曲が終わると、決めポーズを取って止まった。

それに小さな拍手を送ると、章治は快活な笑みを見せながらこちらに近寄ってきて亜由美の隣に座った。

「どうや、カッコよかったやろ？」

「はいっ、すごく上手でした」

「せやるお、ウチにホレたんとちゃうか？」

「それはないです」

調子に乗り始めた章治のふざけた台詞をバツサリと切ると、ガクツとうなだれて「そこまでハッキリ言わんでもええやろお」と悲壮感たっぷりに呟いた。

(やっぱり、そんなに悪い人には見えないなあ…やっぱりこの人が『歪み』ってわけじゃないのかな?)

亜由美はその章治の人間らしい言動を見ながらこのパンクな格好の青年が世界を壊す存在とは思えなかった。

歩の話では、この世界の仮面ライダーは世界の脅威であるオルフェノクであると聞いた。

つまりこの青年がデルタというライダーに変身した事から、オルフェノクであるという事になる。

しかし彼には少し変な所があるものの、それほど危険な人物には見えなかった。

そんな時、亜由美はある事を思い出した。

「あ、そう言えば章治さん」

「ん？なんや？」

章治は元タスマートブレインというオルフェノクを管轄する組織に所属していたと言っていた。

しかし、今はその組織から抜け出し、オルフェノク達を倒しているとの事だが、何故そんな裏切り行為を始めたのが気になった亜由美は、章治に尋ねようとした。

「章治さんって何で……」

『デルタギアは返してもらったぜ』

『っ！？』

だがその時思わぬ第三者が現れた。

その第三者の方を向くと、受付カウンターに置いてあったデルタの変身ツールが入ったアタッシュケースを持ったモグラ型のオルフェノク…モールオルフェノクがカウンターの奥から言い放っている姿があった。

「お前！確か研究所におつた……！」

『覚えてたんだなあ、こんな平社員の事も……なあ、三木主任……』

モールオルフェノクはネチツとした嫌味ったらしい口調で答えた。
如何やら章治の元部下だったようだ。

「何でここが分かったんや……!?」

『なあに、今回ここを見つけたのは偶々さ。何だか聞き覚えのある曲が聞こえて来たんでもしやと思ってなあ』

「ちい！もうチヨイ音量下げとくんやった……！」

『ま、ここであんたとやり合うつもりはねえよ。ノルマも達成したしなあ。』

章治が悔しがるのを余所に、モールオルフェノクはアタツシユケースを持ち上げながら、嫌みタップリな台詞を吐き捨てた。

『じゃあな、主任。後で多分社長と秘書が来るだろうからよろしくな！カァーカカカカツッ！』

独特な笑い声を上げながら後ろに宙返りをしてそのまま頭から落ちると、モールオルフェノクはカウンターから姿を消した。

章治と亜由美がその向かい側へ駆けつけると、その床にはマンホールほどの大きさの穴が開いていた。

どうやらここから忍び込んできていたようだ。

「くっそおゝ逃がしたか……！まさかここを嗅ぎつけるとは思わんかったわ……！！」

「わ、私、歩と好太郎さん呼んできます！」

亜由美はそう言うと、歩をイメージして次元断裂空間を展開し、そ

の中へと走り出した。

その際章治が「おおう!?」と驚いた声を上げていたが、説明は後でいいだろう。

とにかく今は歩にこの事を伝えるのが先決だ。

「何や今の…アレが世界を渡る方法かいな……ま、こちらとしては好都合やけどな」

章治は亜由美が灰色の空間の中に消えたのを見届けてしばらく思考が停止していたが、ようやく復帰してそう呟くと、顔にオルフェノク特有の痣を浮かび上がらせた。

すると章治の身体が灰色に変色しながら盛り上がり、その姿をイモムシに無理矢理手足をくつつけたかのような異形のキャタピラーオルフェノクに変化させた。

(起きるなよおゝ絶っつ対に起きるなよおゝマジで……)

そう念じながらキャタピラーオルフェノクはゆっくりとした動作で慎重に穴の所にしゃがみ込むと、その姿を更に変化させ始めた。

「アタックライド…フアング・アーム！」

「ガアアッ！」

「アタックライド…スラッシュ！」

「…又ッ！」

デージェクトは「アームファンク」の効果を発動させると、両腕に刺さった複数のライドプレートを変質させて一つの大きなブレードに変形させてデージェントに特攻してきた。

それに対してデージェントは「スラッシュ」の効果で攻撃モーションに斬撃の属性を付加させると、その両手の手刀でデージェクトの二本のブレードを防いだ。

「グウウウウ……」

「又ウウ……」

「ガアアッ！！」

「ぐはっ！？カッ…ハッ……！」

互いに鏝迫り合いになったのも束の間、デージェクトはデージェントの左脇腹を蹴って吹き飛ばした。

吹き飛ばされたデージェントは壁に叩きつけられ、肺の中の空気を一気に吐き出されて息を詰まらせた。

いつもなら事前に相手の動きを空間把握能力によって予測して避ける事が出来たのだが、相手が自分と同じDシリーズである為、常に装甲を形成する為に潜在演算を行っている。

その潜在演算がジャミングの役割を果たしているので相手の動きを予測する事が不可能なのだ。

「ガアアアッ！！」

「くう…ハアッ！」

「グアウッ！？」

壁に叩きつけられて怯んでいる隙にディジェクトが斬りかかろうと迫って来るが、それをハイキックによる斬撃を飛ばすことで牽制し、そのハイキックから流れる動作で回し蹴りを二回放って斬撃による追撃を与えようとした。

「フツ！ハアツ！」

「ガウツ！ガアツ！！ガアアアアツ！！」

しかしその斬撃を両腕のブレードで弾き飛ばし、再び突っ込んできた。

「アタックライド…プラスチック！」

「ハアツ！」

「グウウウウツ！？」

だがそうなる事ぐらいはディージェントにも察しがついていた。既に回し蹴りの最中にバツクルを展開し、カードをクラインの壺から取り出していたディージェントはディジェクトが突っ込んでくると同時に「プラスチック」の効果を発動させて両手からエネルギー弾を連続でディジェクトに放った。

そのマシンガンの様な連続射出にディジェクトは後退しながらもカードホルダーからカードを一枚取り出し、バツクルに挿入すると、ライドホーンを叩きつけて効果を発動させた。

「アタックライド…リジェクション！」

「シ、シックスエレメントを拒絶する！！！」

そう宣言した途端、デージェクトに命中したエネルギー弾がデージェントの方に跳ね返って来た。

「っ！？うっ！ぐあっ！」

跳ね返されたエネルギー弾をまともに受けてしまい、その予想外のダメージに思わず膝を突いてしまった。

「どうした…もう終わりか？」

「……………」

膝を突きながらも、デージェントはどうやってこの状況を打破するか考えを巡らせた。

デージェクトの「アームファンク」は先程「リジエクシオン」のカードを使った為、能力が上書きされて元のライドプレートの形状に戻っている。

そして今宣言した効果はシックスエレメントの拒絶……。つまりシックスエレメントは通用しないが、それ以外なら効くと言う事だ。

(…という事は、物理的な攻撃……………)

「おい、やる気があるのかお前……………」

「ハッ！」

「ぬおっ！？」

デージェクトが油断して近づいてきた所を足払いして態勢を崩させると、その隙に新たにカードを発動させる。

「アタックライド…スラッシュ！」

「フッ！」

「ゲウツ！うつ…ぐあつ！？」
「っ！？」

態勢を立て直そうとしているディジェクトに手刀を浴びせようと斬りかかるが、その手を驚掴みにされて防がれてしまった。

だが「アンチ・キル」を介さずに斬り付けたため、その装甲の薄い手から血が噴き出した。

ディジェクトはそれに思わず動揺して動きを止めてしまった。

そして、その血を…自分がやったことで噴き出した血を見てディジェクトは強烈なフラッシュバックに襲われた。

『コラ！大人しくしろ！！』

『く、うあああ！！』

『！？おい、何してる！？やめる！！』

『うわああああ！！』

『ぎゃああああつ！！』

『早く、止血しろ！！』

『ダメです！出血が止まりません！！』

『クソ…！実験体の分際で何をしてるんだ！この……』

『人殺しが！！』

「…ッ！！ハア…ッ！ハア……ッ！！」

「…ッ！ガアアッ！！」

「がはっ！！」

デージェクトはその隙を見逃さずに突然激しく呼吸を乱しながら頭を抱え出したデージェントの腹にボディーブローを入れて殴り飛ばすと、二枚のカードを取り出して一枚ずつバツクルに挿入してそれぞれの効果を発動させた。

「アタックライド…ファング・レッグ！」

「ファイナルアタックライド…ディディディージェクト！」

一枚目のカードの効果で右足のライドプレートがブレードに変形させ、更に二枚目のカードで自分とデージェントの間に十枚のデージェクトのライダーズクレストの描かれたビジョンを展開した。

「ゲウウウウ…ガアアアアアア！」

デージェクトは低く構えた後、雄叫びを上げながらビジョンを通過して飛び回し蹴りを放った。

ビジョンに触れるごとにデージェクトの身体に吸い込まれるように消えて行き、その中に溜めこまれたシックスエレメントがブレードに送り込まれて行く。

一枚、二枚と吸収して行く度にそのブレードに赤黒いドロドロとしたノイズが包み込まれて行き、飛び回し蹴りの回転速度も徐々に上がって行く。

「ゲハツ…クウ……！」

デージェントは咳込みながらも何とか立ち上がりクラインの壺からカードを取り出すようにするが、先程のフラッシュバックの影響で上手く演算ができず次元断裂が出てもすぐに霧の様に消えてしまう。そうしている間にもデージェクトの凶刃はもうすぐそこまで迫って

いる。

(間に合わ……！)

その攻撃を避ける事が出来ず、ディジェクトの必殺技・「ディメン
ジョン・ストライザー」が直撃して、ディージェントはそこで意識
を失った。

第二十四話：代行者VS拒絶者（後書き）

加奈「加奈と！」

梶月「梶月の！」

加奈・梶月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

梶月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（　　・　　）　正幸さんのちよつとした裏話（

梶月「正幸ってこないだのヤサ男の事か？」

加奈「梶月！そう言う事言わない!!」　脳天チヨツプ

梶月「アブねっ！」　受け止めた

加奈「ちっ、防がれたか……」

梶月「何か黒い!？」

カンペ（　　）　で、そこに資料があるから読んでみて（

加奈「どれどれ…何これすっごいトリビア……」

梶月「何て書いてあるんだ？」

加奈「うん、正幸さんの名前の由来なんだけどね……」

梶月「おう」

加奈「まずあの人が誰のリイマジか分かる？」

梶月「え？うう〜ん…やっぱリースオルフェノクになれるから木場勇治なんじゃないのか？」

加奈「そう、でもこの人の名前だと共通点が名字しかないのよ」

梶月「木場…岸边……なるほどな、確かにちよつと似てるかもな。

でも勇治と正幸だと全然共通点がないなあ。あつても『ゆ』が付いてるくらいだぜ」

加奈「それで下の名前の決め手になったのがなんと……」

皐月「なんと……?」

加奈「木場勇治役だった泉政行さんの下の名前を使ったんだって」

皐月「まさかの中の人ネタかよ……作者もよく思い付いたなあ……」

カンペ（ ） 因みに他の二人は簡単な言葉遊びです。

乾巧……とりあえず乾の『いぬ』が付く名字で犬飼、巧を逆さに読んで『みくた』にした後一文字消して美玖。

三原修二……三原の『三』と、最初のデルタだった木村沙耶の『木』を合わせて三木、修二の『ゆ』の部分を一文字ずらして『よ』にして章治って感じですよ

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「感想や質問、オリジナルライダーの募集も随時待ってるぜ！」

第二十五話：章治失踪の真実（前書き）

もう伏線がテenko盛りだなあこれ……。
回収できるのか？（。。；）

第二十五話：章治失踪の真実

デিজエクトは変身を解除すると、倒れている歩を見下ろした。歩の口の端からは血が出ているが、胸が上下に動いていることから気絶しているだけという事が分かる。

あの時デিজエクトは殺すつもりなどなかったからこの程度で済んだのだ。

（コイツ…たかが血を見ただけで動揺したのか…？）

好太郎は自分の右手を見た。その手からは血が流れてはいるが大したことはない。

問題は歩がただ好太郎の手を斬っただけであそこまで動揺した事だ。

（妙に無頓着な奴かと思えば、反吐が出るほど甘かったり…随分と精神が不安定だな…）

好太郎は知らなくて当然だが、歩は幼少時代から次元断裂発生の実験体として育てられてきた。

そのため、彼には必要最低限の…言語解釈や計算の基本くらいの教育しかされていない。

そんな人間が普通の感情を持ち合せているわけがなく、彼の心と時間はずっと止まったままで当然なのだ。子供のままで…。

持っているのはせいぜいその類稀なる演算能力と、殺す事への罪悪感だけだ。

この罪悪感先ほど歩が起こしたフラッシュバックの事件の時に抱いた傷付ける事への嫌悪感が原因だ。その感情が強くなった事が、今の歩の行動の根本となったと言っていていいだろう。

好太郎が歩の事を解釈していると、突然目の前に次元断裂が現れた。決して自分が出したわけではないし、ましてや気絶している歩でもないだろう。

目を鋭くして警戒しながら見ていると、その中から亜由美が何やら慌てた様子で飛び出して来た。

「歩！章治さんの……って歩！？どうしたの！？」

「気を失っているだけだ。それよりも、どうした？」

「あ、ええと……章治さんのライダーズギアが取られたんです！早く取り返さないと……！」

如何やら自体は思わぬ方向へ向かっている様だ。

デルタギアを奪われたとなれば歪みしよびは変身できない上に最早ライダーでもない。つまり歩の言う事象への干渉と一切関係がない。

更にデージエントは「歪み」を消そうとしない上に、行動不能と来た。

こうなればデージエントと同じDシリーズである自分が何とかするしかないだろう。

（世界を救う……か……柄じゃないが、やってやろう……これまでだつて、そうして来たんだ……）

「分かった。お前はここでコイツを看ておけ。俺が行って来てやる」「ウ、ウン……分かりました……」

好太郎は来た道に戻って隠れ家へ向かった。

好太郎もワールドウォーカーではあるが、大まかな空間移動しかできないのでこうして向かうしかないのだ。

亜由美に連れて行ってもらおうと言う手もあるが、それだと章治を倒そうとする自分を止めようとするだろう。

亜由美と歩には悪いが、ここで「歪み」である章治は消させてもらおう……。

（カカカツ！これで俺の昇進は確実だな！！）

モールオルフェノクは地中を高速で移動しながらこの先に待ち受けているであろう正真話を妄想しながらほくそ笑んでいた。

社長からの指示ではデルタに接触した場合、勝てないと判断したら速やかに撤退し、どこで遭遇したかを報告する事が最優先事項であった。しかも自分はデルタギアの奪還に成功している。

個人的には三木主任も連れ戻したい所であったが、万が一ヘマでもしてデルタギアを奪い返されでもしたらこちらの身が危ない。

とりあえずここはデルタギアだけでも確保して再度改めて搜索した方が確実だ。

これさえあれば今後の三木主任の搜索に於いてデルタに変身して来る事はない。そうなれば捕える事が出来るのも時間の問題だ。

そうなればこの業績を上げた自分に昇進の話が来る事は必然…これで俺の人生バラ色街道まっしぐらだぜ！！

（カー！カカカカカカ！！…って、ん？）

そんな事を考えていた時、右足に何かが絡まった感触を受けた。

（何か当たったな…根っこか何か…あああああっ！？）

そう思った次の瞬間、その絡まった物に引っ張られるように元来た

道を逆走し始め、やがて廃墟となったホテルのロビーまで引っこ抜かれてしまった。

『い、一体何が…って何だお前!?!』

宙吊りになった状態で見た物は背中から生えた灰色の鞭の様な尻尾を使って自分の足を持ち上げているアゲハチョウを模したオルフェノクだった。

そのオルフェノクはモールオルフェノクの問いかけに何も答えず黙ったままで、その無機質な複眼でこちらを見据えているだけだ。

(だ、誰なんだコイツ…!?まさか、主任か!?でも主任はイモムシのオルフェノクだったはずだ…!確かにそこから進化して別の形態になるって可能性はあるが…何だこの寒気は…!?コイツ、普通じゃねえ!!)

モールオルフェノクは目の前の得体の知れないオルフェノクに恐怖心を覚えた。

このオルフェノクからはどこか特別な何かを感じるのだ。

そんな事を考えていると、そのバタフライオルフェノクは無言でモールオルフェノクを灰色の尻尾でホテルの入り口まで投げ飛ばした。

『うおおああああ!?!アダツ!ク、クツソ…!!』

モールオルフェノクは地面に叩きつけられた衝撃で少々痛む身体をすぐに立て直すと、バタフライオルフェノクの死角となる外側の入口の端に隠れた。

(どうなってやがる!?それに、さっきの尻尾って杉浦すけつひの何じゃ…まさか、奪ったのか!?)

あのバタフライオルフェノクから生えている尻尾は杉浦…モンキー
オルフェノクの物だ。
彼とは最近同じ部署に配属されたので、その能力の事くらいは知っ
ている。

もし本当に奪われたとすれば、杉浦はすでに殺されている可能性が
高い。

（クツソオ…よくも杉浦を…！でも、多分俺じゃ勝ち目がねえ！逃
げようにもまたさつきみたいに捕まっちゃう…！どうすりゃ……お、
そうだ！この手があった…！）

モールオルフェノクは先程から自分の手元にあったアタツシユケー
スの存在に気付いた。
すぐさまケースを開くと、その中には目的の物が入っていた。

（よしっ！ドライバーもデルタフォンも入ってる…！これならイケ
るぜ…！）

モールオルフェノクはその身体を一瞬光らせ人間態である男性の姿
に戻ると、デルタドライバーを腰に巻き付け、デルタフォンを口元
に近付けた。

「変身！」

「スタンディング・バイ…コンプリート」

認証コードを入力して右腰のデルタムーバーにセットすると、認証
音声が鳴り、その身体を白いフォトンストリームが包み込むとその
姿をデルタに変えた。

「おおっ！？すっげえ力だ！！カカカツ！これで勝ったも同然だぜえ！！！」

デルタに変身したモールオルフェノクはその身体中に漲る力みなぎに思わず感嘆すると、その勢いで物陰から飛び出してバタフライオルフェノクを迎え撃とうとした。だが……

「ってアレ？どこ行きやがったアイツ……？」

どこにもその姿が見当たらなかった。逃げたのかとも思ったが、冷静を取り戻した頭がこの空間を支配するプレッシャーを感じ取った。間違いなく、まだこの辺りにいる。

(どこだ……？ん、待てよ？主任はこの半年の間にかかなりの数のオルフェノクを殺してる……。そして、オルフェノクを殺すことでその能力を得ているとすれば……ッ！マズイッ！！！)

「くうっ！」

デルタはある可能性に勘付いて急いでホテルから出ようとしたが、「ズンッ！」と背中から胸に駆けて一直線に衝撃が走り、一拍置いて激痛が襲ってくるとうまく理解した。

自分は今、背後から灰色の刺突剣で貫かれているのだと……。バタフライオルフェノクはステルス系の能力を持ったオルフェノク的能力を使って姿を消していたのだ。

「な……ク、ソ……！遅かったか……！！！」

『……………』

装甲に多大なダメージを受けてしまった事をデルタギアが感知して変身が強制的に解除されてしまった。

ライダーズギアにはすべて安全装置が備わっており、パワードスーツにある一定のダメージが蓄積すると、戦闘不能と見做して装甲を強制解除してしまうのだ。

口と胸の傷から血が零れ出し、身体中から灰と青い炎が噴き出し始める。

せめてもの抵抗として徐々に灰化して行く身体を鞭打って首だけを振り向かせてバタフライオルフェノクの方を向くと問い質した。

「テ：メエ、ゲフツ：まさか…この為に、俺達を…！！」

彼が思い立ったのは主任が新たな力を手に入れる為にオルフェノク狩りを始めたという事だった。

もしかすれば、コイツがオルフェノクの“王”かもしれぬ。

だが、こんな理不尽な“王”が自分達の上に立ってたまるか…！

その想いを込めて言い放った言葉に、バタフライオルフェノクは無機質な複眼で自分を見据えながら、ようやく一言だけ喋った。

『半分正解や』

その一言を聞いた瞬間、男の身体は完全に灰化して、床に灰の山を作った。

(アレがヤツのオルフェノク態か……。確かに他のオルフェノクとは何かが違うな……)

好太郎が隠れ家まで戻って来た頃には、既に章治が変化したのである。オルフェノクが男の身体を刺突剣で刺し殺している所だった。男の身体から灰と青い炎が噴き出し、完全に灰化すると、オルフェノクはその身体を一瞬だけ光らせ、章治の姿へと戻った。

章治は灰の山を被ったデルタギアを拾うと、軽く灰をはたき落した。そこで好太郎の存在に気付いたのかこちらを見ると、飄々とした笑顔で歩み寄って来た。

「おゝロン毛、この辺にアタツシユケース落ちてへんか……ってここにあったか……」

「……おい」

出口まで来た所ですぐ横にアタツシユケースが開いた状態で落ちているのを見つけると、それを拾い上げてその中にデルタギアを入れようとしていた所を好太郎が呼びとめた。

「ん、何やロン毛？それよりも嬢ちゃんも死んだ魚の目えした兄ちゃんはどうしたんや？一緒だったんとちゃうんか？」

「そんな事はどうでもいい……お前が『歪み』なんだろ？」

その言葉を聞いた瞬間、章治の目が怪しい色に染まった。

その目には確かな狂気を孕んでおり、触れてはならない逆鱗に触れてしまったようだ。

「……ほお〜う、何を根拠に言うてるんや？」

「分かるんだよ、お前の中にいる得体の知れない何か」

「そりゃあウチはオルフェノクやからな。そんなん持ってて当たり

前やる」

「どうだかな、お前とやり合えば分かるんじゃないのか？」

そう言い放ちながらディジエクトドライバーを取り出し、装着すると、ディジエクトのカードをポケットから取り出しバツクルに挿入すると、野獣の様な構えを取った。

「カメンライド……」

「ったく、ホンマにやるんかいな。オルフェノク以外に興味ないっちゆうのに……しゃあない、付き合ったるわ」

章治は嘆息混じりにそう言うと、仕舞おうとしていたデルタギアと取り出し、アタッシュケースを放り投げると、ベルトを巻いてデルタフォンを口元に近付けた。

そして同時に変身する為の認証コードを口にした。

『変身！』

「ディジエクト！グオオオオオオ！！」

「スタンディング・バイ…コンプリート」

片や刺々しいダークレッドのライダーに、片や白いラインの走った黒いライダーに変わり、戦闘が始まった。

スマートブレイン・ライダーズギア開発研究所……

正幸は美玖と別れた後、ここに訪れていた。

この施設はその名の通りライダーズギアを開発する為の施設で、以前は章治がここで主任として務めていたのだが、失踪した今では正幸がその代理として稀にその進行状況を確認する為に訪れている。

「じゃ、社長！どのような御用件で!？」

「オーガギアのメンテナンスを頼む。あと、章治主任の研究室を使わせてもらっぞ」

「は、はい!どうぞこちらへ!！」

正幸は研究所の所員にオーギアの入ったアタツシユケースを渡すと、研究所の奥にある章治が使っていた研究室へと歩いて行った。

章治が失踪直後は、ここへよく訪れていた。

ここへ来れば何か手掛かりが掴めるかとも思ったが、有力な情報は集まらなかった。

その代わり、章治が残したライダーズギアの設計図を見つけて新たに「帝王のベルト」と称されるライダーズギアを二本作れたのはスマートブレインにとっては業績だろうが、そんな物は正幸にとってただの副産物だ。

今回はそんな事の為に来たわけではない。章治の手掛かりと、美玖の身体の事だ。

もしかしたら章治は美玖の寿命が近い事が分かっていたのかもしれない。

しかし、それなのに失踪し、オルフェノク達を狙う理由が分からない。

ここに来れば何か手掛かりがあるのではないかと思い、やって来たのだ。

章治の研究室に入ってそこに設置されている主任専用のパソコンを立ち上げ、「極秘ファイル」と書かれたファイルをクリックした。しかしそれにはパスワード制限が施されており、閲覧できない状態になっていた。

(今日こそは、見つけ出してやる…！)

正幸はこのフォルダを見つけてからは、幾度となく様々なパスワードを入れてきた。

章治の生年月日に始まり、続いて美玖、正幸の生年月日、趣味、オルフェノク態、更にはそれらの生年月日を式にしてその数字を入力した事もあったが結局どのパスワードとも一致しなかった。

そして今回も新しく“寿命”と入力してみるがやはり閲覧する事が出来ない。

ここまで来て諦めたくない一心で何かないかと考えがてらにデスクチェアに乗ってクルクルと回り始めた。

(何か…何かあるはずだ…：章治に関わるパスワードが…：考える…考える…！)

その回転速度が徐々に加速して行き遂には…

「うわっ！？イテッ!？」

バランスを崩してこけてしまった。

「イタタ…やっぱりちゃんとしたのじゃないとバランス崩しちゃうなあ…：今度新しいのに買い替えておこっかな…って、ん？」

転んで視界が低くなったことで、正幸の目にある物が映った。

デスクの裏側には何やら分厚い本が張り付いていたのだ。それをベリベリと剥がしてその張り付いていた面を見ると、白い糸の様な物が付いていた。

どうやら章治のオルフェノク態の特性であるキャタピラーオルフェノクの糸を接着剤代わりに使って張り付かせていたようだ。そしてその本には「旧約聖書」と書かれたいた。

(旧約聖書？何で章治がこんな物を……)

留め具を外して何気なくパラパラと捲っていくと、ある一文に赤いペンでチェックされているページを見つけた。そしてそこにはこう記されていた。

「^{ノアズ}Noah's ^{アーク}Ark”…ノアの方舟…ツ！もしかして…！」

正幸は再びデスクチェアを立たせてそこに座り、そのパスワード・“Noah's Ark”を打ち込んで、エンターを押した。すると、その予想は見事に的中し、フォルダが開かれた。

「やった…！」

そしてその内容を見てみると、その日の研究の進行過程や、章治が独自に調べたオルフェノクの生態について書かれていた。そしてその中で失踪の一週間ほど前に書かれた記録が目に入った。そしてそこにはこう記されていた。

『今回の社員の健康診断結果で彼女の寿命が近い事を知った。今はまだ大丈夫だろうが持って約半年と言ったところだろうか……』。

この事を知っているのは私の部下だけだ。この事は正幸にも言うべきだろうが、彼にこの現実には辛すぎると思いき、言えなかった。

美玖の事を好いていた正幸にはどうしても言う勇氣がなかったのだ。本当にすまないと思う……。

彼女の診断結果は私が捏造し適当にでっちあげておいたが、そんな事で彼女の寿命が延びるわけがない。

「一体、どうすれば彼女を救う事が出来るのだろうか……。」

（そう言う事だったのか……でも、これだと失踪した理由にはならない……もつと何か別の理由があるはずだ……）

更に探って行くと、今度は失踪する前日に書かれた物が目に入った。

『私の中から声が聞こえてきた。その声は人類すべてをオルフェノクにするために私の身体を超越せと言って来たが、身体を超越すなどまっぴらゴメンだ。恐らくこの声はオルフェノクの“王”なのだろう。』

私が独自に調べた仮説によれば、その“王”は確かに全ての人類をオルフェノクにするだろうが、必ずしも助かるとは限らない。“王”による選定があるのだ。

その選定に選ばれなければたとえ一時的にオルフェノクになってもすぐに身体が耐えきれずに灰化するか、“王”の糧として喰われて

しまつのだ。まさしく、次の世代へ行ける者を選ぶ“ノアの方舟”と呼べるだろう。

私はこの“王”を“ノアの方舟”から取ってノアオルフェノクと呼ぶ事にする。

このノアオルフェノクが目覚めてしまえば、正幸の“夢”とは程遠い未来が待っているだろう。

私はこの王を目覚めさせるつもりは毛頭ない。正幸の“夢”の為に……。

しかし、ノアオルフェノクの力を使えば美玖を助ける事が出来るのも事実だ。

ノアオルフェノクの選定に選ばれた者は人間としての姿を捨てられ、完全なオルフェノクとして不老不死の力を与えられる。その力を美玖に使ってやれば彼女を死なす事もないだろうが、美玖はオルフェノクとしての自分の姿を嫌っている。

そんな彼女にその力を与えようとしても彼女は間違いなく拒否し、自ら命を落とす道を選ぶだろう。

ならば、こうすればどうだろうか？

彼女の人間としての姿を捨てさせずに寿命を延ばすだけに留めるのだ。

それは非常に難しい事だろうが、ノアオルフェノクが目覚める前に十分にエサを与えてその力だけを引き出せるようになれば或るいは……。

私はしばらく姿を消す事にする。そして、必ず美玖を助けてみせる

！！！』

「まさか、この為に今まで社員を……!? 美玖を助ける為に……わつと!?!」

そのあまりにも衝撃的な内容に正幸は思わず、またデスクチェアから落ちそうになるが、今度は何とか態勢を立て直すと、再びクルクルと回り始める。

(“エサ”というのはオルフェノクの事で間違いないだろう……そして、章治の中にオルフェノクの“王”がいる……臭いが分からなくなってしまうのは、恐らく目覚めようとしている“王”が章治の身体を変異させて臭いを変えている為……まさか、こんな近くに王様がいたとはね)

「章治の馬鹿……何でそんな事黙ってたんだよ……俺達、仲間だろ……」

キイイイイイン……

章治への愚痴を零していると、そんな耳鳴りが聞こえてきた。

それと同時に自分のオルフェノクとしての本能が警告音を鳴らし始める。

「っ!!まさか、ここで来るのか!?!ちっ!!」

正幸はすぐに腰を上げてその場から離れると、パソコンの液晶画面からあの黄金の不死鳥が現れ、正幸を睨みつけた。

『ギユアアアアア!!』

その目は憤怒の色に染まっており明らかな敵意を持っていた。撃退した時の事を相当根に持っているのだろう。

(どうする？ライダーズギアはここに来る時に所員に渡してしまっ
た…ならオルフェノク態でやるしかないのか…？)

『ギユアアアアアツ！！』

そうこう考えている内に、ミラーモンスターが襲いかかって来た。

「クツ…！やっぱりやるしかないのか…！！」

そう悪態を吐くと、顔にオルフェノク特有の痣を浮かび上げらせ、
その身体を馬と騎士を掛け合わせたようなオルフェノク…ホースオ
ルフエノクへと変化させた。

(章治、ゴメン！研究室壊しちゃうかも…！)

心の中で章治に謝りつつ、ホースオルフェノクは不死鳥へ突っ込ん
で行った。

第二十五話：章治失踪の真実（後書き）

加奈「加奈と！」

臯月「臯月と！」

歩「歩の」

加奈・臯月・歩「あとがき〜ラジオ〜（！！）」

加奈「……って歩！？何でここにいるの！？本編で気絶してたんじゃないの！？」

歩「これが後書きクオリティってヤツだよ」

臯月「今回は読者から質問が来たからそれに答える為にわざわざ来たんだと」

加奈「へえ〜遂に質問が来たのね。それで、どんな内容なの？」

カンペ（ ） 伸剣さんからの質問です。『歩たちにはデイクライドのように「光写真館」のような決まった居住地はないんでしょうか？』（ ）

臯月「なるほど、確かに移住先の描写って少ないよな。あっても真司のアニキが前まで住んでたマンションくらいだったよな」

加奈「それで、実際のところどうなの？」

歩「答えは『決まった居住地はない』だね。その世界に訪れた時に役割を与えられるのと同じように、その世界で住む事になる移住先も、その役割に合わせた場所を与えられるんだよ。因みに今回の僕の役割はスマートブレインの平社員で、移住先は高級マンションって言う事になってるよ。」

カンペ（ ） 因みにその高級マンションは木場さん達が住んでたあのマンションをイメージしてください（ ）

皐月「へえ〜そうだったんだ〜」

加奈「って言うか、ようやく歩の役割が分かったわね……」

カンペ（スマン、書くタイミングが分からなくて……（、、；）（

歩「まあ役割なんておまけみたいなモンだしね。そんなに気にする
必要もないよ」

皐月「じゃあ裏設定的なものだと思えばいいんだな？」

歩「そう言う事」

加奈「それじゃあ、質問も終わったという事で今回のあとがきラジ
オはここまで！」

皐月「感想と！」

歩「質問もお待ちしております」

加奈「ところで歩、もっとテンション上げれないの？何だか暗いわ
よ」

歩「これでも結構高い方なんだけどね」

皐月「何時もと変わんないと思うんだけどなあ〜」

歩「う〜ん……ゲッツ」 キレのある動き

加奈「古っ!？」

皐月「でも動き超機敏だったぞ!？」

歩「それではみなさんまた次回〜」 手を振ってる

加奈「そして何事もなかったかのように流した!？」

皐月「テンションたけえ! やっぱりコイツ、今メチャクチャテンシ
ョンたけえぞ!？」

第二十六話：過去へ導くは破壊者の残滓（前書き）

今回は歩の過去をほんの少し覗いてみましょう。)

そしてそこにはあの人が……！

それではスタートオ！！)・・)

第二十六話：過去へ導くは破壊者の残滓

(歩…本当にどうしたんだろう……。まさか本当に好太郎さんが…?)

亜由美は倒れている歩を看ていた。

好太郎の話では気を失っているだけだと言っていたが、その原因となったのは恐らく好太郎だろう。

二人の間に何があったのかは知らないが、何か理由があったはずだ。

(一体どうして…あ、これって歩の……)

そんな事を考えていた時、亜由美の目にディージェントドライバーが映った。

歩はこれを使って今まで2年間もの間世界を旅してきたと言っていた。そして、これを使いこなせるのはワールドウォーカーであり、完全に適合した自分だけだとも……。

亜由美は何となくそのディージェントドライバーに触れてみた。その瞬間……

「ッ！？な、何!？」

突然周りの空間が歪んで黒く塗り潰されたかと思えば、一気に周りが白く色付いて来た。

「じ、どこどこ?それに、歩もいなくなってる……」

亜由美は立ち上がりながら辺りを見回した。

気がつくところかの白一色の広い部屋にいたのだ。病院っぽいがそれとは違う独特の雰囲気があるので研究所とかの施設なのだろう。そしてその床には無数の太いケーブルが伸び、そのケーブルは何らかの大きな椅子型の装置に接続されている。そしてそこにはある一人の人物が鎮座していた。

「子供……?」

その子供は白いゴツゴツとした顔の上半分を覆うヘルメットを被せられており、そのヘルメットの隙間からは黒い髪がチラリと覗いていた。

『演算準備が整いました』

『よし、起動させる』

その声のした方を向くと、白衣を着た二人の男性が何かを話していた。

そして一人の男性が指示を出すとそれを聞いた部下と思われる人物が少年の向かい側にあった恐らくあの椅子型の装置を操作する為の装置に設けられたスイッチを押してコンソールをカタカタと打ち込み始めた。

すると椅子型の装置が「ゴウンゴウン」という音を出し始める。

『う……あ……あああああああ!』

その装置が作動するとともにそこに鎮座していた少年が苦しみ出した。どう考えてもあの装置が原因だろう。

「ちょ、ちょっと!何やってるんですか!?やめてください!」

亜由美は装置を操作している男性に声を掛けながらその肩に手を掛けようとした。だが……

「えっ…！？」

その手は男性の身体をすり抜けてしまった。

何度も触れようとするが、どうやらここにある物には全て触れる事が出来ない様だ。

「ひょつとして、これって『ビジョン』と同じただの立体映像…？」

亜由美はこれと似たような物を思い出した。

歩と初めて会った時に自分の事を話す為に使っていた「ビジョン」と同じ現象が起きているのだと。

恐らくディーゼントドライバーに触れた事が原因なのだろう。アしに触れた瞬間、何らかの要因で亜由美にこの映像を見せているのだ。

『あああああ…！！あ……う……』

少年の悲痛の叫びが途絶えると、操作をしていた男性がスイッチを切って装置を止め、上司と思われる男性に話しかけていた。

『ここまでの様です。進行状況は21%です』

『中々芳しくないな……それじゃあ新しくできた促進剤を使うぞ』

『そ、そんな！アレはまだ実用段階に入っていない上に副作用も大きいです！そんな事したらコレの身体が持ちませんよ！！』

部下と思われる男性は少年を指差しながら上司に説得していた。

しかし、亜由美にはそれが許せなかった。こんな小さな男の子を“

コレ”と言ってるで道具扱いする事が……。

『使った後に十分に休ませれば問題ないだろ。とっととコレを部屋に連れて行け』

『ハ、ハイ…分かりました……』

上司の指示に従って部下が少年に被せられていたヘルメットを取り外すとそこには見覚えのある顔があった。
真ん中分けの黒髪に虚ろな瞳…その顔立ちはまるで……

「え…？もしかして…歩……？って言う事は、ひょっとして、……って、歩の記憶の中…？」

幼くはあるが、アレは間違いなく歩だろう。どことなく面影がある。歩と思われる少年は、部下に引きずられるように歩き出し、その場を後にしようとしていた。

その時、周りに変化が起きた。

「え…！？周りが暗くなつてく……！？」

徐々にその空間がおぼろげに暗くなって行くのだ。それはまるで夢から覚める寸前の暗い空間に酷似している。

「そうか…！これって歩の記憶だから、記憶にない所は消えて行くんだ！追いかけないと…！！」

もしここであの少年を見失おうものなら、どうなるか分かったもんじゃない。

下手すればそのまま暗い空間に置き去りにされる可能性だってあるのだ。

亜由美はそう解釈すると急いでその少年の後を追った。

何も無い質素な白い通路を歩いて行くと、ある扉の前で研究員が止まってそこで何らかのパスワードを壁に設置された暗証登録機に打ち込むと、「ピー」という音がして扉がスライドした。

その中に入って行くと、中には簡易ベッドと剥き出しのトイレがあるだけで、まるで監獄の様だった。

しかもその部屋の角にはスピーカーが四方を囲む様に設置されており、そこから何やら激しいノイズを掻き鳴らしている。

『よし、ジャミングも正常に作動しているな』

そう呟きながら確認を終えた研究員は、少年をこの部屋に置いて出て行こうとした。

しかし、少年は研究員の白衣にしがみついた。

その顔は焦燥に駆られており、一人になりたくない一心で振りほどこうとする研究員にしがみついている。

『ま、待って！一人にしないで！！』

『ええい放せ！』

『あつっ！』

『お前はこの部屋でじっとしてるんだ。準備ができたならまた来る』

研究員は自分の白衣にしがみついた少年の手を振り払った勢いで投げ飛ばすと、そのまま部屋から出て行った。今この部屋にいるのは少年と亜由美だけだ。

しかし少年には当然亜由美の姿は見えておらず、必死に扉を泣きながら叩いていた。

『開けて！開けてよ！！』

だが、その扉は一切開く気配がなく、ただの壁として沈黙を続けるだけだった。

やがて少年は叩くのをやめてガツクリとうなだれると、ベッドに座って泣きながら何かボソボソと呟き始めた。

『……………ん……………あ……………さ……………』

「?」

少年が何を言っているのかと思い、近づいて耳を澄ましてみると、少年が今望むものを口にしていた。

『母さん…どこ…?』

(ああ、そっか……………。歩の時間はここで止まってるんだ……………)

亜由美はこの光景を一度見た事がある。“龍騎の世界”で人を殺しそうになった歩と同じなのだ。

ひよつとしたら歩の心は今も子供の状態で止まっているのではないだろうか？

この少年は母親を欲している。家族という、温もりを……………。

(この子に、何かさせてやれればなあ……………)

「まったく、何でこんな弱虫がディージェントドライバー適合者なんだか」

「っ!？」

突然この亜由美と少年の二人しかいない空間に第三者の声が聞こえてきた。

後ろを振り返ると、そこにはマゼンタカラーのインナーの上に黒いコートを着た茶髪の青年が立っていた。

歳は歩とそう変わらないくらいで、その顔は皮肉そうに歪んで嘲笑っているかのようだった。

「だ、誰ですか!？」

「俺の名は門矢士。最初の仮面ライダーディージェントだ」

「最初の…？もしかして、オリジナルって事ですか？」

“最初の”という言葉聞いて、紅渡と言う人物を思い出した。

彼も確か最初の仮面ライダーキバだと歩が言っていた。と言う事は、この青年も紅渡の仲間なのだろうかと思いついて訊ねてみた。

しかし門矢士と名乗ったその青年はそれを聞くと、軽く溜め息を吐いて「やれやれ」と言いたげに両手を上げて、更に続けた。

「少し違うな。俺は正確に言えばディージェントドライバーに備わられた人格プログラムだ。メインシステムであるディケイドの装着者の人格を基にした…な……」

そう言いながら亜由美の周囲を回って少年に近づいて行き、その小さな頭をポンと叩こうとしたが、すり抜けてしまう。

それに士は少しムツとして口を尖らせるがすぐに気を取り直して亜由美に説明を続ける。

「本来だったら俺がDプロジェクトを完遂する筈だったんだが、どう言うわけか破壊されたディケイドが復活した所為で人格プログラムを保てなくなっただけ。それでしようがなくディージェントドライバーに適合できる次元移動能力を持ったコイツにその役目を任せてるってわけだ。今の俺じゃあ、こうしてコイツの潜在意識の中で動く事しかできないしな」

そう言いながら少年の横にドカリと座るが少年は一切気付いておらず、ただボソボソと母親を呼んでいるだけだった。

という事はこの人物は歩の潜在意識に一切干渉出来ないのだろう。

「潜在意識……じゃあ、やっぱりここって歩の記憶の中？」

「そう言う事だ。お前はコイツの異次元同位体らしいからな、それでここまで来る事が出来たんだろ。俺には大体分かる」

「大体って…それで、ここって何時の記憶なんですか？かなり昔みたいですけど……」

「この空間はコイツの最も忌むべき記憶で作られた場所だ。さっきのディジェクトとの戦闘でそれが蘇ったんだろ」

やはり歩が倒れていたのは好太郎が原因の様だ。でも今は彼を責めている場合じゃない。

最も忌むべきという事は、これからもつと別の何かが起きると言う事だ。先ほど見た光景よりももっと残酷な何かが……。

「一体、これから何か起きるんですか？」

「そつだなあ、今から起きる事は…つと来たみたいだな」

「え？」

士が言いかけた所で何かの気配に気づいて扉に目を向けると、その瞬間扉が開いて先程の研究員が入って来た。

『来い、準備ができたぞ』

『…ッ！！』

その言葉を聞くと少年は怯えた様子で逃げだそうとするが、子供の身体で大の大人に抵抗する事が出来るわけがなく、すぐに捕まって

しまつ。

『コラ逃げるな！まったく、大人しく付いて来い！』

『う…う…』

少年はその研究員に引つ張られて部屋から出て行く。

その時少年は身体を震わせていた。相当怖がっているようで何とか触れてやりたい気持ちになるが、今の自分ではどうする事も出来ない。

だが、同時に怖くなったのも事実だ。

このままついて行けば歩の最悪の過去を見る事になる。

自分はそれを見て、彼を受け入れる勇氣があるのだろうか……。

そんな自分の不甲斐なさに憤りを覚えながら拳を握りしめていると、土が扉の前に立って問い掛けて来た。

「言うておくが、無理について来る必要はないぞ？ここでお前がブラックアウトしても、元の場所に戻るだけだしな。

さあどうする？ここから先はアイツの最も辛く、忘れたくても忘れられない出来事が待っている。お前には、この先に待ち受ける惨劇を見る覚悟があるのか？」

「そ、それは……」

その真剣な語調について口籠ってしまつと、土は「やっぱりな」と言つて溜め息を吐いた。

その間にも部屋がおぼろげに暗くなつていく。

「どつやら、今のお前じゃあこれ以上は見れないみたいだな」

「歩…ゴメンね……」

この場にはいない歩にポツリと謝つた。暗闇も大分濃くなり、何や

ら眠気さえも感じて来る。

「まあいいさ、まだチャンスはあるしな。もう一度見る覚悟ができたらアイツの意識がない時にディージェントドライブに触れればいい。そうすれば、俺がまたここまで案内してやる」

「意外と優しい人ですね」

亜由美は土のその面倒見の良さにそう思った事を零すと、目の前の青年はムスツとして目を逸らした。

「チツ、俺も大概お人好しだな…何で破壊者がこんな性格をしてたんだか……」

この青年は自分をディケイドの装着者の人格を基にしていると言っていた。つまりディケイドもこういう人物だったという事だろう。彼がどうして自分の事を破壊者などと言っているのか分からないが、少なくとも亜由美にはそうは見えなかった。

「おい、変な事考えてないでとつと寝て元の場所に戻れ。俺だつてディージェントなんだ、お前の考えくらい読めるんだよ」

「…ってアナタも私の心を読みますか!？」

「いいから帰れ!それに、そろそろ意識を保っておくのも難しいんじゃないのか?」

「え?あ……」

その言葉を聞いた途端、意識が急激に遠のいて行く。その中で土の声がわずかに届いた。

「いいか、アイツにはお前が必要なんだ。アイツは見た目が大人でも中身はまだガキだからな。保護者としてちゃんと面倒見とけよ」

その言葉に何か返そうとした所で、亜由美の意識は途切れた。

美玖は勤務時間を終え、コンビニに立ち寄って缶コーヒーを買ったあと、近くの公園のベンチに座って飲んでいた。いや、飲もうとしていたと言う方が正しいだろう。

「フーツ、フーツ……」

今の季節は11月の末、もうすぐ冬になろうとしている時期だ。こんな時期には温かい飲み物は必須なのだが、彼女は猫舌だ。飲もうにも熱すぎて飲めないでいるのだ。

「まったく、何故世間は猫舌の人達に対して何も考えてやらないのだ……ズツ…アチツ！」

どうせなら猫舌の人の為に人肌程度の温かさの飲み物があってもいいのではないかと思いつながら軽く啜るが、やはりまだ熱い。

幸いこの時間帯はこの辺りは人通りが少ない。こんな所を知り合いに見られようものなら、恥ずかしさで死ねる自信がある。

彼女はそう思っている様だが、既にスマートブレインでは誰も言わないだけで皆知っていたりする。

逆にその彼女の普段とのギャップによる可愛さで密かにファンクラブがあつたりするほどだ。

因みにその名誉会長は正幸だつたりする。

「……ッ！！まだ熱い……フーツ、フーツ……」

未だに缶コーヒートの熱さと奮闘していると、ファイズフォンから着信が鳴った。

その着信先は章治がいた研究所の物で、もしかすれば章治の手掛かりが見つかったのかという淡い期待を持って通話ボタンを押した。

「はい、こちら犬飼……」

『犬飼さん、大変です！襲撃です！！』

「何！？」

ファイズフォンから聞こえてきた所員の声からは恐怖の色を感じ取った。かなりの強敵の様だ。

「それで、どんなタイプだ！？」

『それが……見た事のないタイプなんです……！金色の大鷲型の激情態です！！』

「金色の鷲……あの時のか……！！」

美玖は所員から得たそのオルフェノクの特徴で、すぐにオーガと共に撃退したあのミラーモンスターだと理解した。

『それで、丁度こちらに来ていた社長と何人かのオルフェノクの所員が戦闘中です！早く……援護を……！！』

「分かった！すぐそちらへ向かう！！」

美玖はそう言って通話を切ると、片手でオートバジンの後部座席に置いてあったアタッシュケースを開いて、ファイズ専用変身ベルト……ファイズドライバーを取り出しながらファイズフォンに変身コードである「555」を打ち込んで閉じる。

「スタンディング・バイ……」

コード認証音声が鳴ったそれを閉じて口で啜くわえると、ファイズドライバーを両手で持つて腹部にセットした。

完全にセットされたのを確認すると、今度は口に啜えたファイズフオンを手に取り、天高く掲げて認証コードを叫んだ。

「変身!!」

「コンプリート」

美玖の身体を赤いフォトンストリームが包み込み、その姿をファイズへと変身させた。

ファイズは両手をブラブラと揺らすと、「よしっ!」と言ってガツと拳を握り絞めて確認を終えた。

そしてファイズはオートバジンに跨ると、研究所へと走らせて言った。

彼女が座っていたベンチには飲みかけの缶コーヒーと少しばかりの灰があるだけだった。

亜由美は気が付くと先程までいた地下駐車場で倒れていた。

その横には未だに気を失っている歩が呻きながらその目からツーツと涙を流していた。

きつと今頃あの後の続きを見ているのだろう。

亜由美はその歩から流れている涙をそつと指で拭くと、そつと謝罪の言葉を述べた。

「ゴメンね歩…今の私じゃ受け入れられないかもしれないから……。でも待つてて、いつか必ず受け入れるから……。」

その言葉は亜由美の決意を表した言葉でもだった。

今の自分では歩の事を全て知るには早すぎる気がしたのだ。

亜由美は彼の全てを知っているわけではないし、彼の事をどう思っているのか自分でもよく分からない。

本人は自分の事を保険と言っていたが、恐らくそれだけではない気がする。

自分と歩がこれからどういう関係になって行くか見定めてから、改めて行こうと思う。彼の過去を受け入れに……。

頬に伝わる指の感触に気付いたのか、歩は閉じた瞼をピクリと動かすと、ゆっくりと目を開けてこちらの存在に気付いたのか、ゆっくりと首を動かして添い寝する形で倒れている亜由美を見つけた。

初めてこの虚ろな目を見た時は死んだ魚の目だとか怖いだの不気味だのと思っていたがあの過去を見た今なら分かる。

歩の目は泣き腫らした目なのだ。

今まで誰にも自分の声が届かず、その孤独感で涙を流し尽くした目……。そんな悲しげな目で自分の名を呼んだ。

「……………亜由美？」

「ウン、起きた？」

「……………ウン」

その短いやり取りの後、たがいに身体を起こすと、歩はポツリと語り始めた。

「……両親に会った夢を見た」

「両親？」

「ウン、でも本当に会ったわけじゃないんだけど、傍にいてくれた……そんな気がする」

歩の言う夢が先程亜由美が見た光景だとすれば、その両親というのは恐らく自分と土と名乗った青年の事だろう。

あの時自分には何出来なかったのかと思っただが、傍にいてやる事が出来たかと思うと少しだけ嬉しく思う。

でも、これは歩に言うべきではないだろう。

自分は彼の本当の妹というわけではないし、ましてや母親でもないタダの他人だ。

歩が自分の事をどう思ってるのか分からないなら尚更だ。

もし傍にいたのが親でも何でもないただの他人だと分かれば、ガツカリさせてしまうかもしれない。

だったら、自分に言える事は一つ……

「そっか、よかったね！」

最高の笑顔でそう答えてやるだけだ。今の自分にはこれくらいしかできないが、何も出来ないよりはずっといい。

歩はその笑顔を見ると、自分の事を思っただけで笑ってくれているのだと気付き、そっと呟いた。

「ウン、ありがとう……」

歩に「ありがとう」と言われるのはこれが二度目だが、やはりこの言葉を言っている時は何時もの素っ気ない口調ではなく、ちゃんと心が籠っている。それだけ嬉しさと感謝の気持ちが強いのだろう。

何時もそう言う感じで話せばいいのにと思うのが今の所はこれで良しとしよう。これから慣れてくれればそれでいい。

「フフツ、どういたしまして…ってああ!」
「どうしたの？」

そこまで思い立った所で亜由美はある重要な事を思い出した。
そうだ、章治さんのライダーズギアが奪われたんだった!

「歩! 章治さんの……」
「っ! 待った!」
「歩?」

突然何かに驚いたように歩は目を見開くと、外に繋がる通路を睨んだ。
亜由美もそちらを見るが特に何かあるわけではない。一体どうしたのだろうか?

「……消えた」
「え? 消えたって…何が?」
「『基点』が…章治さんの気配が消えた」

一瞬、歩の言っている事が分からなかった。いや、分かりたくなかった。
だって、さっきまで一緒にいたんだよ? すごく良い人そうだったんだよ?

何でそんな人がいなくならなきゃいけないの?

「……亜由美、好太郎君の所まで次元断裂を展開して…僕だと正確な位置に出せないから」

「ウ、ウン！分かった！！」

歩の頼みをすぐに聞き入れ、好太郎の所へ続く次元断裂を出し、亜由美達はその中へと走り出そうとした。

『ま……にの……だな……』
「ん……？」

しかし、歩は何か聞いて、立ち止まって後ろを振り向いた。だが、そこには誰もおらず、何もない駐車場が広がっているだけだった。

「……？」

「歩！何してんの！？早く！！」

「……ウン、分かってるよ」

亜由美に急かされて、歩は先程の音が空耳だと解釈すると、次元断裂の中に亜由美と一緒に溶け込むように消えた。

しかし、歩は気付いていなかった。その声は背後からしたのでなく、自分の潜在意識から呼びかけられた声だった事に……。

第二十六話：過去へ導くは破壊者の残滓（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「そろそろ佳境に入って来たわねファイズ編も」

皐月「だな、まさかの門矢士も出てきたし…これって何かの伏線なのか作者？」

カンペ「はい、今後の物語でとんでもない事にする予定です（？）（？）

加奈「とんでもない事って…何が起きんのよ……」

皐月「ま、それは今後のお楽しみってヤツだな」

カンペ「まあ、ここからが頑張り所ですけどね（…??）（…）」

加奈「確かに、問題は山積みね」

皐月「伏線全部回収できるのか、これ？」

カンペ「やるしかないでしょ！（皿…ズン）」

加奈「ま、一応どう締めるかの構成は出来てるんだから何とかなるんじゃない？」

皐月「でもそれってあくまで頭の中での話であって、それをどうやって文章にするかが問題だな」

加奈「そこは作者の力量次第でしょ」

カンペ（命を燃やすぜ……！（。 。 #））

加奈「さて、今回は話の内容をまとめる程度にしておきましょうか」
皐月「そうだな、次の「ピーー」編も考えないといけないし、作者も最近リアルが忙しくなってきたらしいからな」

加奈「今さりげなくすっごいネタばれ発言しなかつた!？」

カンペ（でも、分かる人には分かるんじゃないですか?—（。 ））

加奈「え?それってどういう事?」

カンペ（実は一部の読者の方にはもう話している事なんですけど、すでに渡る世界の順番は決まっているんです。そしてそのヒントは「サイドストーリー：3」の中に隠されてるんですよ）（。 ）（）

皐月「ま、アタシは教えてもらってたけどな」

加奈「だから何で皐月には教えてんの!？」

カンペ（気分です）（。 A。 ）（）

加奈「何だ気分ってええええ!!」収録室から飛び出した

皐月「ああゝあ、作者脳天チヨツプ確定だな」

『作者覚悟しろおおお!!』調節室まで来た

カンペ（うわっ、コツチ来た!）（。 。 ）（ぎゃあああああ!!—）（）

皐月「ま、皆からの感想も待つてるぜ!因みに次回の更新は一週間後になる予定だからそれまで気長に待っていてくれよ!」

第二十七話：道化師を拒絶する者と帝王の夢（前書き）

小説家になろうよ！私は帰って来たああああ！！（。°。#）
はい！と言うわけで久々に更新しました！＼（^ ^）ノ
とりあえず忘れてる人がいるかもしれませんが、これまでのあらす
じをオーズ風に行ってみましょう！！（。・。・）

一つ！亜由美がディーゼントドライバーに触れると、歩の過去に
飛ばされてしまう！！

二つ！しかし、過去を知るには早すぎる気がして、元の場所へ戻さ
れてしまう！！

そして三つ！「基点」である章治の気配が消えてしまった！！

以上が前回までのあらすじ。そして、今回は亜由美が過去へ飛んで
いる間に何があったのかを書いて行きます！（、。・。・）

あ、それとですね、二十一話の前半のオルフェノクに関する解説文、
あそこで重要なミスをしていたのに気付いたんで読み直して頂けれ
ばと思いますm（―m（
それではスタートオ！！（。・。・）

第二十七話：道化師を拒絶する者と帝王の夢

歩が章治の気配を感じなくなる数十分前……

ホースオルフェノクに変化した正幸はミラーモンスターに突っ込んだがその巨大な翼で叩かれてしまい、章治の研究室からドアをぶち破って廊下に飛び出した。

「うわっ！社長！？どうしたんですか、オルフェノク態になって！？」

『早く逃げる！襲撃だ！！』

丁度そこを通りかかった所員は、ホースオルフェノクに変化した正幸を見て、驚いた拍子に拭いていたメガネを落とし、狼狽しながらも訪ねて来るが今はそれどころじゃない。

『ギユアアアア！！』

「え！？うわあああ！！」

『く、遅かったか……！！』

所員に避難するように命令を出すのが、その瞬間ミラーモンスターが部屋から飛び出して所員を鉤爪で掴み、一瞬で所員が落としたメガネの中に吸い込まれるように消えて行った。

（まさか、本当に引き摺りこまれて……生きていると考えるのは難しいな……次は一体どこから……）

「社長！何ですか今の悲鳴は！？」

そこにまた別の所員が騒ぎを聞きつけて現れ、ホースオルフェノク

は彼に指示を出した。

『襲撃だ！今すぐこの事を全員に知らせて非難しろ！！後誰でもいいからライダーズギアを！！』

「は、はい！了解しました！！」

少なくとも、オルフェノク態で戦うよりライダーになって戦った方が効率が良い。その為のライダーズギアだ。

現在オーガギアはメンテナンス中で使えないだろうが、以前ここに来た時に渡したカイザギアなら何とかなるだろう。

オーガより若干スペックは低いが無いよりはマシだ。

『キュアアアアア！』

「え！？うわああ！！」

『く…！！お前の相手はこつちだ！！』

ホースオルフェノクの指示に従ってきた方向へと戻る所員に再びあの不死鳥が襲い掛かるが、ホースオルフェノクはそのメガネから飛び出して来たミラーモンスターの両足を掴んで動きを止めようとする。

『ギユアアアアア！！』

『は、早く行け！長くは持たない！！』

「は、はいいい！！」

一時的に動きを止める事は出来たがどんどん引っ張られてしまう。

ここでまた犠牲者を増やしてたまるか！彼らは…俺の大事な仲間だ！！

廃墟となったホテルの前ではデージェクトとデルタの二人のライダーによる攻防が繰り広げられていた。

「とりやつ！おおりやあつ！！」

「グウツ！？ガアアツ！！」

「なっはっはあ！そんなトロい攻撃なんて喰らうかい！！」

デージェクトはデルタの体術で翻弄されて行く中で何とか反撃しようとして拳を振るうが、デルタはそれをブリッジして軽々と避けた。

デージェクトのバトルスタイルは全てを蹂躪するかの様な力押し型の攻撃特化型。それに対してデルタはまるで踊っているかのように流れる体術によるトリッキー型だ。

スペック上ではデージェクトの方が圧倒していると言うのに、デルタのその独特なバトルスタイルの所為で中々こちらの攻撃が当たらないのだ。

「よっつとつとつはー！」

デルタはブリッジの状態から軽業師の様にバツク転しながらデージェクトの攻撃範囲から離脱した。

その際にデージェクトは一枚のカードをカードホルダーから取り出し、バツクルに挿入させる。

「アタックライド…ファング・シオルダー！」

電子音声が鳴り響くと同時に、両肩に備えられているライドプレー

トが湾曲したブレードに変質し、それを掴んで投げ飛ばそうとするが……

「ハイッ！ここでリターンやー！」

「何っ！？グオッ！？」

デルタはバツク転していたかと思えば突然態勢を低く構えてそこから飛び掛かる形でディジェクトにフライングクロスチョップを胸部にぶつけて来た。

その予想外の攻撃にはディジェクトも反応できず、吹き飛ばされてしまった。

(チッ！この道化が…！！)

その動きはまさに曲芸。更に言えば…道化師だ。

章治は本来それほど強いオルフェノクではない。しかし、それを補うために造ったのが自分専用の最初のライダーズギア・デルタギアなのだ。

正幸の“夢”には自分も共感している。だからこそ友として足手まといになりたくないと思ってライダーズギアを造ったのだ。

まあ、これを造るのにそれなりの理由として“王”を守るための、裏切り者を倒すためと言った理由を勝手にこじつけて正幸に許可をもらったのだが、自分がその両方になるとは何とも皮肉な話である。

「何やロン毛、強そうなのは見た目だけかいな」

「……フン、それはどうかな」

「アタックライド…リジエクシオン！」

デルタは挑発してくるが、それを簡単に受け流しながら吹き飛ばされながらも取り出しておいたカードをバツクルに挿入し発動させた。ここからが本番だ……。

「（今使ったカードはなんや…？まずは様子見しといた方が良さそうやな……）ファイア」

「バースト・モード」

「ホイっと」

デルタは相手がどう出て来るか見定める為に、デルタフォンをデルタムーバーと連結させた状態で取り外し、認証コードを唱えてフォトンブラッドで生成されたエネルギー弾をディジェクトに一発撃ち出した。

「……フォトンブラッドを拒絶する」

ディジェクトは撃ち出す直前を見極めてフォトンブラッドを拒絶対象として宣言し、自身に命中したエネルギー弾をデルタに跳ね返した。

「へ……？ウソン！？たつとつと、へブツ！？」

これはさすがに想定外だったのか、見事に跳ね返されたエネルギー弾に直撃し、装甲から火花を飛び散らせながら踏鞴たたらを踏んで、思わず何も無い所で躓いて不格好に倒れた。

（イッタァ）…流石は異世界のライダーズギア…何でもアリやな…

…)

デルタはエネルギー弾が直撃した右肩の装甲部分を擦ってどれくらいダメージを受けたのか確かめた。

(……この損傷レベルからして、そのままの威力で反射するらしいなあ。そして、あのロン毛は“フォトンブラッドを拒絶する”と言っていた。

……ってえ事はさつき使ったカードは“宣言した物を跳ね返す”能力を発動させる為のカードキーやったって事やな。

ホンツマにスゴいなあ…あんなモン、この世界の文明レベルやと造れへんで……)

デルタは先程の現象を解析し、一瞬で「リジエクシオン」の効果を見抜くと、仮面の奥でニヤリと笑った。

(つまり、逆に言えば“宣言した物以外は対象外”って事や。やったらさつきみたいに接近戦でも十分イケるわな)

倒れてからそこまで考えるのに約2秒。デルタは下半身で反動を付けて起き上がると、デルタフォンを元の位置に戻して再び接近戦に持ち込む為にディジエクトに突っ込んだ。

それに対してディジエクトは佇んでいるだけで、どうせ反応できずに呆けているだけだと思いつつながらフェイントをかけつつ回し蹴りを側頭部へと放った。が……

「……物理干渉を拒絶する」

「へ？つてのわあああああ！？」

放った右足がディジエクトに触れた瞬間、デルタは錐揉み回転しな

がら吹き飛ばされてしまった。

ファイズが研究所に辿り着いた頃にはその彼方此方から火の手が上がっていた。

その内部に入ると、火の手が回る中、オルフェノクではない者達は避難し、オルフェノクである者達はオルフェノク態や現在開発中だった量産型戦闘用特殊強化スーツ・ライオトルーパーと呼ばれるファイズを簡易化したパワードスーツを着用して暴れ回っているミラーモンスターの迎撃や研究所の消火活動を行っていた。

そしてその中には、紫色の円に（カイ）のラインが入った大きな複眼に、黒地のボディースーツとファイズより少し派手な銀色の胸部装甲。

そしてその装甲や四肢に黄色いフォトンストリームのラインを走らせたライダー・カイザがいた。

「避難の方はどうなってる!?!」

「はい!ほぼ全ての非戦闘の者達の避難を完了させました!!!」

そのカイザの声には聞き覚えがあった。どうやらあのカイザの変身者は正幸の様だ。

恐らく、オーガギアがメンテナンス中の為、代わりに以前メンテナンスを頼んだカイザギアがあったのでそれで変身したのだろう。

「そうか!ならお前達も早く避難しろ!!!」

「そんな!?!社長一人を置いて逃げる事なんて出来ません!!!」

「お前達では戦力外だ!他の者達にもこの事を伝えて逃げる!!!」

「……………」

その言葉を聞くと、ファイズはゆっくりとカイザにツカツカと近づいて静かに言い放った。

「それは出来かねますよ社長」

「美玖！？何故ここに!？」

「襲撃があったと連絡が来たんです。それよりも前を見てください社長！来ますよ!！」

『キュアアアアア!！』

ファイズはカイザに近寄って上司の言葉に反した。

カイザはここにファイズがいる事に驚くが、ミラーモンスターが鏡面化した機材の中から飛び出し、こちらに迫って来た。

それを寸での所で横に跳んでかわすが、何人かの社員がそれを避けきれず、その大きな嘴と鉤爪に捕らえられてしまった。

「ぐああああ!！」

『こ、コイツ…放せ!！』

そのライオトルーパーとトビウオ型のオルフェノク・フライングフェイスヤーオルフェノクの抵抗も空しく、すぐに別の鏡面化した機材の中に飲み込まれてしまった。

既に何人かの社員達はああやって鏡の中に引きずり込まれている。

「く、またやられてしまったか……………」

「社長、もしかして悔やんでいるのですか？」

「当たり前だろ、俺の力が足りない所為で……………」

「……………社長、こちらを向いてください」

「え……………グッ!？」

ファイズはカイザの仮面を思いつきり殴った。大して痛みはないだろうが、その予想外のファイズの行動にかなり動揺している。

「な、何を……!？」

「彼らは確かに戦力外かもしれませんが、社長が彼らを守るためにそう仰っている事も重々承知しております。ですが、彼らは貴方を守るためならその命を捨てる覚悟を持ってるんです。それを無碍にしないでください」

「美玖……」

ファイズの説教に、他の社員達もそれに同意を示して頷いてきた。

「俺達はこの命を全部社長に預けてるんです。ここで社長の為に死ぬるのなら本望ですよ」

『そうだが、もしアンタがいなかったら俺達はもうとっくの昔に死んでたんだ。もしここで死んだとしても俺達は絶対に後悔なんてしない』

「みんな……」

ここにいる……いや、スマートブレインのオルフェノク達はみんなその異形と呼ばれる姿の所為で人々から除け者にされた者ばかりだ。そしてそんな彼らを迎え入れたのが正幸なのだ。

正幸には夢があった。この世界をオルフェノク達の暮らしやすい世界にする為に……。

そして、人間との共存も……。

その為に自分達に存在を知り、蔑もうとして来た人間を仕方なく殺す事もあった。それによって更に人に疎まれるだろうが、それでも自分達は人間だったのだ。彼らとまた一緒に生きて行きたい……。

その正幸の強い意思：“夢”に共感を覚えたここにいる者達はこうして強い絆で繋がれている。それは失踪してしまった章治だって例外じゃない。

「この通りここにいる社員達はみんな貴方に忠誠を誓っているんです。だから、逃げろなんて言わないでください…私達は貴方の身体の一部同然なのですから…その一部が欠ければ、私達にも貴方と同じ痛みが伝わるんです。私達は…貴方の“夢”を守りたいのです！だからこそ、貴方の傍で共に戦わせてください！！」

燃え盛る炎の中、ファイズはカイザに跪いて忠誠を誓った。それに付き従うようにオルフェノク達は次々とカイザに跪き始める。ミラーモンスターがいつどこから襲ってくるかも分からないと言うのに、ここにいる者達はそんな事など範疇に入っていないかのように自分に跪いていた。

この時カイザはあの章治のあのファイルの一文を思い出した。

“私は王を目覚めさせる気は毛頭ない”

それはつまり“王”はやって来ないと言う事。ならば、一体誰が“王”になればいいのか…そんな事をここにいる者達に聞けば当然こう答えるだろう。

“貴方こそが我々の王です”…と……。

ならば、答えてやろうじゃないか。オルフェノク達の未来を守り抜ける…王に……。

それも、必要ならば全ての人間を滅ぼすしもするし、救いだってしやろう。それだけの覚悟を持ってやる。

「よし！ならあの不死鳥を地に墮とすぞ！！」
『ハッ！！』

カイザのその号令にここにいるすべての者達が同時に返事を返した。まるで軍人か何かみたいだななどと思わず仮面の奥で苦笑を漏らしながらも、全員の顔を見渡して行く。みんなこんな自分の為に付いて来てくれる。自分の“夢”を叶えてくれるために共に戦ってくれる……。そんな彼らの意思に答えてやりたい…。その為なら、俺が全てを背負ってやる！！

(アツチャクしもうたなあ…。反射する対象を追加するって可能性があったのは思い付かんかったわ……)

デルタは廃ビルの壁に卍のポーズで逆さまに埋まった状態で今の現象の考察をしていた。

先程吹き飛ばされた際に壁に叩きつけられた結果、こうなってしまったのだ。これだけ見ると中々シユールな光景である。

「リジエクシヨン」のカードは一度発動させてしまえば、後は自分の意思で解除するか、新たに別のカードを使わない限り常時発動し続ける。

つまり新たに別の対象を宣言すればその対象に上書きされて、それを拒絶・反射する事が出来るのだ。

「ガアッ！」

「いいっ！？グボオッ！！！」

自分の浅はかさに反省していると、ディジェクトが地面を蹴って一瞬で距離を詰めて未だ壁から抜け出せないデルタに突進を喰らわせ、壁を砕いて廃ビルの中へと吹き飛ばした。

それによって何とか身体の自由を取り戻したデルタは転がった状態から立ち上がるうとしたが……

「ガアアアッ！！！」

「ぬおおおっ！？」

頭を踏み潰そうと足を上げていたディジェクトが目に入り、それを奇声を放ちながらゴロゴロと転がってギリギリで避けた。

転がりながらも視界の端に一瞬だけディジェクトの足が埋まっているクレーターが見えた。

もしあのまま踏み潰されていたら、首から上が潰れたトマトのようになっていたことだろう。そう思うとゾツとする。

「おおおっとおお！ファ、ファイア！！！」

「バースト・モード」

転がってある程度距離を取ると、デルタフォンを引き抜いて慌てながらも認証コードを入力し、ディジェクトに向かって引き金を引いた。

（頼む！当たってくれや……！！）

もしここでデルタの仮説が正しければ、こちらが有利になるが果た

してどうなるか……。

「ッ！フォトンブラッドを拒絶する！」

その宣言により放たれたエネルギー弾がこちらに跳ね返ってくるが、デルタはそれをバックステップで避けた。

（やっぱりや！どうやら反射出来るモンは宣言した一つだけみたいやな！これならまだ勝てる見込みがあるで！！）

これでデルタの仮説は立証された。「リジエクション」のカードは強力ではあるが、その分対象は一つに絞られる。

後もう一つ仮説があるのだが、それはしばらくディジエクトの様子を見ていれば分かるだろう。

「とおおりやああああ！！！」

「ムン！」

ディジエクトは接近してきたデルタの回し蹴りを受け止めた。

「無駄だ！物理干渉を……！」

「やってみ？」

「！？」

ディジエクトは再びデルタの身体を吹き飛ばそうとするが、眼前に銃口を突き付けられ、動きを止めてしまった。

「ここでアンタがウチを反射すればその瞬間に撃つ。逆にこのまま反射しなければ、ウチの土俵で戦ってもらう事になるで。それに…

…」

「……それに、何だ？」

「その能力つてある程度制限が付いてるんとちゃうか？例えばアンタのそのライダーズギア……さっきからバチバチしてるで？」

「なっ！？ゲガアアアア！！！」

デルタの言う通り、デージェクトドライバーからは電流が漏れ出しており、それがデージェクトの身体を纏わり始めた。

その電撃による激痛によってデルタの足を掴んでいた手が緩んでしまい、その隙に手を振り払って蹴り飛ばされた。

「ほいつ、ハア！！！」

「グウウウウ……！クツ……！！！」

その蹴りによって数メートルほど後退し、その場で膝を突いてしまう。

思ったより電流のダメージが大きい。

「そう言う強力な能力ほど反動もデカイ。相当使ったからな、装置がオーバーヒートでも起こしたんやろ」

「チイッ……！」

デルタの言っている事は正しい。

「リジエクシオン」のカードはデージェクトドライバーから発せられる特殊周波を宣言した一点に集中させて、それを反射・拒絶する物だ。

しかし何度も酷使すればデージェクトドライバーの拒絶演算が間に合わず、今の様にショートしてしまうのだ。

それによってデージェクトドライバーが壊れると言う事はないが、その負担が装着者に電流という形で送り込まれる。

これもまた“アプローチアウトシステム”の副作用の一つであり、Dプロジェクトでの実用が見送りになった理由でもある。

「グウウウ…！」

「もうええ加減諦めたらどうや？それ以上使ったら身体がもたへんのとちやうか？」

「ググ…ガアアアア…！」

ディジエクトはデルタの忠告など無視し、電流による激痛を堪えながらデルタに掴みかかろうと特攻した。

「ほっ…！！」

「グアウ！？」

デルタはディジエクトの腹部を蹴り付け、その反動で後ろへ下がりがそうになるが、その右足をガツシリと掴むとジャイアントスイングの要領で振り回して地面に叩きつけた。

「なっ…！？」

「ガアアアアッ…！！」

「グヘアッ…！！」

ディジエクトは即座にデルタの背中に乗ってマウントを取ると、その頭を鷲掴みにしてある物を宣言しようとした。

「お…俺、は…グッ…！！」

「ま、まさか…もう一発使う気かいな！？」

全身に走る激痛に堪えつつ言い切ろうとするが途中で途切れてしま

その様子にデルタは受けてたまるかと必死に抜け出そうとするが身動きが取れない。

そして遂に、ディジェクトの死刑宣告が下された。

「俺はお前の存在を拒絶する！！」

そう宣言した瞬間、デルタを中心にディジェクトのライダーズクレストの形にクレーターが出来上がり、デルタはその衝撃と共に自分の中から自分が消えて行く感覚に襲われた。

それと同時に、自分の中にいるアレが目覚める感覚も……。

(マ、マズイ…ッ！まだや！まだ、起きるな…！ウチにはまだ…やり残した事があるんや！！)

そう思っている内にもどんどん意識が遠のき、アレが自分を飲み込もうとしている。

そこから這い出そうと右手を必死に前に伸ばすが、その手は何もない地面すれすれを漂うばかり。

「み…く…ッ……！」

そう最後に最愛の人の名前を零すと、前に伸ばした手を地面に力なく落とし、意識を手放した。

ファイズは章治の声が聞こえた様な気がして、明後日の方向を見ていた。その方向は確かにデルタ…章治がいる所だ。

「どうした、美玖？」

「…えた……」

「え？」

ファイズの小さな声にカイザがもう一度聞き返すと、今度はハツキリと告げた。

「章治の声が…聞こえた…！」

「何だつて!？」

その言葉を聞いた社員達は思わずファイズの方を向いた。

ここにいる者達は元々、章治の部下だった者ばかりだ。その言葉に反応しないわけがない。

『い、一体どこから聞こえて来たのですか!？』

「ったく、あの出不精ようやく戻ってきやがったか……」

『どこにいやがるんだ？取り敢えず一発殴つときたいからな』

「あ、それ僕も賛成です」

それぞれの社員が一斉に和気藹藹わきあたたかいとファイズに聞き出した。

やはりここにいる者達も失踪した今でも章治を信頼している様だ。

しかし、ファイズは申し訳なさそうに答えた。

「すまない…聞こえたのはほんの一瞬だけだし、どこから聞こえて来たのかだつてすごく曖昧なのだ…本当にそこにいるのかどうか…

…」

「でも、大体の場所が分かってるなら行ってきなよ」

「え…?」

ファイズは思わずそのカイザの言葉に聞き返した。
他のオルフェノク達もそれに同意するように頷いている。

「美玖は一番章治に思い入れがあるからね。俺にはそれが気の所為だとは思えない。ここは俺達だけでも十分だからさ…章治を迎えに行つて来てやつてよ」

『ああ、それに…ここに主任が来れば百人力だしな』

「だよな、偶にはここらへんで思いつきしコキ使つてやるうぜ」

それに次々と賛同し始めるオルフェノク達……。

それだけ信じていたのだな、お前達……。私なんて、ずっと敵として倒そうとしていたのに……。

『キュアアアアアツ!!』

そこで再びミラーモンスターが今度は天井に備え付けられていた窓から垂直に落ちながら迫つて来た。

「全員退避!!」

そのカイザの号令に従い全員が散り散りに散会してそこから離れる。その突進によつて床には大きなクレーターが出来上がった。

ミラーモンスターはその中からゆっくりと顔を上げ、翼を大きく広げるとその金色の羽を辺りに鏤ちりばめた。

「こ、これは……?」

「全員、油断するな!!」

その怒号に近いカイザの号令が飛び出した瞬間、一枚の羽が機材に触れた。するとその羽は爆発を起こし、機材が炎に包まれた。

どうやらこの羽は爆弾のようで、次々に爆発して行く。それに触れたオルフェノクの一部もそのあまりのダメージに灰化を起こす者まで現れた。

『ぐがああああ！！』

「オルフェノク態は一時撤退！ライオトルーパーを着用している物はオルフェノク態を庇え！」

「正幸！」

「美玖は早く章治の所へ！俺達は大丈夫だから！！」

『早く行って来てください美玖さん！！』

「こ、これくらい…何、と…か…」

一人のライオトルーパーを着用した社員が言い切る前にその装甲の隙間から灰が零れ出し、完全に装甲だけを残して灰の山になってしまった。

「く…みんな、すまない！すぐに連れ戻して来る！！」

そう言い残してファイズは研究所の外へと駆け出した。

大切な人を、迎えに行く為に……。

だが、ファイズ…美玖は知らない。章治はすでに消えてしまっている事に……。

第二十七話：道化師を拒絶する者と帝王の夢（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、久々に更新しました仮面ライダーディージェント！」

皐月「久々つつつても一週間ぶりだよな。他の作品の更新スピードもこれくらいじゃね？」

加奈「確かにね、でも作者にしたらかなり遅れた方だと思ってるらしいわよ」

皐月「一体どんだけ早くしたいんだよ……」

加奈「もうちょつと遅くてもいいんじゃない？ネタの考察の為にも」

カンペ（まあ確かにネタが詰まって来てたりしたら遅くするかもしれませんがね。少なくとも一週間以内には更新して行きたいとは思ってます（、・ヾ）

皐月「そう言えば作者、昨日活動報告で生放送するとか言ってたな。アレってホントにするのか？」

カンペ（ハイ！知らない人のために言いますと、最近『こえ部』と言うサイトに入りまして、そこで今日の21時に生放送をする予定なんです（^皿^ ヽ

興味のある方はぜひ来てくださいね）

加奈「因みに詳しくは活動報告の最後を見てくださいね」

皐月「そんじゃ、今回は前書きにならって次回予告でもして終わらせ」

加奈「それでは、次回の仮面ライダーディージェントは!!」

好太郎（まさか…これが『歪み』の正体か!?)

????『……フム、お前が私を呼び覚ましたのか…礼を言っぞ、古き人類』

遂に現れたこの世界で本来なら起きる筈がなかった事象!

ファイズ「章治を返せ!!」

歩「貴女ではアレを倒せません。それに、アレを今のまま倒せば、それと同時に章治さんを完全に消す事になります」

好太郎「お前…まだそんな事を言ってるのか!!」

未だに交わらない二人のDシリーズの思い……

章治（待てやボケ!お前は絶対に行かさへん!!）

????『カツ…!な、何だ…!!?身体が…動かん……!!』

そして、「歪み」に飲み込まれながらも抗う章治!

次回、仮面ライダーディージェント第二十八話!

「目覚めし“王”と苦渋の撤退」

乞うご期待!! () ノシ

第二十八話・目覚めし“王”と苦渋の撤退（前書き）

今回は戦闘描写を書くほどの余裕がなかったああorz

でもようやくファイズと邂逅出来ましたよ！（＾　＾）ノ

長かったあああ！後半になってやっと邂逅したあああ！！（ノ
？）。。。。

それではスタートオ！！（　・　・　）

第二十八話・目覚めし“王”と苦渋の撤退

デージェクトはデルタの頭から手を離して立ち上がり、ゆっくりと後退すると荒い息を吐きながら膝を突いた。その瞬間、変身が解除され好太郎の脂汗の滲んだ顔が現れる。

「ゼエ…ゼエ…や、やったか…？」

先ほど宣言した“存在の拒絶”はデージェクトドライバーへの負担が相当掛かる。

例え限界まで「リジエクシオン」を使っていなくても肉体へのダメージは計り知れない。それほどまでに強力なのだ。

これではばらく好太郎は動けないだろうが、アレをまともに喰らったデルタは生きてはいないだろう。

そう思っただルタを見ると、丁度装甲が光って変身が解除されていく所だった。

だが、それと同時に違和感を感じた。章治の身体が灰化していないのだ。

章治はオルフェノクなのだから死ねば灰化するのだから当然なのだが、それらしい気配は一切ない。

それに先ほどから感じる「歪み」の気配が無くなっているどころか、逆に強くなっている（……………）。

（何だ…？まだ、終わってないのか？）

ドクンッ

「…ッ！？な、何だ今のは…！？」

突然どこからともなく鼓動が聞こえてきた。
その鼓動が自分から聞こえて来た物なのか章治から聞こえて来た物なのかも分からない。

ドクンッ

ただその鼓動は一定のリズムを刻むだけで、この空間に異常な空気を作り上げて行く、この感覚は強いて言うならば……“何かが生まれる瞬間”の胎動と言えればいいのだろうか？

ドクンッ

「な……!？」

その一定のリズムを刻む鼓動の響き渡る空間で、あり得ない異変が起きた。

倒れていた章治がゆっくりと起き上がったのだ。

その起き上がる動作の中で徐々に体が灰色に盛り上がり、その姿を人ならざる異形へと変えて行く。

一見すれば形だけなら人型ではあるが、その姿はどこかアゲハチヨウを連想させる触角が生え、背中にもアゲハチヨウの思われる小さな翅の模様が浮き出ている。

『…………ア、ア、アアアアア!』

「ぐおっ!？」

完全に起き上がり、しばらく黙っていたかと思うと、その章治だったモノは突然叫び出し、背中中の羽がその質量を無視したモノクロの翅が大きく広がって雄大さと威圧感と、そして恐怖心を与える。

その絶叫はまるで自身の誕生に歓喜する産声の様で、大気を震わせ

る衝撃波と緊迫感が周囲一帯に広がる。

(まさか…これが『歪み』の正体か!?)

『……フム、お前が私を呼び覚ましたのか…礼を言うぞ、古き人類』
好太郎は目の前の「歪み」を睨みつけていると、そのオルフェノクは自分の身体を見ながら中性的な声で好太郎に大仰な態度で話しかけてながら振り向いた。

その顔は人間であつた面影は一切なく、灰色の丸い複眼と二本の触角を生やした蝶を彷彿とさせる顔に、螺旋を巻いたストロー状の口吻が付いていた。

やはりこの異形はアゲハチョウの生態系を持ったオルフェノクである事は確かだが、先ほど見た時とは明らかに違う。

それは見た目ではなく雰囲気だ。どこにも人間態である三木章治としての面影など残されていないのだ。

初めからそんな人間ではなかったかのように……。

「歪み」と言つても大きく分けて二種類ある。

一つは別の世界から紛れ込んだその世界の脅威。

そしてもう一つはその世界では本来起きる筈のない事象だ。

今回の場合はその内の後者と言えるだろう。

「お前は…一体……」

『そうか、自己紹介が遅れたな…私の名は“ノア”…新たなる人類・オルフェノクの王だ』

「さっきまでの男はどうした…?」

『アレはこの器に入っていたただの人間だ。人間の分際で私を抑え込もうなど…実に愚かだ』

“抑え込んでいた”……。つまり章治はただ「歪み」が出て来るの

を防いでいただけという事だ。

しかしその章治を自分が拒絶したことで抑えが無くなり、こうして「歪み」が覚醒してしまった…つまり好太郎はパンドラの箱を知らず知らずのうちを開けてしまったという事だ。まさかこのような結果になっってしまうとは…！

『私を目覚めさせてくれたせめてもの礼だ。今ここで生まれ変わるか最後の古き人類となって世界が変わる様を目に焼き付けるか…どちらかを選ばせてやる』

(そんなのどちらも最悪じゃないか…)

今ここで生まれ変わると言うのは、このオルフェノクが自分に使徒転生をさせると言う事…そんな事をすれば高確率で死ぬのは目に見えている。

そして最後の人類になると言うのは、今ここで殺さずにこの世界の人間達がすべて消える所を指をくわえて見てると言う事…そんな惨めな思い、死んでもゴメンだ。

今ここで消し去ってやりたいところだが、今は「リジェクション」の反動で満足に戦う事が出来ない。

そんな状態ではこの「歪み」を消すことなど不可能だ。

だが、やるしかない…。ここで俺が戦わなければ誰がやる？自分が撒いた種の不始末は…自分でつける…！

「悪いが…どちらも願ひ下げだ…」

『ほう、ではどうしたいのだ？』

「お前は…ここで俺がその存在ごと消してやる…！」

もう一度変身しようとカードとバックルを取り出したその時、好太郎とノアと名乗ったオルフェノクの間次元断裂が現れた。

何事かと思っただが、その中から亜由美と気を失っていたはずの歩が

出て来た。

どうやら目を覚ましたようだが、向こうも自分と同じく満足に戦う事は出来ないだろう。

「好太郎さん！一体何が……もしかして敵!？」

「いや、アレは多分章治さんの中にいた『歪み』だね。何らかの拍子に出て来たんだと思うよ」

亜由美が自分に問いかけようとした時、ノアオルフェノクを見て警戒すると、歩が冷静に状況を分析して勝手に解釈した。

『ほう、まだ二匹もいたか…古き人類』

二人を見たノアオルフェノクは見下した態度でばやくが、その言葉に好太郎は目を鋭くさせて睨み、亜由美は少しムツとした顔になったが、歩は亜由美とは対照的に何時もの虚ろな目だ。

コイツ…本当に一体何なんだ？リアクションが極端すぎるぞ……。

そう好太郎が歩の思考回路がずれてるなと感じていると、歩がノアオルフェノクに章治の事を問い掛け始めた。

「章治さんはどうなりましたか？」

『ショージ？ああ、私の器となった者の事か……。彼なら消えたよ。そこにいる一匹の古き人類によって』

それを聞いた亜由美は信じられないと言った顔で好太郎を見た。

彼女は信じていたのだ。自分が章治を殺さないと……。だが結果的に章治を拒絶し、その存在ごと消してしまった。

(クソ…！何をやってるんだ俺は…！！アイツが折角俺を信じてく

れていたのに！！）

彼女を裏切ってしまった罪悪感と嫌悪感に蔑まれた。

好太郎は何年も人との関わりが出来なくなっていた為、人どう接すればいいのかわからなくなっていたのだ。

それ故に口数も減って行き、今の様に人を遠ざけるようになってしまった。

「……亜由美、巻き込むかもしれないから離れてて」
「え？ウ、ウン……」

好太郎が自己嫌悪に浸っていると、歩はそう言って亜由美を別の場所へ行かせるために遠ざけた。

その時、一瞬だけこんな考えが過ぎった。

（コイツ…俺を庇ったのか？）

もしかしたら歩は自分が亜由美に何か言われて傷つく事を考えた上でそう言ったのではないだろうか？

もしそうだとすればコイツはとんだお人好しだ。この事態を引き起こした元凶だと言うのに……。

亜由美がこの場から離れる為に次元断裂を展開させてその空間へ入ろうとした……その時だった。

「うわぁっと！？な、何！？」

突然その空間から一台のオートビークルが亜由美のすぐ横を突っ切り、ギャギャギャというタイヤと地面が擦るドリフトの際に起きるやかま喧しい音を響かせながら反転して急停止した。

「バイク…だね……」

「いや、それは見れば分かるって！でも何でいきなり！？今真横通り過ぎましたよ！？」

「……ひよつとして、高速道路かどこかイメージした？」

「そんな危ない所になんて絶対に行きません！！普通に路地裏の出口をイメージしました！！」

「いや、それより問題は乗っている奴だろ……あとそのボケ、絶対ワザとだろ？」

「まあね、空気を和ませようかと思って……」

「アツサリ肯定しないでください！！それと簡単にこの緊迫した空気が和みません！！」

二人の漫才はさておき、好太郎はバイクに乗っている人物を見た。

遠くから一見すればライダースーツとヘルメットで素肌を完全に隠してるように見えるだろうが、実際はそうじゃない。

赤いラインの入った黒いライダースーツの上に銀色の装甲を身に着け、ヘルメットも普通の形状ではなく、バイザーと思われた黄色い部分は大きな円を縦に入ったラインで二分割にした複眼だった。

そう、これこそがこの世界の本来の「基点」となるライダー……

「仮面ライダー…ファイズ……」

好太郎はそのライダーの名を呟いた。

「何だ今のは…それに、ここは一体……」

ファイズは章治の声が聞こえてきた方向へ勘を頼りにオートバジンを走らせていたのだが、直感ですぐ横にあつた狭い路地裏へ突っ切るうとしたところ、突然目の前が灰色の靄に包まれてしまい、その中を突き抜けたかと思えば、三人の男女と、アゲハチョウ型のオルフェノクがいる廃ビルの中へと辿り着いた。

(この臭い…あの男、もしかしてあの時のか……?)

ファイズは灰色のビジネススーツを着た男を見た。

あの男から発せられる臭いは知っている。自分がエレファントオルフェノクとの戦闘を終えた時に感じたものだ。

「お前、あの時トンネルにいた奴だな……何者だ？」

「答えるのは山々なんですけど、今はそれどころではないので後にしてくれますか？」

ファイズはオートバジンから降りて、その男に聞くと、男は抑揚のない口調でそう言いながらアゲハチョウのオルフェノクを指差した。もう一度見て気付いた事なのだが、このオルフェノクは普通ではなかった。

このオルフェノクからは一切臭いを感じない上に、何やら寒気にも恐怖心にも似た気迫を感じたのだ。

「おい、何だアイツは…普通じゃないぞ」

『ほほう、お前はオルフェノクの様だな…それもこの器となった男の特別な存在か……』

男がファイズの問いかけに答える前に、バタフライオルフェノクが

ファイズを見ながらそうぼやいた。

その声は中性的で、元が男なのか女なのかよく分からないが、その仰々しい仕草からして恐らく男だろう。

「器…？特別な存在…？どう言う事だ？」

『フフフ…この器の人間体もまだ消えてないからな。特別に見せてやるっ……』

バタフライオルフェノクがそう言うと、身体を発光させて人間態の姿を見せた。

しかし、その姿を見てファイズは絶句した。

パンクなファッシュョンに明るい茶髪をカチューシャでオールバックに留めた糸目の男…まさに今まで探し続けていた人物・三木章治その人だった。

「ツ！？章治！！？」

『確かにかの器に入っていたのはショージと言う男だったが、今はもういない』

しかしその声は先ほどの中性的なものであり、その表情も今までの飄々とした笑顔から打って変わって、完全に冷めきった…まるで人を見下したような目つきでこちらを見ていた。

（どういうことだ…？コイツ、今何て言った……もういない？）

『フム、もう少し分かりやすく言おうか……』

ファイズが混乱していると、バタフライオルフェノクは更に続けようとする。

やめろ…それ以上言うな……。そんな事、ある筈ない……だって、さっき聞こえたんだぞ……あいつの声が…！

『コイツの身体はこのオルフェノクの王・ノアが頂いた。喜べ、奴は私の…“王”の誕生の為の供物となったのだぞ。これほど喜ばしい物など、あるわけがなかるう』

「ッ！貴様！！」

ファイズはそれを聞くや否や、ファイズフォンを手にとって「103」と入力し、横方向へ折り曲げて光線銃にさせると、その銃口をノアと名乗ったオルフェノクへ向けて叫んだ。

「章治を返せ！！」

『それは出来ない。何故なら私はこれからこの世界を改変させなくてはならぬのでな』

「改変…だと…？」

そのファイズの剣幕に臆することなくノアオルフェノクはあっけらかんとした態度で自分の目的をその姿を再びオルフェノク態へ変化させながら更に続けた。

『そう、これより私は次の世代へ行ける者を選定する。そしてその者達と共に新たな世界を創造するのだよ、オルフェノクだけの世界を…な…』

「ッ！！」

それは、正幸とは真逆の考えだった。

正幸は共に共存できる世界を目指すのに対して、この自分達が待ち望んでいた筈の“王”は自分達だけの世界を創るつもりだ。

そしてその理想は、人間の完全なる絶滅を意味していた。

しかもこの“王”は、章治をエサにしてこうして降臨した。

ただ現れるだけならまだいい。だが、その為だけに章治を…最愛の

人を犠牲にするような奴なんて：“王”なんかじゃない！！

「そんな事…絶対にさせない！！」

「待ってください」

ファイズは引き金を引こうとしたが、灰色のスーツの男にその手を掴まれて止められた。

「放せ！あの帝王気取りの反逆者は、私が倒す！！」

「貴女ではアレを倒せません。それに、アレを今のまま倒せば、それと同時に章治さんを完全に消す事になります」

「お前…まだそんな事を言ってるのか！！」

そのスーツの男の言葉に反応したのは、ダークレッドのロングコートを羽織ったもう一人の男だった。

その目は怒り一色に染まっており、低く響く怒号を更に轟かした。

「お前はアレを見てもまだ奴が人間だつて言うのか！？アイツは最早ただの『歪み』の塊だ！！確かに、奴をこころしたのは俺のせいかもしれない…だがここで奴を消さなければ、この世界は滅びるんだぞ！それでもいいのか！！？」

男の言葉の中に一部よく分からない単語が混じっていたが、確かにそうだ。

ここでこの“王”を倒さなければ、世界は滅びる。

しかし、もう一人の男の言葉にも納得してしまう自分がいた。

もし“王”を倒せば、章治はもう二度と帰って来なくなる。

それだけは絶対に嫌だ。絶対に連れ戻すって決めたんだ…でも、どうすれば……。

『喧しい、お前は少し黙っている』

ノアオルフェノクがそう煩わしそうに言うと、その背中に大鷲の巨大な片翼を生やし、その翼を大きく羽ばたせて突風を起こしてロングコート男を吹き飛ばした。

「ぐおっ!?ぐ…ツツ…!」

「好太郎さん!!」

ポニーテールの少女がその男の名を叫びながら彼に駆け寄った。どうやら、打ち所が悪かったらしく、気を失ってしまったようだ。その様子を見たスーツの男は軽く舌打ちすると、その虚ろな目でこちらを向いた。

「このままだと分が悪いので、ここは一先ず引きますよ」

「お、おい!このままヤツを放つては……」

ファイズが言い切る前に突然目の前が先程の灰色の空間に包みこまれ、この場所から謎の三人と共に完全に消えた。

『逃げたか…あの娘は実に欲しかったのだがな……』

ノアオルフェノクは誰もいなくなった廃屋で、そうぼやいた。どうもあの娘の命はあと少ししか残されていない様だった。

そして、この器となった男もそれを救うために、今まで自分に生贄を捧げて来た。

確かに自分の力を使えば、あの娘を生き長らせると同時に、完全なオルフェノクとして不老不死にする事が出来るだろう。

しかし、この器となった男は、あくまで今の姿を捨てさせずに寿命を延ばそうとしていた。何故そんな事をするのか…理解に苦しむ。

それに、何故かあの娘は非常に欲しいと思ったのだ。

自分の物にしたいと言う、支配欲……。何故自分がアレをそんなに欲するのかよく分からないが、恐らく器となった男の精神に感化されたのだろう。

『まあ良い、その内手に入るだろう……。まずは選定をしなくてはな
……………』

（待…てや…ヘンタイ…）

『おや？如何やらこちらもまだ完全には消えてなかったようだな』

ノアオルフェノクは自分の頭の中に響いた声に感嘆の声を漏らした。あそこまでやられていれば、普通は生きていないだろうに、この男の精神力には驚かされる。

どうやらあの時、一時的に人間態になったことで、精神だけがわずかに浮き出て来たのだろう。

（美玖は…絶対にお前にはやらへん…）

『フン、何を言い出すかと思えば…アレが私の所有物になるのも時間の問題だよ』

（よう言うわ…アイツはなあ…そう簡単に別の男に靡く様な女やないねん……。ウチが口説き落とすのにどんだけ時間が掛かったと思つとるんや…）

『さあな。別にそんな事をせずとも、手足を縛ってでも手に入れるな』

（ハッ！王様が聞いてあきれるわ…どこのヤンデレやねん…）

その傍から見れば独り言を呟いているようにしか見えないやり取りを続けるノアオルフェノクだったが、そこで本題を思い出した。そうだ、選定をしなくては……。この声もいずれば聞こえなくなるだろうし、このまま幻聴と言いつけても時間の無駄だ……。

そう結論を出して外へ出ようとしたが……

（待てやボケ！お前は絶対に行かさへん！！）

『カツ…！な、何だ…！？身体が…動かん……！』

突然金縛りにあったかのように身体の自由が利かなくなり、そのまままうつつ伏せに倒れてしまった。

何とか立ち上がるうとするが、身体に思う様に力が入らない。

（お前はここでジツとしとけ！その内、アイツらがお前を消しに来るからな！！）

『奴らが、私を…？フハハ…！そうは思えんがな……。それに、こうして私を止めるのに、あとどれくらい持つものか……。まあ良い、せめてもの余興だ。お前が私を抑えられなくなるまで、しばらく待ってやるう……』

（おおきに…それだけで十分や……）

その声を最後に、頭の中から声が聞こえなくなった。自分の身体を抑える事に集中したようだ。

動けるようになるのは、恐らく明日の夜明け頃だろう。

それまでの間は、別の方法を使わせてもらうとしよう……。

そう決めると、背中から灰色の翅を伸ばし、その一部を灰化させて床に零した。

やがてその灰は徐々に質量を増やしていき、盛り上がって行く。
そして人の背丈ほどの高さまで盛り上がると、形を成して行ってキ
ヤタピラーオルフェノクへと変わった。

『キユロロオオオオオ………』

しかしそれに自我は存在せず、ただ生み出したノアオルフェノクの
命令にのみ従う雑兵だ。

『さあ行け、夜が明けるまでの間、私の代わりに選定を行え』

その命令を聞くと、ノソノソとした足取りでゆっくりと人通りの多
い方へと歩いて行った。

『フフフ…果たして、私を消す事など出来るのかな？それも、この
器ごと………』

ノアオルフェノクはほくそ笑みながらも次々と翅から灰を零し、駒
を作っていた。

第二十八話・目覚めし“王”と苦渋の撤退（後書き）

今回のあとがきラジオは長くなってしまった為、出張版として21
時に更新予定ですC〃（――）
お楽しみに〜！（^^）ノシ

あとがきラジオ出張版〈陳情！ポーズを決めたい須藤歩の変身講座〉（前書き）

歩「さて、これであとがきラジオの準備ができたね。それにしても作者、主人公に雑用させるってどうかと思うよ……。まあ、僕は別にかまわないけど……。あ、原稿落ちてる。ちよつと読んでみよう……。アレ？なんだろう、この違和感……。」

これは、あとがきラジオ出張版の収録3時間前に起きた出来事である……。

あとがきラジオ出張版〈陳情！ポーズを決めたい須藤歩の変身講座〉

加奈「加奈と！」

皐月「皐月と！」

歩「歩の」

加奈・皐月・歩「あとがきラジオ（！）出張ば〜ん（！）（！」

加奈「ねえ、何でまた歩が来てんの？」

皐月「もしかして、この出張版と何か関係があるのか？」

歩「その、実はね……作者、今回のお題をお願い」

カンペ（ ）（ ）（ ） 歩の悩みを聞いてあげて

加奈「悩み？」

皐月「何かあったのか？」

歩「ウン……ついさっき好太郎君が変身するシーンを読んでて気付いたんだけどさ……」

加奈「うわっ、いきなりメタい……」

皐月（コイツ……こう言う時には基本的にテンション高いのか？）

歩「僕って実は変身ポーズがないんだよね」

加奈・皐月「……え？」

歩「何その反応？」

加奈「いや……だってもうだいぶ話数が進んでるのに、それは今更な気が……」

皐月「そもそも仮面ライダーって言ったたら普通ポーズ取ってから変身する物なんだろ？それだとおかしくないか？」

歩「ウン、だからこそ来たんだよ。とりあえず今まで僕が変身した時のシーンをまとめた資料を作ったから読んでみてよ」

加奈「……本当だ、ポーズ取ってる描写が全然ない」

皋月「あ、でもそれだったら土もそうじゃないのか？」
歩「いや、手順が簡単だからそう見えるだけで、アレにもちゃんと変身ポーズはあるよ。」

- カンペ（ ）（ ） デイケイドへの変身手順はこんな感じですよ
- 1：サイドバツクルを展開する
 - 2：カードを右手に持って前方に構える（この時、相手を睨むように首はやや下を向く）
 - 3：「変身」と言いながらカードを片手で反転させて、勢いよく挿入口に入れる
 - 4：サイドバツクルを戻してしばらく棒立ち
 - 5：変身完了と同時に両手を軽く二回はたく

ついでに言っておくと5は変身後のモーションなので、やってもやらなくてもいいですよ

加奈「い、以外と細かいわね……」

皋月「よくそこまで見てたな作者も歩も……」

歩「ネット配信されてた『仮面ライダーデイケイド オールライダー超スピノフ』っていうのがあってね、そこで変身講座みたいなコーナーをやってたんだよ」

カンペ（ニコ動かYou Tubeで手軽に見れますよ）。。。（ ）

但し消されてる可能性もあるのでご注意を……m（ ）m（ ）

加奈「で、歩の悩みのつてのは変身ポーズをちゃんと取りたいってことね」

歩「そう言う事。そして、この気持ちを超スピノフ風に言つと……」

“陳情”だね……」バラ片手にカッコつけながら

加奈「何カッコつけてるんだアンタはああああ!!」 脳天チヨップ

歩「ハッ！」 例のごとく受け止めた

加奈「何の！喉仏チョップ！」 もう片方の手で

歩「ゲエツ！？」 直撃

皐月（ヤベエ…今一瞬でも歩がカツコ良く見えた自分がある……）

ちよつと赤い

歩「ゲホツ、ゴホツ……」

加奈「まったく、調子に乗るからよ」

歩「で、でも…テンション上げてって言ったのは加奈さんの方なんじゃ……」

加奈「あれはもう訂正！アンタ、テンションがハイになるともう私達でも手に負えないってのがこの間ので分かったから、今後テンションマックスになるのは禁止！！」

歩「いや、実はあれでもまだ80%ぐらい……」

加奈「分かったじゃあ60だ！それ以上はダメ！！」

皐月「何かどつかで聞いた事のあるセリフだな……まあいいや、それじゃあ早速一緒に考えてみようぜ」

ポイント1：そのライダーの特徴を出そう

好太郎「……で、何故俺に聞く？」 呼び出された

加奈「細かい事は気にしちや駄目ですよ」

歩「まあ、同じDシリーズの好^{よしみ}って事で」

皐月「好太郎は変身ポーズってどうやって考えたんだ？」

好太郎「ムウ…実を言うと俺にもよく分からん。ただ何となくこうした方が俺らしいんじゃないかと思ってな……」

加奈「じゃあ、ここでちよつと好太郎さんの変身ポーズをおさらい

してみましようか

- 1：足を横に広げて低く構える（左足はやや前に出す）
- 2：1の手順と同時に右手を鉤爪の形にした状態で外側に向けながら自分の顔の前まで持つて来る
- 3：「変身」と言いながら右手を自分の方に反転させ、振り下ろしてライドホーンを手の甲で叩く
- 4：変身完了までしばらくそのままの姿勢で待機
- 5：変身完了と同時に獣の様な唸り声を上げながら右拳を地面に叩きつける

5はデイケイドと同じく変身後のモーションなので、やってもやらなくてもいい

とまあこんな感じらしいわよ」 資料片手に

歩「長いね……」

皐月「何だかややこしそうだな……」

好太郎「だが、やってみればそんなに難しいものじゃないぞ」

カンペ（皆さんも試しにやってみては？ー。ー）

加奈「デিজエクトの特徴が出てますよね」

亜由美「つまり、ポーズによってそのライダーの個性が出ればいいってわけね」

加奈「そう言う事に……ってアレ亜由美！？何時の間に!？」

亜由美「ついさっき。好太郎さんが作者に呼びかけられてるのを見かけてさ、それで何かなあ……って思って後を付けてみたら……また私を除け者にしてラジオなんかやってるし!!歩!それだったら私も

呼んでよお!!」

歩「いや、特に呼び出す理由もないのに呼んだら迷惑かな〜と思っ
てさ」

亜由美「それでも、何かあったら私を呼ぶ!! イイ!?!」

歩「……ハイ」

加奈「なんだろ…今亜由美がすごくお母さんに見えた……」

皐月「ああ…確かに見えたぜ…なんか、こつ…オーラが……」

亜由美「誰がお母さんですか!?!」

好太郎「そんなことより、本題に戻るぞ……。出張版とは言え、こ
のままだと本編の長さ超えるぞ……」

歩「それもそうだね。じゃあ、次のステップに行くよ」

皐月「おう」

亜由美「とうとう好太郎さんまでメタ発言し始めた……」

ポイント2：ポーズをとるための場所を探そう

加奈「さて、それでは今回は何時もの収録スタジオから飛び出して、
スマートブレインの社長室にやって来ました!」

好太郎「よく承諾したな、お前……」

正幸「そりゃこんな面白そうな企画があったらね。協力してあげた
くなるじゃない?」

美玖「社長……orz」 山積みの書類持ってきた所で偶然目撃

皐月「ああ〜コリヤ確かに苦労しそうだな……」

亜由美「ところで、何でここに来たの?」

歩「流石にあそこじゃ狭いからね。それだったら広い場所で練習し
た方がいいでしょ?」

美玖「だからって、何で社長室なんだ!？」

歩・加奈・皐月・正幸「面白そうだから」

美玖「ダメだこいつら…フリーダムすぎる……」

亜由美「もう潔く諦めた方がいいですよ…私も経験ありますから…

…」

美玖「同志よ!」 感極まって抱きついた

亜由美「フニヤツ!？」 胸の谷間に顔埋まってる

歩「あつちは放ってといて、僕達はポーズの内容でも考えよっか」

好太郎「鬼だなお前……」

亜由美「ちょ、美玖さん…苦し……」

美玖「ようやく見つけたぞ貴重なツツコミ役っうう!!」 オル

フェノクの耳と尻尾出てる

正幸「嬉しそうだねえ」

加奈「止めないんですか?アレ……」

正幸「いやあくあんな嬉しそうな顔してたらねえ。それに何か、

可愛くない?」

ポイント3:ポーズを考えよう

加奈「やっぱり歩だから、あんまり派手な動きとかは似合わないと思うのよ」

皐月「それは一理あるな。じゃあこう言うのはどうだ?無感情な感じを出すために、ゆっくりとした動作にするってのは」

歩「いいねそれ。あ、後こう言うのはどうかな?この間神童さんに“人形”って言われた事があってさ、それだったら人形っぽく上から糸で吊られるみたいに腕をこんな感じにゆっくり上げてみてさ…

…」 両腕広げるように上げてる

好太郎「それ、絶対褒められてないと思うぞ……。俺からの意見を言わせてもらうと、顔は伏せてた方がいいんじゃないのか？それで『変身』と言う時に顔を上げると味が出るぞ」

亜由美「好太郎さん、ノリノリですね……」 解放されたけど顔真っ赤

皐月「どうした亜由美？顔赤いぞ」

亜由美「ウン…それが、すごく、柔らかくて…気持ちよかった……」

皐月「……よし、言いたい事は大体分かった。それとお前、アタシが胸小さいこと分かって言ってるんだろ？……？」 負のオーラ出てる

亜由美「ギヤアアアツ！ごめんなさあああい！！」

正幸「アハハツ、やっぱりOKして正解だったかな？」

美玖「社長…後で残業してくださいよ……？」

正幸「え〜？」

美玖「“え〜”じゃありません！！」

加奈「正幸さんから何か意見ありますか？」

正幸「う〜ん…とりあえずこのバツクルの持ち手部分を押し込めばいいんでしょ？だったら挙げるのは右手だけでいいだろうね。そこから振り下ろして持ち手部分の底を押し込んで、それで変身完了って感じかな？」 デイジーエントドライバーのサンプル持ちながら
皐月「おおっ、さすが社長だな。意見が的確だぜ」 亜由美にコブラツイスト決めながら

亜由美「痛い痛い痛い！！ギブ！もうギブ！！って言うか皐月って柔道部だよね！？これ明らかにプロレス技だよ！？」

加奈「と、言うわけで歩の変身ポーズ、かんせ〜い!!」

歩・皐月・正幸「おおお〜」 拍手してる

好太郎「大丈夫か？ 亜由美……」

亜由美「な、なんとか無事です…これぞまさしく天国から地獄……」
美玖「その…スマンかったな……」

加奈「それでは出来上がった変身の手順はこんな感じですよ！ 作者、説明をお願いします!!」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） 変身手順はこの様な感じになりました！

1：サイドバックルを開いてカードを挿入口に入れる

2：掌を上にした右手をゆっくりと横に肩のあたりまで上げる（この時、顔は下を向く）

3：顔を上げて「変身」と言いながら掌を外側に向ける様に反転させる（この時、手首の角度は90度）

4：振り子の要領でサイドバックルを押し込んで、その勢いで右手は顔の左横に来るようにする（変身完了するまでその姿勢で待機）

5：変身完了と同時に右手首を掴んでグローブを嵌める仕草をとる。（その後左手も同じ様にグローブを嵌める仕草をとる）

そして5は以下省略）

好太郎「以下省略って何だ以下省略って!? まあ言わなくても確かに分かるが!!」

美玖「仕事は最後までこなせこの出不精!!」

亜由美（ツツコンだら負け…ツツコンだら負け……!）

歩「無理しなくていいと思うよ」

亜由美「だから勝手に人の心を…ってしまったツツコンじゃった!!」

加奈「さて、歩の変身ポーズが決まった所で今回のあとがきラジオ出張版はここまで！」

皇月「歩の変身シーンは次の回に出て来るからそれまで待っていてくれよう！」

歩「それでは皆さん、また……」

正幸「また次回」

歩「!?!? (。°。°;)」

好太郎「何故か正幸が締めた!?!?そして歩、お前そう言う顔できるんだな!?!?」

あとがきラジオ出張版〜陳情！ポーズを決めたい須藤歩の変身講座〜（後書き）

歩、完全にキャラ崩壊（＾p＾）ノ

後書きクオリティパネエ……本編だとこんなにハジける事なんて絶対ない筈なのに……（、、；）

歩「それで、今回は何時もみたいに爆発しないの？」

何その言い方！？毎回毎回そんな二の轍は踏みません！！（。・。・）
#（

歩「じゃあ、恒例の次回の更新予告は？」

あ、それはやつとこうか……次回の更新は8月5日18時に予定です。

それにしても、私の誕生日まであと少し……か……（。A.）（困みに誕生日は8月12日）

歩「なにかする予定はあるの？」

いや、今のところは何も……でも何かやってみたいなあとは思ってます（、、*）

歩「そうなんだ……それでは皆さん、次回の更新でお会いしましょう。またね〜ノシ」

だから歩！キャラ壊れてるってば！！（。・。・；）

第二十九話：不死鳥撃破と疑問を生む新たな力（前書き）

さて、私の誕生日まであと一週間と言う事で、何かしてみようと思っていたのですが、思い付いた内容があまりにスケールがデカ過ぎました（＾p＾）ノ

そのせいで、今にも断念しそうですorz

その内容がですね、「他の作品のキャラをゲストに交えてあとがきラジオ出張版を書く」という、まさしくみんなの心を一つにしないと出来ない様な大々的な企画なんです。

もし「あ、別にかまいませんよ」と言う方がいましたら、私のメッセージボックスへ出演許可の報告と、どんなお題に沿って書いて欲しいかのリクエスト（例：歩と料理対決、コーカサスに変身した臯月と一騎討ちetc）をお願いします。

その内容は8月12日に「あとがきラジオ出張版」水音ラル誕生祭「にて公開する予定ですので、まだ諦めきれない私に愛の手を…
…！（一人…）

第二十九話：不死鳥撃破と疑問を生む新たな力

好太郎が気を失ってしまった為、一時的に撤退した歩達は路地裏の入り口の所まで次元断裂を通って移動していた。

しかし移動するや否や、ファイズが掴まれていた腕を振り払い、歩の胸倉を掴んで壁に押し当てた。

「貴様：何故逃げた！？このままヤツを野放しにすれば、どうなるか分かったものじゃないぞ！！」

「先ほども言った通り、このままアレを倒せば章治さんを消す事になります。それに、怪我人を庇いながら戦うのは、さすがに不利です」

「クソツ…！こっちは急いでも言うのに…！！」

歩の主張を聞くと、ファイズは乱暴に胸倉を離しながら悪態を吐いた。

「“急いでも”？何かあつたんですか？」

「お前には関係ないだろ…大体、お前らは一体何なんだ？さっきの灰色の霧と言い、何をしたんだ…？」

歩はそれにどう答えようか頭を掻きながら考え出した。

しかし今回は何時もの様に強くガリガリと掻くのではなく、指先で軽くポリポリと言った感じだ。

「うん…とりあえず簡単に言ってしまうと宇宙人と言った方が分かりやすいですね」

「は…？何を言ってるんだお前……ん？待てよ……」

ファイズは仮面の奥で訝しげな顔をしたが、正幸から聞いたある事を思い出した。

“異世界のライダーズギアを持った奴がミラーモンスターをこの世界に連れ込んだ”と言う事だ。

「……お前、まさかライダーズギアを持ってるのか？それも、従来の物とは違う……」

「まあ、確かにこの世界で言うライダーズギアは持ってますよ。でも何で知って……」

歩が言い切る前に、ファイズは手に持ったファイズフォンの銃口を歩の顎に押し当てた。

「なら、貴様だな？ミラーモンスターとか言う鳥の化け物をこの世界に連れ込んだのは……」

歩は一瞬思考が停止したが、ファイズの言いたい事は大体分かった。どうやら神童がこの世界に送り込んだゴールドフェニックスが、ファイズ側で暴れている様だ。

しかも神童が自分が「歪み」を送り込んだと、出まかせを吹き込んだらしい。

そうになると、ファイズが自分を敵と思いこんでしまっても仕方がないが、ここで言い争ってる時間はなさそうだ。

「違います。少なくともそのミラーモンスターは僕が送り込んだ物ではありませんし、初めからそれも消す予定でした。それで、急いでと言うのはひょっとしてスマートブレインのどこかがミラーモンスターの攻撃を受けているんですか？」

「ああそうだ。今我々の施設が襲撃を受けてるんだ。だから早く章

治を連れ戻して援護に向かわなければならぬのだ」

「その施設はどこですか？」

「それを聞いてどうする気だ…？」

「ミラーモンスターを消しに行きます」

「貴様はまだ信用できません。もし貴様が本当に“悪魔”ともなれば、尚更な……」

「……………」

歩は視線を下へ向け、それを否定する事ができなかった。

自分が“悪魔”だと思った事は何度もある。

今まで渡って来た世界でも、その得体の知れない力の所為でそう罵られた事もあった。

それでも歩は世界を渡り続けた。そうしなければその世界が「歪み」の所為で消えてしまうからだ。それだけは絶対に嫌だった。

自分が^{けな}貶されるだけで世界が救われるんだったら、喜んでその役目を担おう。

そして、いつかは自分を認めてくれる…そんな場所があるんじゃないかと思ひ、その小さな希望に^{すが}縋って今まで世界を渡り歩いて来たのだ。

自分の存在意義を求めて……………。

「あの…ちょっと良いですか？」

「何だお前は…？」

そんな考えに浸っていると、亜由美が好太郎の様子を看ながらも、ファイズに問い掛けて来た。

その口論に割って入って来た亜由美をファイズは睨みつけるが、亜由美は更に続けた。

「え、ええ〜と…よく分かんないんですけど、今はその施設に行っ

た方がいいんじゃないですか？それに、歩は“悪魔”なんかじゃありません。私の大事な家族です」

そう亜由美が断言した事に歩は軽く驚いた。

彼女に“家族”と呼ばれたのはこれで二度目だ。

本当は血の繋がりも何も無い赤の他人の筈なのに、この少女は自分の事をそう言ってくれる。

もしかしたら、彼女なら自分の居場所になってくれるかもしれないが、本当に自分を認めてくれるかなんて分からない。

だからこそ、彼女とは未だにシンクロしていない。

最初はそんな事など考えずにシンクロしようかと思っていたが、加奈のあの言葉を聞いた時からそれはしない事に決めた。

彼女には普通の生活をしていて欲しいと思ったのだ。

もし彼女とシンクロすれば、例えば彼女が自分の代わりにDプロジェクトを完遂する事にならなくても、日常生活に何らかの影響が出る。それだけは避けたいと思ったのだ。

それなら態々彼女の世界から連れ出さなければ良いのではないかという話にはなるのだが、あのまま彼女を止めた世界に置いて行く気にはならなかった。

姿形は違えど、彼女は自分の異次元同位体…そしてその考え方も少しだけ自分と似ている。

誰かが傷ついてて、それを助けられるんだったら絶対に助けたいと言う想いだ。

それに感化されたからだろう…彼女をこうしてライダーサークルへ連れて来たのは……。

「フン、家族…か。確かに家族を罵倒されれば、怒るのも当然だろうな……。それで、本当にミラーモンスターは消すつもりなんだな？」

「ハイ」

その短い返事を聞いたファイズはしばらくその目を見た後、ファイズフォンを下げて閉じると、ドライバーにセットした。

そして歩が撤退する時にこの空間まで同時に移動させておいたオートバジンに歩み寄って跨ると、こちらを向いた。

「だったら、証明して見せる。お前が“悪魔”ではないという証明をな」

そう言うと親指で後部座席を指差した。どうやら乗れと言う事なのだろう。

「自分のがあるので結構です」

そう断りを入れて自分の横に次元断裂を展開させると、マシンディージェンターをクラインの壺から取り出した。

そのありえない現象を見たファイズはしばらく固まっていたが、「本当に何でもアリだな」と呟いてエンジンを蒸かして走り出した。それを見た歩は、ポケットからメモ帳とボールペンを取り出し、それにこの世界の移住先までの簡単な地図を書くと、それを干切って亜由美に渡した。

「ここに書かれてる場所ですばらく待ってて。イメージすれば簡単に行ける筈だから」

「ウン…でも、大丈夫なの？さっきまで倒れてたのに……」

亜由美は歩を心配そうな目で見て来た。

確かに、今のままでは十分には動けないだろう。それでも、決めたのだ。自分を犠牲にしても世界を守るために戦うと……。

それは、デージェントになったあの時からずっと変わらない、須藤歩としての意思だ。

歩は亜由美の顔を覗き込みながらできるだけの笑顔で答えた。

「大丈夫だよ。心配してくれて、ありがとう……」

「おい、何してる！早く付いて来い！！」

亜由美の頭をクシャリと撫でながら礼を言っていると、痺れを切らしたファイズが怒鳴って来た。

歩は踵を返しながら「じゃあ、行って来る」と言って、マシンデージェンターにヘルメットを付けながら跨った。

そしてその様子を見たファイズは再び走り出し、歩はその後を追った。

「……気を付けてね」

亜由美はそう小さく呟くと、その手に握られた紙切れに書かれている場所をイメージして次元断裂を展開させると、好太郎毎その中へと吸い込まれていった。

研究施設は悲惨な有様だった。

機材からは火が燃え上がり、床には灰の絨毯とライオトルーパーの装甲が辺り一面に転がっている。

ライオトルーパーは低コストでの生産に主力を置いたため、いくら

装着者にダメージが通ってもその装甲が強制解除される事がない。そのため装着者の限界を超えても離脱する事が出来ず、その鎧の中で死を迎える事になってしまうのだ。

「ハア…ハア……み、皆、無事…か……」

羽の爆撃による猛攻を終えた後、カイザは倒れた者達を見た。しかしそこには蛇の特性を持ったスネークオルフェノクと、まだ中身の入っているライオトルーパーしかいなかった。

『ま、まだ生きてるぜ社長……』

「僕も…まだ死んでません……。でも、他の皆は……」

(まさか…もう二人しか残っていないなんて……)

カイザはあまりの生存者の少なさに思わず悲壮に暮れそうになったが、今はまだ早いと自分に言い聞かせて堪えた。

まだミラーモンスターは倒せていないのだ。フェイスが章治を連れ戻すまでは何とか持ち堪えなければ……。

キイイイイイ……

「っ！！来る！気を付ける！！」

カイザの耳に再びあの耳鳴りが聞こえ、社員達に警告を出した。

この耳鳴りはどうもミラーモンスターが襲ってくる予兆の様だが、何故か自分にしか聞こえない。

恐らく一度襲われた影響で自分の中にあるオルフェノクとしての本能が耳鳴りと言う形で警告を出しているのだろう。

『キュアアアアア！』

「く、コイツ…！これでも喰らってる…！」

鏡面化した機材から再びその姿を現したミラーモンスターに、ライオトルーパーがハンドグリップ型ツール・アクセレイガンで光線銃型のガンモードにしてミラーモンスターを撃つが、一切効いている様子がない。

一応このアクセレイガンにも全ての生物に有毒なフォトンブラッドを使っているのだが、この不死鳥はその毒を一切受け付けようとならないのだ。

『ギユウアアアア！！』

「えっ！？うわああああ…！」

その身体に命中するエネルギー弾に、ミラーモンスターは煩わしそうに鳴くと、その撃ち出しているライオトルーパーに向かって襲い掛かり、その鉤爪で両肩を掴むとそのまま鏡の中へ引きずり込もうとした。

「やめろおおおお…！」

「エクシード・チャージ」

カイザは叫びながら、ライオトルーパーに襲い掛かるうとしたミラーモンスターを、カイザフォンのエンターキーを押した後にカイザ専用銃剣型マルチウエポン・カイザブレイガンで撃ち抜いた。

『ギユアアア！？』

「うわっ…！」

カイザブレイガンから撃ち出されたエネルギー弾が着弾したその瞬間、それが網目状に展開してミラーモンスターの動きを封じ、掴んだライオトルーパーを離すと、そのまま地面に墮ちた。

「大丈夫か!？」

「は、はい…！何とか…！！」

襲われそうになったライオトルーパーに駆けつけたが、肩の装甲を軽く削られただけで大した怪我はなさそうだった。

それを確認するとすぐさまミラーモンスターに向き直り、カイザブレイガンを構えて突っ込んで行った。

「おおおおらあああああ！！」

『ギユアアアアア！！』

黄色いフォトンブラッドで形成されたブレードでミラーモンスターの胴体を切り裂いて、その巨体に大きな風穴を空けるが、それと同時に拘束が解け、身体から粒子を噴き出しながら再び鏡の中へと戻って行ってしまふ。

「クソ…！また逃げられたか…！このままだとジリ貧だぞ…！！」

カイザはファイズが抜けてから何度もエクシード・チャージを決めてはいるのだが、その攻撃によって粒子化させる事が出来ても、その後の決定打が打てずに鏡の中へ逃げられてしまふのだ。

何とかライオトルーパーやオルフェノク態の社員が止めを刺そうと奮闘するものの、彼らではどうしても火力が足りないのだ。

しかも今度はあの時の様に簡単に逃げ出そうとはせず、しばらく時

間をおいた後にまた完全に再生した状態で襲い掛かって来るのだ。このままだと、確実にこちらがやられる…！

(クソ…早く戻って来てくれ…！美玖…章治…！！)

そう心の中で叫ぶと、外へと続く廊下から二つのエンジン音が聞こえてきた。

まさかと思いい外を見ると、バイクに乗った二つの影がこちらに近づいているのが見えた。

一つは先程も見たファイズ…そしてもう一つは、青黒い少し派手目なバイクに乗った同色のフルフェイスヘルメットを被った人物だった。

「社長！お待たせしました！！」

「遅いですよ美玖さん！！」

『たく！待ちくたびれたぜ！！』

ファイズとフルフェイスヘルメットの人物がそのまま研究所内までバイクを走らせて自分たちのすぐ横で止まると、ファイズが声を張り上げた。

それに活気づく社員達を余所に、カイザはもう一人の人物を見た。

その藍色のバイクに乗っている人物は、灰色のビジネススーツを着ており、章治とは違う雰囲気を漂わせていた。

『今までどこほつつき歩いてやがったテメエ！！』

「まずはそのヘルメットを取って、僕達に殴られてください！！」

その雰囲気気付かないまま生き残った二人の社員達はその人物に

声を掛けていると、ファイズが申し訳なさそうに仮面越しに頬を掻きながら謝罪の言葉を述べた。

「その…実はな、章治は色々と事情があつて連れ戻す事が出来なかつたんだ。その代わりとしてコイツがアレを倒せるらしかつたからな……。それで代わりに連れて来たんだ…本当に済まない……」

その言葉を聞いた社員二人は目を丸くしながら、（実際は見えないが多分そんな顔をしてる）その人物を見た。

「でも、少なくともこの中ではアレが一番対抗できますので安心してください」

そう抑揚のない声で男がヘルメットをはずすと、その中からは少し長めの真ん中分けにした黒髪で、目の虚ろな青年の顔が出て来た。

「美玖…この人は一体……」

「私も完全に信じたわけではありませんが……例の神童とか名乗った男が言っていた“悪魔”らしいです」

カイザはファイズにしか聞こえない様にボソボソと話しかけると、ファイズはカイザが若干予想していた答えを口にした。

（じゃあ、コイツがミラーモンスターを…いや、それほど危ない奴には見えない……）

カイザは目の前にいる社員に色々としつこく質問されている青年を見た。

その青年からは異質な雰囲気が出ているものの、それほど危険と言ったわけではなさそうだった。

少なくとも正幸は大手企業の社長だ。人を見る目くらいはある。それに、そんな危険人物を美玖が連れて来るわけがない事ぐらい、自分がよく知ってる。

カイザがその青年に近づくと、青年も自分をその虚ろな瞳でこちらを見てきた。

「……何でしょうか？」

「君は…世界を滅ぼしたいと、思った事はあるかい？」

おもむろにそう訊ねると、青年は一拍置いてそれに答えた。

「……確かに、少しくらいならそんな事を思った事があります。何故自分がこんな目に合わなければいけないのか…何故世界は自分を認めてくれないのか…そう思う事もありますけど、それでも世界を滅ぼせば、それだけ多くの人達を殺す事になる。だからそんな事は絶対にしません」

その答えを聞いてカイザは満足した。

この青年の言葉には嘘偽りが一切入っていないかった。

何故そう思うかと言うと、彼が自分を批評したからだ。

批評すればそれだけそちらが不利になるにも関わらず、この青年は自分のデメリットを何一つ隠すことなく答えたのだ。

もし彼が綺麗事しか抜かしていないようならば、それはただの偽善者でしかない。それでは信用するに値しない。

彼が世界を滅ぼしたくないと言うのは真実だろうし、もし仮に“悪魔”だったとしてもこの青年は世界を壊す様な真似はしようとしな
いだらう。

これは、今まで自分が磨いてきた観察眼による絶対的な直観だ。これくらいなければオルフェノク達のボスなどやっつてられない。

カイザは仮面の奥で微笑みかけると、彼に手を差し出した。それに一瞬青年が呆けたが、すぐにその動作を理解すると、同じように手を差し伸べて来て自分の手を掴んだ。

「それじゃ、よろしく頼むよ。俺はスマートブレイン代表取締役・岸辺正幸だ」

「須藤歩です」

握手して軽く挨拶を交わすと、カイザは本題を切り出した。

「それで、アレを倒すにはどうすればいい？」

「僕一人でも十分ですので、皆さんは巻き添えを喰らわない様に下がっててください」

『本当に大丈夫かよ？』

「途中で無理でしたは無いですよ」

そうあっけらかんと言つてのけた青年…歩の言葉に社員達は半信半疑な様相を示した。

社員達の気持ちは分からなくはないが、少なくとも自分達よりはアレに詳しい筈だ。

それに、自分達に被害が出ないように配慮もしているし、それだけ自信があるのだろうか。

「まあまあ、ここは専門家に任せた方が得策だよ。ほら、『餅は餅屋』って言うじゃない？この人に任せてみようよ」

「まあ、社長がそう言うんでしたら……」

『そんじゃ、俺達も任せるとするか…だが、言ったからにはゼツテエ倒せよ』

「初めからそのつもりです」

歩は社員達の言葉にそう素っ気なく返しながらバイクから降りると、何時の間にか右手に持っていた持ち手のついた大きなバツクル状の機械を腹部に宛がった。

すると、持ち手の反対側から帯が伸び、腰回りを一周してベルトを形成した。どうやらこれが異世界のライダーズギアの様だ。従来の物とは全く違う。

これが終わったらちよつと貸してもらおう。

そう思っていると今度は持ち手部分を引いて、バツクル部分が時計回りに90度回転させた。

するとバツクルの上部にカードか何かを挿入するスリットが現れた。更にスーツの右ポケットから一枚のカードを取り出し、バツクルのスリットにセットした。

「カメンライド……」

セットされた瞬間、これまた従来の物とは違う認識音声の流れ、歩が右手をゆっくりと片の高さまで上げ、手首を反転させて外側を向けると、音声コードを唱えた。

「変身」

「デージェイント！」

振り子の要領で上げた腕を勢いよく振り下ろして持ち手部分の底を押し込んでバツクルを先程の反対側に90度回転して元に戻り、完全にカードの内容を読み取ったであろう認識音声か鳴り響いた。

それと同時に彼の身体がテレビの砂嵐の様な物に包み込まれ、バツクルの中央に嵌っていた青黒い石から黒い板の様な物が複数枚飛び出した。

それが各身体の部位に突き刺さると、その部分から砂嵐が消え、その中で形成されていたであろう灰色の装甲が現れるがそれも束の間、次の瞬間にはいたが突き刺さった箇所から染み込むように全身を水色に染め上げ、更にその色を濃くしていきインディゴカラーへと変色する。

左右対称の横倒しになった黄色い三角形の複眼が顔に突き刺さった板で作られた二本線の矢印越しに輝き、これで全ての変化を完了させたようだ。

(これが…異世界のライダーか……)

キイイイイイン……

「ッ!？」

「そろそろ出て来るので皆さんは下がって下さい」

この異世界のライダーにも自分と同じく耳鳴りが聞こえたのか、両手のグローブを嵌め直す仕草をしながらそう警告した。

『キュアアアアツ!!』

その瞬間、耳鳴りの元凶であるミラーモンスターが、今度は設置されたディスプレイから完全に再生させた状態で飛び出して来てこちらに突っ込んできた。

『お、おい!こっち来てるぞ!?!』

「心配はいりません」

オルフェノクの一人がそう狼狽した面持ちで異世界のライダーにそう言くと、彼は大したことではなさそうに素っ気なく返しながら、バツクルの持ち手部分を引いて、どこからともなく取り出した一枚のカードをそのバツクルのスリットへセットして持ち手部分を押し込んだ。

「アタックライド…ブラスト！」

「…ハッ！」

『ギユアアア！？』

電子音声が鳴り響き、右手をミラーモンスターに翳すと、その掌から拳ほどの大きさの藍色のエネルギー弾を放った。

その一撃をくらったミラーモンスターは悲痛な鳴き声を上げ、空中で急停止してしまう。

「……………」

『ギユイイツ！？ギユアアア！！』

その隙に黙々と異世界のライダーが黙々とエネルギー弾を単発銃の様に撃ち放って行き、遂にはミラーモンスターの身体が粒子化し始めた。

ミラーモンスターはこの窮地を脱するためにその巨大な翼から黄金の羽根を鏤め、近くに合った鏡面化した機材の中へと逃げ込んだ。

「マズイッ！」

カイザは思わずそう叫んだ。アレは少しでも衝撃を与えればその瞬間爆発する代物だ。

それによって社員達が何人も灰へと還されていったのだ。

アレをまとも喰らうわけにはいかない…！

「全員、伏せてください」

「へ？ってどわああああ！？」

そう思っていると、ライダーがそう呟いて警告を出し、今度は両手から先程よりも一回り小さいエネルギー弾をマシンガンの如く撃ち出して、空中に滞在している全ての羽を瞬く間に迎撃した。

それによって上から爆音と爆風が吹き荒れるが、こちらに被害は一切なく、それを実行したライダーはただ悠然とそこに立っていた。

その爆炎に包まれる風景の中に立つその姿はまさに、全てを救う救世主にも、全てを破壊する悪魔にも見える異端者だった。

（威力が、上がってる……？）

デージェントはブラストを撃ち出した時にそう思った。

以前から単発式と連射式という使い分けがあつたが、ここまでの威力はなかったはずだ。

それに、デージェントは自分に関する情報はすべて持っているが、カードの種類が増えると言う事はあつても、スペックが上昇するなど今までなかった事だし、何より新しく入って来た情報が装着者に送られて来ないのはいくらなんでも不自然だ。

「すごい……」

『でもどうすんだよ。また隠れちゃったら、さつきとあんま変わんねえぞ』

デージェントが自分のスペックの上昇に疑問を持っていると、後からライオトルーパーとスネークオルフェノクの会話が聞こえて来た。

確かに今のままでは相手に決定打を与えられないだろう。

しかもここは「龍騎の世界」ではないため、ミラーワールドへ介入する事は不可能だ。

しかし、そんな状況でも対処は可能だ。

デージェントドライバーに備わっている成長記録機能が、この状況に合わせたカードを作成してくれたのだ。

その情報はすぐに装着者に伝わり、デージェントは早速クラインの壺からそのカードを取り出した。

そのカードには龍騎がミラーワールドへ入る瞬間のイラストが描かれており、その下には「ミラーダイバー」と書かれていた。

絵柄のライダーが龍騎なのは、この能力の大元であるライダーに接触したからだろう。

それはつまり龍騎…真司との絆の証でもあった。

「真司君、早速君の力を使わせてもらおうよ」

「アタックライド…ミラーダイバー！」

デージェントは迷うことなくその効果を発動させると、ミラーモンスター・ゴルドフェニックスが入って行った機材の鏡面化した部分へと歩み寄り、その中へ吸い込まれるように消えた。

ミラーワールド内へ入ると、丁度身体の粒子化を止めたゴルドフェ

ニックスと目が合った。

『ギユウアアアア！！』

ゴルドフェニックスは耳障りな鳴き声を上げると、こちらへ向かって羽を弾丸の様に飛ばして来た。

しかしそれを見た瞬間、デージェントはまたもや違和感を覚えた。

(空間把握能力も上昇してる……一体何故……?)

高速でこちらに弾丸が迫って来ているのも関わらず、デージェントはその一つ一つの弾丸の正確な着弾地点が分かるのだ。

そしてその軌道に当たらない様に最小限の動きで避けながら一枚のカードを取り出し、バツクルにセット・発動させた。

「アタックライド……スクリーム！」

「スウウウウ……ガアアアア！！」

『ギユイイイ！？』

ある程度手加減して叫ぶと、そのスクリームの効果によって衝撃波になった咆哮が一直線に進んでゆき、全ての弾丸を迎撃しながらゴルドフェニックスに直撃した。

どうやら威力が上がっているだけではなく、精密さも上がっている様だ。

何時もなら手加減していても、周囲一帯を巻き込む形で衝撃波が発生するのだが、今回は一方向へその衝撃波を集中させて放つ事が出来たのだ。

もし全力で一方向へ放っていたらどうなるのだろうかと思っただが…
何か恐そうだったので考えるのはやめた。

「キュアアアアア………」

ゴールドフェニックスはミラーワールドにいた為、粒子化こそ起こさ
なかったが、相当弱っている。

倒すなら今がチャンスだろう。それに、ダメージントのスペック
が上がってるとは言え、これはあくまで能力的な物だ。

身体能力までは上がっていないため、歩の身体の方はデジエクトと
の戦闘でもう限界だ。

ここで「歪み」の一つであるゴールドフェニックスを倒してさっさと
ミラーワールドから出よう。

そう結論を出してファイナルアタックライドのカードを発動させた。

「ファイナルアタックライド…！ディディディディ！」

電子音声が鳴り響くと、ゴールドフェニックスを拘束できるほどの大
きさのビジョンが、相手の足下に現れ、その動きを拘束させると、
そのままカードがディージェントを向く様に立ちあがった。

敵が大型だった場合、ビジョンが相手の大きさに合わせて展開され
る事は以前と同じだった事に内心ホツとしつつ、自分なりの決め台
詞をゴールドフェニックスへ言い放った。

「それじゃあ止めの一発、行くよ？」

そう淡々と述べるとゴールドフェニックスへ向かって走り出した。

その間に、両足には藍色のノイズ状のエネルギーが集まって行く。

「フウウウ…ハア！」

「ギユアアアアアツ！！」

ある程度距離を詰めた所でジャンプして飛び蹴りを放った。

今回は何時もの回し蹴りよりも、こちらの方が相手にダメージを与えやすかったので、飛び蹴り版「デイメンジョンキック」をゴールドフェニックスへ両足を前に突き出した。

すると、デイージェントの身体はビジョンに吸い込まれるようにスピードを上昇させ、それに合わせてビジョンもデイージェントと同じスピードで近づいて行き、その両足を直撃させた。

その攻撃を受けたゴールドフェニックスは悲痛な鳴き声と共に爆散し、この世界から完全に消滅した。

第二十九話：不死鳥撃破と疑問を生む新たな力（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（・・・） 今後のルート変更について

加奈「ルートって？」

皐月「作者に聞いた話だと、ファイズ編が終わったらそのまま次の世界に行こうと思ってたらしいんだけど、何でも入れておきたい番外編があるらしいぞ」

加奈「番外編？それってどんなの？」

カンペ（実はこのまま以前話した法則で次の章に行こうと思ったら、番外編を入れるとしたらここしかないと思いましてね……f（^^；）

そこでこのまま次の章に行く前に番外編としてW編に行こうと思っただんです。まあ正直W編はまたの機会にしてもいいのですが、私としては出来るだけ法則に乗っ取って行きたいんですよ）

加奈「う〜ん、W編かあ〜……。それは確かに見てみたいけど、次の章で次の募集ライダー出す予定だったんでしょ？それはどうするの？」

皐月「その辺だったらW編に出すから問題ないらしいぞ。更にその

次の章にはまた別に予定の入ってる募集ライダーを出す予定らしいし。ぶつちゃけそいつがその世界の世界観にシックリくるそうだけ」
加奈「一体どんなライダーよそれ……」

皐月「それはサイドストーリー3を読んで推理してみてください。よおしく読めば分かるはずだぜ」

カンペ（更に言うんですね…加奈ちゃんには嬉しいお知らせが……
一皿^）（

加奈「嬉しいお知らせ？何それ？」

皐月「ああ、なんでもW編で加奈がリイマジとして登場するらしいぜ。しかも結構重要な位置付けらしいし」

加奈「マジで！？私の時代キタアアア！！」 ガッツポーズ

カンペ（おおく喜んでる喜んでる）。。（

皐月「やっぱ加奈ってここだとテンション高いなあ……。と言うわけで次の章はW編になる予定だからW好きな奴は楽しみにしててくれよ〜！」

加奈「さあとつととファイズ編を終わらせて次の章まで急ピッチで行くわよ！〜！」

カンペ（どんなムリゲーそれ！？）。。（

第三十話：拒絶者の悪夢（前書き）

やっぱファイズ編だけあって“夢”って単語がたくさん出てきますね。別に意識してるわけでもないのに……。無意識ってすごい（、、；）

第三十話：拒絶者の悪夢

異世界のライダーがミラーモンスターと同じように鏡面化した機材に吸い込まれる様にして消えるのを見ながら、ファイズはカイザに訊ねた。

「どうでしたか？社長から見てアレは……？」

「俺は少なくとも彼が世界を壊すとは思えない。美玖はどう思ってたんだい？ここに連れて来たって事はそれなりに信用したからじゃないのかい？」

「……アイツには私達にない物を持ってましたからね。それを見た時、何となくですが信じてみたくなっただんです」

「俺達にない物？何だいそれって？」

「“家族”です……。私達には絶対ない物ですから、少し羨ましくもありましたね」

「なるほど…家族、ねえ……」

美玖や正幸、そして章治やオルフェノク達には家族のいない者が殆どだ。

実を言うとスマートブレインに所属しているオルフェノクの殆どが事故などで家族を失い、オリジナルのオルフェノクとして覚醒した者達ばかりだ。

そう言った者達を匿って、この会社は成り立っている。

それはただ単に仲間…家族が欲しかったからに他ならない。

だからこそ、人間は羨ましくもあり、愛しくもあり、同時に妬ましい。

彼にその家族と呼べる存在があるのならば、彼はそれを裏切る様な真似はしないだろう。

そんな事を考えていると、その空間を支配する殺気が完全に消えた。どうやらミラーモンスターを倒したようだ。それから間を置かずに、異世界のライダーが鏡面化した機材の中から再び姿を現し、こちらへ歩いてきた。

「ミラーモンスターは倒しました」

その一言にここにいる全員が安堵の息を漏らした。

『はあ〜助かったあ〜……』

「でも、研究所がボロボロですね」

「なあに、また作り直せばいいさ。それにしてもありがたいよね、須藤歩君」

そうカイザがこの場にいる全員を代表して礼を述べた直後、ライダーは全身を藍色の砂嵐に包まれ、変身を解除したかと思うとそのまま倒れた。

「おい！どうした！？」

「しっかりしてください！！」

『だあ〜どけ！診察の邪魔だ！！』

突然倒れた青年に思わず正幸が声を荒げ、ライオトルーパーが駆け寄って肩を揺さぶっていると、スネークオルフェノクが人間態に戻りながらライオトルーパーを蹴って退かすと、青年の容体を看始めた。

「一体彼はどうしたんだい、二階堂？」

「うっせえ、ちょっと黙ってる。そんなすぐに分かるかつちゅうの」

カイザが変身解除しながらそのボサボサのパスついた髪に、無精髭を生やした白衣の男に尋ねるが、その男、二階堂泰樹にかいどう やすきはとても社長に対する口の聞き方ではない口調で無愛想に答えた。

彼は使徒再生、つまりオルフェノクに殺されて覚醒したタイプのオルフェノクで、正幸達オリジナルとは少し立場が違う。

使徒再生によって覚醒したオルフェノクは他のオリジナルに比べて寿命が短い。

それは肉体に直接オルフェノク因子と呼ばれる体組織を直接流し込んだために、オリジナルよりも急激な変化が起こったことに起因する。

しかしこの男はそんな事など一切気にせず、スマートブレインの一人としてこうして正幸の夢を実現させるために尽力してくれているのだ。

やがて診察が終わったのか立ち上がって正幸の方を向くと、青年の容体を伝えた。

「コリヤ軽い疲労だな。一晩寝かせてやりゃあ大丈夫だろ」

「そうか…仮眠室はまだ大丈夫だったっけ？」

「襲撃を受けたのはこの第一研究室だけですから恐らくは……」

二階堂の診察結果に安堵の息を漏らすと、すぐ横にいた丸メガネをかけた背の低い中年男性：オウルオルフェノクだった男に仮眠室は無事か尋ねた。

この第一研究室は研究所の要となっている部分であり、ここを中心に第二研究室、主任室、仮眠室等へと続く廊下が何本か存在してい

る。

どうやらミラーモンスターの狙いは自分だけだったようで、そのおかげで正幸がいた主任室とミラーモンスターに引つ張られて来た第一研究室しか被害は被らうなかったようである。

しかし、逆に言えば自分がここへ来た所為で何人もの仲間が死んでしまった事に変わりはない。

そんなネガティブな思考に耽っていると、側頭部に「スパーン」と小気味良い音と共に衝撃が走った。

何事かと思い後ろを振り返ると、手を振り上げた状態でこちらを不機嫌そうに見ている、ファイズの変身を解いた美玖が立っていた。

「社長、先程も言いましたが我々は貴方のためなら命を捨てる覚悟を持つています。だからそんなに思い悩まないでください。貴方は…我々にとっては“王”なのですから。“王”はただ胸を張って堂々と立って我々を新たな世代へ導いていければいいのです。それが出来るのは…貴方だけです」

正幸は叩かれた頭を擦りながら、美玖の言葉に耳を傾けた。

やはり正幸が思っていた通り、自分は“王”としての責務を負わなければならぬ様だ。

「そうとなれば責任重大だな……」

「それなら私が全力でサポートいたしますよ」

「ハハツ、心強いね美玖は……」

「二人とも、イチャついてないで早く仮眠室へこの人運びますよ」

そんな会話をしていると、ライオトルーパーを装着した研究員が歩を背負いながら茶々を入れて来た。

それに美玖は顔を真っ赤にしながら怒鳴り散らし、正幸は「また俺

に乗り換える？」などと追い打ちを掛ける。
先程とは打って変わった空気に和みながら、一行は仮眠室へと向かった。

一行の後ろに神童がアタツシケースを持っているのに気付かずに……。

「よし、ここまでは順調だな。後はコイツを『歪み』に渡しておけばいいか」

そうばやくと、次元断裂空間の中に姿を消した。

好太郎は夢を見ていた。

2年前のあの日、ディジェクトドライバーを手にした時の夢……。それは必然だったのか、はたまた神の悪戯だったのかは分からない。だが、それが皆葉好太郎と言う名の青年の人生を大きく狂わしたのは確かだった。

その日、好太郎の世界に「歪み」が現れた。

次々と人々を殺していく怪物達。

その目を何とか掻い潜りながら当時高校三年生だった好太郎は、親友の一人である達浩たっひろ、通称タツと共に崩れたビルの隙間に隠れた。

『まったく何なんだよアレ！？何がどうしてどうやったらこうなった！？』

『落ち付けタツ、後ちゃんと日本語を喋れ』

その日二人は高校生最後の休日を満喫するため、繁華街で丸一日遊
び尽くすつもりでいた。

だが結果は今の通りだ。突然空が灰色に歪んだかと思うと、その中
から大量の化け物が雨の様に降って来て街を壊し始めたのだ。

『……ひよつとしたら、これが地球最後の日ってヤツだったのかな』
『何縁起でもねえ事言っただよコウ！こんな非現実な事があつて
たまつかよー！』

好太郎は徐おもに何時かのテレビでやっていた胡散臭い「人類最後の日」
とか言うテーマの特別番組を思い出しながら呟いた。

それに対しタツは好太郎の胸倉を掴み、そんな事などある筈無いと
まるで駄々をこねる子供の様に自分に「いや、タツ自身にも言い聞
かせた。

そんな意味のない言い争いしていると、タツの後ろから「ガシャ
ン」と言う何か金属がアスファルトに落ちる音が聞こえた。

『うおおおおあああああ！？』

『だから落ち付けタツ。ちよつと瓦礫が崩れただけだろ…後何気に
抱きつくな気持ち悪い』

好太郎は頭にくっ付いたタツを引っぺがすと、タツの身体の所為で
死角になってしまった正面を見た。

するとそこにはグレーのゴツゴツしたトリケラトプスの横顔を模し
た大きなバツクルが落ちていた。

『？何だこれ……ツッ！？』

そうばやきながらそのバツクルに近づいてそれを拾った瞬間、頭の

中に何かが入りこんで行く衝撃に襲われ、膝を着いた。それほどまでの激痛だ。

(何だこれは……!?このバツクルの事か!?)

頭の中にはこのバツクル…ディジェクトドライバーに関する情報が濁流の様に押し寄せて来る。

その性能、ライドカードシステム、そして刺々しい異形の姿……。それらの情報がすべて頭の中に叩きつけられると、荒い息を整える。今の頭痛は決して偶然ではないだろう。

そして、これを使えばこの最悪の状況を乗り越えることだってあるいは……。

『お、おい大丈夫かよ……って前前!!』

『ん?』

タツに言われて前を向くと、カブトムシを人に近づかせたような怪物がこちらを見据えていた。どうやら見つかってしまったようだ。

『ツチ……!タツ!お前は先に逃げろ!出来るだけ俺が時間を稼いでやる!』

『なにいきなりヒーロー気取りな事言っちゃってんだよ!?お前とうとうおかしくなっちゃったのか!?』

『俺は絶対に死なん!だからとつとに行け!!』

『……クツソ!死んでもシラネエからな!!』

タツは好太郎が意固地な事を思い出したのか、そう叫んで逃げて行った。

そう、それでいい……。後は、俺が倒せばいいんだ……。

ろうか？

そう思っていると、未だにディジェクトドライバーが装着されている事に気が付いた。

それを取り外そうと手を伸ばした時……我が目を疑った。

『なっ！？』

その両手は自分の物ではなかった。

ましてや先程変身を解いたばかりだ。その手は普通の人間の筈だ。

その筈なのに……その手は赤黒い恐竜の様な甲殻に包まれていた。

更に驚くべきはその部分が徐々に自分の身体を愛用のダークレッドのロングコートごと浸食しながら甲殻を増やしている事だった。

『い、一体何が……まさか、これの所為か！』

好太郎は改めてディジェクトドライバーを見た。

その赤い宝石が嵌めこまれた瞳からは、常に禍々しい光が漏れ出している。

そしてその光が好太郎の身体を包み込んでいるのだ。

『く……！外れる……外れる……！！』

好太郎は必死でバックルを取り外そうとするが、全く外れる気配がない。

その間に今度は両足も禍々しい形状に変わって行く。

やがて下半身全体が怪物その物になり、そこから胴体、首、そして顔へとどんどんその姿を人ならざる物へと変貌させようとする。

『や、やめろ……！俺は人ゲンだ……！か、カイ物なんか、ジャ……ナイ………』

顔の形状が変わって行き、徐々に上手く喋れなくなってしまふ。

そしてそこには……黒い刺を身体中から生やし、赤黒い甲殻に包まれた、恐竜の風貌を呈した一体の怪物が立っているだけだった。

「うわあああああ……!!」

好太郎はそこでようやく目を覚まし、息を荒げながら自分の両手を見た。

そこにはちゃんとした人の手があり、自分を人間だと証明してくれている。

それを確認すると、深く息を落とした。

(クソ……久々に見たぞあの夢……。きょうは厄日か何かか……?)

「こ、好太郎さん……どうしたんですか？」

ふと声のした方を向くと、そこには亜由美が自分と同じ視線で座っていた。

そこで時丁度自分の置かれている状況を把握した。

どうやら自分はどこかのベッドに寝かされているようだった。

そして、その壁や装飾から見るに、それなりにインテリアに凝った部屋だ。

とても今の自分には似つかわしくない場所だ。

「……ここはどこだ？」

「歩のこの世界の移住先らしいですよ。それにしてもまさかの高級マンションって…基準どうなってんの？真司さん家のアパートと雲泥の差……」

ここに真司がいれば「うるせえよ!？」というツッコミが返って来るだろうが、今この空間にいるのは好太郎と亜由美のみ。そんなツッコミが返ってくる筈がない。

「ところで…歩の奴はどうした…?」

「それが…この世界のライダーの人を助けに……」

亜由美は大まかな事情を説明した。

どうも自分が気を失った後、歩がこの状況での戦闘は不利と判断し、敵前逃亡をしたらしい。

しかし少なくとも、アイツと戦った時にその実力は自分と互角かそれ以上というのが分かっている。

あの時自分が勝てたのは本当に偶然だろう。

それほどの実力を有しているのに、そんな事などせずに倒せばいい物を何故そんな事をするのか甚だ疑問だ。

もしかすると初めから倒す気なんてないんじゃないのか？

そんな事を考えていると、歩のある言葉を思い出した。あの戦う直前に言っていたあの言葉だ。

“ 僕が勝つたら頼みを聞いてもらおうよ ”

頼み…? アイツは一体俺に何をさせるつもりだったんだ? それはアシを倒さない事と何か関係があるのか?

「好太郎さん、一ついいですか?」

「……何だ？」

歩が一体何を画策しているのか思考を巡らしていると、亜由美が話しかけて来た。

それに対し好太郎は、目を合わせず無愛想に聞き返した。

正確には目を合わせられなかったと言った方が正しいだろう。

何せ自分は彼女を裏切ったんだ。どんな侮蔑の言葉が飛んできても不思議はない。

「好太郎さんがワザと『歪み』を目覚めさせたなんて、私は思っ
ませんよ」

しかし好太郎の思っていた事は杞憂に終わり、思わず目を見開いて
亜由美を見た。

その表情はとても自分に向けられる事はないだろうと思っていた筈
の優しげな表情だった。

「好太郎さんだって、誰かを守りたいから章治さんの中の『歪み』
を消そうとしたんですよね？今回は偶々悪い方向に行っちゃっただ
けで、好太郎さんが悪いわけじゃないです。歩もそう思ってる筈で
すよ」

「……………」

好太郎は今までそんな事を言われた事がなかった。

デジエクトドライバーを手にしたあの日から、人はみんな自分を
避ける様になった。

ある物は怯えて逃げ去り、ある者は蔑み、またある物は自分を排除
しようとしてくる。

そんな孤独な2年間を過ごしていた中で、こうして面と向かって優
しくされたのは初めてだ。

歩の話では、世界の脅威や自分達ワールドウォーカーは、ディージェクトドライバーの特殊周波を受け付けないとの事だった。それなら彼女が怖がらないのは納得いくが、この世界が自分の所為で危機に陥っていると言うのに、こうして励ましてくれる。好太郎は久しぶりに人の暖かみと言う物を感じた瞬間だった。

「……そうか」

その励ましにどう返せばいいのか分からずそう無愛想に返してしまつたが、亜由美はそれを気にした様子もなく「どういたしまして」と言つて微笑んだ。

その可愛らしい仕草に思わず顔を赤らめたが、無理矢理眉間に皺を寄せて目を逸らして誤魔化した。しかし、基本自分は嘘を吐けないタイプだ。恐らくこれが照れ隠しなのはバレバレであろう。

「穴があつたら入りたい」という言葉はこう言う時に使う物なのかと、この言葉を考えた先人達に思いを馳せていると、そこで嫌な気配を感じ取つた。

その気配は間違いなくあのノアオルフェノクの物だった。だがその気配はやけに小さく、そして何故か無数に分かれている。

好太郎はベッドから降りて部屋の隅に置いてあるポールハンガーに掛けられた愛用のロングコートを取つて羽織ると、窓へ駆け寄つて開いた。

外は既に日が完全に沈んでおり、かなり高い位置から街の夜景を一望する事が出来た。

夜風が好太郎の頬を撫で、こんな非常事態でなければ心地好い物で

あつただろうが、今はそんな暢気な事は言つてられない。

(気配が散らばってる…どうやら手当たり次第に襲つてるようだな…。そして、ここにもいくつかの気配が近づいてる…奴らがここに来るのも時間の問題か…)

「あの、好太郎さん…どうしたんですか？」

「『歪み』だ。アイツが何かしたんだろう、気配が分裂して手当たり次第に街を闊歩してる。ここにもその内来るぞ」

そこまで言い切ると、好太郎は窓から身を乗り出した。

ここまで高いと、階段で下りて行くよりも飛び降りた方が早い。

それに、変身すればノーダメージだ。それくらいの耐久力がディジエクトにはある。

「お前はここにいろ。奴らをここには絶対に行かせない……」

そう言つて好太郎は窓から飛び降りた。後ろから亜由美の声が聞こえたが、重力によって落ちていく際に発生する風圧と、それによってバサバサとはためくロングコートによってその声が遮られた。変身しようとロングコートの内ポケットからディジエクトドライバーを取り出し、腹部に宛がい、右ポケットから取り出した「ディジエクト」のカードをバックルに装填する。

「カメンライド……」

バックルが認識音声を口にした所で、先程見たあの夢が脳裏を過ぎった。

もしかすると、このまま変身し続ければ本当にあんな怪物になってしまうかもしれない。

そして今もそんな怪物になる寸前だから人は自分を避けているのではないだろうか？

だが、それでも勇気を出して変身すると決めた。何故なら……

（アイツは、俺を人として見てくれたんだ……だったら俺は人間だ！そして、もう絶対にアイツを裏切ったりはしない！！）

「変身！！」

「デージェクト！グオオオオオ！！」

「ガアアアウ！！」

空中でその姿をデージェクトへと変化させながら態勢を立て直すと、野獣のような声を上げながら両足で見事に着地した。

その足元の地面には穴が空いており、相当の重量と衝撃があった事を証明している。

そして前屈みの姿勢から視線を前に移すと、丁度建物の蔭からイモムシ型のオルフェノク・キャタピラーオルフェノクが覚束無い足取りで現れた。

どうやらこれが気配を発しているようだったが、他の方向からも次々と集まって来ている。

（まずは手駒を使って様子見をするつもりらしいな……しかもこいつ等は元が人間でも何でもないただの分身か……なら丁度良い）

「アタックライド……ファング・アーム！」

両腕に備え付けられたライドプレートをブレードに変質させてそれを前で交差させて構えると、眼前のオルフェノクの群れを睨みつけ

た。

「さあ…遠慮なく暴れようかあ…！ガアアアアアア…！」

その言葉を皮切りに、ディジェクトは咆哮を上げながら群れを中心へと突っ込んで行った。

第三十話：拒絶者の悪夢（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（ ） ・ ・ （ ） デイジーエントのスペック強化について

皐月「そついや前回の話で歩が強くなつてるとか言ってたな」

加奈「でもなんか理由があるの？」

カンペ（それは次回の話で分かると思います。とは言っても物語のかなり核心の内容になるのである程度省きますけどf（^^;）

加奈「ふ〜ん、まあ理由があるんだったらいいわよ。何も考えずにするよりはマシだし」

皐月「ところでどれくらい強くなつたんだ？」

カンペ（強化内容は以下の通りです） ・ ・ （ ）

・カードの性能が若干上昇

・空間把握能力の上昇（知能の低い相手の行動も読める）

・走力が100m走7秒から6.3秒へ

以上になります！（＾　＾）／

加奈「意外と少しだけなのね。身体能力なんて走力くらいしか変わってないし」

皐月「でも空間把握とか言うヤツが上がったのはデカイと思うぜ。

これで魔化魍でも楽に勝てるってわけだ」

加奈「それって何時の話になるわけよ……」

皐月「大体「ピーー」目の章だな」

加奈「だからネタばれ厳禁！！」

カンペ（放送事故のため、しばらくお待ちください）（　）（　）

加奈「まったく、じゃあ今回はここまでにするわよ」

皐月「へーい…じゃあまた次回で会おうな」　タンゴブタワー出てくる

加奈「感想や質問もお待ちしております！」

あとがきラジオ出張版〜水音ラル誕生祭〜（前書き）

ハッピーイイイ…バアアアアステエエエエイ！！（@ @

#）

……自分！！

はい、と言うわけで遂に始まりました自分の誕生日に何かしようと思っ
てやっちゃった企画「水音ラル誕生祭」！

今回のお話は次回のあとがきラジオから繰り越してお送りします。

（そうじゃないと一日で読む文字数がとんでもない事に……（@

@:~）

そして、今回の企画に協力して下さいましたG3-X先生、O O O T G

L S T S T P B先生、本当にありがとうございます！！（T T）

/

私なりにキャラを再現してみましたんで、どこかズレがあるかもしれ
ませんが気に入って頂けたら嬉しいです。

それではスタートオ！！（・w・）

あとがきラジオ出張版〜水音ラル誕生祭〜

加奈「加奈と！」

臯月「臯月と！」

メカ犬「メカ犬の」

加奈・臯月・メカ犬「あとがきラジオ！出張ば〜ん！！！」

加奈「…って何か変なのいる！？」

メカ犬「変なのとは失敬だぞ加奈殿。ワタシはただの新型の犬型オモチャであって……」

加奈「そんな高性能なオモチャがあるか！？」

臯月「ま、コイツの冗談はさておき、本当のところは……」

純「…ってちよつと待ってください！そこはまず主人公である俺の方から説明するべきでは！？」

加奈「え、子供！？何でこんな所に！？」

メカ犬「うむ。そうであつたな。それではまずマスターから紹介して頂くとしようか」

純「お、おう……。え〜初めましての方は初めまして。ご存知の方はこんにちは。『魔法少女リリカルなのは〜ヘタレ転生者は仮面ライダー？〜』で主人公をしております板橋純いたばしじゅんです」

メカ犬「そしてワタシはその相棒を務めているメカ犬だ。今回はよろしく頼むぞ加奈殿、臯月殿」

加奈「あ、はい。こちらこそ……」

臯月（加奈が流されてる……）

歩「と言うつわけで今回は別作品からゲストを交えてお送りしているわけですが……」

亜由美「こここの家？何かお城とかにありそうな椅子とか置いて

あるし……」

帝みかど「そこは俺の特等席だ」 亜由美の真後ろに立ってる

亜由美「え！？何時の間に……ってうわっ！派手な髪！！」

歩「あ、ちなみにラジオ放送だと分かんないと思うから説明すると、
ウェーブ掛かった銀髪で赤と青と緑のメッシュが入ってるよ」

冬花ふゆか「説明、ありがとうございます」

皐月「つてなわけで今回のゲストその2！『仮面ライダーディカイ
ザー』世界の支配者』の主人公・天海地帝てんかいちみかどとヒロイン・月海冬花つきつみふゆか
にも来てもらってるぜ！！」

歩「そして今回は何時ものスタジオではなく、帝君の家でお送りし
ております」

帝「よろしくな」

冬花「よろしくお願いしますね」

好太郎「何と言うカオスな展開……」

純「あの、ここは俺達の大まかな紹介をした方が読者の皆さんに分
かり易いのでは？」

加奈「あ、それもそうね。じゃあまずは皆さんの紹介からしましょ
うか」

亜由美「それにしても君、気が利くね」

純「あ、はあ……どうも……」

歩「でも念のために言っとくとその子……」

好太郎「待て！それ以上言うな！！そこから先は紹介文で説明して
やれ！！」

加奈「と言うわけでゲストの大まかなプロフィールを紹介します。
まずは純君とこの意味不明なフルメタル犬から……」

板橋純（仮面ライダーシード）

性格：自称ヘタレだが、正義感が人一倍強い
詳細：G3-X先生作「魔法少女リリカルなのは」ヘタレ転生者は
仮面ライダー？」の主人公。
私立聖祥大学付属小学校一年生。
元は地方の大学生であったが、交通事故に遭いリリカルなのはの世
界に転生。その後は平凡な生活を送っていたがメカ犬との出会いが
きっかけで海鳴市の平和を守るためシードへ変身し、ホルダーと呼
ばれる怪人と戦っている。

メカ犬

性格：基本的に真面目だが、ユーモアな一面もある
詳細：別次元で造られた犬型ロボットで純の相棒。
ホルダーを倒せるシステムを搭載したバディシステムと呼ばれる
超高性能ロボット。
次元を超える際のショックで一時的に停止している所を純に拾われ、
再起動された際に純をマスターと認識したため、純を仮面ライダー
シードへ変身させるための重要なツールの役割を果たす。

…ってアレ！？ちよつと待って、この設定だと元大学生なの！？つ
て事は実際私達より年上！？」
亜由美「その、ごめんなさい…子供扱いしちゃって……」
純「そんな気にしなくていいですよ。もう慣れてますし……」 遠
い目
好太郎（コイツ、結構不遇なのか？）

皐月「それじゃあ今度は帝の紹介をアタシがさせてもらっせ

天海地帝（仮面ライダーディカイザー）

性格：困ってる人は放っておけないタイプで、結構王様な感じ

詳細：OOTGLSTSTPB先生作「仮面ライダーディカイザー」

（オース・ザ・コンボ）世界の支配者」の主人公。

ディカイザドライバーの適合者で、その力で世界を支配しようとしていた時期もあったが現在は興味をなくし、再び訪れた世界の危機を救うために冬香と旅をしている。

また、ディケイドとディエンドの両方の能力を備えており、全てのライダーのカードを使える。

とまあ、こんな感じだな。」

亜由美「何それ強そう……」

帝「当然だ。なんてったって俺は元世界の帝王だからな」 天道ポ

ーズ

加奈「なんか様になってる……」

歩「ウチの作者もディージェントだと勝てる気がしないって言うんだよ」

好太郎「おいDシリーズ最強！それでいいのか!？」

歩「あくまで身体能力での話ね」

冬花「あの、Dシリーズって何ですか?」

皐月「作者が思い付いたディケイドとかディエンドの総称だとさ。

この小説サイトでもそう言うディケイドみたいなヤツラが沢山いるから一纏めに説明する時、何か総称が合った方がいいんじゃないかと思って付けたんだと」

歩「後ついでに言うとそのDシリーズの一つ一つに何らかの役割があって、それに準じた行動をとっているって言うのが作者の説だよ」

亜由美「歩の場合は“バックアップエージェンシーシステム”で、好太郎さんの場合は“アプローチアウトシステム”って感じにね」
帝「へえ〜、じゃあ俺の場合はどんなシステムになるんだ？」

カンペ（私なりに考えた結果、世界の支配し、統括する“ワールズマスタリングシステム”と考えていますー。）
ちなみにちゃんとオーズさんに許可貰って名付けてますよ）

純「何だそれどこのチート!？」

メカ犬「続いては冬花殿の紹介だな。今度はワタシが説明しよう」

純「無視すんなよ!？」

メカ犬「これがこの作品のテンションだ。このペースでどんどん行くぞマスター」。

月海冬花

性格：几帳面で頑張り屋。ただし自分の武器である雪月花を抜くと言葉使いが荒くなる

詳細：崩壊しそうになった世界で帝が会った17歳の少女。

雪月花に操られている所を帝に助けられてからは旅に同行するようになる。

雪月花を持つと怪人を倒せるほど戦闘力が高くなり、帝の助けにもなる。

以上が冬花殿のプロフィールだ」

亜由美「雪月花って？」

冬香「私が持つてるこの刀の事です」 どこからともなく取り出す

加奈・純「どこにしまったの!？」

歩「これが後書きクオリティってヤツだよ」

帝「便利だなそれ」

皇月「なあちよつと抜いてみても良いか？」 既に抜こうとする

冬花「あ、ちよつ…ダメですよ！抜いちゃったら刀に…！！」

シヤラン 刀を抜いた音

皇月「よっしやああ本編に返り咲くぜえええええ！！」 刀に操られてる

純「うわっ！振り回したら危ないですよ！！」

歩「加奈さん、脳天チヨップお願いします」

加奈「目を覚ましなさい皇月！！」 脳天チヨップ

皇月「ぐおっ！？あ、あれ…？アタシ何やってたんだ？」 刀を手

放したせいで解放された

好太郎「危ないなこの刀……」

帝「と言うか、よくもまあチヨップ一発で解放したな……」

冬花「この刀、私じゃないと制御できないんです」 刀を鞘に仕舞いながら

メカ犬『まさに妖刀だな』

好太郎「メカニツクな外見してる癖に詳しいなお前……」

歩「人を見た目で判断しちゃいけないよ」

好太郎「いや人じゃないだろどう見ても！！」

帝「さて、これで一通り俺達ゲストの紹介は終わったな」

メカ犬『うむ。それでは早速本題に行ってみようか』

皇月「そうだったな、すっかり忘れてたぜ」

加奈「司会が忘れてちゃダメでしょ！……ゴホン、それではこれより今回のタイトルの通り『水音ラル誕生祭』を開催いたします！」

パチパチパチパチ……！！ 全員で拍手

純「誕生日、おめでとunggざいますー！」

メカ犬『そこで今回はこの作者の誕生日記念として我々で面白おかしくトークやお題で盛り上げて行こうと言うわけだ』

冬花「ちゃんとケーキも作っておきましたよ」

亜由美「おお！大きいー！」

加奈「みんなで分けて食べられるわね」

歩「でも作者曰く『自分のはいいから、みんなで分けて食べてね』だつてさ」

帝「それじゃあ遠慮なく頂くとするか」

冬花「あ、でも確か帝さんにはお題が来てませんでしたっけ？」

帝「え、そうだったっけ？」

冬花「はい、ウチの作者が帝さんにお題を書いた手紙渡してたじゃないですか」

帝「そういや貰ってたな……ってアレ？どこ入れたっけ……？」 ポケットの中探ってる

純「あの……ひよっとしてこれの事ですか？」 自分のポケットの中から手紙取り出した

帝「あ、そうそうそれぞれ！」

冬花「でも何で純君が？」

純「ここに来る途中で拾ったんですよ。本当は交番に届けようと思つてたんですけど、ラルさん宛の手紙だったので持って来たんです

歩「どうやら落としてたみたいだね」 ケーキ切り分けながら

帝「あつちやあゝ、やつちまつたなあゝ」

冬花「もう、すっかりして下さいよ」

メカ犬『それでマスター、それには何と書いてあるのだ？』

純「あ、ちよつと待っててくれよ、今開けるから……え〜と」女性陣はお茶会をしてください。そして帝はディジェクトである好太郎と対決してください」だつてさ」

好太郎「俺かよ!?!そこは歩じゃないのか!?!」切り分けたケ―キ小皿に取つてる

帝「お前の本編での考え方が俺にとって気に喰わなかったからな。それで、どこでやればいいんだ?そこまで俺の家広くないぞ?」

歩「それだったら正幸さんに頼んでアリーナを貸し切りにしてもらつてるからそこでしてくるといいよ」

加奈「それじゃあここで男性陣と女性陣で別行動しましょうか」

皐月「そうだな。それじゃあ好太郎の分はアタシが貰つといてやるから遠慮なく逝つて来い」

好太郎「皐月!お前それ字が違うぞ!?!どこまで俺の事が嫌いなんだお前は!?!」

帝「ほら行くぞ好太郎。元帝王の力を見せてやる」好太郎引き摺りながら

亜由美(好太郎さん、ご愁傷様です……) 合掌

好太郎「亜由美!何で俺に向かって手を合わせる!?!そんな同情に満ちた目で俺を見るな悲しくなる!?!」

歩「それじゃあ男性陣はアリーナに行こうか」

純「あ、はい。分かりました(この人、結構不幸だな……)」

好太郎「クツソオ…ケ―キイイ!?!」

メカ犬「相当食べたかったのだな……」

加奈「それじゃあ男性陣も出て行った事だし、みんなでガールズト

「クでもしましうか」

亜由美・冬花「は〜い」

皐月「丁度ケーキもある事だしな。後はお茶があれば完璧なんだが……」

冬花「だったら私が淹れて来ますよ。みなさんはゆっくりしててくださいね」 台所へ向かった

亜由美「あ、それじゃあお願いね〜」

加奈「ところで前から聞きたかつたんだけど皐月……」

皐月「ん？なんだ？」 ケーキ類張つてる

加奈「何であんなに好太郎さんを毛嫌いするの？」

亜由美「確かに、活動報告でもヒドイ仕打ちだよね……」

皐月「……似てるんだよ」

亜由美「え？似てるって誰に？」

皐月「昔アタシが好きだった奴に似てるんだよ！しかもそいつ、アタシを完膚なきまでにフリやがったんだ！更にあの女みたいにロン毛になつてるのが無性に腹立つ！！」

亜由美「え！？そんな理由だったの！？」

加奈「そして好太郎さんが誰かに似てると思つたら今思い出した！入学式の日皐月がボコツてたあの男子だ！ひよつとして好太郎さんってその人の異次元同位体！？」 第十一話のあとがきラジオ参照
皐月「アタシ癖毛だから伸ばそうにも伸ばせねえのに、アイツの髪メチャクチャサラツサラじゃねえか！もう嫌味にしか感じねえ！！」
冬花「それは嫌いたくもありませんね……」 お茶持つてきた

亜由美「あ、お茶できたんだ。ありがとね」

加奈「まさか今までの好太郎さんの扱いにこんな伏線があつたとは……」

皐月「誰かアイツをマジで殺してくれ……アタシの精神すでにガタキリバなんだよ……」

亜由美「そこまで言っちゃう！？そして結構精神的に来てたんだ！
！？」

加奈「昔の男が忘れられないってとこだけは、結構乙女なんだけどねえ……………」

冬花「……………それって本心なんですか？」

亜由美・加奈・皐月「え…？」

冬花「確かにフラれた腹いせに毛嫌いしたくなる気持ちも分からなくはないです。でも昔は好きだったんですよね？ひよっとして今でも好きなんじゃないですか？だから構いたくなる……………」

皐月「バツ…！何言ってるんだよ…！？そんなわけないだろ！？」

冬花「ほらよくあるじゃないですか。男の子が好きな女の子をついつい構って欲しくてイジメちゃう事とか……………」

亜由美「ああゝなるほど……………」

加奈「つまり皐月はツン……………」

皐月「うわあああストオーツプ！」 顔真っ赤

カンペ（ ）（ ） 放送事故のためしばらくお待ちください（

亜由美「皐月ゝ落ち着いた？」

皐月「ああ、何とかな……………」

加奈「ホント、こう言つとこだけは乙女よね皐月って……………」

皐月「こう言つとこだけって何だよ！？それに、亜由美の方はどうなんだよ！？」

亜由美「え、私！？何で！？」

皐月「だって前回の話で好太郎とフラグ立ってただろ！アレ実際どうなんだよ！？」

加奈「ああ〜そう言えばそんな描写あったわね〜」

冬花「そうなんですか？」

亜由美「いやいやそんなつもり全くないんですけど……って言うか私好太郎さんフラグ立ててたの!? 初耳なんですけど!?!」

加奈「つまり天然殺しってことね……恐ろしい子……!」

冬花「どっかの少女漫画みたいな言い方になってますよそれ!?!」

皐月「それにそのちよつと前にも歩とそれっぽい感じになってた描写(頭撫でられるシーン)とかあったし、結構優柔不断なんじゃね?」

亜由美「え!?!いや歩とはそんな関係じゃないし、むしろ兄妹みたいな感じだよ!?!そこに恋愛感情は含まれておりません!?!」

加奈「でも作者の話だとそうするルートもアリかもとか考えて……」

亜由美「やあめてええええ!?!?!」

カンペ() () ここから先は完全にガールズトークなので、
男性陣サイドへ入りませう

歩・好太郎「クシユンッ!」

純「どうしたんですか二人とも、風邪ですか?」

歩「いや、違うけど……」

好太郎「どうせ皐月辺りが何か言ってるんだろ」

帝「風邪だろうがなんだろうがそんなの根性で吹き飛ばせ。これから俺と勝負してもらおうんだからな」

純「何という根性論……!」

メカ犬「さて、ワタシ達は現在、スマートブレインスーパーアリーナまで来ているわけだが、ここで好太郎殿と帝殿の戦闘ルールを説

明しておこつ』

純「お前も鬼進行だな!？」

メカ犬「ルールは簡単。相手を気絶、もしくは変身解除させれば勝利だ。但し、能力の使用はお互いに数に差があり過ぎるので帝殿はクイーンドライバーの使用は禁止、及び他のライダーへライドするのは3回までだ。3回解除されたらその時点で負けになるので注意するように」

帝「クイーンドライバーが使えないって事は、ライダーの召喚は出来ないって事が……。まあこれくらいのハンデが無いとつまらないしな」

メカ犬「そして実況はワタシ、メカ犬が。解説はDシリーズに詳しい歩殿と、それ以外のライダーに詳しいマスターに行ってもらおう」

歩「あとツツコミ担当も純君だからよろしくね」

純「何その担当!？」

メカ犬「それでは二人とも、位置に着いてくれ」

好太郎「ハア……ケーキ……」　ブツブツ言いながらも位置に着く

帝「そんなに食べたかったのかよ？」

好太郎「ああ、俺は体質上、店に入れないから……」　人から避けられる体質

帝「じゃあ今まで何食ってたんだよ？」

好太郎「……某王蛇とデルタみたいな感じだ」

帝「ああ、ありや一般人にはキツイだろうなあ」

メカ犬「さてこの時点で本編並みの文字数になってる上に、ラル殿の体力も限界に近いので早速始めよう」

純「メタ発言しやがったコイツ!？」

歩「その調子でお願いね」

メカ犬「両者ベルトを付けて……戦闘開始!!」

好太郎・帝「変身!」

「カモンライド… デイジエクト！グオオオオオ！！」
「カモンライド… デイカイザー！」

メカ犬『さあ両者同時に変身し、互いに駆け出した！この状況をどう見る歩殿！？』

歩「恐らくデイジエクトが有利でしょうね。デイカイザーのスペックはパンチ力8t、キック力12tに対し、デイジエクトはパンチ力10t、キック力13tと僅かに上回っています。そして二人の戦闘スタイルにつきましてはデイカイザーは相手の情報からその動きを分析して戦うため、情報にないデイジエクトと戦うのに役に立ちません。そしてデイジエクトはそんな事など関係なしの相手を蹂躪するかのような攻撃特化型。カードを使わずに戦えば、デイジエクトが勝利する可能性が高いでしょう」

純「この二人（？）、ノリノリ過ぎる……」

デイジエクト「ガアアアウー！！」

デイカイザー「おっと、中々のパワーだな。だったらこいつだ！」

「フォームライド… クウガ・ライジングアルティメット！」

メカ犬『おっとここでデイカイザー、デイジエクトの攻撃を受け流し、クウガ・ライジングアルティメットへとフォームライドした！マスター、あのライダーは一体どれほどの強さなのだ！？』

純「（ああもうヤケクソだ！）あのライダーは『劇場版 仮面ライダーディケイド オールライダー対大ショッカー』に於いて小野寺ユウスケが神官ビシユムの手によって究極の闇に堕ちた姿です！そしてそのスペックは歴代ライダーでもトップクラスです！！」

クウガ・ライジングアルティメット

KRAデイカイザー「ちゃんと避けるよ！おらああああ！！」

デイジエクト「グオツ！？チイイイ…！！」

メカ犬「デージェクト、クウガの回し蹴りをギリギリで避けるが装甲をかすって火花を散らした！」

歩「Dシリーズの装甲はその装着者の潜在演算によって形成されています。すぐに復元できるでしょうが、そのまま猛攻を喰らい続けていけば、確実に砕かれて変身も強制解除されてしまいますね」

メカ犬「さあこの危機的状況を一体どう切り抜けるデージェクト！純（良く考えたらこの二人（？）の実況と解説ってすっげえシユールだよな？）」

KRAデйкаイザー「とおりやあああ！！」

デージェクト「グガツ……！だが、この距離なら……」

「アタックライド…リジエクシオン！」

メカ犬「ここでデージェクト、ワザとパンチを受けて吹き飛ばされて距離を取ると、その隙にカードを発動させた！歩殿、あのカードは一体何なのだ！？」

歩「あのカードは『リジエクシオン』ですね。デージェクトならではの特別なカードです。そしてその効果は……」

KRAデйкаイザー「吹き飛ばへ！！」

デージェクト「お前がな、物理干渉を拒絶する……」

KRAデйкаイザー「もらっ…たあああああ！！？」

メカ犬「クウガが猛スピードで接近してデージェクトに殴り掛かるうとした瞬間、クウガの方が吹き飛ばされた！？歩殿、今のは一体…！？」

歩「今の現象が『リジエクシオン』の効果です。あのカードを発動中は、装着者が宣言した対象を拒絶・反射する事が出来るんです。

そしてぶつかつた衝撃が強ければ強いほど、その対象への威力も大きくなるんです」

メカ犬「まさしく、相手のパワーを逆手に取つたというわけだな！」
歩「そう言う事です」

純「いや解説は良いけどこっちに吹き飛んできてますよ！？早く避け……」

歩「その心配はないよ」 目の前に次元断裂展開

KRAディカイザー「あだっ！？」 次元断裂を潜り抜けてアリーナの中央へ落とされた。

純「へ…？」

歩「一応場外にならない様に、壁に叩きつけられそうになったら僕が次元断裂を展開してアリーナの中央へ転移させるから。因みに本編でこれを実際にDシリーズにやったら次元断裂が壊されちゃうからできないけど、そこは後書きクオリティと言う事で納得しておいてね」

純「何と言つご都合主義…！」

メカ犬「さあそうこう言っている内にクウガへのライドが解除されてディカイザーへと戻ってしまったぞ！これで残りの変身回数はあと2回だ！」

歩「この後一体どのカードを使うかがミソですね」

純（と言うか、そろそろ文字数が8千超えそうなんだけど……。ラルさんの限界どこ行つた…？）

カンペ（吹っ切れました（、*））

純「吹っ切れたの！？何ですかその恍惚とした顔は！？そろそろ精神的に危ないですよ！？後ついでに言っておくと、俺の考えを勝手に読まないでください！！」

メカ犬「マスターがラル殿へツツコミをしている間に、両者の戦闘は更にヒートアップ!!」

歩「何とかディカイザーが反撃を試みようとしてはいますが、ダメージはそのままディカイザーへと跳ね返ってしまっていますね。ここはまず遠距離戦を取らなければディカイザーに勝機はありません」

ディカイザー「おおそうか!その手があったか!!」 歩の声聞こえた

ディジエクト「オイコラ歩!何余計な事言っただ!」

メカ犬「ディジエクトが歩殿へ非難の声を浴びせてる間に、ディカイザーはディジエクトを踏み台にしてジャンプ!かなりの高度だ!!」

歩「『リジエクシオン』の効果を逆手にとりましたね。ジャンプ力が通常の比ではありません」

ディカイザー「そして次に使うカードは…これだ!!」

「フォームライド…カブト・ハイパー!」

純「アレはカブト・ハイパーフォーム!歴代ライダー最速のライドーです!!」

メカ犬「しかし、スピードではあの『リジエクシオン』は破れないぞ!果たしてどうするのか!!」

カブト・ハイパー
KHディカイザー「こうするんだよ!!」

「アタックライド…パーフェクトゼクター!」

歩「アタックライドの効果により、ディカイザドライバーに嵌めこ

まれているトリックスターから金色と銀色のノイズが噴き出し、それが形を成してパーフェクトゼクターへと変わりましたね」

メカ犬『しかし、あの武器はどう見ても剣！物理攻撃では跳ね返されてしまうぞ！』

純「いや、アレなら大丈夫だ……」

メカ犬『マスター、それはどう言う事だ？』

純「何故ならあれは……」

KHデイクイザー「さあ、フィニッシュだ！！」

「ファイナルアタックライド…カカカカブト！」

メカ犬『カブト、必殺技のカードを発動させ、剣の柄を曲げるとそれを銃の様に構えた！？まさかこれは…！』

純「そう、そのまさかだ！」

KHデイクイザー「マキシマムハイパーサイクロン！！」

「マキシマム・ハイパー・サイクロン」

メカ犬『空中から巨大な砲撃が放たれた！果たしてこれにディジエクトはどう立ち向かうのか！？』

ディジエクト「チィッ！シックスエレメントを拒絶する！」

KHデイクイザー「うおおおお…ってなんだと！？」

ディジエクト「グオワッ！？」

純「跳ね返した！？」

歩「これも『リジエクシヨン』の効果だね。属性エネルギーであるシックスエレメントを拒絶対象にした事で、それを跳ね返したんだ

よ」

純「でも、カブトの場合は確かタキオン粒子の筈じゃ……」

歩「確かにそれを拒絶対象にしても良いけど、それだけだと限定的過ぎるからね。あのタキオン粒子はあくまで元はシツクスエレメントだから今ディジェクトが宣言した“シツクスエレメントの拒絶”もそれに分類されるんだよ」

メカ犬「なるほど。しかしディジェクトは今の攻撃で吹き飛ばされてしまったぞ。それは一体どういう事なのだ？」

歩「アレは物理的な衝撃による物ですね。今の砲撃はタキオン粒子だけの攻撃ではなく、その放出エネルギーによって生じた衝撃波も含まれているんです。しかもそれはタキオン粒子とは一切関係ないため、拒絶する事が出来なかつたんです」

純「ここまで完全に互角だな……ってあれ？何でメカ犬に対して敬語なんですか！？」

歩「うん…霧囲気？」

純「なにそれ！？」

KHディカイザー「うおわああああつ！？」

メカ犬「さあ二人が言い合っている間に跳ね返った砲撃がカブトに直撃！流石に砲撃中では避けるのは無理があつたか！？」

ディジェクト「さて、これで止めとするか……」

「アタックライド…フアング・シオルダー！」

「ファイナルアタックライド…ディディディジェクト！」

メカ犬「墜落して行くカブトへの変身が解除されたディカイザーと、カードを発動させたディジェクトの間に光のビジョンが展開された！これで決まってしまうのか！？」

歩「デージェクトのあの技は『ディメンジョンカッター』ですね。本編でもまだ出ていない必殺技です」

純「こんなネタ回で出しちゃっていいの!?!」

歩「大丈夫だよ。オーズのネタ回でも、二号ライダーのバースが新武器出して来たくらいなんだし。ちなみにそれ、仮面ライダーシリーズ放送千回記念の大々的なヤツだったんだよ」

純「マジで!?!それ見たかった!?!」 オーズ一話までしか見てない

デイクイザー「ここで、終わる……わけねえだろ!」

「ファイナルアタックライド……デイドイドイドイクイザー!」

メカ犬「おつとここでデイクイザーも必殺技の態勢に入ったぞ!そしてこちらも光のビジョンを出す但其の数はデージェクトの倍だ!」

歩「基本的にビジョンはDシリーズの攻撃の底上げのために使われる物です。そして、その数が多ければ多いほど、威力も増大して行くんです」

純(アレ?でも歩さんって、ビジョン一枚しか出していない様な……)

歩「何か気付いたみたいだけど、ここでは言わない様にね?」 良
い笑顔だけど何か恐い

純「は、はい!(こわっ!?)」

デージェクト「グウウ……ガアアア!」

デイクイザー「おらあああああ!」

メカ犬「両者の必殺技が同時に放たれた!そして金色のノイズを纏ったキックとダークレッドのノイズを纏った二枚のブーメランプレートが激突!」

歩「両者の攻撃が激突するまでに通過したビジョンの数は、ディジ

エクトが5枚、デイカイザーが9枚ですね
純「よく数えましたね!？」

デイカイザー「うおおおおお!!」

デিজエクト「ゲウウウ…又ン!!」

デイカイザー「何!?ぐあっ!？」

メカ犬「何とデিজエクトが片手を引く様に動かした瞬間、ブレードの一枚が方向転換してデイカイザーの背後に一撃入れたぞ!？」
歩「僕も始めて見ますが、アレは遠隔操作したのでしょうか。あのブレードはデিজエクトの身体の一部と言っても過言ではありませんからね。つまり意思を伝えれば難しいでしょうが、論理上はああいう事も可能なんです」

純「そしてもう一枚のブレードもデイカイザーのキックを押し退け、攻撃を加えようとしています!」

歩「あ、遂に純君も実況始めちゃった…ツッコミどうしよう…」

(・・・)

デイカイザー「ツツ…!元世界の帝王を…舐めるなあああ!!」

デিজエクト「何っ!？」

メカ犬「デイカイザー、元帝王のプライドか、何とブレードを蹴り碎いた!」

歩「そしてデイカイザーの必殺技『デイメンジョンダイナミック』がデিজエクトへ迫ります」

純「果たしてどうするのでしょうか!？」

デিজエクト「クッ…!こうなったら一か八か…!!」

「アタックライド…ファンング・レッグ!!」

歩「どうやらディジエクトは『レッグフアング』による回し蹴りで押し退けるつもりの様ですね」

純「でも相手は必殺技を放ってるんですよ!? 普通の攻撃じゃ耐え切れないんじゃない?」

メカ犬「さあ、ディジエクトに勝ち目はあるのか!?」

ディジエクト「ハアア…ガアアア!」

ディカイザー「おらあああ!」

ドゴオオオオン!!

メカ犬「両者の攻撃が激突した瞬間、爆発が起きたぞ!」

歩「これはさながらディケイド本編第一話の様な光景ですね」

純「果たしてどちらが立っているのか!?」

ディカイザー「ゼエ…ゼエ…」

好太郎「ゲウウツ…クソ…」

メカ犬「何と変身を解除したのはディジエクトだ!この時点で勝者はディカイザーに決定だ!」

ディカイザー「俺の勝ちみたいだな…つて、アレ?」 変身解除された

メカ犬「ディカイザー、勝利宣言をした瞬間に変身が解除されてしまった!」

歩「どうやら向こうにも相当のダメージが入っていたようですね」
純「この場合はどうするんだメカ犬?」

メカ犬「その勝負のルールはあくまで“先に変身解除した方が負け

”というルールだからな。よってあと一歩の差でディジェクトの負けと言っ事になるな」

帝「惜しかったな、好太郎」

好太郎「チツ、俺の負け……か……」 倒れた

帝「つて、おい！」

メカ犬『好太郎殿が気を失ってしまったぞ！』

歩「仕方ないから担いで帰ろうか」

帝「じゃあ俺が担いでやるよ。功労者を労わるのも帝王の務めだから……」 倒れた

純「帝さんも倒れた!？」

歩「ハア……それじゃあ純君は帝君を頼むよ。僕は好太郎君を担いでくから」

純「子供の身体の俺に大の大人をどうやって担げと!？」

メカ犬『変身すれば良いではないかマスター』

純「まさか、こんな形で変身する事になるとは……」 タッチノール取り出した

歩「ただいま」

シード（純）「ただ今戻りました……」

亜由美「お帰り……つてそのライダー誰ですか!？」

シード「俺です……純です……」

亜由美「え、純く……じゃなくて純さんなの!？」

シード「あ、別に呼びやすい方で呼んで構いませんよ」

皇月「へえ、純が変身するライダーってこんな何だ」

加奈「でもあのフルメタルドッグどこ行っただの？」

メカ犬『ここにいるぞ加奈殿』 ベルトに変形中

加奈「え！？これ！？」

メカ犬『うむ。最初に紹介した通り、ワタシはバックルモードへ変形し、マスターに装着される事で、マスターをシードへ変身させる事が出来るのだ』

冬花「スゴイですね……。ところで、どうしたんですか帝さんと好太郎さん？」

歩「二人とも倒れちゃってね。それで仕方なく運んで来たんだよ」

シード「ところで何で疲れてないんですか？結構な距離歩いたのに

……」

歩「一応自分の触れてる範囲だけけど、空間を弄って重力を皆無に出来るからね。それで重みが無いんだよ」

冬花「スゴイですねその能力……」

加奈「取り敢えず二人をソファーにでも寝かしておきましょう」

歩「そうだね。じゃあ二人が起きるまでの間、オーズのDVDでも見ておこうか」

純「あ！良いですねそれ！見ましょう！」 変身解除&目が輝いてる

亜由美「好きなんですネ、オーズ」

純「むしろ仮面ライダーその物が好きなんです！」

加奈「熱いですね……」

亜由美「あ、それとみんなの分のケーキもとってあるから食べてくださいね」

歩「ありがとね、亜由美」

亜由美「え？あ…ウ、ウン。どういたしまして……」 顔赤い
歩「？」

加奈・皐月・冬花（ニヤニヤ）。。（）

オーズ第八話の終盤頃……

帝「ん…？あー気を失ってたみたいだな……」

好太郎「グウ…どこだここは……？」

歩「あ、起きたみたいだね」

加奈「じゃあキリが良いしこの辺までにしときましようか」 D V

D 停止させた

純「あ、はい。そうですね（もう少し見ときたかったなあ…）」

帝「ん？何だかもう少し見てみたかったって顔してるな……良かったっ

たら貸すぞ？返すときは郵送してくれればいいし」

純「え！ホントですか！？ありがとうございます！！」

冬花「でも住んでる世界が違うのに、どうやって郵送するんですか？」

帝「細かい事は気にするな！」 アンク風

歩「ま、それも後書きクオリティってヤツだよ」

冬花「どこまで万能なんですかそれ！？」

皐月「お〜い、好太郎お〜」

好太郎「ん？何だ皐月…？」

皐月「ホレ……」 ケーキ差し出した

好太郎「……は？」

皐月「いいから受け取れよ！お前の分アタシが食べちまったから、

代わりにアタシの分やるつつつてんだよ！よく考えたら二個もいらねえし！」

亜由美（皇月が好太郎さんにケーキあげてる…！）

加奈（デレた！皇月がデレた！！）

冬花（受け取って下さい好太郎さん…！！）

好太郎「……何か裏があるんじゃないだろうな？」

皇月「オラアツ！！」 ケーキ好太郎の顔面に投げた

好太郎「又グオツ！？」

皇月「人が折角ご厚意でやってんだから、それを無碍にすんなバカ！！」 家から勢いよく出てった

亜由美・加奈・冬花「ああゝあ……」

好太郎「な、何だっただんだ今は……」 顔クリームまみれ

帝「取り敢えずこれで拭いとけ」 台所の布巾投げ渡した

好太郎「ああ、悪いな」

歩「どうしちゃったんだらうね皇月さん？」

純「二人とも鈍感ですね……」

帝「そうだな」

メカ犬（それはマスターにも言える事なのだがな……）

加奈「それにしても、ここまでの文字数が約1万3千字……そろそろお開きにした方がよさそうね」

冬花「お昼に始めたのにもう外暗いですしね」

亜由美「とりあえず好太郎さん、皇月迎えに行ってくださいませんか？

一人じゃ危ないでしょうし」

好太郎「は？何故俺が……」

加奈「いいから行って来て下さい！！」

好太郎「おい、ちょ、押すな！それに何故亜由美と冬香まで押す！！？」

冬花「恋する乙女はデリケートなんです!!」

好太郎「何だそれ!?!どう言う意味だ!?!」

帝「さつさと行つて来おおい!!」 好太郎外へ投げ飛ばした

好太郎「ウオオ!?!」

メカ犬「ナイスだ、帝殿」

純「後は上手く行くかな」

歩「?!!?!」

亜由美（歩つて、ホントに鈍い……）

20分後……

皐月「ただいまあゝ」

好太郎「つ、連れ戻したぞ……」 レジ袋持つてる

歩「お疲れ様」

加奈「何か疲れてますね、好太郎さん」

冬花「好太郎さん、何ですかその袋?」

好太郎「俺の分のケーキ……だそうだ……」

皐月「コイツ、体質のせいでコンビニにも入れないからな。だから代わりに買つて来てやったんだよ。コイツのケーキ、無駄にしちまつたしな」

歩「優しいね皐月さん」

皐月「乙女はみんな優しいんだぜ」

好太郎「いや、その口調で乙女はどう……」

皐月「そおりゃあ!?!」 後ろ回し蹴り

好太郎「グオツ!?!」

亜由美・加奈・冬花（ツンデレだなあゝ）

帝「さて、これで全員戻って来た事だし、今度こそ本当にお開きとするか」

歩「そうだね。そして、G3-X先生、OOOTGLSTSTPB先生、キャラの貸し出しありがとうございました」

メカ犬『我々も実に充実させてもらったぞ』

純「俺はずっとツッコミっぱなしだったけどな……」

歩「でも途中から完全に実況しちゃってたよね」

純「う…！だって、あそこまで熱いバトルを繰り広げられるともう……」

帝「俺も楽しめたぜ好太郎。ハンデ付きだったとはいえ、まさか元帝王である俺にあそこまで食い下がるとはな」

好太郎「……次は負けん」

加奈「私達も楽しかったわね」

冬花「はい！また一緒にお話ししたいですね！」

亜由美「それに、皐月も好太郎さんと仲良くできそうだし」

皐月「いやしねえよ！お前こそどっちのフラグ立てるか考えとけよ！！」

亜由美「それは絶対にありません！」

歩「フラグ？」

亜由美「歩は気にしないでいいから！！」

メカ犬『それでは「水音ラル誕生祭」、これにて閉幕！』

加奈「これからもこの作品と、今回のゲストの作品をどうぞよろしくお願いします！！」

皐月「それじゃあ次回の更新日、8月18日にまた会おうぜ！」

歩「それでは皆さん、また……」

帝「また次回な!!」

歩「ッ!? (。°。°;)」

純「何故か帝さんが閉めた!?!」

冬花「何出番取っちゃってるんですか帝さん!?!」

好太郎「そしてまたこのパターンか!?!」

メカ犬「歩殿もああいう顔が出来るのだな……」

第三十一話：天を統べるは灰翼の帝王（前書き）

何でここに来て新キャラ増えたんだろ…？（´、`、;）

因みに前回出た二階堂さんは誰のリイマジかすぐに分かったと思いますけど、ここで問題！

今回出て来た新キャラは一体誰のリイマジでしょう？

分かったアナタはファイズ通！！d（）

それでは本編スタートオ！！（・・）

第三十一話：天を統べるは灰翼の帝王

「……………い……………おき……………ゆむ」

歩は何かと呼ばれた様な気がして、閉じた瞼を開いた。すると灰色空間が視界一面に広がっていた。

これは次元断裂空間の中に似ていたが、それでいてまったく別の空間の様だった。

今自分が立っている状態なのか寝ている状態なのかも分からず、ただ身体の感覚が酷く鈍くて、起きたばかりの身体を上手く動かせない時の様な倦怠感で身体の自由が利かない。まあ実際今起きたばかりなのだが……………。

「やっと起きたか、須藤歩」

声を掛けられた目の前を見ると、そこには一人の男が立っていた。

この男は見た事はないがよく知っている。2年前のあの日、自分にディージェントとしての力と使命を与えた張本人だからだ。そして、この男の名は……………

「門矢…土……………？確か、あの時消えたんじゃない……………」

「ああ、確かに俺はあの時消えたさ。だが外から思わぬ介入を受けてな…その影響で残りカスだった俺の人格プログラムの欠片がお前ところとして話せるくらいに修復されたんだよ。最も、こうして話せるのもお前の潜在意識の中だけの上に、結構疲れるけどな」

「……………成程ね、ディージェントのスペックが上がったのはそれが原因だね？でも何でその情報が送られて来なかったんだい？今までそ

んな事なかった筈なのに……」

「お前が知る必要がないからな。それに、そんな些細な事なんてどうだって良いだろ」

「どうでも良くない」

士にとってはそうでも、歩にとってはそうではない。

ディージェントのスペックは今のままでも歩にとって十分だと言うのに、これ以上強くなるうだなんて一切思わない。

確かにライダーサークルにはディージェントより強いライダーだっているだろう。リュウガがその良い例だ。

アレは神童が細工して強化した物だったとはいえ、ディージェントを劣勢に追い込んだほどだ。

今後もそんなライダー達が立ちはだかる可能性だってないわけではないのだ。

いずれは強化が必要になって来るだろうが、自分には必要ない。いや、欲しくないと言った方が正しいだろう。

歩にとってこの力は十分に過ぎた物だ。無駄な力は破滅に追い込む……それは歩の世界で起こった経験からだ。

こんな力……自分が死ぬ事に臆病でなければ、とうの昔に捨てている。

その思考を読んだのか、士は溜め息を吐いて呆れた様な口調で話しかけて来た。

「ハア……お前なあ、ライダーサークルはお前が今まで渡って来た世界でも最も強大な力を持った奴等が集う領域なんだぞ。そんな事言ったらそのうち死ぬぞ」

「そのうち死ぬ……か……以前はそんな事も考えてたかな」

「ん？」

歩の呟きに土が顔を顰めながらその後続く言葉を待った。
やがて一拍置いて歩は言葉を紡いだ。

「僕は本当は死にたくない…でも僕が本当に死ぬんだったらこれが自分の運命だったと割り切っていた…。ライダーサークルに来る前はそんな風に考えてたけど、今は違う…。Dプロジェクトを完遂させるまで僕は絶対に死なない。もし僕が死ねば、亜由美がこの責を担う事になる。そんな事には絶対にさせない」

「……おい、じゃあなんでアイツをここへ連れて来たんだ？アイツはお前にとってただの保険じゃなかったのか？」

「最初はそう思ってたよ。でも、彼女としばらく行動しているうちに分かった…彼女は僕とは違って普通の人間なんだ。彼女にこの力を与えれば、彼女の今後の人生を大きく狂わせてしまう…それだけは絶対にさせない」

“彼女は普通の人間”…これは歩と亜由美の決定的な違いだ。

歩には世界を歪めるほどの力があるが、彼女にはそれが全くない。今でこそ亜由美にも次元移動能力が使えるようになってるが、自分がデージエントと接触しなければ、そんな力に目覚める事もなかっただろう。

彼女にこの力を与える事はいきなり平穏な世界から危険な場所へと放り込むのと同じ事だ。そんな目には会わせたくなかった。

彼女を自分の二の舞にしてはいけない…それが今の歩の最優先事項だ。

それを聞いた土は苦笑いを浮かべて心底呆れたと言った口調で挑発的にその感想を述べた。

「まったく…随分と強情だな」

「君に言われる筋合いはないよ」

士の皮肉に軽く反論すると、彼はムスツと不貞腐れた顔になり「チツ、何だよ結構感情あるじゃねえか」と何やらブツブツとぼやき始めた。

やがて文句を一通り吐き出してスッキリしたのか、気を取り直して何時もの自信に満ちた挑発的な表情に戻ると、彼にとっての本題を口にした。

「まあいい、俺が態々お前と話そうと思ったのはな、一つ聞いておきたい事があつたからだ」

「聞いておきたい事？」

「ああ、お前：本当にディケイドの二の舞を踏む気か？」

“ディケイドの二の舞”…その言葉は渡から言われたのと合わせてこれで二度目だ。

しかし、一体何の事かいまいち分からず首を傾げていると、土は再び溜め息を吐いて分かり易く説明を始めた。

「つまり、だ……お前は本当に『歪み』…イレギュラーを消すために旅を続けるのかつて事だよ」

その説明を聞いて矛盾を感じた。

Dプロジェクトはあくまで「歪み」を修正して九つの世界をそれぞれで統一させる事が目的の筈だ。

それ以外に何かしなければならぬ事があるのだろうか？少なくともそんな情報はない。

「ハア…まったく、ここにオリジナルがいたらお前本当に始末されてたぞ……アイツらがライダーサークルのリイマジネーションに

「干渉できない事に感謝してくんだな」

士は深く溜め息を吐きながら、歩の反応に嘆いた。

歩にとって何故士がそのような反応をするのか分からなかった。

それに、オリジナルが自分を始末するという事はつまり、自分の行動はオリジナルにとって不利益になると言う事になる。

以前神童も世界の復活がどのと言っていたし、やはりDプロジェクトには何か別の目的があるのだろうか？

「何の事が分からないけど、今のやり方じゃあダメって事かな？」

「いや、別に俺はお前のやり方に口をはさむつもりはない、お前の好きにしろ。お前は一体、どんな結末を迎えるんだろうな…それまではここから見せてもらうぜ、須藤歩……」

そう言うと士は、灰色の空間に溶け込むようにその姿を消した。

歩はそれを見届けてからある事を土に聞くのを忘れていた事に気が付いた。

「そう言えば、“思わぬ介入”って何の事だったんだろ…？ディージェクトの事かな？」

頭をガリガリ掻きながら推測してみるが、どうにもピンと来ない。

あまり頭を掻き過ぎるとハゲると亜由美に言われた（というか思考を読んだ）ので、今度からはあまり掻かないようにしようと思っていたのだが、ここは自分の潜在意識…つまり夢の中の様な物だ。それだったら別に強く掻いても問題はあまい。

「……ま、知る必要はなさそうだし、まずは目を覚まそうかな」

歩はそう結論付けると潜在意識から出るために、再び目を閉じて意

識を遠ざけていった。

『フム…中々しぶといな、あの古き人類は……』

ノアオルフェノクは床に倒れ伏した状態で、キヤタピラーオルフェノクから送られて来る情報に、そう感嘆した。

キヤタピラーオルフェノクをある程度創り出し、それらを操って街へ侵攻させたのだが、そのうちの数体が赤黒く刺々しい鎧を纏った何かによって一瞬で倒されてしまった。

この器となった男の記憶によれば、これはデージェクトとか言う異世界のライダーズギアと呼ばれる鎧らしいが、どんなに足掻こうとキヤタピラーオルフェノクは自分の身体の一部から創り出した分身であり、不死身の雑兵でもある。

例え倒されて灰に還ったとしても、自分の意思で再生させる事が出来るのだ。

その内向こうの体力の限界が来て、雑兵達に無残に殺されることになる事だろう。

しかし、ノアオルフェノクには納得できない事もあった。それは今のこの状態であるからこそ言える事、それは……

『退屈だ……折角器を手に入れて動けるようになったかと思えば……』

章治が中から抑え込んで動けないため退屈なのだ。

一応暇つぶしに章治に話しかけても見たが、自分の身体を抑え込むのに集中しているようで一切返事が返ってこない。

明日になれば器の男も抑える力が弱くなってこちらも自由に動けるようになるだろうが、駒を動かすだけでは流石に暇すぎる。何かないものか……。

「だったら、俺が動ける様にしてやるうか？」

突然頭上から声を掛けられ、頭を何とか持ち上げてその声の主を探すと、目の前に黒い革ジャンを身に着けた男が立っていた。

その男は一見すればただの古き人類にしか見えないが、何処か異端な雰囲気醸し出している。

かと言って、オルフェノクとも違う……。一体何者なのだろうか？

「……何だお前は？」

「バケモンに名乗る名は持ち合わせちゃいねえよ。それよりサツサと答えやがれ。もし動きてえってんなら俺が動かせるようにできるついでに良いモンをやるよ」

そう言いながら先程までここにいた一行が包まれて消えた時と同じ現象である灰色の小さな霧が目の前に現れ、それが消えるとそこには銀色のアタッシュケースが置かれていた。

そしてそのアタッシュケースにはスマートブレインのロゴマークが入っている。

という事はこれの中身はライダーズギアなのだろう。

「フム、ライダーズギアか…悪いがそれならこちらも持つてるし、私に見合つとは到底思えんがな」

ノアオルフェノクの力はライダーズギアをとうに超えている。それは器となつた男の記憶を通して、デルタの性能を知っているからこそ言えることだ。

態々それを付けて枷を嵌める理由なんてないだろう。

その言葉を聞いた男は凶悪な笑みを浮かべ、口を開いた。

「なあに、それなら気にする必要はねえよ。何せこれは『帝王のベルト』だ。しかも俺が直々に強化させてもらった物だ。どうだ、欲しくねえのか？」

帝王のベルト…その響きに何とも知れない昂揚感を覚えた。

帝王の名を冠するならば、それはまさしくオルフェノクの王である自分にこそ相応しい物ではないか。

しかもこの男の話だと、その力はデルタを優に超えているとの事だ。そんな力…欲しがらなくてどうする？

力はあればあるほどいい。

力があれば、その者は更なる極みに立つ事が出来るのだ。

ましてや自分は王だ。その力を使ってこの世界を完全に統一する事がこそが自らに与えられた使命だ。

そうとなれば答えは一つだろう。

『フフフ…旧人類がよく言ってくれる……。その力、私に寄越せ。それを使って私がこの世界をより良い物にしてやる』

「ハッ！流石バケモンだな、その欲深さには恐れ入るぜ！」

男がそう言った次の瞬間、ノアオルフェノクの全身を灰色の靄が包み、それが消えると同時に身体の自由が効くようになっていた。

完全に章治の気配が消えているようだが、また何らかの切っ掛けがない限り再び表に出て来る事はないだろう。

その身を起こすと、今度は目の前に置かれたアタツシユケースに軽く触れ、そのケースだけを灰化させた。

この能力は今まで器だった男が自分への生贄として捧げたドラゴンオルフェノクの能力だ。

触れた対象を灰化させる事が可能で、器となった男も倒すのには苦労したらしい。

その能力によつて元がケースだった灰の山に埋もれたライダーズギアを取り上げた。

使い方は章治の記憶を辿れば分かる。まずはドライバーを腰に巻き、続いて白に青いラインの入った携帯電話を手に取り開く。

そしてそのディスプレイに映っている変身コードである「315」を入力して閉じた。

「スタンディング・バイ……」

「そいつの性能を試すんだつたら今テメエの駒を殺つてる赤黒いヤツと、そいつに似た青黒いヤツがオススメだ。そいつらはテメエの望みを一番壊そうとしているヤツだ。力も試せてついでに邪魔なヤツも消せて一石二鳥だ。ま、そいつらをどうするかはお前次第だな」

電子音声が鳴り、それをドライバーにセットしようとした所でその助言をしている男の方を振り向いた。

しかし、そこには誰もおらず、ただ夜の更けた外の景色が扉のないむき出しの穴から見えているだけだった。

『……フム、まあいい。今の男が何者であろうが、今は新たな世界への改変を進めなくてはな…変身』

「コンプリート」

携帯電話…サイガフォンをドライバーにセットすると、青いフォトンストリームのラインが身体を幾何学を描きながら包み込み、身体全体が発光したかと思うと、そこには一つの白い影が立っていた。

白いスーツと銀色の装甲に身を包み、サイガドライバーから伸びた青いラインが四肢と装甲に伸び、胸部装甲には斜めになったギリシヤ文字の（プサイ）の形に走っている。

そしてその頭部は紫系の巨大な一つだけの複眼に胸部と同じくを模したラインが埋め込めれ、胴体と同色のマスクで顔をスッポリと覆っている。

これこそがオーガと対を成す「帝王のベルト」…サイガの姿だ。

「素晴らしい…！これこそ“王”である私にこそ相応しい力だ…！
！」

サイガは身体の調子確かめる様に両手を握りしめ、その身体全体に漲る力に歓喜の声を漏らすと、悠々とした足取りで外に出た。

外は丁度満月が昇っており、爛々と煌めいている。

やがてこの世界もあの月のように美しく生まれ変わるだろう…この私の手によって……。

「さて、まずは先程の男が言っていたヤツを試しに消してみるか…

…」

そう言っただけサイガは力を込める様に前屈みに構えると、その背中から巨大な蝶の翅を生やした。

本来なら、ライダーズギアで変身している間は、内側からフィットする形で抑え込んでいるためそう言った外側へと出す能力は使えなくなる筈なのだが、神童が「突起した部分を外へ転移させる」補正を行った為、その制限をなくし、翅を外へ展開させる事が出来たのだ。

その証拠として翅と背中の中に僅かに間隔が開いており、翅の根元に小さな次元断裂が展開されている。

そんな故など知らずにサイガは月の煌めく夜空へと飛び立っていった。

歩を仮眠室へ寝かせた後、美玖は章治に関する一部始終を仮眠室に設けられた対談席に輪を囲んで座って正幸達に話していた。

その内容に社員達は驚愕するが、正幸だけはどこか納得した様な神妙な顔で美玖の話聞いていた。

「驚かないのですね……」

「まあね、さつき章治の極秘ファイルを見つけてね…そこにその事が書かれてた。ホンツト、何で教えてくれなかったんだろっね…あのバカ章治は……」

「全くですね…早くあの人を殴り飛ばしたいですよ……」

正幸に続く様に言葉を紡いだのは先程まで歩を担いでいたライオトルーパーを装着していた青年…かけしゅんたろう笥筒太郎だ。

落ち着いた飾り気のない髪に、黒縁眼鏡を掛けているため、大人し

そうで知的な印象を与えているのだが、その見た目とは裏腹にその言葉には一々刺があり、稀に章治がサボっている所を見かけては、毒舌を投げかけた後に何らかの折檻を行う程の猛者だ。

“見かけで人を判断してはいけない”という言葉はまさしく彼のためにある様なものだろう。

「何だか僕にとって不名誉な事を思ってるみたいですけど、それくらいじゃ僕は怒りませんよ。僕の心はクリーニングに出した洗濯物の如く真っ白ですからね」

その爽やかな笑みとは裏腹に、背後から何やらドス黒いオーラのような物が見え、正幸と美玖はその言葉に一瞬ビクツと肩を震わせたがすぐに何時もの平静さを取り戻す。

そうしないと考えている事が当たっていると云っている様な物だからだ。

腹黒さやサディスティック的な意味では算こそがスマートブレイン最強だったりする。

「で、どうすんだよ社長さん。美玖さんの話だとそれほど時間が残されてねえぞ」

しかしその場の空気を何のそのと言った感じで二階堂が煙草を口に啜えながら正幸に指示を求めて来た。

確かに、この後どうするかが問題だ。

章治の中にオルフェノクの“王”がいたと言っるのはこの真相を知るまでは喜ばしい事ではあったが、章治の身体を乗っ取り、あまつさえ世界を自分の思い通りにしようとしているなれば話は別だ。

その“王”は早急に排除しなければならぬだろう。人間とオルフ

エノクとの共存のためにも……。

「しかし、一体どうやって倒すんですか？ 奴を消せば、それと同時に主任も消す事になります。そうなるともう主任を助ける事が……」
「諦めんじゃねえ！ 例え主任がそれを望んでたとしても俺はゼツテエに主任を消させねえ！ じゃねえと寂しくなるからな！」

「……確かに、イジリ相手がいなくなるのは退屈ですからね」

算の弱気な発言に二階堂が叱咤すると、算が考えを改めつつ何やら恐ろしい事も口に出している。

正幸は何とか出来ないものかとイスを回そうとするが、ここの椅子は生憎四脚椅子だ。回そうにも回せない。

何か代用できる物はないかとあたりを見渡すと、二段ベッドの一段目で眠っている歩の姿が目に入った。

この青年はイレギュラーを消すためにここへ来たらしいが、未だ謎の部分が多い。

特にあのライダーシステム…アレは見た所フォトンブラッドとは別のエネルギーを使っている様だったが、それが一体何なのか皆目見当がつかない。

「彼は一体何者なんだろうね……」

「それは私にも分かりません。ですが、信用に足る人物だと思えますよ」

「そうだな、何せ俺等を助けてくれたもんな」

「それだけで判断するのもどうかと思いますけど、まあ向こうにこちらを助けるメリットはないですからね」

そうしてしばらくその青年を見ていると、その手がピクリと動いた。それには全員が軽い驚きを示し、歩に駆け寄った。

やがてその目を開いて、光の宿っていない瞳を露わにした。

「気が付いたみたいだね」

「ちゅうか、起きるの早過ぎじゃね？少なくとも一晩中は眠ってる
と思っただけどなあ……………」

「意外とタフですね……………」

「ツ！！？」

歩が目を覚まして自分達の姿を確認した瞬間、突如ベッドから飛び
起きて警戒心に満ちた目で睨んで来た。

「おい、何そんなにビビってんだよ？」

「あ、僕達の顔知らないからじゃないかな？変身してたりしてたか
らさ」

二階堂が突然謂れのない警戒をされている事に疑問を抱くが、正幸
が顔を直接会わせていなかった事を思い出してそう結論を出した。
その声を聞いた歩は、すぐに平静さを取り戻し、申し訳なさそうに
虚ろな目で謝った。

「すみません…白衣の人には少し嫌な思い出がありました……………」

「別に気にする必要はないよ。そういう目で見られるの俺達慣れて
るからさ」

「いや、慣れるのもどうかと思いますよ社長……………」

歩の正直な謝罪に正幸が軽快にそう気にした様子もなく返すと、美
玖がその微妙にズレた正幸の説得に冷静にツッコミを入れた。

歩の警戒が解けて一段落した所で、正幸は仕事の顔になり、今後の
アドバイスを歩に求めた。

その内容は当然、章治をどうやって助けるかだ。

「それで、章治を“王”から解放するにはどうすればいい？何か方法はあるのかい？」

「……ハッキリ言いますと、僕では章治さんを助ける事はできません」

その答えに正幸を除いた三人は顔を下へ向けた。

やはり助ける事が出来ないのか……。そう言った悲壮的な表情だ。しかし、正幸は別の事に頭が行った。

「ふ〜ん……つまり、まだ方法はあると言う事だね」

「はい。そう言う事です」

「え……？」

美玖達三人はその正幸の言葉に驚愕の表情を作りながら顔を上げた。やはりこの三人は歩の言葉を理解していない様だ。そこで正幸は分かり易く説明を始めた。

「社長……それってどういう……」

「彼はね、あくまで“自分では章治を助ける事はできない”って言ったんだよ。つまり、彼以外なら章治を助ける事が出来るってわけだよ。そう言う事でしょ？」

正幸はそう言いながら歩に振り返ると、彼は無言で首を縦に振った。

「だあー！それだったら分かり易く言えっちゅうの！ー」

「貴方つて結構、誤解とか招かれてません？」

「一応自分なりに分かり易く言ったつもりなんですけど……」

「それで、誰だったら助けられるんだ？」

二階堂と筧に突っ掛かっている歩に美玖が尋ねると、歩は一拍置いて答えた。

「それは、僕と同じようにここに来ている僕のライダーズギアと同系統のドライバーを持っている人です。そちらの女性でしたら一度会ってるのでは？」

「と言うと、あのロングコートの男か……アイツもお前の仲間か？」仲間と言って良いのか微妙なところですけど……ある意味そうとも言えますね」

美玖の言葉にひどく曖昧に答えながら歩はポリポリと頭を掻いた。

まあ実際さつきまで互いの考えのすれ違いで戦っていたのだから歩がそう答えて当然だろう。

そして何より肝心な事をまだ好太郎に言えていないのだ。デジエクトに備えられている能力を応用すれば、章治を殺さずに「歪み」だけを消す事も可能だと言う事を……。

最初はそれを彼に頼もうと思っていたのだが、章治をどうするかで戦闘になってしまい、結局言えず仕舞いだったのだ。

そう言う意味では筧の言う通り、誤解を招かれやすい性格と言えるだろう。

「じゃあその人は今どこに？」

「今僕の連れが安全な場所へ………」

「ん？どした？」

歩は言い切る前にある気配に気づき、座っていたベットから立ち上がって明後日の方向を睨んだ。

それに疑問を持った二階堂が訊ねると、歩は淡々とした口調でボソ

りと呟いた。

「どうやら急がないといけなみたいですね……」

「一体どうしたんだい？」

「デージェクト…さっき話してた人が変身してます。恐らく“王”と戦闘をしているようですので早く行かないと……」

「何でそんなこと分かるんだよ？」

「僕がそう言う体質だからです」

歩は二階堂の疑問に簡潔に答えると、仮眠室から出る為にドアまで歩いて行く。

しかし、その扉の前で美玖が立ち止まり、歩を鋭い目つきで睨んだ。

「……何でしょうか？」

歩が抑揚のない口調でそう訊ねると、美玖はその固く閉ざした口を開いた。

「お前…まさか一人でそこへ行こうとしてるんじゃないだろうな？」

「そのつもりです。デージェクトもイレギュラーも止められるのは僕だけですから」

「そうか…じゃあちよつと歯を食いしばれ」

「……？ツツ！？」

美玖は歩がその言葉を理解する時間も待たずに殴り飛ばした。それに二階堂と算は驚くが、正幸は特に驚いた様子もなく静観している。殴り飛ばされた歩は床に倒れた。

「お、おい大丈夫かよ！？」

「一体何やらかしたんですか？」

「いえ、特に思い当たる事は……」

二階堂と算に助け起こされながら立った歩はもう一度美玖を見た。その顔はやはり険しく、鋭い目つきで歩を睨んでいるだけだ。

正幸はその理由を知っている。

何故なら美玖だけではなく正幸も彼女と同じ考えだからだ。

「章治は私達の大事な仲間だ。貴様の様な余所者よそもに全て任せるわけにはいかないからな」

「確かに、これが君の役目なのかもしれないけど、これは俺達の問題でもある。俺達も付いて行くよ」

美玖に続く形で、正幸は椅子から腰を上げながら歩に言い放った。

歩の言う通りこれは彼でなければ解決できない事なのだろう。しかし、その全てを彼一人に任せて自分達は指を啜くえて見ている事など出来ない。

章治は必ず自分達で連れ戻すと決めたのだ。ここで一人しゃしゃり出させるわけにはいかない。

「……分かりました。でもそちらのファイズの女性は大丈夫なんですか？」

「ッ！？君、まさか知って……」

「ハイ、少し専門的な話になるんですけど、この世界は本来彼女が『基点』…謂わば核なんです。でもこの世界の基点は章治さんになっつていて、彼が消えた今でも『基点』が彼女に入れ代わらず、未だに『基点』が存在しない状態になっつてるんです。その理由としては二つあります」

そう言いながら歩は指を二本立てながらその後を続けた。

「一つはまだ章治さんが完全に消えていない事。もし完全に消えてたら彼女がこの世界の『基点』に一時的にでもなっている筈なんですけど、その気配は一切感じられません」

「ちゆう事は、主任はまだ生きてるって事か？」

「そう言う事です。そしてもう一つが……」

二階堂の言葉に簡単に相槌を打ちながら、そこで指を一本追って人差し指だけを立てると、更に続けた。

「この世界の本来の『基点』がいなくなるという事象がこの世界で確定している事です」

「それってつまり……」

「おい、一体何の話をしているんだ？」

「……………」

「正幸、何か言ったらどう……………ッ!？」

何の事だか分からない美玖は、正幸に問い掛けるが、彼は顔を伏せて答えようとしない。

その微妙な反応に苛立ちを感じながら、正幸に近づいて方を掛けた瞬間に気が付いた。

美玖の右手からわずかに灰が漏れ出ていたのだ。

灰の零れはすぐに収まったが、美玖はその手を目を見開いて凝視していた。

彼女の様子を見た歩は、頭をポリポリ掻きながら言い辛そうに話した。

「貴女の寿命はもうあと僅かしかないんです……。もし今のまま戦闘に出ようとすれば、貴女の寿命を更に縮める事になるんです……。そんな人を、連れて行くわけにはいきません」

「クツ！貴様あー！！」

「美玖！落ち着いて！！」

美玖は歩を忌々しげに睨み付けると、正幸の言葉に耳も貸さず歩の胸倉を掴んで焦燥感に駆られた口調で捲し立てた。

「寿命が何だ！私はアイツを助ける為だったらこの命、全部神にだろつが悪魔にだろつがくれてやってもいい！！それくらいの事をしないと、章治を怨んでいたこの半年間の贖罪が出来ないんだ！だから連れてけ！！」

「……………」

歩はその決意に燃える美玖の瞳を見た。

彼女には確かに強い覚悟がある。しかし今の彼女を連れて行くのは気が引けた。

何故なら罪滅ぼしのためだけに戦おうとしているからだ。

それはあくまで彼女の自己満足でしかない。

その自己満足の所為で、誰かが…章治が悲しむと言う事を分かっているのだ。

彼の目的は恐らく彼女のためだろう。

オリジナルの情報によれば、オルフェノクの“王”は選んだオルフェノクに不老不死の力を与えると聞く。

章治はその特性を利用して彼女の寿命をなくそうとしたのだろう。

自分も以前は、今の彼女に似た様な考え方だった。

自分はだれにも必要とされていない…ただ使命に順じて動いているだけだ……。

だが、亜由美と会ってからはその考え方が改められた。

あの時、亜由美は本気で自分を叱ってくれた、思ってくれた……。そんな人を悲しませるわけにはいかない。歩にはそう思えたのだ。

ましてや、彼女を罪滅ぼしのためだけに戦わせるわけにはいかないし、そして何より、死ぬつもりで戦おうとしている。

彼女には章治が必要だが、それと同時に章治にも彼女は必要なのだ。

彼の想いを踏み躪るわけにはいかない。そう思った歩は多少酷ではあるが、無理矢理にでもここから出るため次元断裂の中に逃げようとした。

しかし、そこで正幸が美玖の手を掴んで自分から引き離れた。

「待つてよ美玖……」

「離せ正幸！早く行かないと章治が……！」

「章治の事が心配なのは分かるけど、今は君自身の事を大事にしてほしい。それは章治やここにいる全員が思ってる事だよ。彼だって例外じゃない」

「…ッ!？」

「……………」

正幸のその言葉に、美玖は言葉を詰まらせ、歩も正幸の言葉に軽く目を見開いていたが、すぐに何時もの虚ろな目に戻り、一拍置いて抑揚のない口調ではあるものの正幸に話しかけた。

「……良く解りましたね」

「まあね。伊達にカリスマ社長はやってないよ」

「それ、自分で言う事ですか？」

歩が自分の考えを理解した正幸に軽く驚いていると、正幸が自画自賛しだし、算がそれに冷静にツツコミを入れた。

正幸はそれを軽く流すと、歩に話を切り出した。

「彼女には俺が付いてるからさ、君の邪魔にだけはならない様にするから連れてつてくれないかな？勿論、君が望むなら何らかのお礼はするつもりだよ。だから頼む、章治のところに案内してくれ」

正幸は頭を下げて歩に頼み込んで来た。

その姿を見て美玖達は正幸が本気で頼んでいると分かった。

正幸は立場上、人に頭を下げると言う事は滅多にしない。

もしするとすれば、それは余程の緊急事態か謝る時くらいだ。

歩にもその覚悟が伝わったのか、ある一つの条件を出して承諾する事にした。

「分かりました。でもその代わりに、そちらのファイズの人……」

「美玖だ」

散々貴女だのファイズの人などと呼ばれてた美玖は、そこでようやく歩に自己紹介をした。

ちゃんと名乗っておかないと、会話の流れ的にずっとこのままだっただろうし……。

「……美玖さんがあまり無理しない様にしてください。それと、美玖さんは知っていると違いますけど、あの灰色の空間を通過って一瞬で移動できるので、準備ができ次第何時でも行けますよ」

「分かった、それじゃあ早速準備するから少し待っていてくれ。二階

堂と寛はここで待機してくれ。俺と美玖の二人で行く」

「あいよ」

「了解しました」

正幸の言葉に歩は頷くと、ベッドに腰掛けて正幸達が仮眠室から出て行くのを見送りながら、好太郎にどう話を切り出すか思考を巡らした。

第三十一話・天を統べるは灰翼の帝王（後書き）

今回のあとがきラジオは前回の「水音ラル誕生祭」の繰り越しです
なので休みさせて頂きますm（　　）m
アレはホントに疲れました……（　　、　；）

とか何とか言ってますけど、実は今回の文字数…1万1千字超えっ
ちやってるんですよ。

（；　　。　　）な、なんだってー！！！！

いやね、何とか遅れを取り戻そうと踏ん張ったらいつの間にかこん
な文字数になってたんですよ。

増えすぎたんで二つに分けようかとも思ってたんですけど、それだ
と何時もより短くなってしまつので断念したんですよハイ。

人間、踏ん張るとスゴイですね（　　、　＊　　）

ま、それはそうと次回の仮面ライダーディージェントもお楽しみに

（　　）　　（　　）ノシ

第三十二話：拒絶者VS天空の帝王（前書き）

ようやくファイズ編終盤まで辿り着いたかあ…長かったあ、龍騎編の倍くらい長さ行っちゃってるよこれ… C = (、、;))
しかも今回のあとがきラジオがサイドストーリーを書いたがために異常に長い。

ちなみに内容は前回の出張版の裏話を話そうかと思しますので、2828したい人は是非とも見といてくださいねd)。。()

第三十二話：拒絶者VS天空の帝王

デিজエクトは無尽蔵に湧き出て来るキャタピラーオルフェノクに孤軍奮闘していた。

迫りくるその内の一体を右腕に付いたブレードでなぎ払い、その隙を突いて別の個体が殴りかかって来るが、デিজエクトの装甲はDシリーズの中で比較的硬い方なので対して効いた素振りもなく、その個体を殴り飛ばした。

デিজエクトの攻撃を受けた二体はしばらくもがき苦しんだかと思うと、次の瞬間には灰化して風に晒されて消える。

しかしそれも束の間の出来事で、風に舞った灰は集まって二つの塊を作ると、その姿を再びキャタピラーオルフェノクへと変貌させた。その復元中もキャタピラーオルフェノクの群れがデিজエクトに襲い掛かっており、その再生を阻止する事が出来ずに、ただ視界の端に留めておく事がやっとだった。

一体一体の強さは大した事はないものの、その永遠に続くかのような修羅地獄に徐々に体力を奪われていた。

「グウウウ…！クソツ、キリがない…！！」

ここで「リジエクシヨン」のカードを使ってしまえば楽にこの群れを除ける事が出来るだろうが、そうすれば自分以外を標的に変える可能性が高い。

それこそ街中にキャタピラーオルフェノク達が散らばってしまい、デিজエクト一人では対処しきれない。

こうなれば、あの奥の手を使いたいところだが、それには一度変身

を解除しなければならぬ上に、かなりの怒りの感情を有する。今の現状ではとてもそんな気にはなれないし、何より無差別に攻撃してしまう可能性だってある。そんな事をしては誰かを傷つけてしまう本当の怪物になってしまう。それだけは絶対に避けたい。

(チィッ! どうすれば……ん?)

心の中で悪態を吐いていると、周囲に変化が起き始めた。キヤタピラーオルフェノクが徐々に減っているのだ。

それも自分が攻撃しているしていないに関わらずその身体を灰へと還している。

やがて全てのキヤタピラーオルフェノクが灰化し、そこにはディージェクトと、灰の絨毯しか残されていなかった。

(一体何が起こって……ッ!? この気配、まさか……!?)

先ほどからキヤタピラーオルフェノクから発せられていた嫌な気配を一つに凝縮したかの様な、色で表せば“ドス黒い”といった表現がシックリくる気配が上空から感じ取ったディージェクトは空を見上げると、一つの灰色の点がこちらに迫ってるのを視認した。

ライダーの視力は人間のそれを優に超えている。

故にそれが一体何なのかこの離れた距離からでも分かる。

白い身体から灰色の翼を生やし、こちらへ急接近しているこの世界における二人の最強のライダーの内の一人……

「馬鹿な…サイガだと……?」

「ん? その声…先程の古き人類か……。暫くぶりだな」

仮面ライダーサイガ……オーガを「大地の帝王」と評すなら、こちらは「天空の帝王」と言えるだろう。
しかし今や「歪み」としてその姿を顕現しているだけの、大量殺戮兵器ではないだろう。

サイガは満月を背に灰色の蝶の翅を羽ばたかせ優雅に空中に佇みながらあのノアオルフェノクの中性的な声で仰々しくディジエクトに声を掛けた。

「そのベルトは一体どうした……!?」

「これか？良く分からぬが、妙な男から譲り受けた物だ。この力は素晴らしいな……まさに“王”である私にこそ相応しい……」

相応しい？そんなわけないだろ、あれは最早害しか及ばさないただの世界を破壊する爆弾でしかない。

そんな力をこの「歪み」は手に入れてしまったのだ。アレが人類を滅ぼされるタイムリミットも更に縮んでしまっただろう。

一体どこの馬の骨がサイガギアを渡したのか知らないが、その内ぶっ飛ばしてやる……！

そう心の中で誓いを立ててると、サイガがゆっくりと地面に降りて来た。

そして悠々とした足取りと言葉を言い放ちながらディジエクトへ近づいて来た。

「さて、早速貴様でこの力を試させてもらおうか」

「ッ……！」

「アタックライド……ファンク・シヨルダー！」

「ガアッ!！」

身の危険を感じたディジエクトはすぐさま「ショルダーファンゲ」を発動させ、両肩に形成された二枚のブーメラン状のブレードを掴んでサイガへ投げつけたが……

「……………フッ」

「な…!！」

サイガは気にした様子もなく鼻で軽く笑いながら両手を左右に伸ばすと、あるう事かその先に次元断裂を展開させ、そこから操縦桿型ツール・トンファアエッジを取り出したのだ。

「フッ、ハッ」

(コイツ、何で次元断裂を…!?)

その根元部分から流れる青いフォトンブラッドで生成したエネルギーブレードでディジエクトが全力で放った二枚のブレードを、まるで子虫でも払うかの如く軽くあしらう様に弾き返したのだ。

これの自身に人間の顔があったら仮面の奥で余裕の表情をしているに違いない。

そして何より驚いたのは、サイガが次元断裂を展開させた事だ。

次元断裂はワールドウォーカーの特権とも言える能力だ。

例え世界を歪める存在であっても、次元移動能力を使えるとは限らないし、前に見た時にはそんな素振りも一切なかった。

もし初めからあったなら、歩が逃亡を図る前に喰い止めていた筈だ。

サイガはブレードを弾いた瞬間、高速でディジエクトへ駆け寄り二本のトンファアエッジでディジエクトへ斬りかかった。

「ハッ！」

「チイイツ！グアアアウト！！」

その斬り上げをギリギリでかわすが、その刃先が装甲を掠め、その摩擦で火花が散る。

その攻撃モーション後の隙を突いてディジェクトがサイガに殴り掛かるが、サイガはディジェクトの腹に蹴りを入れてその反動で後退すると、再び次元断裂を展開してトンファーエッジをその空間へしまい、今度はサイガ専用携帯電話型変身ツール・サイガフォンをドライバーから引き抜いた。

「どれ、早速こちらも……」

そう呟きながら更にサイガフォンを開き、番号を「106」の順で入力すると、「バースト・モード」と言う認識音声がサイガフォンから鳴り出し、横方向へ折り曲げるとその形態のアンテナ部分からフォトンブラッドで形成されたエネルギー弾をディジェクトへ向かって3連射した。

この世界に於けるそれぞれのライダーフォンにはフォンブラスターと呼ばれる光線銃へと変形する機能が備わっている。

そしてそれは特定の番号を入力する事で発動し、単発式の「シングル・モード」と連射式の「バースト・モード」の二種類がある。

今回サイガはその内の連射式機能を発動させてエネルギー弾を撃つのだ。

しかもその威力はファイズのそれを軽く凌駕する威力で、並のオルフェノクなら数発撃たれただけで灰化してしまうほどだ。

「グガアアアア！！」

そのエネルギー弾をモ口に喰らったデージェクトは装甲をスパークさせた。

この程度でDシリーズの装甲は簡単には壊れないものの、その衝撃によるダメージを全て押し殺す事が出来ず、装着者である好太郎にダメージが入り踏鞴たたらを踏んだ。

「フム、中々の威力だな」

そう呟きながら右手に持ったフォンブラスターを繁々（しげしげ）と見詰めたサイガは、やがてそれを元の形状に戻してドライバーにセットし直した。

「き、貴様…！何故その能力を…！？」

「暫くこの姿でいるとな、何故か知らぬがそう言う能力が備わっていたのだ。恐らくコレを付けてるからだろうな……」

デージェクトの疑問にそう答えながら、自身の胸部装甲を撫でるサイガを睨みながら、デージェクトはある仮説を立てた。

あのサイガギアには何らかの細工が施されているのではないだろうか？

だからあの時変身していた状態にも関わらず、オルフェノク態の時にのみ展開できる翅を、次元断裂を通して外に出すことができたのではないかとデージェクトは考察した。

それには恐らくサイガギアを渡した男が関わっているのだろうが、今はそれを知る術はないし、アレを何とかして倒すのが先決だ。

（仕方ない…だったら「リジェクション」で……）

デージェクトはカードホルダーから「リジェクションの」カードを取り出し発動させようとしたが……

「甘いな」

「なっ……!?!」

バツクルにセツトする寸前で一瞬の内にサイガがデージェクトの眼前に現れ、そのカードを持った右手を掴んで発動を阻止した。

今サイガが使った能力もドラゴンオルフェノク能力の一つで、フアイズアクセルフォーム並みのスピードでの高速移動を可能とさせる能力だ。

「フッ！」

「グウツ！ガアアア！！」

「オウツ」

サイガは掴んだ右手を捻りカードを奪い取ると、回し蹴りを放って吹き飛ばそうとしたが、デージェクトはそれを持ち堪えて踏み止まると、サイガの顔面を殴り飛ばした。

しかしサイガは、まるで虫でも飛び付いて軽く驚いたかのような反応を示すだけで、すぐに吹き飛ばされた態勢から受け身を取って立ち上がると、「フハハツ」と何が可笑しいのか仰々しい態度で軽く高笑いをした。

「……何が可笑しい？」

「いやなあに、まさか私に一撃を加えられる輩がいるとは思わなくてな。それに私に触れて何ともないと言う事は、その鎧は灰化でも

防いでいるのか？」

どうやらサイガは自分が一撃を入れた瞬間に、ドラゴンオルフェノクの灰化能力を発動させて装甲を消すつもりだったようだが、Dシリーズの装甲はドライバーを媒介にして次元断裂を質量化させた物質だ。

つまりこの世界どころかどの世界にも存在しない物質であり、それを特殊な能力（今回の場合は「灰化させる」という物質崩壊）で分解させる事は出来ないのだ。

それは例えるなら水と言う液体に火を入れればその火は消えるが、油と言う液体に入れればそれが更に燃え上がる事と同じ原理であり、似たような物質（装甲）でも、その性質が全く違うのだ。

その事に何となく勘付いたサイガは「まあいい」と大して気にした様子もなく流すと、次元断裂を展開してその中からトンファージェジが備え付けられた状態の飛行用バツクパツク・フライングアタッカーを取り出し、その噴出口を前方に向ける様に構えてブースターライフルモードに変形させると、更に続けた。

「まあよい…別に灰化が効かずとも、貴様を屠る事など造作もない事だしな」

その言葉を皮切りにトンファージェジに備え付けられていたトリガーを引くと、その噴出口からエネルギー弾を高速射出してきた。

「ゲツ…！クソオツ…！！」

その連続射出される光の弾幕に晒されながらも何とかしようと「リジエクシヨン」のカードを取り出そうとするが、そこである事に気

が付いた。

(しまった…！「リジエクション」は奴が……！！！)
「ん？これが必要だったのか？」

サイガが片手でエネルギー弾の弾幕を絶えず撃ち出すためにトリガーを引きつつも、もう片方の手で「リジエクション」のカードをチラつかせた。

接近された時にカードを奪われてたことを失念していたのだ。

人間の顔があつたらニヤついていたであろうサイガのマスクを、デイズエクトは忌々しげに睨み付けたが、こうなれば別の方法で対処しなければならぬだろう。

しかし手持ちのカードは「レッグファンク」と「ファイナルアタック」の二枚しか持ち合わせていない。

正直この二枚は切り札だ。今この二枚を使えば現在の状況は打破できるだろうが、例えば今使っても相手に致命傷を与えられないだろうし、その後の打つ手がない。

デイズエクトのファイナルアタックライドは少々特殊で、ファンクシステムのアタックライドを事前に発動させて初めて発動条件が揃うのだ。

しかもデイズエクトの様に一度使ったカードの複製する機能は付いておらず、一度使ってしまうばもう一度変身し直す必要がある。

今ここで変身を解除すればもれなく蜂の巣になってしまっだろうし、この現状でなくとも戦闘中に変身解除するなど自殺行為でしかない。これはもうゴリ押しするしかないだろう……。

「ゲウウウ……ガアアアアアー!!」

そう決断を下すと、デিজエクトは咆哮を上げながら迫りくるエネルギー弾を無視してサイガに特攻を仕掛けた。

確かにこの弾幕は脅威ではあるが、それくらいで倒れるほどデিজエクトは脆弱ではない。

「フウム、仕方ないな……」

サイガもこれ以上撃つても無駄だと判断すると、トリガーを引くのを止め、フライングアタッカーからトンファーエッジを引き抜くと、そのエネルギーブレードで討ち返そうと向こうも迫って来た。

「更にこれだ」

「エクシード・チャージ」

デিজエクトへ駆け寄りながらドライバーにセットされたサイガフオンを開きエンターキーを押すと、電子音声が流れて両腕へと続くラインを青いフォトンストリームが伝ってトンファーエッジへ集約した。

青く輝くエネルギーブレードが更に輝きを増し、その凶刃をデিজエクトへ叩きこもうと両腕を振り下ろした。

「ハッ!」

「又ンッ!!」

「何とっ!?!」

しかし対するデিজエクトは、その凶刃を両腕に備え付けられている複数のライドプレートを使ってそれを防いだ。

本来ならば「アームファンク」を発動させてブレードへ変形させてからする物なのだが、例え発動せずともある程度の攻撃を防ぎ切る程の硬度を有している。

その罅迫り合いの状態から、デージェクトは回し蹴りをサイガの脇腹へと叩きこんだ。

「ガアッ!」

「ぐおっ!」

その拍子にサイガはベルトの隙間に捻じ込んでいたカードを落とす、デージェクトはカードの奪取に成功した。

(さて、後はこれをどのタイミングで使うかな……)

デージェクトは落ちたカードを拾い上げ、これをどう使うか思索した。

今はある程度体力も回復し、これを使うにも十分ではあるが、先のデルタとの戦闘の時みたいに何度も肉弾戦とフォトンブラッドによる攻撃を反射し続けていれば、間違いなく反動である時の二の舞になる。

「……フンツ、今のは驚いたぞ」

そう考えている内にサイガは態勢を立て直し、こちらへ向き直って若干苛立ちの籠った声を漏らした。

そろそろ向こうも本気で掛かって来るだろう。今までの遊び半分で戦っていたに過ぎないのは、あの態度から良く分かる。

現在使えるカードは決定打を与えるカードを除いて「リジエクシヨ」のみ。

まずはこれを使って物理干渉を拒絶し、トンファーエッジなどのフトンブラッドは出来るだけ拒絶せずにゴリ押しで押し通す。

そう決めてドライバーへセットしようとした時、目の前に次元断裂が展開され、その中から三人の人影が現れた。

「ん？」

「何だ…？まさか……」

その現象にサイガが首を傾げ、デジェクトはその中から現れるであろう人物が誰か察しが着いた。

「どうやら、良い所に出て来れた様ですね」

「便利だねこれ。今度どう言う原理なのか教えてよ」

「ダメです」

「社長、そんな話をしてる場合ではありませんよ。それにしても、なぜサイガがここに……」

次元断裂が消えるとそこには周囲を見渡す歩と、暢気な声色で歩話しかけるオーガ、更にそれを咎めつつ、サイガがこの場にいる事に疑問を抱くファイズがいた。

「ま、それもそうだけどさ…あんまり肩に力を入れ過ぎても良い結果は出せないだろうし、ここは…いや、こう言う時だからこそ何時も通りに最善の動きを取らないとね」

「つまり、これからやる事は少し規模が大きくなっただけの、反逆者の始末と変わらないと言う事ですね」

「そう言う事」と頷きながらファイズの結論に答えたオーガは続いてこちらを見て、近づいてきた。

オーガと言えば、サイガと対を成すこの世界最強のライダーの一人だ。
その戦闘力は帝王の名に恥じないほどの実力を有すると聞く。
しかし、その口調はどこまでも自然体で、優しげなものだ。

「君がデージェクトかい？確かに歩君の変身するライダーに似てるね」

「あ、ああ……」

「おお、会いたかったぞ娘よ」

デージェクトがオーガのその優しげな声色にとりあえず相槌を返している、サイガはそのファイズの存在をようやく認知したかのような態度で、ファイズと歩に近づいてきた。

「……すみませんが、しばらくサイガの相手をしてもらえませんか？」

「任せる。ああ言う迫って来る男の扱いには慣れている」

「よろしく願いますね」

ファイズが歩の頼みを快く引き受けると、サイガに駆け出して戦闘を始めた。

それを見届けていると、ズイツとオーガがその黒いマスクをデージェクトのマスクに近づけて来た。

「協力、してくれるよね？」

「あ、ああ……分かった……」

「変身」

「カメンライド……デージェント！」

その何とも言えない気迫に思わず承の言葉を返してしまっている
と、歩がディージェントに変身しながらこちらにやって来て、自分
が手に持っている「リジエクシオン」のカードを一瞥すると、オー
ガに「どうやら間に合ったみたいです」と言葉を発した。

「そっか…で、この後どうすればいいんだい？」

「後は彼にアレを拒絶してもらうだけです。そうすれば章治さんの
中からそれが出てきます。それと美玖さんの援護をお願いします。
あのままだと、間違いなく負けてしまいますから」

そう言いながらファイズとサイガを指差した。

現状はやはりファイズのスペックではサイガに劣るのか、ファイズ
が劣勢になっている。急いだ方が良さそうだ。

それを確認したオーガは頷いて「分かった」と一言だけ言うと、フ
アイズを援護するため駆け出した。

ディージェントはそれを見送ると、再び此方へ視線を向けて話し始
めた。

「さて、本当はあの時僕が勝つてこの頼みを聞いてもらおうと思っ
てただけど、状況が状況だしね。我儘かもしれないけど、聞いて
もらいたい」

ディージェントが言っているあの時と言うのは、地下駐車場で戦う
前に言っていた事だろう。

そしてその頼みと言うのは、今の現状を考えれば一つしか思い浮か
ばない。

あの「歪み」を倒す方法も事だろう。

だったら聞いてやろう。コイツが一体、どんな手段を使ってこの世

界を救うのかを……。

「前置きはいいから話せ。俺は何をすればいい？」

「君にはこれから『リジエクシヨン』の効果である物を拒絶して欲しい。でもその対象はかなり特別な物だから、一度使えばかなりの反動が来るのは覚悟しておいてね」

そう答えると、デージエントはディジエクトに教え始めた。

『歪み』を消し、尚且つ章治を助け出すための方法を……。

第三十二話：拒絶者VS天空の帝王（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「何か久々って感じがするわねこのラジオ」

皐月「前回繰り越しで大掛かりな出張版をやったからな」

カンペ（アレはホント限界超えましたね（、、；）（

加奈「それで作者、今回のお題は何？」

カンペ（（・w・） 前回のあとがきラジオの裏話（

皐月「お、裏話か〜。何かこれも久々だな」

加奈「最後にやったのって、確か龍騎編の後半辺りだったかしら？」

皐月「それじゃあ早速リーダー使ってみようぜ」

加奈「え〜と…前回使ったのが皐月だったから今度は私の番ね。行くわよ！そおい!!！」 カードをスラッシュした

「エピソードライド…バースフェスティバル！」

好太郎は皐月を探すために、夜の街中を歩いていた。

「クソ、何で俺がこんな事を……」

好太郎は正直、臯月が苦手だ。

初めてあとがきラジオで収録した時から、臯月は何かと自分をイジめる。

一体自分が何をしたと言うのだろうか……。

しかし、あそこまで人と関わりを持つのも久しぶりだ。

好太郎はこの二年間、本当に孤独な生活を送っていた。

臯月からの扱いは度が過ぎてはいるが、それでもどこかでそれを楽しんでいる自分がいるのも事実だ。

もう少し抑え目であれば自分もそれ相応の行動をとるのだが……。

『はっはあ！お前のライフエナジーは頂くぜえ！！』

「くっそ！またカラフリヤーかよ！？」

そんな事を考えていると、遠くからそんな声が聞こえて来た。

「一つはくぐもった声……。ライフエナジーと言う単語を言ってる事からファンガイアだろう。」

そしてもう一つは…先程自分に罵言とケーキを浴びせ、帝の家から飛び出していった臯月の声だ。

その二つの声のした方を見ると、橋の上で臯月とフクロウを模した顔をしたオウルファンガイアが向かい合っているのが見えた。

「チツ！本当に夜つてのは危ないな……！」

そう愚痴を零しながらも、デイジエクトドライバーをポケットから取り出すとそれを腹部に宛がい装着しながら臯月とオウルファンガイアがいる橋まで駆けだした。

『それでは早速、頂きまあす！！』

「ウオツと、アブねえ!？」

オウルファンガイアが展開した二本の吸命牙をドレイン・ファンク皐月は紙一重で避けて後退すると、今度は身軽なフットワークでジグザグに動きながらオウルファンガイアに接近した。

「お?おお?」

「ちえいやっさああああ!!」

「どっ? おっ!？」

意味不明な掛け声を上げながらオウルファンガイアの鳩尾に蹴りを叩き込むと、その反動で宙返りしながらまた後退し距離を取った。

「テツメエエ…人間のクセにやるじゃねえか……」

「これがギャグ補正ってヤツだぜ」

オウルファンガイアは鳩尾を抑えながら呻くと、皐月が何やらメタい事を言つてのけた。

いくらあとがきラジオでも正直それは禁句だと思つ……。
もうアイツほつとしても良いだろ絶対……。

その皐月の戦闘を見ながら自分の戦闘意欲が萎えて行くのを感じながらも、とりあえず橋へと駆けていく。

いくら皐月が強いと言っても、あくまで人間の範疇。何時やられても不思議はないのだ。

ここで皐月だろうが亜由美だろうが誰だろうが人が殺されるのは見たくない。

ようやく橋の近くまで駆け寄ると、そこで自分の存在に気付いたオウルファンガイアがこちらを見た。

皐月もその視線に気付いて後ろを振り向くと、目を丸くしながら好

太郎へ叫んだ。

「なっ…！何でお前がここにいんだよ！？」

「知るか！亜由美達に連れ戻すよと言われたんだよ！」

「だからって、何でお前なんだよ！？ここは普通歩か冬香辺りだろ
うが！」

『はっはあ！獲物が増えて好都合だぜえ！！』

そんな事など関係なしにオウルファンガイアは再び吸命牙を放った。
それに即座に反応した皐月が横に跳んでかわすと、それは好太郎に
迫る。

「変身！」

「カメンライド…！ディジェクト！グオオオオオオ！！」

「ガア！ガアア！！」

しかし好太郎は一瞬でディジェクトへの変身を果たすと、吸命牙を
叩き潰した。

『何だお前は！？光側の新しい戦士か！？』

「さあ、遠慮なく暴れさせてもらっぞ……」

ディジェクトの姿を見たオウルファンガイアは狼狽するが、ディジ
エクトはお構いなしに接近し、オウルファンガイアに猛攻を加えて
いく。

この世界は「キバの世界」のリイマジネーションで、光のキバと闇
のキバの二種類の勢力が争ってるらしい。

詳しい事は「仮面ライダーディカイザー」世界の支配者」をお読みください。

『オイコラ地の文！何説明端折はしつてんだよ！？』

「ガアアアア！！」

『ちょ、待て……ウゴツ！グガツ！？』

地の文にツッコむオウルファンガイアにディジエクトは問答無用で殴る蹴るの猛攻を仕掛ける。

その様子を見ていた皐月は、ディジエクトへ叫んだ。

「何やってんだよ！？お前の助けなんていらねえよ！！」

「ウルサイ！お前はとつとと帰れ！！」

「お前に頼らなくても、自分で何とかできらあ！！」

「バ、バカ！来ると危ないぞ！」

『しめたっ……！オラッ！』

「グツ！？」

その戦闘の中へ皐月が乱入し、それに狼狽するディジエクトだが、オウルファンガイアはそれを好機と見てディジエクトの鳩尾に一撃加えて仰け反らせると、その隙にディジエクトから離れて皐月へと駆け出した。

『貰ったぜえ！！』

「なんの！カウンター！！」

『グゲツ！？』

しかし流石はギャグ補正。そう簡単に皐月は攻撃を喰らわず、逆にその攻撃を受け流してカウンターキックをオウルファンガイアの側

頭部に決めた。

それによって軽い脳震盪のうしんとうを起こし、フラついたオウルファンガイアへ更に追撃を与える為に、反対側の足で回し蹴りを横腹へ叩き込んだ。

「おおらっしやああああ！！！」

『つとお！人間如きが、舐めんなあ！！！』

「げっ！マズッ！？」

「チッ！言わんこつちやない…！！！」

しかしオウルファンガイアはその足を掴むと、大きく振り回してデイジエクトへ向かって投げ飛ばした。

それを咄嗟の判断で受け止め、抱きかかえた。

「うおっ！？」

「無茶するな！ここは俺に任せていい加減に帰れ！！！」

「耳元で叫ぶな喧しい！」

抱きかかえられている事に気付いた皐月は、デイジエクトの忠告に煩わしそうに喚いてその腕の中から脱すると、更に暴言を吐いた。

「大体、何でアタシを迎えに来たんだよ！？お前だつてアタシの事嫌いだろ！だつたらほっとけよ！！！」

皐月にとって好太郎は憎き敵の様なものだ。

いくら別人とは分かっているにしても、どうしてもその影がチラついてしまふ。

今まで出来るだけ自分から遠ざけようと思ってイジって来たのはそのためだ。

『ハント！仲間割れしてる場合かあ！？』

「ッ！隠れる！！」

「うわ何すっ…！？」

オウルファンガイアはその隙を見逃さずに背中に収まった翼を大きく広げると、そこから七色に煌めくステンドグラス状の羽を弾丸の様に撃ち出した。

それを察知したディジェクトは抗議する臯月を再び抱きかかえ、敵に背後を向けて羽の弾丸を自身の背中に全て受けた。

「グウウウ…！！」

「な…お前、何で…！？」

装甲越しに喰らう衝撃にディジェクトは呻くが、臯月は今のディジェクトの奇行に戸惑った。

その背中から火花が散っているのがディジェクトの身体越しにバチバチという雑音として伝わってくる。

「知らん…！ただ嫌なんだよ、目の前で人が死ぬのを見るのは…」

「そいつがどんなに憎ったらしい奴でもな…！！」

『チッ！しぶといヤツだぜ…！だったらもつと食らわしてやんよ！』

オウルファンガイアは羽の弾丸の連射速度を上げ、その無防備な背後に更に攻撃を浴びせて行く。

ディジェクトもそれには溜まらず苦痛の雄叫びを上げた。

「グガアアア…！！」

「お、おい好太郎！大丈夫かよ！？」

「俺の心配はいいからとつと逃げ、ろ…グウッ！」

何で、アタシなんかのために…コイツは……。
今まで散々ヒドイ仕打ちをして来たって言うのに、こうやって必死に守ってくれる……。
これじゃあ自分のこれまでの勝手な思い上がりが我儘みたいじゃないか。

そう思っていると、何時の間にか取り出したカードを、ディジエクトドライバーにセットしようとしている事に気付いた。
しかし、カードを持った右腕に羽の弾丸を受けた拍子に、取り零してしまう。

だがそれを臯月はキャッチすると、そのカードをドライバーにセットして、ライドホーンを叩いた。

「アタックライド…リジエクション！」

「っ!？」

「さあやれ！好太郎！」

臯月がカードを代わりにセットしてくれた事に驚いていると、臯月が更に次の行動を催促した。

ディジエクトはそれに軽く一度うなずくと、拒絶対象を宣言した。

「魔皇力を拒絶する！」

『オラオラ…つてのわわわあぁ!？』

突如乱射していた羽の弾丸が自身に跳ね返り、その身に弾幕を浴びると軽く吹き飛んだ。

攻撃が止んだことでそれを振り返って視認したディジエクトは、決

定打を撃つべくオウルファンガイアに接近して渾身の右拳を放った。

「ガアアア!!!」

『グボガアアア!!!』

その拳を態勢を立て直している隙に胸部へ叩きつけると、オウルファンガイアの背中まで突き抜けた。

そこを中心に身体全体へ亀裂が入り、オウルファンガイアはステンドグラス状の破片となって飛散した。

それを確認したディジェクトは変身を解除して好太郎に戻ると、皐月の方へ振り返ってゆっくりとした足取りで歩きながら、言葉を発した。

「戻るぞ、皐月」

そう言いながら皐月の横を過ぎろうとすると、「ちょっと待て」と言われたかと思うと突然束ねてる後ろの髪をグイツと引っ張られ、バランスを崩して後ろに倒れた。

しかもその際、後頭部を思いっきり地面に叩きつけてしまったので、髪を引っ張られた痛みも相まっつての激痛に悶絶した。

「グオオオオ……!!!」

「お前さ、ケーキ食いたかったんだろ？」

「そ、それが何だ……!!?」

上から自分の顔を見降ろして来る皐月からの質問に、痛みを堪えながら何とか応じると、皐月は手を目の前に出しながらニカッと笑った。

「じゃあさ、アタシが奢ってやるよ。お前の分のケーキ、無駄にしちまったしな」

「あ、ああ……」

その屈託のない笑顔に毒気を抜かれながら相槌を打ちながらその手を掴んだ。

その後、皐月がコンビニで適当な物を見繕ってケーキを買うつと（この間好太郎は外で待ってた）、その袋を好太郎に渡して帝の家まで走って行った。

好太郎はケーキが崩れないよう細心の注意を払いながら、その後ろ姿を見失わない様に追いかけていった。

加奈「へえ、こんな事があつたんだあ」ニヤついてる

皐月「何だよその顔は！アタシなんか変な事したか！？」

加奈「いや、してないけどさあ…ダメだ、何かニヤつく……」

皐月「加奈 teme エエ!!」

カンペ（それでは皆さん、また次回）（ノシ）

第三十三話・基点復活と短命な運命（前書き）

ボス戦決着&急展開！！

今回も文字数長かったあゝ C〓〓 ;)

それでは長らく続いたファイズ編最終回一歩手前回、スタートオ！
！（・w・）

第三十三話：基点復活と短命な運命

「本当に、それでいいのか？確かに今まで試した事はないが……」
「まあ、僕の中にある情報が間違っただけならね」

デージェントから聞いた内容は、デージェクトが思っていたよりも簡単な物で、それゆえ今までになかった発想だった。
正直、簡単過ぎて本当に可能なのか疑ってしまうほどだ。

「それよりも、そろそろ行くよ？あの二人だけじゃ『歪み』は解決できない」

「ああ、分かってる……」

しかし、そう考えてる時間もない様だ。

オーガがファイズとサイガの戦闘に参入したものの、状況は一向に良くはならない。

何故ならサイガは章治の記憶から二人の戦闘法をすべて理解しているからだ。

章治はああ見えてかなりの策士だ。それゆえ今まで一緒にいた二人の次に来る動作や、その兆候となる癖もすぐに見抜ける。

ファイズの蹴りと、オーガの拳による挟み撃ちも即座にしゃがんで回避すると、二人に足払いを掛けてバランスを崩させる。

更に次元断裂を展開してその中から二本のトンファーエッジを取り出すと、その両棍で二人の装甲を叩き付けた。

「ハッ！」

「ぐあっ！」

「くうっ…コイツ、章治の動きに近い…！」

「お前達の事ならこの器となった男がよく知ってるからな…だったら話は早い。この男の記憶通りに動けば、お前達の動きなどすぐに読み取れる。もはやお前達は、既に私の手の中だ」

「チッ！」

「シングル・モード」

サイガの勝利宣言に近い言葉に、二人は仮面の奥で苦虫を噛み潰した顔になる。

ファイズは自身を押さえ付けるトンファーエッジを払い退けようと、ファイズフォンを取り外して「103」を入力し、フォトンブラスタ―へ変形させると、その銃口から赤いエネルギー弾をサイガの両腕に一発ずつ発砲した。

「おおっ」

「おらっ…！」

「のうっ」

その銃撃に堪らず両手を緩めた隙にオーガがその手を掴んで思いつきり投げ飛ばした。

しかもその先にはデイジーゼントとディジェクトがいる。あの二人なら何とかできるだろう。

「来たよ。それじゃあカードはここぞと言う時に使ってね。チャンスは一度きりだから」

「フンッ、言われずとも……」

二人はこちらへ飛んでくるサイガへ追い打ちを掛けるべく、同時に駆け出した。

だが、サイガもこのままやられるほど弱くはない。

「フン、甘いぞ」

サイガは蝶の翅を展開すると、その翅を羽ばたかせて二人に突風を吹きかけながら、その推進力で二人から距離を取った。

しかもその際、起爆性のある鱗粉をその風の中に紛れ込ませたために、二人の身体がその小さな灰色の粒子に触れて爆ぜた。

「ウツ…！」

「グウウウ！」

二人は両手でその攻撃を庇いながら一先ず後退し、鱗粉の範囲外へ出る。

その間にサイガは空中へと浮かび上がって距離を取った。

ここまで離れられては、対象に触れて初めて効果が発動する「リジエクシヨン」の効果が意味を成さない。

「チツ！ライダーズギアを装着したまま、オルフェノクの特徴を使つて来るとは…！！！」

ここはまず銃撃などで撃ち落とす必要があるだろう。

そう判断したのか、ファイズも今だ手に持ったままのフォトンブラスターをサイガに向けて撃ち放っていた。

「そんな豆鉄砲では当たらんよ。これくらいはしなくてはな……」

しかしその銃撃を軽々と避けながらそう言うと、次元断裂から既にトンファーエッジが備え付けられているブースターライフルモードのフライングアタッカーを取り出した。

トンファーエッジは先程のファイズの銃撃で取り落としていた筈なのだが、どうやら次元断裂の外に出した状態でもクラインの壺がその物体を記録しているため、捨てられたら自動的にクラインの壺へ戻る仕組みになっている様だ。

そしてサイガは、そのトリガーを容赦なくファイズへ向かって引こうとした。だが……

「アタックライド…プラスチック！」

「…ハッ！」

「ぬおっ！？」

しかしそれを確認したデイジェントも、ファイズに習って「プラスチック」のカードを発動させ、右手から出した拳ほどの大きさのエネルギー弾でサイガの側頭部を撃ち抜いて火花を散らした。

「くっ…今のは驚いたぞ……」

「じゃあ、もつと驚かしてあげようか？」

「エクシード・チャージ」

「おおおらあああああー！」

デイジェントへ注意が向かってる隙に、オーガがイクシード・チャージを発動させて展開したその長大なエネルギーブレードを、空中に滞在するサイガへと叩き付けた。

「のぐお！？」

「今の内だね」

「分かってる！」

「アタックライド…リジエクシヨン！」

オーガストラッシュで地面に叩きつけられ、抑え込まれて身動きが取れなくなっているのを好機と見たディージェントはディージェクトへ合図を送り、ディージェクトは短くそう返すと「リジエクシヨン」を発動させながらサイガへ駆け寄り、その頭を鷲掴みにした。

「ぬう、離せ……！」

「吹き飛ば…お前の中の『歪み』を拒絶する……」

宣言した瞬間、サイガの背中から灰色の何かが噴き出し、それと同時に激しい衝撃波が近くにいたディージェクトとオーガストラッシュのエネルギーブレードが吹き飛んだ。

「うわつとお！？」

「グオツ！？」

衝撃波によってオーガストランザーが跳ね返された勢いでオーガは尻もちを着き、ディージェクトはディージェントの所にまで吹き飛ばすが、キャッチされて何とか態勢を整えた。

「上手く行つたみたいだね……」

「一体、何が起きたんだ…？それに、身体が上手く動かん……」

ディージェクトは何時もとは違う反動による倦怠感に包まれながらも自分を抱えているディージェントに訊ねた。

自分はただ、ディージェントに言われたとおりに「歪み」を拒絶し

ただけだ。

それが一体何を意味するのか自分でも分からないが、少なくともこちらが有利になった筈だ。

デージェクトの疑問に、デージェントは解説をし始めた。

「君は今までエネルギーや物理的な現象による攻撃を拒絶する事にしか使つてなかったみたいだけど、“アプローチアウトシステム”の本質はそこだけじゃない。概念の拒絶も可能なんだよ」

「何だそれは、もっと分かり易く説明しろ」

コイツの説明は哲学的過ぎて何を言ってるのかよく分からん……。そんな意味を込めながらもっと簡潔な説明を要求を要求すると、デージェントは「うーん」と唸りながらサイガを見た。

「もっと分かり易く説明すると、章治さんの中にいた『歪み』を外に追い出したんだよ。そして、その『歪み』がアレだよ」

そう言いながらサイガから噴き出した灰色の塊を指差した。

その塊は徐々に形を成していき、やがてその姿をあのノアオルフェノクへと変えた。

『何だ今の衝撃は…それに、私の中から器の気配を感じない……』

「まさか、俺にこんな事が出来たのか……それじゃああそこで倒れてるサイガは……」

デージェクトはもしやと思い、自分の足で何とか立ちながらデージェントの方を見ながらサイガを指差すと、デージェントから予想通りの答えが返って来た。

「ウン、アレは章治さんだろうね」

「何！？章治！！」

その言葉が聞こえたのか、ファイズはサイガに駆け寄ってその肩を揺さぶった。

するとサイガは「うゝ」と呻きながらゆっくりと身体を起こした。

「章治！無事か！？」

「へ、美玖？一体何が起こって…ってうおっ！？ボディが白くなつとる！何やこれ！？」

あの飄々とした声色は間違いない章治だ。しかし何故かサイガに変身したままの状態で、章治も何時ものデルタの身体じゃない事に驚きの声を上げている。

「本当に、章治、なのか…？」

「その声、ひよっとして正幸か？それが最近新しく作ったライダーズギアか？エライ動きづらそうやなそれ」

オーガがサイガに話しかけると、サイガはその装着者が正幸である事をすぐに理解してとりあえずオーガのその外見的な感想を述べた。するとオーガはプルプルと震えながら…サイガに抱き付いた。

「うおおおお章治いいいい！！」

「どわあ！？抱き付くな鬱陶しい！！」

「社長、落ち着いてください」

ファイズはオーガの感極まった奇行を冷静に宥めながら、オーガをサイガから引き離れた。

そこでようやくオーガは正気に戻り、軽く笑いながらサイガに謝った。

「アハハッ、ゴメンゴメン。章治に会えたのが嬉しくってさあ」

「相変わらず子供っぽい性格しとんなあ正幸は」

「まあそれでこそ正幸だからな」

「ところで美玖、お前も正幸みたいに抱きついたりしてくれへんの？」

「こんな公衆の面前で出来るか!？」

ファイズの完全否定にサイガはガクツと頂垂れながてしていると、オーガが思わぬ事を口にした。

「それってつまり、二人っきりの時だったらするって事だよな」

「おおやった! 久々に美玖とあまゝい夜を過ごせそうや!」

「いや今のは言葉のあやで会って! って何でそんな話まで飛躍する!？」

オーガの逆転の発想によりサイガはガツポーズをし、ファイズは自分の首を絞めている事に気が付いて頭を抱えていた。

「なあ、奴はオルフェノクなのか? 気配が全然違うぞ」

その三人のやり取りを見ていたディジエクトは、気になった疑問をディジエントへ投げかけた。

「歪み」でなくなったのなら気配が変わっても何の疑問もないが、それだけではない気がする。

これは能力でも何でもないとただの勘なのだが、その違和感の正体をデージェントは答えた。

「オルフェノクとしての部分は『歪み』が持つていったからね。章治さんはもうオルフェノクじゃないよ。あえて言うなら“サイガに変身できる唯一の人間”って言ったところだね。その原因はサイガを装着した状態で『歪み』を拒絶したからサイガのライダーズギアがその装着者に合わせた物に変化したからって言えばいいのかな？」なるほど、分らん」

デージェントからの答えをバツサリ切ると、答えた当の本人はガツクリと首を頂垂らした。

だが、要するに章治はサイガにしか変身できない体質になってしまったと言う事だろう。

となると、この世界は最早「デルタの世界」とは言えない。今のこの世界の名称は……

「つまり、この世界は『サイガの世界』と言ったところか？」

「そう言う事だね」

デージェントの結論にデージェントは抑揚のない声色で簡単に答えると、未だに状況を理解していないノアオルフェノクを見た。

それはそうだろう。目の前には先程まで自分が装着していた筈のサイガ。しかもそれが章治の意思で動いているのだ。

章治から完全に切り離れた今がチャンスだ。ここでこの世界のイレギュラーを完全に消し去る。

そう決めてデージェントは両手でグローブを嵌め直す仕草を取っている、潜在意識の中で土が言っていたあの言葉を思い出した。

“お前、本当にディケイドの二の舞を踏む気か？”

あの言葉の真意は未だに分からない。しかし今のままでは駄目だと言う事は確かだろう。

一体何をすればいいのか分からないが、少なくともDプロジェクトの目的の中に“「歪み」の修正”が入ってる事は間違いない。

ディージェントはこの考え事を振り払い、ディジェクトに向き直った。

『リジエクション』の反動で上手く動けないだろうけど、まだ行けるかい？」

「当たり前だ。ここでお前だけに全部任せるわけにはいかないからな」

「そっか、正幸さんと美玖さんにも言われたよそれ」

どうやらディジェクトもこのまま休んでるつもりはなさそうだ。

だったら、彼にも一緒に戦ってもらおう。この世界を、救うために……。

「じゃあ行くよ。仮面ライダーディジェクト」

「ああ、分かってる……」

「俺達も一緒に戦わせてもらおうよ」

「そうだな。章治も別に異論はないな？」

「その言い方やと、ウチに拒否権はなさそうやな。ま、断るつもりもないけどな」

二人で話していると、この世界のライダー達三人も共に戦ってくれる様だ。

ノアオルフェノクもそろそろ状況を理解し、痺れを切らしてディージェントとディージェクトに話しかけて来た。

『フム、ところでお前達は一体何なのだ？何故私の邪魔をする？』

その質問に二人はそれぞれ答えた。

「自分の存在意義を探す仮面ライダーです」

自分達の正体と……

「そして、お前がこの世界を壊すのを邪魔するのが、俺達の目的だ」
その目的を。

『クツ、フハハハツ！そうかそうか…そんなに私の邪魔をしたいのなら……やってみるがいい』

その答えに軽く吹き出し高笑いを上げ、愉快そうに呟いた後、冷淡な声でそう言い放った。

次の瞬間には一瞬でこちらに迫り、何時の間にか生成したレイピアをディージェントへ向けて突き出した。

「フツ！」

『今のを避けるか……』

しかしその刺突をディージェントはしゃがんで避け、ノアオルフェノクは感嘆した。

「ガアウー!!」

『くぬお！』

その隙を突いてディジェクトが挟るようにその脇腹を殴り付け、吹き飛ばした。

「こつちも忘れてもらっちゃ困るね」

「まったくだ」

「バースト・モード」

「エクシード・チャージ」

それを見ていたオーガとファイズは、次の一手を打つためにそれぞれ攻撃準備に入る。

オーガはフォンブラスターを起動させて「バースト・モード」に変え、ファイズはファイズポインターを右脛みねに装着してファイズフオンのエンターキーを押した。

オーガがエネルギー弾を打ち込んでいる間にファイズポインターをノアオルフェノクへ向けるように右足を蹴る姿勢にして構えた。

するとそこからエネルギー弾が射出され、それがノアオルフェノクの右肩に着弾した瞬間、円錐状に展開して動きを拘束した。

『くう！』

「はあああああ！！」

ファイズのクリムゾンスマッシュがノアオルフェノの右肩に炸裂し、

ターゲットの身体を貫こうとするが、ノアオルフェノクはそれを耐えモンキーオルフェノクの尻尾を出してそれを攻撃態勢に入ってしまったているファイズに突き刺そうとした。

「オイ変態、後ろが無防備やで？」

「エクシード・チャージ」

しかし何時の間にかフライングアタッカーで空中にホバリングしていたサイガが、イクシード・チャージを発動させ、サイガドライブから発生した青いフォトンストリームが右足のラインを経由して爪先まで達すると、その足でノアオルフェノクに向けて蹴った。すると右足に充填されたフォトンストリームがエネルギー弾になって飛び出し、ノアオルフェノクに直撃すると、青い円錐状に展開されてロックオンした。

「はいなっ！」

『おぐう！？』

そのポインターが命中した反動でノアオルフェノクは動きを止め、ファイズへの刺突は失敗に終わった。

サイガやオーガの場合は、他のライダーズギアと違って何らかのツールを使用せずにイクシード・チャージを行うだけでポインターを射出する事ができる。

流星は新型だけあって高性能だ。正幸もいい仕事をする。

「そおりやああああー！」

そう思いながらも目の前の敵に渾身の一撃を入れるべく、更にフラ

イングアタッカーを逆噴射させてその推進力と落下スピードの合わさった空中からの蹴り・「コバルトスマッシュ」を自身が出したポインターに向かって放った。

『なっ…ぬおおおああああ！！』

その背後からの衝撃にノアオルフェノクは堪らず吹き飛び、それと同時にファイズのクリムゾンスマッシュが右肩を貫通する。

『く…ぬっ……！』

ノアオルフェノクは苦悶の声を漏らしながら立ち上がり、その挟まれた肩から一瞬のマークが浮かび上がり青い炎を上げるが、すぐに治まり元の形状に復元された。

また取り込んだオルフェノク的能力を使ったのだろう。これでは足りない。そう、自分達だけなら……

「そんじゃあお二人さん、後よろしゅう」

「分かりました。それじゃあそろそろ止めの一発…いや、二発行ってみようか」

「ああ、そうだな……」

「ファイナルアタックライド…ディディディージェント！」

「アタックライド…ファンク・レッグ！」

「ファイナルアタックライド…ディディディージェクト！」

『なぬ！？』

サイガからのバトンタッチを受け取り、ディージェントとディージェクトは互いにファイナルアタックライドを発動させ、ディージェン

トの展開したビジョンがノアオルフェノクを拘束し、デイジェクトの展開したビジョンが二人の標的の間に十枚立ち並んだ。

『さあ、終わりです(だ)』

その二人の台詞を合図に、デイジェントが指を招く様に動かして自分のビジョンを、ノアオルフェノクを磔にしたままこちらに近付ける。

その際デイジェクトの展開したビジョンを次々と通り抜けていき、デイジェントのビジョンが徐々に光り輝いて行く。

「フウウウ……………」

「ハアア……………」

デイジェントは後ろを向きながら右拳に藍色のノイズを纏わせながら顔の前に構え、デイジェクトは右足に力を込めるように体重を傾けて攻撃対象との距離がゼロになる瞬間を見極める。そして……

「ハア!!！」

「ガアアア!!！」

『ぬおあああああ!!!!』

デイジェントの必殺技・「デイメンジョンナックル」と、デイジェクトの必殺技・「デイメンジョンキック」が、全てのビジョンを通過したノアオルフェノクに直撃・爆散させた。

その衝撃波でこの世界の三人のライダーは目を覆うが、やがてその爆風は去って行き、後に残ったのは焦げた地面とその近くに立っている二人の異世界のライダーだけであった。

「終わった…のか…?」

「多分そうやる。ハア〜疲れたあ〜……。美玖う〜、後でこのうちの疲れきった身体と心を癒してえな〜」

「章治! お前まだそんな事…を…。」

ファイズがツツコミを言い切る前に突然バタリと倒れ変身が解除された。

「美玖!?!」

それに変身を解除した章治と正幸は驚き、駆け寄ったが、その身体からは灰が流れていた。

彼女の寿命がもうすぐそこまで来ている事は、オルフェノクを知っている者ならば明らかである。

「クツソ…! 遅かったか…!!」

「とりあえず、僕の移住先がすぐそこにあるんでそこへ移動して様子を看ましよう」

歩の計らいで一先ずその場から一番近い歩の移住先へ向かう事になり、一行はこの場から離れることとなった。

その際何故か歩が美玖を抱えて行こうとしていたのを見て章治が猛反発していたが、この中で比較的動けるのが歩だけであり、しかも自分の触れている範囲の空間を弄って重みをなくす事が出来ることから歩が連れていくことが決定した。

その時の章治の顔が実に悔しそつだったのを正幸と好太郎は見た時、何とも言い切れぬ哀愁感が心を通り過ぎていったのを感じた。

歩のマンションのリビングで亜由美は、頬杖を着きながらボーッとしていた。

亜由美の頭の中では、土のあの言葉が反芻していた。

“ 何で破壊者がこんな性格をしてたんだか ”

彼は自分の基になつた人物の事を破壊者と呼んでいた。

亜由美にはそうは見えなかったし、それにもし本当に破壊者だとしたら、Dプロジェクトにある矛盾が生まれる事に気が付いたのだ。

歩は世界を救うために旅をしていると言っていた。

しかしそれだと、デイージェントの前にその為に旅をしていたデイケイドは、世界を救うためではなく、壊すために旅をしていた事になる。

それは一体どういう事なのだろうか？歩はその事を知っているのだろうか？

ひょっとしたら、歩はただオリジナルに世界を破壊するために利用されているだけなのではないだろうか？

別に亜由美は渡を疑ってるわけではないし、ましてや歩が世界を壊すために動いてるとも考えていない。

これは自分のただの考え過ぎだと割り切ると、そこで丁度玄関から結構美人な女性を抱えた歩と、その後ろからは、好太郎と助かった

と思われる章治、後よく知らない男性と言う大人数でゾロゾロと入って来た。

「え、ちょ、どうしたの！？何か知らない人達も混じってるし、章治さんはもう大丈夫なの！？」

「この世界のライダーの二人だよ」

「ちよっくらベッド貸してもらおうで嬢ちゃん。あとウチはもう大丈夫やで」

「ねえ、この娘誰？歩君の妹？」

「今はそんな事どうでもいいだろ。一応そつらしいがな」

亜由美の驚きながらの質問に歩は簡潔に答え、章治が大雑把に断りと返答を入れつつ歩の後を付いて行く。

更にその後から続く男性がぼやき、好太郎が焦燥感に駆られながらも律儀に答えると言う、何とも忙しい展開になって行く。

先程までの亜由美が過ごしていた静寂はどこに行ってしまったか、先程まで好太郎が使っていたベッドに歩が抱えていた女性を寝かせて「後はお願います」と章治に後ろに下がりながら言うと、章治は早速その女性を看始めた。

歩曰く、彼女はあの時いた女性のライダーらしく、彼女の寿命がもうすぐそこまで来ているとの事だった。

章治が脈や呼吸の乱れなどを一通り確認すると、自分達に向き直って結論を述べた。

「今はまだ大丈夫や。でもそう長くないかもしれへんな」

「そうか……章治、あの“王”の力は使えないのか？」

「その言い分やと、ウチのファイルを見たっちゆう事やな？悪いけどウチの中にはもうアイツの気配があらへん。あの時完全に消えて

もうたみたいやな」

「あの、何でそんなに冷静でいられるんですか？章治さんって、この人のために今まで戦って来たんですよね？だったらおかしいじゃないですか」

章治の小ザツパリとした結論に亜由美は違和感を覚えた。

自分の勘違いだったら未だしも、章治がこのファイズの女性のために独りでいたのだとしたら、今の章治の態度はおかしい。

そう思っていると、章治は軽く溜め息を吐いて亜由美にその理由を答えた。

「あのな嬢ちゃん、本当はウチだって泣きたいくらいに焦っとるんや。でもここで焦ったって何の意味もないんや。焦れば焦るほど目の前の物が見えなくなつて、仕舞いには大事な物を失う事になる。それにな、美玖はそう言う男が大の嫌いやからな」

そう答えた章治の顔は笑っていたが、その目はとても悲しい物だった。

彼だって本当は失いたくないのだ。それでも必死に悲しい気持ちを堪えて、それを手放さない様にしている。

亜由美はそんな章治の考えを知つて、まだまだ自分は子供だと思つていると、ファイズの女性：美玖が呻き声を上げながら瞼を開いた。

「美玖、大丈夫かい？」

「正幸：？一体、何があつたんだ？」

「あの後、貴女は倒れてしまつたんです。それでひとまず落ち着ける場所に移動したんですよ」

歩が簡単に説明し終わると、章治が何やら実に言い辛そうに頬を搔

きながら美玖に話し掛け始めた。

「なあ、美玖……」

「何だ、章治……？」

「その…あの時はホンマすまんかった！！」

章治は突如として美玖に向かって土下座した。

その行動に亜由美を含めた余所者三人は啞然となるが、美玖と正幸には何の事か分かっていているらしく、美玖は「それで？」と続きを促し、正幸は達観した顔でその後の展開を見守っている。

「あの時、お前の寿命を延ばすためとはいえ、お前に酷い事を言うたり、仲間を殺して来た事を謝らせくれ！許してくれとは言わん。なんやったらここで死んでも構わん！ただウチの話を聞いてくれ！」

その後、章治の口からこれまで何のために失踪していたのかの真実が語られた。

美玖の寿命があと僅かだと知ってしばらくした頃、自分の中に“王”が存在している事に気付いた。

その“王”の力を使えば美玖を死なせずに済むかもしれない。

しかしそのためには、ある程度のエサとしてオルフェノクを殺して自分の力にする必要があったのだ。

そんな事をみんなに話せるわけもなく、それで仕方なくオルフェノクの敵として動く事にしたのだと言う。

その真相を美玖はただ無表情で黙って聞いていた。そしてすべてを聞き終えた彼女は、ゆっくりとベッドから身を起こしながら何時もの厳しい口調を章治に発した。

あの戦いを終えた後、ファイズは変身を解除して美玖に戻ったかと思つと、すぐに倒れてしまった。そして

「……章治、とりあえず立ちあがって目を睨れ」

「う…はい……」

その気迫に気負されながら章治は立ち上がると、その場に立っていた美玖と目が合う。

たがいに身長差があるせいで美玖が章治を見上げる形になっているのだが、美玖の鋭い眼光は衰える事なく章治を射抜いている。

言われた通りにすると言うよりも、その視線から逃れるように目を瞑つてこれから自身の身に起こる惨状を後ろ向きな考えで身構えていると、ポスツと胸に何かかが軽く触れる感触が伝わった。

「へ……？」

その予想外の感触の正体を確認するために目を開くと、美玖が顔を伏せた状態で右拳を章治の胸に押し当ててる姿が目に入った。

「この、馬鹿……」

「美…玖……？」

美玖は小さく罵言を吐いて、今度は自分の頭を章治に押し当てた。章治はてつきりとんでもない折檻が飛んでくるのではないかと予想

していたが、その予想を大きく裏切った美玖の行動に思わず彼女の名前を呼ぶと、一拍間をおいてポツリポツリと言葉を紡いだ。

「お前は確かに許されない事をした……だがここでお前が死ねば、私や正幸、みんなが悲しむんだ……。だから死んでもいいだなんて言うな。お前はこれから、私達と一緒に“夢”を実現させるために生きて、その罪を背負い続けて行くんだ……。それに、こうなっってしまったのも私が原因でもあるしな……もし私のためを思っただったら、私の命が尽きるまで、ずっと傍にいてくれ……お帰り、章治……」

「……ッ！美玖……！」

章治は美玖を強く抱きしめた。それも、ただ力を込めて抱くのではなく、優しく、それでいて決して手放さない様に……。

「ゴメンっ！本当にゴメンなッ！！ホントは、お前を死なせたくなかったのに……それなのに……！！」

「もういいんだ。お前や正幸達に会えただけで、もう十分だ。これ以上何かを望んだら、バチが当りそうだ……」

その光景を亜由美達はただ黙って見ている事しかできなかった。本当にこれでよかったのだろうか……？

何とかして美玖を助ける事は出来ないのだろうか……？

そう思いながら歩に振り向くと、首を静かに横に振って否定の意を示した。

「この世界の人間じゃない僕達は、その世界の事象には触れてはな

らない。真司君と話してる時にも言ったと思うけど、何らかの行動を起こしてその世界で起こるはずだった出来事をなかった事にする、そこに新たな“歪み”が現れる可能性がある。この世界の問題は、この世界の人間が解決しなくちゃいけない。それがワールドウォーカーの決まりだよ」

「……………」

それを聞いていた好太郎も、無言でそれが正しいと答えていた。歩達の行っている事は分かる。それでも、納得できない自分がいた。こんな理不尽な運命があつていいのか。いいわけがない。だって、ようやく分かりあえたのに、こんな悲しすぎる…！

「本当は僕だつて何とかしたいよ…でもこれが決まりなんだ。亜由美にもそれを分かつて欲しい」

そう言っている歩の表情は、実に辛そうに歪んでいた。

ふと歩から視線を下げて、彼の手を見ると拳を強く握りしめており、その隙間からはジワリと血が浮き出していた。本当に、何も出来ないのだろうか。

「君達には感謝してるよ。だからそんなに落ち込まないで」

何とか出来ないものかと考えていると、正幸が声を掛けて来た。亜由美が彼の方を向くと、正幸は優しげに微笑んで更に続けた。

「これはあくまで俺達の問題だしね。君達にはもう十分すぎるほど手を貸してもらったんだ。それだけで十分だよ」

そう言っている正幸の顔は、もう吹っ切れてるつもりなのだろうが、やはりどこか影があつた。

やはりこの人も悲しいのだろう。しかし、それでもどうにもできない。
折角章治が戻って来たが、今度はまた別の仲間がいなくなってしまうと言っている。彼はそれを隠そうとしている。

「明日の朝、スマートブレインまで来てくれないかな？君達に何かお礼がしたい」

「……分かりました」

そう言っただけで正幸は章治と美玖を連れて部屋から出ていった。

その間も、章治と抱き合っていた事で美玖をからかったりしていたが、やはり何処か元気がなかった。

「……………」

歩はその様子を頭を掻きながら眺めていたが、気を取り直したかのように美玖と好太郎に振り返ると、明日の予定を告げた。

「それじゃあ明日の朝にでも、スマートブレインに行くよ。勿論、好太郎君もね。今日はここに泊まるといいよ」

「……………ああ」

そう短く返した好太郎は、何か考えている様だったが、それが何なのか亜由美には分からなかった。

第三十三話：基点復活と短命な運命（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「さあ、次回でファイズ編もいよいよ最終回!!！」

皐月「話の流れ的にはすっげえバッドエンドになりそうなんだけど、
一体どうする気なんだ作者？」

カンペ（ちゃんと納得いく終わり方にするつもりですよ（^ ^ゞ
今はまだ言えませんが、とりあえずバッドエンドだけは避けます（

加奈「ふう〜ん…ま、それならいいけどね」

皐月「もしバッドエンドになんかしたらマジで容赦しねえぞ？」

カンペ（だ、だから大丈夫ですって!!。 ;)
ちゃんとハッピーエンドにしますよ!!（

加奈「でもこの流れだとどうしても…ねえ？」

皐月「ああ、どうやって逆転させんだよ……」

カンペ（まあ見ててください。私の逆転劇を見せてやる…!!（

。 。 #（

加奈「一体どうやって後一話で閉めるのかしらね」

皐月「そこは作者の力量次第だな。そういや次はW編に入るんだろ
?しかも募集したオリジナルライダーが出て来るらしいし」

加奈「そうだった!W編では私のリイマジが出て来るのよね!これ

は待ち遠しいわね!!」

皐月「どんなヤツ何だろうな。加奈のイメージとオリライダーって」

カンペ（一応次回の本編後半に最低でもオリライダーを出す予定ですので、それまでしばしお待ちを！（、、、ど）

加奈「さあ遂に私が本編に返り咲くと気が…！次回をお楽しみに！」

皐月（何か何時になくテンション高いな……）

調整室……

????「私を見て一体どんな反応するのかしらね、彼女？」
????「ふあゝあ…ねむ……」

第三十四話：i r e j e c t t h e f a t e (前書き)

ファイズ編、遂に完・結!!

いやあ〜長かった長かった(´・`・*)

と言ってもW編でもうちよつと後日談が入るんですけどねf(^^);
)

それ完結したって言わなくね?っていうツツコミはなしの方向でお願います。

次回で完全にWの世界に入っちゃうんでこの方がバランスいいかなあ〜と思ひまして……(^ ;)

まあ何はともあれディジェクトを考案して下さった伸剣さんには今一度感謝の言葉を送らせて頂きます!

そして今回の終盤に出て来るジャードさんの募集キャラへとバトンタッチして頂きましょう!

それではスタートオ!!(・w・)

第三十四話：I r e j e c t t h e f a t e

ノアオルフェノクを完全に消滅させた次の日の朝。歩と亜由美、そして好太郎を加えた一行はスマートフォンブレイン本社まで来ていた。

その受け付けカウンターで歩が正幸に来るように言われた旨と、自分達の名前を伝えると、受付嬢は「須藤様ですね。社長が23階にいます応接室でお待ちしております。こちらのネームプレートを首から下げてください」とマニュアル通りの丁寧な言葉を並べると、「GUEST」と書かれたネームプレートを順番に三人に渡した。

しかし、何故か好太郎に渡す時だけ訝しげな表情を作り、ネームプレートを渡すのを戸惑っていたようだったが、好太郎は気にした様子もなく掻っ攫う様にそのネームプレートを受け取った。

その後も応接室に行くまでの間に分かったのだが、確かに好太郎は“人には避けられる体質”の様だった。

社内を歩いている間に、廊下ですれ違った人の中には大きく分けて二種類があった。

一つはただ単純に通行人として見る者達。これくらいだったらビジネススーツを着ている歩と一緒に歩いていればそれほど目立つ事もなく、ただの客程度にしか見られる事はない。

その人達は恐らく、この会社に勤めるオルフェノクだろう。

そしてもう一つは、好太郎を冷たい目で見る者達だった。

これには歩と好太郎曰く、ディジェクトドライバーが関係しているようで、そこから発せられる特殊周波が人に不快感を抱かせる物なのだそうだ。

しかし自分達ワールドウォーカーと呼ばれるモノや、世界の脅威と

なる存在には大して効果が無いため、亜由美と歩はこうして普通に好太郎と接する事が出来るらしかった。

何故彼が孤独な目に遭わなければならぬのかと思ひ、好太郎に話してみたが「今はもう慣れてる」としか言わなかつた。

しかし、そう言っている彼の目は実に寂しそうな物だったので、これ以上この話題をするのはやめて応接室に向かう事にした。

しばらくして応接室の前まで辿り着くと、歩が扉を三回ノックして「須藤歩です」と扉の奥にいるであろう人物の淡々とした口調で声を掛けると、ガチャリとドアノブが動いて扉が開かれた。

「やあ。よく来てくれたね」

扉を開けたのは正幸であり、歩に爽やかな営業スマイルを送って三人を中へ招き入れた。

中へ入るとその部屋はカーテンを全て閉められており、上質なライトが天井から少し狭い印象を与える部屋全体を明るく染め上げている。

そして中央には一台の高級木材を使用して作られた短脚テーブルと、向い合せになる様に置かれた赤茶色の大きめのソファが二つ置かれていた。

テーブルの上には二つのアタッシュケースが置かれており、そのどちらにもスマートブレインのロゴマークがプリントされていた。

部屋の大まかな全容を見た後、亜由美はある事に気が付いた。美玖と章治がないのだ。

「あの、美玖さんと章治さんはどうしたんですか？いないみたいですが……」

「実はね……あの後しばらくしてからまた倒れちゃってね……。それで今療養中だよ」

「章治はそれの付き添いだよ」と付け加えながら亜由美の質問に答えた。

それを聞くと、今度は歩が正幸に尋ねて出した。

「一緒にいなくていいんですか？こう言う時って、貴方もいた方がいいのでは……」

「ま、俺もそうしたいのは山々なんだけど……。俺にはあの研究所の事後処理とかもあるし、折角会えた二人に水を差すわけにはいかないよ。まあ適当に腰掛けてよ」

そうフランクに亜由美達は正幸にソファに座るように促され、三人が右から亜由美、歩、好太郎の順に座ると、彼は自分達の前のテーブル越しにあるソファに座って本題を切り出した。

「で、用件は実は二つあるわけなんだけど、まずは一つ目、今回のお礼だよ」

そう言いながらテーブルの上に置いてあった内のケースの一つを手にとって開くと、中央にいる歩の前に置いて見せた。

「……え」

「なっ……」

その中身を横から亜由美と好太郎が見ると、それぞれ短く声を発しながら目を丸くした。

ケースの中には大量の札束がギツシリと詰まっていたのだ。
こんな大金を目の前に突きつけられて歩は果たしてどのような反応
をしているのかその横顔を覗き込むと……

「……………」

ただ黙つたまま興味なさげにそれを見つめてるだけだった。
何でそんな冷静でいられるんですか!?!と心の中で叫んでいると、
正幸がこの大金を渡した理由を述べた。

「これは僕たち、スマートブレインからのせめてものお礼だよ。一
応三千万あるよ」

「さ、三千万!?!」

そんな人生で一生お目にかかれそうにない額に、亜由美は驚嘆の声
を上げた。

それだけあれば、一体どれだけ欲しい物が買えるだろうか?

そつえばずつと同じ制服だったなあ〜などと、新しい服をこの機
会に買う算段を立ててると、歩がその計画を根本からぶち壊す発言
をかました。

「すみませんが、このお金は受け取れません」

「ええ!?!ちよ、何で!?!」

「金銭問題だったら別に気にする必要もないし、僕がここに来た目
的も、もっと別の物だからね」

「う〜…それは、そうだけど……………」

たしかに、お金の問題だったら真司のアパートで歩が話してた“世
界を渡るとその世界で活動する分だけのお金が手に入る”という、
労働者に何とも失礼この上ないディーゼントドライバーに備わっ

ている機能のおかげで解決しているが、折角の人の好意をここで無碍にするのもどうかと思いつながら歩の正論に何とか食い下がろうとするが、何を言えばいいのか分からない。

そしてふと自分の反対側に座っていた好太郎に目が行くと、彼はその大金を食い入るように見ていた。

「あの、好太郎さん…?」

「……な、何だ?」

明らかに目が泳いでる……。これはもしか……

「ひょっとして、これ欲しいの?僕は特にいらなから好太郎君が貰ったら?」

「いや、べ、別に欲しいとかは…思っていない、ぞ……?」

好太郎の目が泳ぎつつ、その視界に札束が写ると、一瞬だけ目の動きが止まる。そしてしばらくするとまた泳ぎ出す。これをしばらく繰り返し返していたが、正幸を含めた三人の視線に、やがて観念したのか大金を眼前に据えた。

「ま、まあ…折角だしな……。遠慮なく貰ってくぞ」

「そうそう。好意は素直に受け取らなくっちゃね」

「この空気を作った元凶が言います?」

「さてと、それじゃあもう一つの要件だね」

「そこで無視しますかアナタは!??」

亜由美が軽く正幸にツツコムと、彼は華麗にスルーしながらもう一つのケースに手を掛けた。

亜由美のツツコミも何のそののでそのケースを開いてこちらに見せる

と、その中には青いラインの入っている白を基調としたメカニカルなベルトが入っていた。

「サイガのベルト、ですね……」

「そう。実はあの後これを章治の代わりに筧に調べてもらったんだけど、どうも変な機能が付いちちゃってるみたいだね。しかも章治以外に適合できない様になってると来た。そこでイレギュラー専門の君達に意見を聞きたいんだけど、これってどういう事なのかな？」

正幸は顎を、合わせてた両手に乗せながら訊ねて来た。

その表情は純真無垢な子供その物で、特に怒ってると言う雰囲気はしない。

寧ろ今までにあった事のない不思議な出来事に目を輝かせていると言った感じだ。

「……………」

歩は無言でサイガギアに無言で軽く触れて、そのライダーシステムの情報を読み取ると、すぐに問題が分かった。

このサイガギアには、クラインの壺が備え付けられているのだ。

コレを装着した人物は次元移動能力の有無に関わらず、サイガギアに備わっているクラインの壺と装着者の脳が直結して自由にサイガの武装のみを収納・展開する事が出来るようになっていたのだ。

そんな事など歩には到底できない事だし、ましてやそれを実現させ

るワールドウォーカーがいると言う事には驚きだ。

好太郎の話ではある男がノアルフェノクにコレを与える際に何らかの細工をした可能性があると聞いていたが、その人物とはおそらく神童の事だろう。

彼は本当に何者なのだろうか？

デイケイドに壊された世界の住人だと言う話は聞いたが、それだけでは情報が少なすぎて分からない。

歩は神童の件を一旦頭の隅に置いて保留すると、正幸にサイガギアの詳しい機能を説明する事にした。

「ふん…成程ね。それで、これを元に戻す事は可能なのかな？」

「それは難しいですね。僕では出来ない芸当で備え付けられてますし……。でも装着者…章治さんの身体に影響が出る事はなさそうですね。というより、これ以外のライダーズギアは使わせない方がいいでしょう」

「というと、章治は本当にオルフェノクじゃなくなっただって事？」

「そうです。あの時、好太郎君が『リジエクシオン』の能力で“王”ごとオルフェノク因子を外に吹き飛ばしましたからね」

そう言いながら歩は好太郎をチラリと見た。

好太郎は視線がこちらに向けられている事が妙にむず痒くなったのか、ケースを手を持ってソファから立ち上がると、応接室から出て行こうとした。

しかし扉の前で足を止めると、こちらに振り返って正幸にある事を

尋ねた。

「……章治達は今どこにいるんだ？」

「美玖と章治だったらここから少し西にある病院にいるよ。あそこはスマートブレインの直轄施設だからね。ひよっとして見舞いでも行ってくれるのかい？」

「……フンツ、さあな。そこへ寄ったらすぐにこの世界から出るつもりだ。だから亜由美、お前に一言だけ言っておきたい事がある」「え、私にですか？」

突然名指しされた亜由美は思わずソファから立って好太郎を見るが、どうも言い辛そうにしており「もうちょっとこっちに來い」と言われて好太郎の前まで近づく。

そして自分にしか聞こえない様な小さな声でこう言った。

「……ありがとな。俺を人として見てくれて……」

「え……？」

それだけ言うと、すぐに亜由美から背を向けて応接室から出ていった。

すぐに閉められそうになるドアをノブを取って扉を開いて廊下を見渡すが、そこに好太郎の影は一切なかった。

（私、何かしたっけ……？）

亜由美自身は無意識でやった事なので気付いてはいないが、好太郎と一緒に行動したり、優しくしたりと普段の彼なら絶対にあり得ない経験が出来ていたのだ。

そしてそれは、彼を一人の人間として見ていた証でもある。

それだけで好太郎にとっては何物にも耐え難い経験だったと言える

のだ。

「へえ〜……。もしかして彼って……」

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもないよ」

先程好太郎がなんと行っていたのか聞き取れていたのか、背後から正幸が面白そうな声色で呟き、それに疑問を抱く歩の声が聞こえて来た。

「????？」

亜由美にも正幸が何故おかしそうにニヤついているのか皆目見当がつかずに、歩と同じように首を傾げるしかなかった。

スマートブレイン直轄病院のとある個室で、美玖は眠っていた。正確には起きる事が出来ないほど衰弱していると言った方が正しいだろう。

彼女の身体からは、常に微量ながらも灰が少しずつ零れ出していた。

「……………」

その様子を章治は黙って美玖の手を握りしめながら見つめていた。彼女から噴き出す灰が、まるで彼女の命が尽きるまでの時間を計る砂時計のように感じながらも、章治はボソボソと呟き始めた。

「美玖、お前はこれが運命だつて言つてたよな……。お前のせいで俺が消えかけたつて、言つてたよな……」

彼は何時もの飄々としたエセ関西弁ではなく、誰にも見せない弱い自分の顔を曝け出していた。

章治は幼い頃、オルフェノクに転生する前までは、引きこもりがちな性格だった。

しかしオルフェノクに転生し、家族を全て失つてからは、誰にも迷惑を掛けないように常に明るく振舞つてきた。

しかしその性格がここで祟り、彼女や仲間達に迷惑を掛けてしまった。

本当に死ぬべきだったのは自分の筈だ。

例えこの身体をあゝの愚王に喰い尽くされたとしても、彼女だけは死なせない。そのつもりだった。

しかし結果は思わぬ闖入者のせいで章治の計画は完全に狂い、自分はこの人間に戻ってしまった。

まさか彼女の寿命を延ばすつもりが、自分の寿命を延ばしてしまう事に繋がるなんて……。もし神様がいたとしたら、そいつはとんでもないひねくれ者だ。

「俺はまだ、認めたくない……。お前はまだ、生きるべきなんだ……。これが俺の我儘だなんて、自分でも分かつてる。それでも、俺はお前と共に夢を叶えたいんだ……。オルフェノクと人間が、手を取り合える世界を……」

「オイなんだテメエ!？」

「クツ……。せめてスマートバツクルさえあれば……。!!」

「どけ、お前らに用はない」

何やら廊下の方が騒がしい。何事かと思ひ後ろの扉を見ると、その

瞬間オルフェノク態になった二階堂と箕が部屋に吹き飛んできた。

「どわあああつとお！？な、何や、どうしたんや二人とも！？」

『いてて…オイ馬鹿主任！美玖さん連れてとつとと逃げる！！』

『何だかよく分かんないですけど…歩さんに似たライダーズギアを持った男がやって来て……！』

「ここか……」

箕のオルフェノク態であるアメンボの特性を持ったポンドスケータ―オルフェノクが言い切る前に、その現況が入口まで待つて来た。それは思わぬ闖入者の一人であり、自分が人間に戻ってしまった元凶でもあるディジエクトだった。

「……何やロン毛、まだウチに用があるんかいな？」

章治は目の前の存在に恐怖する自分がいるのを感じつつも、強がって自分が最大限に出せるドスの利いた声を発した。

オルフェノクではなくなった章治は、ディジエクトドライバーから発せられる特殊周波の影響を受けてしまっているのだ。

元がオルフェノクだったのでそれほど症状は強くないが、今にも腰を抜けてしまいそうだ。

しかしディジエクトはそんな事などどうでもよさげに、首を振って否定すると、章治時の後ろにいる人物を指差した。その人物とは一人しかいないだろう。美玖だ。

「用があるのはお前じゃない。そこの後ろの女だ」

「何！？」

一体この男が美玖に何の用があるのか知らないが、変身してると言う事は碌でもない事であるのは確かだろう。

そのふざけた言動に啖呵を切るように、スネークオルフェノクがデージェクトに言い放った。

『美玖さんは今絶対安静しとかなきゃならないんだつちゅうに！そんなホイホイと素人が下手に触ろうとするんじゃないやねえよ！！』

「……………フンッ」

スネークオルフェノクがデージェクトに向かって特攻するが、デージェクトはその突っ込んできた頭を鷲掴みにして持ち上げる。

『あだだだだ！痛い！割れる割れる！』

「ガアッ！」

『うおわああああ！！』

「二階堂！！」

デージェクトは痛がるスネークオルフェノクを大きく振りかぶって窓へと放り投げた。

この高さから落ちてでも死にはしないだろうが、状況は非常に拙い。何とか戦おうにも、サイガとデルタのベルトは正幸に没収されてしまっている。

どうするべきか考えてる内に、デージェクトが章治の肩を掴んで入口まで投げ飛ばす。

「ぬおっ！？」

『こ、この…！』

「グウウ…ガアア！」

『うわあ…！』

ポンドスケーターオルフェノクが何とか応戦しようとして背中が生えた六本の細長い脚でデージェクトの装甲を叩くが、軽く火花を散らせる程度で大したダメージを与えられない。

デージェクトはその攻撃を鬱陶しそうに仮面の奥で顔をゆがませると、ポンドスケーターオルフェノクに裏拳を放って章治と同じく入口付近まで吹き飛ばした。

『あ……ぐ……』

その際の衝撃が相当効いたのか、ポンドスケーターオルフェノクは元の人間態である筈に戻ってしまい、気を失ってしまった。

それを見たデージェクトは無言でカードをバツクルにセットして読み込ませて効果を発動させると、美玖へゆっくりと近づいて行く。

「……………」

「アタックライド…リジェクション！」

「おい、何するつもりや！やめる！！」

それを止めようと身体を動かすが、思うように動かない。

人間の身体を心底不憫に感じながらもデージェクトに制止の叫びを投げかける。

しかしそれでもデージェクトは止まらない。そしてその手が美玖の頭に添えられた瞬間、デージェクトは拒絶対象を宣言した。

「お前の中のオルフェノクを拒絶する」

そう宣言された刹那、ドバツと美玖の身体から大量の灰が流れた。しかし美玖の身体が消える事はなく、そのまま眠っているだけだ。

「い、一体何をしたんや？」

「コイツの中のオルフェノクとしての部分だけを消した。コイツはもうただの人間だな」

「……へ？」

変身を解除しながら呟いたその言葉を聞いて、自分の口から何とも間抜けな声が漏れた。

何故コイツがそんな事をする必要があるのだろうか？

それに、歩も言っていたが彼らはそう言う干渉はしてはいけないのではなかったのではないのか？

そう思っていると彼はブーツをコツコツと鳴らしながら病室から出る時に、小さな声で章治に言った。

「亜由美には感謝しておけよ……」

(……ああ、そう言う事かいな)

その言葉を聞いて章治は妙に納得してしまった。

どうやら亜由美があの時、悲しそうにしていたのを見るのが嫌で、せめて美玖を生き長らせ様と思ったのだろう。

確かに彼女には感謝した方がいいだろう。彼女がいなければ、好太郎がこんな行為をするはずがないのだから。

(ま、なにせよ美玖を助けてくれたんやし、その事には喜ばんな
な……)

「ん……」

「ッ！美玖！！」

好太郎がやったこと憶測を立ててると、美玖が呻き声を上げてゆっくりと瞼を開いた。

章治は美玖の傍まで駆け寄り、彼女の視界に入るように顔を近づける。
やがて眼の焦点があつた美玖は幼少時の顔を認識し、彼の名を呼んだ。

「章……治……？」

「ああ、もう……大丈夫やで……」

章治はそれだけ言つて美玖の手を握りしめた。

これから二人は人間として生きていく事になる。それによつてオルフェノクの時とは違う苦労があるかもしれないだろう。

しかしそれでもオルフェノクと人間が手を取り合える世界を作るために、これからも戦おう……。

人間として……ライダーとして……。

好太郎は病室から廊下へ出ると、すぐに次元断裂を展開してその中へ溶け込んで行った。

その灰色の歪んだ空間の中で、好太郎はここにはいない歩へのこれからの自分の生き方を語り始めた。

「……お前が俺のしたことを知つたらどう思うんだろうな……やはり世界の秩序を乱すものとして敵対するか？それともアイツの彼女が助かった事を喜ぶか？ひよつとしたら亜由美は喜ぶだろうがな……。まあそんな事はどうでもいい……。俺はお前が教えてくれたこの力の使い方で、今までに救えなかつたものも救つてみせる。例え、お

前に拒絶されようともな……」

そう独り言を一通り言い切ると、次の世界へと繋がる出口へと歩いて行った。

歩達がいる世界とは違う別の世界……

その世界にある一つの大きな街に、モスグリーンの長袖Tシャツに、淡い色褪せた青いGパンというラフな格好の、前髪を異常に伸ばした金髪で目元を隠した青年が訪れていた。

現在のこの世界の時間は午後十一時。もうすぐ日付が変わろうとする時間帯で、それでもこの街の至る所に立っている風車は休むことなく回っている。

そんな街のビルの屋上に佇む青年は、青年は大きく欠伸をしながら屋上に設けられた手摺りまで近づいて、眠気眼で眼下に広がる街を一望する。

時々吹く夜風がその前髪を靡かせて、彼の普通よりは整ったどこか外国人を彷彿とさせる顔と、眠たげな半開きの瞼を垣間見せる。

「ふあゝあ……つと……。ここは俺にとつての“最高の寝場所”になるのかねえ……?」

その目と同じ感情を持ち合せた眠たげな声で、語尾を伸ばしながら呟いた。

「……………」

一望し終えたのち青年は手摺りに手を置いて無言で瞼を閉じた。そして次の瞬間には……

「…………グウ」

寝た。

立つたままその絶妙なバランスが取れた状態で眠ってしまったのである。

それは彼の特技でもあり、欠点とも言える“寝る”という行動に誰よりも重要視した性格が起因している。

そのまま完全に夢の中へと旅立って行きそうになったその時……

『きゃあああああ！！』

「ングゴツ！？」

突然ビルの真下から悲鳴が響き渡り、目が覚めてしまった。

一度何らかの騒音で起こされてしまうと、その元凶を完膚なきまでに傷めつけなければ寝るに寝れない。

これはお仕置きが必要だな…特に悲鳴の原因への。

青年はそう思いながら前髪に隠された眉を不快そうに歪め、悲鳴の聞こえた眼下を睨みつけた。

その元凶はこのビルのすぐ真下から聞こえ、そこを見ると火の塊の様な怪人が一人の女性を襲っている光景だった。

アレはこの世界の世界の脅威とされる“ドーパント”と呼ばれる化け物だ。

ドーパントはこの世界にある物の記憶を内包した“ガイアメモリ”という装置を人間の体内に入れることで、その人間の身体を変異さ

せて生まれる怪物だ。

「は……っ！は……きゃー!？」

『よおし……ようやく止まったなあ……』

火の塊の怪人……マグマドーパントは転んでしまった女性へ手を伸ばそうとしている。

こんな光景を目にしましては、助ける以外の選択肢など無いだろう。

「はあく、この世界のライダーは何してんだっつうのおく。こっちは眠いつてのにこれじゃ寝付けねえだろうがあ……」

その様子を見た青年は溜め息を吐くと、これまた眠たそうに語尾を伸ばした文句をこの世界に存在するであろうライダーにぶつけながら右手を前に突き出す。

するとその手元に次元断裂が現れた。しかしそれはすぐに消えるとそこには彼のファッションには不釣り合いなエメラルドグリーンに輝く日本刀が彼の手元に納められていた。

更に左手にも同じように次元断裂を展開させて、手元へ一枚のカードを取り寄せると、手摺りに片足を掛けて飛び降りる姿勢を取った。

「さてつとお……そんじゃ寝る前の運動、始めますかねえ。変身つとお」

「カメンライド……デイバイド！」

そうばやいた瞬間、青年は刀の鍔つばに当たる四角い板状の部分に設けられたスリットへカードをセットすると、ビルから飛び降りた。

そして地面との距離を縮めて行く毎にその姿を変貌させていき、地面との距離がゼロになった頃には先程の青年ではなく、Dシリーズ特有の特徴を兼ね備えたエメラルドグリーンを基調とするライダーが降り立っていた。

「んん？何だお前は、俺の邪魔をするなあああ！！！」

「ハイハイ。随分とウルサイこつてえ。とりあえず、永久に眠つとけえ」

間延びした口調で目の前の溶岩の記憶を取り込んだマグマドーパーにそう言い放つと、後頭部を掻きながらその真つ赤な複眼で睨むと、すぐに交戦が始まった。

第三十四話：I reject the fate（後書き）

加奈「……………」

皐月「お〜い加奈あ〜？もう始まつてるぞ〜？」

加奈「え？あ、そうだった…コホン、加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜！！！」

皐月「どうしたんだよ加奈いきなり出オチしたぞ？」

加奈「ああ、ゴメンね。ちょっと考え事してて……………」

皐月「考え事？」

加奈「次回で私が出るとか言ってたのに私出てないじゃない！！！」

皐月「いやいや、あくまで予定は予定だからな？最悪今回の募集ライダーを登場させるまでだって言ってただろ？」

加奈「でもこれは酷い！悲しい！！作者さんもうちょっと踏ん張ってよー！！！」

カンペ（スンマセン。これが私の精一杯でしたm）——m；）

皐月「まあ前半部分に力入れてた感があるしな。途中で力尽きてても不思議は…ってアレ？加奈、今作者の事をさん付けで呼んでなかったか？何時もは普通に呼び捨てなのに」

加奈「え…？そ、そう？気のせいじゃない？」

皐月「そう言えば何かお前いつもと雰囲気違うよな…イメチェンか？」

加奈「そっち方面行っちゃうんだ！？」

加奈その2「お待たせ〜。じゃあ今回の収録…って私がいる！？」

収録室に入つて来た

臯月「なっ！？加奈が二人！？じゃあお前まさか……」

加奈？「チツ、バレたか……！」 収録室から逃げた

加奈「あっ、ちょ、待ちなさい……！」

臯月「逃がすか……！」

好太郎「臯月、愛してるぞ」

臯月「どわああああ……！なんじゃ今のはああああ……！？」 鳥肌立
つてる

加奈「好太郎さん！いきなり何言ってるんですか！？本編で亜由美にフラグ立てといて速攻浮気ですか……！」

フロッグポッド『臯月、愛してるぞ』 さっきまで加奈が座ってた椅子に置いてある

加奈「しまった！騙された……！」

臯月「あんのリイマジ加奈……今度会ったら容赦しねえ…………！！」
フロッグポッド握り潰してる

加奈「ちょ、臯月！落ち着いて！人が出しちゃいけない力出しちゃ
つてる……！ガジェットのプロ型が無くなって来てる……！」

ドグシャツ！ フロッグポッドが壊れた音

臯月「あ、やっちゃったZ E」

加奈「やっちゃったぜじゃないでしょ……！」

カンペ（それでは本編でまた会いましょう読者の皆さん……！byリ
イマジ加奈）

加奈「あ！向こうにいた……！」

臯月「よっしゃあ！とっ捕まえてやる……！」

その後二人はリイマジ加奈を捕まえようと奮闘したが結局逃げられてしまい、今度の出張版での登場を待つかないのであったそうなの。

第三十五話：ドツベルKノ風の吹く街（前書き）

遂に始まったぜW編！

今回の話ではジャードさんと空風さんから頂いた募集キャラを登場させますよ〜！（。°。°。）

尚、ジャードさんのキャラには何か原案には無い別の設定が付いちやってますけど、気にしないでくださいねジャードさん……f（）^（；）

そしてそして、加奈ちゃんのリイマジも登場、ファイズ編での歩達の後日談と言う内容盛りだくさんでお送りして行きます！！
それではスタートオ！！（。w。）

第三十五話：ドツベルK / 風の吹く街

その女性は深夜の街中を必死に走り回っていた。

まったく見覚えのない道。まったく見覚えのない何本も建っている風車。そして…何が起こったのか全く覚えていない自分。

彼女は気が付くと見知らぬ場所にいたのだ。いや、もし知っていたとしても恐らく何も分からないだろう。自分の名前すら覚えていないのだ。

しかし、今どうして必死に走っているのかは分かる。

「は…っ！は…っ！は……っ…っ！！」

『待てええええ！！』

先程から追いかけて来る火の塊から逃げる為だ。

その火の塊には、まるで岩石の様な下半身が備わっており、それを人と同じように動かしてこちらに迫って来る。

更に炎の中心には人を思わせる顔が形作られており、その眼光はまっすぐ自分を捉えている事くらい、後ろを振り向かずとも容易にイメージできる。

「きゃあああああ！！」

(何で…何で追いかけてるの！？私！？)

女性は悲鳴を上げながら必死に足を前へと動かしながら自問自答した。

何故自分が追いかけているのか皆目見当がつかない。

彼女が気が付いてしばらくしたのち、見知らぬ男がやって来て、そいつが「ドライバーを渡せ」と言い放った途端、メモリスティック

を自分の腕に刺し、今追いかけて来る火の怪人になったのだ。記憶が無くなる前に、何かしたのだろうか？

「は…っ！は……きゃ！？」

しかし今まで走って来た疲労が足に溜まって来たのか、足をもつれさせてしまって転んでしまう。

『よおし…ようやく止まったなあ……』

(誰か…誰でもいいから…助けて……！！)

このままあの火の怪人に捕まってしまうえば、自分がどうなってしまうのか分からないが、少なくとも碌な目に合わないに決まっている。女性は迫って来る火の塊から目を背けて、次に襲って来るであろうあの怪人の高熱を帯びた腕が自分に触れる瞬間に身構えた。しかし、その手が迫って来る事はなかった。

『んん？何だお前は、俺の邪魔をするなあああ！！』

「ハイハイ。随分とウルサイこつてえ。とりあえず、永久に眠つとけえ」

(……な、何が起きたの？)

女性は恐る恐る目を開いてその怪人の方を向くと、そこにはエメラルドの様に輝く鎧をまとった戦士が自分と怪人の間に立ちただかつて間延びした口調で怪人に挑発をしていた。

その戦士が現れてから約半日たった頃……

亜由美と歩は、ファイズの世界から出たのち、いたる所で風車が回っている街中へ出ていた。

時刻は丁度昼ごろと言った感じで、春の温かい微風そよかせが何とも心地よい。

しかし白いスーツと白いソフト帽という、中々に渋いファッションを身に着けた歩の方は何やら不機嫌そうな面持ちで、何やら考え込んでいる様だ。

(やっぱり、好太郎さんがした事が気に入らなかったのかな?)

亜由美には彼が何故思い悩んでいるのかの察しが出た。

正幸との会話を一通り終え、美玖の見舞いに行く事になったのだが、その病院に行くとき美玖はすっかり灰化の症状が治まっていたのだ。

章治の話によると、「好太郎が美玖の中のオルフェノクを消したことで、寿命が元の人間と同じ物になった」とのこと、歩はその話を聞くと「それでは僕たちはすぐに別の世界に行きます」と三人に告げてその場を後にしてしまったのだ。

それに慌てて着いて行く形でちゃんとしたあいさつも出来ずに、こうして別の世界まで来てしまったのだ。

やはり歩にとつて一人の人間よりも世界の方が大事なのだろうか。確かに下手に歴史を改変すれば何が起こるか分かったモンじゃないのは亜由美にも分かってる。

それでも、目の前の人を助けられるんだったら、その先何が起こるうが助けた方がいいのではないだろうか。そんな思いを込めて歩に話しかけてみた。

「ねえ歩。やっぱり、好太郎さんのした事って間違いだと思ってる？」

「……いや、そうは思っていない。でも……」

歩は好太郎のした事もある程度理解している様だが、やはりどこか納得がいかないのか口籠ってしまふ。

歩にとつても、それが正しい行為だったのか分からない様だ。

亜由美はこれ以上話しても進展しそうにないし、歩にもまだ判別が付きそうにないと判断すると、別の話題を持ち出す事にした。

まずはこの世界が一体何の世界なのかと聞こうと思つたが、今日（と言うよりもファイズの世界）での正幸とのやり取りを思い出し、自分の代えの服が必要な事を思い出した。

そうと決まれば、まずはこの話題からだろう。

「それじゃあこの話題はおしまい！とりあえず私の代えの服欲しいからさ、一緒に行こうよ。と言つても私お金ほとんど持ってないから歩に買って欲しいんだけど、いいかな？」

「……服？」

「ほら私って、歩と一緒に旅する事になつてからずっとこの制服しか来てないんだよ？女の子だったら着替えの一着や二着欲しいがるもんだよ。だからお願い！買って……？」

亜由美は“服”と言う単語にキョトンとする歩に、手を合わせて懇願した。

毎回服装が勝手に変わる歩にとっては些細な問題なのだろうが、こちらにはそんな都合のいい能力なんて持ち合わせていないし、財布は元の世界に置いてきた通学カバンに入れっぱなしだったので、今の亜由美の所持金は、スカートのポケットの中に入れていた小銭入

れに入っている500円くらいしかないのだ。

着替えが無いとなると女子にとってはぶっちゃけ死活問題。

それを理解したのか、それともこれ以上好太郎の話題をしない様に気を利かせたと思ったのかは分からないが、歩は一拍置いて「いいよ」と言っただけだ。

亜由美は心の中で小さくガツポーズをし、歩の手を引いて早速目当ての洋服店がありそうな人が賑わう街の中心へ目指す事になった。

二人が通り過ぎた看板にはこの街のPRを兼ねた風車の形をしたマスコットと、来訪者を歓迎する“ようこそ！風邪の吹く街・風都へ！！”という宣伝文句が描かれていた。

都心から少し離れた棧橋の手摺りに凭れ掛かったまま眠ってた前髪の長い金髪の青年……ヴァン・アキサメは目を覚ました。

昨夜、劣勢になって逃げ出したマグマドーパーントを倒そうと追っていたのだが、途中で見失ってしまい仕方なく諦めてここで寝る事にしたのだ。

常人であればこんな場所で絶対に寝ないであろうが、彼の場合はどこであろうがとにかく寝ようとする。

「……………ん…今、何時だあ？」

ヴァンは眠気眼で徐にそうぼやきながら腕時計を見た。

時刻は既に12時を迎えており、彼が眠りについてから既に時計の短針が一周してしまっている。

「ああ、もうこんな時間かあ」

そう呟きながら空を見上げた。

空にはうっすらと白い雲が薄く膜を張っており、青空を淡く染めている。

それをしばらくボーッと見続けていたが、やがて大きく欠伸をする
と溜め息をついた。

(やっぱりここでもねえ……ここでも“声”が聞こえる……)

ヴァンは随分前から不眠症だ。

一応浅い眠りになら就けるのだが、そこから更に深い眠りに入ろう
とするとあの時の“声”がフラッシュバックしてしまう。

この力を手に入れてからは、何時か声の届かない場所に辿り着ける
のではないかと様々な世界を渡って来た。

しかし自分でも分かっているのだ。例えば世界の果てだろうが異世界
だろうがどこまで行っても“声”は構わず追って来る。

この“声”は一生自分に纏わりつくだろうが、そんな運命なんてま
っぴらゴメンだ。

(ま、ここで立ち往生しても仕方ねえし、朝飯でも食いにいくかね
え……)

手摺から身体を持ち上げてとりあえず遅めの朝食(と言つ名の昼食)
を手に入れる為に都心へと向かおうとした。が……。

「……何これホームレス？」

都心へと向かう進路方向に、どこかで見覚えのある人物がうつ伏せに倒れていた。

ヴァン自身は眠気が増していたので覚えてはいないが、見覚えがあつて当然だ。

何故ならその人物は昨夜マグマドローパントに襲われていた女性だったのだ。

後ろの髪を三つ編みにした長い茶髪で、その下に見える上の服は濃紺のカーディガン、下は白いショートスカートという誰がどう見ても女性と断言できる容姿だ。

何時からそこに倒れていたのか分からないが、少なくとも自分が寝ている間になんやかんやあつて倒れてしまったのだろう。

そのなんやかんやと言うのが何か分からないが、ヴァン自身にも分からないのだから仕方がない。

ただの酔っ払いであればそのまま放置してもよさそうなのだが、こんな美人（推定）をこのままにしておくのは些か良心が痛む。

ヴァンは軽く後頭部を搔いた後、その女性の傍でしゃがんで肩を揺さぶった。

「おーい、起きろおー。もう昼だぞおー」

暢気な間延びした口調で声を掛けながら揺さぶり続ける。

するとやがて「うう………」と言つ呻き声が女性から聞こえ、ゆっくりと顔を持ち上げた。

(おう…こりゃ美人だ……)

彼女の顔はどこかでモデルをやっているもおかしくないほど整っており、自分より二つか三つほど年上のクール系なお姉さんと言った感じた。

最初は目の焦点が合っていなかったが、徐々に意識をハッキリさせていく事と比例して目に意識が宿って行く。

「……貴方は？」

「ん、俺？ヴァン・アキサメ。アンタは？」

ようやくヴァンの存在を認知出来たのかそう訊ねて来たので、簡単に自己紹介をして今度はこちらから彼女と同じように名前を訊ねた。

「私…は………分からない」

「………はい？」

「何も…思い出せない………」

「おいおい、今時記憶喪失ネタとか古いぞお………」

女性からの予想外の返答に、誰にでも無くぼやくヴァンであったが、彼女をこのままにしておくのも何なので、まずは彼女の持ち物から調べる事にした。

「まあまずは自分のポケットにあるもん全部出してみ。免許証とか入ってるかも知れないしい」

「あ、はい」

そんなやり取りをしながら立った葵は、まずカーディガンのポケットに入っていた財布を出して中を開くと、三万ほどの所持金と大型

二輪の免許証が入っていた。
そして免許証の名前の欄には「来栖麗奈^{くるす れいな}」と記されていた。

「来栖麗奈……らしいです……」

「ふうん、そうかい。それで、何でこんな所で何時の間にもやら倒れてたんだあ？」

「それは……見覚えのある物を見かけて……それを追いかけている内に気を失ってしまっ……」

「見覚えのある物？なんだそりゃ？」

「………すみません、それ以上は言えません。それに関する記憶もないんですけど、そう簡単に人に教えてはいけない様な気がして……」

……

「あっそ。まあ身元も分かったわけだし、俺はこれで失礼させてもらうぜえ〜。面倒事嫌いだし〜」

「あ、はい。ご迷惑をおかけしました」

その会話で打ち切りにし、ヴァンは朝食を食べに都心へと歩みを進めようとしたが……

『ヨツシャアアア！見つけたぜえええええ！！』

その絶叫と共に桟橋の下にある水中から何かが飛び出し、麗奈の後ろに降り立った。

その外見は一言で言えば巨大な古代エビだった。

大きな黒い目を持ち、ある種の愛好家に愛着を抱かせそうな瞳をしているが、その下にある甲殻類独特の口がまた不気味さを醸し出している。

その謎の生き物の名はアノマロカリスドールパント。昨夜逃がしたマグマドールパントの同族である。

『さあ、お前の持つてるドライバーを寄越しなあ!!』

「きゃああ!!」

「ゲツ、気色悪いの出たあ……」

麗奈がパニックに陥っているのを余所に、ヴァンはアノマロカリスドーナツの容姿を見てテンションが駄々下がり状態だった。

しかし、麗奈を放っておくわけにもいかず、仕方なく一人と一体に駆け寄り……

「気色悪いんだよ変態」

『ぐべつ!!?』

アノマロカリスドーナツの顔面に飛び蹴りを喰らわせた。

それには堪らず踏鞴を踏み、その隙に麗奈に逃げるように促す。

「お前はとつと離れた方がいいぜえ。後は俺が処理しとくから」

「そ、そんなことできません!第一、それは人の敵うものじゃありませんよ!?!」

「大丈夫大丈夫。俺、こつこつヤツ専門だし」

そう言いながら次元断裂を展開させ、そこからエメラルドグリーン
の刀身を持つ刀…ディバードライバーと、更に一枚のカードもクラ
インの壺から取り出す。

「え!?!」

『イテテ…ん?何時の間に武器なんか持ったんだ?』

目の前の不可思議な現象に麗奈は思わず驚嘆し、その現象を見てい
なかったアノマロカリスドーナツは顔面に蹴りを入れた相手が何

時の間にか得物を持っている事に首を傾げる。

「さてつとお……海老の活け造りでも作ってみますかねえ。食わないけどお」

そうばやきながらヴァンは、デイバイドライバーの鐔に設けられたスリットにカードを挿入した。

「カメンライド……」

「変身つとお」

電子音声が鳴り響いたのちに音声コードを間延びした口調で宣言して剣を虚空に振った。

「デイバイド！」

今度はカード認証音声が発せられ、剣を振った箇所にはパツクリと次元断裂が開き、それがヴァンへと迫ってその身体をまるで布で覆い隠すかのように包み込んだ。

更に灰色の人型の形状になったヴァンに、次元断裂が展開していた場所に剣をふるった時に同じく出現していた二枚のライドプレートが縦回転しながら灰色のノツペリとした顔にV字に突き刺さる。

その瞬間そこからモスグリーンに身体全体が染め上がるが、すぐに鮮やかなエメラルドグリーンへと変色し、二つの赤い複眼が光ってその変化を完了させた。

黒地のスーツにエメラルドグリーンのシャープな装甲。腹部に設けられたそのライダーを示すクレストが映された画面が付いている無骨なバックル。

その真上から二股に別れた白いラインでV字を描いた胴体。その先端は肩にまで達しており、その辺りで丁度ラインが真横に曲がっている。

そして顔に突き刺さったライドプレートは顔に完全に埋め込まれる形で突き刺さっており、顎から頭頂部へ突き出している。それはさながら二本の触角に見えなくもなく、二枚のプレートの一角に青いシグナルポインターが付いていた。

その変化を垣間見た麗奈とアノマロカリスドーパントは呆気に取られるが、アノマロカリスドーパントは逸早くこの事態に復帰し、目の前の異形に疑問と驚愕の声を掛けた。

『お前、まさか仮面ライダーか!?!』

「アンタの思ってるヤツとは多分別人だと思うけど、確かに俺は仮面ライダーだぜえ。仮面ライダーディバイド…とでも呼んでくれえ」

そのライダー…ディバイドは後頭部を軽く掻きながら、ヴァンと同じ口調でアノマロカリスドーパントに言い放った。

「仮面…ライダー……」

麗奈はその単語を聞いて頭を押さえながらその聞き覚えのある言葉を反芻した。

都心の中心部で目当ての物を一通り買い終え、亜由美はもう一つ重要な事を思い出したので、歩に訊ねた。

ちなみに荷物は全部歩が持っていたりする。

その理由は「僕が荷物持つよ。女の子には辛いだろうからね」という、歩からの直々の申し出があったからだ。

別に半分くらいなら自分が持つと言うのに、彼は頑なに全部持つと言ったのだ。

そこまでしなくていいのと思ったが、折角なので持ってもらう事にしたのだった。

「ねえ歩、ここって一体何の世界なの？」

「ここは“サイクロンの世界”って言うらしいよ。それも、僕たちが渡るべき九つの世界とは無関係の世界だね」

「え？じゃあ、何でここに来ちゃったの？」

「渡るべき世界じゃないにしろ、ここに来たと言う事はこの世界に何らかの異常が起きてると言う事。それを放っておく事なんて、出来る？」

歩は分かりきっていて亜由美にそんな事を聞いている様だ。そんなの、答えは一つに決まってるだろう。

「出来ない。でしょ？」

亜由美がその答えを導くと、歩は満足そうに微笑んだ。

やはり自分と同じ答えが返ってきて嬉しいのだろうか。歩は何時もよりテンション高め（傍目から見ると分からないが亜由美には何となく分かる）に次の行き先を告げようとした。

「そつ言う事。じゃあ早速この世界の移住先に行つて……」

「^{かける}駆！ やつと見つけた！！」

歩が言い切る前に突然背後から何やら聞き覚えのある女性の声が聞

こえたかと思うと、その何者かが歩の腕を掴んでそちらへ振り向かせた。

(ん？なんだろ今の声、どっかで聞いた事がある様…な…)

亜由美もその人物を見る為に振り返ると……思わず口が開いて動かなくなってしまった。

「……………ッ！！」

「あ……すいません、人違いでした……………」

「いや、気にしなくていいですよ」

歩は普段通りに抑揚のない口調で接しているが、彼女の顔をよく知る亜由美にとってはそうはいかない。

一見すると男性が着ている様な白いYシャツの上に黒いベストを身に着け、歩とお揃いの白いソフト帽を被った小柄な女性……いや、少女だった。

癖の強そうな亜麻色の髪を肩辺りまで伸ばしており、ツリ目な印象があるが美人の部類に入る事は間違いない。

まさしくその少女は…藤原加奈その人だった。

「加奈！！？」

「え？あの、加奈って……………誰？」

「何言っちゃってんの！？あの時モゴガッ……………！！」

「ああ、すいません。この子の知り合いに似てたもので……………」

「ンムウーッ！！」

亜由美が言い切る前に歩がその口を塞いで黙らせた。

歩の手を振りほどこうと必死に暴れるが、まるで鋼鉄の如くビクと

もしない。

ヤバイ…そろそろ窒息しそう……。息が詰まり、意識が朦朧として来たその時……

「あの…そろそろ放してあげたらどう？苦しそうよ？」

「あ、ゴメンね」

「ブハアツ！！」

加奈らしき女性の言葉で、歩が亜由美を締め上げている事に気が付き、ようやく解放された。

ああ、空気がおいしい……。

その様子を見ながら笑いを堪えた表情で加奈らしき女性は、亜由美に話し掛け始めた。

「私って、そんなにアナタの知り合いに似てるわけ？」

「……ウン。私の幼馴染に、大分……」

亜由美は息を整えながら話しかけて来る彼女を見た。

その姿は完全に彼女の生き写しであるが、話し方はまるで他人事の様であった。

いや、実際に他人事なのだろう。本物の加奈はあの時間の止まった世界でずっと止まったままなのだ。

つまりこの目の前の加奈は全くの別人。歩が言う所の異次元同位体なのだろう。

早くまた加奈や皐月に会いたいな……と若干ホームシックに浸っていると、その加奈らしき女性は亜由美の言葉を聞いてイタズラっぽく話した。

「あらそうなの？でも一応言っておくけど多分私、アナタよりずっ

と年上よ?」

「……へ?」

加奈らしき女性の突然の年上宣言に、思わず呆けた声が漏れた。そのチンチクリンな体型で一体何を……。

「……ねえ今、すつごく失礼な事考えてなかった?」

「え!?! いやいや! そんな事これっぽっちも考えてナイデスヨ!?!」
「最後が片言になってるわよ……」

もし目の前の人物が加奈本人だったら間違はなく脳天チヨップが襲い掛かって来ていただろうが、しかし彼女はそんな事はせずに深く溜め息を吐くと、諦めた感じでぼやいた。

「ハア〜……。確かに私って子供みたいな体型だからそう思われるのもしょっちゅうだけどさあ……流石に28にもなってこれはねえ

……」

「28!?!?」

いくらなんでも歳離れ過ぎでしょ!?! そう叫ぼうとしたが、亜由美が28と反芻した時点でちよつと睨んできたので叫ぶに叫べなかった。

正直、加奈より怖かった。

「それで、貴女の事は何と呼べばいいんですか?」

先程から黙って見物していた歩がこの空気を打破すべく(単に空気読んでないだけかもしれないが)話題を彼女の名前にすり替えた。

「あ、そう言えばそうですね。何て名前なんですか?」

心の中で歩にサムズアップしつつ、同じく女性に亜由美は問い掛けた。

「ああ、私の名前は藤原楓ふじわらかえでっていうの。アナタ達は何て言うの？」
「私は須藤亜由美って言います。それでこっちは……ってアレ？歩？」

歩の方を振り向くが、そこには今まで歩が持ってくれていた荷物と何かの書き置きがあるだけで、その書き置きを読むと、走り書きでこう書かれていた。

“しばらくその人と一緒にいて。出来るだけ早く戻る”

「……ってまたですかあああ！？」

亜由美は龍騎の世界でのやり取りを思い出しながら、やり場のない怒りを心地好い風が吹く青空へと叫ぶ形でぶつけたのであった。

「何だか大変そうね……」

そしてそれを動物園にいる動物を珍しそうに見るような目で、暢気に楓は呟いていた。

(確か、この辺りで感じたね……)

歩はある気配に勘付いて、都心から少し離れた港まで来ると、あたりを見回した。

何故ならこの辺りで自分と同じDシリーズの気配があったからだ。それも近づく毎に強さを増していき、更にもう一つDシリーズがこの世界に来ていた事が判明した。

一つの世界にDシリーズが三つも来ている。しかもその内の二つが好きな勝手に事象を弄ってしまう可能性は極めて大だ。

そうと決まればできるだけ早く接触して何かやらかす前に釘を打っておく必要がある。

そんな事を考えながら棧橋の方を見かけると、それはいた。

エメラルドグリーンシャープな装甲に、顔にV字に突き刺さった二枚のライドプレート。

そして装甲と同色の刃を持った日本刀型の武器。間違いなくDシリーズだ。

それを視認した瞬間、歩の中にそのライダーの情報がディーゼントドライブを通して伝わってきた。

（仮面ライダーディバイド…相手の力を分割し、一時的に取り込む能力を持った“アビリティディバイディングシステム”……。Dプロジェクトに於いて、相手の能力の半分を奪って、その場で分析させる事を目的とさせている…か……）

どうやらアレはサポート寄りのDシリーズの様だが、戦闘力はそれなりに高い。

現に今、ディバイドが戦っているアノマロカリスドーパントを圧倒している。

どうやら近くにいる腰が抜けてへたり込んでいる女性を守るために

戦っている様だが、彼女もDシリーズであることもまた事実だ。彼女が一体どんなシステムのDシリーズなのかは、変身した状態を見ていないため不明だが、少なくとも今は変身できないようだ。

（まずはあのドーパントを何とかするべきかな？）

デイバイドにはシックスエレメントを素体の状態のままに変質させる能力は備わっていない。

このままでは、中の人間も確実に殺してしまう可能性も高い。そうなればこの世界で本来死ぬはずのなかった人間が死ぬという事象が起きかねない。

そう思い立った歩は、その棧橋に無言で近づいて行った。

麗奈はデイバイドと名乗った戦士とアノマロカリスドーパントの戦闘をその目に焼き付けていた。

アノマロカリスドーパントが口から何かを牙の様な形状の弾丸の様に吐き出して来るが、デイバイドはその手に持った剣を片手で振り回す様に動かしてその弾丸全てを叩き落とすと、今度はこちらの番だとばかりにアノマロカリスドーパントに接近し逆袈裟に剣を振るって火花を散らさせた。

「あらよつとお」

『ぐおあつ！？』

緊張感のない掛け声にも関わらず、その一閃はなんの迷いもなくただただ敵を斬り付ける。

アノマロカリスドーパントはその斬撃に溜まらず踏鞴を踏み、さらなる追撃を許してしまう。

「もう一発つとお」

『ぎがつ！？』

そんな圧倒的な戦闘を見ながら麗奈の頭の中である光景がフラッシュユバツクする。

深紅と黒のあの戦士に似たモノが苦しそうに何らかの施設で暴れ回り、それに必死に手を伸ばしながら駆け寄って行く自分……。

それ以降の事が何一つ思い出せないが、自分が仮面ライダーと呼ばれる存在と、何らかの関係がある事は間違いなさそうだった。

(私は…一体何者なの……ん……?)

そう思っていると、コツツコツツと言う靴を鳴らす音がこちらへ近づいてくる音が後方から聞こえて来た。

何なのだろうかと後ろを振り返ってみると、白い服と帽子を身に着けた紳士風の男がこちらに歩いて来ているのが目に入った。

その目はまっすぐにデイバイドとドーパントの戦闘を凝視しており、それに何の躊躇いのない足取りで、コツツコツツと足音を鳴らしながら、ただただその渦中へと近づいて行く。

「あ！来てはいけません！！」

麗奈はその男に警告を発するが、彼はそれを無視してデイバイドとドーパントに近づいて行く。

「ん？何やってんだお前？今忙しいからあっち行ってる…よつとお
！」
『ぐえあ！？』

デイバイドもその存在に気付き、離れるように警告しながら日本刀型変身ツール・デイバイドライバーで迫りくるドーパントを片手で切り払う。

腹部から激しく火花を散らしながら仰向けに倒れ、その瞬間にドーパントもようやくそのイレギュラーの気配に気づく。

『ああ！？見てんじゃねえよゴラァ！！』

そうアノマロカリスドーパントは一喝すると、まるで唾でも吐き捨てるかのように、男に向かって口元に生えている牙を口から飛ばした。

「危ない！避け……ッ！？」

しかし、その牙の弾丸は男に当たる事はなく、目の前に突如として現れた灰色に濁った窓の様な物にぶつかってポトリと落ちていった。

「え……？？」

「……ほおっつ。なるほどなあ」

『な、何しやがったんだ teme…ブフォ！？』

麗奈が呆気にとられ、デイバイドが間延びした口調で納得し、丁度立ち上がったドーパントが言い切る前にその灰色の窓はドーパントの前面にぶつかって貼り付いた。

『な、何だこの壁！？かてえのか柔らけえのかよく分かんねえし身

動き取れねえ!!」

(な、なんか…ゴキブリみたいになってる……)

ドーパントは次元断裂から離れようともがくが、それは遠くから見ればゴキブリが畏に掛かってカサカサ動いている様な感じになっていた。

しかも麗奈はその裏面を半透明の壁越しに遠くから見えてしまっているので、気持ち悪さが増大している。

「……君には少し離れた所にも行つてもらおうか」

『ま、待て！俺はその女に用が……』

その紳士風の男はそう抑揚のない淡々とした口調でそうドーパントに言い放つと、ドーパントが再び何か言いきる前に窓の中に飲み込まれ、その窓ごと姿を消した。

歩はドーパントを人気のなさそうな場所まで転移させると、呆然とこちらを見ている女性の方へ振り向いた。
まあすぐに帰って来れるだろうが、帰って来た頃にはここにはもう誰もいないだろう。

「ア、アナタ達は一体……」

「君の同類…とでも言っておこうかな？」

「おいそいつ、記憶喪失らしいからそんな事行つても分かんねえと思うぞあ〜」

「……成程ね。それで変身しなかったのか」

デイバイドは変身を解除しながらそんな緊張感の欠片もない口調で歩に話しかける。

歩もその内容に納得し、頷きながらその女性に近づいて手を差し伸べた。

「立てるか？」

「あ、はい。ありがとうございます……」

「それにしても、アレを出したって事はアンタもひよっとしてライダーなのかあ？それにその言い方だと、麗奈もライダーみてえだが……」

デイバイドであった金髪の青年は、目を覆い隠すほどに長い前髪からチラリと見える半開きの瞳で歩とその手に捕まって立ち上がる麗奈と呼ばれた女性を見据える。

それが警戒している物なのか、それとも何とも思っていない物なのかは歩には断定できないが、少なくとも後者の可能性が高い。

「まあ、それは順を追って説明させてもらっよ。“アビリティデイバイディングシステム”・仮面ライダーデイバイド」

そう判断すると、歩は二人に自分の素性と目的を明かす事にした。

第三十五話：ドツベルKノ風の吹く街（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月と！」

翔太郎「翔太郎と」

フィリップ「フィリップの」

加奈・皐月・翔太郎・フィリップ「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「さあ遂に始まりましたW編！」

皐月「今回はW編第一回と言う事で、恒例になりつつある原作ゲストを交えてお送りして行くぜ〜！」

フィリップ「成程。それで僕達が呼ばれたのか」

翔太郎「でもよ、俺達って今後出て来る事ってあんのか？」

カンペ（今のところその可能性は限りなくゼロですm（|）| m（|）ただ面白そうだったからお二人を呼んだだけですよーw（・）（）

745

翔太郎「これだけのために俺達呼んだのかよ!？」

フィリップ「落ち着きたまえ翔太郎。逆に考えれば本来出てくる筈がなかった僕達が、後書き限定とはいえ出て来れたんだよ?これだけでも奇跡じゃないのかい?」

加奈「そうですよ。そして、その主人公の役を担っているのがこの私、藤原加奈！」

皐月「……のイメージ・藤原楓なだけどな」

加奈「ちよつと皐月!何でそこで水を差すのよ!？」

翔太郎「しかも今、何気に軽いネタばれしなかったか!？」

フィリップ「問題ないよ翔太郎。藤原楓のファクションを見る限り、アレは間違いなく翔太郎ファクションだからね。そこまで分かっていたら誰が今回の世界のライダーかなんて、すぐに当たりが付く」

翔太郎「いやいや、この作者つてメチャクチャ話捻るだろ！もしかしたら違うヤツつて可能性もあるだろうが！」

フィリップ「しかも彼女が最初に言った駆という名前…一体誰なんだろうか……？」

翔太郎「勝手に推理モードに入るな！！」

皐月「ま、そいつも重要な人物になって来ることは間違いなさそうだな」

加奈「それに、今回の話だけでまさか二人も募集キャラが出て来るなんて……」

フィリップ「ちなみに今回出て来たヴァン・アキサメと来栖麗奈は、それぞれジャードさんと空風さんが送ってくれたキャラなんだそう。本来だったら来栖麗奈は次の章で登場させる予定だったらしいが、伏線を入れる為にここで登場させる事にしたらしいよ」

翔太郎「今後、どうなっていくか期待させてもらうぜ」

加奈「それから作者、募集キャラに力入れ過ぎて私の出番を疎かにしないでよね。したら脳天チヨップかますからね」

カンペ（。。。；）ブルブルガタガタ

フィリップ「ところで一つ思ったんだが、やはり藤原楓も藤原加奈と同じく脳天チヨップをするのだろうか？」

皐月「それはない…と、思うぜ……」

翔太郎「いやむしろ、もっと別の事をするんじゃないか？例えば安樹子みたいにスリッパで叩くとか……」

フィリップ「ではこういうのはどうだろうか？チヨップの箇所が頭頂部ではなく、人体の弱点である脇腹や股か……」

加奈「そこ！下ネタ厳禁！！」 フィリップへ脳天チヨップ

フィリップ「アタツ！？こ、これが脳天チヨップか……。しかも上手く行けばこれで瓦を割る事が出来るとは…興味深い……」

翔太郎「何でもかんでも興味を持つんじゃないやねえ！！」

梶月「ま、今回のあとがきラジオはここまでだぜ」

フィリップ「感想や質問・コラボ企画も募集しているよ」
タンコ
ブ出来てる

加奈「タフねこの人……」

翔太郎「それがフィリップだからな」

第三十六話：ドツベルKノ逆巻く疾風（前書き）

あと少しで今回の主要人物を書けるんですけど、この調子だと馭さんの詳しい詳細が明かされないうままだから、どうしてもキャラ紹介が終盤になってしまふ……どうすれば……（へ　；）
あ、そうだ！W編ならではのあの手があった！！（。　。　）
詳しくはあとがきラジオで報告します！！
それでは本編スタートオ！！（　・w・　）

第三十六話：ドツベルK / 逆巻く疾風

風都タワーの最上部に作られた広い部屋……。

ここは建設当初からあった物ではなく、つい最近秘密裏に作られた部屋だ。

当然一般人が入って来る事もなく、ここを作り上げた人物とその関係者しかこの場所を知らない。

その鉄色の壁と天井が密室空間を作り出している部屋には現在、デ
イバイドから逃げ切ったマグマドーパントだった男・河壁^{かわかへ}と、この
空間を作り上げた張本人である黒いレザースーツを着たウエーブ掛
かった茶髪の男性、そして部屋の中央に設置された拘束具にまるで
死刑囚の様に座らされているボサボサの黒髪の男が二人を睨みつけ
ながら鎮座していた。

河壁はこの二人の男の名前を知らない。ただレザースーツの男から
力を手に入れられるという理由でマグマメモリを受け取っただけだ
し、拘束具に縛られている男も、ただ必要な人材としか教えられて
もらっていない。

こんな怪しい奴に本来なら関わり合いたくはないのだが、もし抜け
ようとしたらどうなるかなんてすでに分かっている。殺されるのだ。

以前抜けようとした奴がいたのだが、そいつは自分を含めたこの男
の協力者たちの前で、拘束具の男が変身したドーパントに惨殺させ
られたのだ。

「……………」

河壁は目の前にいるレザースーツの男に委縮したように身を縮めな

がら、その男が何か言いだすのを待った。
男は河壁から謎の仮面ライダーの報告を聞いてからずっと無言を貫いていたが、やがてその重い口を開いた。

「……つまり、あの女の他にも例のドライバーを持ったヤツがいるって事だな？」

「は、はい……そうです……」

河壁は顔を強張こわばらせながらも何とか応える。

この男は常人には無い威圧感を常に発し続けており、本当に同じ人間なのかさえも疑わしい。

「そうか……ならそいつのドライバーを奪うのもアリだな……」

男はニヒルな笑みを浮かべてそう呟いたのち、懐からある物を取り出した。

それは正規の物より一回り大きな黒いUSBメモリで、その中央にはイニシャルの“J”が描かれている。

それはガイアメモリと呼ばれる代物で、人を超人に変える事のできる魔の産物で、このメモリの正式名称はジョーカーメモリ。“切り札”の記憶を内包したメモリだ。

男はジョーカーメモリを手にとってニヒルな笑みを浮かべたまま拘束された男に近づいて行く。

「……ッ!? ソーツ! ソーツ!」

それを取り出したのを見た拘束された男は、猿轡さるわんをされた状態で必死に拒絶の態を示した。

その目は恐怖の色に染まっており、これからその男が自分に何をし

ようとしているのが分かってからこそその反応だ。
しかしレザースーツの男はそれを分かっているにも関わらず、まるで軽いイタズラをする子供の様な態度で口を開いた。

「ほう、そんなにコレが欲しいのか？随分とジャンキーなヤツだな。そんなに欲しけりゃくれてやるよ。にしかかける西方駈……」

「ジョーカー！」

男はそのジョーカーメモリの下部に設けられたスイッチを押して起動させると、電子音声・ガイアウィスパーが発せられる。

それと同時に駈と呼ばれた男の首筋にパソコンにある様なコネクタが出現し、男はメモリをそのコネクタに差し込んだ。

「ングッ！グウウウー！」

メモリが差し込まれると、それは駈の体内へと埋まって行き、それが苦しいのか駈は苦悶の悲鳴を上げる。

やがて完全にジョーカーメモリが駈の体内に入り込むと、今度はその身体に変化が訪れる。

駈の目が怪しく紫色に光り、全身に禍々しい紫色のノイズに包まれると、その姿を変貌させていく。

駈の身体は一回り盛り上がり、ノイズが晴れた所からその変貌した姿を曝していった。

黒と紫のストライプの服と、それと同色の道化師のような帽子。
黒いペルソナから垣間見える紫色の鋭い眼光と黒く硬質な印象を与える皮膚。

ジョーカードーパント。それがこの西方駆と言う人間だった怪物の呼称だ。

『……………又ウンー!!』

ジョーカードーパントが拘束具を力任せに引き千切って身体の自由を取り戻す様子を見ながら、男はジョーカードーパントに言い放った。

「さあ、例の女を探し出せ。邪魔する様なヤツがいたらそいつもここへ連れて来い」

『……………』

ジョーカードーパントはその命令に無言で頷くと、帽子を被り直す仕草をしながら部屋から出ていった。

河壁はその一部始終を見てみると、邪悪な笑みを浮かべた男がこちらを振り向いてきた。

男から発せられる威圧感に思わず身体が竦むが、男は大して気にした様子もなく河壁に言い放った。

「お前にはアイツとは別行動をとってもらう。それにはお前の他に何人が向かわせてやるから、安心して行って来い」

「あ、ああ……………」

何とか頷き返しながら河壁は思った。やっぱりコイツは真正正銘の悪魔なんだと……………。

「へえ、随分と手の掛かるお兄さんのね」

「ハイ、まあ……」

歩がどこかに行つてからは、とりあえず楓と一緒に行動する事となつたのだが、一応歩には自分がどこにいるのか分かるらしいし、それほど心配してはいないが、一体何があつたのだろうか？

そして今、亜由美は楓と荷物を半分ずつ持って世間話をしながら、楓の自宅兼仕事場まで一緒に歩いていた。

この女性は加奈と似ているようでどこかが違う。こうして話しているとやはり加奈その元なのだが、やはり楓は加奈とは違う点が多い点がある事が分かった。

まず年齢。これは最初の時に聞いたから別に今はそれほど気にしていないが（気にしてはいけないとも言つ）、考え方も大分違つていた。何と彼女は私立探偵をして生計を立てているのだそうだ。

以前から加奈には探偵が似会つと思つていたが、当の本人は「どうせなるなら国家公務員」の一点張りで、探偵になる気は毛先一本分もなかつたのだ。

しかし楓はと言つと「縛られるのは嫌いだから」と言う理由で警察よりも探偵稼業を始めたのだそうだ。

でも一人だと何かと不便ではないかと訊ねようとした時、亜由美の脳裏に楓のあの台詞が蘇つた。

「そう言えば、歩を駆つて人と勘違いしてましたけど、その人って誰なんです？」

その人物が一体どのような人物なのかは大体察しが付いていたが、あえてそう訊ねた。

少なくともあの歩の服装を見てその人と勘違いしたのだから恐らく

同業者か何かなんじゃないかと思ったのだ。

しかし楓はその質問を聞くと、どこか寂しそうな面持ちになり、ポツリと答えた。

「私の相棒よ……。もう二週間以上も行方不明になってるの……」

「あ…その、ゴメンナサイ。嫌な事聞いちゃって……」

どうやらこの話題には触れてはいけなかった様だ。

楓にとって駆という人物は意外と特別な存在で、そんな存在が突然いなくなってしまうえば、それは寂しいだろう。

「そんなに気にしなくていいわよ。どうせその内ひよっこり帰ってくる筈だから。私はそう信じてる」

しかし楓はすぐに明るい表情になって、亜由美にそう言った。

それは単なる寂しさを紛らわす物ではなく、本心からの言葉なのだろう。

亜由美はその強い意志を感じ取って、じゃあ自分はどうなのだろうと考えた。

(信じる…かぁ……歩は私の事を信じてるのかなぁ……?)

思い出したのは歩の過去を見たあの時の出来事だ。

そこで出会った土と言う青年は、この先には忘れたくても忘れられない出来事が待っていると言っていた。

もしその先に起きた出来事を見て、彼を受け入れていれば彼は自分の事を信じていたのだろうか？

歩は今もずっとその過去を引きずっている可能性は十分にある。

彼は自分の心の内をそう簡単に話そうとしないため、溜めこんでしまう癖がある。

そのことで龍騎の世界で歩を説教した事もあったが、未だに心の内を開く様な事は話していない。

あったとしても、精々夢で何があったかを話した時くらいだ。

『うわああああ！！』

そんなに自分は頼りないのかと若干自虐的な思考に陥ってしまったっていると、遠くの方から多くの騒然とした悲鳴が聞こえて来た。

その悲鳴は楓にも聞こえており、彼女は険しい表情をして「まさか……」と小さく呟いた。

そして次の瞬間に楓はその悲鳴が聞こえてきた方向へと一目散に駆け出して行った。亜由美の荷物の半分を放り投げて……。

「ええちよ、投げないでくださいよもう！」

亜由美はそう怒鳴るが楓は既に亜由美からかなりの距離を離しており、聞こえているか微妙だ。

仕方なく亜由美は近くに誰もいない事を確認してから、自分のクラインの壺に荷物を納めると、楓の後を追いかけた。

「へえ、そんな計画なんてあったんだなあ」

「それって本当なんですか？ 私にはとても信じられませんが……」

「まあ知らなくて当然だし、そう簡単には信じられないだろうね」

歩はヴァンと麗奈と共に、港から街へと移動しながら自分の目的とDプロジェクトの大まかな概要を説明した。

どうやらヴァンの方は好太郎の時とは違って、他のDシリーズの事はある程度知っているようだったが、麗奈に至ってはそれ以前の問題だった。何せ記憶を失っているのだ。

どうも彼女のドライバーは彼女自身のクラインの壺の中へ入れているようなのだが、その取り出し方さえも忘れてしまっており、彼女がどんなDシリーズなのかは未だに不明だ。

「それで、その代行者様がこの世界に来たってえ事は、何かしらの異変がこの世界で起きてるってえ事だな？」

「まあそうなるね」

「その異変って何なんですか？」

「それは僕にも分からない。とりあえず今は僕の連れを迎えに行かないといけないから、まずはそこまで……」

「おっと待ったあ……」

歩がこれからの予定を話そうとすると、ヴァンが両手で歩と麗奈の進行方向を塞いで立ち止まった。

「どうしたんですかヴァンさん？」

それに麗奈が疑問を抱いてヴァンに話しかけるが、歩には大体の見当がついた。

「もしかして、敵？」

「ああ、何かいや々な気配が向こうの角からして来るぜえ……」

俺のこういふ勘は結構当たるからなあ……」

「……麗奈さんは隠れてた方がいいよ。多分、狙いは君だろうからね」

「は、はい……」

そう言っただからせると、ヴァンはクラインの壺からドライバーを取り出して、カードを構え、歩は何時でも次元断裂を展開できるように準備をした。

歩が次元断裂で相手の動きを止めて、その隙にヴァンがメモリブレイクさせるといふ算段だ。その方が効率が良い。

「あくまで事情を聞き出すからね。ちゃんとメモリブレイクする様
にね」

「あいよつとお」

ヴァンに念のためそう釘を刺しておいた。

あの時、アノマロカリスドーパントは“その女に用がある”と言おうとしていた。

ドーパントはどうも彼女の持っているDシリーズ専用のドライバーが目的のようだ。

例えばドーパントでも次元移動能力を持っていなければ使う事が出来る筈がないのに、何故欲しているのかは不明だが、少なくともドライバーを渡すわけにはいかない。

これらは下手に扱えば世界を崩壊させるほどの力を持っている。子供に銃を持たせているのと同じだ。

「カメンライド……」

「さあどっからでも掛かってこいやあ」

「……それだけ聞くと、全然やる気がなさそうですね」

「いやあ〜今何か眠くってさあ〜」

ヴァンはカードをスリットへ挿入して、何とも緊張感の抜けそうな

口調でそう言うと、後ろへ下がった麗奈が軽くツッコミを入れた。どうも睡魔が襲ってきているようではあったが、変身準備をしているわけだし問題ないかと思っていると、遂にその姿を曲がり角から現した。

黒と紫のストライプ柄の服の様な胴体と黒い硬質な印象を受ける肌に、道化師のような帽子と靴。

そして黒い飾り気のない平面なペルソナで顔を覆い隠し、紫色に輝く眼光を発している。

その姿はさながらピエロと言ったところだろうか？

「じゃあ早速頼むぜえ」

「……分かってるよ」

歩はヴァンに促され、そのピエロのドーパントの背後に次元断裂を展開させて、その動きを拘束しようとした。が……

『……ムンツ！』

「ッ！？」

「ってアラ？なんで？」

ドーパントに貼り付いたと思ったら、その身体に軽く力を入れて次元断裂をまるで窓ガラスのように粉々に粉碎してしまったのだ。

その現象が意味するものは一つしかない。アレは次元移動能力を持っているのだ。

「チツ、どうやら変身して倒すしかなさそうだね……」

軽く舌打ちを打ちながらそう呟いて、歩もドライバーを取り出して変身準備をする。

だがそれを敵が待っているわけもなく、一気にこちらへと駆け出した。しかしヴァンがドーパントの前に立ちほだかり、バッターのように剣を構えてそれをドーパント目掛けて音声コードを唱えながら振った。

「変っ身っ！」

「デイバイド！」

『ムウ！？』

振った瞬間ドーパントの身体は吹き飛ばされ、そのドーパントがいた位置に次元断裂と二枚のライドプレートが出現する。

次元断裂がヴァンに迫ってその身体を包み込み、続いてライドプレートが顔に位置する箇所V字に突き刺さる。

そこから全体のカラーリングを鮮やかなエメラルドグリーンへと変色させて、デイバイドへの変身を完了させた。

「今の内にアンタも変身しときなあ」

「悪いね。変身」

「カメンライド…！ デイージェント！」

後頭部を掻きながら歩にも変身するように言うデイバイドに従い、歩も同じくデイージェントへと変身を果たしてデイバイドの横に並び立つと、そのドーパントを見据えた。

『ウウウウ………』

ドーパントは即座に受け身を取ってこちらを警戒しており、獣のようには唸っている。どうやらガイアメモリの毒素に当てられて暴走してしまっている様だ。

ガイアメモリには人体に有害な毒素が含まれており、それをドライバーと言うフィルターを通さずに体内へ挿入させると、感情や精神と言った人間の内側を歪めて破壊してしまう恐れもある。

そんな麻薬に近い作用を持った者の所為で使用者は徐々に壊れていく。そしてそれを止めるのが、この世界の仮面ライダーの役割だ。

「止めるよ……」

「了解とお」

『ウアア！！』

デージェントはグローブを嵌める仕草をしながら、デイバイドに戦闘開始の合図を出すと同時に。

ドーパントが雄叫びを上げてこちらへと迫って来た。

亜由美が楓に追い付くと、そこは風都庭園と呼ばれる広場で、花壇や多くの樹木が立ち並ぶ緑の多い場所だった。

しかしそこに炎の塊の様な怪人が居座っており、木々へ自身の身体から生成した炎弾を投げつけて焼き尽くしていた。

「な、何ですかアレ!?!」

「ドーパント…この街を泣かせる奴らよ。そのアンタ!何やってんのよ!?!」

亜由美が目の前にいる得体の知れない存在に驚きの声を上げると、楓はそのドーパントを忌々しげに睨みながら簡潔に答え、その怪物に恐れる事なく啖呵を切った。

『ウルセエ！俺は仮面ライダーに用があんだよ！！だからこうやって騒ぎを起こして釣ろうって算段だ！！』

どうやらこの炎の怪人はライダーを呼び出すためだけにこんな騒ぎを起こしたようだった。

それを聞いた楓は、顔を伏せて懐からある物を取り出した。

「……そう。そんなに会いたかったら、今すぐ会わせてあげるわよ」

懐から取り出したそれは、左右非対称の赤い無骨なバックルで、右側の部分に何かを嵌めこむスロットルがあった。

それを腹部に宛がうと、横から帯が伸びてベルトを形成して楓の腰に巻き付いた。

更に今度は胸ポケットから一本の緑色のUSBメモリを取り出してそのスイッチを押した。

「サイクロン！」

「この場所、結構気に入ってたのに……よくもこんなに荒らしてくれたわね……」

『ガイアメモリ！？まさか、お前が……』

「そのまさかよ。変身！」

「サイクロン！」

変身と言う掛け声と同時にドーパントがガイアメモリと呼んだメモリを、バツクルのスロットルに差し込み右へ斜めに傾けると、もう一度電子音声が響き渡り、楓の周囲を突風が巻き起こる。その強風やいなや、さながら台風のような強さだ。

「きゃ!?!」

『うおおお!?!』

この強さには、堪らず亜由美もドーパントも身構えて顔を防ぐ。その間に楓の身体に変化が起き始める。

塵のような物が楓の身体に寄り集まって装甲を形成すし、それに合わせて楓の小柄な体格も二回り大きくなって180cm近い身長まで伸びる。

やがて風が止むと、そこには一人のライダーが立っていた。

ライトグリーンの装甲で全身を包み込んだ女性的なフォームを形作ったボディ。

赤い複眼とイニシャルのWを模した角飾り。

更に先程の突風の余波で未だに靡く銀色のマフラー。

その姿はまさしく、仮面ライダーその物だ。

(か、楓さんがライダーになっちゃった……!)

「仮面ライダーサイクロン! さあ、風都に代わってお仕置きよ!」

「そして何か懐かしいセリフ!」

楓が変身したライダーは、右手首にスナップを利かせてから怪人を指差すと、何とも懐かしい昔の少女アニメの決め台詞に似た狂言を言い放った。

正直古すぎます!!

しかも知り合いに似てる人物がライダーだった事がかなり違和感があり過ぎて、もう頭が状況に付いて行けない……。

『ま、まあいい。とにかく、お前を倒すよう言われてるんでな！思う存分鬺り殺してやんよ！！』

ドーパントも亜由美と同じくその決め台詞に若干引きつつも、本来の目的でもある仮面ライダーを標的に定めて、炎弾を放って来た。

「甘いわよ！！」

『何…うおっ！？』

しかしサイクロンが大きく右手を振り払うとそこから突風が巻き起こって迫りくる炎を吹き消し、さらにその奥にいる炎弾を放ったドーパントまでもを吹き飛ばそうとした。

『こ、このくらいの風で……！』

「隙あり！！」

『なっ！？はや…ブフォア！？』

突風によって怯んだ隙を突いて自分が起こした風を追い風にしてドーパントの懐まで一瞬で移動すると、そこからハイキックをドーパントの顎へ向かって叩き込んだ。

それによって踏鞴を踏んだ所へハイキックの反動で華麗に宙返りをして着地すると、更に追撃である渾身のボディーブローを岩石のように高質化している腹部へと放った。

「はああ…！！」

『どうえあああ…！』

しかもその際に拳からゴウツと竜巻の様な強風が吹き荒れて、ドーパントの身体を錐揉み回転させながら吹き飛ばした。

「今の内に止めを刺させてもらおうよ」

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

遠くまで吹き飛んだのを一瞥すると、サイクロンはバツクルのスロツトルからガイアメモリを取り外し、右腰に設けられた別のスロツトルへと差し込んで横を軽く叩くと認識音声が流れ、サイクロンの全身を緑色の風を彷彿とさせるオーラが包み込んで彼女を中心として周囲が台風のように吹き荒れる。

そしてそのオーラがサイクロンの右足へと集約し出し、彼女はその技名であろう掛け声を叫びながらその右足を、フラフラと立ち上がろうとするドーパント目掛けて振るった。

「サイクロンカッター！！」

『ぐっ…あああああ！！』

右足に集まったオーラが遠心力によりそこから勢いよく離れると三日月形の斬撃に形作られ、ドーパントの身体を鎌鼬かまいたちの如く切り捨てた。

それに一瞬ぐもった声を漏らした後、断末魔の悲鳴を上げてそのドーパントは爆散した。

爆炎が晴れると、そこには一人の男性が横たわっており、その横にはサイクロンが使っていたメモリに酷似した物が粉々に砕かれた状態で落ちていた。

「ひよつとして…この人がさっきの怪物だったの……？」

「ええそうよ。これはガイアメモリって言ってね、ドライバーを介さずに使うと今みたいな怪物になっちゃうのよ」

「な、何か恐い……」

亜由美の呟きにサイクロンが変身を解除し、男の横に落ちていたガイアメモリの破片を手に取りながら答えると、亜由美は正直な感想を漏らした。

前の世界でもオルフェノクと呼ばれる人から怪物になった者達がいだが、アレは亜由美にとつては人種の違い程度にしか思えないし、章治や正幸、美玖のように優しい人達がいる事も知っている。

しかし今回はその逆だ。人でありながら人外の身体を求め、その結果本当に怪物その物に変えてしまう危険な代物……。

そう考えると、オルフェノクになってしまった人達より、ドーパントになるうとしている人達の方がよっぽど怪物らしい。

「やっぱり、人って醜いと思う？」

「え……？」

亜由美が何を思っているのか予想が出来ているのだろうか、楓は亜由美に向かってそう問いかけ、更に続けた。

「私は憎い。人を…この街を泣かせるドーパントが。そいつらのせいで、私の父さんと母さんは……！」

ギリツ…と、楓は歯を噛み締めながら、忌々しげに手に取ったガイアメモリの破片を握る。

彼女の過去に何かがあったのだが、亜由美にそれを知る術はない。

そんな楓の様子をどこか悲しそうな表情で見ている亜由美に気付いたのか、彼女はこちらを向いてその表情を愛想笑いに変えながらガイアメモリの破片を投げ捨てた。

「あ、つまらない話をしちゃったわね。今は忘れて」

「で、でも……」

「大丈夫よ。結局私もガイアメモリに頼らないと何にも出来ない訳なんだし、ドーパントと何ら変わらないわよ」

（やっぱり、加奈とは違うんだなあ……）

加奈であれば、今の楓の様な自虐的な発言など絶対にしない。まったくの別人である事は分かっているのだが、その顔でそんな事を言われるのは加奈の親友として、なんだか悲しかった。

「チイイツ！！何だよもおおやられちまったのかああああ！！？もお少し持ち堪えたらどうなんだああああ！！？」

「うわっ！ウルサツ！？」

「まさか、新手！？」

そんな事感慨耽っている、突然の大音量に亜由美は思わず耳を塞ぎながら大声の発信源を向くと、倒れている男の後ろから大柄の男がこちらへと歩いて来ているのが目に入った。

筋骨隆々の上半身を裸にし、その身体に着せる為の上着を腰に乱雑に巻き付け、下は黒のジャージに下駄という奇抜な格好のその男は、倒れた男の頭を軽く二回蹴りながら、再びその口から大音量を発した。

「かあわかべええええええ！！ボスに任されてたつてのに、どお落とし前付けるつもりだ！！あああああん！！？」

「く、黒金さん……ス、スミマセン。でもアイツ、思ったより強く
て……」

あまりの大音量に目を覚ました河壁と呼ばれた男は、なんとか言い
訳しようとするも……

「スミマセン”で済んだらオレたちやいらねえんだよおおおお
！！」

「じはああああ……」

黒金と言う名の男が怒号を放ちながら河壁を蹴り飛ばした。

その際に「ゴキツ」という嫌な音が河壁から聞こえ、一本の木にぶ
つかって止まったかと思うと、その背中はありません方向に曲がっ
て口から血と泡を吹き、目は白目を向いていた。

これには堪らず亜由美は河壁に駆け寄ろうとしたが、楓に手で阻ま
れてしまった。

「亜由美ちゃん、今近づいたら危ないわよ」

「で、でもあのまま放っておいたら……！！」

確かに河壁が倒れているのは黒金のすぐ近く。不用意に近寄れば自
分まであなりかねない。

それでも、助けたい。その為に歩について来たのだから。

それを聞いた楓は軽く溜め息を吐くと、妥協案を提示してきた。

「ハア…分かったわよ。それじゃあ私がアイツをここから遠ざける
から、その隙に救急車なりなんなり呼びなさい」

「サイクロン！」

そう呟きながら楓はもう一度変身するためにドライバーとガイアメモリを取り出し、黙々と変身手順を進めていく。それを見た黒金は「ああん!!？」と疑問の声をこれまた大音量で放つ。

「まさかそつちの方が仮面ライダーだったのかあああ!!？まあいい!!俺も思う存分暴れさせてもらうぜ!!コイツでなあああ!!」

そう叫びながらジャージのポケットから取り出したのは銀色のガイアメモリで、その下部に設けられているスイッチを押すと、そのメモリの名称を発した。

「メタル！」

「メタルメモリ!?それってアイツの……それをどこで!？」

「俺に勝てたら答えてやるよおおお!!ただし!俺が勝ったらお前の三本のメモリを頂くぜええええ!!」

そのメモリの名称に驚愕の声を漏らす楓に、黒金はメモリを前方に投げながらそう言い放った。

黒金の手元から放たれたメモリは、まるで意志でも持っているかのように黒金の周囲を飛び回り、やがて背中にあるコネクタへと突き刺さった。

「おおおおおキタキタアアア!!」

黒金の目が銀色の光を放ち、その身体が金属質な物へと変容していく。

やがてノイズが晴れると、そこには鉄人がいた。

第三十六話：ドツベルKノ逆巻く疾風（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「さあ、今回も始まりましたあとがきラジオ！」

皐月「司会は何時ものアタシ達でお送りして行くぜ！」

加奈「それでは作者！今回のお題をお願いします！」

カンペ（　・w・　）　次回サイドストーリーを書きます（

皐月「サイドストーリーっていうことはアレの続きを書くって事か？」

加奈「アレって終盤に書く予定じゃなかったの？」

カンペ（いえいえそっちではありません。次回書くサイドストーリーはですね、Wで言う所のビギンズナイトに当たる物なんですよ。そこで楓さんの過去話を書こうと思ってるんですよーw。）

皐月「ああ、そう言う事か」

加奈「確かに、未だに駆って人がちゃんと出て来てないしね。このままだとオリキャラ紹介の出張版が当分先になっちゃうし……」

皐月「それに、楓に一つ借りがあるからな。あつたらゼツテエにぶっ飛ばしてやる……」　指鳴らしてる

カンペ（そう言う事です。それじゃあちよつとだけその次回予告でもしてみましようかね。それではスタートオ!!！）　・w・　（

「アンタ、一体誰よ？何で私の事知ってるの？」

「おっと、自己紹介が遅れたね。俺は西方駆。しがない私立探偵さ」

十年前のあの日、全てが始まった……。

楓「父さん！母さん！！」

駆「これは……お前がやったのか……？」

アイスエイジ「コイツが、コイツ等が悪いんだ……俺をあんな目に遭わせたから……！！！」

楓の高校卒業と共に、ドーパントに殺された両親。

駆「人を……街を泣かせる奴は、この俺が許さねえ！」

「ジョーカー！」

次回、仮面ライダーディージェントサイドストーリー！

「ビギンズナイト」

乞うご期待！ (w) (ノシ)

サイドストーリー：ビギンズナイト（前書き）

今回初の一人称に挑戦しました！（＾w＾）

いやあくいざやってみると難しい。以前リユウガの心情描写でそれっぽいを書きましたけど、難易度はそれを遥かに超えますね（。；）

それでは楓さんと駆さんのビギンズナイト、スタートオ！！（w・）

サイドストーリー：ピギンズナイト

今日は私、藤原楓の高校卒業式だった。

高校を卒業してからの進路は、両親が就いている研究施設の研究員と決まっていた。

親の推薦もあり、そこへの就職はすぐに決まったが、正直その研究所もそこへ勤める両親も嫌いだ。

私が小さい頃から両親は研究ばかりで遊んでもくれないし風都の外にも連れてつてはくれなかった。

その代わりに私にも「こんな研究してるんだ」と教えたり実際にそれをやらせてみたりと（子供に実験させるのもどうなんだとも思う）私にも将来手伝わせるつもりの様だった。

本当は断りたかったんだけど特にやりたい仕事もない上に、自分の得意な事もなかったので仕方なくそうになった。と言う感じだ。

今日は何でも私に卒業記念として渡したい物があると言っていたが、すぐに帰ろうとは思わずに繁華街をうろろろしていた。

すでに日は完全に沈んでおり、時刻はもうすぐ8時になるうとしていた。

「なあそこの彼女、どっか遊びにいかね？」

そしてそんな所を制服を着た女の子が歩いていけば、こういう輩が出て来る事も、RPGで街の外を歩いたらモンスターに遭遇する可能性並みに確実だ。

「悪いけど、私はあんたなんかと付き合うほどヒマじゃないの」

「まあそんな冷たい事言うなってえ。ちょっとそこのゲーセンで

一緒に遊ぶだけだからさあ」

きっぱりと断るがそれでもなお喰い付こうとする男から逃れようと
するも、手を掴まれてしまった。

あいにく私は武道なんてこれっぽっちも出来ないし、女子の中でも
かなり非力なためにどうしても逃げ切れない。

「放して！放しなさいよ！！」

「だ〜いじょうぶだから、ほら一緒に……」

「お、いたいた！楓ちゃん、やっと見つけたよ」

何とかナンパ男の手を振り解こうとしていると、その間に見慣れな
い男が割って入って来た。

白いスーツに白い帽子を見に着けた微妙に古臭い格好をしたその男
は、私の手を掴んでいるナンパ男に話し掛け始めた。

誰この人？何で私の事を知ってるんだろ？

「ああ？何だよオッサン」

「オッサンって…これでも二十代なんだけどなあ……。その子、俺
の知り合いの子なんだ。放してあげないかな？」

「……チツ、分かったよ。面倒事にはしたくねえからな」

そう言っつてナンパ男はようやく私の手を離し、そのまま人ごみの中
へ溶け込んで行った。

「フウ、最近の若者ってああ言うのが多いのかねえ？」

「アンタ、一体誰よ？何で私の事知ってるの？」

「おっと、自己紹介が遅れたね。俺は西方駆。しがな私立探偵さ」

「探偵？確かにそう言われてみればそれっぽい格好してるけど、何
で私の事知ってるの？」

「ああ、君のお父さんに頼まれてね。中々帰って来ないから代わりに探しに来たんだよ」

そう言いながら取り出したのは私が写った写真。でも……

「ちょ、何でよりによってその写真なの！？もっと他にマシなのなかつたわけ！？」

何で子供の頃によく分かんない装置が爆発起こしてビクビクして泣いちゃった時の写真なのよ！？恥ずかしいわ！！

「まあまあ、そんな怒らなくてもいいでしょ。だってこれ、結構可愛いわよ？」

「全然嬉しくない！！大体、父さんも心配し過ぎなのよ！もう子供じゃないんだからいい加減にしてほしいんだけど！！」

あんの親バカ…態々探偵まで雇って娘を見るなんて、どうかしてんじゃないの？

「まあそれだけ愛されてるって事だよ。あとさ、頼まれたと言っても別に依頼として受けたわけじゃない。あの人には色々とお世話になってるから、そのお返しって感じかな？」

「そんなのどつちだっていい。それじゃあ私はもう帰るから、アンタも事務所なり何なり帰りなさいよ。それじゃ」

そう言つてその場から立ち去ろうとしたが、何故か駆と名乗った男は私のすぐ横をついて来る。

「何？まさか家に着くまでずっと付いて来るとか言わないでしょうね？それだつたら警察呼ぶわよ？」

「違う違う。実は俺も君のお父さんに呼ばれててさ、何でも渡したい物があるから来てくれって」

「はあ!?!」

何よそれ!?!それじゃあ家に帰るまでずっとこの得体の知れない男と二人つきりって事!?!襲われたらどうすんのよ!?!

「……念のため言っとくけど、俺はロリコンの気はないし、君みたいなお子様には全然興味はないからな?」

「んなつ!?!それは私がチビって言いたいのかああ!?!」

人が気にしてく事をよくもそう易々と…!

「ちなみに俺のタイプは気が効いて何でも卒なくこなせる思いやりのある人かな?」

「誰もアンタの好味なんか聞いとらんわああ!?!」

そんな会話をしながら家への帰路についた。

この出会いが私と駆、二人の関係を大きく変える事になるとは知らずに……。

家の前まで帰った私は玄関のドアに手を掛け、中へと入った。

「ただいま」

「お邪魔します」

一応この家のルールとして玄関から続く廊下へと声を掛けると、私
の後ろから続く駆が、私の頭の上から同じく声を掛けて来た。

しかし今日の家からは何か違和感を感じた。

留守にしていたとしても今日は父さんも母さんも家に帰って来ると
言っていたのに何故か暗く、廊下はクーラーをガンガンにかけたよ
うにヤケに涼しかった。

「……ねえ、藤原教授って家の中でも研究すんの？」

「いや、いくらマツドサイエンティストの父さんでも、家の中では
しない主義だったけど……」

“実験するならちゃんと設備の整った場所”と二人とも豪語してた
くらいだし、そんな筈はないんだけど……。

「とりあえず中に入ってみよう。渡したい物と何か関係がありそう
だし」

「え、ええ。それもそうね……」

駆の発言も一理あると思い、二人で家の中へ上がって廊下の電気を
付けようとした。でも……

「ア、アレ？付かない……もしかして停電？」

「いや、近隣の家は付いてるみたいだし、多分ブレーカーが落ちて
るんだろ」

一体何が起きてるんだろうか……。しばらく歩いていると、徐々に
寒さが増して来た。

冷気が伝わって来る場所まで歩いて行くと、そこはキッチンのある
ダイニングルームだった。

その部屋のドアの隙間からは白い靄が立ち込めており、それがこの寒さの原因だという事が分かった。

その中へと入ろうとした時、駆が私の肩に手を置いて神妙な表情でその部屋のドアを睨みながら言ってきた。

「俺が先に入る。何だか嫌な予感がする……」

「わ、分かった……」

そう言っただけで駆けるがドアノブに手を伸ばしてゆっくりと引いて、中へと入るが、その手前で立ち止まってしまった。

一体何があるのだろうと思いつつ、その中を駆の背中越しに覗きこむと、真っ白に凍ったリビングが目に入った。

壁や床、天井は勿論。ソファやテレビまでもが凍っており、幻想的な光景が広がっていた。

そしてその中には……私の両親までもが……。

「父さん！母さん！！」

「あ、待て！行っちゃ駄目だ！！」

「退きなさい！！」

行く手を阻む駆の身体を押し退けて、両親の前まで来てその身体に触れようとすると、その身体は粉々に砕け散って床に砕けた氷の山を築き上げた。

「え……ウソ……」

『お、俺は悪くない……悪くないんだ……』

突然の出来事に両膝をペタリと着いて呆然としていると、後ろのキツチンの方からそんなくもった声が聞こえて来た。

後ろを振り向くと氷の怪人が立っていた。

黒い体表の所々が冷気で白く凍っており、背中や頭部に生えたイソギンチャクの触手の様な物の先から常に冷気を発し続けている。それは、立ちすくみながらずっと何かをぼやいていた。

「これは…お前がやったのか……？」

『コイツが、コイツ等が悪いんだ…俺をあんな目に遭わせたから…』

…！！』

「お前、まさか……」

『うああああ！！』

そう何の事だか分からない事を行った後、突然駆に襲いかかって来た。

それを駆は屈んで怪人の横へすり抜けると、振り返って身構える。

「チツ！メモリの副作用か…！毒素にやられてやがる！」

『こ、これを見たお前らも…凍らせてやる！！』

一体何が起きてるのか分からない。

メモリ？毒素？何の事なの……？

それと父さん達が死んだ事と何か関係があるの？

「クツソ…！せめて…せめてこっちにもメモリがあれば……！！」

『さっさと凍れよおおお！！』

駆けるが何故かメモリを欲していると、氷の怪人が指先から冷気を駆に向かって噴出してきた。

それを右にあるキツチンの方へ跳んでかわすが、それによって私との距離が離れてしまう。

何とか助けてやりたいけど、私にはどうする事も出来ない。

せめて何か武器になりそうな物さえあればいいんだけど、そう都合よく置いてる筈もない。

そう思っていると、先程まで両親だった氷の山の中に赤い機械の様な物が見えた。

氷の山を掻き分けてその赤い物を取り出すと、それは二つの赤い無骨なバツクルだった。更にその近くには全長10cmくらいの六本のUSBメモリが落ちていた。

ひよっとして、駆が言っていたメモリってこれの事…？

バツクルの方をよく見れば、丁度メモリを嵌めこめるくらいの大きさの挿入口が設けられている。

物は試した。とりあえず黒いメモリを手にとって一つのバツクルのスロットルに挿入してみる。

しかしそれだけでは何も起きず、やはりこれだけでは何もできないのか……。

「こんちくしよおおお!!」

『へブツ!?!』

急に腹立たしくなったのメモリが挿さったままのバツクルを、駆へと迫る氷怪人に投げつけた。

バツクルは見事にそいつの側頭部に命中し、跳ね返ったバツクルが見事に駆の手中に収まった。何と言つミラクル……。

しかしミラクルはそれだけでは終わらなかった。

「ッ!?これって…ドライバーとガイアメモリか!?楓ちゃん、ありがとつ!」

「え?ええ……」

突然何故かお礼を言われるがとりあえず相槌を打っていると、駆は

バックルからメモリを引き抜いてその下部にあったスイッチを押した。

そうか、アレを押さなきゃいけなかったんだ……。

「ジョーカー！」

「ッ!? 何だ、そのメモリは!?!」

「悪いがこれは新型のメモリだぜ。お前には勿体ねえくらいのな」

そう狼狽する氷怪人に呟きながら今度はバックルを腹部に宛がうと、その両サイドから帯が伸びてベルトを形成する。

そして電子音を発したメモリを再びスロットルへ挿し込むと、バックルから紫色の波動が円形に吹き出し、駆はある言葉を叫んでスロットルを斜めに傾けた。

「変身！」

「ジョーカー！」

再び電子音が発せられ、それと同時に駆の身体に変化が起きる。駆の周囲に黒い塵の様な物が浮かび上がり、駆の身体に張り付いて行く。

その箇所から駆の身体を、黒い装甲が爪先から頭頂部まで完全に包み込むと、駆の姿を完全な別の物へと変えた。

全身を黒いシャープな装甲に身を包み、顔にはバツタを彷彿とさせる真っ赤な大きな目とイニシャルのWを模した銀の角飾り。

その姿は氷怪人とさして変わらない怪人。でも目の前にいる氷怪人の様に人を殺すための存在ではなく……漆黒の正義の味方だった。

『お、お前もドーパントか!』

「違うな。俺の名は仮面ライダー…ジョーカー……」

黒い戦士は左手を軽くスナップして気障okな仕草で氷怪人を指差した。

「さあ、自分の犯した罪に…気付かせてやるぜ……」

そう言い放つと、氷怪人に殴り掛かった。

「おらっ!」

『グハアッ!!クッソ…!!』

「うおわっ!冷たっ!?!」

右ストレートを喰らいながらも氷怪人は悪態を吐くと、指先から冷気を駆へ向かって放った。

それを間一髪でかわすも、右手が完全に凍っていた。

何とかしないと…!そう思い残り五本のメモリの中から氷に有効そうなメモリを探す。

氷に強そうなのは…火!だったらこの赤いメモリかしら?試しにスイッチを押してみる。

「ヒート!」

これだ!これなら対抗できる筈だ!

私は手に取ったそのメモリを駆けるに向かって投げ渡した。

「駆!これ!!」

「お?これは…ヒートメモリか!ヨッシャ、これなら…!!」

駆は傾けたスロットルを起こしてメモリを引き抜くと、今度は赤い

メモリを挿して斜めに傾けた。でも……

「ア、アレ……？」

「何で、何も起きないのよ？」

『よそ見してる場合じゃないぞお！！』

「しまっ……うわあっ！！」

どう言うわけか何も起きなかった。

駆が戸惑って動きを止めている隙について、氷怪人が蹴りを放って来た。

その威力が相当強かったのか、駆はたちまちの内に家の壁を壊して中庭まで吹き飛ばされてしまう。

「イツツ……ツ！？マズツ！変身が……！！」

黒いメモリを抜いたからだろうか。駆の身体を覆っていた装甲は風に晒されるかのように剥がれて行き、元の姿に戻ってしまった。

装甲が剥がれる際に右腕の氷も同時に剥がれたが、どうやら身体にもダメージが入ってしまったようである。上手く動けそうになかった。

一体どうして……！？そう思っているともう一つのバツクルが目に入った。

ひよっとして、バツクルによってどのメモリが使えるか決まってるんじゃない……ええいこうなったらイチかバチか！！

私はもう一つのバツクルを駆がやった通りに腹部に宛がった。すると両端から帯が伸び、ベルトが形成されたのを確認する。そして適当に掴んだ緑色のメモリのスイッチを押した。

「サイクロン！」

「へ、変身…?」

駆が言った言葉を反芻した後にメモリをスロットルへ挿し込み、斜めに傾けた。

「サイクロン！」

バックルからそう電子音声が響くと、私の身体も塵に包まれ、その塵で装甲を形成し始めた。

ただ違う事と言えば、私が変身した時だけ突風が吹き荒れた事だろうか。

おかけで家の家具がメチャクチャに……父さん、母さん、ゴメンナサイ……。

やがて私の全身を装甲が包み終わると、視線が高くなっている事に気付いた。恐らく180近くはあると思う。

自分の顔に触れてみると、表面は硬くのっぺりとしており、先程の駆と同じマスクを付けている状態である事が分かった。

そして少し下を向くと、殆どなかった私の胸に膨らみが……!でも装甲のせいで固い!チクシヨウ!見た目だけか!!

『な……!? もう一つドライバーがあつたのか!?!』

「まさか…教授は楓ちゃんにも……!!」

「え、えくと…とりあえず、とう!!」

私に変身した事に驚いている二人に気付き、このまま膠着状態になっているのも何なので、一先ず氷怪人に飛び掛かってパンチを一撃加えてみた。

『ぐおあ!?!』

「うわ!何これ、すっごく身体が軽い!!」

軽くジャンプしただけなのに一気に氷怪人の近くまで跳び、その胴体にパンチを入れる事に成功した。

しかも相手に触れた瞬間、風が噴き出して氷怪人を吹き飛ばしてしまった。

「楓ちゃんは退いててくれ。ここは俺一人でやる…変身!」

「ジョーカー!」

態勢を整えた駆は私の肩を叩いてそう言った後、再び変身して氷怪人に殴り掛かった。

今度は相手に反撃の隙を一切与えずに次々と拳や蹴りを浴びせて行く。

「とうおらあああ!!」

『こはあああ!!』

最後に渾身のボディーパーを決めて吹き飛ばすと、メモリを抜いて右腰に設けられているスロットルへ挿し込んだ後、その横を軽く叩いた。

「ジョーカー!マキシマムドライブ!」

「行くぜ、ライダー…キック……」

そう呟いて態勢を低く構えると駆の右足が紫色のオーラに包まれ、氷怪人に向かって駆け出した。

そしてある程度距離を縮めて飛び蹴りの態勢に入ると、紫色のオラに包まれた右足を氷怪人に直撃させた。

「はああああ！！！」

『ぐああああああ！！！！』

断末魔の叫びを上げて爆散すると、そこには怪人の代わりに冴えない一人の男性が倒れていた。

駆はメモリを抜いてドライバーを外すことで変身を解き、それに習って私も変身を解除した。

駆は倒れた男性に近づいて胸倉を掴むと、怒気を込めて言い放った。

「おいお前！何で藤原夫妻を殺した！？」

「そ、それは…アイツ等が俺を……ウグツ……！！！」

胸倉を掴まれた事で目を覚ました男が言い切る前に呻いたかと思うと、突然身体が塵の様に崩れて消えてしまった。

「え！？そんな……！？」

「クソツ……！やっぱりコイツ、NEVERネバーだったのか……！！！」

「いや、何でもない。気にしないでくれ」

何か隠しているようだったが、その険しい表情からなんとなく聞く気にはなれなかった。

「とにかく、今はここから離れた方がいい。警察に見つかると面倒だからな」

「わ、分かった……」

駆に手を取られて一緒に家を出て行った。

それから数カ月後……。

両親の死亡は警察側では確認されなかったため行方不明事件という形で処理され、私は駆の自宅兼事務所に取り上げられることとなり、今では駆の秘書紛いの事をしている。

この数カ月たった今でも、駆からNEVERとは何なのか未だに教えてもらっていないが、少なくともコイツは悪い奴じゃないって言う事は分かった。

それにこれまで何件かのやたらへビーな依頼を一緒にこなして来たり、コイツの事はそれほど嫌いじゃない。

そして今回達成した以来の記録書を駆が作って私が見直してあるんだけど……

「ちよつと駆。この報告書、誤字があるわよ」

「え、どこにあるんだ？別に問題ないだろ？」

「ココよココ。何で報告者の部分が“私”になってるのよ。それを言うなら“私達”……でしょ？」

そう不敵な笑みを浮かべながら言うと、駆は被つてもいないのに帽子を被り直す仕草をしながら「コリヤー本取られた」などと可笑しそうに言っている。

いつか絶対、ドーパントを全部懲らしめてやるんだ。
私の…いや、私達の手で……。

サイドストーリー：ピギンズナイト（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

歩「歩と」

亜由美「亜由美の！」

加奈・皐月・歩・亜由美「あとがき〜ラジオ〜（！！）」

皐月「…ってアレ？今回は亜由美達も一緒か」

歩「ウン。今回は読者から質問が来てたからそれに答えようと思っ
てね」

加奈「おお！久々の質問コーナーね！それで作者、今回の質問って
何？」

カンペ（・・・w・） 伸剣さんからの質問です。「今回の世界で
楓がサイクロンへ変身しましたが、加奈や他の皆さんがライダーへ
変身できるとしたらどんなライダーになりたいですか？」

亜由美「これは主に加奈への質問だね」

歩「それで、ライダーになるんだっいたら何になりたいの？」

加奈「そうねえ〜…私としてはやっぱりアクセルかな？警察ライダ
ーだし、足速いし」

皐月「そっちなあ〜。アタシはてっきり蟹刑事の方かと……」

加奈「そおい！」 脳天チヨップ

皐月「アダツ！？」

歩「人が気にしてる事言っちゃ駄目だよ」

亜由美「それは歩もでしょ！以前真司さんに餃子しか作れないの知

つてて態と聞いてたし!」

歩「じゃあ今度は皐月さん、ライダーになるんだつたら何になりた
い?」

亜由美「流された!?!」

皐月「イテテ…うん、アタシだつたらザビーだな。肉弾戦主体だ
からアタシにはピッタリだな」

歩「……………」

皐月「オイ、何だよその反応?何か悪いのか?」

歩「イヤ、そうじゃないんだけど……………」

カンペ() () 実はカブト編では皐月ちゃんのリイマジを
出す予定なんです。しかもその皐月ちゃん、ザビーに変身します)

加奈「マジで!?!」

皐月「よっしゃ!アタシの出番キタアアア!」

歩「嬉しそうだね(作者に聞いた話だと性格が真逆らしいけど、言
わない方がいいのかな?)」

亜由美「まあ二人はこのラジオでしか活動できないからね。とこ
ろで歩はディージェント以外だつたら何に変身したいの?」

歩「僕だつたらカイザかな?カイザブレイガンつて遠近両用出来て
便利だよね」

皐月「ええ〜それだつたらせめてイクサの方がいいんじゃない?
似た様な武器持つてるし、ベルトがナツクルの形になってるし」

補足事項:ディージェントドライバーはメリケンサックの形状をし
ています。

歩「いちいちライジングに強化変身するのは僕にはちょっと……デ
イージェントなんてそう言うの全然ないし」

加奈「まあそつちの方が歩にとっては使いやすいのかもね。亜由美
はどうなの？」

亜由美「え、私？ううん、そうだなあ……」

皐月「一体なんだろうな？」

加奈「あの子あんまりこう言うの興味ないからねえ……何にするんだ
ろ？」

亜由美「……ディケイド、かなあ？ピンクで可愛いし」

加奈「うわあ、まさかのDシリーズ……」

皐月「歩とお揃いだな……しかも理由がピンクだからって……」

歩「あ、今頭の中で『ピンクじゃなくてマゼンタだ！』って声が聞
こえた」

亜由美「土さん聞いてた！？」

加奈「さて、今回のあとがきラジオはここまで！」

皐月「次回はいよいよ出張版だな。よし！会ったら速攻ぶん殴って
やる」

亜由美「どんだけ怨んでんの！？」

歩「まあこれでようやくW編の主要人物も揃ったわけだし、次回の
出張版をお楽しみに。それでは皆さん、9月16日にまたお会いし
ましょう」

第三十七話：Nの襲来／楓の回想（前書き）

仮面ライダーディージェント！

前回の内容は……（Wのオープニング風に）

????「ほう、そんなにコレが欲しいのか？随分とジャンキーなヤツだな。そんなに欲しけりゃくれてやるよ。西方にしかかける駆……」

ディージェント「止めるよ……」

ディバイド「了解とお」

ジョーカードーパント『ウアアア！！』

サイクロン「仮面ライダーサイクロン！さあ、風都に代わってお仕置きよ！！」

亜由美「そして何か懐かしいセリフ!?」

黒金「まさかそっちの方が仮面ライダーだったのかああああ!!? まあいい!!俺も思う存分暴れさせてもらっぜ!!コイツでなああああ!!！」

「メタル！」

楓「メタルメモリ!?それってアイツの……それをどこで!？」

黒金「俺に勝てたら答えてやるよおおおお!!ただし!俺が勝ったらお前の三本のメモリを頂くぜええええ!!！」

第三十七話：Nの襲来／楓の回想

港から少し行った所にある工場跡地では、デイージェントとデイバイドが突如襲来して来た謎のドーパントと戦闘を繰り返していた。

デイージェントが左ストレートを放つがそれを易々と受け止め、その隙について斬りかかって来るデイバイドの上段切りを、掴んだデイージェントを盾にして防いだ。

「グッ…！」

「あ、ワリイ……」

「又ンッ！」

「ナファツフオ!?」

盾にして防いだ後、デイージェントを蹴り飛ばしてデイバイドの方へと吹き飛ばす事で、謝ろうとしていたデイバイドもともと諸共巻き込んで工場の中から外へと吹き飛ばした。

「あのピエロ、意外とつええなあ〜」

「しかもあのドーパント…常にジャミングを発し続けてるから動きが読めない……」

眠たげな声色ではあるものの、窮地に立たされている事を察しているデイバイドに追従する形でデイージェントは続けた。

アレにはワールドウォーカーに近い能力が備わっている。敢えて名付けるならば、疑似次元移動能力と言ったところだろうか？

元から備わっていたとは考え難いし、そんな能力付加が出来る人物も一人だけ知っている。

(また神童さんの細工か……)

恐らく神童があのだーパントにジャミングの能力を付加させているのだろう。

ヴァンが感じ取ったのはそのジャミングの気配だ。

二人が立ち上がると、どーパントが帽子を被り直す仕草をしながらこちらに歩み寄って来るのが見えた。

とにかく、このままでは劣勢になるばかりだ。

相手のスペックは大したことはないのだが、肉弾戦能力に於いてはデージエントよりも高い。

ここは遠距離からの攻撃で仕留めた方がいいだろう。

そう結論を出したデージエントは「ブラスト」のカードを取り出しながらデイバイドを見た。

彼のアタックライドのカードには「ブラスト」が存在しない。

あくまで剣での接近戦のみに主軸を置いたDシリーズなので遠距離戦能力は皆無だ。

なのでここは自分が何とかするしかないだろう。そう思ってカードの効果を発動させると、デイバイドが自分の肩をトントンと軽く叩いてきた。

「アタックライド…ブラスト！」

「なあ、ちよつといいかあ？」

「ん？」

デイバイドの方を振り向くと、彼はブランク状態のカードをスリットへ装填してディージェントに振り被り……

「ちよつくら我慢しててくれよぉ」

「ウゲアツ!？」

突然ディージェントに斬り掛かった。

ディージェントはその行動の意味を理解してはいるのだが、流石に急にやられると心の準備が……。

彼が斬りかかって来たのは別に自分を敵と思ったからではない。彼の能力はこうしなければ発動できないのだ。

そして今、その能力が発動したことを告げる認証音声がデイバイドライダーから発せられた。

「カメンライド…ディージェント!」

その音声と共に、デイバイドの腹部に設けられているバックルのディスプレイに写されたデイバイドのライダーズクレストが消え、代わりにディージェントのライダーズクレストが浮かび上がった。

デイバイドの能力は“分割”だ。

ブランクカードを装填した状態で対象を斬り付けることで、その対象の能力を半分奪う事が出来るのだ。

そのおかげで、ディージェントの身体能力を除いた空間把握能力やカードの性能は半減してしまうが、デイバイドは一時的にそれらの能力を使う事が出来るようになるのだ。

「へえ〜コイツは便利だなあ〜。周りの状況がよく分かる」

「それでも半分程度なだけだね」

「……これで半分とか、お前マジで何モンだよ？」

デイバイドが仮面の奥で呆れた顔をしているであろう声色で訊ねて来るが「ただのデイケイドの代理だよ」とだけ答えてドーパントに向かつてエネルギー弾を乱射した。

「…ハッ！」

『グッ！？又ウウウー！』

初弾を当てることには成功したが、その後続くエネルギー弾を曲芸師の如くバツク転やサイドステップ等で華麗に避けて行く。そのまま徐々にこちらとの距離を詰めて来るが、撃つて来るのは自分だけじゃない。

「アタックライド…ラスト！」

「こつちも忘れてんじゃねえぞお〜」

『又ッ！？グウアアア！！』

デイージェントが撃っている隙に、横へ移動していたデイバイドが「ブラスト」を発動させてデイバイドライバーを持っている反対の左手からデイージェントと同質のエネルギー弾をドーパントに向けて単発式で放った。

『又グッ！グウウウ……！』

「止めを刺すなら今だね」

「ファイナルアタックライド…デイディディージェント！」

「そのようでしたお〜」

「ファイナルアタックライド…！デイディデイディージェント！」

デイバイドの放ったエネルギー弾に直撃したドーパントが地面に転がるのを確認すると、互いにファイナルアタックライドのカードを発動させる。

『グアツ！？』

ドーパントが立ちあがった瞬間に、二人のビジョンが重なった状態で展開されてドーパントを磔にした。

例え二人同時と言ってもデイージェント一人で放つ威力とさして変わらないのだが、やはり同じ種類の攻撃方法での同時攻撃が有効だとデイバイドが判断したためか、デイージェントのカメンライドはそのままにした状態でデイバイドライバーを構える。

デイージェントの右足に藍色のシックスエレメントが集まるのと同じく、デイバイドの持っている刀身にも同色のシックスエレメントが集約して行く。

「それじゃあ止めの……」

「レッツファイナルレツとお」

「……………」

デイージェントが何時もの決め台詞を言う前に先に向こうの決め台詞を言われてしまった。

その事に一瞬思考が停止するも、すぐに気を取り直して指を招くように動かしてビジョンをこちらに近寄らせる。

「フウウウ……」
「……………」

デージェントは何時もの様に息を吐きながら構え、デイバイドは特に何もせずに迫りくるビジョンがこちらに来るのを見据えながら剣先を地面にコンコンと当てていた。

やがて攻撃範囲まで後数メートルとなった所で、突如左方向から数発の光弾がこちらへ降り注いで二人を吹き飛ばしてきた。

「クウツ!?!」
「オオウ!?!」

それによってファイナルアタックライドは強制解除され、ビジョンが途中で消えてドーパントの身体が自由を取り戻してしまった。

「何だあ、今のおく?」
『二対一でイジめるとは、正義の味方が聞いて呆れますね』

吹き飛ばされた二人が立ち上がってデイバイドのぼやきに応じた前方にいてあるう声の主を見ると、それは青い騎士を模したドーパントだった。

しかも気を失っている麗奈を横抱き（所謂お姫様だっこ）に抱えている。

どうやら戦闘に気を取られて麗奈への配慮が無防備になってしまっていたようだ。

「チッ、しまった……!」

「……お前ら何モンだあ〜？どうして麗奈を攫おうとする？」
『そうですね、では私の自己紹介だけでもしておきましょうか。何かと禁則事項が多いのでね』

そう紳士的な態度で前置きを置くと、その騎士のドーパントは自己紹介を始めた。

『私の名は井上運河^{いのうえ うんが}。そして今の姿をナスカドーパントと申します。こちらのドーパントの人名は明かせませんが、とりあえずジョーカードーパント…とだけ言っておきましょうか』

ご丁寧に自分の本名まで明かしながら自己紹介をするナスカドーパントに、デイバイドは更に質問をぶつける。

「それで？そいつを連れてく理由はあ？」

『生憎これ以上は私の口からは言えません。どうしても知りたいのであれば、我々のボスを探す事ですね。最も、どこの誰かも分からなければ探し様がありませんかね？アツハツハツハ……おっと、失礼』

一々癪に障る口調で答えるナスカドーパントにデイバイドは苛立ちを覚えながらも、今やるべき事を思い出した。

まずは麗奈を奪還しなければ……。

麗奈のDシリーズを使って碌でもない事を仕出かそうとしている事は間違いないだろう。

「悪いが、そいつは返してもらおうぜえ〜？」

『ホウ、残念ですがそう簡単に返すわけにはいかないのですね。我々はこちらで失礼させて頂きますよ』

「では、御機嫌よう」などと呟いた途端、ナスカドーパント達の背後に次元断裂が現れてその中へと飲み込まれて消えてと行った。

「チツ、次元移動で逃げやがったかあ。って事はアイツもワールドウォーカーかあ……」

「一応どこに移動したかは彼女の気配で分かるから、ここは一先ず僕の連れと合流するよ」

「オイオイ、いいのかよお？このまま放っておいてよお」

デイバイドの呟きに変身を解除しながら答えるディージェントに、それは後でもいいのではないかと思ひ、優先順位を改めさせようとしたが、次に歩の口から放たれた発言に納得した。

「それなら問題ないよ。今僕の連れがこの世界の『基点』と一緒に行動してるからね。彼女の協力を仰げば何とかなる」

ディージェント達がジョーカードーパントと戦闘を始めた頃……

「はあああつー!!」

『アメエんだよおおおお!!』

サイクロンとメタルドーパントも戦いを繰り広げていた。

河壁という男と亜由美から引き離す様に場所を遠ざけながら、サイクロンが身軽さを武器にヒット&アウェイを繰り返していたのだが、

メタルドーパントの堅牢な肉体には今一つダメージを与えられないのだ。

相手の使っているメモリ・メタルメモリは「闘士の記憶」を内包しており、一撃の破壊力と見た目通りの鋼鉄の如き防御力を兼ね備えたメモリだ。

今の自分が変身しているサイクロンではパワーが足りず、とてもではないが歯が立たない。

「クツ…硬い……」

『軽い！軽すぎるぜ仮面ライダーさんよおおおお！！』

そんなこちらの事情を相手が組む筈もなく、メタルドーパントは渾身のロッドの一撃を加えようとしてくる。

一度距離をとってから痛む拳を振りながら痛みを和らげていると、メタルドーパントは大音量で叫びながら突っ込んできた。

「チツ、さつきからウルサイ…！」

棍の一振りをバックステップでかわすと、サイクロンは黄色いガイアメモリを取り出してスイッチを押した。

「ルナ！」

「相手が硬いんだったらこっちはその逆よ！」

サイクロンはドライバーに挿したサイクロンメモリと黄色いガイアメモリ・ルナメモリを入れ替えて起動させた。

「ルナ！」

ガイアウイスパーが鳴り響き、ルナメモリの効力によってサイクロンの体色をライトグリーンから黄色へと変化させ、その姿を仮面ライダールナへと変化させた。

『色が変わった所で何になるってんだああああ!!!?』

「そう思うならやってみなさい」

メタルドーパントが再び此方へ迫って来るのを余所に、ルナはその場に佇んで攻撃を仕掛けて来るのを待った。

『おらあ…って何じゃこりゃああああ!!!?』

メタルドーパントの攻撃がルナの横腹にヒットした瞬間、その身体はゴムの様にグニヤリと曲がった。

その捻じ曲がったルナの見た目と、ロッドから伝わる感触に驚嘆の声を全力で上げた。

「これが仮面ライダールナの特性よ。ハアッ！」

『どうわあああああ!!!?』

ルナは落ち着き払った態度で答えると、右足を文字通り伸ばしてメタルドーパントの腹を蹴りつけた。

ルナメモリは「幻想の記憶」を宿したガイアメモリだ。その特性は肉体を自在に伸縮させる事が可能で、使い勝手が非常に良いメモリだ。

しかし楓が持っているメモリの中でスペックが一番低い為に大してダメージは与えられないだろうが、これで相手との距離を離す事が出来た。

「さて、次はこれね」

ある程度蹴り飛ばした後に伸びた右足を元の形状に戻すと、今度は赤いガイアメモリ・ヒートメモリのスイッチを押してドライバーに差し換えた。

「ヒート！」

「アツツイのかますわよ！！」

「ヒート！」

ヒートメモリを挿してスロットルを斜めに傾けると今度はその装甲を赤く染め上げ、仮面ライダーヒートへとその姿を変えた。

「熱き記憶」を宿したヒートメモリは装着者の闘争本能を高める効果があり、楓が持っているメモリの中で一番攻撃力が高い。

ヒートメモリの作用がドライバー越しにわずかに楓の中に入った事で若干テンションが高くなったヒートは左手にバレーボールほどの大きさの炎の塊を生成し、それを相手に向かってレシーブの要領で投げつけた。

「ハアッ！」

『ウゲアッ！アツチイイイイ！！』

身体が金属なだけあつてか、炎弾を喰らった右肩が真っ赤に熱を帯びている。

どうやらこちらの方が相性が良さそうだ。そうと決まればこのまま炎弾を浴びせ続ければいい。

次々と炎弾を放ち、やがてメタルドーパントの身体全体が真っ赤になった所で、ヒートメモリをスロットルから引き抜いて右腰に設けられているマキシマムスロットに挿し込んでその横を軽く叩いた。

「ヒート！マキシマムドライブ！」

「ハアアア……」

両手を胸の前に翳してその中心に、先程の比ではない高温を秘めた炎弾を生成して行く。

やがてその高温が太陽の如く白く発光するほどに高くなった所で、野球ボールほどの大きさに圧縮してピッチャーの如く投げつけた。

「ヒートストレート！！」

『ウゴガアアアアア！！』

プロの野球選手顔負けの豪速球は見事にメタルドーパントの腹部に直撃し、爆発を起こした。

爆炎が晴れるとそこには横たわった黒金と、メモリブレイクによって黒金の身体から排出されたメタルメモリが落ちていた。

ヒートはすぐさま変身を解除してメタルメモリを拾い上げると、それを見据えながら黒金へ問いかけた。

「アンタ、このメモリどこで手に入れたの？」

「ボ、ボスに…渡されただけだ……」

「ボス？それじゃあそのボスってどこのどいつよ？」

「それは、教えらんねえなあ…ハハッ、ハハハハハハ……！！」

「ッ!？」

それだけ答えると、黒金は高笑いを上げながら塵の様に崩れ去って行った。

この現象は十年前にも見た事がある。駆がNEVERと呼んでいたヤツが、メモリブレイクされた時と同じ現象だ。

(まさか、コイツもNEVER……一体何者なの?それに、父さんと母さんが殺された理由つてもしかして……)

楓はこの十年間の間にそんな仮説を何度も思い付いていたが、そんなことはあり得ないで済まして来た。ただ認めたくなかったのだ。

両親が、人の身体を使った実験をしていたなんて……。

(まだよ!まだそうと決まったわけじゃない……!)

そう心に訴えかけながら本来駆の所有物であるメタルメモリを握りしめながらあの出来事に思いを馳せた。

もしあの時、無理にでも着いて行っていたら、駆がいなくなる事はなかったのだろうか……。

二週間ほど前、西方探偵事務所のポストに駆宛の依頼の封筒が届いているのを楓は見つけた。

その封筒は普通の物とは違ってそこらじゅうにイニシャルの模様が施されている白い封筒だった。

『駆、依頼の手紙入ってたわよ』

『おうサンキユ。それで、差出人は？』

『それが差出人の名前が書いてないのよ。何か怪しくない？』

楓は訝しみながらも駆に手紙を渡すと、駆はその封筒を見た瞬間、その表情は険しい物になった。

『楓、俺がこれ読み終わるまでの間、ちょっと席外しててくれないか？』

『え？なんで？』

『これは俺一人でやれつつう依頼人からだ。しばらく来てなかったんだがな……』

駆は最近生やし始めた顎鬚を撫でながら神妙に呟いた。

三十過ぎてからは渋く決めたいと言ってきたから始めたのだが、意味がイマイチ分からない。

まあカッコいいからいいんだけど……。

『それって、私も付いて行っちゃ駄目なの？』

『今回ばかりは相手も相手だから……。まあそんなに気にするほどじゃねえさ。それに、お前一人でも今なら問題ねえだろ？』

『まあ、それはそうだけど……』

確かに今の楓なら並みのドーパントくらいは余裕で倒せる实力を持っている。しかし今回駆に来た依頼は少なくとも難しい物であることは間違いない。

いくら何度か受けた事のあるクライアントだったとしても、かれこれ十年越しの依頼だ。自分も一緒に着いて行った方がいい。それを駆に伝えた楓であったが……

『ダーメーだ。これは俺一人じゃないと解決できない。ホラ、分か

「だったらとっとと出てった出てった」

「シッシッ」と手で払われながら言われて、仕方なく所長室から出て行った。

しばらくして読み終わったのか、駆が白いソフト帽を被りながら所長室から出て来ると、ソファで寛くわんいでいた楓に帽子に手を添えながら告げた。

『俺はしばらく留守にする。多分2〜3日くらいで帰って来れると思うから、それまで事務所を頼む』

『ええ、分かったわ。でも気を付けてね、何だか嫌な予感がするから……』

楓が不安を表に出していると、駆は「ハハッ」を軽く笑いながら楓の頭に手を置いた。

『そんな心配すんなって。今までの事件に比べれば、大したことねえよ』

『ちよ、何時までも子供扱いすんな！もう28なんだし！』

『おっとワイワイワイ。そんなちっさいナリしてるとっいな』

『ちっさい言っいな!!』

怒鳴って手を退かすと、駆はカラカラ笑いながら「じゃ、行って来る」と言っつて事務所から出て行った。

それが駆と交わした、最後の会話だった。

それから一週間ほど経っても未だに帰って来なかったので警察に捜査申請を出したのだが結局見つけれず、唯一発見されたのは海岸に打ちつけられていた今自分が被っているこの駆が愛用していた白いソフト帽だけだった。

普通ならこれで死んだとされて終わりだが、自分はまだ諦めたくない。今ようやく手掛かりを見つけたのだ。このまま黙っているわけにはいかない。

それにはまず、NEVERとは一体何なのかをもう一度調べ直す必要がありそうだ。

一先ず亜由美の所まで戻ろうと決めるが、その瞬間聞き慣れたガイアウイスペーが聞こえて来た。

「トリガー！」

「ッ！？今の音って、まさか！？」

『そのまさかだ』

背後から聞こえて来た声に振り向くと、そこには右腕がライフルの銃身になっている青いロボットの様な怪人がいた。

その怪人に見覚えはないが、何のメモリで変身しているかはすぐに分かる。駆が持っていたガイアメモリの一つ・トリガーメモリだ。

「まさか、トリガーまで……！！！」

『このメモリはもう俺の物だ。お前の持っているメモリも、全部頂くぞ』

「チイツ……！次から次へと……！！！」

ドライバーとサイクロンメモリを取り出して再び変身しようとする

が、トリガードーパントは徐に銃口を右へと向けた。
一体何なのだろうと思いいその銃口の先を向くと、そこには亜由美が
木陰に隠れて立っていた。

「亜由美ちゃん！？どうして!？」

「し、心配になって後を探しに来たんです…でも、何で別のドーパ
ントと戦って…さっきの人はどうしたんですか…?」

『大人しくメモリを全部渡せ。そうすれば見逃してやることを約束
しよう』

ロックオンマークーのみが付いた顔でそう言つてのけるトリガード
ーパントに、楓はある矛盾を感じていた。

最初に戦つたマグマドーパントは「仮面ライダーを誘き出す」事が
目的で騒ぎを起こした。

そいつを倒したらずくに黒金とかいう男が、メタルドーパントにな
つて勝負を仕掛けて来た。

更にそれに続く形で、今度は目の前のトリガードーパントが……。
それに、黒金は「俺達」と複数形でマグマドーパントだった男に怒
鳴っていた。

「俺達」…つまりそれはまだ次に控えている仲間がいた事を示して
いる。

ならば何故二人がかりで襲つて来なかつたのか？

その答えはトリガードーパントにある質問をすればすぐに解ける。

楓はトリガードーパントにその質問をぶつけた。

「……ねえ、もしかしてジョーカードーパントってのもいたりする
わけ?」

『ああそうだな』

返って来た答えは肯定。これで確信した。コイツ等の目的を……！

「成程……それでそいつに……駆に近づかせないために私をここで足止めしてるってわけね」

楓は導き出した結論はこうだ。

コイツ等は駆を拉致した後、ガイアメモリを奪ってそれで怪人に変身。

そして、その怪人の中には駆が変身したジョーカードーパントがいる。

メモリに何らかの細工を施せば、洗脳した状態でそのメモリを使ったドーパントを操る事が出来る為、今回はその前段階としてどこかで暴れさせているのだろう。

その為には自分と会わせて洗脳が解けるのを防ぐため、前持ったここで自分を足止めするためにこうして連続で襲ってきたのだろう。メモリの回収はその二の次だ。

『……察しが良いな。流石は探偵と言ったところか』

「何でメモリを奪ったのかとかいろいろ聞きたいけど、今はその子を見逃す事が先決よね」

楓の推理に感心するトリガードーパントを余所に、楓は自分の持っている4本のガイアメモリを取り出した。

「本当だったらここで投げ渡すのが定番なんでしょうけど、私って変身しないとノーコンなのよね。私がアンタに近づいてコレ渡すから、受け取ったらとっと立ち去りなさいよ？」

『案ずるな。俺は約束は守る』

(アレ？意外と中身はイイ人なのかな……？)

トリガードーパントの意外と素直な一面を見て亜由美はそう思いつつも、楓がメモリを受け渡す事には気が引けた。確かにこのまま渡さなければ自分の命が危ういのは明確だ。だが仮面ライダーへ変身する力を失ってしまえば、間違いなく良からぬ事が起きる。

何とか出来ないものかと思っていると、背後からポンツと誰かに肩を叩かれた。

「ヒヤウツ!？」

「遅くなつたね」

「あ、歩!？」

思わず驚いて奇声を放ちながら後ろを振り向くと、白いスーツとソフト帽を身に着けた歩が自分の肩に手を置いて立っていた。

『ん? 誰だお前は?』

『この子の連れです』

「なあ、それより早くズラかろうぜえ、眠くてしょうがねえ」

突如現れた白服の男に疑問の声を漏らすトリガードーパントに対して、歩は簡潔に答えると、金髪の青年は現状をまるで無視したように、そう眠たげにばやきながら大きく欠伸をした。

その青年の態度に亜由美は呆気にとられたが、確かに歩がいるんだつたら逃げるのは今の内だろう。

『悪いがそう簡単には逃がさんぞ』

「あ、ダメ! 撃つ……!!」

ドドウンッ

逃走を謀っている事を理解したトリガードパントが、どちらかの青年目掛けて引き金を引こうとしている事を察した楓が叫ぶも時すでに遅く、トリガードパントの右腕の銃口から弾丸が二発連続で放たれた。

その二つの弾丸が二人の青年の脳天を撃ち抜く……事はなかった。

歩がそうなる事を既に予測し、次元断裂を自分達三人の前に展開したのだ。

弾丸はその壁に阻まれると、何の音も出さずにポトリと芝生に落ちていった。

「……………何？」

「へ……………」

トリガードパントと楓が呆気に取られていると、歩が楓に近づきながら言い放った。

「今もう一人の連れがナスカというドーパントに攫われたんです。

大体の場所は突き止めているので付いて来てくれませんか？」

「アンタ、今の状況分かって言ってるの？」

歩の空気を読まない発言に楓は呆れながら、目の前のトリガードパントを指差した。

今はコイツを何とかしなくてはならないのだ。彼の知り合いより先に、まずはトリガーマモリを取り戻さなくては。

アレは駆の物だ。絶対に取り戻す……。

その意図を理解したのか、歩はデイージェントドライバーを取り出

しながら楓に訊ねた。

「もしかしてあのドーパントのメモリは、貴女の物ですか？」

「違うわよ。でも私の相棒にとっては大事な物」

「……分かりました。手を貸しましょう」

歩がデイジーエントドライバーを装着しながらそう言うと、そのドライバーを見たトリガードーパントが歩に言い放った。

『……成程、ボスから聞いていたもう一人の“特別なドライバー”

を持つている悪魔とはお前の事だったのか。しかしお前の話から察するに、俺の仲間がドライバーを一つ奪取したようだな……。悪いがそうと決まればお前と戦う義理はない』

「悪魔……という事はやはり神童さんが絡んでるみたいですね……」

トリガードーパントの発言に歩は、今回の事件にも神童が絡んでる事を察していると、トリガードーパントは銃口を此方へ向けながら撤退の言葉を告げた。

『俺一人では勝つことは難しそうだからな。ここは退かせてもらう』

「あ、待ちなさい！」

「サイクロン！」

楓がサイクロンメモリを起動させるも、次の瞬間にトリガードーパントは歩と楓、亜由美とヴァンの二方向の足元に硝煙弾を撃ち込み、煙幕を展開させた。

「…………ゴホッ」

「うわっ!?!」

「うおっ、ケムッ！」

「ゲホッ、ゴホッ…！クウッ、変身…！」

「サイクロン！」

煙幕に咽ながらも何とか変身した際に巻き起こる突風を利用して煙幕を吹き飛ばすも、すでにそこにはトリガードーパントの姿はなかった。

第三十七話・Nの襲来／楓の回想（後書き）

今回のあとがきラジオは出張版として本日21時に更新いたします。
お楽しみに（＾w＾）ノシ

あとがきラジオ出張版〜募集ライダーとオリキャラの設定：W編〜（前書き）

今回の募集キャラであるヴァン・アキサメを投稿してくださいましたジャードさん。

来栖麗奈を投稿してくださいました空風さん。本当にありがとうございました！！（T Tゞ

水音ラル流に書いたお二人を気に入って頂けると幸いです。それはスタートオ！！（・W・）

あとがきラジオ出張版〜募集ライダーとオリキャラの設定：W編〜

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがきラジオ！出張ば〜ん！！！」

加奈「さあ久々にやって参りましたあとがきラジオ出張版！」

皐月「早速W編のゲストに登場してもらっぜ！さあ来やがれ！！！」

楓「おつ邪魔っしま〜っす！」

皐月「会いたかったぜこの年増ああああ！！！」 右ストレート

加奈「 出会い頭にいきなり一発！？」

楓「ホッ」 しゃがんで回避

皐月「な…！？」

楓「だあれが年増だああああ！！！」 コークスクリユーアッパー

皐月「ぐはあああつ！！！」 吹っ飛んだ

加奈「何あの私、超強い……」

楓「まったく、ちよつとからかっただけじゃないの。そこまで怒る事ないでしょ」

加奈「え、ええと今回のゲスト一人目！W編の主人公・藤原楓さんですー！」

楓「よろしく。ところで、もう一人の自分に会った感じはどう？」

加奈「何か、不思議な感じですね……私より年上って言うのが、余計に……」

馭「お〜い、もう一人忘れてるぞ〜。てか皐月ちゃん大丈夫か？」

皐月「畜生…リイマジ加奈強ええ……」

駆「まあ探偵稼業始めてから俺が鍛えてやったからな」

加奈「そしてW編のもう一人の主人公と呼べる存在・西方駆さんです！」

駆「よろしくなお嬢さん。にしても、楓とそっくりだなあ」

楓「異次元同位体って言うらしいわよ。ところで後二人ゲストが来るのよね？しかも募集キャラって言うんだっけ？」

皐月「おつとそうだったな。じゃあ今度は募集キャラ陣に登場してもらおうとするか」 復活

楓「回復早いわね……」

皐月「それが取り柄だからな」

加奈「ではお二人同時に出て来てもらいましょう！どうぞー！」

麗奈「こ、こんにちは……」 一人だけ出て来た

加奈「ってアレ？ヴァンさんは？」

麗奈「“眠いから行かない”って言って、楽屋で寝てます……」

皐月・駆「何やってんだアイツはあああー！！」

カンペ（ ） 皐月ちゃんと駆さんがヴァンを叩き起こしているため、しばらくお待ちください（ ）

ヴァン「初めましてえ〜、ヴァン・アキサメでえ〜す」 タンコブ
出来てる

駆「収録サボって寝るたあ、いい度胸してんな」

皇月「にしてもヴァンってことは外国人ってことだよな？見た目は
それっぽいけどかなり流暢に喋るよな」

ヴァン「お袋がアメリカ人で親父が日本人のハーフなんだよ。あと
バリバリの日本育ちだから英語話せねえぞお…ねむ…」

麗奈「ここまでまで寝ようとしなくてください、本番中ですよ！」

ヴァン「だってよお〜、俺一日18時間寝ねえと寝た気になれねえ
んだよお〜」

駆「それはいくらなんでも寝過ぎだ！！」

楓「で、今回のこのあとがきラジオって言うのかしら？ここで私達
のプロフィールを紹介するのよね？」

加奈「あ、はいそうです。それじゃあ早速楓さんにやってもらいま
しょうか」 資料渡してる

楓「これを読めばいいわけね。じゃあ読むわよ

藤原楓（仮面ライダーサイクロン、仮面ライダーヒート、仮面ライ
ダールナ）

年齢：28歳

身長：155cm

体重：45kg

髪型：クセツ毛のある亜麻色の髪を肩辺りまで伸ばしている

顔付き：少しツリ目ではあるが美人の部類に入る。ただし年齢の割
に幼い顔立ちをしている

性格：面倒見が良い姉御肌

その他：西方探偵事務所の秘書をしている駆の相棒で、事務所の家

事は全て彼女がこなしている。

サイクロン、ヒート、ルナの三本のガイアメモリ適合者で、三種類のライダーに変身できる。

十年前に両親がドーパントに殺されてからは常にドーパントを敵視するようになり、今でも犯人に関するNEVERという言葉の意味を探している。

NEVERについては駆が何か知っている事に気付いてはいるが、彼の口からは敢えて聞かない事になっている（自分で解決しなければならぬ物だと自覚している為）。

また、駆の事は……ゲフンゲフン！これ以上はないわね！うん！」

皐月「へえ〜そうなのか〜」ニヤついている

駆「まあそうイジってやらないでくれよ。次は俺の番だな

西方駆（仮面ライダージョーカー、仮面ライダーメタル、仮面ライダートリガー、ジョーカードーパント、仮面ライダースカル（但しスカルは現在では変身不可））

年齢：32歳

身長：179cm

体重：60kg

髪型：ボサボサの黒髪で、外出の時は必ず白いソフト帽を被る

顔付き：顎鬚を生やしたワイルドで精悍な顔

性格：仕事に私情を持ち込まないハードボイルドだが、プライベートではいい加減な性格

その他：西方探偵事務所の所長で、ガイアメモリ専門の私立探偵。ジョーカー、メタル、トリガーの三本のガイアメモリ適合者で、三種類のライダーに変身できる。

楓に会う以前は仮面ライダースカルとして活動していたが、諸事情により破損。

それに代わるガイアメモリとドライバーを受け取るために藤原夫妻の下を訪れるが、NEVERにより殺害されており、撃退した後に身内のいなくなった楓を引き取る事にした。

現在謎の組織に監禁されており、ジョーカーカードパントに強制的に変身・洗脳されている。

また、楓の好意には気付いており………ところから先は言っちゃ駄目だな」

楓「……………」顔真っ赤

加奈「ああもう可愛いなあ私と同じ顔なのに！」

ヴァン「リア充爆発しちまえ〜」

麗奈「そう言う事言っちゃ駄目ですよ！？そして次はヴァンさんの番です！」

ヴァン「へえ〜い。じゃあ読むぜえ、かつたりいなあ〜」

ヴァン・アキサメ（仮面ライダーディバイド）

年齢：19歳

身長：172cm

体重：54kg

髪型：金髪で前髪が異常に長く目が隠れているが、本人は見えてい
ることのこと

顔付き：普通よりは整った顔立ちで、目は常に眠たげに半開きの状態

性格：面倒臭がり屋だが、やるべきことはきちんとやる主義

その他：“寝る”という行動に誰よりも重要視しており、暇さえあれば何処であろうと眠りこける。「立つたまま寝る」「自転車に乗りながら寝る」事も出来るが、後者は勿論事故を起こす。

しかし、実際には常に浅い睡眠しか摂れない不眠症であり、深い眠りに就きそうになると、ある出来事がフラッシュバックしてしまう。その為、安眠できる居場所を世界を渡りながら探している。

また、変身後に後頭部を搔く癖がある。

で、まだあんだっけ？今度は俺の変身するDシリーズの説明？まあいいや、読むぜえ

仮面ライダーディバイド

基調色はエメラルドグリーンで、複眼の色は赤。ライドプレートはマスクに「V」の字のように刺さっている。腰のベルトとライドカードを取り出すホルダーはディエンドの同型の物で、違いはベルトに表記されているディスプレイのマークのみ。

相手の力を分割し、一時的に取り込む能力を持った“アビリティディバイドイングシステム”。

Dプロジェクトに於いては相手の能力の半分を奪って、その場で分析させる事を目的とさせていた。

また、名前の由来は「分割する」を意味する「ディバイドdivide」から来ている。

スペック

身長：191cm

体重：98kg（武装含む）

パンチ力：7t

キック力：4.5t

ジャンプ力：一跳び50m

走力：100m5.7秒

ディバイドライバー

エメラルドグリーンの刀身を持つ日本刀型変身ツール

。刀の鐔に当たる部分にスリットが存在し、そこへカードを装填す

る事で効果を發揮する。

また、ブランクカードをデイバイドライバーに装填した状態で相手に斬り付けると、斬り付けた相手の半分を奪い取って、カメンライド、及びカイジンライドが可能。

姿は変化しないが、バツクルに埋め込まれたディスプレイが奪った相手を象徴するマークに変化する。

また、ブランクカードは使い捨てで、使用した後消滅する。

ライドカードシステム

デイバイド：デイバイドに変身するためのカード。

カードを装填させて振る事でその空間に次元断裂を発生させて、それが装着者を包み込む事で変身する。

ブランクカード：何も表記されていない効果を發揮しないカード。

相手の能力を奪う際に使用する。（カード制限は5枚までで、もう一度使うには変身を解除してカード使用履歴をリセットしなければならない）

スラッシュ：デイバイドライバーでの斬撃攻撃の威力を上昇させるカード。

また、任意でリーチを伸ばす事ができ、最大15mまでを斬り付けることが可能。

インビジブル：装着者を視認できなくするカード。

但し音や体温と言った別の感覚による気配は消す事が出来ない。

イリュージョン：分身体を最大4体まで生成する事が出来るカード。それぞれが自我を持って動くが、カードを使えるのは本体である一体のみ。

ファイナルアタックライド：必殺技・ディメンションスラッシュを放つ。
ディケイドと同系統の物で、自分と相手の間に展開された十枚のビジョンを通過して敵を斬り裂く。

以上、説明終わりい……ああ〜疲れたあ〜」

麗奈「お疲れ様です」 水持ってきてる

加奈「この人、マジイイ人……」

駆「楓もこれくらい気が利いててくれりゃあな〜」

楓「んなっ!?ちゃんと毎日代わりにご飯作ってあげてるじゃない!?!」

駆「いやそう言う所じゃなくって、こっ……な……」

ヴァン「訳：可愛げがない。だとよお」

楓「んなあにい〜!?」

駆「おいヴァン!そんなストレートに訳すなよ!?!」

皐月「お前も帰って寝ろ!?!」

加奈「さて、皐月がヴァンさんを寝かしに行っている間に、麗奈さんの紹介をしておきましょうか。ではお願いします」 資料渡しながら

麗奈「は、はい!分かりました!

来栖麗奈(???)

年齢：22歳

身長 : 170

体重 : 不明

髪型 : 茶色の長髪を後ろで三つ編みにしている

顔付き : 瞳はブラウンでクールな印象の顔

性格 : 相手を立てる謙虚なタイプ

その他 : Wの世界に迷い込んだ記憶喪失の女性。

歩曰くDシリーズを所持しているらしいが、詳細は不明。

駆を拉致した謎の組織が麗奈のドライバーを狙っており、現在ナスカドーパントに攫われている。

今の所はこれくらいだそうです」

駆「他の紹介に比べて随分短いな」

加奈「でも次の章に入ったらもう一度詳しい紹介をするらしいですよ」

皐月「って事は、次回の章にも出て来るって事だよな？」 帰って来た

楓「皐月ちゃんお疲れ。意外と早かったわね」

皐月「その辺歩いてた好太郎とっ捕まえて押し付けて来た」

その頃好太郎&ヴァン……

好太郎「ハア……アイツは人使いが荒過ぎる……」

ヴァン「ZZZZ」 好太郎に負ぶさってる

好太郎「お前は自分で歩け!!!」

ヴァン「眠いい〜ダルイイ〜」

好太郎「どうせ眠り浅いだろお前は!!」

歩・亜由美（ご愁傷様（です）……） 歩いてる所を丁度目撃

加奈「さて、一通り紹介も済んだ事だし、これにて今回のあとがきラジオ出張版は終了!」

皐月「質問や感想も待ってるぜ〜!」

駆「あと、アクセス数がある程度溜まったらコラボ企画をするらしいぜ」

楓「参加してみたい人は、作者さんのメッセージボックスへ送って下さいね」

麗奈「ご応募、お待ちしております!」

あとがきラジオ出張版〜募集ライダーとオリキャラの設定：W編〜（後書き）

いやあ〜終わった終わったあ〜（、、*）

麗奈さんについてはまだ明かせない所がありますが、それは本編を通して追々明かして行こうと思っております。

尚、麗奈さんは次の章にも登場予定ですので楽しみにしてくださいね。

それでは、次回の更新は9月23日を予定しておりますので、今後の展開にもご期待ください！（ W （ノシ

第三十八話：Nの襲来／心の臓を喰らう槍（前書き）

仮面ライダーディージェント！

前回の内容は……（Wのオープニング風に）

ディバイド「あのピエロ、意外と強ええなあ」

ディージェント（また神童さんの細工が……）

ジョーカードーパントに苦戦するも何とか追いつめるが……

ナスカドーパント『二対一でイジめるとは、正義の味方が聞いて呆れますね』

ナスカドーパントの襲来により麗奈が連れ去られてしまう！

楓『それって、私も付いて行っちゃ駄目なの？』

駆『ダメだ。これは俺一人じゃないと解決できない。ホラ、分かったらとっとと出てった出てった』

「トリガー！」

楓「ッ！？今の音って、まさか！？」

トリガードーパント『そのまさかだ』

歩「もしかしてあのドーパントのメモリは、貴女の物ですか？」

楓「違うわよ。でも私の相棒にとっては大事な物」

歩「……分かりました。手を貸しましょう」

トリガード「パント」俺一人では勝つことは難しそうだからな。こ

こは退かせてもらう」

第三十八話：Nの襲来／心の臓を喰らう槍

風都タワーに秘密裏に作られた部屋……。

そこへナスカドーパントがジョーカードーパントと麗奈を連れて次元断裂の中から姿を現した。

ナスカドーパントは抱えていた麗奈をジョーカードーパントに預けて自分の顎に手を添えると、そこからメモリ排出して人間態である二枚目顔のキザツたらしい顔をした男・井上運河へと姿を変えた。

井上運河がやって来たこの部屋はとあるNEVER…所謂一度死んだ人間達が隠れ家として使っている空間だ。

運河自身もNEVERであり、自分達を纏めるボスにただ付き従っただけにすぎない。

何故この身体がNEVERになったかなんて、とうの昔に忘れてしまっている。

ただ面白そう。それだけの理由で井上運河と言う男はここにいるだけだ。

「上手く行ったみたいだな」

するとそこへ自分達がボスと呼んでいるレザースーツの男が、部屋の中央に置かれた拘束椅子に腰かけ、口元を笑みの形に歪めながら声を掛けて来た。

「ええ。しかし予想外でしたのは、更にもう一人特別なドライバーを持った人間がいた…という点ですね」

「まだいたのか？」

「はい。河壁からの報告にあった剣を持った仮面ライダーの他に、藍色の仮面ライダーがいましたよ」

レザースーツの男に簡単な報告を世間話でもするかのように伝えると、男は「そうか」とだけ答えて椅子から立ち上がると、ジョーカーカードに手招きをして麗奈を座らせるように命令した。

『……………』

「よし、ご苦労だったな」

『グツ…！？ウ、ウウウウ……！！』

ジョーカーカードパンツがその命令に無言で頷いて麗奈を椅子に座らせると、男は指をパチンと鳴らしながら特に感情を込めていない劳いの言葉をジョーカーカードパンツに掛けると突然苦しみ出し、首筋からジョーカーメモリを排出して西方駆に戻るとそのまま倒れてしまった。

「ゼハアツ…！ハアツ…！か、克也かつや！その人をどうするつもりだ！？」

「別にどうもしないさ。ただコイツの持っているドライバーが欲しかった。それだけさ」

強制的にドーパントに変えられた拍子に猿轡が解けた事で、疲労が激しいものここへ自分を拉致したレザースーツの男…克也へ問いかけた。

それに対し克也は床に落ちたジョーカーメモリを拾い上げながら、何でもなさそうに答えた。

小野塚克也おのづか かつや…十年前、ある事件を切欠に行方不明になっていた駆の元相棒だ。

二週間前に克也からの封筒が来て、それに書かれていた場所まで赴いたのだが、克也は変わってしまった。

いや、正確には何も変わっていなかったと言えるだろう。

彼は十年前のあの事件が起きてからというもの、克也は自分を何一つ隠す事なく曝け出すようになってしまったのだ。自身の内に押し込めていた破壊衝動さえも……。

「克也！お前は一体何がしたいんだ！？」

「……そんな事、お前が一番分かってるだろ？復讐だよ。俺をNEVERにしたお前へのな……」

十年前のあの日、克也は一件の事件解決の際に命を落とした。

その悲しみに打ちひしがれていた時、藤原夫妻に会ってNEVERという蘇生実験をしている事を知った。

駆はその実験に克也の身体を受け渡す事を条件に、克也をNEVERとして生き返らせる事に成功した。

だが、全てはそこから崩れ始めた。

克也は人間としての道徳感が徐々に欠けて行き、自身の破壊衝動に従う様になってしまったのだ。

どうやらNEVERとして生き返らせた人間には副作用がある様で、生前の人格が時が経つ毎に失って行くのだそうだ。

その事に藤原夫妻はようやく気付くも時既に遅く、その頃には克也は完全にただの悪魔になってしまい、自分がこの手で殺した…筈だった。

だが彼は十年越しにその姿を自分の目の前に現したのだ。復讐鬼として。

駆は十年前の時と同じ様に何とか克也を止めようとしたが、克也の力は以前より増しており、ジョーカーでは太刀打ちできなかったのだ。

その後はここに縛られ、ジョーカーメモリに何らかの改造を施され、その実験台としてジョーカードーパントに仕立て上げられてしまった。

「だったら、何でこの関係のない人達まで傷付けるんだ！？俺一人に復讐すればいいだろうが！！」

「そうだな…だから関係のない人間も傷付けるんだよ。その方がお前に効くからな……」

克也はうつ伏せに倒れた駆の前にしゃがんで冷たい笑みを見せながら、自分を最も苦しめる方法を答えた。

本当に変わってしまった…誰であろう、自分のせいで……。
昔の彼ならそんな事は絶対にしない。

「それにな、まだ俺の復讐対象はいるんだよ」

「何…？まさか、藤原夫妻の事か？でもあの二人はもう……」

「いや違う…お前、そいつ等の娘を匿ってるだろ？」

「ッ！？まさか、楓を…！？」

どうやら克也の標的には自分だけではなく、楓も含まれている様だ。彼女にまで手を出させるわけには…行かない！

「やめろ！彼女は関係ない！アイツは…俺の相棒だ…！」

「俺の相棒…か……。よく元相棒の俺にそんな事が言える…なあ！」

「ガハッ！ゲヒッ…ゲホッ…！」

「ボス、この人どこにもドライバーを隠し持っていないですよ？」

克也は倒れている駆の腹を思いつき蹴って身体から空気を無理矢理吐き出させる。

何度か咽ているところで運河が金属センサーを持ちながら克也に報

告していた。

コイツ等は最初は藤原夫妻が開発した次世代型ガイアメモリ・T2ガイアメモリ26本を集めていたのだが、先日ここにやって来た謎の男に、この女性（来栖麗奈と言っらしい）が“特別なドライバー”を持っていると聞かされ、興味本位で部下達に探させていたのだ。

「ん？どうやら本当に何とかの壺とやらに入れてるらしいな……。
ちよっとどいてろ」

そう呟いて運河を退かして麗奈の前に立つと、彼女の顔を左手で鷲掴みにした。

「ウツ…クツ……！」

「ほ〜う、これが何とかの壺か…確かにいろんなものがどっちらりと入ってる」

麗奈が苦しそうに呻いているのを余所に、克也は目を閉じながら何かを集中して探る様な真剣な面持ちでばやくと、麗奈を掴んでいる反対の手を右に向けた。

するとその真上に20〜30cm程の灰色の板が現れ、その中からズルズルと青黒い長方形のバツクルが出て来て、ポトリと克也の手に落ちた。

「又ツ！？ゲガアツ！」

「克也！」

克也がバツクルを手にした瞬間、突然頭を抱えて悶えたがすぐに治まったのか今度はそのバツクルを見ながらニタリと笑った。

「ハ…ハツハツハ…これはいい物を手に入れたなあ…確かにこれはもうエターナルも必要ないくらい力だ…！」
「ボス、どうやらドライバーを手に入れたみたいだな」

克也が狂気に満ちた高笑いを上げていると、黒髪オールバックの無表情の男が部屋に入って来た。

この男の名は石原健^{いしはらけん}。またの名をトリガードーパントだ。

彼もまたNEVERであり、克也が出す任務をただ淡々とこなすだけの格好の駒だ。

「健か…丁度いい所に来たな。剛^{たけし}の奴はどうした？」

「黒金剛^{くろがねけし}は仮面ライダーとの戦闘で消えた。今度は俺が戦おうと思っていたんだが、“特別なドライバー”を持った奴が現れたんでな。一先ず引かせてもらった」

「そうか…まあお前が帰って来ただけでも僥倖だ。取り敢えずこれを試しに使ってみる。神童もお前に次元移動能力を与えていたからな。お前でも使えこなせる筈だ」

「……ッ!？」

そう言つて麗奈から奪ったバツクルを健吾に投げ渡すと、克也の時と同じように頭を押さえる。

やがて頭痛が治まったのか、手を退かしてバツクルをまじまじと見つめている。

その様子を見ながら克也は不敵に笑いながら健に言い放った。

「それを使って試しに仮面ライダーと戦ってみる。別に“特別なドライバー”を持った奴でも構わん。好きにやれ」

「……了解だ、ボス」

健はそれだけ答えると部屋から出て行った。
駆はその様子を倒れた状態で見ながら、ある推測を立てた。

克也の性格ならまず自分がその力を使う筈だ。それなのに何故か一介の部下に何のテスト段階も踏まずに使わせる……。それはつまり、健をただの実験台として使おうと言う腹か……！

「克也！お前まさか……」

「ああそうだな。アイツにはあのドライバー……ディボルグドライバーとか言うらしいが、そいつの実用テストをやってもらう。触れた瞬間分かったんだが、アレは相当クセの強いタイプだ。下手に扱えば装着者も危ないだろうな」

「それを知ってて何で……」

「言っただろう？何の関係のない人間も巻き込んだ方がお前には効くってな……。それに、健もそれを承知の上でアレを使おうとしている。俺に命令されたと言う事もあるが、例え命令しなくてもアイツは平気で使うだろうなあ……」

駆はここにいる人間達の異常さを再認識した。

コイツ等は、もう人としての心を失っているのだと……。

歩達は現在、風都タワーまでの道程みちのりで楓に自分達の大まかな説明をしながら歩いていた。

その内容を聞いていた時の楓は、何とも胡散臭そうな顔をしていたが、歩が「別にそれほど重要な事でもないので信じなくてもいい」と言っただけの話しを締めると、楓は自分の考えを歩にぶち当てた。

「ま、確かにさつき出て来た灰色の窓みたいなヤツの説明もそれで納得できるかもしれないけど、そう言う事が出来るガイアメモリを持つてるって言う可能性もあるわけだしね。ガイアメモリ以上に不可思議な事件が起きて堪るもんですかっつての」
(良かった。普通の反応だ……)

楓の解釈を聞いた亜由美は内心ホツとしていた。

今まで会った人は「世界を旅する宇宙人」と変な解釈をする人だったり「科学者たる者それを信じて実証するべし」とか言っつてアツサリ信じる人達ばかりだったからだ。

やっぱりこういう反応が普通だと実感できただけでも亜由美には大いに安心できる要素だ。

ずっと変な解釈する人達ばかりだったら間違いなく自分の頭の中の価値観がとんでもない事になりそうだ。

「で、そこにいる男は一体誰？アンタの連れだっつて言っつてたけど……」

楓が話題を変えて今一緒に付いて来ているヴァンという男性を訝しげな表情で見た。

そして彼はというと、空を見上げながら何やら寝息の様な声を漏らしつつもしつかりと付いて来ている。

前髪が目隠しているので見えないが、多分寝ていない。ただボーンとしていただけだ…と信じたい……。

「何時知り合っつたの歩？」

「ついさっき」

「それだけで連れっつて言わなくないですか!？」

「うるっせえなあゝ、寝れねえだろうがあゝ」
「ってホントに寝てた!？」

歩の単純すぎる解釈に亜由美がツッコミを入れると、ヴァンが眠たそうな声で語尾を伸ばしながら文句を垂れた。
まさか本当に寝てたとは…また変人の知り合いが増えた……。

「それにしてもよお、本当にあそこの東京タワー見てえなタテモンの中にいんのかよゝ？」

「ウン。彼女の…と言うよりも彼女の持っているDシリーズの気配がするからね」

「ところで歩、その彼女って一体どういう人なの？」

先程から彼女彼女としか言っていないのでどう言う人物なのかサツパリわからない。

ただその人が歩やヴァンと同じDシリーズと言う事しか判明していないのだ。

そう問いかけると、歩の代わりにヴァンが大きく欠伸した後には答えた。

「来栖麗奈っていう美人だったぜえ。しかも記憶喪失なんだとよお」
「美人で記憶喪失…しかも攫われてるって一体どこのヒロインよ…」

楓が尤もな反応を返した。そんな典型的なヒロインがいたら、実際に会ってみたいところだ。いや、今実際に会おうとしているわけなのだが……。

そんな事を考えていると、突然歩が立ち止まり、それに合わせて自分達も立ち止まった。

「どづしたんでえ？代行者様よお」

「……Dシリーズの気配が、こっちに近づいて来てる」

ヴァンが歩に変なあだ名で訊ねると、歩は微妙な表情をしながらこちらへ近づいて来る気配を告げた。

「って事は、その麗奈さんって人が何とか逃げ出して来たって事？」

亜由美がそんな結論を口にしてみると、楓が首を振って探偵並みの（と言うか本業の）推理を展開させた。

「その可能性もなくはないけど、アナタの場合はそのDシリーズとか言うドライバーだったかしら？その気配を確認できるんだから、麗奈って人からそれを奪ってこっちに誰か来てるって可能性の方が高いんじゃないの？」

「その通りだ」

楓が自分の推測を立てていると、前方からどこかで聞いた事のある声が掛けられた。

一行が前を見るとそこにはどこかのスパイや特殊部隊が身に付けていそうなポケットやポーチがいくつもある黒い軍服を着た黒髪オールバックの男がこちらへ歩み寄って来るのが見えた。

その男からは一般人とはかけ離れた異様な雰囲気を醸し出しており、まるでただの動く人形を彷彿とさせ、生きているようには見えなかった。

「アイツ、さっきの青い奴じゃねえかあ？雰囲気と同じだし」

「そうだ。俺の名は石原健、コードネーム・トリガー……だった男だ」

ヴァンがその男から発せられる雰囲気を読み取ってトリガード・パントだと推測すると、その健と名乗った男はトリガードメモリを懐から取り出した。

「アンタ！それ返しなさい！」

「分かった」

「へ……？」

「どう言うつもりですか？」

取り出されたトリガードメモリを見た楓が吼えると、健はすぐにそれを楓の向かって投げ渡した。

その潔さに楓は思わず呆気に取られるが、それを不審に思った歩が健に声を掛けると、彼は無機質な表情で理由を述べた。

「ボス曰く、もうT2ガイアメモリを集める必要はなくなったそう
だ。その代わり、これの実用テストをして来い……との事だ」

そう言つて今度は黒とダークブルーの放射線状のラインで彩られた
手の平サイズのバツクルを取り出して来た。

「……チツ、あまり会いたくないシステムに会っちゃったみたいだ
ね」

歩がそれを見た瞬間、そのバツクル…Dシリーズのドライバーの情
報がディージェントドライバーから送られて来て、その内容に思わ
ず舌打ちをした。

「お前にはこれがどうい物なのか分かっている様だが、俺は遠慮
なく使わせてもらっぞ」

健がそう告げると、その手に持ったバツクルを腹部に装着し、右腰にバツクルと同じ配色ではあるが、中央に赤いトリックスターが設けられたカードホルダーが出現し、そこから一枚のカードを取り出す。

そしてそのカードには…Dシリーズの特徴を持った一人の戦士のイラストが描かれていた。

「おい代行者あ、アレは一体何だあ？」

「デイボルグドライバー…戦闘能力を極限まで特化させたDシリーズの試作品だよ。まさか麗奈さんがアレを持っていたとは思わなかった……」

「試作品って事は欠陥品って事かあ？だったら何とかなるんじゃないかねのお？」

「アレには装着者が限界を超えても活動を続けさせる暴走システムが備わってる。一度起動したら、滞在している世界を破壊するまで止まらない……」

「え？それってもしかして……」
「装着者が死んでも動き続けるって事かあ……そんな危なっかしいモン造るって、開発者は何考えてんだよお……」

歩からの説明を聞いていた亜由美がもしやと思いい口をはさむと、僅かに難色を示したヴァンが代わりに答えた。

「カメンライド……」

そんな反応などお構いなしに、健は着々とバツクルの表面を左にスライドさせてカード挿入口を展開し、そこへ手に取ったカードを装填して閉じた。

「ま、待ってください！」

だが、そこで亜由美は健に向かって呼び止めた。
どんな人間でもそう簡単に死んでいい筈がない。きつと話せば分かる筈だ。

「なんだ？」

「それを使ったら死んじやうかもしれないですよ！？命令されたからって何もそこまで……」

亜由美が言い切ろうとしたところで、健が自虐的な苦笑を浮かべながら放った言葉に息が詰まった。

「使えば死ぬ…か…そんな事など俺にとってはどうでもいい。何せ俺は…とうの昔に死んだ人間だからな」

「ッ!？」

それは決して比喩的な表現で言った物ではなかった。まるで本当に死んでいると言っている様な…そんな顔をしていた。

健の衝撃的な発言によって固まっていると、遂に彼の口からあの言葉が紡がれた。

「変身」

「ディボルグ！」

音声コードを唱え、カードホルダーに設けられたトリックスターを叩くと電子音声の流れ、健を取り囲むように無数の槍の形状を模したダークブルーのノイズが出現し、次々に突き刺さる。

突き刺さって行く毎に、健の身体がダークブルーのノイズに包まれ

て行く。

そして最後に槍が出現していた位置に滞在していたライドプレートが頭部や胸部・関節部に何枚も突き刺さってそこからノイズが晴れると、その正体を現した。

全体的にダークブルーを基調としているが、胸部と腕の装甲は黒く、頭部にはライドプレートが縦にまるで鳥籠の様に突き刺さっており、真上から見れば、それは中央から放射線状に伸びたラインを描く形になっている。

そのライドプレートの隙間からは鋭利な形状になった赤い複眼がこちらを睨んでいる。

各関節部に刺さったライドプレートも頭部に刺さった物と同じ形で横向きに刺さっている。

仮面ライダーディボルグ。Dプロジェクト始動段階前に試験的に生み出されたパワー超特化型のプロトタイプだ。

そのスペックは正規のDシリーズの中で、最も身体能力の高いディジェントを軽く凌駕する。

但しその分装着者への負担が大きく、自身の力で動けられる時間はせいぜい5分程度だ。

つまり、その五分を超えればバーサーカーシステムが作動して、装着者自身も危なくなる。

「力が…漲る……！！」

「……亜由美は離れて。楓さんは風都タワーに行ってください。ここは僕とヴァン君で引き止めます」

「おいおい、俺もやらなくちゃなんねえのかよ〜？」

ディボルグへと変身した健は、両手を握り締めながら感嘆の声を上げる。

その様子を見ていた歩は、亜由美に避難するように言い、楓に先に行くよう伝えた。

その中に自分が入っていないことから、自分も足止めに参加しなくてはならないのかとやや不満げな声を掛けるが、歩はディーゼントドライバーを取り出しながら、あたかも当然の様に答えた。

「Dシリーズを止められるのは、同じDシリーズだけだからね」

「ハア…やっぱ同族だからってそう簡単にホイホイ付いて来るんじゃないかな…たぜえ……」

「じゃあ二人とも頼んだわよ。亜由美ちゃんはここに書いてある私の事務所に行つて。そこなら安全だろうし」

「……………」

「亜由美ちゃん？」

そう愚痴を零しつつも、ヴァンも同じくデイドライバーカードを取り出し、臨戦態勢に入る。

その様子を見ていた楓が亜由美に事務所の住所が記された名刺を渡そうとしていたが、亜由美はデИБルグを凝視していた。

彼は自分の事を死んでいると言っていた。

死んでいるからもう一度死んでもいいなんて、そんな筈はない。

だって…こうして自分と話してくれたではないか。それだけでも、生きた証になる！

「歩…絶対死なせないであげてね……」

歩の背中にそう告げて楓から名刺を受取ると、その名刺の記された場所まで走って行った。

「あの子、結構優しいわね……」
「そうですね……」

楓は走り去って行くその姿を見ながら小さくそう呟いた。それには歩も同意できる。健の言っていた事が本当だったとしても、彼女は彼を生きている人間として見るだろう。ならば、自分はどうかのだろうか。一度死んだ人間をただの死人として見るのか、それとも生きていると断言できるのか。そんな事、自分には判断できない。やはり彼女は、自分よりも決断力を持った人だ。

「時間がない。始めるぞ」
「それもそうだなあ。行くぜえ代行者あ」
「……分かったよ」

ディボルクとヴァンにも急かされ、歩も同じく変身までのプロセスを進めて行く。そしてカードを挿入し、音声コードをヴァンと同時に入力した。

『変身（つとお）』
「カメンライド……ディージェント！」
「カメンライド……ディバイド！」

変身が完了すると同時に、二人はディボルクに向かって駆け出した。

「……甘い」

ディボルグがそう囁くと、カードホルダーを腰から取り外した。すると上部と下部からながい柄が伸び、上部の先端部分には返し刃の付いた鋭い矛が備え付けられている。

ディボルグ専用武器・ディボルグブツカーである。

2メートルを超えるその武器を大きく横に振って牽制すると、すぐさま流れを突きに変更して二人の腹部へと突きを喰らわせた。

「はっ！」

「クウ……！」

「グアッ！」

立った一突きされたただけにも関わらず、そのあまりの威力に装甲がスパークを上げながら二人は吹き飛ばされてしまう。

「まだまだ行くぞ」

二人との距離が開いた際に、ディボルグはディボルグブツカーの中央にあるカードホルダーを開いてそこから一枚取り出すと、バツクルをスライドさせて装填し、ディボルグブツカーに付いたトリックスターを掌で叩く。

「アタックライド…ブラスト！」

認証音声と同時に、ディボルグブツカーを突きの構えで持つ。そして……

「てりゃあー！」

突きを放ったかと思うと、その矛先からダークブルーのエネルギー

弾が射出され、デイバイドに直撃しそうになる。

だがデイージェントが咄嗟に反応して態勢を立て直そうとしていたデイバイドを突き飛ばし、そのエネルギー弾がデイバイドに直撃する事はなかった。

「グッ!? ウウ…!!」

代わりにデイージェントがそのエネルギー弾を右肩に喰らってしまい、あまりの痛さに呻いてしまう。

「お、おい大丈夫かよお?」

「余所見よそみしてる場合じゃないよ」

「あん? つてうおおおとお!?」

デイバイドの心配を余所に、デイボルグは次々と突きを弾丸に変換して撃ち出して来る。

デイボルグの「ブラスト」も、デイージェントの「ブラスト」と同じように銃撃用の武器が存在しない。

その為デイボルグの唯一の武器であるデイボルグブッカーを用いて弾丸を放つのだ。

デイージェントはその弾丸を避けつつも、楓が風都タワーへ向かうのを見つけて、自分たちがするべきノルマを何とか達した事を確認した。

「行かせはしない」

しかしそれに気付いたデイボルグは振り返って楓に向かって凶弾を

放とうとした。

だが、そう簡単にやらせはしない。

「アタックライド…ブラスト！」

「ハッ！」

「くうっ！？」

デiboldグが撃ち出すより先にディージェントがブラストを発動させて一瞬でデiboldグを撃ち抜いた。

デiboldグは射出する前に必ず槍を構えなくてはならないので、その数瞬のタイムラグがディージェントの攻撃より後手に回ってしまったのだ。

「ほおらもう一丁お」

「うぐあっ！？」

更にデiboldグはデiboldから追撃を喰らってしまう。

「カメンライド…デiboldグ！」

デiboldは事前にblankカードをドライバーにセットしていたのか、そんな電子音声デiboldライバーから発せられた。

それと同時にデiboldのバックルに設けられたディスプレイがデiboldグを象徴するライダーズクレストへと変化し、デiboldグの身体能力を除いた機能の半分を奪う事に成功した。

「貰ったぜえ。お前の能力の半分」

「油断はしないでね。アレの本質はライドカードシステムじゃない

から」

「分かってるって代行者あ」

「……ふんっ、良い気になるなよ、悪魔共」

暢気に会話しているようにしか見えない二人に、デiboldグは小さくそう呟いた。

第三十八話：Nの襲来／心の臓を喰らう槍（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「遂にNEVERのボスが判明したわね」

皐月「にしても何でしばらく名前が出なかったんだ？」

カンペ（いやあ〜最初はすぐに出そうと思ってたんですけどね、どう名前を捻ろうか悩んだ挙句ここまで時間が掛かっちゃったんですよf（^^;））

加奈「要するに思い付かなかったわけね」

皐月「そんで散々悩んで大道克己から小野塚克也か…それなりに捻ったな……」

カンペ（意外と難産であった、、;））

加奈「しかも今回の話を書くために態々『Atoz』のDVD買ったらしいわね？」

皐月「でも店に置いてあったのが初回限定版のかなり高いヤツしかなかったって…どんだけ出費高えんだよ……」

カンペ（でも面白かったですよ）、*）実は映画観れてなかったですし）

加奈「まあ作者の映画事情はいいとして、次に明らかになったのは麗奈さんのDシリーズね」

皋月「ここに大まかな資料があるな。スペックしか書いてないけど読んでみるぜ。」

身長：201cm

体重：89kg

パンチ力：20t

キック力：23t

走力：100m7秒

ジャンプ力：一飛び42m

これ、明らかに歩のスペック超えてね？」

加奈「お陰で考えるの大変だったそうよ。一応Dシリーズの中で一番スペックが強いのはディーゼントって言う設定にしてあるから、ここでそれよりも高いのが出たら矛盾が起きるから、そこでプロトタイプって設定にしたらしいわよ」

カンペ（そうしておけば何とか辻褃が合いますからねー。）。
ちなみにこのプロフィールの身長・体重は健さんが変身中のものなので、麗奈さんが変身したものより一回り大きいです）

皋月「ま、今回の話の流れはこんな感じだな」

加奈「質問・感想等がありましたらドシドシ送って下さいね！お待ちしております！」

第三十九話：D無双！／耳に張り付く断末魔（前書き）

これまでの、仮面ライダーディージェントは！

駆「ゼハアツ…！ハアツ…か、克也！その人をどうするつもりだ！？」

克也「別にどうもしないさ。ただコイツの持っているドライバーが欲しかった。それだけさ」

克也「それにな、まだ俺の復讐対象はいるんだよ」

駆「何…？まさか、藤原夫妻の事か？でもあの二人はもう……」
克也「いや違う…お前、そいつ等の娘を匿ってるだろ？」

健「ボス曰く、もうT2ガイアメモリを集める必要はなくなったぞうだ。その代わり、これの実用テストをして来い…との事だ」

ヴァン「おい代行者、アレは一体何だ？」

歩「ディボルグドライバー……戦闘能力を極限まで特化させたDシリーズの試作品だよ。まさか麗奈さんがアレを持っていたとは思わなかった……」

ディボルグ「力が…漲る……！！」

第三十九話：D無双！／耳に張り付く断末魔

楓は風都タワーに向かって走っていた。

歩から聞いた話だと、どうも麗奈と言う女性を攫った中にはジョーカーカードパントがいたらしい。

そのジョーカーカードパントと言うのは、あの健と言う男が言っていた事が正しければ、間違いなく駆の事だろう。

だとすれば、ヴァンと言う青年と一緒に健を抑えている歩の頼みと合わせて、駆を連れ戻すチャンスだ。

あと少しで風都タワーの入り口まで辿り着くと同時に、周囲に違和感を感じた。

（人が、いない…？）

この時間帯であれば、観光客などでここは人で溢れ返っている筈なのに、人氣が殆どないのだ。

唯一いるとすれば、屋外に出された白いテーブルに着いてコーヒーを優雅に飲んでいるタキシード姿の優男くらいだ。

「おや？来ましたか」

その優男はこちらの気配に気が付くと、手に持ったコーヒーを皿の上にカチャリと置いて席を立った。

「ねえ、ここ全然人がいないけど、ひょっとしてアンタの差し金？」

「ええそうですね。これから始まるショータイムには邪魔になりませんので掃除させて頂きました。しかし貴女が来るとは思ってもみませんでしたよ、仮面ライダー殿」

そう言って懐から取り出したのは金色のガイアメモリで、中央にはイニシャルの“N”が描かれていた。

「アンタもドーパントか……ひょっとして、アンタもNEVERとか言うヤツだったりするわけ？」

「はい。私の名は井上運河。またの名を……」

そこで言葉を区切ると運河はガイアメモリのスイッチを押してガイアウィスパーを鳴らした。

「ナスカ！」

「ナスカと申します。どうやら健が貴女にトリガーメモリを返してしまったようです。まったく、彼は少々早とちり過ぎますよ……。ボスが必要ないと言ったからといって、敵にそう簡単に返すのは浅はか過ぎます」

「何でその事知ってるの？」

「あの場に居たからです。本来ならあそこで取り返してもよかったです。私是一对一で戦う主義なのでね。ここに先回りさせてもらったんですよ」

そう言うと運河は手に持ったガイアメモリを顎に出現していたコネクタに挿し、その姿をナスカドーパントへと変化させた。

『貴女の持っているメモリ……すべて頂きますよ』

「生憎だけど……」

「サイクロン！」

楓は顔を伏せながらドライバーを装着し、サイクロンメモリのスイッチを押して起動させる。

コイツ等がガイアメモリを集めて一体何をしようとしているのか知らない。だが、集めて何か良からぬ事をしようとしている事は確かだ。

そんな奴らにメモリを…駆との“絆”をくれてやる道理はない！

「あんた達には一本もやらないわよ。変身！」

「サイクロン！」

サイクロンへと変身を遂げると、右手をスナップさせてナスカを指差して宣戦布告を告げた。

「さあ、アンタの罪に気付きなさい」

「アタックライド…スラッシュ！」

「アタックライド…スラッシュ！」

「…フッ！」

「はいつとぉー！」

「……………」

「アタックライド…ディメンション！」

デーエージェントとデイバイドは「スラッシュ」を発動させて、デーエージェントは手刀で、デイバイドは手に持ったデイバイドライバーでそれぞれ斬り掛かるうとしたが、デイボルグは無言でカードを一枚バツクルに装填し、デイボルグブツカーに嵌めこまれたトリックスターを叩いた。

「ふんっ！」

そして槍を地面に向けて構え、思いつきり地面に突き刺した途端、デイボルグを中心に地面から無数のデイボルグブツカーと同じ形状の槍が放射線状に突き出して来た。

「…ッ!？」

「うおわっ!？」

その突然の出来事に二人は反応できず、飛び出して来た槍に吹き飛ばされてしまう。

「デイメンション」は複数の槍を地面から生成するカードだ。

この効果は十秒もすればすぐに切れて生成された槍は消えてしまうが、即効性と威力に関してはかなり高い。

現にデイバイドにライドカードシステムの性能を半分奪われてしまっているにも関わらず、二人を吹き飛ばしてしまっただ。

もしデイバイドが能力を奪っていなかったら、かなりの致命傷になっていた事だろう。

「どうした、その程度なのか？悪魔共……」

「クツソオ…意外と強ええ……」

「……そろそろ変身してから2分が経つ。早く解除させないと装着者が危ない」

ディボルグの暴走システムが作動するまで、せいぜい後3分と言ったところだろうか。

あくまで装着者の疲労が限界に達した時に作動するので、その3分と言つのは大凡の目安だ。

しかし何時装着者の限界が来てもおかしくないのだ。早くしなくては……。

「お前もあの小娘と同じ事を考えてるみたいだが、今更俺が死ぬなんて事はない。俺はNEVERだからな」

「NEVER……？」

ディージェントが何を考えているのか察したディボルグが言い放った単語を反芻した。

ここはディケイドのデータに記録されていない世界。つまりDプロジエクトに於いて一切関係のない世界だ。この世界にしか存在しないライダーと関係のない特別な単語など、ディージェントには知る由もないのだ。

「正式名称『NECRO OVER』。通称NEVER…簡単に言えば蘇生された人間…ゾンビだ。俺はどんな攻撃を受けても血の一滴も流しはしないし、死にもしない……。ただの人の皮を被った兵器だ」

「だが……」と一旦区切ると、カードを一枚取り出して次の攻撃態勢を整え、更に続けた。

「アタックライド…ラッシュー！」

「如何に不死身の身体であれど、今の様に肉体を無理矢理強化した状態でマキシマムドライブを受ければ肉体が耐え切れずに塵となつて…消える！」

「うおつとととお！？」

デiboldグは「ラッシュ」の効果で攻撃スピードを上げ、デiboldに連続突きを放った。

それをギリギリで避け続けるが、やがてスピードに追い付けなくなつて何度か喰らつた後、大きく吹き飛ばされてしまった。

「んがっ！ごっ！ぐ…うう……」

その後何度か地面をバウンドしながらスピードを緩めて行くが、止まつた頃には変身が解除され満身創痕の状態だった。

(つまり、暴走の心配はないと言う事か……でもその代わりに変身を強制解除しようとするれば、命を落とす…か……)

デiboldグの暴走システムは、あくまで装着者の負担が限界になつた際に発動するものである。

彼の話が本当ならば変身しても披露しない為、暴走システムが作動する事はないだろう。

しかし、それと同時に別の問題が発覚した。もし強制的に解除させれば、彼は間違いなく死ぬ。しかもこちらはヴァンが戦闘不能と来た。

「アンチ・キル」を使えば殺さずに勝てるかもしれないが、強制的に解除する事には変わりない。どうすれば……。

そう思つた矢先にふと倒れたヴァンを視界に収めると、ヴァンが小

刻みに震えているのが目に入った。

最初はあまりの痛みで筋肉が痙攣を起こしているのかと思ったが違った。小さな声であったが、変身して聴覚も上昇したディーゼントにはその声がハッキリと聞こえた。

「ウルセエ…ウルセエんだよ……」

「何…？」

デiboldグが小さく疑問の声を漏らすと、ヴァンは手を着いてゆっくりと顔を上げた。

額を切ってしまったのか頭からは血が流れており、その血で金髪の髪の一部を赤く塗らしている。

やがてユラリと亡霊のように立ち上がったヴァンは、自身の血を整髪剤代わりにして、両手で前髪を後ろへ流してオールバックにした。

「“声”が…“声”が煩くて寝れねえんだよお……！！」

（“声”……？）

その何処か血走った印象を抱く眼光は鋭く、デiboldグを正面から睨んでいる。

何時もの雰囲気からはとても想像できないヴァンの言動にディーゼントは固まっていると、ヴァンは煩わしそうに耳を抑えた。

（助けて…）

「あああウルセエエ…！何で何時まで経っても耳から離れねえんだ

よおお…！…！

「カメンライド……」

そう喚きながらデイバイドライダーを拾い上げ、再びカードをスリットへセットする。

彼の頭の中に響くのはいくつもの絶望に満ちた声。それが5年たった今でもずつと張り付いて来る。

（助けてくれよお…！…！）

ヴァンは先程まで完全に気を失っていたのだが、その所為で過去の出来事が浮き彫りになり、目を覚ました今でも耳に焼き付いてしまっているのだ。

（まだ…死にたくない…！）

「ああ俺に話しかけるなあああ…！」

「デイバイド！」

それを振り切るかの如く「変身…！」と言う掛け声と共にデイバイドライダーを乱雑に振って変身し、デイボルグに向かって突っ込んだ。

「ふんっ、自棄になったか」

「アタックライド…スラッシュ！」

迫り来るデイバイドに冷静に対処して「スラッシュ」の効果を発動させたデイボルグは、こちらへ斬り掛かるうとするデイバイドへ向

かってカウンターの突きを放とうとした。だが……

「アタックライド…イリユージョン！」

突きに直撃する寸前でデイバイドは分裂して左右に分かれ、更に二体からもう一体ずつ分裂して計4体のデイバイドがディボルグの死角から一斉に剣を振り被った。

「何っ!？」

『だあああああ!！』

「ぐあああっ!！」

ディボルグは咄嗟に反応できずに4体のデイバイドからの攻撃を全て喰らってしまい、装甲から火花を激しく散らしながら仰け反った。

「くっ…この…!！」

ディボルグは槍で横に振って薙ぎ払おうとしたが、4体のデイバイドはそれぞれバックステップで避けられて、空振りしてしまう。

デイバイドはその攻撃モーション後の隙を突いて再び四方向から接近し、斬り掛かろうとディボルグに迫る。

「何度も同じ手を喰らうか！」

しかしディボルグは槍を振った勢いでそのまま片足を軸に回転しながらもう一度横薙ぎする。

今度の攻撃はさすがに避ける事が出来ずに、それぞれのデイバイドが火花を散らして吹き飛ばされるが、そのうちの本体である一体からエメラルドグリーンのノイズの塊が上空へ出現し、それがもう一体の分身体へと生成され、上空からディボルグに兜割りをお見舞い

した。

「何だとっ!?!」

「おおおらああああ!!」

「ぐはああああ!!」

左肩から右腰に掛けて叩き斬ると、デИБルグの装甲が激しくスパークしてやがてデИБルグドライバーが装甲形成の限界を迎える程のダメージを受けた為に変身が強制解除され、その際に健の腰に装着されていたデИБルグドライバーが外れて地面に落ちた。

「くっ…馬鹿な……」

健は左肩を抑えながら予想外の追撃によって自身が敗れたありえない出来事に、身体に走る激痛に苦しみながらも驚嘆の声を漏らした。

「ハア…ハア…ハア…聞こえなくなっただか……」

ディバイドもようやく“声”が聞こえなくなり、息を荒げながら変身を解除して起き上がった。

あの“声”は自分が意識を遠ざけるとすぐに聞こえてくる。その所為で今まで安心して眠る事が出来なかったのだ。

自分でも助けてやりたいのにどうしても全てに手が届かないし、例えこの力を持っていても全てを救う事が出来ない。

そして助けられなかった者達の断末魔が自分の罪として永遠に追いつけて来る。

この声から逃れるには、今の様に敵…脅威となる存在を徹底的に潰さないとは時まで経っても消えない。

聞こえて来る断末魔の原因となっっている脅威を消さない限りは……。

「くそっ…だが、まだだ……。まだ俺は消えるわけにはいかない…
…！」

健がそう呟くと落ちたディボルグドライバーを拾い上げ、次元断裂を展開させてその中へと逃げて行った。

どうやらマキシマムドライブ並みの衝撃を受けなかったために、傷が浅く済んだ様だった。

「ヴァン君、ちょっといいかい？」

「ああん？んだよお？」

“声”が聞こえなくなったことで落ち着いていると、そこへ変身を解除した歩がこちらへ近づいてきた。

その表情はどこか不機嫌で、虚ろな目を此方へ睨みつけている。

「君、変身を強制解除させれば彼が死ぬ事を分かってたよね？」

「ん？まあそんな感じの事は言ってたような気がすんなあ」

ヴァンはある程度落ち着いた事で何時もの間延びした口調に戻りながら、歩の不機嫌そうな顔を気にした様子もなく普通に話しかける。それを聞いた歩は諦めた様な感じで溜め息を吐くと、抑揚のない口調で話しかけて来た。

「……まあ、分からなかったんなら仕方ないけど、人の命はそう簡単に奪って良いものじゃないと言う事を忘れないでね」

「お、おう……」

そう言った歩の目は虚ろなものであったものの何処か悲壮感に満ち、畏怖を感じさせる物だった。

一体何故そんな顔をするのかは何となく分かった。今の自分の行動

が拙かったのだろう。

恐らくこの男は人の命の尊さを誰よりも重要視している。

もし自分が死ぬのを分かっている攻撃したと言っていれば、この男は一体どうしたのだろうか。

「とにかく今は楓さんの後を追うよ。ナスカやジョーカーと鉢合わせしている可能性が高い」

そう考えていると歩はそう言ってヴァンの横を通り過ぎ、まっすぐ風都タワーへと向かって行った。

(アイツ、ホント一体何なんだろうなあ…何考えてるかサッパリ分かんねえ……)

ヴァンはそう思いながら後頭部をポリポリ搔いて歩の後を追った。

864

風都タワー前……

「はああああー!」

サイクロンが自身の特性である風の効果で自身のスピードを上昇させ、ナスカドーパントの懐へ潜って殴り掛かる。

サイクロンが今使用しているサイクロンメモリには「風の記憶」が内包されている。

その恩恵で自在に風を操る事ができ、スピードにも特化されたメモ

リだ。

『アツハツハ！遅すぎますよ！』

本来ならばここで相手の腹へ風を纏った拳で吹き飛ばせられるのだが、ナスカドーパントはそのスピードに匹敵する高速移動能力を使ったサイドステップでかわし、一瞬でサイクロンの背後へ回り込んでその手に持った西洋風の片刃剣・ナスカブレードで斬り掛かった。

『そおらっ！』

「うわっつと！このっ！！」

その袈裟切りをサイクロンは前転して間一髪で避けると、すぐにナスカドーパントへ向き直って右手を大きく振り払うと、その際に生じた突風でナスカドーパントの動きを一時的に止め、今度は突風を追い風にして飛び蹴りを放つ。

『くう…！』

「たありやああああ！！」

『うおっ！？』

風の特性も相俟って、ナスカドーパントを大きく吹き飛ばして壁に叩きつけることに成功するも、ナスカドーパントはすぐに態勢を立て直してこちらへ超スピードで迫る。

しかしそう来る事はサイクロンには既に読めており、今度は両手を大きく振り払って竜巻を発生させてナスカドーパントに向かって放った。

『うおあああっ！？』

それには高速移動でも流石に太刀打ちできず、堪らず吹き飛ばされてしまった。

「もういい加減諦めてここ通してくれないかしら？こっちは相棒を迎えに行かなきゃならないのよ」

「相棒：？西方駆の事ですか？アハハハ…生憎ですが彼はもう貴女の相棒ではありません。我々の所有物ですよ」

「…ッ！駆を物みたいに言うな！！」

ナスカドーパントの軽蔑の籠った嘲笑と物言いに、サイクロンは苛立ちを隠す事なく特攻して行く。だが、そんな簡単な挑発に乗ってしまったのが拙かった。

「意外と単純ですね貴女は……」

ナスカドーパントがそう呟くと、手に持ったナスカブレードをサイクロンに向かって投げ飛ばした。その剣先はサイクロンを真っ直ぐ捉えており、勢いに乗ったサイクロンは急に止まる事が出来ない。

（マズイツ！当たる…！！）

直撃を覚悟し思わず仮面の奥で目を瞑ってしまったが、剣がぶつかる衝撃は何時まで経ってもやって来る事はなく、代わりに何やら微妙に柔らかい壁に触れたような感覚が全身を襲った。

「うわっ！？え、何…？」

何かにぶつかった事で身体が止まり、その何かを目を開いて見よう

としてみると視界が灰色に濁っており、自分の胸元にはナスカブレードが自分に当たる直前でピタリと止まっており、やがて重力に従ってカランと乾いた音を立てて地面に落ちた。

(何…これ…?)

後ろに下がってみると、視界が灰色に染まっていたわけではなく、サイクロンの目の前に灰色に濁った窓ガラスの様な物が立ちはだかっていたのだ。

「間に合ったみたいですね」

『その声…貴方ですか…』

ふと声のした背後を見るとそこには歩とヴァンが立っており、ナスカードーパントが聞き覚えのある声にそう呟いた。

「ジョーカードーパントはいないんですか？」

『アレはメモリ服用後の反動が激しくてですね、そう連続して何度も使えないんですよ。使い過ぎると壊れてしまうのでね』

「アンタ…！また駆を物みたいに…！！」

『まあ、ここは流石に退いた方が良さそうですね。3対1では分が悪過ぎます』

再び駆を者扱いする様な物言いをするナスカードーパントをサイクロンはキツと睨みつけ、怒りの籠った声をナスカードーパントにぶつけるが、そいつはそれを軽く無視してここからズラかうとし始めた。

「逃がすか！」

すぐ近くに落ちてあったナスカブレードを拾い上げながら声を張っ

てそれを思いつきリナスカドーパントに向かって投げ飛ばして動きを止めようとするも、ナスカドーパントはその剣先を指先だけでキヤッチし「これはどうも。では失礼」と言った瞬間にはナスカドーパントの背後に灰色の壁現れ、その中に飲み込まれる様にして消えて行った。

「またさっきの壁…！？まさかアンタが…いや、それはなさそうね」
歩が出していた壁と同じ者が出て来た事で、彼が壁を出現させて逃がしたのかと思っただが、違うと言う事はすぐに分かった。
もし本当に彼が敵だったら、態々こちら側へ着いてあのディボルグとか言う仮面ライダーの足止めをする筈がない。

「ディボルグは撃退しました。その後、次元断裂を使ってこのタワーの中へ逃げ込んだみたいですね」

サイクロンが推測を立てながら変身を解除していると、歩がディボルグを何とか退けた事を淡々とした口調で伝え始めた。
元からあの喋り方しかできないらしいが、正直な感想を言つとまるで人形の様で不気味だ。

だが少なくとも悪いヤツじゃないのは分かる。これは十年間探偵をやつてきて培った感覚だ。

そんな彼を信じるかどうかは、自分次第だ。

「そう……。ところで、アンタにはDシリーズとかいうヤツ以外の気配は分からないの？例えばこの中に何人いるかとか……」

「僕にはDシリーズと亜由美と、そしてこの世界の“基点”である貴女の気配しか分かりませんが、ヴァン君でしたら少しは分かるのでは？」

「んん？俺かあ〜？」

楓は歩に超能力一（？）でなかの状況が詳しく分からないか尋ねてみたが、よく分からない単語と共に否定の言葉を発し、横にいるヴァンに話題を振ると当の本人は眠たげに語尾を伸ばしながら楓の質問に応じた。

「ん、確かに嫌か気配がするけど、数までは分かんねえなあ。俺はお前みたいにそこまで敏感じゃないんだよあ」

「そう、それだとぶっつけ本番で入るしかないわね……。ところで“基点”って何？」

「世界を一冊の小説に例えるなら、“基点”はその中の主人公みたいなものだと思うってください」

「ふう、ん、私ってそんな大層な役柄でもないんだけどなあ……。まあいいわ。それじゃあアンタの依頼、“来栖麗奈の奪還”：引き受けさせてもらおうわよ」

「よろしくお願いしますね」

“基点”の意味を何となく理解した楓はソフト帽を深く被り直しながら妙に照れ臭い気分を誤魔化すが、すぐに仕事モードに入って歩の頼みと言う名の依頼をここで改めて引き受けた。

自分の目的である駆の奪還も合わせて、絶対に連れ戻す。

風都タワー最上階にある一室では、健が克也にディボルグドライブの性能と副作用を事細かに伝えていた。

あの時、デイベイドから予想外の大きなダメージを喰らってしまった為に変身が解除されてしまったが、マキシマムドライブ級の威力ではないことが幸いしてか健に致命傷は殆どなかった為、細胞崩壊を起こす事がなかったのだ。

「ふん、成程な…それなら別に使っても問題ないな……」

ディボルグドライバーを受け取りながら不敵な笑みを浮かべながら呟く克也に健は「ああ」とだけ相槌を打って答えていると、簡素なパイプ椅子に縄で縛り付けておいた麗奈が小さく呻き声を上げて目を覚ました。

「こ、ここは……?」

「漸くお目覚めか?お姫様」

麗奈が不意に声のした方を向くとそこには見知らぬ男が二人と、拘束具にガチガチに縛られた男がいた。

ここはどこなのかと思ひ辺りを見渡すと、質素なコンクリートが剥き出しの状態の壁が周囲の殆どを包み込んでおり、拘束具の男がいる右側には壁がなく、大きな換気扇の様な物がゆっくりと回っている。

そこからわずかに外の光景が見えるのだが、澄み渡った青空と小さな街並みが見える事からここはどこかの高い所と言う事が分かる。

「あ、貴方達は一体……」

「お前にドーパントを差し向けた張本人だ。ついでに、コレも貰っ

たぞ」

そう言つてこちらに向けて見せた物は、何処かで見た事のある長方形の青と黒のストライプ柄のバックル。

恐らく歩と言つ青年が言つていた自分のDシリーズと言つ変身ツールなのだろう。記憶はないがそんな事が何となく分かる。

「中々良い物だな…俺のガイアメモリよりもよっぽど特別な代物だ。コレ一つあれば、この街を消す事など造作もない」

「克也…もういいだろ、やめてくれよ……」

克也と呼ばれた凶器に奔つた言葉を放つ男に、拘束具に縛り付けられた男は弱々しく呟いた。

それを聞いた克也は皮肉げな笑みを形作ると、拘束具の男に近づいて彼のボサボサの髪を乱雑に掴んで顔を合わせた。

その際強く髪を引っ張られたせいか、拘束具の男は痛そうに小さく呻き、麗奈がその様子を見て小さく声を上げるも、克也はそんな事など気にした様子もなく、憎しみの籠つた言葉を吐き捨てた。

「何言つてんだ？お前への復讐はまだ終わってないんだよ……。もつと絶望に満ちた顔を見せてくれよ。なあ、駆……」

「そうか、少し待ってる……。ボス、ちよつといいか？」

克也の隣に居た無表情な鉄面皮の男が、何時の間にもやら取り出していたトランシーバーを手に持って克也に話し掛けて来た。

その時一瞬だけ克也の顔が面白い物を取られて怒りを露わにしている物に変わったがすぐになりを潜め、鉄面皮の男に「何だ？」と聞き返した。

「下で見張りをしていた奴からの連絡だ。仮面ライダーと“特別なドライバー”を持った二人がこちらへ向かってるそうだ。どうする？」

それを聞いた克也は何か考えるように手を添え、もう一度拘束具の男・駆に振り向くと、何か面白そうな事を閃いた時の様な凶悪な笑みを浮かべて駆に話し掛けた。

「仮面ライダーかあ… そう言えばお前の今の相棒も仮面ライダーなんだよなあ。そうだ、イイ事を思い付いた」

そうばやくと克也は鉄面皮の男に指示を出した。

「コイツを下へ連れてけ。そして目の前でジョーカーに変えて仮面ライダーと戦わせろ」

「了解だ、ボス」

「ッ！？ オイ待て！ 俺はアイツとは絶対に戦わない！！」

駆は狼狽しながら鉄面皮の男へ必死に声を掛けるが全く受け答える事はなく、着々と彼を拘束具から外して行く。

やがて椅子から完全に外すと今度は無理矢理両手を後ろへ回して腰に提^さげていたポーチから手錠を取り出してその手へ付け、外へ連れ出そうとしたところで克也が何か思い出し、部屋から出て行くことする鉄面皮の男を呼び止めた。

「ああそうだ健、これも持ってけ。お前もこれとは適合出来た筈だし、俺にはもう必要ない物だからな」

そう言って克也は健と言う名の鉄面皮の男に、無骨な赤い機械と白いUSBメモリを投げ渡した。

健はそれを片手で難なくキャッチすると「分かった」とだけ返事を返して、今度こそ部屋から出て行った。

克也は彼等を見送ると、邪悪な笑みを浮かべながらこちらに振り向いた。

「さて、こっちはしばらく暇だから何か話してもしてみるか」

（誰か、助けて……！）

麗奈は誰にでも無く助けを求めた。この男は普通じゃない。早くここから逃げ出さないと自分の身が危ない。

こんな時、何時でも助けに来てくれる正義のヒーローみたいな存在が自分にはいた様な気がするも、そんな考えはすぐに失われた記憶と共に消えて行った。

第三十九話：D無双！／耳に張り付く断末魔（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「今回はヴァンさんの過去にちょっとだけ触れたわね」

皐月「声がどうかいってたけど何なんだろうなあ？」

カンペ（まあそれは追々話しますよ。そして運河さんの井坂+霧彦な正確が自分で書いててスゴイと思っただねf（^^;））

皐月「ああ〜やっぱりアイツってあの二人合わせたリイマジなんだ」

加奈「まあ複数の人物を合わせたリイマジなんて原作にもいたしね。芦川シヨウイチさんとか」

カンペ（何で自分の書くキャラってみんな濃くなるんだろ…何か最近主人公が地味に見えて来た自分がいるんだが大丈夫なのか？（、; ;））

加奈「ちょ、それ危ない！歩のモブ化の危機!!！」

皐月「まあ歩ってあんまり主人公っぽいキャラじゃないからな。戦隊物で言う所のブルーだよな、あの性格って」

加奈「皐月！あまりそう言う事言ってあげない！気にしてるかもしれないから!!！」

カンペ（ちなみに私のすぐ横に居ますよ。歩ーw。）

歩「やっぱり、僕って地味なのかなあ……?」

亜由美「歩！気にしないで！何かとてつもなく負のオーラ出てますよ！？」

臯月「つて、居たあああ！？」

加奈「負のオーラつて何！？結構前に臯月が出してたあの地獄兄弟に仲間入りしそうなオーラの事！？」

歩「ウン…でも大丈夫、問題ない」

亜由美「まさかのエルシャダイネタ！？ひよつとして大丈夫つてあとかぎラジオのテンションの事！？ダメです！そっち方面でハジけたら絶対にダメです！！！」

歩「…何か今、すごくキツクホッパーになりたい気分なんだ」

亜由美「ダメつて言われたからつてすぐにグレない！！キツクホッパーだったら何！？私はパンチホッパーですか！？」

歩「あ、その発想はなかった」

亜由美「ゴメン今の聞かなかつた事にいいいい！！！」

加奈「……うん、アレくらい天然漫才できるくらいだったら問題ないかな？」

臯月「つてかあの漫才に付き合える亜由美もある意味凄いな。異次元同位体故の性か……」

カンペ（ま、何にせよ歩が主人公つて言う事には変わりないですからね（´、*）

そして今回はディージェント無双！

因みに言う今回のタイトルの“D”はディボルの“D”でした！次回もよろしく願いします！！（^w^）ノシ

第四十話：D無双！／迫りくるナイフと走馬灯（前書き）

さて、今回は前回あとがきで話した通り歩が序章のワーム戦以来の無双をします。

やべえよ、まじでつええよ歩…どうしてこんな子に育った…（、
、；）

ま、それは今に始まった事でもないか（吹っ切れた）

そしてそれ以外にもサイクロン戦やらディバイド戦やら盛り沢山でお送りします！

それではスタートオ！！（・w・）

第四十話：D無双！／迫りくるナイフと走馬灯

風都から少し外れにある棧橋……。

そこは数時間前まで歩とヴァン、麗奈が邂逅していた場所なのだが今は誰もおらず、ただ海のせせらぎだけが聞こえていた。

しかし棧橋の下から水面が盛り上がり、バシヤツと言う水の跳ねる音と共に、2メートル近くある何かが棧橋の中央に着地した。

『風都よ！私は帰ってきて……って誰もいねえし！！』

数時間ほど前に、歩に遠くまで飛ばされてしまっていたアノマロカリスドーパントである。

彼は次元断裂に包み込まれると、何と東京湾のド真ん中まで飛ばされてしまっていたのだ。

だが流石はドーパントと言ったところか、その通常ではありえない水中移動スピードで数時間掛けてようやくここまで戻って来れたのだ。

しかし数時間もすれば流石に逃げられており、ここには彼一人しかいなかった。

『チクシヨウ…折角手柄取れると思ってたのによお……』

「随分と遠くへ飛ばされていたようですね」

ふと悲しげにぼやいた愚痴を拾った声のした方向を見ると、そこには何時からいたのか分からないが、自分の組織の上司にあたる井上運河の姿が確かにあった。

『げっ！い、井上さん！？何時からそこに！？』

「ついさっきですよ。因みに、貴女が狙っていた女性ならもうすでにこちらで確保してあります。残念でしたね」

『そ、そんなあ！？折角2時間ぶっ続けで東京湾から戻って来たって言うのに！！』

ガツクリと頂垂れるアノマロカリスドーパントに運河は軽く含み笑いをすると、彼に別の提案を持ち出して来た。

「フフツ、でもそんな貴方に、これからチャンスを上げましょう」

『チャンス？何ですかそれって？』

「なあに、ちよっとした私のお願いを聞いてもらうだけです。上手く行けば、貴方にそれ相応の利益があることを約束しましょう」

詳しく問い掛けたアノマロカリスドーパントの予想通りの質問に、運河は軽く舌で唇を湿らせると、更に続けた。

それぞれに変身をした歩達は、風都タワー内部の中央に位置する大展望台広場まで辿り着いていた。

本来ならこのタワーにはエレベーターが設置されているのだが、乗ってる最中に奇襲を受けたら堪ったものじゃないと言う満場の一致（ただしヴァンは微妙）でこうして階段を使ってここまで登って来たのだが、ここまで来てようやく敵陣が動き出した。

『ゲへへへ…待ってたぜえ仮面ライダーさん達よお』

『スベテ…コワス……』
『ここでアンタ等を倒せばいくらでも金を出すって言われてな。悪く思わないでくれよ』

待ち構えていたのはドーパント3体。

下品な笑い声を漏らしながら戦う気満々なのは、ゴキブリを彷彿とさせた体躯のコックローチドーパント。

片言で呟いたのは、トリケラトプスを半擬人化させた紫色の巨躯と棍棒を持ったトライセラトプスドーパント。

そして最後に金目的で動いている事が明らかな銅色の鎧を身に着け、舌を出した口の形を模したハンマーを持った青白いスキンヘッドの怪人のライアードーパントだ。

「オイオイイ…ここでいきなり3体とか勘弁してくれよお。マジで面倒なんだけどお〜」

「ここは風都タワーの中で一番広い場所なのよ。待ち構えるならここがベストでしょ」

「……………」

愚痴を零すデイバイドにサイクロンがここでようやく敵が出て来た理由を大まかに説明していると、ディージェントが無言でグローブを嵌め直す仕草をしながら三体のドーパントに近づいて行った。

「ん？どうした代行者あ？」

デイバイドの問い掛けを余所に、ディージェントがコックローチドーパントの前まで来ると、そこでようやく言葉を紡いだ。

「……………二人は先に行つていいよ。ここは僕一人で十分だから」

『はあ！？まさか一人で勝てると思つてんのかよ！？ゲヒヤヒヤヒ』

ヤヒヤヒヤ！コイツはとんだ馬鹿だな！！」
「ホントに大丈夫かよ一人でよぉ〜？」

一人で何とかなると断言するデイージェントに、コックローチドーパントは爆笑しながらデイージェントを卑下するが、当の本人はそんな事など気にする様子もなく心配するデイバイドにもう一度促した。

「大丈夫、すぐに終わらせて追い付くから」

「舐めた口きいてんじゃねえぞゴラア！！」

「イカセ…ナイ…！！！」

淡々とした口調で行った事が癢に触ったのか、コックローチドーパントが啖呵を切つて一瞬で背後に回り、トライセラトップスドーパントが棍棒を持ち上げ、デイージェントに振り降ろした。

「ちょ、あぶな……」

サイクロンが思わず叫ぼうとしたが、デイージェントは背後から迫るコックローチドーパントの蹴りをまるで後ろに目でもあるかのように片手で受け止め、トライセラトップスドーパントの棍棒を軽々ともう片方の手で防いだ。

「なにー！！」

「うっそお……」

「ホラ、感心しないで早く行つてきなよ」

完全な不意打ちをいとも容易く止めたデイージェントに狼狽するコックローチドーパントを余所に、デイージェントは呆気にとられるサイクロンに何でもなさそうに声を掛ける。正直非常識である。

『随分と舐めた口きくじゃねえか』

その様子を静観していたライアードーパントが自分の武器であるライスピークスの口の部分からエネルギー弾を、二体の攻撃を受け止めて身動きが取れないディージェントに向かって放つ。

しかし即座にコックローチドーパントの足を掴んだ腕を回してライアードーパントに向かって思いっきり投げ飛ばした。

「…ハッ！」

『な…ぎゃばん！？』

『べらっしゅ！？』

その様子を見ていたサイクロンとディバイドは互いに顔を合わせて頷いた。

もうコイツ一人でいいな…と。

「じゃあ先に行ってるわよ」

「即効で終わらせるよあ〜。早く終わらせて寝たいんだからなあ〜」

「分かったよ」

二人が次の階へ向かうのを見送った後、先程からずっと受け止めているの棍棒を何とか動かそうと奮闘しているトライセラトップスドーパントに視線を向けて、抑揚のない口調で話し掛けた。

「さて、君達のメモリは破壊させてもらうよ」

『グヌヌ…ウゴア！？』

トライセラトップスドーパントを棍棒ごと二体のドーパントとは反対側へ投げ飛ばし、先に小回りのきく二体のドーパントを倒すべく

駆け出した。

『げっ！？コツチ来たー!!』

『あ、テメー！逃げるなよ！うおわああ来るんじゃないやねええええ!!』

態勢を立て直したコックローチドーパントは思わずその場から高速移動を使って逃げ出し、ライアードーパントはライスピークスから連続でエネルギー弾を放って牽制しようとするも、ディージェントは最低限の動きでエネルギー弾の弾幕を紙一重でかわしつつ、ライアードーパントに迫りながらカードを二枚取り出すとバツクルに挿入した。

「ツールライド…アンチ・キル！」

「アタックライド…チャージ！」

二枚目のカードを発動させるとディージェントの右拳に藍色のノイズが集中し、ライアードーパントの眼前に辿り着いた瞬間に右腕を後ろへ構え、そして……

「ハアッ！」

『ぐあああああー!!』

渾身の右ストレートをその顔面へ放ち、ライアードーパントは爆散した。

爆炎が晴れるとそこには一人の小太りの男性と、壊れた無骨な形状のガイアメモリが落ちていただけだった。

ディージェントが使った「チャージ」のカードは簡単に言えば即席のファイナルアタックライドだ。

本来の物よりパワーは低いが、全アタックライドの中では一番の殺

傷力がある。

更にそれを「アンチ・キル」を併用させて使う事で一撃必殺の威力をそのままに、マキシマムドライブ相応の効果を発揮する事が出来るのだ。

だが倒したのを確認したところで何かの気配を感じた途端、ディージェントは何か突き飛ばされる様にして吹き飛んでしまった。

『やってくれんじゃないかよ。でもオレのスピードについて来れるかな?』

そのディージェントを吹き飛ばした存在は、先程高速移動で逃げ出したと思われたコックローチドーパントだった。

どうやら怖気づいて逃げ出そうとして高速移動を使った時に、自分にはこの能力があるんだから何て事はないと思ったようで、コックローチドーパントはそのスピードを生かしてディージェントを弾き飛ばしたのだ。

「……だったら、僕とスピードで戦ってみるかい?」

「アタックライド…ダッシュ!」

すぐに別のカードの効果を発動させ、コックローチドーパントに超スピードで迫り一瞬で背後を取る。

『な!?そんなに速く動けたのかよ!?!』

「悪いけど、すぐに終わらせるよ」

『ちっ!させつかよ!!--』

デイージェントの抑揚のない言葉を挑発と受け取ったコックローチドーパントは、すぐさま高速移動してデイージェントから距離を取ろうとするが、デイージェントはそれに苦も無く追い付き、そのまま高速で大展望台広場を駆け廻りながらの攻防戦へと持ち込まれる。しかし、それも僅か3秒ほどの出来事で、二人の動きが止まった頃にはデイージェントが倒れ伏したコックローチドーパントの背中を踏んで抑えている光景だった。

「アタックライド…チャージ！」

更にそこからデイージェントは止めを刺すために「チャージ」を発動させ、コックローチドーパントを踏みつけている右足に藍色のノイズを集中させる。

「…フンッ！」

『げぎやああああ…!!』

右足に更に力を加える様に強く踏みつけると、コックローチドーパントもまた断末魔の悲鳴を上げながら爆散し、素体となったメガネを掛けたヒヨロツとした男と、砕けたメモリだけがそこに残った。

『又オオオオオ…!!』

そこへ高速移動で翻弄されていたトライセラトップスドーパントが迫り、棍棒を振り下ろす。

しかしデイージェントはコックローチドーパントだった男を掴んで即座に回避し、振り下ろされた棍棒はデイージェントと男がいた場所に大きな穴を開けていた。

『グウウウ、ヨケ、タカ………』

忌々しげに片言で呟いたトライセラトップスドーパントは、ゆつくりとこちらへ振り向いてきた。
味方ごと倒そうとしていたことから、どうやらメモリによる精神汚染が激しいようだ。

『又ウウンー!!』

デージーエントが考察をしている間に、トライセラトップスドーパントが棍棒を大きく振り回してこちらへ攻撃してこようとすると、それをバックステップで回避して壁際に掴んでいたままの男を寝かせて「チャージ」のカードを発動させる。

「アタックライド…チャージ！」

発動させると同時にトライセラトップスドーパントの懐へ攻撃を掻い潜り一瞬で迫り、態勢を低く構えてシックスエレメントを充填させた右拳を握りしめる。

「…ハアッ！」

『グ又ウウウツ!?!』

両足をバネにして一気に跳び上がり、トライセラトップスドーパントの顎にアッパーカットを打ち込むが、相手は見事に耐え抜いた。更にそこからトライセラトップスドーパントに変化が起きる。

『グ又又又……』

「……?」

『ウガアアアアア!!!』

「何っ……!?!」

トライセラトップスドーパントが突然吠えたかと思うと、その巨体が更に巨大化して行く。
その巨大化して行く重量に耐えきれなくなった床が陥没し始め、やがて大きな穴を開けて巨体が落ちると、ディーゼントまでも巻き込んで行った。

ドゴゴゴオオン……！！

階段を上っていたサイクロンとデイバイドの耳に、下の階から何か
が崩れる轟音が入り、一旦上へ目指していた足を止めた。

「何…今の音……？」

「さあなあ。まあ大方、代行者が騒いでるだけだろうよ。」

「ま、そうでしょうね。」

今の轟音の原因は二人には大体予想が付く。ディーゼントが下で
何かやらかしたのである。

彼の實力は先程のドーパント達との戦闘の一部始終を見ただけで、
かなりの手練てたれだと言う事が充分に分かる。流石に劣勢になると
言う事はまずないだろう。

そう思い立った二人は再び階段を上り始めた。

「アイツ、ホントに何者だよ。……。デイケイドのバックアップ
とか言ってたけど、あの強さは明らかに異常だろ。……」
「デイケイド？何それ？」

「俺達みたいな世界を渡るライダーのボスみたいなモンだとよお〜。それでアイツはその代理だとさあ〜」

「よく知らねえけどお〜」と付け加えながら、欠伸をしているであろう仮面の奥に隠された開いた口を手で覆った。

Dシリーズとかいう仮面ライダーはみんな変わり者なのだろうかと変な解釈をしてしまったっているが、古臭いセリフを行ったり、偶に変なテンションになったりするサイクロンも十分に変わってると言う事に本人は全く気付いていなかった。

そうしてしばらく上って行くと、先程の大展望台広場よりは狭いものの、それなりの広さを持つ空間に出た。

ここは第二展望台広場と呼ばれる場所で、大展望台広場よりも高い位置から街並みを見られ、尚且つ予約制である為に滅多に人の通らないセレブご用達の人気スポットだ。

「来たか、仮面ライダー」

そしてそこには自分達より既に来ていた先客の姿があった。

一人は先程外で会った石原健と言う男。そしてもう一人は、ボサボサの黒髪に白いシャツと黒いベストを身に着けた見間違う筈のない探し続けていた人物：西方駆が健に後ろから抑えられた状態でそこに立っていた。

「駆!!!」

「楓…逃げろ…！コイツ等の目的は俺だけじゃなくてお前も入ってるんだ…!!」

「そう言う事だ。それとボスからの命令でな、お前とコイツを戦わせるとの事だ。コレを使ってな」

「ジョーカー！」

「ぐうっ！」

楓と駆の会話に割って入って来た健がジョーカーメモリを取り出してスタートアップスイッチを押すと、駆の首筋にガイアメモリを挿入する為のコネクタが出現した。

そして健はコネクタに何の躊躇いもなくジョーカーメモリを差し込んで離れると、駆の苦しげな声と共にその姿が道化師の怪人へと変えて行った。

「……………又ンツ！」

やがて落ち着きを取り戻した駆だったものは、後ろへ回した状態にして手錠で抑えられていた両腕を無理矢理引き千切ると、駆が何時もやる癖である帽子を被り直す仕草をした。

「駆……………」

「……………ウアアアア！！！」

ジョーカードーパントへと変貌した駆は、サイクロンの問いかけにも応じずこちらへ迫って来た。

駆がジョーカードーパントである事は分かってはいたが、未だに認められない自分がいる所為で身体が急には反応できずにジョーカードーパントの拳がこちらに迫る。

「おっとお…待てよオツサン」

しかしすぐ横に居たディバイドがジョーカードーパントの腕を掴ん

で動きを止め、間延びしたものであるものの、若干苛立ちを孕んだ口調で話し掛け始めた。

「コイツはなあ、アンタに会う為にここまで来たんだぜえ。それを出会い頭にぶん殴るたあ、どう言つ了見だあ？」

『ウウウウ…ウアアアアア！！』

ジョーカードーパントはデイバイドの腕を振り解くと、彼の首を掴んで押し倒し、仮面を殴り付けて来た。

『ウウ！ウアアア！！』

「何言つてもダメかあ……」

デイバイドは諦めたように殴られながらもそう呟くと、デイバイドライバーの柄頭でジョーカードーパントの鳩尾を殴って押し退けると、流れる様な手際でブランク状態のカードを一枚カードホルダーから取り出して鍔部分に設けられたスリットへ装填し、相手の胴体を斬り付けた。

「カイジンライド…ジョーカードーパント！」

電子音声がデイバイドライバーから発せられると同時に、バックルのディスプレイがジョーカーメモリーに設けられた“J”のマークが映し出され、相手の能力の半分を奪い取る。

「さてつとお、アンタはそろそろ悪夢から目覚めなあ」

「待って」

デイバイドがそのままジョーカードーパントと戦闘を始めようとした時、サイクロンが待ったを掛けて来た。

何かと思いサイクロンへ振り向くと、彼女は目の前にいる変わり果てた相棒の姿をじっと見つめ、やがてディバイドにこう続けた。

「ここは私一人でやらせて。これは私とアイツの問題だから」

「……良いけどよお、勝てるのかあ？少なくとも俺と代行者の二人がかりでようやく勝てる様なヤツだぜえ〜？」

「それでもよ。ここで私がコイツを助けないと、今まで探して来た意味がないじゃない」

彼女の決意が揺るがない事を確認するとディバイドは溜め息を吐いて後ろに下がった。

「ハア…、分かったよお。それじゃあ俺はしばらく様子見させてもらうぜえ。寝ながらな」

「それ様子見って言わないわよ」

「ああそうだな。それと、お前は俺と戦ってもらおうか。先程のりベンジだ」

ディバイドの余計な言葉にツツコミを入れると、健までも同意しながら白いガイアメモリを取り出し、スイッチを押した。

「エターナル！」

「ん？ディボルグドライバーはどうしたあ〜？」

「アレはボスに返した。代わりにボスのいらなくなったメモリを使わせてもらう」

ディバイドの問い掛けに簡潔に応じると今度はロストドライバーを取り出し腰に巻きつけた。

サイクロンはそのドライバーを見てアレも駆の物だと思い健に返す

よう言い放った。

「アンタ！メモリだけじゃなくドライバーまで奪う気！？」

「何を言っている？これはボスが元々持っていた物だ。西方駆のドライバーはボスが既に破壊している」

「え！？」

サイクロンはその言葉に驚愕した。

ロストドライバーは本来、楓の両親が開発した物であり、両親がない今、同じ物は自分と駆の分の二つしか存在しない筈なのだ。

そして、それ以前からあったと言う事は、ここのボスは両親と何らかの関係を持っていたと言う事になる。

「これは益々ここのボスに会って話を着けなきゃならないみたいね」

「会えるものならな。変身」

「エターナル！」

サイクロンの呟きに軽く答えると、健はロストドライバーのスロットルにガイアメモリを挿し込み、無頓着な声色で宣言し、スロットルを斜めに倒す。

すると健の周囲に一瞬蒼白い稲妻が奔り、塵が健の身体を包み込むやがて完全に塵に覆われると、そこには白い人影があった。

シンプルな装甲に身を包い、両腕に赤い炎を思わせる刻印を刻んだボディ。

頭部にはイニシャルの“E”を横に倒した形の角飾りと無限を意味する インフィニティ マークの形状をした黄色い複眼の怪人。

その姿はドーパントなどでは決してない。この街を影で守る者、またの名を…仮面ライダー。そう呼ばれる存在だった。

「その剣を持った奴は俺と一緒に来てもらっぞ」
「ぬおつとお!?!」

健が変身した姿：仮面ライダーエターナルはそう言うや否やディバイドに掴み掛かり、街並みを映す窓をガシャンと派手に割ってディバイド共々下へ落ちて行った。

その様子を黙って見ていたサイクロンとジョーカードーパントは互いに向き直ると、それぞれ身構える。

「さて、二人つきりになった事だし、まずはアンタを叩き起こさせてもらっわよ、駆」

『ウウ…ウアアアアア!』

サイクロンの宣戦布告を皮切りに、ジョーカードーパントは一直線にこちらへ突っ込んできた。

風都タワーの入り口付近まで落ちてしまったディージェントは難なく地面に着地すると、目の前で今も尚巨大化して行くトライセラトツプスドーパントを見上げた。

『グウウ…グオアアアアア!』

やがて巨大化が止まったトライセラトツプスドーパントは四足歩行で地面をズッシリと踏み締め、凜猛な雄叫びを上げた。

「成程、メモリの暴走か……。随分と適合率が高かったみたいだね」
その様子を見たディージェントは、この世界の脅威となる存在の情報からそう解釈した。

ガイアメモリを使用する際には、メモリとそれを使う使用者との相性：適合率も必要になって来る。

適合率が低ければ拒絶反応が起きて強制的に体外へ排出されてしまうが、逆に適合率が高く、尚且つドライバーを介さずに使用すると今のトライセラトップスドーパントの様に使用者の自我とは関係なく暴走してしまうのだ。

しかも相手の使っているメモリはかなり癖の強いメモリで、太古の生物の記憶を内包した代物だ。

そう言った部類のメモリは暴走するとこの様にその生物本来の姿に近い姿へ変えてしまうのだ。

『グオオオオオ！！』

猛々しい雄叫びを上げながら突進してくるトライセラトップスドーパントを前にして、ディージェントは広い場所に出る為に一旦屋外へと走り出す。

「ダツシュ」を使ってもいいのだが、ここで使えば相手が自分が逃げたと勘違いし、風都タワーの中で暴れ回って倒壊させてしまう可能性が高い。その為、自身の身体能力のみで風都タワーの出入り口へと駆け抜ける。

その際にもトライセラトップスドーパントは至る所にある展示物やオブジェを撥ね退け、踏み潰しながらディージェントを追って来る。そしてようやく風都タワーの外に出ると、振り返ってカードを一枚

クラインの壺から取り出し、バツクルに挿入した。

「アタックライド…ダッシュ！」

「ハアッ！」

『グウオオオオオ！！？』

体躯に合わない入り口を突き破りながらこちらへ迫ろうとした瞬間、一瞬でトライセラトップスドーパントの右側へ回り、その巨大な顎へと飛び蹴りを放ち、脳を揺らしてバランスを崩させる。

「フッ！」

『グゴアアアア！！』

着地すると更に追い打ちを掛けるべく、今度はアッパーをかまして転倒させそこまで来てようやく止めの一撃に入るべく、ファイナルアタックライドのカードを発動させた。

「ファイナルアタックライド…ディディディージェント！」

『グオアアアア！！？』

トライセラトップスドーパントの足元にビジョンを展開させて身動きを取れなくすると、ディージェントはその束縛から逃れようともがく巨獣を余所に右足にシックスエレメントを集中させながら大きくジャンプし、空中回転して勢いを上乗せしながらトライセラトップスドーパントの真上を陣取った。

「それじゃあ止めの一発、行くよ？」

お決まりの決め台詞を抑揚のない声で呟くと、今度は藍色のノイズに包まれた右足を真上に上げて一気に急降下して行き、そして……

「ハアアア…タアッ！」

「ガアオオオオオ！！」

真下に居たトライセラトップスドーパントの胴体目掛けて踵落とし…「デイメンションドロップ」を隕石の如き勢いで叩き付けた。

トライセラトップスドーパントは断末魔の雄叫びを上げると爆散し、その姿を消すと柔道着を着た大柄な男がそこに横たわっているだけだった。

爆発した勢いでもう一度空中に舞い上がったデージェントは、後ろに一回転した後に綺麗に着地し、倒れた男を確認しながら両手のグローブを嵌め直す仕草をして一応の目的を果たしたのだった。

デージェントがいる風都タワー入口の反対側では、デイバイドとエターナルが互角の戦いを繰り広げていた。

デイバイドが剣で一閃しようとするればエターナルが手に持ったコンバットナイフ型の専用武器・エターナルエッジで迫りくる刃を止め、逆にエターナルがナイフを首目掛けて突き貫こうとするればデイバイドが身体を反らせて避け、更にその状態からエターナルに蹴りを入れてその反動で距離を取る。

先程ジョーカードーパントから肉弾戦技能を半分奪い取ったからこ

そでできる芸当だ。

「ふんっ、やるな」

「そりゃどうも。俺もアンタがトリガーだったからてつきり遠距離戦しかできないんかと思つてたけど、それでもなかつたなあ」

「俺は生前、SWATに所属していたからな。銃撃戦だろうが接近戦だろうが粗方出来る」

「ああそうかい。ま、なんにせよお前をとつと倒して麗奈を助け出さないといけねえからなあ。出来るだけ早くやられてくれよお。面倒事は嫌いだからなあ」

エターナルの生前の話を軽くあしらうと、デイバイドは剣先を相手に向けながら面倒臭そうにぼやいた。

コイツ等のボスが一体何をしようとしているのかは知らないが、麗奈を奪還するに越した事はない。ここで足止めを喰らうわけにはいかないのだ。

「俺をただの雑兵と一緒にしてもらつては困るな。あの時は不意を突かれたが、今度はそうはいかない」

「ふうん、言つてろよつとお」

「アタックライド…インビジブル！」

スリットにカードを装填してデイバイドライバーを振り抜くと、電子音声と共にデイバイドの姿が消えた。

「不可視能力か……」

エターナルは大して動揺もせず冷静に判断すると、仮面の奥で目を閉じて神経を研ぎ澄ませる。

こう言う類の能力は視認が出来なくはなるが、気配や音と言った別の感覚を用いれば簡単に打破できる。
そしてそれは、Dシリーズも例外ではなかった。

「そこだっ！」

「うおっ!？」

気配の感じた左方向に向かってエターナルエッジを投げた。

デイバイドはそれに思わず驚きの声を上げながらデイバイドライバーで何とか叩き落すも、その怯んだ隙を突いてエターナルが迫る。

「しまっ…!」

「貰ったぞ……」

一瞬で近づくと、その場に落ちたエターナルエッジを即座に拾い上げ、デイバイドの胸部装甲を切り上げて火花を散らせて更にその首元にナイフを突き立て、死刑宣告を下した。

「別の世界の仮面ライダー……」

ナイフが自分の喉を斬り裂こうと迫って来る中、デイバイドはやけに落ち着き払った心境に陥ってにこれまでの事を思い出していた。これが所謂走馬灯とかいうヤツなのだろう。

その中にはこのデイバイドの力だって手に入れた時の出来事や、あの“声”が張り付いた時の事が蘇る。

そんな事を回想していると、自分に死を送り付けて来るであろうナイフが、自身に触れる感触がした。

第四十話：D無双！/迫りくるナイフと走馬灯（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「ちょ、ラスト何なの!?コレ明らかにヴァンさん死んじやつてるわよね!？」

皐月「いや、作者曰く『このままでは済まさん』だそうだ」

加奈「何処のウヴァさん!?!って言うかこっから一体どうやって逆転するのよ!?!」

カンペ（大丈夫ですよ。ちゃんと考えてありますからd）。。（）

皐月「まあ今までの作者の逆転劇が毎回とんでもないからな。今回も多分大丈夫だろ」

加奈「う〜ん、それなら別にいいんだけど、一体どうやって逆転させるわけよ?」

カンペ（それは、作者（神）のみぞ知る!）。A。（）

加奈「またそれか!ちょっと前にそのネタやってたでしょ!」

皐月「そして、今回の見事なディージェントの無双っぷり」

加奈「あれは…うん。歩だったら仕方ない」

皐月「特にあのトリケラに追われてるシーンがモ〇ハンっぽく見えただのはアタシだけか?」

加奈「あ、それ私も思った。しかもあの後難なく撃退しちゃっし…」

皋月「まあ前回のあとがきラジオで作者が地味とか言ってたからな。多分その反動だろ」

加奈「恐るべし、主人公補正……」

皋月「で、今回は克也の過去話とサイクロンサイドの話に重点を置いて書くらしいぜ。デイバイドは多分出す。だとさ」

加奈「ちよ、そこ今一番気になるところおおお!!」

皋月「それじゃあ次回も楽しみにしてくれよな」

第四十一話：全てはPから始まった／克也・ヒギンズ（前書き）

ハイ更新再開！お待たせしました！（、´、ゞ

とりあえず前回の内容を忘れてしまつてるかもしれない人のために前回の内容をW風に紹介します！

まあ書いててぶつちやけ楽しげフンゲフン！

気を取り直してあらずじスタートオ！！（；。。）

運河「なあに、ちよつとした私のお願いを聞いてもらうだけですよ。上手く行けば、貴方にそれ相応の利益があることを約束しましょう」

デー・ジェント「……二人は先に行つてていいよ。ここは僕一人で十分だから」

楓「駆！！」

駆「楓…逃げろ…！コイツ等の目的は俺だけじゃなくてお前も入つてるんだ…！！」

ヴァン「しまつ…！！」

エターナル「貰ったぞ、別の世界の仮面ライダー……」

第四十一話：全てはPから始まった／克也・ヒギンズ

克也は先程まで駆が縛られていた拘束椅子にドカリと座ると、両手を組んで麗奈を見据えた。

麗奈としては早くこの場から立ち去りたいところなのだが、縛られていいる今の状態では逃げる事もままならない。

「そんなに怖がるな。ちょっとした暇潰しに、これからお前と話したいだけだ。何か聞きたい事とかあるんじゃないか？」

聞きたい事と言っても山ほどある。どうして自分を捕まえたのかとか、この人達は一体何なのかとか例を上げればきりが無い。

しかしこの男はどこか狂気じみている、下手な質問をすると逆上しそつだ。

「何も遠慮する事はないぞ。奴等がこつちに来るまで暇だからな」

その言葉を聞いた時、麗奈はいくつもある疑問の中からある一つを持ち出した。

「あの、その“奴等”って言うのは、ひよつとしてさっきの駆さんと言う人と、ヴァンさん達の事でしようか？」

「ヴァン？ああ、“特別なドライバー”を持つてる奴の一人か。そうだな、確かにそいつ等の事だ」

「では、ひよつとして貴方は、彼等が来ると信じてると言う事ですか？」

その続いた質問に克也は口をへの字に曲げるが、特にそれと言って怒った様子ではなく、凶星を突かれて戸惑ってる感じだった。

やがて「そうだな」とぼやいて苦笑を滲ませると、言葉を紡いだ。

「信じてるって言い方はどうかと思うが、大方合ってるな。俺はアイツがこれで終わると思っちゃんない」

「それに」と言っでそこで行ったん言葉を区切ると、椅子から立ち上がってこちらに歩み寄って来て狂気に満ちた顔を近づけて来た。

「アイツはこういう人質とかを取られると、何が何でも助け出そうとする馬鹿だ。もし十年前から変わっていなければ、もう一度俺を殺しに来るだろうしな」

「殺しに…?」

麗奈の呟きを聞いた克也は「ああそうさ!」と言いながら大袈裟に手を広げながら天を仰いだ。

そして事の顛末を話し始めた。

「俺がこうなってしまったのは十年前!ある依頼解決で死んだ時に始まった!」

その時、元相棒のアイツは相当悲しんださ!そしてアイツは、ある事か俺を蘇生実験のサンプルにしたんだよ!

だがそのおかげで俺はこうして生き返った!……いや、動けるようになったと言った方が正しいな」

そう高らかに謳いながら、腰に下げていたサバイバルナイフを引き抜いて自身の手首に当てる。

「あ、ダメ!」と叫ぶがその悲鳴は届く事なくナイフは克也の手首を切り裂いた。

その後に起きるであろう血飛沫を見ない様に目を閉じて顔を伏せた

が、「こつちを見る」とありえないくらい冷静な声色の克也の声が聞こえ、恐る恐る顔を上げて克也の斬られた手首を見ると、その斬り傷からは一滴の血も流れて行く事はなかった。

「え…！？」

更に、そこからもっとありえない事が起き、麗奈は驚愕の声を漏らした。

傷口がみるみる内に塞がって行くのだ。

その様子はまるでビデオの逆再生を三次元で見ているようであり、やがて完全に傷口が塞がると克也は手首を軽く捻ると再び謳い始める。

「生き返ったと言っても死ぬ前と同じ身体に戻ったわけじゃない。細胞を無理矢理動かして生きてるように見せてるだけだ。

だが俺の頭の中から、どんどん人としての感情が薄れて行くんだよ！そんな中、俺はアイツにこう訊いたんだ。『駆、教えてくれ。俺は生きてるのか？それとも死んでるのか？』ってなあ！
今思うと随分と陳腐な事を尋ねたもんだぜ！！」

「ハハハハハッ！！」と高笑いを上げながら手で目を覆い隠す。すると今度は手を払いのけて怒りの形相を浮かべながら駆への恨みを打ち明ける。

「だからアイツは許さねえ！！俺をこんな身体にしたアイツをなあ！！」

アイツが俺を生き返らせる事がなければ、俺はここまで変わる事はなかったんだよお！！」

思いつきり壁を殴りながら息を荒げる。やはり相当精神不安定なの

だろうか、感情の起伏が激しい。

「そして奴はとうとう俺を殺す事を決意した！生き返らせた事は間違いだっただってなあ！！」

そして俺の二度目の生涯は奴にマキシマムドライブで海に突き落とされる形で幕を閉じたかと思っていたがそんな事はなかった！

あの時、俺は確かに奴のマキシマムドライブを受けたにも関わらず、まだ意識だけは残ってたんだよお！

そしてその理由もすぐに分かった！アイツへの復讐心が、俺が完全に消えることを拒んだんだ！」

まるで舞台劇でもしているかのような大仰な仕草で自身の胸を掴み、苦しそうな表情を作りながら語った。

「それから十年間！俺は深い海の底で奴にどうやって復讐をしようか考え続けていた時、転機が訪れた！」

そして今度は歓喜に見た表情で天を仰いで続ける。

「ある男が俺を拾い上げ、そして動かせる身体に戻してくれたんだ！そして“特別なドライバー”の事も教えてくれたさ！」

それさえあれば、駆どころかこの世界全てを地獄に変える事が出来るってなあ！アッハハハハハハ！」

狂気を孕んだ笑い声を一頻り上げると、ある程度落ち着いてポーチから自分のものと思われる黒とダークブルーの放射線状のラインで彩られたバツクルを取り出した。

「だが、その時はまだこの世界に来ていないとかで手に入れる事が出来なくてなあ……。そこで以前から考えてた計画の一つとして、

俺と同じようにNEVERにされた奴等を集めて次世代型ガイアメモリ・T2メモリ26本を集めさせてたんだ。

そのエネルギーを応用すれば、アイツを俺と同じNEVERにする事だって出来る。アイツに俺と同じ苦しみを味合わせてやるんだよお！」

「貴方は…それで満足なんですか…？」

麗奈はつい口を挟んでしまった。麗奈のその言葉には克也も眉を顰めてこちらを睨みつけて来たが、麗奈は更に続けた。

「何い…？」

「貴方は駆さんに復讐したいと思ってるみたいですけど、本当はただ、駆さんに自分の気持ち伝えたいだけなのでは？その為にこうして彼が来て、自分の間違いを正そうとしてくれるのを待ってる。違いますか？」

きつとこの男は自分の中に潜む悪意を制御できないのだ。そしてその悪意を駆が消してくれるのを信じてこうして待ってる。

その事を言うと克也は顔を伏せて小刻みに震えると、次の瞬間には激昂の叫び声を上げて麗奈を殴った。

「……知った様な口を…聞くなあつ!!！」

「あつっ！」

「もう俺は誰にも止められない！俺はただ自分の破壊衝動に従って動くだけさあ！そして、俺をこうしてしまったこの世界全てに復讐する！ハハハハハハ!!！」

「……………」

麗奈は狂ったように笑い出した克也を見据えてこう思った。

彼を止められるのはきつと、彼の元相棒であった駆ただ一人なのだ

と……。

風都タワー第二展望台広場では、サイクロンとジョーカードーパントの攻防戦が繰り広げられていた。

ジョーカードーパントが迫ればサイクロンが突風を起こして牽制し、サイクロンがその隙を突いて飛び蹴りを放てばジョーカードーパントが受け流し、肘打ちをサイクロンの脇腹に決めた。

『又ンツ！』

「カ…ハツ…！（やっぱりコイツ、駆と同じ動きだ…！でもジョーカーでいる時よりも少しだけ動きが鈍い！上手く行けば勝てる…！）」

サイクロンは息を吐き散らしながらも相手が仮面ライダーでいる時よりも少しだけ弱くなってると感じた。

本来ならばメモリを直挿ししている状態であるドーパント体の方が強いのだが、少し前にディバイドがジョーカードーパントの能力である肉弾戦能力を半分奪ってる為に、動きが鈍っているのだ。

当然その事実をサイクロンが知る由もないのだが、チャンスには変わりない。

（相手は肉弾戦しかできない…だったらコレね！）

「ルナ！」

サイクロンは追撃をされる前に勢いよくバックステップをして距離を取ると、ルナメモリを起動させてスロットルを立ててからサイクロンメモリを取り出すと、勢いよくルナメモリを差し込んで斜めに傾けた。

「ルナ！」

次の瞬間にはそのライトグリーンの装甲を黄色に染め上げ、仮面ライダールナへとフォームチェンジを果たした。

そしてルナはその特性である伸縮能力を使って右腕をゴムの様に伸ばして遠距離からの右ストレートを放った。

『…ッ！？フッ！又ンッ！』

ジョーカーカードパントは一瞬驚くも、すぐに対応してサイドステップでかわし、ルナへと殴り掛かる為に迫る。

「させないわよ！」

『ムウッ！？』

だがそれを阻止するためにルナは伸ばした右腕を蛇のようにならせてジョーカーカードパントの周囲を取り囲むと、ロープの様にジョーカーカードパントを縛り上げた。

ジョーカーカードパントも流石にパワーはそれほど高くない為に振り解く事が出来ず、ただ^{もが}くだけだ。

更にその状態からルナメモリを引き抜いて右腰に位置するマキシマムスロットへ挿入してその横に設けられているスイッチを左手で器用に叩いた。

「ルナ！マキシマムドライブ！」

電子音声が響くとルナの身体が眩く発光し、ジョーカーカードパントを囲むようにルナの分身体五体が出現してそれぞれがパンチやキック、四肢を鞭のように撓しならせてのラッシュと言った様々な攻撃を仕掛ける。

「いい加減に目を覚ましなさい駆！」

やがてある程度ダメージを与えたところで分身体が消えてそう叫ぶと、右腕を元に戻して右足を強く光り輝かせると、その足で飛び蹴りを放った。

「ルナイリユージョン！」

『グアアアアア！！』

ルナの蹴りが直撃すると共に、ジョーカーカードパントは爆散してその爆炎の中から一つの影が吹き飛んで倒れ込んだ。それは先程までジョーカーカードパントにされていた西方駆その人だった。

「駆！大丈夫！？」

ルナはすぐさま変身を解除して駆に近寄って抱き起こすと、「ウウ……」苦しそうに呻いて目を開いた。

「か、楓か…？悪いな、心配掛けちゃって……」

「全くよ。どれだけ搜したと思ってんの？」

「ハハッ、こりゃ手厳しい事で……」

駆は楓の思ったよりもスパルタな発言に苦笑しながら、右手で自分の前髪をクシャツと掻いた。

しばらくそうして深く呼吸をして疲れた身体に酸素を供給していたが、やがて駆はこの事件の真相をポツポツと語り始めた。

「……今回の事件の騒動は俺が原因だな。そして、俺を拉致ったのは俺の前の相棒だ」

「駆の前の相棒？」

「ああ。お前と会う少し前にアイツは依頼中に敵に撃たれて死んだ。そして俺は、お前の両親に頼んでアイツを生き返らせたんだ」

楓はこの時、言いたい事が山ほどあったが、黙ってその駆の罪を聴いた。

駆は当時の相棒だった小野塚克也を自分の両親に頼んで生き返らせた。

実はそれより以前から両親とは面識があり、ガイアメモリやドライバー、そしてNEVERの研究をしていた。

両親を殺したあのアイスエイジドーパーも、その実験材料にされた一人だったそうだった。

しかし生き返った克也は徐々に人間としての心を失っていき、遂には彼が罪を犯す前に駆が殺した。

だが実際にはまだ止めをさせていなかったようで、こうして十年越しの復讐をするために這い上がって来たのだ。

「アイツの執念深さには恐れ入るよ全く……そこは十年経った今でも、まったく変わっちゃいない。だがアイツをこのままにしておくわけにもいかないしな……ととと……」

駆はそこまで言って起き上がろうとするも、体力的に限界が来てい

るのかフラついてしまい倒れそうになるが、楓が駆の肩を担ぐ事で何とか防ぐ。

しかし駆と楓にはかなり身長差がある為に担ぐと言うより持ち上げる感じになってしまい、成人男性の体重の殆どが小柄な体躯の楓に押し掛かって来た。

「お、重い…！」

「悪いな。今身体が上手く動かせねえみてえだ。でも、ここで動きゃ男が廃る…！」

駆が根性で足に力を入れて何とか自力で立ち上がった事で、楓に押し掛かった負担がようやく抜けた。

「アンタ重いわよ。今度ダイエットでもしたらどうなの？」

「成人男性は大体これぐらいの重さだって。寧ろ今まで監禁されてた上に、点滴くらいでしか栄養摂れてなかったんだから、結構軽くなってる方なんだぜ？」

「ま、そう言う事にしとくわ。はいコレ」

「おう、悪いな」

そんな軽口を叩き合いながら、楓は自分の頭に被った帽子を取って駆に手渡した。

駆は帽子を受け取ると、軽く深く被ると天井を見た。後は克也を倒すだけだ。

「やっぱコレがあった方がシツクリ来るな。さて…と、後はアイツをもう一度殴り飛ばしてやらないとな」

「出来るの？ドライバーももうないのに」

「そこはアレだ。お前のドライバーを貸してくれ。終わったらすぐに返すからさ」

その軽い口調に楓は溜め息を吐くと、懐からロストドライバーと駆のガイアメモリであるメタルとトリガーを取り出してこの頼れる相棒に渡した。

「まあアンタだったら約束は守るでしょうけど壊さないでよ？父さん達の形見なんだから」

「分かってるって。もうへまはしないさ」

そう言いながら駆はロストドライバーとガイアメモリを受け取ると、壁の一角まで歩き出してそこを軽く二回叩く。

するとその壁に僅かに隙間が生じ、その隙間に指を挟んで引くとその奥に続いている薄暗い階段が姿を現した。どうやら隠し扉になっていたらしい。

「ここから先にヤツがいるのね」

「ああ。楓はここで待っていてくれ。変身できない様じゃ危ないからな」

確かに一人しか変身できないんだったらここで待つのが妥当なのだろうが、楓はその言葉を聞くとムツと口をへの字にして、不機嫌そうな表情を作ると、隠し階段を上ろうとする駆の服の裾を掴んで引きとめた。

「待って、駆……」

「お？なん…アダツ！？」

駆が振り向いた瞬間に彼の額にデコピンを喰らわせると、彼は痛そうに額を抑えて「な、何しやがる！？」と涙目になりつつも訴え掛けて来た。

そんな相棒に対して、楓は腰に手を当てながら駆に不満をぶち当たった。

「あのねえ、また私を突き離す気？そりゃあ一人しか変身できないんだったらアンタ一人で行くしかないでしょうけど、コッチはアンタを探すのに散々苦労したのよ？ここでまたアンタがいなくなるなんて、絶対に嫌だからね！何せ私は、アンタの相棒なんだから……」

このまま付いて行けば駆の邪魔になってしまうのは分かっている。だが、それでももう離れたくないのだ。このまま彼を行かせてしまつと、もう二度と会えなくなってしまうのではないかという不安が楓の中で蠢いていた。

そんな楓の心情を察したのかどうかは分からないが、駆はニツと快活に笑つと楓の頭を撫でながら優しく嗜めた。

「まあ心配してくれんのはありがたいが、これは俺の問題だからな。俺じゃないとこの事件は解決できないし、アイツは藤原夫妻の子供であるお前までも標的にしてるからなあ……。お前をこのままヤツの前に出して変身できないと分かれば、真つ先にお前に襲い掛かつて来るだろうしな。だから、お前はここで待つてくれ。これは所長命令だ」

駆は普段はいい加減だが、こう言う仕事の時だけはかなり厳しい。一緒に仕事を始めた頃はよく失敗をして怒られたものだ。それだけこの仮面ライダーと言う名の探偵稼業に信念を持っている。

そして自分も何時しか、そんな駆の情熱に惹かれて好意を抱いていた。だが駆は仕事一筋な堅物な側面も持ち合わせている為、この想いは一生届く事はないだろう。

だからこそ、彼の相棒として傍にいる事しかできないのだ。そして、これからも自分は彼の相棒であり続ける。それが自分にできる精一

杯の事だから……。

「……分かった、でも約束して。絶対に帰って来るって」

「ああ大丈夫だ、必ず戻って来る」

「それから麗奈って人が攫われてるらしいから、その人の救助もお願いなね」

「おう。一度その人を見るからな。言われずともちゃんと助け出してやるさ」

駆は「じゃ、行って来る」と付け加えて楓の頭から手を退かすと、帽子を軽く被り直しながら楓に背を向けて階段を上って行った。

第四十一話：全てはPから始まった／克也・ビギンズ（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「作者もリアルが一段落着いてようやく更新！」

皐月「そしてなんだかんだでとうとう週一更新になったな、この小説……」

カンペ（いやあ、「曜日はやりやすい日でおk」と言うお許しを頂いたので、折角なのでお言葉に甘えようかと……」）

加奈「でもこれは甘え過ぎじゃない？龍騎編並みの更新なのに週一って……」

皐月「まあそう言ってやんなよ。よくよく考えれば今までの方が異常だったんだよ。一週間以内の更新で、しかも文字数一万字ってかなり無茶だろ」

カンペ（でもお陰様でストックが増えるわ増える）。）
もうこれ見ただけでももうウハウハですよ）

加奈「これは利点って捉えていいのかしら……」

皐月「でもいくら今ストックがあるからって、サボるんじゃないぞ。そんな風に考えてたら、すぐにストックなんて無くなっちゃうんだから」

カンペ（サーセン、気を付けますm）——m:（）

加奈「と言つわけで今度からは毎週日曜に更新していく予定だから
これからもよろしく願ひします」

皐月「質問やリクエストなんかもあればドシドシ応募してくれよ
！」

第四十二話：全てはPから始まったノヴァン・ビギンズ（前書き）

さて今回は大変お待たせしましたヴァンサイドでお送りいたします

！d（^ ^）

しっかしまさか今回の話の文字数が一万字ギリギリになってしま

うとは…ちょっと配分間違えたかなf（^^；）

でもそんなの…一々気にしない！（気にしろww）

それではまずは歩パートから、本編スタートオ！！（・w・）

第四十二話：全てはPから始まったノヴァン・ビギンズ

歩はディージェントの変身を解くと、先程トライセラトップスドールパントと共に落ちて来た穴の真下まで来て、その穴を見上げた。穴は各フロアの床を見事に貫通しており、歩が戦闘を行っていた大展望台広場まで続いている。

（ここから行った方が早そうだね……）

そう判断した歩は自分の足元に横に寝かせた状態の次元断裂を展開するとその上に乗った。すると次元断裂は歩を乗せたままスーツと何の音もなく上へとゆっくり上昇して行った。

次元断裂を応用すればこのくらいの応用が利く事はディージェントになる以前から知ってはいたが、あまり好んでこう言う事はしたくないのが本音だ。何故なら……

（やっぱり、掴まる所がないから怖いな……。壁も展開したいけど、一つしか展開出来ないし……）

足場はそれなりに広くはしてあるがトライセラトップスドールパントが開けた穴の大きさまでしか展開出来ないのだ。

しかもあの時トライセラトップスドールパントは徐々に体躯を大きくしながら落ちて言った為に、上に行けば行く毎に穴が小さくなり、展開した次元断裂も小さくしていかなければならないのだ。

それなら直接次元断裂空間を潜って目的地まで移動すれば良いだろうと言う話にもなるが、歩はそこまで細かい位置に移動する事が出来ない為、座標が微妙にズレてしまうのだ。

しかも移動するのはタワーの上部。もし展開する位置がズレてタワーの外側に出てしまえば、普通の人間なら怪我では済まない。

まあ、歩なら落ちそうになってもディージェントに変身して耐える事が出来るだろうが、そんな命綱なしのバンジーをする趣味は全くない。それならこっちの方が断然楽だ。

それに、先程落ちた際に階段も崩れてしまったのでこうやって移動するしかない上に、あのままサイクロンだけでディボルグと戦わせるのは危険だ。

ディバイドと一緒にいないのは気配をタワー出入口の近くで感じたことからすぐに気付いた。

恐らくディボルグではない別の何かと戦闘になって落ちたのだろうが、彼なら問題ないだろう。

やがて大展望台広場まで辿り着くと軽くジャンプして次元断裂から飛び降りてスタント着地すると、そこには別の先客が、歩を挟むように立っていた。

タキシードの男と、どこかの工場で着ける様な茶色い作業服を着た男だ。

「来ましたか。仮面ライダー殿」

「よくも東京湾まで飛ばしてくれたなあ！キツチリ礼をさせてもらうぜー！」

「……ナスカドーパントと、アノマロカリスドーパント…ですネ？」

二人の特徴的な口調から一体誰なのかすぐに分かった。歩の推察に「ええそうですよ」と答えながらナスカドーパントの男・井上運河は金色のガイアメモリを取り出してスイッチを押してガイアウィスパーを鳴らして自身の顎に挿し込むと、その姿を先刻見た青い騎士の姿を模した怪人へと変えた。

「ナスカ！」

『貴方のドライバー、頂きますよ』

「……僕のドライバーは貴方達が今持つてるドライバーとは勝手が違います。手に入れても使えないですよ」

そう返しながら歩はクラインの壺からディージェントドライバーとカードを取り出して戦闘態勢に入ろうとするが……

「アノマロカリス！」

『そんなのやってみねえと分かんねえだろうがああああ！！』

「ッ！？」

目の前のナスカドーパントに気を取られている隙に、背後に居た男がアノマロカリスドーパントに変身して襲い掛かって来た。

「チイツ……！」

『ぐべっ！？』

それには流石に驚き、思わず後ろを振り向いて次元断裂を展開させて相手の猛進を防ぐが、それが拙かった。

『隙あります』

「ッ！しま…ガハッ！」

ナスカドーパントに背を向けてしまったが為に、背後からの奇襲には対処できずにナスカブレードによる峰打ちを受けて吹き飛ばされてしまった。しかもその際に、手に持ったディージェントドライバーバ

ーとカードを手放してしまい、宙に舞ったディージェントドライバーはナスカドライバーの手元に落ちてしまった。

『うごががが……お？消えた……？』

更に突然の攻撃によって空間の演算が狂い、アノマロカリスドライバーの動きを止めていた次元断裂が消えてしまった。

『ご苦労様です。お陰で手に入りましたよ』

『あ、はい。でも、どうして殺さないんです？』

『私は一対一で戦う主義ですからね。こんな勝ち方をしても、嬉しくありません』

アノマロカリスドライバーの疑問にナスカドライバーはウンザリした感じで答えながら落ちたカードを拾い上げると、メモリを体内から取り出して人間に戻ってディージェントドライバーを腰に巻き付けた。

「さて、では試しに使ってみますか。使い方も貴方の戦いを見ているれば分かりますし」

「カメンライド……」

少し前にジョーカーカードパントとの戦闘も見ていたからなのだろうか、ディージェントへの変身プロセスを進めて行く。

だが、歩にはこの時点で彼が変身できない事が分かってる。ワールドウォーカーがDシリーズに触れれば、差異はあれども頭の中にあるDシリーズの情報が流れて来る筈だ。

そして歩の予想は的中した。

「変身」

「エラー！」

「何…？ぐあつ！？」

『い、井上さん！？』

カードをディージェントドライバーに挿入した瞬間、通常とは違う電子音声が発せられ電流が一瞬流れたかと思うと、ドライバーが運河を吹き飛ばしてしまった。

「…ハッ！」

『あ！ダメエ返せ！！』

「これは元々僕の物です。変身」

「カメンライド…ディージェント！」

運河の身体から弾き飛ばされたディージェントドライバーをすぐさま拾い上げると、運河と同じプロセスを通してディージェントへ変身を果たし、両手のグローブを嵌め直しながら二人に言い放った。

「Dシリーズは誰でも扱えると思ったたら大間違いですよ。それに、これは望んで手に入れる力でも決してありません」

「くう…いくら私でも無理がありましたか……」

「ナスカ！」

運河は悪態をつきながらもナスカメモリを起動させて自身の身体へ挿入して再びナスカドーパントへ変わると、同時に出現したナスカブレードで構えて斬り掛かって来た。

『はあっ!』

「アタックライド…スラッシュ!」

「…フンッ!」

しかしすぐに「スラッシュ」のカードを発動させて右手の手刀でナスカブレードを受け止め、そのまま何度か切り結ぶ。

『俺がいる事を忘れてもらっちゃあ困るぜえ!!』

『止しなさい!!』

『え!?なんで!?!』

「……?」

何度目かの鏝迫り合いに入ったところで、静観していたアノマロカリスドーパントがディージェントの背後から襲い掛かるうとしたが、ナスカドーパントが叱責して動きを止めた。

それには流石のディージェントも折角のチャンスを逃そうとするナスカドーパントの意図が分からなかったが、更に続けた言葉によりやく理解した。

『これはあくまで私と彼の戦いです!先程も言いましたが、私は一対一での勝負しかしない主義なのです!余計な手は出さないで頂きたい!!』

「……意外とフェアですね」

『それが私のポリシーですからね。ハアッ!』

ナスカドーパントの騎士道精神に感服して声を漏らすと、こちらの手刀を弾いて距離を取り、ナスカブレードを眼前に構える。

デイージェントも同じくバックステップで距離を取ると、肩の力を抜いて楽な姿勢で立った。

一見すれば隙だらけに見えるが、これがデイージェントなりのあらゆる状況に対処できる構えだ。

無駄に力が入っているのは空間把握能力で周囲の状況を把握しているも対処に遅れてしまうからこそ、デイージェントが行き着いた独特の戦闘スタイルだ。

ナスカドーパントもそれを理解しているのか特にこれと言って何も言わず、代わりに「フツ……」と軽く笑った。

『それでは私と一緒に……史上最速のダンスパーティーを始めましょう』
「……ッ!？」

そう宣言した刹那、ナスカドーパントの姿が一瞬にして消え、デイージェントが何かに弾かれた様に吹き飛ばされた。

迫りくるナイフを眼前に捉える中、デイバイド……ヴァン・アキサメはこれまでの事を走馬灯のように思い出していた。

父親に剣術を教わっていた幼少期の事。

母親に連れられて母の故郷のアメリカへ旅行に行った事。

高校の剣道全国大会で準優勝を果たした事。

そして、デイバイドライバーを手に入れたあの運命の日の事も……。

その日は何時ものように学校に行っていたのだが、その帰り道であ

る山道が目に入った。

そこは今ではあまり行かなくなったが、ヴァンが子供の頃によく遊んだり偶に父に剣道の稽古を付けてもらっていた思い出の場所だ。

『…………偶には行ってみるか』

そう呟いて山道を登ってしばらくすると、その道中に何か緑色の木刀の様な物が地面に突き刺さっているのが見えた。

『何だあありやあ…？』

そんな疑問の声を漏らして更に近づいてみると、それは木刀などではなく真正正銘の日本刀の形を成していた。

そして違う所を挙げるならば、まるで寶石の様に煌めいている所や、鐔の部分に何かをセットするための小さな溝が付いている事だろうか。興味本位で柄を握って引き抜いてみると、その瞬間頭の中に何かかゆつくりと流れ込んできた。

『ん…………？何だあ、ディバイドライバー？これの事かあ？』

そう呟きながらも頭の中に入って来る内容を読み取ってみると、それはこの剣…ディバイドライバーの使い方やその作られた目的、そして異世界の事などが頭に叩き込まれた。

異世界なんて言っても正直実感の湧かない夢物語だし、高校2年生にもなつて厨二病な事をほざく質でもない。

まあとりあえずクラインの壺とやらに入れて持ち帰ってから色々調べてみよう。

そう思い立つとすぐにそれを実行し、山から下りる事にした。

しばらくしてようやく山道からアスファルトの敷かれた公道まで辿り着いた頃に、何やら学校へと続く繁華街から嫌な気配を感じた。それに、向こうからはサイレンの音なんかも聞こえてくる。事故か何かあったのだろうか？

(……ちよっくら見てみつかなあ？)

そんな気合の入っていない野次馬根性を出しながら、ヴァンは来た道に戻って行ったが、それが彼に“声”を張り付かせる要因となるとは、彼は夢にも思わなかった。

『なんだあ……こりゃあ……』

その眼前に見えていたのは地獄絵図だった。

何時もの通学路に立ち並ぶ幾つもの建物は瓦礫に成れ果て、道行く人々が見た事もない様々な生き物達に襲われている。

全身が茶色くくすみ、民族風の白い布で出来た服を纏った怪人だ。

だが、見た事はないが知っている。いや、正確に言えば分かると言った方が正しいか。

先程デイクライバーを手に取った時にアレに関する情報を手に入れたからだ。

だとすると、本当に異世界なんてものがあるのだろうか？そして、何故その異世界の怪物がこうしてこの世界にやってきているのか…

…。

『ゴギ、アゾビモリントガギスゾ（おい、あそこにもリントがいるぞ）』

『タギバボンバギンゲルンタギギヨグザ、グソグギフグゾリビズベタゴグザツタバ。ジャスゾ（確か今回のゲゲルのルールは、黒い衣服を身に着けたオスだったな。やるぞ）』

闊歩していた内の二体の怪物・グロンギが良く分からない言語で話し合つと、こちらへと歩み寄つて来た。

ここで逃げてしまえば後が楽だったろうが、この時のヴァンにはそんな事は出来なかった。

何故なら見てしまったのだ。崩れた瓦礫の下から助けを求めてもがく手を。

『たす…けて…』

『……ああ、助けてやるよ。コイツ等を片付けたらなあ！』

自分の耳に僅かに届いた声にヴァンはそう返すと、手元に次元断裂を展開させてその中に右手を突っ込むとディバイドライバーを引き抜く。

更にもう片方の手にも先程よりもコンパクトな次元断裂を展開させると、そこから一枚のカードを取り出して構えた。

『テメエらあ、ここは俺の居場所なんだよ……。それを軽々しくぶち壊す奴等は…俺が徹底的にしばき倒してやんよお！』

「カメンライド……」

左手に持ったカードをデイバイドライバーの鍔部分に設けられているスリットにセットすると、電子音声が発せられ、戦うための準備ができた事を告げ、音声コードを唱えた。

『変身！』

「デイバイド！」

そう叫びながらデイバイドライバーを横薙ぎに振るうと、剣先の通った箇所には二枚の板状の物体が現れ、空間がパツクリと裂けてその傷口がみるみる広がって行く。

やがて開いた傷口から灰色のドロツとした空間が見えたかと思うと、その空間がこちらに迫ってヴァンの全身を包み込んできた。

『あん？…ナブツ！？』

突然の出来事に思わずそう声を漏らす、特に感触と言った物がなく、ただ視界が灰色に濁り体付きが変わって行く様な感じがした。その後目の前に現れていた二枚の板状の物体が顔に突き刺さったかと思うと視界がクリアーになって行き、変身する前よりも視界が鮮明になり、目の前に居た二体のグロンギが自分を見てたじろいだ。

『クウガ！？』

『バレクウガガボビ！？（何故クウガがここに！？）』

『何言ってるのか分かんねえけど、これからお前等を徹底的に叩き潰して助けに行かなきゃならねえんだ。とっとくたばってくれよ』

後頭部を掻きながらヴァン…デイバイドは意味不明な言語で話すグロンギにそう言い放つと、その二体に斬り掛かって行った。

『オイ！大丈夫か！？』
『た、助けて……………』

グロンギとの戦闘を終えたデイバイドは瓦礫に押し潰された男性を引き上げながら声を掛けた。
その男性は瓦礫に胸部を圧迫されていたのか、服に血が滲んでおり、口からも血を吐き出していた。

『待つてろ！今救急車を……………ッ！？』

（誰か…誰か来てくれ……………）

そこまで言ったところでまた別の場所からも助けを求める声が聞こえて来た。

今のヴァンは変身した状態だ。変身していれば当然身体能力や五感が高まり、本来なら聞き取れない様な小さな音でも聞きとる事ができる。

（痛い、痛いよお……………）

（何で、こんな事になったんだ……………）

（誰か助けて！私、まだ死にたくない……………！！）

しかも聞こえてくる声はそこからだけではなかったのだ。そこら中の瓦礫の奥から無数の呻き声が聞こえてくる。

それには思わず抱えていた男性を手放してマスク越しに耳を覆うが、それでも聞こえてくる。

『やめろ、そんなに話しかけないでくれ……すぐに行くから、待っててくれよお……』

耳に響いて来るいくつもの声に恐怖を覚えながらも、そう言い返す。そしてふと下を見ると、先程手放してしまった男性が目に入るが、彼の状態に思わず息を飲んだ。

『そ……んな……ッ！』

どうやら手放してしまった後に後頭部を激しく打ってしまったようで、元から重症の身体に余計に衝撃を与えてしまった事で、その拍子に胸部にも致命傷を与えてしまい息絶えていたのだ。

(助けて……)

混乱していても尚、聞こえて来る無数の呻き声に思わず叫んだ。

『ウルセエエエエ！俺に話し掛けるなああああ！！』

その後どうしたのかは詳しく覚えていない。ただあの声が聞こえるのが嫌で自分は必死に逃げた。

そして何時の間にか知らない土地……異世界に来てしまっていたのだ。しかしどこに居てもあの“声”が耳に張り付いて来る上に特に夜になれば何度も何度もその時の夢を見て気が狂いそうになってしまう。

それからというもののあらゆる世界を巡り続けていたが、それも今の目の前の白いライダーの手によって終わろうとしている。ここで死ねば、この呪縛からも解放されるのだろうか……いや、死ねば元も子もないし、死ぬのはもつとゴメンだ。

生きたい！

どんなに辛い状況になろうが、どんなに人に疎まれようがそれでも生きて行きたい！！

そう思い立った刹那、ナイフの切っ先が自身の喉元にほんの少しふれるところで、素手で受け止めた。

「何っ！？」

「お前、死んでるからどうでもいいとか言ってたよなあ……」

エターナルブレードの刃を素手で握った事で、血がポタポタと滴り落ちながらもディバイドはエターナルに向かってポツリと呟いた。

「じゃあ俺の目の前にいるお前は何だあ？ただの死体だってえのなあ？」

「……そうだ。俺にはもう、生前の感情など残っていない……ただの動く人形だ」

「ざっけんなあ……」

ディバイドは激昂するとナイフを握ったままディバイドライバーでエターナルを切り払った。

それによりエターナルがナイフを手放して大きく吹き飛ばす。

「なっ……がはあっ！？」

「お前は自分が何時でも死んでもいいとかぬかすが、俺はずっと生きて行きたい！どんなに苦しくても、どんなに後悔しようともなあ

「!!」

エターナルブレードを投げ捨てながらエターナルに言い放つ。そうだ。何で何時までも逃げ続けてたと思ってる。生きたいからだろう。生きて、いつか安心して眠れる場所を見つける為だろうが。だったらこんな所でくたばるわけには…行かない!

それなのに相手はこうして話し合っていると言うのに自信を死んでるとのたまいやがる。

それなら……

「お前が俺を殺そうってんなら、俺が先にアンタを殺してその先も生き続ける! 罪を背負ってなあ!!」

「ファイナルアタックライド…デイデイデイバイド!」

ファイナルアタックを発動させると、デイバイドとエターナルの間に十枚のビジョンが出現して標的を捉える。

更にデイバイドは居合いの構えで剣を左腰に据えると、気合と共にデイバイドライバーを振ると緑色に煌めく斬撃が放たれ、展開されたビジョンを通過しながらエターナルへと迫った。

「ラアアアア!」

「くっ…ぐあああああ!!」

斬撃がエターナルに直撃すると激しくスパークを起こしてやがて爆散し、エターナルの変身が解除されて健の姿が現れそのまま倒れた。

「くっ…何だ、これは……。身体が、動かない……!!」

「教えといてやる…そいつが“死”ってヤツだよ。元SWAT隊員」

「そうか……これが、本当に死ぬと言う事か……。すまないな、ボス。俺はここまでだ……」

健がそこまで言い切ると、彼の身体は塵となって消え去って行った。そして後に残されたのは、彼が使っていたエターナルメモリとロストドライバーだけだった。

駆は薄暗い階段を上って行くと、やがて広い部屋に辿り着いた。

まだ上へと続く階段が続いている様だが、上からは何やら風の吹き流れる音がする事から屋外へと続いているようだ。

しかし駆はすぐに気持ちを切り替えて目の前にいる背を向けている男の名を呼んだ。

「克也、来てやったぜ」

「……ふんっ、思ってたより早かったな。駆」

克也は駆に振り返ってその顔を見ると、自身の口元を凶悪に歪めながら皮肉気な言葉を吐いた。

駆は部屋を見渡してある一点が消失している事に気が付いて克也に問い掛けた。

「彼女はどうした？」

「あそこだよ」

克也が天井へ視線を配り駆もその方向へ目をやると、囚われていた女性・麗奈は天井に浮かんだキューブ状の灰色に濁ったガラスケ―

スの様な物体の中に閉じ込められていた。

「何だアレは……!?!?」

「アレは俺が作り上げた“空間隔離断裂”とか言うヤツだ。ある男から貰った力さ」

駆の驚嘆の声に克也は何でもなさそうにそう簡単に答えると、再び駆の方へ視線を向けた。

「これからお前とは本当の意味で決着を着けなきゃならないからな……しばらくあの籠の中で大人しくしてもらわないとな」

「克也……もうやめろ。俺はこれ以上、お前に罪を着せたくない」

「はっ!どの口が言ってるやがる。俺をこうさせたのはお前だろうが!」

「ああそうだ。お前を生き返らせて苦しめたのは俺だ……。それが俺の、罪だ」

駆はそう呟いてロストドライバーを取り出して腰に巻き付けると、今度はジョーカーメモリを取り出してスイッチを押した。

「ジョーカー!」

「そつだ、俺をもう一度殺してみなあ!十年前のあの時みたいになあ!」

「違う。俺はお前を殺しに来たんじゃない」

「何い……?」

殺しに来たわけじゃない?

だったら何をしに来たんだ?

まさか俺ともう一度仲直りしたいってか?そんな事、もう遅い!

「罪に気付けたあ…？そんな事で、俺の憎しみが消えると思ってんのかテメエはああああ！！！」

「カメンライド……」

ジョーカーに激昂を飛ばしながらカードをスライドさせたバックルの挿入口にセットすると、克也も同じく合言葉を口にした。

「変身！！！」

「デiboldグ！」

克也は異世界の仮面ライダーと評される姿へと変貌すると、右腰に備え付けられたカードホルダーを手に取って、その形状を槍へと変形させて構えた。

「克也、お前を絶対に止めてみせる」

「やってみる駆つううう！！！」

ジョーカーは拳を、デiboldグは槍を振るい、二人の仮面ライダーによる激闘が始まった。

デiboldは変身を解くと、その場に座り込んで大きく息を吐きながら額に浮いた脂汗を拭いた。

アレは正直ヤバかった……。本当に死ぬかと思ったほどだ。素手で

握って止めるとか、よく思い付いたもんだな自分……。

そう自画自賛しながらそのまま固いアスファルトに寝そべって空を仰ぎながら、エターナルエッジを握った右掌を見た。

その手には大きな傷口が出来ており、未だに血が滴っている。そんな時、歩のあの言葉を思い出した。

“人の命はそう簡単に奪って良いものじゃないと言う事を忘れないでね”

（ワリイな代行者、奪っちゃったよ……。そうしないとこつちが死んじゃうからな）

心の中でそう謝りながら右手を握りしめる。

確かに人の命は大事だが、自分の命の方がよっぽど大事だ。

歩なら一体どうしたのだろうか。迷う事なく殺したか？それとも迷ってしまい逆に殺されたか？

そんな事は知る由もないが、アイツなら何となく迷っていきそうな気がする。

歩は人を殺す事を恐れている。恐れているからこそ自分にあの様な警告を出すし、アノマロカリスドーパントと戦う時も無駄な戦闘を避けて遠くに飛ばした。

（アイツ、以外とお人好しだなあ……。あんなだと、その内マジで死ぬぜえ）

こちらら二年間もライダーをやってるんだ。あんな考え方ではこれから先やっていけない事なんて目に見えてる。

まずはあの考え方を正してやるうかと思いい、起き上がって再び風都タワーを上ろうとした時、身体に衝撃を受けて吹き飛んだ。

「グフオツ!？」

『ハハハハハ!!--やっ たぜええええ!!』

「……あ…ん？」

またも地面に倒れ伏しながらも顔を上げて衝撃が来た方向を見ると、アノマロカリスドーパントが大笑いをしながらこちらを見下ろしている姿と、その背後にいる何かの異形が目に入ったところで、ヴァンの意識は薄れて消えて行った。

第四十二話：全てはPから始まったノヴァン・ヒギンズ（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「何だか思わぬ強敵が出て来たわね」

皐月「てかアイツって確か歩にやられてたんじゃなかったのか？」

カンペ（その秘密は次回に明かしますよ。まさか、自分でもここま
で活躍するキャラになるとは思わなかったんだぜ……（。A。・）（

加奈「何が起こるか分からないものね……」

皐月「それがラルクオリティってか？お前の頭ん中どうなってんだ
よ一体……」

カンペ（私が知りたいわ！（。・#）（

加奈「逆ギレすんな！」

皐月「それと今回はアレだな。ヴァンの過去話がメインになってん
だよな？それにしても随分と他のパートが多かったな」

加奈「それは言わないで…作者のサブタイの付け方って、かなり適
当なんだから他のパートが長くて当たり前なのよ……」

カンペ（ ）（ ） ちなみに今回と前回に着いてたイニシャル
のPは、“past（過去）”のPです（

皐月「さて今回のW編も伏線入れまくってたけど、作者は本当に全

部の伏線拾えるのか見物だな！」

加奈「まあ作者の事だし何とかするでしょ。と言っわけで今回はここまで！次回もお楽しみに〜！」

あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜

さあやって参りましたコラボ企画第二弾！

今回は竜王の白翼先生作「仮面ライダーディフェル」世界の覚醒者

〜との共同コラボです！（・w・）

ディフェルでも歩達がギャグ全開で出演してますので、そちらもぜひお楽しみください！それではあとがきラジオ出張版スタートオ！

（　　）

あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがきラジオ！出張ば〜ん！！」

加奈「さあ、遂にやってきました竜王の白翼先生の作品『仮面ライダーデイフェル〜世界の覚醒者〜』とのコラボ企画！」

皐月「今回のゲストは当然コイツ等だ！さあ出て来い！！」

士「お邪魔します歩さん！」

美莉「よろしくお願いしま〜す！！」

聖麻「へえ〜結構広いな場所で収録してるんだな」

歩「ここは大人数で収録するためのスタジオだよ。ファイズ編のキヤラ紹介もここでやったんだよ」

好太郎「まだあの時ファイズが暴れてた傷跡が残ってるがな……」

加奈「と言うわけで今回のゲスト！仮面ライダーデイフェルの主人公・天醒士^{てんせいしかさ}、メインヒロインの日比野美莉^{ひびのみり}、そして二人の親友の向井聖麻^{かいせいま}に来て頂きました〜！」

歩「ここで会うのは初めてだね、士君」

士「あの時はどうもありがとうございます。何かとんでもない事になっちゃって」

好太郎「それは俺に言ってくれ。どうしてああなった……」

加奈「あ、そう言えばあの時はゴメンね美莉ちゃん。劇とは言えイジメちゃって……」

美莉「いえいえ、私も楽しかったですし」

ヴァン「ZZZZZ……」 立ったまま寝てる
麗奈「起きてくださいヴァンさん。収録始まっていますよ」

皐月「起きろ！」 ヴァンの背中にタイキック
ヴァン「おっとお」 前に屈んで避けた

聖麻「よく今の避けたな……」
ヴァン「伊達に世界は渡ってねえからなあ」

加奈「それではまずは軽く今回のゲストの紹介をしていきましょうか」

皐月「と言っても、ほぼ向こうの紹介通りだけだな」
加奈「それじゃあまずは土君からいくわよ」

天醒土（仮面ライダーディフェル）

ややツンツン頭の黒髪が特徴で、顔は中の上くらいの極々普通の高校一年生。鈍感のフラグ体質でもあり、ムツツリ。色っぽいことがダメで、そういうった類の物を見るとすぐ気絶してしまい、ひどい時には鼻血を吹いて倒れる。

高校では有名な特撮オタクではあるが、アニメも守備範囲である。二次元のタイプは黒髪ロングの巨乳とのこと。

性格は優しく、困っている人を放っておけない。だがキレるとやばい。

特撮物に目がなく、放送、玩具、さらには戦闘時にまでテンションがおかしくなる。玩具一式は家の地下に保管されているらしい。

意外と勘がよく、戦闘で真価を発揮する。戦闘時のモットーは『放送を見てできんじゃないかね?』と思ったことを試す』で、これによって実行したことは大概成功する。

と言う事らしいけど、一部の紹介だけ見るとまるっきり変態よね…
…」 冷たい目

士「そんな目で見るなよ！思春期の男子なんて大抵そうだぞ！？」
歩「そうなの？」 出生上、学校行けてない

亜由美「歩！そこ喰い付かないで！悲しくなるから！！」

聖麻「そついや結構ハードな過去なんだっけ？」

皐月「まあ詳しくは二十六話を参照だな。じゃあ次は美莉の番だな

日比野美莉（仮面ライダーディカエル）

黒髪ロングで顔立ちもよく、スタイルもいい天然系美少女。学校では、写真の販売まで行われるほどに人気が高い完璧超人の高校一年生。

明るくて家事もできるが、何故かお菓子類が作れず、人を気絶させ、泡を吹かせるほどにまずい物になってしまう。

両親は幼い頃になくなっていて、兄と2人で暮らしていたが、1年前に兄が行方不明になってしまっている。

弓道部に所属していて弓矢の扱いが異常なまでに上手く、ディカエルに変身時この才能を如何なく発揮する。

滅びの現象の件から士の事が…… ところから先は言わない方がいいな。展開的に」

麗奈「上手く行くといいですね」

美莉「そ、そんな…エへへ」 顔赤い

ヴァン「モテモテだなあオイ」

好太郎「随分といいフラグが立ってるな……」

士「そんなわけないですよ。立ったとしてもそれは駄フラグですよ」

好太郎・ヴァン（コノヤロウ……（。皿。＃））

聖麻「コイツに構ってても疲れるだけですよ。ところで次は俺の番だよな？」

加奈「そうね。それじゃあ最後に聖麻君のプロフィールね」

向井聖麻

赤毛で背が高い土の中学からの親友の高校1年生。（ちなみに髪は本人曰く地毛とのこと）

モテそうなのだがガサツすぎてモテない。

土程ではないが特撮好きで、どちらかといったらアニメ派との事。

すぐに人の動作やクセなどを覚え、双子だろうがなんだろうがすぐに見極める事ができる鋭い観察眼を持っている。

それを生かして相手の動きを観察してサポートしたり、人の気持ちを読むこともある。

以上で紹介は終わりね」

臯月「他の二人に比べて結構地味だな」

聖麻「それを言うなよ！結構気にしてんだから！」

亜由美・加奈（気にしてたんだ……）

カンペ（それでは一通り挨拶も終わったところで、これより会場へ向かいまゝす（ハハヅ））

美莉「あれ？ここでするんじゃないんですか？」

加奈「何でも今回はそちらの作者さんからのリクエストで、あるゲームをするそうよ」

聖麻「ゲーム？」

士「何か嫌な予感が……」

好太郎「スゴロク大会…だそうだ」

士・美莉「またかあああああああああああああああ！？」

歩「そう言えば君達二人つて、竜王さんのおかげで酷い目に遭ったんだっけ？」

聖麻「アレはすごかったな…まあ俺は平気だったけどな」

士「女装は…また女装は勘弁……」

ヴァン「女装させられたのかよ……」

聖麻「ちなみにその時の写真、ウチの作者から一枚もらってきてますよ」

皐月「へえ〜どれどれ？」

亜由美「うわぁ…でもそれなりには可愛くなってるね」

士「だあああああ聖麻 teme エエエエエエ！それだけはやめろお
おおおおおおお！！」

麗奈「ええ〜と、その…ご愁傷様です」

士「……もう、完全に心が折れたorz」

麗奈「ええ！？まだ始まったばかりですよ！？」

好太郎「お前は気を遣ったつもりかもしれないが、そう言う心遣いが人を傷付けると言う事も知っておいた方が良いぞ」

カンペ（まあ少なくとも女装とかはないので安心して下さいな。

ちなみに最初上がった人には景品をプレゼントいたしますーw^）

」

士「マジか!?何かそれだけでもスツゲエやる気出て来たぞ!!」
聖麻「お前ってホント単純だな」

美莉「ラルさん、ウチの作者より優しい人でよかつたあ」

皐月「あんまりそうは思わない方が良いぞ。後でマジで後悔しかな
ないからな」

加奈「ウチの作者も、なんだかんだで腹黒いからねえ……」

歩「ところで作者、そのスゴロク大会ってどこですの?」

カンペ(それでは字数も大分進んでる事ですし、ちゃっっちゃか行き
ますよ。それでは加奈ちゃん、お願いします!(。。(。))

加奈「はい!今回は久しぶりに登場のこのDリーダーを使って会場
まで向かいます!」どこからともなく取り出した

士・美莉「何処から取り出した(の)!?」

ヴァン「コレが後書、き……クオリ……テイ……ZZZ」

麗奈「だから寝ないでください!」

亜由美「本編じゃなかったらちゃんと寝れるんですね……」

好太郎「ちよつと待て。それって確か、NGシーンとかを見るのに
使うんじゃないのか?」

皐月「一応それ以外の使い方もできるぜ?今までそんな機会がなか
ったからな」

加奈「それでは早速行きましょう!ウエエエエエイ!!」

歩・ヴァンを除く全員「何故にブレイド!?!」

「ツールライド……スゴロクパーティー!」

加奈「はい！と言っわけで空間移動してやってきましたパーティー会場です！」

士・聖麻「って何処だココオオオオオオオ！!?」

好太郎「いや本当に何処なんだココ!? 辺り一面何も無いぞ!？」

麗奈「あの、歩さん…真っ白い空間が広がってるだけで何も無いんですけど……」

歩「ここは作者が今回の企画のために用意した亜空間だよ。読者の皆さんは本棚がない『地球の本棚』をイメージして下さいね」

ヴァン「でもよお、ここでどうやってスゴロクするんだあ？ マスもサイコロもねえし」

ラル「それなら大丈夫だ、問題ない」 指パッチン

ヴヴヴヴヴ…ン… 足元にマスと巨大サイコロが出現

皐月「おお！ すごいなコレ!!」

加奈「これでスゴロクが始められるわね…って……」

歩「ん？」

亜由美「あ……」

好太郎「何だ、この違和感……」

皐月「何かが違う様な……」

ヴァン「あゝ、多分アレだな。アレ」

麗奈「え？アレって何ですか？」

士「どうしたんだよ皆して？」

聖麻「おい士、気付いてねえのか？」

士「何にだよ？」

聖麻「この作品の作者のラルさんは基本、ウチのアホと違ってカンペで話すんだよ」

美莉「それがどうかし……あ！」

ラル「どうかしましたか？皆さん」

歩・ヴァンを除く全員「喋ったあああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！？」

加奈「ちょ、アンタ！何時ものカンペどうしたのよ！？」

士「てか声渋ッ！ラルさんってそんな声だったのかよ！？」

ラル「いやあゝ偶にはね、こういう風に皆と話してみたいなと思いでまして。ちなみにどんな声かについては『こえ部』と言うサイトに投稿してあるので、気になった方は是非チェックしてみてください」
歩「イメージ的には、杉田智和をイメージしてればそれで大体合ってるよ」

ヴァン「それ、言い過ぎじゃね？」

加奈「ゴホン、それじゃあ気を取り直して、まずは順番を決めて行きましようか」

麗奈「どうやって決めますか？」

聖麻「この人数でジャンケンしても、それだと相当時間が掛かるしな……」

美莉「あ！じゃあこう言うのはどうかな？サイコロを投げて、それで一番大きい数字が出た人から順番で行くって言うのは」

士「おおその手があったか！サンキュー美莉！！」

美莉「え？そ、そこまで言われるほどでも…エへへへ」 顔真つ赤

聖麻「お〜お〜熱いね〜」

ヴァン「アイツ、マジで爆発しねえかなあ……」

好太郎「それには激しく同意だ」

歩「?????」

麗奈「歩さん鈍過ぎます……」

亜由美（歩にそういうのを教えるには一体どうすれば……）

カンペ（ ） サイコロを振っているので、しばらくお待ちください（ ）

加奈「はい！順番が決まりました！」

臯月「同じ数字が出た奴はそいつと一緒にペアを組んでもらうからな。結果はこんな感じだ。」

- 1：皆葉好太郎
- 2：来栖麗奈&向井聖麻
- 3：須藤歩
- 4：天醒士
- 5：須藤亜由美&日比野美莉
- 6：ヴァン・アキサメ

ラル「それでは、参加者の状況を見てみましょう」

好太郎「俺が一番最初か……」

ラル「好太郎は、それほど気にした様子もなさそうですね」

麗奈「よろしくお願いしますね。聖麻さん」

聖麻「はい、こちらこそよろしくお願いします」

ラル「こちらは互いに礼儀正しく挨拶してますね。聖麻君も年上には敬語で話す様です」

士「加奈と皐月はしないのか？」

歩「二人は司会者だからね。作者と一緒にゲームの進行を務めたり
実況、解説、あとツッコミを担当するよ」

士「ツッコミって何だよ!？」

ラル「主人公二人、コンビでもないのに漫才を始めました」

亜由美「まさかのメインヒロインコンビかあ…自分で言うのもなん
だけどね」

美莉「優勝賞品って何でしょうね!またプリンとかだったらいいな

あゝ」

亜由美「あ、じゃあ私的にはパフェが良いかな？」

美莉「良いですねそれ！」

ラル「ヒロインコンビ、ノリノリである」

ヴァン「盛り上がってんなあ、ヒロインコン、ビ……ZZZ……」

ラル「そしてヴァン君は予想通りと言いますか、寝ちゃいましたねえ」

加奈「そこ！ヴァンさん寝ない！」

皐月「まあヴァンは最後だし、出番になった時にでも叩き起こしてやるうぜ？じゃあまずは好太郎、サイコロを投げてくれ」

好太郎「分かった。じゃあ投げるぞ」サイコロ投げた

ラル「さあ遂に始まりましたスゴロク大会。先行を取った好太郎の出した目は……4！それでは四つ先のマスへ転送しますね」指パツ
チン

好太郎「……移動したぞ。それで、これで終わりなのか？」

加奈「はい、OKです。このスゴロクではお題マスと言うのが出てきたりしますが、今回は何もなさそうですね」

皐月「お題マスに止まった時は、そのマスに浮かんだ指示に従ってくれよ？」

聖麻「ほぼウチでやったのと同じだな」

士「でも女装がないだけマシだよな。あんなのが出た時には、もう何もかも終わる……」

歩「確かに、それだけは避けたいね」

皐月「じゃあ次！麗奈&聖麻コンビの番だぜ！」

聖麻「それじゃあ俺が投げますね。よつと」

ラル「聖麻君が出した数字は…5です！それでは5マス進めま〜す」
指パツチン

麗奈「…………移動しましたけど…あ！何か浮かび上がりましたよ！」
聖麻「ええ〜となになに？」一回休み』…ってええ〜！？」

ラル「おっとコレは幸先の悪い事に足止めを喰らってしまいました
！」

加奈「でもまだ序盤だしね。これくらいなら全然問題ないわよ。次
は歩の番よ」

歩「分かったよ…………1か…………」

ラル「歩は1を出してしまったようですが果たしてそのマスには…
…！？」

マス（プレイヤー一人と位置を交換する。ただし、そのマスのお題
は受ける）

美莉「変わったマスが出たね」

聖麻「多分これがラルクオリティってヤツだろ」

歩「ウウ〜ン、それじゃあ好太郎君と入れ替わりで。一回休みはキ
ツイしね」

ラル「それでは、歩と好太郎の位置をお〜…チェ〜ンジ！」指パ
ツチン

好太郎「どっかの特戦隊の隊長みたいな言い方になってるぞ！」

シユンシユン……！ 歩と好太郎が入れ替わるように転送した

皐月「今度は士の番だぜ」

士「よっしゃ！変なお題さえなければ、もう何も怖くない！」

亜由美・美莉「そのセリフ死亡フラグ！！」

ラル「その言葉が、後に悪夢への序章に取るとは、思ってもみなかったのであった。」

士「変な伏線立てないでください！別に変な目は出てないですよ！ほら聖麻が出したのと同じ5…って5かよ！！」

皐月「士も一回休みだな。次は亜由美と美莉の番だぜ」

美莉「頑張ってゴール目指しましょう！」

亜由美「じゃあ投げるよお、えいつ！」

ラル「ヒロインコンビが出した目は…3！（OMO）
好太郎「お前それがやりたかったただけだろ！」

美莉「『三つ進む』…やったあ！」

亜由美「この場合はお題は出てこないんだね」

加奈「さて、次はヴァンさんな訳だけど……」

ヴァン「ZZZZZZ……」

聖麻「立ったまま寝るとか、この人マジ器用だよな」

皐月「起きろおおおお！！」 飛び蹴り

ヴァン「ぬうおう！？」 直撃

士「あ、今度は喰らった」

聖麻「毎回避けれるわけじゃないんだな」

ヴァン「イテテ…分かった分かったあ、じゃあ投げるぜえ」

ラル「ヴァン君が出した目はあゝ…2ですね」

ヴァン「さて、何て書かれてるのかなつとお」

マス（スタート地点に戻る）

ヴァン「ええゝマジかよおゝ」

加奈「これで一通り終わったわね」

皐月「現時点の順位はこんな感じだな

1位…須藤亜由美&日野美莉

2位…天醒士、来栖麗奈&向井聖麻（ただし、一回休み）

3位…須藤歩

4位…皆葉好太郎

5位…ヴァン・アキサメ」

加奈「でも作者、この調子でやってたら文字数ホントに大変な事になるわよ？この時点で約6千字だし……」

ラル「それなら問題ありませんよ。ここから先は何もないと事は力ツトしてイベントが発生したシーンのみをダイジェストにお送りします」

皐月「つまり、1ターン目は様子見か……」

麗奈「ここから先がある意味本番って事ですね」

ラル「それと士君、君に一つ言いたい事がある」

士「俺に？何ですか一体？」

ラル「君、一度でいいから爆発しろ」
加奈・好太郎「ゲストに向かってなんて事言ってるんだアンタ（お前はああああ！！）」

ヴァン「作者の台詞を要約すると、『さあ、地獄を楽しみな！』って事だなあ」

亜由美「何でそうなっちゃうんですか！？」

ラル「ここから先は面白いイベントの発生したターンのみを抜粋してお送りして行きます！さあ、祭りの時間だあ！！」
好太郎「どっかの王蛇みたいな言い方するな！！」

3ターン目・ヴァン・アキサメ

マス（右から来るぞ！気を付ける！）

ヴァン「あん？右い？」 右向いた

グワアン！！ 上からタライが落ちて来た

ヴァン「ぬごっ！？」

皇月「上からじゃねえか！」

ラル「だから言ったでしょう。祭りの時間だと」
聖麻（遂に本性現し始めたな……）

4ターン目・須藤亜由美&日比野美莉

マス（下から来るぞ！気を付ける！）

亜由美「ええ！？またこれ！？」

美莉「今後はどこから来るの！？左！？それとも後ろ！？」

ブオアアアア！！ 下から突風

亜由美・美莉「キヤアアアアアアアアアア！！？」 スカートが（
ry

加奈「ホントに下からだったああああ！？」

士「ブフオツ！？」 鼻血噴出

歩「……………（。；）」 開いた口が塞がらない
ヴァン「こりゃあスゲエなあ……………」

好太郎「……………眼福だ」

皐月「何言ってんだテメエはああああ！！」 ドロップキック

好太郎「グガアツ！？何故俺だけなんだ！？」

ラル「とりあえず今のシーンは竜王さんに写真として送っておきま
しょうかね」

聖麻「アンタも結構外道だな」

7ターン目・須藤歩

マス（自分のトラウマを暴露しろ）

亜由美「酷そうなのが出た!？」

皐月「でもなんか気になるよなあ。何があったのかとか」

歩「ウウーン……十年くらい前に「ピーーーーーー（約五分後）
ーーーーーー」って事があつた事かな？」 グロいのでカット

ヴァン除く全員「ブワッ（；；；）」 号泣

美莉「そ、そんな事が…エグッ……」

麗奈「それは…辛いですね……」

ヴァン「ZZZ……（- -）」 布団に入つて爆睡

好太郎「何でお前はこの話を聴いて寝てられるんだよ!?!?それからその布団はどつから出した!？」

ヴァン「だつて話長いし〜。ついでにこの布団は後書きクオリティだから、気にしたら負けだぜ〜」

聖麻「今更だけど、どんだけ便利なんだよ……」

8ターン目・来栖麗奈&向井聖麻

マス（プレイヤーを一人指名して悪い点を一つ述べよ）

聖麻「これはどっちか一人が言うのか？」

ラル「そのマスのお題は二人ともお願いします」

麗奈「そんな、私言えないですよ……」

聖麻「麗奈さんは考えといてください。まずは俺から言わせてもらいますんで。指名する奴は当然士で」

士「え、俺かよ!？」

聖麻「当たり前だろ。とりあえず一つだけ言うなら……メチャクチャ馬鹿なクソ野郎」 爽やかな笑顔で

士「ぐあああああ!そんな顔で言われると何か知らねえけど余計に傷付くうつうつうつうつうつ!」

ラル「さて、次は麗奈さんですよ」

麗奈「ええ!？そ、そんな急に言われても……」

聖麻「とりあえず何か言つときたい事とか言えばいいんじゃないですか？」

麗奈「ええ」と、それでは歩さんで……もつと自分に自信を持ってもいいのでは？」

加奈「この人、マジ天使……」

そして10ターン目・須藤亜由美&日比野美莉のターンで、遂にともないお題が現れたのであった。

マス(仮面ライダー王蛇を倒せ!)

亜由美・美莉「イヤイヤヤ無理無理無理いいいいいいいいいいい!」

皇月「ちよ、何でここでそんな危ないお題が出るんだよ!？」

ラル「ああ、土君用に準備していたマスなんですけど、当たっちゃったみたいですねえ」

士「俺用!？」

好太郎「どうするんだよ一体!？美莉の方はともかく、亜由美は変身できないんだぞ!」

ヴァン「それってヤバくね？」

ラル「まあなるようになるでしょう。それでは二人とも、逝ってらっしゃい」 指パッチン

亜由美・美莉「字が違ああああ………」 転送された

ラル「それでは亜由美&ディカエルVS王蛇の戦闘を、本編並みのクオリティでお送りします。それではスタートオ！！（ ・ ・ ）
」

亜由美と美莉が飛ばされた場所は、何処かの廃工場の中だった。

「ねえこれ、本当にやらないといけないんですか！？すっごく怖いなんだけど！！」

「ちょ、落ち着いて！よく知らないけどその王蛇ってそんなに危ないの！？」

美莉はパニック状態になって亜由美の肩を掴んで揺さぶりながら必死の形相で捲し立てる。

士から聞いた話だと凶悪犯ライダーなんだそうだ。そんなの怖くて当たり前だ。

亜由美はまったく聞かされていないので、その王蛇と言う物が何か良く分からないが、少なくとも今の美莉の状況を見れば危なそうなのは目に見えている。

亜由美にあやされて少しばかり落ち着いた美莉は一回深呼吸をして冷静さを取り戻すと、亜由美に分かり易く説明を始めた。

「スウー、ハアー……前に土君から聞いたんですけど、王蛇に変身している人って、すっごく怖い殺人犯らしいんです」

「殺人犯!？」

「それは俺の事かあ？」

『ヒイツ!？』

二人は突然聞こえてきた第三者の声に一瞬だけ石化したように固まるが、やがて油の切れたブリキ人形のようにゆっくりと声の聞こえた方向を見た。

そこには紫をベースとした装甲に、キングゴブラを彷彿とさせるヘルムを付けたライダー・王蛇が、廃棄された機材の山にドカリと座った状態でこちらを見ていた。

「お前らかあ？俺を祭りに連れてつてくれる奴はあ？」

王蛇はダルそうに腰を上げると、首をグルリと回してゴキゴキと小気味の良い音を鳴らしながらドスの利いた声で二人に話し掛ける。

『出たああああああああああ!?!』

二人は悲鳴を上げながら抱き合つと、近づいてくる王蛇から距離を取るようにジリジリと後退さる。

流石に女子高生二人でこの凶悪犯に立ち向かうのは無謀と言う物だ。

「どうした？もっと俺を楽しませろお!?!」

「ソードベント」

王蛇が狂喜の叫びを上げながら「ソードベント」のカードを使って
刺突剣型武器・ベノサーベルを手元に出現させると、一気に迫り来
る。

『キヤアアアアアアアア！』

踵を返して一気に逃げ出した。

アレは下手すればそんなしょそらのお化け屋敷なんかよりも怖い。
と言っよりも死ぬ。

「あんなのと一体どう戦えばいいのおおおおおお！？」

「いや美莉ちゃん変身できるでしょ！それで何とか出来ないの！？」

亜由美にツッコミを入れられてようやくディカエルドライバーを持
っている事を思い出した。

彼女にはライダーに変身する力はない。ならばここは自分一人で戦
うしかないだろう。

そう決断を下すと肩から下げたバッグから、折り畳み式の赤に白の
ラインが入った弓の様な物とカードを1枚取り出し、中央に設けら
れているスリットを開いてその中に装填する。

「カメンライド……」

するとその弓・ディカエルドライバーから電子音声が発せられると、
美莉は踵を返して備え付けられていない弦を引き絞るようになり右手を
引いて行く。その先には、迫り来る王蛇の姿が。

「ええいもうこうなったらヤケクソ！変身！」

「ディカエル！」

「あ、あん？うぶおっ！？」

見えない弦を手放すと同時にディカエルドライバーから認識音声が鳴り響くと、迫り来る王蛇に向かって光の矢が装甲に当たって火花を散らせながら王蛇を仰け反らせた。

やがて光の矢はその役目を終えて消えるかと思われたが、今度は三つの人型の赤いノイズの塊へと変容して美莉に重なるように集まると、彼女の姿を別の物へと変えた。

女性らしい丸みを帯びた体格の白いスーツに赤い装甲。

左手には重厚な装甲が取り付けられており、頭部には丸みを帯びた二枚のライドプレートが角の様に刺さっており、両側面には翼の装飾が施されている。

これこそが彼女のもう一つの姿・仮面ライダーディカエル。
ディフェルをサポートするために造られた“フォロープロテクションシステム”である。

「ほお、う、それがお前の変身するライダーか…せいぜい俺をガツカリさせないでくれよお！！」

「来た！亜由美さんは隠れてて！」

「ゴメンね美莉ちゃん！あとお願い！」

再びこちらへ向かって来る王蛇を見据えながら亜由美に隠れるように言つと、亜由美は何も出来ない事に謝罪の言葉を言いながらその場から離れた。

デйкаエルはすぐさま二枚のカードを取り出して同時にデйкаエル
ドライブに装填させると、再び弓を引く動作をした後にその矢を
持っているかのように握った手をパツと開いた。

「カメンライド…リュウキ！」

「カメンライド…ナイト！」

「お願いしますライダーさん！えいっ！」

すると、二つの電子音声と赤いノイズの塊が現れ、そのノイズの塊
はやがて形を成していき、赤い騎士を模した仮面ライダー龍騎と蝙
蝠を模した仮面ライダーナイトへと姿を変えた。

召喚された二体のライダーは、寡黙に王蛇へと立ち向かっていった。

「あゝあ？城戸と秋山…いや違う、偽物か……。おらあああっ！！」
『ぐああああ！！』

王蛇は二体の攻撃を受け止めながら冷静に解釈すると、力押しをし
て二体を同時に吹き飛ばした。

「えっ！？ウソオツ！？」

「本物の方がよっぽど強いぜ…らああああ！！」

デйкаエルが素っ頓狂な声を上げている間に、王蛇は一瞬で間合い
を縮めてベノサーベルで斬りかかったきた。

「ひゃあっ！？」

「ハッハアアア！！良い反応だあ！もつとだ！もつと俺を楽しま

あつて、その力は本物に比べて多少の差異はあれど戦闘力が低くなつてしまうのだ。

「らあっ!」

「はっ!」

「……フンッ、軽すぎるぞおおお!」

龍騎とナイトが同時に王蛇に迫るが、相手は軽く鼻を鳴らすとベノサーベルを大きく振るって二体を同時に切り裂いた。

『ぐあああつ!』

その一撃をくらったライダー二人は、ノイズに包み込まれたかと思つと消え去ってしまった。

やはり作者が土用に強さを設定しただけあつて、かなりの戦闘力を有していたようだ。

「ハア…もつと面白い事はないのかあ……?」

「あ……あ……」

呆れたように溜め息を吐きながらこちらに歩み寄つて来る王蛇に、恐怖で声も出ずに足を震わせながら後退るが、そんな歩き方をすれば当然の様にバランスを崩して尻もちを突いてしまう。

それでもなお仮面の奥で涙目になりながらも必死で逃げようとするが、とうとう背中に壁がぶつかつてしまった。

「どつやらお前はここまで見たいなあ……」

王蛇はそう呟きながら得物を頭上まで持ち上げる。

止めを刺す気なのだろう。もう駄目だ…逃げられない…!!

「あばよ!」

王蛇の叫びと共にベノサーベルが振り下ろされようとしたが、そこで思わぬ展開が起きた。

「アタックライド…ブラスト!」

「あ…?ぐうあ!？」

突然の電子音声に王蛇がその音の発せられた方向を見ると、その方向から無数の弾幕が放たれて、その全てが王蛇の装甲に直撃して火花を撒き散らせながら吹き飛ばしてしまった。

「美莉ちゃん!大丈夫!？」

そして、その弾幕を放った人物と思われる声が自分の名を呼んだ。その方向にはマゼンタカラーの装甲に白いライン。7枚のライドプレートが縦に突き刺さり、その隙間から緑色の複眼を覗かせているライダー・ディケイドがライドブッカー・ガンモードを手に持って立っていた。

だがそのディケイドは女性的なフォームをしており、発せられた声も女性その物だ。

と言うよりも、ごく最近に聞いた事のある声…この声はまさか…

「もしかして、亜由美さん…?」

「ウンそうだよ!うわぁ…またちゃったよ仮面ライダーに…」

ハッキリと自分の正体を明かしたディケイドは、へっぴり腰になりながら両手で持ったライドブッカーをまじまじと見ている。それにしてもなぜ彼女がディケイドに……？

ちなみに「また」と言う意味が知りたい方は、「仮面ライダーディフェンド」世界の覚醒者」のディカエレラの話を読む事をお勧め致します。

「亜由美さん、何でディケイドになってるんです…？」

「近くに落ちてた。ウチの作者からの特別措置だつて。流石に美莉ちゃん一人だけで戦わせるわけにはいかないから、今回だけ使わせてくれるって作者が……」

何ともメタい理由を答えながら一枚の手紙を取り出すディケイド。そこには確かにそう言った内容の事が書かれていた。

「そんなのってあり？」

「コレがウチの後書きクオリティだから」

「アハハ」と苦笑交じりに答えるディケイドに、思わずこちらも釣られて笑ってしまう。

もう先程まで感じていた恐怖なんてどこにもない。今なら絶対に大丈夫だ。

ディカエルの心に、そんな感情が芽生えていた。

「やってくれたなあ……」

「ファイナルベント」

王蛇は起き上がるとドスの利かせた声色で必殺技のカードを装填し

「た、倒した…?」

「何だろっ…カードが落ちて来たよ?」

互いに変身を解除して落ちて来たカードを亜由美が拾い上げると、そのカードには王蛇のイラストが描かれていた。

「今のライダーさんって、カードだったんだ…」

「みたいだね…」

二人とも、お疲れ様でした。それでは二人を元の場所へ転送します

突如二人の頭の中にそんな声が聞こえて来ると、周囲の景色が先刻まで居た真っ白い空間へと変わった。

加奈「二人ともお帰り〜!」

士「美莉大丈夫だったか!」 美莉の肩をガツチリと掴む

美莉「にやっ!?!う、うん…大丈夫だよ…」 顔真っ赤

ヴァン「いきなりイチャついてんじゃねえよこのドスケベ野郎お」

士の尻にタイキツク

士「どうおっ!?!」

好太郎「ナイスキツクだ、ヴァン」 サムズアップ

ラル「さて、文字数が大分長くなってしまったので今回はここまで!」

歩「続きは来週の後編に続きます。それではみなさん、お楽しみに」

あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜

長い、長いよ……。

半分で1万字を軽々突破って長すぎるよ……C=) ;)

まあそれでもがんばりますけどね。ぶっちゃけ本編よりもこっちの出張版の方が筆の進みが早かったりしてるしf(^^;))

そして次回の後半戦では遂に夢の対決が…！

本編並みのクオリティで書いて行きますので乞うご期待！ (^ w

^) ノシ

あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜

何故戦闘描写でシリアス路線に入ったし自分 ……（、；）

しかも今まで描いた中で一番長いぞコレ…前後編合わせて約2万5千字とはこれ如何に（。；）

果たして今回のスゴロク大会の勝者は一体誰になるのか！？それではスタートオ！（・w・）

あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜

加奈「さあやって参りました」あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜」！」
皐月「ここから先は後半戦をやって行くぜ！」

ラル「それでは前回と同様に、面白いイベントの発生した所のみをダイジェストでお送りしていきます。後半戦スタートオ！！（・・・）

12ターン目・須藤歩

マス（オンドウル語で一発芸を一つやれ）

973

亜由美「ちょ、歩にそれは無理があるんじゃない……」
加奈「いや、分かんないわよ。前にゲッツやってたくらいなんだし」
聖麻「そっぴいちゃこっちの方でも戦隊の名乗りなんてやってたな」

歩「ウウ〜ン……オレアクサムラムツコロス！」 ムツコロフェイス

皐月・好太郎「やりやがったああああ！！」
士「こええよ歩さんその顔！」
美莉「び、ビックリした……」 ちよつと涙目

14ターン目・皆葉好太郎

マス（臯月からシャイニングウィザードを受けて来い）

好太郎「おい！何だこのお題は！？」

臯月「よっしゃああああ覚悟しろおおおお！！」

好太郎「まっ…グハアアア！！」

聖麻「生き生きしてんな」

15ターン目・来栖麗奈&向井聖麻

マス（指名した相手をダーツに当たった相手に戦わせる）

麗奈「変わったお題が出ましたね」

ラル「それではどちらか一人がこのルーレットを行ってください」

指パッチン

シュン…！！ルーレット出現

ヴァン「ルーレットが出て来たなあ」

亜由美「何が書いてあるの？」

ルーレット（1：仮面ライダーオーディン

2：シン・ダグバ・ゼバ

3：仮面ライダーコーカサス

4：仮面ライダーカブト

5：仮面ライダークウガ・アルティメットフォーム（ブラックアイ

）

加奈「どれもこれもチート!？」

好太郎「しかもどさくさに紛れて怪人混じってるぞ！」

聖麻「よしっ!じゃあ当然指定する相手は士だな」

ラル「ちなみに士君、君は真・最強フォームとネオコンプリートフォームを使うのは禁止ね」

士「ナズエ!？」

歩「そうしないと強さのバランスが崩れちゃうからね。ついでに僕も空間把握能力とか使えなくなってるし」

聖麻「歩さんにはコンプリートフォームがないから妥当だろ。そんなもってどうせ狙うんだつたら、やっぱダグバだな」

士「それはやめてくれ聖麻!せめて、せめてカブト辺りを……!!」

聖麻「そしたらお前『本物の天道総司だひゃっほおおおい!!』
つてなるだろ。だから却下だ」

ラル「ちなみにその天道総司さん、こちらの作品のオリジナルの方
なんでかなり強いですよ?少なくとも、そちらの渡君と同等くらい
の……」

士「どっちにしろもう詰んでるじゃないですか!!こっちは渡さんに
勝つのにネオコンプリートでないと全然歯が立たなかったんです
よ!?!」

ヴァン「ダーグーバ、ダーグーバ」

好太郎「ダーグーバ、ダーグーバ」

美莉「ダグバコールし始めたよあそこの二人!？」

麗奈「どこかの番組でパジエロを当てるゲームみたいになってます
ね……」

ラル「ハイ歩も一緒に!ダーグーバ、ダーグーバ!」

歩「ダーグーバ、ダーグーバ?」

亜由美「歩もつられてやらないの!」

聖麻「よっしゃあ行ってやるぜ！とうっ！」　　ダーツ投げた

皇月「さあ当たった場所はあゝ……ダグバだああ！！」

好太郎・ヴァン「よっしゃ！」　　ガッツポーズ

士「イヤだああああああああああ！！」

ラル「いや土君、そこで言うセリフはそうじゃないでしょ？」

士「不幸だああああああああああ！！」

ラル「そうそうそれそれ！」

加奈「声ネタやらせんな！」　　脳天チヨップ

ラル「ギャバンツ！？」

ヴァン（そっぴや士のイメージボイスって、阿部敦なんだっけ？）

歩「それじゃあ土君、頑張って来てね」　　指パッチン

士「ええちよ！心の準備が………」　　転送された

美莉「歩さんも使えたのそれ！？」

歩「コレが後書きクオリティだよ」

ラル「早速土君の戦闘を観て行きましょう！それではスタートオ！

！（・・・）」

士が転送されたのは、クウガ最終回でクウガとダグバが戦ったあの雪山であった。

周囲一帯が吹雪によって銀色に彩られており、その気温も非常に低く士の体温を容赦なく奪っていく。

「うおおおお寒い！！マジでやるのかよ!？」

「ねえ君、そこで何してるの?」

「ッ!？」

両腕で身体を擦りながら必死の体温を保とうと奮起していると、純粹な声色の少年の声が聞こえて来た。

士がその声のした方向を振り返ると、真っ白い服を身に付けた少年が立っていた。

ココが雪山でなければ何の変哲もない何処にでもいそうな少年だが、彼から発せられる雰囲気は非常に禍々しい物だった。子供の様に純粹で、それでいて危険な力を感じられる。

そして士は彼の正体を知っている。彼こそがクウガの世界の怪人・グロンギを統べる長…ン・ダグバ・ゼバだ。

「で、出やがったなダグバ!」

「ん?ひよつとして、君が僕と一緒に遊んでくれるリントなの?」

士はダグバの質問に答えずに、ディケイドライバーに酷似した変身ツール・ディフェルドライバーを取り出して腰に装着して翼の装飾の付いたサイドバックルを開き、一枚のカードを取り出して構えた。

「お前を倒して、絶対に帰ってやるからな!変身!」

「カメンライド…ディフェル!」

ディフェルドライバーから電子音声が響くと、ディケイドを除いた平成ライダー11人のシルエットをした灰色のビジョンが出現して

士に次々と重なって行く。

すべてのビジョンが重なり終わると同時に、頭部に五枚の鋭利状のライドプレートが縦に刺さり、その灰色に濁った身体を一瞬にして黄色に染め上げる。

やがて青い複眼が光って全ての変化が完了した事を告げると、そこには一人のライダーが立っていた。

紺色のスーツの上に黄色い装甲を身に纏い、頭部の側面と両肩に翼の装飾が施された覚醒者の異名を持つDシリーズの一人、“ファンクションオーバーアップシステム”・仮面ライダーディフェルが降臨した。

「へえ、クウガみたいな力を持つてるね君。その力で、僕と一緒に遊んでよ」

ダグバは玩具を目の前にした子供の様な瞳でそう言うと、その姿を異形の物へと変貌させた。

頭部には金色の四本角を付けており、白い筋骨隆々の肉体に豪華な金色の肩当てや腰巻を身に付けたダグバの本来の姿だ。

ダグバはスツとディフェルに向かって右手を翳すと、突如ディフェルの装甲から炎が噴き出して来た。

「うおっ！？アチチチチ！！で、でもそんな攻撃効かねえ！！」

突然の出来事にディフェルは一瞬だけ狼狽するが、Dシリーズに使われているディバインスーツと言う装甲の下に身につけられているスーツは、例えば絶対零度だろうが超高温の6000のマグマだろうが耐え切れるほどの耐久性を有している。

この程度で致命傷になる筈もなく、ディフェルはすぐに手を振り払って身体から嘔き出る炎を掻き消すと、ダグバに向かって駆け出した。

「はあっ！はああああ！！」

ディフェルは渾身の力を込めてダグバにパンチを決め、更に追撃として上段蹴りを側頭部へと決めた。だが……

「……ふうん、良い線行ってるけどまだまだだよ」

「な……ッ！？ぐあああああ！！」

ダグバは大して気にした様子もなくそう呟くと、ディフェルにお返しとばかりに右ストレートを喰らわせて、いとも容易く5メートルほど吹き飛ばされてしまった。

（クソッ！やっぱり力押しじゃあ負けちまうか！）

ディフェルにはこの圧倒的な力量差の正体がすぐに分かった。身体能力のスペックが違い過ぎるのだ。

ディフェルのパンチ力やキック力が精々10t程度なのに対し、ダグバはそれを遥かに凌駕する100t近い身体能力を有しているのだ。これでは肉弾戦で負けてしまっても当然だ。

「相手がダグバだったら、やっぱりコレだろ！」

そう言ってディフェルはカードホルダーからカードを取り出すとドライバーにセットしてそのカードの力を読み込ませた。

「ファイナルカメンライド…クウガ！」

ディフェルの身体が黒く染まり始め、やがてその姿をダグバと対を成す存在・仮面ライダークウガ・アルティメットフォームへと変えた。

「へえ、君ってクウガにもなれるんだ……。だったら見せてよ、その力を」

「ああ、見せてやるよ！！」

クウガ・アルティメットフォームへと姿を変えたディフェルは、再びダグバに接近して猛攻を仕掛ける。

今度の攻撃はさすがに先刻のものと桁違いのためか、ディフェルの攻撃を喰らう度に小さく呻き声を漏らしながら仰け反っている。だが当然ダグバもそのままやらつればなしなわけがなく、ディフェルへ次々と殴る蹴るの攻撃を加えてそのまま果てしない殴り合いへと展開されていく。

「おらあっ！らああああ！！ゴハッ！」

「ははは！あっはははははははは！！グフッ！」

両者一步も譲らずに攻めぎ合うがディフェルの頭の中に、昔テレビで見たクウガのあの最後の戦いが浮かんだ。

それは一切綺麗なものではないただの殺し合い。今自分はそれを再現してしまっている事に気付いたのだ。

しかしそれが決定的な隙となってしまう、攻撃の手が鈍ったディフェルの腹にダグバの拳が直撃してしまった。

「カ…カハツ……!!」

「どうしたの？もつと僕と遊んでよ」

あまりの激痛に蹲ると、クウガ・アルティメットフォームへの変身が解けてしまい元の素体であるディフェルの姿に戻ってしまった。ダグバはその見た目と不釣り合いに可愛らしく首を傾げながらディフェルを見下ろして来た。

(ダメだ…！五代さんと同じ事をしちゃダメだ！！)

「ねえ、何か言っつてよ」

「ゲハアツ!!」

ダグバは何も答ええないディフェルにもう一度訪ねながら両肩を掴んで立ち上がらせると、今度は鳩尾に膝蹴りをかましてその後にごみの様に放り投げられた。

だが雪に埋もれながらもディフェルは自分が尊敬する人物の一人・仮面ライダークウガこと五代雄介の事を思い浮かべた。

彼はこんな事が二度と起きない様に苦痛に耐えて戦っていたんだ。ここで彼と同じ事をすれば、それは五代雄介の意思を踏み躪る事になる。そんな事には絶対にさせない！

「これは、遊びなんかじゃねえ……」

「え？どうしてそう言い切れるの？これってゲームなんでしょ？」

「違う！」

確かにダグバの言う通り、これは単なるコラボ企画だ。だが今やっている事はゲームなんかじゃ決してない。

「お前がやっつてる事はただの自己満足の暴力だ！そんなのがゲームなんて、俺は絶対に認めねえ！！」

ディフェルは立ち上がりながら更に続ける。

「お前みたいなのがいたら、五代さんはあそこまで苦しんで、誰かの笑顔を守る為に自分を傷付け続けたんだ！

そんな世界は、俺が破壊して新しい世界に覚醒めざまさせてやる！誰もが笑って、平和に過ごせる世界になー！！」

「ファイナルアタックライド…ディディディフェル！」

「ファイナルアタック」のカードを発動させるとディフェルとダグバの間に十二枚の白いビジョンが展開される。

「はあっ…！！」

続いて大きく跳躍するとビジョンもその動きに合わせて二人の間に位置するように移動し常に標準をロックオンする。

「これで…終わりだあああああああ！！！！」

空中で蹴りの態勢に入ると、ディフェルの身体がビジョンに吸い込まれるように高速で移動して次々とビジョンを通過していく。通過する度に突き出した右足に白いシックスエレメントが集約していき、威力を高めながらダグバへと迫る。

ディフェルの必殺技・「ディメンションヘヴンキック」である。

「はははっ！面白いよ君！あはははははははははは！！！！」

ダグバは狂気に満ちた歓喜の笑い声を上げながら迫り来るディフェルの攻撃を受け止めようと構える。やがて両者が激突して激しい爆発が起き、周囲一帯が爆煙と雪煙に包まれた。

「ハア…ハア……や、やったのか…？」

煙が晴れるとそこには、雪が一切積もっていないマンホールほどの大きさのクレーターの爆心地に膝を突いて倒れたディフェルと、ダグバのイラストが描かれたカードが一枚だけ落ちていたのであった。

「美莉から話は聞いてたけど、本当にカードだったんだ…。」

士君お疲れ様です。それでは早速元の場所へ転送します

カードを拾い上げながら一人ごちていると頭の中にそんな声が聞こえ、ディフェルは一瞬の内に雪山から姿を消した。

歩「お帰り士君」

麗奈「ご無事で何よりです」

美莉「士君大丈夫だった!？」

士「お、おう。大丈夫だけど…ってアレ!？身体が全然痛くねえ!？」

ラル「まあこのあとがきラジオはご都合主義でやっていますからね。また戦闘になった時でもベストな状態で戦えるようにするための措

置ですよ」

美莉「そういえば私の時は怖かっただけで、攻撃は当たってなかったからなあ……………」

皐月「それじゃあ気を取り直してスゴロクを続けて行くぜ！」

17ターン目・須藤亜由美&日比野美莉

マス（誰か一人を指名して良い所を一つ言え。ただしペアの場合はお互いに良い所を言う）

亜由美「何だかすつごく普通のお題だね……………」

美莉「今までが今まででしたからね……………」

亜由美「それじゃあまずは私から…………あの時抱きついた時に気付いたんだけど、美莉ちゃんって胸大きいね」

士「だ、抱きあ…………グフツ…………！想像しただけで鼻血が…………！」

皐月・好太郎・ヴァン「このド変態が」

士「そこまで言わなくてもいいだろ…………！」

聖麻「いや間違っつてねえだろ」

士「orz」

亜由美「ねえ、なんか士君倒れてんだけど……………」

美莉「まあ何時もの事です。それじゃあ今度は私から…………ええ〜とお……………」

亜由美（ワクワク）。（） 期待に満ちた目で見る

美莉「…………すつごく可愛いですよね……………」

亜由美「いやそれ美利ちゃんにも言える事なんですけど…………？」

美莉「え、じゃあ……すっごくお母さんですよね！」

亜由美「誰がお母さんですか!？」

加奈「ああ、もうキリがないからこの辺でいいんじゃないの？」

皐月「そうだな。時間も押してるわけだし」

ラル「それでは次の面白イベントが発生するまでカット！」

20ターン目・皆葉好太郎

マス（これから行く先の二体の敵を時間内に倒せ。ただし倒せなかった場合は二回休み）

好太郎「意外と楽しそうなのが出て来たな」

麗奈「敵って一体何ですか？」

ラル「それは行って見れば分かりますよ。今回のバトルは皆さんでVTRで観てみましょう。それでは好太郎君、行ってらっしゃい」

指パッチン

「……………ん？何だここは？」

好太郎は気が付くとどこかのカラオケボックスの中でソファに座っていた。

ここで何をすればいいのか分からないが、少なくともここに現れる敵を倒せばいいだけの話だろう。

今の内にディジェクトドライバーを装着しようとする、部屋の扉がガチャリと開いて遂にその敵が姿を現した。だがその敵は……

「ああ〜！ホントにイケメンがいる〜！」

「カツコいい〜！」

「……………」

今時な格好をした20歳前後の女性二人組だった。

予想外の登場に好太郎は目をまん丸くして呆気に取られていると、カラオケボックスに配置されていたテレビ画面にある文字が表示された。

「……………って何でそんな展開になる!？」

それを読んだ瞬間、好太郎は叫んだ。

そこには「好太郎君の相手はそのギャル二人です。20分以内に上手く口説き落としてください」と書かれていた。

人付き合いの殆どない好太郎には無理なものと言っても当然だろう。

「何そんなに怒ってんのぉ〜？一緒に飲もうよぉ〜？」

「いや、俺は、その……………」

「アハハツ！照れちゃってカワイイ〜！」

完全に弄ばれている好太郎。

結局好太郎はそのまま何も出来ずに時間を無駄に浪費して行き、一切口説けずに終わってしまったのであった。

聖麻「ク…クククク…!!」 必死に笑いを堪えてる
好太郎「笑うなよ！あんまり人と話す機会がなかったんだからしよ
うがないだろ！」

亜由美「アレ？じゃあ何で私達とは普通に話せてるんですか？」

好太郎「……お前等はあるところまで色っぽくないからな」

皐月「どう言う意味だコラアアア！」 上段蹴り

好太郎「そう言う意味だ！毎回毎回蹴り入れるのやめろ！」 受け
止めて防いだ

ヴァン「おお、遂に防いだなあ〜」

加奈「まああんだけ喰らってればね」

亜由美「この二人って、何時になったら仲良くなるんだろう」

聖麻「アレがああの二人なりのやり取り何じゃね？」

25ターン目・ヴァン・アキサメ

マス（5ターン先まで関西弁で話せ）

ヴァン「……いや、何でやねえん」

美莉「何だろう…違和感ない」

ラル「はいOKです。それではジャンジャカ行きますよ」

28ターン目・来栖麗奈&向井聖麻

マス（5ターン先まで語尾に「ニヤ」を付けて話せ）

麗奈・聖麻「えっ!?!」

士「よっしゃああああ!聖麻ザマアアア!」

歩（相当怨んでるね、あの時の事……）

聖麻「ク、クソ……まさかこんな事になるとは……ニヤ……」

加奈・美利「プツ!」

聖麻「おいお前ら!こっちだってやりたくてやってるわけじゃねえ
っ……ニヤ……!」

士「だははははははははは!は、腹いてえ……!」

ヴァン「お前笑い過ぎやでえ」

好太郎「ヴァン、お前関西弁が板に付いて来てるぞ」

亜由美（あつ!ひよっとして28ターン目で「ニヤ」って、もしかして2（に）8（や）で「ニヤ」って事!？）

ラル「折角なので、麗奈さんも何か一言お願いします」

麗奈「えっ!?!そ、その……は、恥ずかしいニヤ……」 モジモジしながら顔真っ赤

士「ブフォアツ!!」 鼻血噴いて卒倒

臯月「うわっ!士が倒れた!」

加奈「何アレすつくごく可愛いんだけど……」

美莉（何故だろう……猫耳が付いているように見えるのは気のせい……?）

ラル「予想外に萌えますねコレは……」

そして遂に31ターン目・天醒士のターンで遂にラストターンとな

るのであった。

士「ゴール一步手前かよ…一体何が書いてあるんだ？」

マス（今自分に一番近い相手と戦って、勝った人はゴールする）

士「え？俺に一番近い人って確か……」

歩「どうやら、僕と戦う事になったみたいだね」 士の2マス手前の位置

士「あ、歩さん!？」

皇月「おおっと、遂に今回のコラボ企画の目玉となるイベントが出て来たぜ！」

加奈「ディージェントVSディフェル！果たして軍配はどちらに上がるのでしょうか!？」

歩「君とは一度、前から戦っておきたいと思ってたんだよ」

士「歩さん…はい！俺もアンタとは勝負してみたかったんだ！絶対に負けねえぜ!！」

歩「……………」

亜由美（アレ？何だろう、この違和感……）

聖麻「なあ、一ついいか？」

亜由美「ん？なに？」

聖麻「歩さんってよ、あんまり戦うの好きじゃないよな？だったら何であんな事言ったんだ？」

亜由美「……………あ！」

ラル「さて、それでは二人を決戦場まで転送させます。それでは行

「つてらっしやい」 指パッチン

歩と土は、気が付くと辺り一面何も無い採掘場のど真ん中に居た。切り立った崖を背景に互いに向き合う歩と土はどちらともなくドライバーとカードを取り出し、それぞれ構える。

「君がどれほどの覚悟を持って戦いに身を投じたのか…見せてもらうよ」

「勝たせてもらっせ歩さん！」

『変身（！）』

「カメンライド…ディージェント！」

「カメンライド…ディフェル！」

短いやり取りの後、両者が変身を果たすと同時に駆け出し殴り合う。ディージェントが蹴りを入れようとすれば、ディフェルはその足を掴んで受け止めてカウンターのパンチを仕掛けようとしてくるが、ディージェントは軽く跳び上がったからのドロップキックを与えて反撃を阻止する。

「クソッ！だつたら……」

「カメンライド…ヒビキ！」

ディフェルが「カメンライド・響鬼」のカードを発動させると、その黄色い装甲から炎が噴き出し、その姿を炎に包まれながら徐々に

変えて行く。

「ハアア…タアアアア！！」

やがて身体に纏わり付く炎を手で払い飛ばす様に振ると、その姿を紫色に染め上げた鬼と呼ばれる仮面ライダー・響鬼へとカメンライドを果たした。

響鬼は歴代平成ライダーの中でもトップクラスの身体能力を持ち合わせたライダーだ。

その力は、身体能力だけならディージェントを上回るほどだ。

「更にこれだ！」

「アタックライド…オンゲキボウ・レツカ！」

続いて響鬼の専用装備である撥型はちの武器・烈火をアタックライドの効果で生成して構えると、一気にディージェントとの距離を縮めて太鼓を叩くかのように両手に持った撥を振るった。

この距離なら避けられまい。そう思っていたがディージェントは即座に身体を仰け反らせて避けると、そのまま流れる様な動作でしゃがんでディフェルに足払いを仕掛けて横転させた。

「うわたっ！な、なんで避けれるんだ！？確か空間把握能力は使えないって……」

「確かに、パワーとスピードならディージェントの性能より勝ってるけど、攻撃が単調過ぎる。そんな攻撃なら、空間把握能力を使わなくても簡単に避けれる」

「アタックライド…ブラスト！」

デイーゼントはそう淡々と答えながら「ブラスト」のカードを装填すると、未だに態勢を立て直している最中のディフェルに右手を翳した。

「いつ!? マズッ…!!」

そしてそれが何を意味する事かを理解しているディフェルは、急いでその場から離れるとデイーゼントの翳した手からエネルギー弾が高速で連続射出されてディフェルのいた場所を穿った。

「……………」

「うおおおおっ!! また来たあああああっ!!? でもそんな攻撃…!!」

デイーゼントは無言でエネルギー弾を撃ち出し続ける翳した手を、再びディフェルへ向けて追撃を始めるが、ディフェルは手に持った烈火で弾幕を弾き飛ばしながら距離を詰める。

「おらおらああああああああ!!」

「甘いよ」

怒号を上げながら迫るディフェルにデイーゼントがそう呟くと、今度はもう片方の手を翳して今までよりも一回り大きいエネルギー弾を射出してきた。

そのエネルギー弾がディフェルの振るう烈火に当たると、その瞬間大きく爆ぜた。

「ぐああああああああっ!!」

爆風に煽られて吹き飛ばされると同時に響鬼へのカメンライドも強制解除され、烈火もノイズに包まれて消えてしまった。

「イテテ…だったら、このスピードならどうだ…！」

「ファイナルカメンライド…カブト！」

デIFUELは受け身を取って立ち上がると、今度は銀と赤で彩られたカブトムシを模したメタリックボディのライダー…カブト・ハイパーフォームへとカメンライドし、更にカブトの専用カードをドライバーへ装填した。

「アタックライド…ハイパークロックアップ！」

「そのカードは使わせないよ」

「アタックライド…キャンセル！」

しかしディージェントはそのカードを使わせまいと「キャンセル」のカードを発動させ、「ハイパー・クロックアップ」の効果を無効化してしまった為に、デIFUELはカブトの固有能力である超高速移動を封じられてしまった。

「ちょ！そのカードは反則でしょ…！」

「今回のルールでは、一回のみの使用なら許されてる。最低でも『ハイパークロックアップ』は封じておきたかったからね」

「アタックライド…ダッシュー！」

「そして、カブト・ハイパーフォームはクロックアップさえなければ、スペックはディージェントと大差はない」

「は、はやっ…！がはあああああああっ…！！」

「ダツシュ」の効果によって高速移動能力を発揮したディージェントは、次々とディフェルへ猛攻を仕掛けながら空中へと弾き飛ばす。空中に於いても次々とラツシュでダメージを与えて行き、やがて攻撃が止むとディフェルはドシヤリと地面に倒れ伏し、カブト・ハイパーフォームへの変身も解けてしまった。

「ク、クツソ…！メチャクチャつええ…！！」

ディフェルは頭を持ち上げながらグローブを嵌め直している仕草をしているディージェントの背中を見た。

ディフェル…士はつい最近ライダーになってまだ経験が浅いのに対し、ディージェントは二年間もの間、独りで戦い続けて来たライダーだ。

いくら士が多少ケンカに強かったとしても、この経験の差はそう簡単に埋められる物ではない。

「……君は、一体どんな覚悟でライダーになっただんだい？」

「え…？」

ディージェントに徐おもむに話し掛けられて疑問の声を漏らすか、ディージェントは気にも止めずに更に続ける。

「僕は自分の存在意義が欲しくてライダーになった。その為に何度も辛い思いをしてきたし、これからもし続ける。君にそれだけの覚悟があるのかい？」

「当たり前だ！俺はこれからも皆を守って、世界を救うために戦う！その為なら、どんな試練にだって打ち勝って……」

「違う…それだと覚悟とは言えない」

「ッ！？」

ディージェントの辛辣しんぱつな言葉に、ディフェルは仮面の奥で目に怒気を孕ませながら自分の覚悟を叫ぶが、ディージェントはそれを静かに否定した。

「君はただ、紅渡にそう告げられたからだ。それは覚悟とは言わない。ただの使命だ」

「グッ……！」

ハッキリと切り捨てられ、ディフェルは何も言えなくなってしまった。それはそうだ。自分はただ渡の言われた通りに、使命を面白半分で遂行していたに過ぎないのだ。

「今回君と戦いたかったのは、君が一体どんな覚悟で仮面ライダーになったのか知れたかったからだ。決して遊びたくて戦おうと思っていたわけじゃない」

（何だよ、これ……これじゃあ俺がまるでただの子供みてえじゃねえかよ！！）

ディフェルは拳を地面に押し付けながら強く握りしめた。

甘かったのだ。これまで確かに世界を救うために世界を渡って来た。しかしどこかで、それを楽しんでいる自分がいた。

この目の前のライダーはただただ使命として、そして自分の居場所を見つけ出すために戦い、傷付き、そして自分の力に苦悩した。

自分にその覚悟があるのだろうか？どんなに傷ついても何かを守る為に戦い続ける、覚悟が……。

そんな苦悶に悩まされていると、脳裏に美莉や聖麻。そしてこれまでに会った人達の顔が過ぎった。

そうだ。俺は皆を守りたい。そして、みんながハッピーエンドを迎えられる世界へと覚醒めざまめさせたい！

「（そんなの、初めっから決まっただんじゃねえかよ！）ハ…ハハハハ…」

「ん？」

突然小さく笑い声を零し始めたディフェルにディージェントは疑問に思いながら小首を傾げた。

そうしているときやがてディフェルはゆっくりと立ち上がりながら自分の覚悟を口にした。

「そうだよな…やっぱ難しく考えるなんて、俺らしくねえよな……。そうだ。俺はこれから世界を救って、覚醒めざまめさせる為に戦う。

でもそれは誰かに言われたからとかじゃねえ！俺がそうしたいから戦うんだ！！

まだ俺の…いや、俺達の旅は始まったばかりなんだ！こんな所で、グズグズしてる暇なんてねえんだよ！！

アンタが一体、どんな道を歩んできたかなんて、全部は知らねえ。

けど俺は、そんなアンタでも救ってやるよ！この世界の覚醒者・仮面ライダーディフェルがな！！」

その答えを聞いたディージェントは、仮面の奥で呆気に取られた様な表情をするが、すぐに微笑みの表情へと変わった。

まさか自分を救うとまで豪語するとは思わなかったが、これはこれで良い傾向だ。

歩は今回の企画を通して、士が本当の仮面ライダーとしての資質を
持っているのか確かめておきたかったのだ。
最初はどうかと思っていたが、アレくらいの事を豪語出来るんだっ
たらもう心配する必要もないだろう。

「……そうか。だったら、それを証明してみて。君がこれから何
かを守り、戦い続ける事が出来る証明を」

「ああ！ やってやる！！」

そう言うとデイージェントは「ファイナルアタック」のカードをデ
イフェルに見える様に構えた。

これで終わらせることを理解したデイフェルも同じく「ファイナル
アタック」のカードを構えてほぼ同時にドライバーへと装填した。

「ファイナルアタックライド…！ デイ！ デイ！ デイ！ デイ！ デイ！ デイ！」

「ファイナルアタックライド…！ デイ！ デイ！ デイ！ デイ！ フェル！」

デイージェントの目の前にビジョンが展開され、それに右手で触れ
るとビジョンがその部位に吸収される様に消え去り、右手が藍色に
強く輝きが宿る。

更にデイフェルとデイージェントの間に立ちはだかる様に白いビジ
ョンが十二枚展開され、これで互いに必殺技を放つ準備が整った。

「それじゃあ止めの一発、行くよ？」

「ああ！ これで最後の一撃だ！！」

そう大声で返しながら、デイフェルは右腰に備え付けられた銀色の
ライドブッカー…通称ライドブッカーへヴンを取り出し、刀身を展
開させてソードモードへ変形させる。

その刀身はデイケイドが従来使っている物よりも若干長くなっており、その剣をゆっくりと前へと構えたかと思うと、一気に振り抜いた。

「だあああああああああああああ！！」

振り抜かれた瞬間、ディフェルの必殺技・「ディメンションヘヴンスラッシュ」が炸裂し、黄色いシックスエレメントの斬撃が放たれてビジョンを通過していく毎に威力を上げながらディージェントへと迫って行く。

「フウウウ…ハア！」

対するディージェントも手刀の形に構えた右手を思いっきり振り抜くと、そこから藍色の斬撃が飛び出してディフェルが展開したビジョンを逆手に取ったかのように吸収しながら突き進む。

やがて両者の斬撃が激突した瞬間に巨大な爆発を起こし、周囲一帯を膨大な光が包み込んだ。

「……………ここまでみたいだね」

「そうですね。これでようやく……………」

互いの必殺技によって生じた土煙の中、ディージェントとディフェルの声が、この戦いが終わった事を明確にさせた会話をする。

そしてディフェルが続けて紡いだ言葉によって、この戦いの勝者が告げられる。
その勝者は……

「俺の勝ちです」

ディフェルがディージェントの喉元にライドブッカーヘヴンの切っ先を突き付けられていた。
ディージェントがカードをドライバーに装填しようと構えてはいるものの、カードの効果を発動させられるよりも先に、ディフェルの剣がディージェントの首を貫くだろう。

「……フウ、どうやら君には、これからも戦い続ける覚悟があるみたいだね」

「はい。でも俺は、これでアンタに勝ったとは思ってませんよ」

ディージェントが小さく息を吐きながら変身を解除して歩へと戻ると、ディフェルも同じく変身を解除しながらまだ決着が着いていない事を告げた。

「アンタ、初めから手加減して戦ってただろ？」

そう言われて歩は虚ろな瞳を一瞬だけ大きく見開くが、すぐに元に戻ってその理由を尋ねた。

「……どうしてそう思うんだい？」

「アンタが『ブラスト』で俺を吹き飛ばした時、そのまま追撃してこなかっただろ？本気でやってたなら更に攻撃してきた筈だ。『ダッシュ』を使ってた時だってそうだ。俺が倒れてる内に止めを刺せばよかったのに、アンタはそれをしなかったからな」

理由を聞いた歩は「フツ」と軽く笑むと、頭をポリポリ掻きながら観念したように苦笑の笑みを浮かべて肯定の意を唱えた。

「確かに、僕は手加減して戦ってたよ。やっぱり僕も、まだまだ甘いね」

「それだったら俺の方がまだまだですよ。まともに一発も攻撃できなかつたし」

二人ともお疲れ様です。この勝負によって土君の勝利です！

二人が謙遜し合っていると頭の中にそんな声が聞こえて来て、やがて二人はその場を後にするように消えた。

ラル「優勝は、天醒土君に決定です！」

パチパチパチパチパチ！！ 全員で拍手

麗奈「優勝おめでとうございます！」

美莉「いいなあ〜土君」

皐月「まさかの逆転勝利だったな」

ヴァン「それで作者あゝ、優勝賞品つて何だあゝ？」

ラル「ハイ！それでは優勝賞品は歩に渡して頂きましょう！」

歩「優勝おめでとう。土君」

士「ありがとうございました歩さん！俺、これからもがんばりますからー！」

歩「ウン。それじゃあ君にはこれをあげるよ」二枚のカードを差し出した

士「ん？カード？…つてこれはデイーゼントとダグバのカードじゃないですかあああああああー！！？」

加奈「何故にダグバ！？」

歩「土君が倒した敵がダグバだったからね。それはおまけみたいな物だけど、デイーゼントのカードは真正正銘の優勝賞品だよ」

ラル「ちなみに亜由美ちゃんと美莉ちゃんが優勝してた時は、鴻上会長作のケーキと王蛇のカードをプレゼントする予定でした」

亜由美・美莉「ケーキは嬉しいけど王蛇のカードはいりません！！」

聖麻「ところで、俺と麗奈さんが勝つてたら何が貰えてんだ？」

臯月「その場合は作者の嗜好品・『オリジナリ茶^{ティー}』をあげるつもりだったんだと」

士・美利・聖麻「何その如何わしい飲み物！？」

ラル「私が小説を書くときに何時も飲んでる紅茶です。コレを飲むと、オリジナリテイ溢れる小説が書けるようになりますよ」

勿論ネタですのであしからず

士「でも、ホントにこのカード貰っちゃっていいんですか？ウチのバカ作者にはうまく使えこなせないんじゃないや……」

麗奈「自分の所の作者にそこまで言いますか……」

歩「まあ、デイーゼントのカードをどう使うかは君次第だよ。別

に使わずにそのまま持つてても構わないし、好きなだけ使つてもいいからね。これからも、君だけの物語を歩んで行つてね」

士「歩さん…本当に、本当にありがとうございましてあああああ
！！」 号泣しながら一礼

聖麻「そんなに泣くなよみつともねえ」

士「ウルセエ！泣いてなんかねえよ！！」

加奈「さて、これにてスゴロク大会はお開き！」

皐月「来週の更新も楽しみにしてくれよな〜！」

麗奈「そして、今回ゲストとして来て下さいました、竜王の白翼先生の『仮面ライダーディフェル』世界の覚醒者〜もよろしくお願
いします」

歩「それでは皆さん……」

全員「また次回、お会いしましょう！」

あとがきラジオ出張版〜3万PV突破記念・代行者と覚醒者のスゴロク大会〜

竜王さん、今回のコラボ企画にご協力頂き、誠にありがとうございました
ましたm(´`)(´`)

土君をフルボッコにしまい、とてつもなく失礼を致しました
(´・`・`・`)(´・`・`・`)

でもこれからも土君や美利ちゃん、聖麻君にはどんな困難も乗り越えてもらいたかった次第でして、この様な戦闘にさせて頂きました。
今回のこちらの歩との戦いを糧にして頑張ってもらいたいです。

これからも応援、よろしくお願いします!!(´^`^)(´^`^)

第四十三話：Uの正体／一つの身体に、二つの人格（前書き）

いやあくまさが彼がここまで目立つキャラになるとは思わなかった
ですねぇ。

ホント、何が起こるか分からない物ですね。私の頭の中（。A。（

その彼と言うのは今回のサブタイを見て分かる通り彼ですよ彼
（^）

それから最後の方で、非常に読み辛いかもしれない描写が出てきま
すのでご注意ください！

それでは早速本編スタートオ！！（。w。（

第四十三話：Uの正体／一つの身体に、二つの人格

時間をほんの少し遡り、ヴァンがエターナルを倒す少し前の時間帯

……

風都タワー大展望台広場では、「ダツシュ」を発動させて高速移動を可能としたディージェントと、それを上回る速度で連撃を放つナスカドーパントの超スピードでの戦闘が繰り広げられていた。

完全に蚊帳の外に放り出されたアノマロカリスドーパントは、最早ここに居ても何の役にも立たないので既にナスカドーパントの指示で撤退している。

「アハハハハ！私のスピードにここまで付いてこれるとは感服いたしますよ！異世界の仮面ライダー殿！」

（おかしい…いくらなんでも速過ぎる）

しかし今問題なのは、このナスカドーパントの異常なまでのスピードだ。

明らかにこのスピードはクロックアップと同等かそれ以上のスピードを誇っているのだ。

この程度なら本来だったら「ダツシュ」の効果と、前の世界で強化された空間把握能力で何とか凌げるのだが、神童がガイアメモリ、もしくは井上運河本人にジャミングを施している為に空間把握能力が意味を成さないのだ。

このありえない超スピードは、神童がまたジャミング以外に何らかの細工を施した可能性もあるにはあるが、それだけではない気がする。

『ほらほら！足元がお留守ですよ！』

「又ツ！？クア…………ツ！」

戦闘中に余計な事を考えていた為にナスカドーパントの不意打ちの足払いに対処する事が出来ずに転倒してしまい、ナスカブレードによる一閃を喰らってしまう。

『ほおら、まだまだ行きますよ！！』

「ツ！？チイツ！」

ナスカドーパントの次の攻撃が来る前に横に転がってかわすと、そのまま受け身を取って立ち上がった軽く舌打ちをした。

『ほお、そう避けますか…………。随分と戦い慣れていますね』

(まずはあの超スピードを何とかする必要があるね…………)

ナスカドーパントの感心の眩きを余所に、デージエントはこの場をどう切り抜けるか思考を巡らせた。

「キャンセル」の効果であれば、あの超スピードを封殺出来るかも思ったが、アレはあくまで“何らかのツールによって発動させた能力”限定だ。

確かにあれはガイアメモリと言うツールで得た能力ではあるが、それでは能力の範囲が広すぎて無効化は不可能だ。

ならば他のカードでは…………そう思って今所持しているカードの中で今の状況に適した能力を付与する物はないかクラインの壺の中を探っていると、あるカードを見つけた。

(このカードは…………)

『呆けてる暇なんてあるですかぁ！？』

「ッ！？ガハアッ！！」

再び超スピードで距離を詰めて来たナスカドーパントの一閃を何とか防御しようとするも、ディージェントに当たる寸前で動きを止めて弧を描きながらのフェイント攻撃を仕掛けられて吹き飛ばされてしまふ。

「又ッ…クウ……………！！」

しかしすぐに受け身を取ってバツクルの持ち手部分を引くとカードを一枚取り出し、バツクルの挿入口に装填した。

「アタックライド…スタン！」

カードの効果を発動させて立ち上がって相手を見ると、ナスカドーパントがまたもこちらに剣を振り被って来ていた。

『貰いましたよ！』

「……………フンッ！」

だがディージェントは攻撃を喰らう覚悟でナスカドーパントに右カウインターを相手の左頬に放ち、互いに大きく吹き飛ばされた。

『何っ……がほっ！？』

「クッ……！！」

しかしすぐさま両者ともに受け身を取って態勢を立て直すと互いに相手を見据えた。

『やりますね……………。ですがまだこれから……ウツ！？』

殴られた左頬を拭いながらも一度超スピードで猛攻しようとした時、ナスカドーパントの身体に異変が起きた。

身体が上手く動かないのだ。頬を拭う為に挙げた左腕も、ただ痙攣を起こしているかのように震えるだけで固まったままだ。

その原因は先程ディージェントが使ったカードによる効果だと理解するのにさほど時間は掛からなかった。

『貴方：私に一体何を…！？』

「一時的に身体を麻痺させてもらいました。今の内に決めさせてもらいますよ」

先程ディージェントが使ったカード・「スタン」は、攻撃を加えた対象を6秒間だけ行動不能状態にさせる能力を持ったカードだ。

但し対象となるものは一つだけであり、効果が表れるのにも若干のタイムラグがあるのが欠点だ。

しかし6秒もあれば止めを刺すには十分だ。

「ツールライド…アンチ・キル！」

「アタックライド…チャージ！」

ディージェントは即座に「アンチ・キル」と「チャージ」のカードを発動させると、その右足にエネルギーを集約させながらナスカドーパントに駆け出し、飛び蹴りを放った。

「ハアッ！」

『くっ…ぬおおおおお…！』

ディージェントの飛び蹴りが直撃し、ナスカドーパントは爆せてその場から消えた。

そしてその場に残ったのは“N”と描かれた金色のガイアメモリだけだった。

アノマロカリスドーパントはナスカドーパントの指示で一旦撤退して風都タワーの外に出ていた。

『な、何だよアレ、はええよ……次元が違いすぎるっつうの。どこのドラオンボールだよまったく……』

完全に逃げ切った所でそう愚痴を零した。

ナスカドーパントならともかく、あの藍色の仮面ライダーまであそこまで素早く動けるとはまさか思わなかった。

しかし、気になる事もあった。それは……

『にしても井上さんってあんなに速かったっけか？全然動き見れねえじゃねえかよ……』

ナスカドーパントの動きが以前見ていた時よりも速くなっているのだ。

確かにナスカメモリにはシンクロすることにパワーアップする機能が付いてはいるが、その場合は聞いた話だと身体が赤くなる筈だ。

一体何があったのだろうか？とない頭で考えていると、出入り口の反対から爆音が聞こえて来た。

何があったのだろうか？と思いつけて見ると、そこにはあの剣を持った仮面ライダーに変身する金髪の男が倒れていた。

更にその近くにはエターナルメモリとロストドライバーが落ちてい
る。

アレは確か、ボスが使っていたガイアメモリの筈だ。まさか、やら
れてしまったのか？

（だが、井上さんもあのメモリは欲しいとか言ってたしな！態々奪
う手間が省けたってモンだぜ！それに、動けない今ならアイツをぶ
ちのめすチャンスだ！）

そう決断した所でヴァンがムクリと起き上がり、その場から立ち去
ろうとしていた。

（あ！逃がすかあ！！）

アノマロカリスドーパントは即座にその背後に牙の弾丸を放ち、吹
き飛ばした。

『ハハハハハ！！やったぜえええええ！！』

「そんなズルをして勝って嬉しいのですか？」

『つてげえっ！井上さん！？何でここに！？』

突然声を掛けられた背後を振り向くと、そこには藍色の仮面ライダ
ーと戦っていた筈の運河がこちらをジト目で見据えていた。

何と言う神出鬼没な…心臓に悪過ぎる……。

「生憎やられてしまいましたね。逃げてる途中で貴方を見掛けてみ
れば、何と言う呆れた行為…私の美学に反しますよ」

そう言いながら前に出ると、エターナルメモリとロストドライバー
を拾い上げてこちらに振り向いた。

「でもまあ…彼はただ気を失ってるだけのようですし、第二希望の代物も手に入りました。今回の事は大目に見ておきましょう」

『は、はあ………』

そう曖昧に返事をしながら、ガイアメモリを体外から排出して人間態に戻ると、次に行く運河の計画を尋ねた。

「それで、今度はどうするんですかい？」

「いえ、ここからは私一人で十分ですから、アナタはここで用済みですよ。」

運河はそう言いながら唇を舐めて湿らせると、不敵な笑みを浮かべながらこちらに近づいてきた。

それに合わせて自分も後退りながら様子がおかしい運河に声を掛ける。

「あの、井上さん…?」

「貴方は私の予想以上の働きをしてくれました。それを評して良い物を見せてあげましょう……」

そう呟くと、運河の姿がメモリも使った素振りもないのに変貌し、その姿を見た男は思わず悲鳴を上げた。

ディージェントは飛び蹴りを放った後の態勢からゆっくりと立ち上がると、無言で先ほど爆散したナスカドーパントがいた場所を見た。

そこには黒い焦げ跡の中心地にナスカメモリがポツンと落ちており、素体となった井上運河の身体はどこにもない。

だが運河が例えNEVERだったとしても死んだとは思ってはいない。

何故ならあの時、ギリギリの所で「スタン」の効果が切れ、超スピードで致命傷を避けていたのだ。

しかし完全に避けきる事は出来ず、メモリが体外に排出されてしまったようだが、問題はそこにある。

メモリが排出されたにも関わらずここにいないと言う事は、メモリが排出された後に超スピードで逃走したと言う事になる。それは人間では絶対に不可能な事だ。

そしてここから導き出される解答は一つ……“井上運河は人間ではない”と言う事だ。

（クロックアップ並みの超スピード……そして人間態への変化が可能な脅威……と言う事はワームだったのか……。また神童さんが連れ込んで来てみたいだね）

ワーム……かつて亜由美と会った世界で襲いかかって来た“カブトの世界”の脅威だ。

何時からこの世界に潜んでいたのかは不明だが、今回はかなり手の込んだやり方をして来てるようである。

「……もう流石に追い付けないだろうし、まずは楓さんの援護をした方が良さそうだね」

そうばやきながらマスク越しに頭をガリガリ搔くと、上の階へ行く為に階段を上り始めた。

彼女ならジョーカーモードパントまでなら何とかできるだろうが、デ

イボルグまでは対処できない。

この世界の脅威は彼女に任せるが、Dシリーズ…自分達が撒いた種はこちらで処理させてもらう……。

そうこの世界での行動方針を立てながら階段を上り詰めてようやく第二展望台広場まで辿り着くと、そこには上へと続く階段の前で立ち尽くす楓だけが立っていた。窓の一部が割れてはいるが、ここには敵がいらないようだ。

「あら、来たのね」

「敵はどうしましたか？」

楓がこちらに気付いて声を掛けて来ると、デイージェントは今気になっっている事を尋ねた。

「その窓からアキサメ君と一緒に落ちたわよ。多分もう終わってこっちに向かってるでしょうけどね。ジョーカー…ううん、駆も私が正気に戻して、今は元相棒の所へ向かってるわよ」

「そうですか」

楓の質問の答えに簡潔に答えると、楓の横に並び立った。

ここから先には変身したDシリーズ…イボルグがいる事が分かる。駆と言う人物が一体どれほどの実力を有しているのかは定かではないが、少なくともこの世界の人間では手に負えないだろう。やはりここは援護に言った方が良さそうだ。

そう思い立って先に進もうとすると、楓に手を掴まれて引き止められた。

「待って」

「……どうしましたか？」

ディージェントは何時も通りの口調ではあるものの、何処か焦った様子で引きとめた楓に問い掛けた。
すると楓はこちらを真っ直ぐ見据えながら意思の強い言葉を口にした。

「ここは全部アイツに任せてあげて。これは全部、駆とその元相棒の問題だから」

「……ディボルグはこの世界の人間では倒す事ができません。それだけ強力なんです」

ディージェントは仮面の奥で訝しげに眉を顰めながら行かなければならない事を主張するが、楓はそれでも首を横に振って否定した。

「確かにアンタの言う通りかもしれないけど、もうっ少しだけ私の相棒の事を信じてあげて……。アンタだってあの子……亜由美ちゃんの事を信じてるから一緒に旅してるんでしょ？」

「……………！」

信じる。歩にとってその言葉はあまりにも縁のない言葉だった。

今まで歩はこのライダーサークルに来るまでの2年間、殆ど人の目に触れずに独りで戦ってきた。

渡った世界の“歪み”を修正すれば、その後すぐに立ち去る。別の世界の情報はその世界の毒にしかない故の、歩なりの配慮だ。だからこそ誰かを信じるなんて、そんな事考えてもいなかった。

果たして自分はどうなのだろうか？ 亜由美の事を本当に信じているのか？

少なくとも亜由美は自分を信じてくれてる。だからこそ何かあれば

今回の様に言う事を聞いてくれる。

きっとこの人もその相棒も互いに信じているのだろう。だからこそこうして自分を引き止め、絶対に通す事もないだろう。

「……ハア、分かりました。しばらくここで待っておきます」

デージェントは軽く息を吐くと、そう言って変身を解除した。

その様子を見た楓は微笑んで「ありがとう」とだけ言って割れた窓へ近づいて、そこから見える街並みを眺めた。だが……

『うわあああああ!!』

「ッ!? 何今の悲鳴……ってちょっと! 誰かドーパントに襲われてるわよ!」

割れた窓の下を見ながら叫ぶ楓に近寄って歩も同じく眼下を除くと、アノマロカリスドーパントの男が緑と黒茶色の体表をしたキリギリスを模した何かに襲われている所と、その近くで倒れているヴァンが目に入った。

「……アレは、ドーパントじゃありませんね」

「はあ? 何言ってるの? ドーパントじゃなければ何なのよ?」

歩から出された結論に顔を顰めながら訊ねて来た楓に、歩は淡々と答えた。

「アレはワーム。別の世界の怪物ですね」

「……ふう〜ん、ただの虫のドーパントにしか見えなないんだけど……」

確かにこの世界の人間から見れば普通のドーパントと大差ないだろ

う。

だがアレにはこの世界には無い特性も持ち合わせている。そしてそれはすぐに目の前でその片鱗を一瞬だけ現した。

「こ、こつちに来るなあああー！」

「アノマロカリス！」

襲われていた男はすぐさまガイアメモリを取り出してドーパントになろうとスイッチを押した。だが……

『そんなに怖がらなくてもいいじゃないですか。それとこれは没収です』

「えっ！？何時の間に……!？」

そのキリギリスに似たドーパントならぬグラスホッパーワームは一瞬で男の背後に移動し、アノマロカリスメモリを取り上げた。

「瞬間移動!？」

「いえ、アレは目視不可能な速度で動いただけです。“クロックアップ”と言うらしいですよ」

目の前の出来事に驚愕する楓に簡潔に答えてる間にグラスホッパーワームは奪い取ったメモリを単純な握力で砕きながら男との距離をジリジリと詰めて行く。

ワームの目的は人類の殲滅とワームの繁栄だ。その習性を鑑みれば、間違いなくアノマロカリスの男を殺そうとするだろう。

流石にこのまま殺させるわけにはいかない。そう判断すると歩は再

びディージェントになるべくディージェントドライバーとカードを取り出した。

「カメンライド……」

「楓さんはここで待っていてください。アレに対処するにはアレの世界のライダーかDシリーズでなければできないので…変身」

「ディージェント！」

すぐさまディージェントへの変身を果たすと、楓の答えを聞かずに割れた窓から飛び降りて行った。

「随分と慌ただしいわね…まあ私も今変身できないわけなんだから、待つしかないんだけど……」

そう一人ごちると、ディージェントとワームの戦いをしばらく観ておく事にした。

「な、何ですかその姿！？一体どうやってメモリを…!!」
『別にメモリに頼らずとも、これが私の本来の姿ですからねえ……』

狼狽する男を余所に、目の前でメモリを挿した素振りも見せずに一瞬で禍々しい異形へと変貌した運河は呆れたような口振りでそう答えた。

『私はワーム。前の井上運河でしたらもういませんよ。同じ人間は二人もいませんからねえ。アツハツハツハツハ』

その話し方は運河その物ではあるが、その内に内包している狂気を隠し切れていない。

普通のドーパントとはどこか違う醜悪さを持った見た目もあって、更に不気味だ。

自身をワームと答えたその存在は、狂気を隠す事なくこちらに歩み寄って来た。

「こ、こっちに来るなああああ!!」

「アノマロカリス!」

その危機感を孕んだ恐怖を感じた男は、自分のガイアメモリを取り出してドーパントへ変わろうとしたが、目の前の異形が一瞬にして消えた。

「へ!?!い、一体どこに!?!」

『そんなに怖がらなくてもいいじゃないですか。それとこれは没収です』

「えっ!?!何時の間に…!?!」

一瞬で背後に移動していたワームは、男の手にあつたメモリを取り上げて粉々に握り潰した。これで最早、抗う事も出来ない。

ジリジリとこちらに近づいて来るワームに合わせてこちらも後退るも、遂には壁際にまで追い込まれてしまった。

『さて、協力してくれたせめてもの礼です。苦しまない様にして差

し上げましょう」

ワームはそう言うと、自身の右手を変形させてそこから茶色くくすんだ片刃の刺々しい西洋剣を造り出し、ゆっくりと上げた。

「それでは、未来永劫にさようなら」

「そこまです」

剣が振り下ろされるかと思った刹那、あの藍色の仮面ライダーがワームの背後から腕を掴んで動きを止めた。

「おや？もう来たのですか？西方駆を放っておいてもよろしいのですか？」

「しばらく信じてみる事にしました。それよりもまず、貴方を倒す事にします。まさか、ワームだとは思ってもみませんでした……」

「アツハツハ、そうです…！かっ！」

ワームは仮面ライダーの手を振り払うと、横一線に仮面ライダーへと切り払うが、それをバックステップで避けると、男に言い放った。

「君は早くここから逃げた方がいいよ。もうメモリもないんじゃないか？何も出来ないだろうからね」

「は、はいいいいい！！」

ピシッと敬礼して返事をする、男はすぐさまその場から逃げ去るうとした。

だが次の瞬間には世界が暗転し、ワームの言った通りに未来永劫さよならする事になった。

「……ッ！！」

アノマロカリスの男が逃げ去ろうと背を向けた途端、グラスホッパーワームはクロックアップを発動させて一瞬で男の首を斬り飛ばしてしまった。

今のは流石にディージェントでも反応する事が出来ず、只々身体を失った男の頭部が宙に舞って行くのを見る事しかできなかった。

「まったく、そう易々と逃がすと思えますか？そんなわけないでしょうに……」

「……殺した理由は、何ですか？」

男の首はやがて重力に引き寄せられて硬い地面にグチャリと言う不快な音と共に落ち、ディージェントは両手を強く握り締めながらグラスホッパーワームに問い掛けた。

何と答えるか分かってはいるが、そう訊かずには居られなかった。

「我々ワームの使命は全ての人類を殲滅する事です。私はただその使命に順じて動いたに過ぎませんよ？」

グラスホッパーワームはさも当然の様にそう答えた。

許せない……。

何故脅威と呼ばれる存在の殆どは章治や正幸の様に共存の道を選べないのだろうか。

そんな奴等のせいで、どれだけの人が死んだと思ってる。

ディージェントの脳裏に浮かぶのは、二年前に自分のいた世界の人

間達を当たり前の様に屠って行く怪人達。

そのおかげで、実験台にされる日々から解放されたと言っても過言ではないが、その所為で多くの人達が死んでしまった。

どんなに嫌悪を抱く人間だろうと、命がある事に変わりはない。

そして、それを容易く奪い取って行くような異形達は、絶対に許せない！

デイーゼントは両手のグローブを何時もより強く嵌め直すと、冷淡な声でグラスホッパーワームに言い放った。

「そうですか…じゃあ僕もこれから、使命を遂行する事にします…
…。一貴方の存在を完全に消し去ります（お前を塵一つ残さず破壊してやる！）」

そのデイーゼントが放った声の最後に、あの声が重なって聞こえた。

世界の破壊者・門矢士の声が……。

第四十三話：Uの正体／一つの身体に、二つの人格（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

皐月「歩のまさかのブチ切れ回その2……」

加奈「一度目は確かタイガ戦の時だったわよね。でも何でここで門矢士が出て来るわけ？」

カンペ（それは次の回で説明していく予定ですよd（^^）（）

皐月「この調子だと今後も何度か出てきそうだな……」

加奈「作者の話だと結構重要な伏線らしいし、今後どうなっていくのか気になるわね」

カンペ（まあ楽しみにしてくださいな。それから竜王の白翼先生、前回はキャラを貸して頂き誠にありがとうございますm（）（）（）m（）

皐月「アレはすごかったな。実はアレって向こうが『ディカエレラ』投稿する前日から2〜3日で全部書き上げたんだろ？」

加奈「すんごい急ピッチだったわね。もう燃え尽きちゃったんじゃないの？」

カンペ（まあ、ね……c（）（）（）

一応頭の中でほとんどの構成が出来てたんで、筆を止める事なく進める事が出来たんですよハイ（）

皐月「これはアレだな。夏休みが終わる寸前で、半分以上残った宿題を一日で終わらせるみたいな」

加奈「人間頑張るとすごいわね……」

カンペ（こんな私ですがこれからもよろしくお願い致します。それでは来週の更新もお楽しみに）（w）（ノシ）

第四十四話：Uの正体／強さの秘密は守る心（前書き）

駆さんの戦闘シーンを描いてて思った……自分で言うのもなんだけどカッケエエエエエエ！！（、、*）

イヤ自画自賛してるわけじゃないんですけどやっぱり駆さん渋いよハードボイルドだよ！！

私的には翔太郎君におやつさん成分をふんだんにブチ込んだ感じに創ったキャラなんですけど、まさかここまでカッコよくなるとは（、、*）

それでは早速見て行きましょう！本編スタートオ！！（・w・）

第四十四話：Uの正体／強さの秘密は守る心

「はあああああー!!」

「おらあああああー!!」

デiboldグと激しい攻防を繰り返しながら、ジョーカーは風都タワーの屋上まで移動していた。

流石にあそこでは狭すぎる上に、麗奈にまで危険が及んでしまう可能性が高い為のジョーカーなりの考慮だ。

デiboldグはそんな事など関係ないだろうが、とにかく自分を倒せればどうでもよさそうで、こちらの案に乗ってくれたようだ。

しかし問題はここからだ。

どうやら克也が変身している姿はパワー重視の様で、その力は軽く見積もってジョーカーの十倍だ。一撃でも喰らえば致命傷になりかねない。

しかし肉弾戦能力に於いてはこちらの方が上で、上手く相手の攻撃を受け流している。

だがこちらは逆にパワーが足りずに相手に決定打を与えられないでいるのだ。

(さて、どうしたものかねえ……)

どう決定打を打つか模索していると、デiboldグが槍に備え付けられているカードホルダーから一枚のカードを引き抜き、バツクルに装填した。

「アタックライド…ラッシュー!」

装填すると電子音声が鳴り響き、その途端ディボルグの攻撃速度が格段に早くなった。

「うおおらああああ!!」

「どわっ!?!」

迫り来る突きを間一髪のところまで避け、更にその柄を掴んでこれ以上の追撃を防ごうとするが、今度は力任せに槍を振り回してジョーカーを引き離して放り投げた。

「うおおおつととと!!?!」

空中で身体を捻って態勢を立て直してから床に着地すると、仮面の奥で冷や汗を流した。

「あつぶねえ〜(パワーとスピードが上がりやがった!コイツは厄介だなあオイ!)」

相手がカードを使って来る仮面ライダーなのは、ドーパントとして操られていた時の記憶から推測はできていたが、流石に今までにやり合った事のないタイプなので戦い辛い事この上ない。

相手が武器を持つてるんだったら、せめてこちらも武器が欲しい。

そして、致命傷を防ぐのに適したメモリと言えば……

「だったらコレだな!」

「メタル!」

メタルメモリを取り出すとスイッチを押して起動させ、スロットル

に挿入していたジョーカーメモリを引き抜き、代わりに今起動させたメタルメモリを空いたスロットルへと挿入する。

「メタル！」

再び同じ電子音声ドライバから発せられると、ジョーカーの漆黒のボディが銀色に変化し、更に背中には一本の背丈ほどはあるスティック型専用武器・メタルシャフトがマウントされる。

仮面ライダーメタル。攻撃力と防御力に特化した駆が変身できる形態の一つだ。

ジョーカーよりスピードは劣るものの、パワーと防御力に関してはピカイチだ。しばらくはこれで相手の出方を見る事にする。

メタルは背中にマウントされたメタルシャフトを手に取ると軽く回して構えた。

「ふんっ、メタルか。その形態でどれだけ持つかな」

「まずは何事も試してみるもんだぜ、克也？」

「ほざいてるおー!!」

互いに減らず口を叩き合うと、ディボルグが距離を縮めて構えた槍を振るう。

「ラッシュ」の効果で未だにパワーとスピードが上昇した状態ではあるものの、メタルは何かメタルシャフトで受け止めてそのまま互いに持つてる武器でけたたましい金属音を響かせながらぶつかり合う。

「おらおらおらああああー!!」

「うおっ！くっ……！やっぱスピードじゃあ劣るか……。だったら今度は……!!」

劣勢になり始めたところでメタルシャフトで槍を抑えると、ディボ
ルグの満面に不意打ちの裏拳を入れて怯ませ、その後一気にメタル
シャフトをその腹部に命中させて吹き飛ばす。
その隙に次なるメモリを取り出してスイッチを押した。

「トリガー！」

「接近戦が駄目なら遠距離戦だ！」

「トリガー！」

トリガーメモリをスロットルへ挿入すると、青い装甲の銃撃戦に特
化した仮面ライダートリガーへとメモリチェンジを果たし、手に持
っていたメタルシャフトが消えて、代わりに左胸にトリガー専用エ
ネルギー銃・トリガーマグナムがマウントされた。

それを引き抜くと銃口をディボルグに向けると躊躇なく引き金を引
いた。

トリガーマグナムから射出されたエネルギー弾は、見事にディボル
グの堅牢な装甲に命中して火花を散らしながら後退させる事に成功
した。

「ぐおっ!?!」

(効いた!?!よし!ならこのまま一気に決める!)

それなりに効いたのを確認すると、更に連続でトリガーマグナムの
引き金を引いて次々にエネルギー弾を当てて行く。

「ぐっ!うっううう...!!」

そんな中、弾幕に晒されながらもディボルグはカードを取り出してバツクルへ装填した。

「アタックライド…ブラスト！」

「ウザッてええええ！！！」

そう罵言を吐き飛ばしながら突きを放つと、槍の先端からダークブルーのエネルギー弾を射出し、その弾丸は真っ直ぐトリガーへと向かって来た。

「ぬおっ！？そんな事も出来るのかよ！？」

「らあああああ！！！」

予想外のエネルギー弾を身体を反らす事でギリギリでかわすが、その後も何度も突きを放ってエネルギー弾を撃ち出して来る。またも形勢を逆転されてしまった。

「くう…！またかよ…！！！」

「ジョーカー！」

再び姿をジョーカーに戻すと、その俊敏さを生かしてディボルグの弾幕の中を掻い潜りながらディボルグへと迫る。

「当たりやがれええええええ！！！」

「そんなデタラメな攻撃喰らうかよ！！！」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

遂にはディボルグの懐に潜り込んで態勢を低く構えると、そこからマキシマムドライブを発動させて右拳に紫色のエネルギーを纏わせた。

「ライダー…パンチ……」

そう技名を静かに宣言すると、渾身のボディブロー・「ライダーパンチ」を相手の鳩尾へと打ち込んだ。

「とらあつー!!」

「ぐほあつーあつ…く……!!」

流石に人体の急所に命中したのは効いたのか、ディボルグは数歩後退ったあと膝を付いて蹲った。

やはり克也が変身している今の仮面ライダーの状態では、この程度のマキシマムドライブでは倒せないのか、苦悶の声を漏らすだけだ。ならばもう一度決めるしかあるまい。

「ぐおお…おお……。何故…っだ……。この力さえあれば、全てを、地獄に変えられる筈なのに…!!」

今の自分の力は絶対の筈だ。この力は、生前使っていたエターナルを遥かに凌ぐほどの力だ。

なのに何故こんな奴に負ける…?

今の俺は最強だ。もう誰にも止められるわけがないんだ!!

「克也、お前は今大事な事を忘れてる」

「な…にい…?」

すると唐突に元相棒であるジョーカーがポツリと語り出した。
忘れてる？ 一体何を忘れてると言うのだ？
そう思っているとジョーカーは被ってもいない帽子を被り直す仕草をしたのち、静かに答えた。

「何かを守る思い」だ。昔はそれを胸に秘めて、一緒に戦ってたじゃないか。

それなのに今はどうだ？ 俺への復讐の為に、ただ憎しみだけでお前は戦ってる。

そんな戦い方じゃあ、いくら世界をブチ壊せるくらいの力を手にしたって、俺には勝てねえよ」

「だ、黙れ！ 一度俺に負けた分際で、よくもそんなぬけぬけと……！」

コイツは十年振りの再会を果たした時、自分に手も足も出なかった。しかも今の姿より弱いエターナルでだ。そんなヤツに、今更負けるわけがない！

「ああそうだな……。あの時は、本当は嬉しかったんだ……」

「ああん……？」

仮面の奥で訝しげに眉を顰めながら次の言葉を待つと、コイツの口から放たれた言葉は言い訳にも聞こえそうだが、何処か妙に納得する理由だった。

「お前からの手紙が来た時、お前が生きてるって思ってた喜んだ自分がいた。本当だったらもう一度この手で殺さなきゃならないのにな……」。

でもお前と会うとその考えは甘かったんだって事に気付いたさ。俺の中にあつた迷いが、お前と戦う事を鈍らせたんだ……」

「でも今度は違う」と言っただけ言葉を区切ると、左手をスナップさせたのち、ディボルグに向かって指差して宣言した。

「俺はもう絶対に迷わない。だから今一度言わせてもらおう…小野塚克也！お前の犯した罪に、俺が気付かせてやる！」

今のジョーカー…西方駆に迷いはない。今度こそ終わらせてみせる…自分の手で！

ジョーカーの宣言を聞いて、ディボルグは仮面の奥で口元を憤怒とも歓喜とも取れる形に歪めた。

罪を気付かせる。そんな事せずともこちらはもう既に気付いている。

だが自分はもう償いきれない領域まで来てしまっているのだ。

だからこそ、もう自分には二つの道しか残されていない。

一つはここでヤツを倒して本能の赴くままにこの世を地獄に変えるか。それとも奴に倒されて二度目の死を受け入れるか。

それを決めるのは、元相棒であるコイツ次第だ。

「ハ…ハッハッハッハ！そうだ！それでいい！！俺を止めてみるよ
駆ううう！！！」

そう叫びながら立ち上がると、一枚のカードを取り出した。そのカードに書かれた表記は…ファイナルアタックだ。

これで決める事を向こうも悟ったのか、ジョーカーも同じく止めを刺すためにジョーカーメモリを挿入したままのマキシマムスロット

風都タワーの屋外では、デージェントとグラスホッパーワームが目に見えない程のスピードで激しい攻防を繰り返していた。

デージェントの現在発動させている「ダッシュ」の効果は、以前の700倍から900倍に上昇している。

やはりファイズ・アクセルフォームよりは劣るも、亜由美と出会った世界でのワーム戦よりかは普段ならば戦い易くなっている筈なのだ。

しかしそれと同時にグラスホッパーワームも、以前戦ったワーム達よりも手強い。

ナスカの時よりは遅くなつてはいるのだが、このワームからは空間把握能力を阻害するジャミングが放たれている上に、剣技もナスカの時と同様にまったく衰えていない。

グラスホッパーワームが剣で攻撃してくる隙を付いたカウンターパンチを与えようとすれば、そこでフェイントを掛けてバックステップでかわされてしまう。

逆にこちらから攻めようとすれば、自前の剣のリーチを生かして牽制して来るために中々踏み込めないでいるのだ。

だがこちらとて負ける気など毛頭ない。

デージェントは「ダッシュ」の効果を解除すると、また新たに別のカードを取り出した。

『ここで高速化を解くとは愚考ですねえ！』

解除されると同時にグラスホッパーワームが何度も連続でデージェントを斬り付け、装甲から激しく火花を散らさせる。

だがデージエントはそれでも気にした様子もなく黙々とカードをバツクルに装填して効果を発動させた。

「アタックライド…ミラーダイバー！」

発動させると同時にグラスホッパーワームのクロックアップ状態での活動時間に限界が来たのか、その姿をデージエントの前に現した。

『ふう…流石の私でもこれ以上のクロックアップは……』

「一隙アリです（この時を待ってたぜ！）」

『な、何をするんですか！？放しなさい！！』

グラスホッパーワームが現れると、デージエントはすぐさま一瞬だけ油断していた隙を付いて右手を掴み上げて剣を取り零させると、風都タワーのフロントが写っている窓に全力で投げ飛ばした。

「ハアッ！（タアッ！！）」

『ぬあああああ！！』

投げ飛ばされたグラスホッパーワームはその窓ガラスに直撃するも決して割る事はなく、その鏡面化した背景の中へと入り込んで行った。

『くう…ここは……。成程、鏡の中ですか。私を閉じ込めたつもりなのでしょうが、そう簡単には行きませんよ！』

本来ならば龍騎の世界のライダーやミラーモンスターでなければミラーワールドから出られないのだが、神童による細工のためか粒子化もする事なく再び現実世界へとミラーワールドを抜けて戻って来

た。

しかし、そんな事などディージェントにとっては予想の範囲内だ。

「アタックライド…ブラスト！」

「ファイナルアタックライド…ディージェント！」

「ぬあっ！何です…これは…！？」

「一貴方に教える義理はありません（お前に教えてやる道理はない）」

グラスホッパーワームがミラーワールドから出て来ると同時に「ブラスト」と「ファイナルアタック」の二枚のカードを発動させてグラスホッパーワームを正面からビジョンで拘束すると、またもディージェントの冷淡な言葉に別の声が重なって聞こえて来た。

「くう…さつきから何ですかその喋り方は…！？」

「一それも教える義理はありません（一々説明するのも面倒だから聞くな）」

グラスホッパーワームにはこの声の正体は分からないだろうが、ディージェントには分かっている。

自分の潜在意識の中に潜んでいる門矢士の人格を模したディージェントの人格プログラムの声だ。

Dシリーズは装着者の感情に合わせて、稀に何らかの作用を及ぼす事がある。

二年前のライダー大戦時に於いて門矢士がディージェントの激情態になったのもその一例だ。

今回の場合は歩の潜在意識に隠れていた門矢士が、歩の感情に感化

されて僅かに人格が浮き上がってきているのだ。

そのため戦い方も何時もと違って若干粗暴な戦法になってはいるものの、伊達に門矢土がDプロジェクトの完遂の為に戦ってきたわけではない強さを誇っていた。

そしてディージェントは両手を重ねて前に突き出すと、何時ものインディゴカラーのエネルギーではなく、ディケイドの物と同様のマゼンタカラーのシックスエレメントを両腕に充填させた。

「—それでは止めの一発、行きますよ（さあ、これで終わりだ）」

そう言つて「ディメンジョンバスター」を放つが、ワームがクスリと軽く笑つてビジョンを力尽くで破壊し、即座にクロックアップを発動させてその場から離れて難を逃れた。

「……—避けましたか（チツ、避けたか）」

外したのを確認すると、砲撃を中断してグラスホッパーワームに向き直る。

砲撃が通過したフロントガラスから先は完全に抉られており、風都タワーの反対側まで貫通してしまっている。

流星にこれはやり過ぎだろうが、今のディージェントはそんな配慮など出来ないほどに感情が昂ぶってしまっている。

その様子を見てグラスホッパーワームはまたも軽く笑いながら人間態である井上運河に擬態すると、ある物を取り出した。

ロストドライバーと「永遠の記憶」を内包したガイアメモリ・エターナルメモリだ。

「そう簡単に私がやられると思いますか…？甘いですよ！」

「エターナル！」

エターナルメモリのスイッチを押してガイアウイスポーと共に起動させると、ロストドライバーを腰に巻きつけて、そのスロットルに挿入した。

「変身」

「エターナル！」

そしてエターナルメモリの刺さったスロットルを合い言葉と共に斜めに傾けると、もう一度ガイアウイスポーが鳴り響いて周囲に発生した青白い稲妻が運河の身体を包み込むと、その姿を白い超人へと変えた。

マークの黄色い複眼にイニシャルのEを横倒しにしたかのような角飾り。

全身を包み込む白い装甲の両腕には蒼い炎のマークが刻まれ、更にそれを覆い隠すかのように漆黒のマントを身に纏っていた。

仮面ライダーエターナル・ブルーフレア。

健が変身していた物とは違い、こちらはメモリとの適合率が更に高い場合に変身する事が出来る形態である。

運河はエターナルへ変身が完了すると同時に、クロックアップを発動させてその姿を消すと、デージェントの装甲から何度も火花が散り、やがて大きく弾き飛ばされてしまった。

「クツ…又アツ！（グウ！グアツ！！）」
「アツハツハツハツハ！どうしましたか仮面ライダー殿！？」

エターナルはクロックアップを解除してディージェントの眼前に立ち塞がると、卑下するかのような高笑いを上げながらディージェントを見下した。

どうやらメモリとの相乗効果でクロックアップが更に高速化してしまってる様だ。

流石にオリジナルがする“あのクロックアップ”程ではないにせよ、このままでは拙い。

（どうする？また「スタン」で動きを止めるか？）

（アレはもう見切られてるだろうから使えないよ）

頭の中から土の意見が聞こえてくるが、流石に相手も何度も喰らうほど馬鹿じゃない。

そう答えると土は溜め息を吐いて、ある妥協案を提示して来た。

（ハア…わかった、じゃあ俺が“とっておき”のカードを作成してやるからそれまでしばらくもっておけ。ただし！これは即席だから一回しか使えないし、反動もかなりデカいから覚悟しとけよ）
（それじゃあ頼むよ）

「アタックライド…ダッシュュ！」

土にそう簡潔に相槌を打つと、「ダッシュュ」を発動させてエターナルへと肉迫し始めた。

「貴方も意外と懲りないですねえ！」

向こうもこちらに合わせてクロックアップを発動させると、ディージェントの右ストレートを難無く受け流し、腹部へ膝蹴りを入れる。

「グウツ…！」

「まだまだ行きますよ…！」

それには堪らず踏鞴を踏んで怯んでいると、更にダメ押しとばかりにコンバットナイフ型武器・エターナルエッジが襲い掛かる。

「ツ！クツ…！」

しかしそれを寸での所で白羽取りをして何とか受け止めると、エターナルは感心したように「ホウ」と感嘆の声を漏らした。

「やはり貴方は私が今まで会ってきた中で、最高の好敵手と言えますねえ……」

「そんな風に思われても、嬉しくも何ともありません」

士がカード作成に専念している為に、ディージェントの声に士の声が重なる事がなく、若干怒気の籠った冷淡な口調を発した。

人をあんな風に簡単に殺すような輩とは、絶対に親しくなんてなりたくもない。

だからこそ、目の前の世界の脅威は絶対に倒してみせる。

「何とも連れないです…ねえ！」

それを聞くとエターナルは何とも残念そうに溜め息を吐くと、瞬時

にエターナルエッジを引いて手から引き離すと、ディージェントを蹴り飛ばした。

「又ウ……チッ！」

ディージェントはすぐさま受け身を取って地面を滑ると、一瞬だけ毒吐いて再び高速移動を開始した。

早く士の…ディージェントの人格プログラムが言いつつておきのカードが作成されるのを待つしかなかった。

「ホント、アレってもう何もかも反則じゃん……」

楓は風都タワーの真下で繰り広げられている戦闘を見て一人ごちた。あの超スピードでの戦いはいくらスピード特化した自分でも次元が違い過ぎる。

別の世界とやらにはガイアメモリ犯罪さえも霞んでしまいそんな異常な力もあった物だ。

ドゴオオオオオン……！！

「ッ！？何今の音!？」

下の方に集中していると、楓の油断している隙を狙ったかのように真上から爆音が響いた。

上には駆が今回の事件の黒幕と戦っている筈だ。今の爆音だと駆は大丈夫だろうが、人質が大丈夫か少し不安だ。

(ここは人質の安全の確保を優先した方がよさそうね……悪いけど
駆、行かせてもらおうよ)

駆からの所長命令に反する事にはなるが、麗奈の安全の確保のため
に行った方が良さそうだと自己判断すると、心の中で駆けるに軽く
謝りながら上への階段を駆け上って行った。

その間に地上ではヴァンが意識を取り戻すという新たな進展があっ
た事に気付かずに……。

第四十四話・じの正体／強さの秘密は守る心（後書き）

今回のあとがきラジオは本日21時に出張版としてお送りいたしますので、しばらくお待ちくださいm（）（）m

あとがきラジオ出張版〜陳情！あの時出来なかった対決を！〜（前書き）

某日、西方探偵事務所にて……

駆「お〜い楓。もうすぐ出張版の放送が始まるぞ〜」

楓「分かってるわよ。てか人に夕飯の支度させといてそんなに急かさないでよ!〜」

駆「そんな怒んなって。何でも今回は他作品とコラボするらしいからな。これだけは絶対に聴いとかないな」

楓「まあそうだけどね。一体どんな放送になるのか楽しみね」

数十分後……放送終了後……

駆「……なあ楓。お前、今俺と同じ事思ってないか？」

楓「ええ、多分ね……」

駆「よし!だったら早速スタジオへ向かうぞ!〜」

楓「了解所長!」

これは、とある探偵コンビのした会話の、ほんの一部始終である。

あとがきラジオ出張版〜陳情！あの時出来なかった対決を！〜

加奈「加奈と！」

皐月「皐月と！」

楓「楓と！」

駆「駆の」

加奈・皐月・楓・駆「あとがきラジオ！出張ば〜ん！！」

加奈「つい最近出張版したばかりなのに、なんでまた？」

楓「ええ、それについてなんだけど、実は前回にやってた出張版で
一つ納得できない事があるのよ」

皐月「納得できない事？」

駆「それについてはここの描写だ。VTR、スタート」

20ターン目・皆葉好太郎

マス（これから行く先の二体の敵を時間内に倒せ。倒せなかった場
合は二回休み）

好太郎「意外と楽しそうなのが出て来たな」

麗奈「敵って一体何ですか？」

ラル「それは行って見れば分かりますよ。今回のバトルは皆さんで
VTRで観てみましょう。それでは好太郎君、行ってらっしゃい」
指パッチン

「……………ん？何だここは？」

好太郎は気が付くとどこかのカラオケボックスの中でソファに座っていた。

ここで何をすればいいのか分からないが、少なくともここに現れる敵を倒せばいいだけの話だろう。

今の内にディジェクトドライバーを装着し様とすると、部屋の扉がガチャリと開いて遂にその敵が姿を現した。だがその敵は……

「ああ〜！ホントにイケメンがいる〜！」

「カッコいい〜！」

「……………」

今時な格好をした20歳前後の女性二人組だった。

予想外の登場に好太郎は目をまん丸くして呆気を取られていると、カラオケボックスに配置されていたテレビ画面にある文字が表示された。

「……………って何でそんな展開になる!？」

それを読んだ瞬間、好太郎は叫んだ。

そこには「好太郎君の相手はそのギャル二人です。20分以内に上手く口説き落としください」と書かれていた。人付き合いの殆どない好太郎には無理なものと言っても当然だろう。

「何そんなに怒ってんのぉ〜？一緒に飲もうよぉ〜？」

「いや、俺は、その……」

「アハハツ！照れちゃってカワイイ〜」

完全に弄ばれている好太郎。

結局好太郎はそのまま何も出来ずに時間を無駄に浪費して行き、一切口説けずに終わってしまったのであった。

「……ってシーンなんだけどな、ここを読んで俺達にはどうしても納得できない事があるんだよ」

加奈「一体何なんですか？」

楓・駆「なんで二人相手と来て私（俺）達が相手じゃなかったのよ（んだよ）！？」

皐月「好太郎の戦闘（笑）シーンか……それについては作者から聞いた話だと『文字数がとんでもなく長くなるから、短くて済むこっちの方にした』らしいぜ？」

楓「“長くなる”って、もう十分長くなってんじゃん！！」

駆「そこで！今回はあの時出来なかった『デージェクトVSジョーカー』&サイクロン』の戦闘を、作者に依頼したい！」

楓「きつとそれを楽しみにしていた読者さんだっただくさんいる筈よー！」

加奈「うわぁ〜…何て言うか、これはもう……」

皐月「ああ、アレだな」

加奈・皐月「陳情ね（だな）」バラを持ちながら

駆「同情するなら出番をくれ！そして今すぐ、この話題の渦中の好太郎を呼んで来い！」

好太郎「……で、俺を呼んだのはその為か？」

加奈「はい……よろしくお願いします」

皐月「それでもしねえと納得しねえんだよあの二人。だからアタシからも頼む」

好太郎「ハア……と言うか駆、活動報告でも思ってたんだがお前本編の時とテンションが違いすぎるぞ？」

駆「序盤の出番が殆どなかったからな。後書きだけでもこうしてはっちゃけておかないと地味キャラで終わっちゃうんだよ」

好太郎「随分とメタな理由だな！？」

皐月「いや今、絶賛活躍中じゃん」

加奈「デИБォルグ相手にあそこまで立ち回れるんだから、もう十分キャラ立ってるんじゃないですか？」

楓「確かにそうかももしれないけど、皆にはもう少し駆の事とか知って欲しいのよね。主にだらない所とかだらない所とかだらない所とか……」

駆「だらない以外にねえのかよ！？」

楓「ええ……だってもうカッコいい所とかハードボイルドな所はもう出ちゃってるでしょ？だったらもう短所くらいしかないじゃない」

好太郎「今さりげなく褒めたな。惚気か……」

皐月「なんだかんだで駆大好きかよ……」

楓「んなつ!? べ、別に大好きってほどじゃないわよ!!」 顔真
つ赤

加奈「自分と同じ顔の人に言うのもなんですけど、ツンデレですね
……」

楓「誰がツンデレよ!!」

駆「まあとにかくだ。これから俺達と好太郎の戦闘を書いてもらいたいってわけだ」

加奈「でもどこでするの?」

皐月「それだったら正幸に頼んで、またアリーナを貸してもらった
らどうだ?」

カンペ（あ、今正幸さんに連絡取ったんですけど、「観戦させてくれるんだったらいいよ」との事ですd(。w。)()

駆「正幸って誰だ?」

楓「前の章のファイズ編の登場人物よ。直接会った事はないけど、結構温厚な感じの大手企業の社長さんだったわよ」

好太郎「正幸が来るとなると、他の二人も来そうだな」

皐月「そうだな。もういつその事亜由美や歩も呼んで来るか? 歩いて解説上手いし」

なんだかんだで1時間後……

加奈「さて、と言うわけで『水音ラル誕生祭』以来のスマートブレインスパーアリーナまでやって来ました！」

章治「久しぶりに、ウチ参上！！」

美玖「いきなりボケをかますな！」

正幸「それで、君達がW編の登場人物なんだって？今回はよろしく頼むよ」

駆「ああ、態々こんな場所まで用意してくれて悪いな（思ってたより結構若いな……）」

歩「大分賑やかだね」

亜由美「それにしても、美玖さんが来るのは少し意外な気がする」

美玖「コイツ等、少し目を離すとすぐこれだからな。だからこうして誰かがお守りをしてないとまた仕事をサボるかもしれんしな」

正幸「そんな事言っちゃって、ホントは一人で留守番するのが嫌だから付いて来たんでしょ？」

章治「ホンマ、美玖って素直やないなあ」

美玖「そこ！そんなことぬかすなら今すぐ職場に強制送還するぞ！！」

皐月「向こうは結構相変わらずみたいだな」

亜由美（美玖さん大変そうだなあ……）

好太郎「何だこれ、どんどん大々的になって来てるぞ……」

歩「それで作者、今回は実況方式で戦闘するって事でいいんだっけ？」

カンペ（はいそうですね。実況は皐月ちゃんと章治さん、解説は歩

と正幸さん、そしてその他の方はツッコミをして頂きますーw。）」

美玖「ツッコミって何だ!？」

楓「まあそう言う感じにツッコンで行けば良いんじゃない?」

亜由美（もう完全に慣れた自分が悲しい……）」

加奈「それじゃあそろそろ始めるので、好太郎さん達は中央へ移動してください」

駆「勝たせてもらうぜ、好太郎」

楓「そして私達の活躍をアピールさせてもらうわよ!」

好太郎（このアラサ 共は……!）」

章治「レディース・アーンドウ・ジェントルメエーン!! さあ遂にやって来たで! ディジエクトVS ジョーカー&サイクロンの夢の対決!」

美玖「いきなりテンション高いな貴様は!？」

皐月「実況はアタシ、多々井皐月とそのアホ面かましてる三木章治でお送りしてくぜ」

章治「アホ面ちゃうわ!」

加奈「それは流石に失礼よ皐月」

歩「そして解説は、Dシリーズに詳しいこの須藤歩と……」

正幸「活動報告で一度だけジョーカーに変身した事のある、スマー
トブレイン代表取締役・岸边正幸でお送りして行きます」

駆「えっ！？ちょっと待て！アンタジョーカーになれるのか！？」

章治「ついでにウチはメタルになれたりするで」

歩「そして僕はルナです」

亜由美「歩もつられて答えないの！」

楓「何このメモリ適合率…ある意味凄い」

好太郎「いい加減に始めるぞ。この時点で予定の文字数が半分過ぎてるんだぞ」

「カメンライド……」

駆「おっと、悪いな。それじゃあ早速始めるか……」

「ジョーカー！」

楓「それもそうね」

「サイクロン！」

歩「さてお互いに変身準備を整えた所で、試合……」

章治「レディファイ！！」

歩「！？（Ｔ　Ｔ）」

亜由美「被せないであげて章治さん！！」

好太郎・楓・駆「変身！」

「ダイジェクト！グオオオオオオ！！」

「ジョーカー！」

「サイクロン！」

臯月「歩が珍しく泣き顔になってるが、それでも遠慮なく試合実況は進めてくぜ」

美玖「鬼進行とはこの事か……」

加奈「基本はこのテンションで進めていきますからね。後書きって……」

デージェクト「ガアアアアアア！！」

ジョーカー「楓！後ろに回り込め！挟み撃ちにするぞ！」
サイクロン「了解！」

章治「おおっと、いきなり探偵コンビは二対一の状況を生かして挟み撃ちにしてきたでえ！！！」

正幸「スペック上ではデージェクトの方が上ですが、これは流石に拙いですねえ」

亜由美「ねえ、流石に二対一は無理があるんじゃない？」

歩「ウン。そこで今回は制限として“楓さんと駆さんはマキシマムドライブを放てるのはどちらか一人が一回だけ”と言うルールで行います」

サイクロン・ジョーカー「それ言うの遅過ぎでしょ（だろ）！」

臯月「歩にツッコミを入れつつもどんどん好太郎に攻撃を当てていつてる探偵コンビ！さあどうする好太郎！？」

デージェクト「チィッ！だったらコイツだ！」

「アタックライド…ファンク・アーム！」

正幸「好太郎君が使って来たのはアームファンクのようなですね」

デージェクト「ガアウツ!!」

ジョーカー「おあつと!今のは危なかつたぜ!」

サイクロン「でもそれくらいの攻撃なら!」

章治「ああつとロン毛!両腕にブレードを付けて旋回しての全方向攻撃をしたが、避けられてもつたで!」

歩「やっぱりリーチが少し短いですからね」

デージェクト「そこはせめてデージェクトか好太郎と呼んでくれ!」

ジョーカー「ツツコミを入れてもらってる所悪いが、隙だらけだぜ?」

デージェクト「ヌツ!グウツ!!」

皐月「上手くジョーカーのパンチを受け止めてガードしたな」

加奈「楓さん達がツツコミしつつも隙のない攻撃で攻めて来てたけど、やっぱり普通は隙出来るわよね?」

正幸「あの二人の方が経験が多いからね。何とかガード出来たみたいだけど、それだけじゃあ安心できないよ?」

サイクロン「まだまだあ!」

デージェクト「グウオツ!?!」

歩「デージェクトの死角に回り込んでの飛び蹴りが決まりましたね。彼にはデージェントと同じように空間把握能力が付いてないからあの攻撃を防ぐのは困難でしょう」

正幸「と言う事は、君だつたらあの攻撃防げてたりするの?」

歩「ジャミングさえ張られてなければ簡単に防げます」

加奈「チート宣言キタコレ……！」

皇月「そんな事より向こうも状況が変わって来たぜ。ジョーカーが何かのメモリ取り出して来たし」

「メタル！」

ジョーカー「リーチで攻めるんだっいたらまずはこれだな」

「メタル！」

メタル「さあて、どんどん攻めてくぜ？」

正幸「ジョーカーが取り出したメモリはメタルメモリのようですね」
章治「ジョーカー、サイクロンがディジェクトを抑える隙にメタルにメモリチェンジ！さらに専用武器・メタルシャフトを手を取ってディジェクトに猛攻を仕掛けてきたで！」

美玖「流石に十年もコンビを組んでいるだけあって、チームワークはピツタリだな」

ディジェクト「チイツ！やはり一対二はきついな……こうなったらこれだ！」

「アタックライド……リジェクション！」

歩「『リジェクション』のカードを使ってきましたね。しかしこの後対処ができるかが心配です」

美玖「ん？どう言う事だ？」

章治「以前アイツと戦った事があるんやけど、あのカードを使われると……」

デিজエクト「物理干渉を拒絶する」

メタル「はあっ！……っとうおっ！？」

サイクロン「きゃあっ！何今の、弾いた！？」

章治「とまあ、ああいう風に宣言した対象を一切受け付けなくしてしまっねん」

正幸「これだけ聞くと、中々のチートだよな」

歩「確かにそれだけならかなり強いかもしれませんが、何度も使うと反動の所為で逆に劣勢になってしまっ可能性もあるんです」

美玖「成程、つまり使い勝手が悪いと言う事が」

歩「そう言う事です。でも好太郎君は仮にもDシリーズ適合者として二年間も戦ってるんです。そう簡単には負けません」

亜由美「アレ？歩ひよつとして、好太郎さんの事応援してる？」

歩「同じDシリーズの好だからね」

加奈「ちよつとだけ身内みうちひい贖いね」

デিজエクト「ガアアアアアア！」

メタル「うわつとつとつととお！？ダメだ！全然攻撃を受け付けねえ！……」

サイクロン「そう言う場合は別の方法で攻めるのよ！例えば……」

「ヒート！」

サイクロン「これとかね！」

「ヒート！」

皐月「楓がヒートにメモリチェンジして来たぜ！」

正幸「成程、彼が今発動しているのは『物理的な干渉』だから、そ

れ以外の攻撃である炎での攻撃は防げないと言う事ですね」

ヒート「アツツイのかますわよ！」

デিজエクト「グアウ!?」

章治「ヒートが炎を生成して、ロン毛にぶちかましたで！」

メタル「サンキュー楓!今度はこっちも攻めてくぜ！」

「トリガー！」

皐月「ヒートの攻撃で出来た隙についてメタルがまた別のメモリを取り出したぜ!今度はトリガーだ！」

「トリガー！」

トリガー「仮面ライダートリガー!狙い撃つぜ!!」

亜由美・加奈「だから駆さんそれ別のネタ!!」

正幸「ここでまさかのガ○ダムネタが出るとは意外ですね」

美玖「感心する所そこじゃないと思います社長……」

章治「トリガーにメモリチェンジしてトリガーマグナムを構えたで!そしてそこから追撃の連続射撃や！」

歩「アレではどちらか一つの攻撃しか防げませんね。これは意外と大ピンチです」

デিজエクト「グ、グウウウウ……!!」

トリガー「このまま一気に押し切るぞ楓！」

ヒート「了解!それじゃあ駆お願い!!」

トリガー「よし来た！」

「トリガー！マキシマムドライブ！」

章治「遂にトリガーの必殺技が来たでえ！」

皐月「果たしてこれで終わってしまうのか！？どうなる好太郎！」

トリガー「撃ち抜くぜ。ライダー…シューティング」

デジエクト「(クソッ！こうなったら一か八か…！) を
拒絶する！」

ドオオオオ…ンンン…！！

加奈「…ねえ今、好太郎さん何かを拒絶しなかった？」

亜由美「ウン…何て言ったのか聞き取れなかったけど…」

章治「土煙のせいでよく見えへんけど、さあどうなった!？」

トリガー「マジかよ…」

ヒート「うっそお…」

デジエクト「フウ…どうやら成功したみたいだな…」

皐月「おお！！好太郎がピンピンしてるぜ！一体何を拒絶したんだ
!?!」

正幸「俺が聞き取れた限りでは、確か彼はこう言ったね…“ライダー
による攻撃を拒絶する”、と…」

加奈・美玖「え…!?!」

亜由美「そ、そんな事できるの歩!？」

歩「……理論上は可能だけど、流石にその発想は思い付かなかったよ」

章治「てかそれ、ウチと戦ってた時に使われとつたら、速攻でウチ負けとつたで？」

加奈「つまり、それが拒絶できたと言う事は……」

歩「……もう、二人の攻撃は一切効かないって事になるね」

ヒート「ええええええええ!!?」

トリガー「そんなのありかよオイ!？」

デিজエクト「さて、ここから先は…遠慮なく暴れさせてもらおうか……」

章治「探偵コンビ、死亡フラグギター!？」

歩「これはもう、発想の勝利としか言いようがありませんね……」

トリガー「か、楓!とりあえず、ルナになって打撃攻撃を防げ!」

ヒート「え、ええ!分かった!」

「ルナ!」

デিজエクト「させんぞ!ガアアア!」

トリガー「拙い!楓!!」

皐月「楓がルナにメモリチェンジする前に、好太郎が突っ込んで来たぜ!？」

正幸「トリガーが何とか牽制しようとして銃を連射していますが、悉く跳ね返されてしまってますね」

デージェクト「グアウー！」
ヒート「ウグ……ッ！！」

章治「ロン毛がヒートの首に掴み掛かったで！これは大ピンチや！」

「ジョーカー！」

トリガー「テメエ！楓を放せ！！」

「ジョーカー！」

デージェクト「ガアアアウー！！」

ヒート「きゃあっ！！」

ジョーカー「うわつと！？大丈夫か楓！？」

ヒート「え、ええ。何とか……」

正幸「掴んだヒートをジョーカーへ投げ飛ばして接近を中断させましたね」

章治「投げ飛ばされたヒートを、ジョーカーは何とかキャッチしたで！」

歩「しかし、ここで立ち止まっただけでは命取りです」

デージェクト「グアアアアアウー！！」

ジョーカー「しまっ！？危ない！！ぐああっ！！」

ヒート「か、駆！？きゃああああ！！」

亜由美「駆さんが楓さんを庇った！？」

泉月「でも二人とも思いつき蹴りで吹っ飛ばされたぞ！」

デージェクト「さて、そろそろ止めと行くか……」

「アタックライド…ファンク・シールド！」

「ファイナルアタックライド…ディディディージェクト！」

歩「どうやら止めは、『ディメンションカッター』で決めるつもり
みたいですね。あの方法なら二方向から攻撃できるので、使える必
殺技の中では一番妥当でしょう」

章治「これで遂にこの約七千字続いた戦闘も終止符か!？」

美玖「こんなシリアス展開でメタな事を言うな!」

デージェクト「グウウ…ガア……!」

バチンッ!

デージェクト「ヌッ!？」

バチバチッ!

亜由美「ドライバーから電流が出てる!？」

加奈「もしかしてこれは…!？」

デージェクト「な、何だとっ!？」

バチバチバチバチバチ!!

デージェクト「グガアアアアアアアツ!？」

美玖「な、何が起きてるんだ一体…?」

章治「どうやらドライバーがオーバーヒートを起こしたみたいやな。」

でもおかしいな…確かウチと戦ってた時は、あそこまで早くオーバ
ーヒートは起こさなかった筈やけど……」

歩「それはきつと、拒絶する対象の範囲が広がったからでしょう。
拒絶する対象が特別なものであればあるほど、その反動も大きくな
っていくんです」

正幸「つまり、ここに来てその反動が返って来たって事だね。彼の
反応を見ただけでも、“ライダーの拒絶”は今回初めてやったみた
いだし、どれくらいの反動が返って来るか分からなかったんだらう
ね」

デিজエクト「ク、クソツ……！ここに来て……！！」

ヒート「決めるなら今しかなさそうね！」

ジョーカー「みたいだな！」

臯月「ここでまさかの大逆転か！？」

ヒート・ジョーカー「ライダー・ダブルキイイック……！」

デিজエクト「ゲガアアアアアア……！」

章治「伝説の一号二号の如く、ライダーキックが決まったあああ！
！」

正幸「何の変哲もないキックですが、二人の信頼関係あってこそ
のキックですね」

歩「好太郎君の変身が解けた事で、これにて試合終了ですね」

加奈「と言うわけで、今回の夢の対決、デিজエクトVSジョーカ

「&サイクロンの試合は、ジョーカー&サイクロンの西方駆さんと藤原楓さんにけつてえ〜い！」

好太郎「クソツ！また負けた…！！orz」

歩「そう言えば、以前帝君が来てた時にも負けてたね」

加奈「まあアレは仕方ないでしょ。チートだったし」

皐月「今回なんて二対一だったからな。普通は負けるだろうな」

歩「とりあえず今回のあとがきラジオ出張版はここまでです。来週の更新もおた……」

正幸「お楽しみに！」

歩「……もう、言うのやめとこうかなorz」

亜由美「落ち込まないで！元気出して歩！！」

あとがきラジオ出張版〜陳情！あの時出来なかった対決を！〜（後書き）

今回の出張版は活動報告のバトン系の報告を読むと更に面白くなっております。

そちらへのコメントもお待ちしております）・w・（ノシ

第四十五話：逆転の鍵はGノバーサーカーシステム、起動！（前書き）

はい、サブタイの通りです。

遂に来てしまった！バーサーカーシステム！！

そして何かやらかしちゃった感も否めないんだぜ！！（@ @・）

そして他にもデイバイドの原案設定になかった機能までも出てしま
ったよ！

ホント、原案ブレイクしてしまって申し訳ありません……m（

—m:）

何はともあれ本編スタートオ！！（;。。）

第四十五話：逆転の鍵はGノバーサーカーシステム、起動！

激しい爆発の起きた風都タワーの屋上では、倒れたディボルグとそれを見下ろしているジョーカーの二つの影があった。

空は既に夕方に近づいている事もあってか、橙色に染まりつつある。

「身体が…言う事を聞かないな……。クソツ、ここまでかよ……」
「克也、これで本当にさよならだ」

ディボルグがそう毒吐くと、ジョーカーが変身を解きながら別れの言葉を元相棒に十年越しに言い放った。

互いの必殺技がぶつかり合った時、ジョーカーはディボルグの放った槍に直撃する瞬間にエネルギーを纏っていない反対側の左足で槍を踏み台してもう一度跳躍すると、ディボルグの眼前まで跳び上がって渾身の跳び蹴りを浴びせたのだ。

ディボルグは駆の別れの言葉を聞くと、鼻で軽く笑って駆に仰向けの状態で語りかけた。

「ハンツ、やっぱり駄目かよ…折角地獄の底から戻って来てやったって言うのによ……」

「……………」

駆は黙ってディボルグの言葉を聞き続ける。

マキシマムドライブをまともに喰らった今、克也に残された時間はあと僅かだ。だからこそその沈黙であり、元相棒としての最後の務めだ。

そしてディボルグも駆が何を訊きたいのか分かっているのだろう。

デiboldグは更に紡ぐ。

「お前の言いたい事は分かってる。だから教えといてやるよ、俺をもう一度動かせるようにした奴の事を……」

「流石は俺の相棒だな。俺の気になつてゐる事をすぐに当てる」

「お前は人情が厚いからなあ……こう言う話には喰い付くのがお前だ」
互いに微笑みの形に口元を歪めながらほんの短いやり取りを打った。駆は今回のような事件が今後も起きることを危惧して克也を復活させた人物の事を知っておきたかつたのだ。

しかし今回の真相を話そうとした時、それは起こつた。

「装着者ノ敗北ヲ確認。バーサーカーシステム、起動シマス」

『ツ！？』

一瞬デiboldグドライバーに電流が走つたかと思うと、本来の電子音声とは違う女性の無機質な電子音声が出て来たのだ。

本来、デiboldグにバーサーカーシステムは搭載されていない。

しかしデiboldグブツカーが流れ着いた世界に居たとある科学者がそのシステムを研究・解明して無理矢理バーサーカーシステムを搭載させたのだ。

歩がデiboldグブツカーにバーサーカーシステムが搭載されていると分かつたのは、その改造がイレギュラーと判断しきれないほどに正確だったからだ。それも、Dシリーズの成長記録機能で追加された物と判断できるほどに……。

そして、更に電子音声からの報告が続く。

「プロセスワン…装着者ノ人格ヲデリートシマス。デリート開始」

そう宣言されると同時にディボルグドライバーから激しい電流が流され、装着者である克也を激痛で苦しめ始めた。

「うっ…！うぐああああ…！」

「克也…！くおっ…！」

駆け寄ろうとするが電流が激しすぎて近づこうにも近づく事が出来ない。

「あああああ…！あ…ああ………」

やがて数秒と経たずに克也の断末魔が途切れ、ディボルグの身体がガツクリと頂垂れた。

「プロセスワン、終了シマシタ。プロセスツー…ディボルグノオートコントロールヲ開始シマス」

「な…っ！？」

電子音声の報告が終了すると、ディボルグの身体が生気を感じさせない動作でゆっくりと起き上がった。

「行動基準ヲ現在ディボルグガ滞在スル世界ノ完全破壊ニ設定シマス」

「……………」

ディボルグが完全に立ち上がると、黙って槍に備え付けられているカードホルダーからカードを一枚取り出してバツクルにセットした。

「アタツクライド…ディメンション！」

カードの発動宣言が放たれると同時に槍を床に突き刺すと、ディボルグを中心に次々とディボルグが持っている槍と同型の槍が何本も突き出して来た。

「うおっ！？克也！どうしたんだ！！」

「ジョーカー！」

迫り来る槍の大群から身を守る為にジョーカーメモリを発動させてもう一度ジョーカーに変身すると、槍の隙間を掻い潜りながら何とかディボルグに近寄ろうと肉迫する。

「滞在世界ノライダーノ接近ヲ確認。撃退ヲ開始シマス」

「ぐあああああ！！！」

だがすぐ近くまで来た所でディボルグに触れようとした途端、ディボルグのカウンター突きがジョーカーの左肩に直撃し、下から生えた槍をへし折りながら吹き飛ばされてしまった。

「ぐ…！かつ…や…！！！」

「優先順位ヲ変更。敵対スルライダーノ殲滅ヲ開始シマス」

「アタツクライド…スラツシュ！」

ディボルグ…折角救えたはずの克也に声が届く事はなく、無情な電子音声が自分の排除を宣言するだけだった。

麗奈はようやく目を覚ますと、自分が灰色の壁に閉じ込められた状態である事に気が付いた。

確か克也と話している最中に、克也が「もうすぐ駆が来る」と言っ
て麗奈の首筋に手刀を入れて気を失わせた筈だ。

そして目を覚ませばどうやら箱状のケースの様な状態で次元断裂が
展開されている事が分かった。

(どうやって次元断裂から出れば…何だか高い位置に展開されてる
みたいだし…アレ？ちょっと待って…何でこの壁の事を知ってる
の……?)

麗奈はどう脱出しようか検討していると、この壁…次元断裂の事を
知っている自分がある事に気が付いた。

(一体どうして…うっ…!)

『ウアアアアア!』

『クソッ!早く止める!』

『無理です!リミッターが破損しています!』

突然頭痛がしたかと思うと、自分の記憶の一部だろうか？何かのやり取りの会話とその風景が脳裏をよぎった。

目の前にはガラス越しに見える何らかの実験室で、真紅と黒のツートンカラーの仮面ライダーと呼ばれる存在が、身体に繋がった何本ものケーブルを引き千切りながら暴れ狂っていた。

そしてその周りでは白衣を着た人達が必死に抑えようと身体にしがみついたりスタンガンで動きを止めようとするが、その意に介さずに次々と人やケーブル、機材を薙ぎ倒していく。

『 ！しつかりして！！ ！！』

麗奈がガラスを叩きながら暴れている仮面ライダーに声を掛けるがまったく止まる気配がない。

恐らくアレに変身している人物の名を叫んでいるのだろうが、そこだけくり抜かれた様に何と呼んでいるのか思い出せない。

やがてガラスを叩く事を止めると仮面ライダーが暴れる部屋に入ろうとこの部屋から出て行こうとするがドアの前で一人の背筋を伸ばした老人が立ちはだかつて麗奈の行く手を塞いだ。

『通してください！彼は貴方の孫なんでしょう！？』

『まだだ。まだ実験の成果が見られてないんだ。アレが落ち付くのを待て』

『そんな事をしている間に死んでしまったらどうするんですか！？』

『アア！！アアアアアアア！！！！』

老人の冷酷な言葉に抗議していると、ガラスの向こう側に居る仮面

ライダーに変化が訪れた。

その身体が徐々にブレ始めて来たのだ。まるで高速で動いた時にできる残像で物体が歪んで見える時の様だ。

『 ……！！クツ…！！』

またも自分が装着者の名を叫ぶが、やはりそこだけ聞き取る事が出来ない。

どうする事も出来ないのかと思っていたその時、麗奈は克也が持っていた物と同じバックルを取り出して腰に巻き付け始めた。それを見た老人は慌てて自分を止めようと説得して来る。

『よせ！その調整はまだ終わっていないのだぞ！？』

『使わないよりはマシです！変身！』

「 ……！！そっだ、思い出した…！！」

確かに克也の持っていたあのバックルは自分の物であり、そして自分も仮面ライダーである事を思い出した。

ドゴオオオオオン…！！

「な、何…っ！？キヤアツ！？」

思い出すと同時に上から爆音が轟き、麗奈を囲んでいた次元断裂が音もなく消えた。

それによって麗奈が床に叩き落とされるかと思われたが、空中で態勢を整えて無事に両足で着地する事に成功した。

戻った記憶の一部ではあるが、どうやら自分は運動神経はかなり良い方らしい。

（何とか上手く行った……。でも、アレは一体誰だったの？あの老人の孫だつて私が言つてたけど…私と彼等の関係は？）

しかし肝心のあのライダーの事が全く思い出す事が出来ず、麗奈は自問自答を繰り返す。

そうしていると部屋のドアが開いて一人の小柄な少女が入つて来た。走つて来たのか若干息を乱しており、周囲を見渡すところちらに気付いたのか駆け寄つて麗奈に話し掛けて来た。

「貴女が、来栖麗奈さんですね？」

「え、ええ…：そうですね、アナタは？」

見た目から自分より年下だと判断してその少女の問い掛けに応じると、少女は息を整えた後に簡単に自己紹介を述べた。

「私は歩つて人に頼まれて貴女を助けに来た藤原楓です。後ここに後二人いませんでしたか？」

「それだったら、あそこから上へ向かいましたけど…：」

「そうでしたか…：。何とか無事みただけど駆は大丈夫なの…：？」

それを聞いた楓と名乗った少女は、苦虫を噛み締めた様な顔でボソリと呟いた。

先程この少女は歩に頼まれたと言つていたが、何故こんな小さな女の子に頼んだのだろうか？

そう思っていると少女はその考えを読んだのかこちらを一瞥した後

に「ハア…またこれか……」と小さく愚痴を溜息と一緒に零し、敬語を捨てた口調で話し掛けて来た。

「言つとくけど、こつ見えても28だから多分アナタより年上よ？」
「え！？あ、その…ごめんなさい……」

目の前に居る少女からのまさかの年上宣言に思わず謝ってしまうと「まあ、何時もの事で慣れてるし……」と何処か遠い目で明後日の方向を見ていた。

見た目が若すぎると言つのも色々と大変なのだろうな……。

などと若干憐れみの籠った目で正面に居る自分より年下にしか見えないアラサー女性を見ていると、何やら妙な気配がした。

上手く表現は出来ないが、何かが消失したと言つか、何かが目を覚ましたと言つか、よく分からない物だ。

「どうしたの？」

「いえ…今何かが消えた様な気が……」

ドゴゴゴゴオオオン！！

そこまで言つたところでまたも上から轟音が響き渡り、麗奈の言葉が途中で遮られてしまった。

「ッ！また…今度は何なの！？」

今の音は先程の比ではないほどの大きさで、二人とも思わず耳を塞いで立ち竦んでしまうも、楓が麗奈より先に竦んだ状態から解放されて疑問と驚愕の混じり合った声を発した。

先程感じた気配もあって、何か嫌な予感がする。その嫌な予感と言うのは楓も同様である様で、眉間に皺を寄せながら天井を見ている。

「貴女はここで待ってて。様子を見て来る」

「あ、待ってください」

そう言つて楓は部屋から出ようとするが、麗奈はそんな彼女に声を掛けて呼び止めた。

「私も一緒に行きます」

「……これは遊びじゃないのよ。素人が出しゃばって良い物じゃないの」

「分かっていきます。でも多分、私がいないと解決できないかもしれない事なんです。お願いします」

そう言つて踵を返して再び上へ向かおうとするが、それでも麗奈は喰い付いた。

これは自分でなければ……いや、自分でしなくてはならない事なのだ。自分が何者かなんてまだよく分かっていない部分もある。だが、これは自分の使命でもある。そう感じたのだ。

「……ハア、まあ私も駆に迷惑掛けに行くようなモンだし、人の事は言えないか」

「え？今何て？」

楓がボソリと小さく呟いたが、上手く聞き取れなかったのもう一度訊ねるが「何でもないわ」と言つて苦笑混じりに答えた。

「まあ行ってもいいけど自分の身は自分で守るのよ。良いわね？」
「はい！」

ハッキリとそう返事をすると、楓の後に続いて部屋から出て行った。自分だって、何かできる筈だ。そう思いを胸に秘めて……。

ヴァンが意識を取り戻すと、目の前ではディージェントとエターナルの戦闘が繰り広げられていた。

エターナルは先程ヴァンが倒した筈なのだが今のエターナルには微妙に差異がある。

まず両腕に刻まれた炎が青くなっており、胸部にはいくつものマキシラムスロットが設けられたコンバットベルトが装着されている。

そして一番の特徴は、背後には黒いマントを羽織っている事だ。

そのマントを翻しながらディージェントの蹴りを遮ると、続いて隠し持っていたエターナルエッジを突き出してディージェントに迫る。しかしディージェントは一瞬で消えたかと思うとエターナルの背後に出現して再び猛攻を仕掛ける。

エターナルの戦い方が先程と違っており、自分が戦ったエターナルとは違うようだ。また別の人物が変身しているのだろうか。

一体何がどうなったのか、しばらくその戦闘をおぼろげに見ながら考えていると二体の姿がほぼ同時に消え、あちこちから何かがぶつかり合うような音が連続して聞こえてくる。どうやら高速で動いているようだ。

やがて両者の姿が目視できるスピードまで落ち、展開されていた攻防戦もディージェントが吹き飛ばされた形で終わった。

「グッ！クウ……！」

「どうなさいましたか？仮面ライダー殿？」

倒れ伏したディージェントに、エターナルは見下したような声色で話し掛けて来た。

あの頭にカチンと来る喋り方からすると、あの井上運河とか言うナスカの男の様だ。

これは流石にこちらも加勢した方が良さそうだが、あの時アノマロカリスドーパントから喰らった攻撃が背中に直撃してしまって血が滲んできているために、動こうにも痛みが激しすぎて身体の自由が利かない。

（クソツ…何でこんな時に限って起き上がれねえんだよ……！ん…？俺ってさっきまで気を失ってたんだよなあ？）

ふと自分の不甲斐なさに苦虫を噛み潰したような顔をして悔やんでいると、気を失っている間に、声が聞こえてこなかった事に気が付いた。

一体何故？そう考えそうになったが、目の前の状況が状況だ。まずはこちらをどうにかする方が先決だろう。

さてどうするべきか？普段あまり回さない頭を最大出力でフル回転させていると、突如脳裏に何かの情報が流れて来た。

この感覚は、初めてディバイドライバーに触れた時の感覚と似てい

る。

（あん？なんだあこのシステム…？でもまあとにかく、まずはやらなきゃ始まらねえ！）

そう決断すると、右手を伸ばしてその先にあるデイバイドライバーを眼前に捉え、手元へ次元断裂を通して空間移動させる。

「カメンライド……」

「変っ…身っ……！」

「デイバイド！」

更にデイバイドのカードを取り出してデイバイドライバーのスリットに装填してから苦しい声ではあるものの、変身コードを唱えて手首だけでデイバイドライバーを小さく振ると、次元断裂が展開されてその中にヴァンの身体が包み込まれた。

「デイバイド！」

「ん？どうやら目を覚ましたようですねえ。彼は」

エターナルの呟きにディージェントが今の電子音声で聞こえて来た方を見ると、デイバイドライバーを杖代わりにして立ち上がるようにするデイバイドが目に入った。

「クツソオ、イッテエなあ……………」

「大丈夫？」

「全っ然、大丈夫じゃねえつつうのお……………。とにかく、目の前に集中しろお。俺も加勢してやつからよお」

「アツハツハツハ、可笑しな事を言いますねえ君は。そんな怪我をした状態では碌に立つ事もままならないでしょうに」

デイバイドの援護宣言にエターナルは、聞く人によっては不快感を煽られる笑い声を上げながら更に続ける。

「それに、私は勝負は一对一でしかやらない主義でしてね。例え貴方がまともに動けたとしても、決して相手にはしませんよ？」

「お前の都合なんざ知ったこつちやねえよ。こつちはやりたいようにやる。それだけだあ」

「フォームライド……………」

エターナルにそう吐き捨てる様に言い放ちながら、デイバイドは一枚のカードを装填した。

デイージェントにとってそのカード音声は、情報では知っているが初めて聞く音声だ。

（あの音声の場合は確か、ライダーの形態を変えるタイプだった筈……………。でもデイバイドにそんな機能は…成程、成長記録機能のおかげか……………」

どうやらデイバイドの成長記録装置が今の状況に適した機能をデイバイドライバーに追加し、たった今発現した能力の様だ。

果たして、どんな効果なのだろうか……………。

「一体何が起きんのか知らねえけど、やってやらあ！」

「デイバイド・ゴースト！」

気合で弱った身体に鞭打ってデイバイドライバーを何とか振るい、カードの効果を読み込ませた。その瞬間、デイバイドはその姿の残像を残してヴァンの身体だけが倒れ崩れた。

「ッ！」

デイージェントはすぐさまヴァンに駆け寄って身体を抱きかかえてアスファルトとの衝突を阻止すると、未だに残っているデイバイドの残像を見た。

そのデイバイドの身体は半透明に透けており、エメラルドグリーン
の輝きを放ち続ける自身の身体を見ている。

『あん？何だあこれ…身体が透けてる？ってか何で俺の身体がそこにあるんだあ？』

若干ノイズ掛かった声でこちらに振り向いて疑問の声を漏らすデイバイドを見て、デイージェントの中にこの能力に関する情報が流れ込んできた。

「『デイバイド・ゴーストフォーム』。デイバイドの特殊形態だよ」
「次は貴方が私の相手をするつもりですか？少し変わった能力の様
ですが、負けませんよ」

デイージェントが説明をしてる途中で、エターナルがクロックアッ

ブで一瞬で目視不可能な速度で半透明になったデイバイドに迫るが、何度かエターナルの影がデイバイドの身体を通り抜けた後に再び姿を現した。

『うおっ!?!…ってアレ?何ともねえなあ?』

「……どうやらその姿、攻撃をすり抜けてしまうようですね」

「それがデイバイド・ゴーストフォームの能力です」

デイージェントはゆっくりとヴァンの身体を壁に凭れ掛けながら、エターナルにそれだけ返した。

デイバイド・ゴーストフォーム…装着者の意識をデイバイドライバーに転送し、ドライバーとカード以外接触不可能なデイバイドのプログラムにデイバイドドライバーを使わせて戦闘をさせる形態であり、「分割」の役割を果たすデイバイドならではの力だ。

ただし、本体である装着者は完全に無防備になってしまうのだ。他にも本体と距離が離れ過ぎると接続が断たれてしまったり、「フイナルアタックライド」以外のカードは使えなくなったりと、意外と欠点も多いのだ。

『ふう〜ん…ま、要するに今の俺は無敵って事だなあ?』

デイバイドは何となくと言った感じで理解したのかそうばやくと、だるそうにエターナルへ剣を向けた。

『ま、こっから先は俺が相手してやんよお。このナルシスト野郎オ』

そう宣言すると、デイバイドはエターナルへ向かって鋭い斬撃を浴びせようと剣を振るった。

第四十五話：逆転の鍵はGノバーサーカーシステム、起動！（後書き）

加奈「加奈と！」

臯月「臯月の！」

加奈・臯月「あとがき〜ラジオ〜!!！」

加奈「まさかのヴァンさんの新フォーム登場！」

臯月「でもこのフォームってジャードの送ってくれた原案には乗ってなかつた事だよな？」

加奈「何でも作者が独自に考えたフォームらしいわよ。そして臯月、いい加減にさん付けしなさい!!」 脳天チヨップ

臯月「ええ〜でもさあ、ゼロの所の帝もウチの作者の事呼び捨てにしてるぜ？」 片手で防いだ

加奈「アレはウチの作者だから許してる事なのよ！呼び捨てにされると不快になる人だっているんだから、今後気を付けなさい!!」

喉仏チヨップ

臯月「グベエツ！？わ、分かりました……（お、思ったたより威力たけえ……）」

加奈「それで作者、何であんなフォーム考えたの？」

カンペ（いやあ〜書いてる内に「もうちよつと強くてもよくな？」とか考え始めた自分がいたんで、その意見を参考にしてどんなのが良いか考えた結果、ああ言うフォームが思い付いたんですよf（^ ^:））

臯月「それにしても変身した奴が倒れるってのはWと似てんな」

カンペ（それはぶっちゃけ偶然です（。A。））

って言うかWの世界にディバイドが出て来た時点で、もう既に接点があるんですよ)

加奈「そう言われてみればそうね。ディバイドって直訳すると『分割』でしょ？それってつまり半分に分かれてるWともある意味共通点があるわね。それにカラーリングもサイクロンと同じだし」
皐月「全部偶然ってのがある意味スゲーなオイ……」

カンペ(これもまた、ラルクオリティ…それでは次回の更新も、お楽しみに！ (-w-) ノシ)

第四十六話：逆転の鍵はG/幽体離脱形態！（前書き）

サブタイに何の捻りもねえ……orz

ホントはもつと捻ったサブタイにしたかったんですけどね、中々思いつかなかつたんですよハイ（。A。；）

そして伏線もかなりデカいんだぜコンチクショウ（^w^；）
ガンバレ…ガンバって回収するんだ、自分……。

それでは本編スタートオ！（；。。。）

第四十六話：逆転の鍵はG/幽体離脱形態！

デイバイド・ゴーストフォームはエターナルへ次々と剣戟を浴びせていた。

エターナルは手に持ったナイフで何とか防ごうとするもリーチが違い過ぎて対処がままならない。

『ホイホイホイホイイツとお〜』

「グツ！中々素早いですね……！」

あまりにもやる気のなさそうな掛け声であるにも関わらず、その剣捌きは鋭く的確なもので、エターナルをどんどん劣勢に追い込んで行く。

しかしエターナルもこの程度で負けるわけがない。

「ならば、これならどうですか!？」

『あん？おおおおう!？』

エターナルはクロックアップを発動させて超スピードでの連撃を仕掛け、その勢いに押されてダメージが通るわけではないにも関わらずに思わず仰け反ってしまう。

「気を付けて、彼の正体はワーム。クロックアップのスピードでの行動が可能だから」

『それ、言うの遅くねえ？』

「貴方達、漫才なんてやってる場合ですか？」

デージェントの遅過ぎる警告に軽くツッコミを入れてみると、ナイフの連撃が止んでエターナルがこちらと距離を取って溜め息を吐

いた。

「ですがまあ、どうやら貴方の身体は無防備になってしまつようですね。今の状態で攻撃を受けると、果たしてどうなるんでしょうねえ？」

『あ、ヤッベ…！』

デイバイドはエターナルに言われてようやくこの能力の欠点に気付いた。

自分の身体が今の状態でダメージを受けたらどうなるか分かった物じゃない。

そう思いエターナルが再びクロックアップをする前に斬りかかろうとするが、流石に向こうの方が断然速く、一瞬でデイバイドの背後回り込んでその奥に居るヴァンへと迫って来た。

「貰いましたよ！」

「それはこちらの台詞です」

だがそこに控えていたディージェントがエターナルの振りかざしたナイフを持った手を掴んで止めた。

如何に速かろうがその行動が単調であれば、ディージェントの反射神経で対処可能だ。

「何っ!？」

「それでは止めの一発、受けて来て下さい」

そう感情の籠っていない声色で言い放つと、今丁度ディージェントドライバーが即席で作成したカードをクラインの壺から取り出し、ドライバーに装填した。

「アタックライド…リジエクシオン！」

そして電子音声が鳴るよりも早く相手の鳩尾に掌底を放ち、淡々と宣言した。

「物理干渉、拒絶」

「ぬっ…！？あああっ！」

デージエントが言い放った刹那、エターナルは弾き飛ばされる様に後ろへ吹き飛ばされてしまった。

「リジエクシオン」のカードは本来、特殊周波を放つディジエクトでなければ使う事は出来ないのだが、前の世界で何度か接触し、ある程度ディジエクトの情報がデージエントドライバーに流れて来た為に、シックスエレメントでの擬似再現が可能になったのだ。ただし無理矢理に特殊周波を再現している為、一度しか宣言できない上にその反動は従来のも物よりも高い。

「クツ…！またも変わった能力ですねえ…！！」

「ああ…そうだなあ…」

「ファイナルアタックライド…デイディバイド！」

受け身を取ってアスファルトを四肢で削りながら減速して止まると、忌々しげな声色を漏らしていると、背後には「ファイナルアタック」のカードを装填しているデイバイドの姿があり、エターナルとデイバイドの間には十枚のビジョンが展開・ロックオンされている。

『ワームってんなら、別に問題ねえよなあ？代行者あ』

「構わないよ。イレギュラーを完全に消し去るのが、Dシリーズの

役目だからね」

『フウ〜ン、随分と真面目なこつてえ〜』

そう返すとデイバイドは剣を両手で持つて剣先を下に向け、肩の力を抜いた状態で構えた。

『さてつとあ〜、エターナルだったかその姿？アンタはここで、その名の通り永久に眠つとけえ〜』

「私に指図するとは…十年早いですよ！」

「エターナル！マキシマムドライブ！」

エターナルはドライバーからメモリを抜き、エターナルエッジに設けられているスロットへ挿入すると、その付近に着いたスイッチを押してマキシマムドライブを発動させて構えた。

どうやらヴァン本体を狙うのを諦め、デイバイドの方を撃退する事に決めたようだ。

『行くぜえ〜？お前はここで、グツスリと寝かし付けてやんよあ〜』

「アツハツハ、果たしてそれはどちらになるんでしょうねえ」

互いに軽口を叩き合った所で、デイバイドがビジョンを潜り抜けながらエターナルへと猛スピードで駆け抜ける。

対してエターナルはナイフを構えたままじつとしており、攻撃のチャンスを探っているようだ。

そして遂に互いの攻撃範囲内に入り、眼前に捉えた敵に向かってほぼ同時に自身の獲物を振り抜き、激しい爆煙が吹き荒れた。

麗奈と楓が屋外まで登り詰めると、そこには槍を持った青黒い仮面ライダーと、漆黒に染め上げた身体の仮面ライダーが戦闘を繰り広げていた。

しかし戦闘と言っても漆黒の仮面ライダー…ジョーカーの防戦一方で、槍を持った仮面ライダー…ディボルグが繰り出す槍による連撃をかわすのがやっとの様だった。

「駆!!」

「楓!？お前、何で来てんだよ!？待ってるって言っただろうが!」

楓の悲鳴にも似た叫びに気が付いジョーカーはディボルグとある程度距離を離してからこちらを向くと、その眼前に捉えた二人の女性を見て怒号を放った。

「う…それは悪かったと思ってるけど、でも心配だったんだから仕方ないでしょ!!」

「ケンカしてる場合じゃありませんよ二人とも!次が来ます!」

「え…うおつと!？」

麗奈の号令と同時にディボルグが無言でジョーカーへと駆け出し、渾身の突きを放って来るが、麗奈の警告のおかげでジョーカーは寸での所でかわす事に成功した。

（バーサーカーシステムが作動してる…と言う事は克也さんはもう…いや、完全に人格を消すにはまだ時間が掛かる筈。何とか変身を

解除させれば或いは……）」

デiboldグを見た感じ、どうやらバーサーカーシステムが作動している事は明確なようで、ああなるともうこの世界を破壊するか倒されない限り止まらない。

今の自分にアレを止める手立てはない。そうなるとこの二人に任せられないだろう。

そんな不甲斐ない自分に少なからず憤りを感じるが、今はこれしかない。この世界のライダーに任せるしか……。

「楓さん、お願いがあるんですけどいいでしょうか？」

「ん？何よ急に改まって」

「アレを、止めて下さい。アレに関してはある程度知識も持ってるので、それなりにアドバイスができると思います」

それを聞いた楓は軽く溜め息を吐くと、麗奈の顔に片手を近づけそして……

「ていつ」

「イタツ!？」

鋭い痛み of 走るデコピンをかました。

麗奈は涙目になって額を擦りながらもデコピンをかました張本人である楓を見た。

彼女は呆れた様な顔でこちらを見ている。何か変な事でも言ったのだろうか？

「な、何を……」

「別に貴女にそんな事言われなくてもそうするつもりよ。アレをこ

のままにしておいたら、絶対に被害が広がっちゃうだろうし、それに……」

そこで区切ると、ジョーカーを見た。

ジョーカーはディボルグの繰り出して来た薙ぎ払いを避けながら更に楓の後に続けて来た。

「ああ、こんなレディからの依頼だ。断るわけにはいかねえだろう……なっ！」

再び迫って来た頭部への突きを、今度は頬が擦れるくらいにギリギリの所でかわし、ディボルグブツカーを両手でガツシリと掴んだ。

「……………」

「うおっ！？とつとお！」

しかしディボルグは無言で槍を無理矢理振り回してジョーカーを引き剥がし、それによってジョーカーは宙を舞うが、空中でクルリと一回転するとそのまま華麗に着地を決めた。

「そういうわけよ。彼も貴女の事を必要としてる。貴女もアレを何とかしたいって言うのはもう分かっているんだから、態々そんな事言わなくてもいいのよ。アドバイス、よろしく頼むわね？」

「……………！はいっ！」

麗奈が思っていたよりも二人がアツサリと自分の頼みを聞いてくれた事に思わずキョトンとしていると、彼女はそう言っではにかみ、麗奈もそれにつられる様に微笑んだ。

そうだ。何も自分一人でしななければならぬわけじゃない。

現にこの二人もきつと、協力し合って来た筈だ。その絆は、何にも勝る力だ！

「よしっ！それじゃあまず、どうすればいい？」

「まずは彼にある程度ダメージを与えて下さい！そうすれば、ドライバーのセキュリティが一瞬緩んでその隙にベルトをはずせるようになる筈です！」

「意外と力押しだな…でもその方が分かり易い！」

「メタル！」

ジョーカーに指示を出すと、彼は銀色のガイアメモリを取り出しスリッヂを押しして起動させると、そのまま流れる様な手際でドライバに刺さった黒いガイアメモリを抜き取って銀色のガイアメモリを差し込んだ。

「メタル！」

するとジョーカーの漆黒のボディが銀色に染まり、仮面ライダーメタルへとフォームチェンジを果たされて背中にマウントされたステイクを手にとって軽く一回転させると、ディボルグに向かって突っ込んで行った。

ディバイドとエターナルが激突した際に吹き荒れた爆煙が風に乗って消え去ると、変身が強制解除された運河と、全くの無傷な状態で

立っているデイバイドが立っていた。

流星はゴーストと言うだけあって、どんな攻撃も受け付けていない。

「まさか、エターナルが敗れるとは……!!」

対する運河の方は苦悶の表情に歪めており、立っているのがやっとと言った感じだ。

「止めを刺すなら今だね」

『ああそうだなあ』

「クツ！拙い……!!」

ヴァンを庇うために待機していたデイージェントの言葉を皮切りに、二人は一斉に運河へと駆け出してそれぞれ拳と剣を振るってワームへと姿を戻した。

しかし受けたダメージが大きい為に、すぐさまクロックアップへ移行する事が出来ずに未だに狼狽している。

その隙にグラスホッパーワームへと最後の一撃を放とうとしたが……

「おっと、これ以上はやらせねえよ」

そんな声は何処からともなく聞こえたかと思うと、二人と運河の間に次元断裂が展開されて、攻撃を妨げられてしまった。

「!?!」

『アレ？何で壊せねえんだあ？』

デイージェントの漏らした驚嘆の理由を、デイバイドが代わりに口にした。

Dシリーズであれば、こんな次元断裂の一つや二つなど簡単に破壊

できる筈なのに、この次元断裂には罅一つ入らないのだ。

「今の声…そして、Dシリーズでも破壊できない次元断裂…もしかして……」

しかし、ディージェントにはこんな事が出来る人物には心当たりがある。

そしてその人物はすぐに次元断裂越しにその姿を現した。

「コイツはまだ使えるからな。ここでやられてもらっっちゃあ困るんだよ」

『あん？誰だあゝオツサン？』

「……また貴方ですか、神童さん」

グラスホッパーワームの横に並び立つように現れた神童に、二人が各々（おのおの）の反応を示していると、神童はディバイドを品定めでもするかのような目で見たのち、「フンツ」と鼻を鳴らした。

「成程な。“アビリティディバイディングシステム”・ディバイドか。しかも独自に機能が追加されてやがる。こりゃあぶつ壊しがいがありそうだ」

『…ツ！テメ………』

まるで物の様な言われ方をされたディバイドは、運河とは別の意味でカチンと来る神童の言い草に反論しようとしたが、見事に流して今度はグラスホッパーワームに指示を出し始めた。

「お前はまだ役に立つ。とりあえずコイツの連れを攫って自分の世界に帰りな。コイツも絶対に来るだろうからな」

「ツ！？まさか、亜由美を……！？」

『ホオ、亜由美と言うのですねあのお嬢さんは。随分と素敵なお名前です』

デーリエントの何時もとは違った感情の籠った狼狽の意味が窺える言葉を聞いたグラスホッパーワームは、納得した声色でそう呟くと、その場を後にする為に自分の後ろに次元断裂を展開させた。

『それでは私は彼女を連れて一足先にパーティ会場へ行ってお待ちしておりますよ、藍色の仮面ライダー殿。アツハツハツハツハ』

グラスホッパーワームはそう挑発的な態度でデーリエントに招待と言う名の宣戦布告を告げると、高笑いを上げながら次元の狭間へと消えていった。

「チイツ…！急がないと…ウ…ッ！」

急いでその場を後にしようとしたが、そこでようやく「リジエクション」の反動が出たのか、デーリエントドライバーから一瞬だけ電流が流れると、そのまま変身が強制解除され、膝について倒れてしまった。

（思ってたより、反動が大きい…。これだと空間移動もできないか…チツ！）

『オイオイ、大丈夫かよお？』

息を荒げながら自分の状態を推察する歩にデイバイドが声を掛けてみると、神童は見下したような目付きでこちらを見据えながら静かに問い掛けてきた。

「行くのは良いが、こっちの方は放つといてもいいのか？人形」

『あん？どついつ……』

ドゴオオオ……！！

デイバイドが聞き返すよりも先に、今近くにある建物の真上から轟音が轟いてきた。

その轟音に二人が上を見上げると、その内の一人である歩が再び小さく舌打ちをした後に呟いた。

「……チツ、ディボルグが暴走してる」

「言つとくが、お前が頭に血が上ってた時から暴走してたぞ？一応あの死体人形に保険を掛けておいて正解だったぜ」

『保険？何の事だあ〜？』

神童の気になる発言にデイバイドがそう訊ねると、彼は凶悪な笑みを浮かべながら非人道的な事を言つてのけた。

「なあに、奴がマキシマムドライブを受けても身体が消えない様にちよつくら細工をな。そうすりゃディボルグドライバーも身体が手に入って、好き放題暴れて自滅してくれるだろうからな」

『……反吐が出るくらいイケすかねえ野郎だな、テメエ』

デイバイドは怒りの感情を隠す事なくぶちまけると、当の本人はどこ吹く風で「何とでも思え」と言つて背を向け、更にもう一つ次元断裂を展開させてその中へと歩き始めた。

「俺はな、お前らみたいに何も知らねえで世界を好き勝手にイジつてく奴等が大っ嫌いなんだよ。お前等を全部ぶち壊せりゃあ、世界の一つや二つが消えようがどつって事ねえよ」

それだけ吐き捨てる様に言つと完全にその姿を消し、それと同時に展開されていた二つの次元断裂も消えた。

「何なんだよ今のオッサン、ワールドウォーカーだったみてえだが……」

「僕にもあの人が何者なのかは分からないけど、Dシリーズを敵視してる事は確かだね……。でもまずはディボルグの暴走を……クツ……」

「オイオイ無理すんなつつうの。フラフラじゃねえかあ」

歩は何とか立ち上がろうとするもその足取りは覚束無いもので、今にも糸が切れた人形のように倒れてしまいそうだ。

しかしそんな歩に肩を貸そうと手を触れるが、今のディバイドの状態ではすり抜けてしまつて掴む事が出来ない。

「ああ〜やっぱ一旦元に戻った方がいいかもなあ〜」

その後頭部を掻きながらぼやくと、ディバイドライバーの鰐部分に設けられたコンパクトなレバーを一回押し倒した後に剣を振るつた。するとディバイドのホログラム体とディバイドライバーが消えてヴァンの意識が回復した。

だがヴァンは重要な事を忘れていた。それは……

「イツダダダダダ!? しまった、怪我してたの忘れてたぜえ……!」

今現在ヴァンの背中にはアノマロカリストローパントが打ち込んだ牙の弾丸が深く刺さっているのだ。

これは流石に病院に行った方が良さそうだ。

「君はここで待ってて。すぐにカタを付けて戻って来る」

「まあ待ってつつつの代行者あ」

歩は都合上、携帯電話など持ち合わせていない。ヴァンには悪いがしばらくここに居てもらおう事になるだろう。

ヴァンにその旨だけを伝えてもう一度ディーゼントに変身しようとした時、ヴァンが待ったの声を掛けると、更に問い掛けてきた。

「お前、何そんなに焦ってんだあ〜？今行っても役に立たねえぞお〜？」

「……僕にはそれくらいしかできる事がない。それが今の僕の存在意義だから」

確かに、今の自分が言っても無力かもしれない。それでも行くしかないのだ。

そうでもしないと、自分と言う存在が保てないから。

「お前…なんつうかさっきのオッサンの言ってた通りだなあ。なんつうつか、誰かに動かしてもらわなきゃ役に立たねえ操り人形…つて感じだぜえ？」

「……………」

歩は無言でヴァンに振り返り、その金髪の下に隠された瞳を見据えた。

操り人形……確かにオリジナルの指示に従っているのだから、その表現も言い得て妙だ。

自分でもそんな事を自覚している節もあるが、それほど気にしてはいない。今までそうして生きてきたのだから……。

「ま、そこまで言うんだったら別に止めるつもりはねえさ」

「メンドクセエしなあ」などと付け加えながら彼は暢気に欠伸をすと、ある一点を指差した。
そこには先程まで運河が使っていたロストドライバーとエターナルメモリが転がっていた。

「あのチビ探偵の相棒のドライバー、壊されてるらしいからついでにそれも届けに行つてやったらどうだあ？今のお前でも、それくらい役には立つだろあ」

「……分かつたよ」

それだけ小さく返すと、歩はドライバーと一応の為にエターナルメモリを拾い上げて懐にしまい、既に装着しているディージェントドライバーへカードを装填して音声認証を唱えた。

「変身」

「カメンライド…ディージェント！」

ディージェントへの変身を果たすと、もう一度ヴァンに目配せをして、何かを小さく囁いてから最上部まで行く為に駆け出し始めた。

「……つたく、以外と世話の掛かるヤツだなあ〜アイツ。ありゃあ心配で見たらんねえつつうのお〜」

それを見届けながらヴァンは軽く苦笑しながら眩き、同時に“声”

が聞こえなかった原因にも気が付いた。

ヴァンは二年前なら世話を焼く性分だった。しかしディバイドライバーを手に入れた頃からそんな事に気が回らなくなり、何時しか自分の事しか考えなくなっていた。

しかし今、そんな自分と平等に接し、それでいて自分を気に掛けなような奴がいる。あんなのが傍に居ては、こちらはオチオチ夢を見る暇もない。

そしてディージェントが零した囁きは、ヴァンにはハッキリと聞こえた。その言葉は……

「『ありがとう』……かあ……その言葉を聞くのは随分と久しぶりだなあ……。こりゃ久しぶりにぐっすり眠れそうだぜえ……」

それだけ誰にでも無く呟くと、ヴァンは静かに寝息を立て始めた。今度こそ、最高の眠りへと誘われる為に……。

第四十六話：逆転の鍵はG/幽体離脱形態！（後書き）

加奈「加奈と！」

皋月「皋月の！」

加奈・皋月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「亜由美また飛ばされそうね」

皋月「相手がワームだったから今度はカブトの世界だろうな。つて
え事はついにアタシのリイマジが登場するって事が、一体どんな奴
なんだろうなあ〜」

加奈（どうしよう…キャラがメチャクチャ違う別人なんて言えない
……）

皋月「それにザビーにも変身するんだろ？あの肉弾戦スツゲエ憧れ
てたんだよなあ〜」

加奈「ま、まあカブト編の話はこれくらいにして、今回の話でもし
ましようよ」

皋月「ん？まあ確かにそつちの方の話もしとかないと時間の尺も余
るしな。それで今回は他にもデイボルグ戦が目立ってたかな？」

加奈「駆さんってホント凄いわよね。十倍近くスペックが上のライ
ダーと互角に戦ってるし」

カンペ（伊達に十年もライダーやってませんからね（^^*）

そして早く麗奈さんをデイボルグに変身させると言う声も上がって
るわけですが…それはぶっちゃけ次の章へ持ち越しです（。A。）（

皋月「いくらリクエストされたからと言ってもそこまで作者は万能
じゃねえからな」

加奈「そこら辺はどうかご了承くださいね。それでは次回の更新を
お楽しみに〜!」

皐月「ところで加奈、今思ったんだけどこの小説にも何か次回予告の時の決め台詞を作ってみねえか？キバの『運命の鎖を解き放て！』みたいなの」

加奈「あ、それ良いわね。それじゃあ次回の更新までに考えときましようか」

カンペ（と言うわけで次週から決め台詞で締めようかと思ひますので、どんな決め台詞になるのかお楽しみに（＾w＾）ノシ）

第四十七話：Aの悩み／今の自分にできる事（前書き）

さて、ここまで来てようやく終盤って気になって来ましたね。

。）

長い、長いよ…もう少しでファイズ編超えそうだよ…… C 〃)

;))

他の作品は一つの世界につき前後編で分けている物が多いですけど、
ここまで一つの世界にエライ話数を使う作品って早々ないでしょ？

— W 。)

これもまたラルクオリティと言うものか…それでは本編スタートオ

！ (。 W 。)

第四十七話：Aの悩み/今の自分にできる事

亜由美は楓の名刺に書かれていた場所まで辿り着くと、その目の前にある建造物を見た。

（何か、どっかの酒場みたいな場所なんだけど、ここでいいんだよね…？）

亜由美の目の前にあったのは、何処かの西部劇に出て来そうな面持ちの木材のみで建てられた年季の入った建物だった。

一応看板に「西方探偵事務所」と書いてあるわけだし、ここで合っている筈だ。

とりあえずノックをしてから中に入ってみると、内装は意外と普通の事務所の待合室で、ソファやコーヒースェット、灰皿と言った来客用に置いてある物もあれば、果てはクマのぬいぐるみなんかもある。何でぬいぐるみ？

「楓さんの…じゃないよね？加奈もそんな趣味なかったし」

楓の趣味ではない事を祈りつつ、何となくそのぬいぐるみを取ってみると、首に着けたりボンに一枚の紙が張り付けられており、そこには子供の字で「ありがとう、たんでいさん」と書かれていた。どうやら子供からのお礼の品のようだ。

こう言うのを見ると、何処か微笑ましい物もある。

「やっぱり頼りにされてるんだなあ…。ん？でも私って、歩に頼りにされてるのかな？」

以前歩の潜在意識の中に入った時に門矢土に「お前は必要だ」とは言われたが、何がどう必要なかがイマイチ分からない。それに今だって、歩の戦いの邪魔にならない様に、こうして安全な所に来ることくらいしかできていない。

正直これで良いのだろうかと思ってしまう。

確かに自分には空間移動以外にはまったく取り柄がないし、戦闘なんて天地がひっくり返ろうと絶対に無理な話だ。

(何で一緒に居るんだろうな、私……)

歩と初めて会った頃、彼は亜由美の事を“保険”と言っていた。今は流石にそうではないと何となく分かるが、それでも足を引っ張ってる感があるのがまた辛い。

自分にできる事とは一体何なのだろうか？などとそんな事を悶々と考えている内に、外の景色は夕日に包まれつつあった。どうやら相当考え込んでいたらしい。

そして今自分はソファに座ってのんびりとしているわけだが、そんな自分がどこか気に喰わない。

きっと彼等は今でも戦っていると言っのに……。

「ハア…私にできる事って、あるのかなあ？」

コンコンコンッ

亜由美が嘆息をついていると、不意に事務所の玄関からノックの音が聞こえてきた。

誰かが依頼をしに来たのだろうか？しかし今はこの事務員である楓やその相棒である駆と言う人物は留守にしている。

とりあえず用件だけ聞いて今日の所は帰ってもらい、また後日来てもらおうかと考えを巡らせると、その事務所のドアを開いて目の前に立っていた紳士然とした男を見た。

その男は黒いタキシードを身に付けた二枚目顔の優男で、常にビジネススマイルを振りまいている印象を与えている。

その男はスマイルにワンランク爽やかさを際立たせると、紳士的な口調で話し掛けてきた。

「初めまして。貴女が亜由美と言うお嬢さんでよろしいですか？」

「え？あ、ハイ、そうですね……」

突然見も知らぬ男に名前を当てられて驚くも、正直に肯定した。

すると目の前の男はその笑顔に何か別の感情を混ぜ込んだ笑顔になり、唇を軽く舐めて湿らせてから自己紹介を始めた。

「私の名は井上運河と申します。貴女をパーティー会場へご招待する為に来ました。私の住む世界と言う名の、ね……」

「ッー！」

そこまで言い切った所でこの男の異常性によく気付いた。

“私の住む世界”…それはつまりこの男がこの世界の人間ではない事を示している。

そして彼の笑顔に混ざった感情とは…狂気その物だ。

すぐに踵を返して逃げようとするが、即座に腕をガツシリと掴まれて逃げる事が出来ない境地に立たされてしまった。

「は、放してっー！」

「ご安心を、私は女性に手荒な真似は致しません。貴女はただ私と

再びディボルグドライバーから電子音声が流れ、リロードが宣言されると、ディボルグは槍を大きく振るってメタルを後退させ、ディボルグブツカーからカードを一枚引き抜いてバツクルに装填した。

ディボルグは一度バーサーカーシステムが作動すると、滞在世界が破壊されるまで変身が解除されないようにプログラムされている。そのためライドカードを全部使ってしまったえば、もう一度使用出来るようにバーサーカーシステムがライドカードシステムを復元して来るのだ。

「アタックライド…ディメンション！」

「ッ！下がってください！！！」

「言われなくとも！」

メタルは一度あのカードの効果で何が起こるのか見ていた為に、麗奈の警告よりも一足先にバツクステップで距離を取ると、その瞬間に先程までメタルがいた場所から槍が何本も突き出して来る。しかしそれだけに止まらず、まるで波の奔流の如く槍が地面から突き出しながらこちらへと迫って来た。

「うおっ！？こっち来やがった！！！」

その迫力に驚くも何とかサイドステップでかわすと、槍の奔流はそのまま一直線に駆け抜けていき、風都タワーの巨大風車の土台部分に激しい衝撃音と共に直撃する形でようやく収まるが、その衝撃で風車が大きく揺らぎながら「ギギギギ」と言う嫌な音を立て始めた。

「拙いわね…このままだとそう時間が経たない内に崩れるわよ」

「ったく克也の野郎…死んでも面倒掛けさせやがって……」

「いえ、克也さんはまだ消えてはいない筈です」
「何…?」

楓が巨大風車を見上げながらばやくのを余所にメタルが愚痴を零している、麗奈から思わぬ一言が飛び出した。

「確かにバーサーカーシステムは装着者の人格を消しはしますが、完全に消すには時間が掛かる筈です。今はどうかは分かりませんが、ど、上手く行けばきっと……」

「克也は助かるってわけか…こりゃあ更に気合入れてかないとな！」

「メタル！マキシマムドライブ！」

麗奈の助言を聞いたメタルは、元から入っていたやる気を更に二割増しさせながらメタルメモリをメタルシャフトに設けられたマキシマムスロットへ装填させると、メタルシャフトの両端が銀色のエネルギーを纏い始める。

「ライダーストライク！」

「アタックライド…スラッシュ！」

技名を掛け声代わりに叫びながら、「デイメンション」のモーションから立て直している最中のデiboldグへと迫るが、当然デiboldグもその接近に反応し、敵を迎え撃たんとする為に即座に「スラッシュ」のカードを発動させてデiboldグブツカーを構える。

「……………」
「ふっ！おらあああー！」

しかしメタルはデiboldグの高速の突きを左肩を掠めるほどのギリ

ギリの距離で避けると、渾身の力でメタルシャフトをその胸部へと思いっきり叩き付けた。

それと同時に先端に纏わりついた銀色のエネルギーが、ディボルグのボディに流し込まれてダメージを増大させる。

「もう一丁おおお!!」

更に追撃としてもう片方の先端にも纏わりついた銀色のエネルギーも、身体を捻って強引に叩き付ける。

マキシマムドライブが完全には行った所で一旦後退して相手の様子を窺うと、ディボルグのバツクルからあの無機質な女性の電子音声が流れてきた。

「ディボルグノ損傷率、50%ヲ突破。危険レベルツーニ達シマシタ。ライドカードシステムノ併用ヲ許可シマス」

「うしっ!ようやく半分か!」

「でも気を付けて下さい!ここから先はカードを組み合わせて使えます!」

「合点承知!」

ガッツポーズを取るメタルに麗奈が警告を放つと、彼は正面を向いたまま背後に居る麗奈達に軽く右手を上げて返事を返し、すぐに目の前の相手に集中し始めた。

彼の戦いは、これからだ……。

「それにしても、見てるだけって言うのも何か癩なのよねえ」

ふと横に居る楓がそう小さく呟いた。

それはまあ確かに、今まで一緒に戦ってきただけに見ているのは歯痒いだろうし、自分だってそうだ。

「私さ、アイツと初めて会った時には、まったく戦わせてもらわなかったのよねえ。今の気分は、そんな感じ……」

これは自分に言っているのか、それともただ誰にでも無く独白しているのかよく分からないが、聞いておいた方が良さそうな雰囲気だ。それほどまでに、彼女はどこか寂しそうな雰囲気だった。

「その戦わせなかった理由ってのがさ、“恩人の娘さんを傷付けるわけにはいかない”って言うしょうもない理由だったのよ。まあその頃は私もまだ高校を卒業したばかりの頃だったから、まだまだ子供だったんでしょうけどね」

彼女はそこまで言って言葉を区切ると、こちらを哀傷漂う表情で向いて更に続ける。

「今のアイツを見てると、その頃に戻っちゃったような気がする……。私だって、本当はアイツと一緒に戦いたいのに、ね……」

疎外感……そんな言葉が麗奈の脳裏を過ぎった。

彼女だって彼の役に立ちたいのに、今はこうして見ている事しかできない。

それが彼女にとって何よりも歯痒く、辛いもの……そう麗奈は感じた。

「貴女も、仮面ライダーなんですよね？だったら何故変身できないんですか？」

「アイツに私のドライバーを貸しちゃってるのよ。アイツのは壊されちゃったからしょうがない事なんだけど……」

戦うと言う単語から、恐らく彼女も仮面ライダーだと確信してそんな質問を問うと、仕方なさそうに息を吐きながらそう返した。

今の彼女にどんな言葉を掛けてやればいいのだろうか？

「心配しなくても大丈夫」？それとも「貴女だって彼の助けになってる」？

どれも上辺だけの言葉で、まったくの無関係の人間である自分が言っても何の説得力もない物ばかりだ。

そんな言葉を投げかけ、彼女を安心させられるのは、楓の相棒ただ一人だ。

そしてそんな相棒もまた、ピンチに陥ろうとしていた。

「アタックライド…ブラスト！」

「アタックライド…ラッシュ！」

ディボルグが二枚同時にカードをバツクルに装填させ、ディボルグブッカーに備えられたトリックスターを掌で叩いてカードの効果を読み込ませると、メタルに向かって突きを連続して放ち、その矛先からエネルギー弾を機関銃の如く乱射してきた。

「ぬおっ！？マズ……ぐあああああ！！！」

彼女の相棒は鈍重なメタルの状態では流石に避ける事が出来なかったようで、ディボルグの放つ弾幕に晒されて装甲から火花を散らしながら吹き飛ばされてしまった。

いや、正確には避けるわけにはいかなかったのだ。
メタルの後ろには変身が出来ない自分達二人がいる。ここで彼が避けなければ攻撃がこちらに迫ってきてしまう為に、自分が喰らうしかなかったのだ。

「駆さん！」

「とりあえず攻撃の当たらない所まで行くわよ！」

ギギギギギギ……！！

楓は叫ぶ麗奈に、相棒の邪魔にならない場所まで移動する為に呼びかけるが、それは起こった。

ふと頭上から金属を無理矢理捻じ曲げたかのような不快感を煽る騒音が聞こえて来たのだ。

麗奈と楓は上を見上げると、予想通りと言うべきか巨大風車を支える土台が手痛いダメージを受けた事からバランスが崩れ、風車がこちらへ向かって倒れて来ていた。

どうやらディボルグの放った流れ弾のいくつかが風車に当たってしまったようで、その耐久力が遂に限界に達してしまったようだ。

「早く逃げるわよ……！」

「は、はい……！」

逸早く現状を理解した楓が麗奈の手を引いて急いで被害のない位置まで移動しようとするが、倒れるスピードの方が早くて間に合うかどうか怪しい。

「ッ！マズイ、楓！！」

メタルも風車が倒れて来ている事に気付いて相棒の名を叫びながら、急いでそちらへ駆け出そうとしたが、今ディボルグに背を向ければ間違いなくやられる。

どうする？二人を庇おうとすればディボルグにやられて下手すればどちらも助からない。

しかしディボルグに集中していても二人は間違いなく助けに行けられず、運に任せるしかない。

(チッ！どうすれば……！)

「目の前に集中してください」

突如そんな感情の籠っていない声が聞こえてきたかと思うと、楓と麗奈に藍色の何かが覆い被さり、崩れた風車の瓦礫から二人を庇った。

一瞬何が起きたのか分からなかった。

いきなり何かが麗奈と楓の目の前に現れたかと思うと、風車の瓦礫から庇うかの様に両腕を広げて二人を抱き寄せると、幾つかの鉄材に直撃しながらも二人に傷を負わせまいと身動き一つしなかった。

やがて全ての鉄材が落ちてその目の前にいる者を漸く把握した。

ディボルグに酷似しているものの、ライドプレートの刺さり方が全く異なる未知の仮面ライダー……ディージェントだった。

「あ、歩…さん……？」
「……………」

麗奈がこの仮面ライダーの本名である名を呼び掛けるが、何も喋ろうとしない。

どうしたのだろうともう一度呼びかけようとすると、その仮面ライダーは二人に凭れかかる様に倒れながら変身が強制解除され、白いスーツの青年に戻った。

「歩さん！？」

「ちよ、何で庇ったのよ！？アンタだったらもっと別の方法があるでしょ！？」

二人がかりで楽な姿勢にさせながら麗奈が驚愕に満ちた声で呼び掛け、楓が若干怒鳴り付けるかのように疑問をぶつけた。

確かに彼の能力であれば、このような状況でも何らかのもっと安全な対処ができた筈だ。

すると歩は声を絞り出すかのように理由を何時もの淡々とした口調で答えた。

「身体への負担が激しくて、カードを使う気力もないんです…………。それよりも、これを……………」

麗奈と楓が声を掛けると、歩は懐から何かを取り出した。

それはこの世界のライダーが使う変身する為に使うドライバーだ。

「アンタまさか、これを届ける為に態々…！？」

「今の僕では戦う事ができませんし、これくらいしかできませんから……………」

楓がドライバーを受け取りながら歩の目をまじまじと見ながらも一度話しかけると、またも抑揚のない声が返って来た。いくらライダーに変身していたからとはいえ、あの瓦礫を全て受けるなんて正直ふざけてる。

しかし彼は至って真面目で、こうして当たり前かのような雰囲気だ。それを楓も理解したのか一瞬呆れたように溜息を着いてから彼の額に右手を近づけると……

「ていつ」

「イタツ」

自分にやったのと同じデコピンをかました。

麗奈も一度喰らっているのですがその痛さが半端ない事は知っているのだが、デコピンを喰らった当の本人は軽く針でも刺さったかのように極小さな反応を返すだけだ。

痛みに鈍感なのか、それともこれで本気で痛がっているのか分からないが、楓はそんな歩の様子を無視して言い放った。

「気持ちは嬉しいけどねえ、そんな捨て身で助けられてもこっちは後味が悪いだけなの。もっと自分も大切にしなさいよアンタ」

「……分かりました」

歩が一拍置いてそう短く答えると、楓は「素直でよろしい」等と言いながら立ち上がり、目の前の戦闘を見据えた。

彼女の相棒は今もディボルクにメタルシャフトを使って接近戦で肉迫している。ここで楓が起こす行動と言えは一つだろう。

「さて、ここからは私も混ざるわよ……いいわね所長？」

「サイクロン！」

「ああ、よろしく頼むぜ？相棒」

楓はメタルにそう言い放ちながらドライバーを腰にセットしてサイクロンメモリを取り出すと、メタルはディボルグの槍による薙ぎ払いをかわしながら一瞬だけこちらを一見してそれだけ返すと、今度は歩に向けて言っているであろう言葉を繰り返した。

「そこの倒れてる奴もご苦労だったな。後は俺達年配者に任せとけっとお！！」

「そい言う事。後は休んでなさい。変身！」

「サイクロン！」

言い切る前にディボルグが突きを放つがそれをメタルシャフトで流し、再びディボルグと鬨ぎ合い、楓もその戦闘の渦中へ飛び込む為にサイクロンへと変身を果たす。

歩はその様子を見て、一つの可能性に懸けてみる事にした。

この世界のライダーが、次元を超えるほどの力を持ったDシリーズに勝利する事を……。

第四十七話：Aの悩み／今の自分にできる事（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「今回でようやくジョーカーとサイクロンが並んだわね」

皐月「W編もようやく終盤か…長かったような気がするな」

加奈「まあW編からは週一更新になっちゃった上に、この時点でフ
アイズ編の長さを超える事は確定してるからねえ〜」

カンペ（更新スピードが遅くなった事には、ご迷惑をおかけします
m（――）m）

皐月「にしてもこの調子だと、どんどん一章の話数が増えてきそう
だけど大丈夫か？」

加奈「大丈夫なんじゃない？カブト編はそれほど長くする予定はな
いとが言ってたし。大体龍騎編くらいの長さにするって話よ」

皐月「……今思うと、龍騎編って意外と短いよな。W編が約二十話
なのに龍騎編はその半分って……」

カンペ（真司君、マジでゴメン。当時の未熟な私を許してくれm（
――m（；））

加奈「言っちゃあ何だけど、まだ未熟だと思っわよ作者……」

皐月「次の章に出て来る募集ライダーも魔改造確定みたいだしな」

カンペ（それは言わなくてくれ頼むから!!（；）（；）（

加奈「まあ空風さんが広い心で許してくれば話は別だけどね。それでは今回のあとがきラジオはここまで！次回の更新も……」

皐月「その物語の真実を、見逃すな！」

加奈「……って先週言ってた決め台詞って、それ？」

皐月「らしいな。とりあえず終わるときはこれからはこの決め台詞で締めるらしいからよろしくな」

第四十八話：Aの悩み／これで決まりだ！（前書き）

今回の話を読むにあたっての注意事項！

最後のシーンは涙腺崩壊するかもしれないので、ハンカチをご用意

ください！（A、）、。。。。

それではスタートオ！（；；；）

第四十八話：Aの悩み／これで決まりだ！

楓はサイクロンへの変身を果たし、メタルへ加勢する為に一気に駆け抜ける。

現在メタルはディボルグの振り翳す槍によって、鏝迫り合いの状況に陥っている。

歩が言うにはあの仮面ライダーはパワーだけは無駄に高いらしいので、早く手助けに行った方がいいだろう。

サイクロンの特性による風の恩恵を受けて猛スピードで距離を詰めると、その勢いに乗った状態でディボルグを思いっきり殴り付けてメタルから引き剥がす。

「てりゃあっ！！！」

「サンキュー！楓！！！」

「滞在世界ノライダーノ増援ヲ確認。危険レベルスリーニ達成。ライドカードシステム、オートリロード機能ノ使用ヲ許可シマス」

サイクロンのサポートにメタルがサムズアップしてそれだけ返している、再びディボルグドライバーから電子音声による報告がなされる。

聴いた感じでは、今度はカードを無尽蔵に使って来るようだ。

「ったく、どんどん面倒になって来るなコイツ」

「みたいね。でもこうやって徐々にリミットを解除して行くと事は、それだけ負担が強いつて事なんじゃないの？」

今のディボルグは、例えるなら長距離マラソンを走っているのと同

じだ。

早く走れば走るほど、疲れが溜まり易くなって何れは動けなくなる。こつやつて徐々に手強くなっていくと言う事はつまり、それと同時に自分の首を絞めている事にもなるのだ。

サイクロンの仮説を聞いたメタルは「成程な」と小さくばやくと更に続けた。

「だったら今がある意味チャンスでもありピンチでもあるな。克也が死ぬまでに絶対に倒すぞ」

「了解、所長」

「アタックライド…スラッシュ！」

サイクロンが所長の決定方針に短く返事を返していると、ディボルグはおもむろにカードを一枚取り出して「スラッシュ」効果を発動させると、こちらへ迫って来た。

「ジョーカー！」

「行くぞ！楓！！！」

「ジョーカー！」

「ええ！分かってるわよ！」

メタルがジョーカーメモリを取り出してスイッチを押しながら号令を放つと、サイクロンは何処か活き活きとした声色で言い返しながら、ジョーカーへとメモリチェンジした相棒と共にディボルグを止める為に駆け出して行った。

「……やっぱり、彼女にとってあの場所が居場所なんですね」

麗奈は何処か活き活きとしているサイクロンの様子を見て誰にでも無くそう呟いた。

先程彼女が零していた愚痴の通り、やはり彼の傍にいる事こそが藤原楓と言つ名の一の女性のいるべき場所なのだろう。その証拠に、今の彼女には先程の陰りが一切見えない。

「居場所、か……」

ふと隣から仰向けに倒れている歩がそんな事をぼやいていたのが耳に入った。

徐にそちらを見やると、彼はただただ虚ろな目で夕焼けから夕暮れに変わりつつある空を見上げているだけだ。

そう言えば、彼について分からない事がいくつももある。

例えば彼が所有しているディボルグドライバーと酷似しているDシリーズと言っていた装置…アレは自分の上司に当たる人物がある日落ちていたのを拾った物だ。

自分のいた世界でも、アレは間違いなくオーバーテクノロジーで造られたと分かるほどに高性能な物。

そんな物を持っていて、尚且つそれについて詳しく理解しているとすれば、只者ではないだろう。

彼はある計画の遂行の為に動いていると言っていたが、そんな彼に

居場所なんてあるのだろうか？
そんな事を考えながら、この青年に一つ訊ねてみた。

「あの、聞いても良いですか？」
「なんだい？」

声に感情が籠っていない為に素っ気なく聞こえるものの、しっかりと聞いている事を確認すると更に続けた。

「歩さんには、あの人達みたいな居場所はあるんですか？世界中を渡り歩いてると言っていましたか……」
「……………」

それを聞いた歩はどう答えようか悩んでいるのか、しばらく黙ってしまった。やがて考えがまとまったのか軽く息を吐き捨てて一拍置いた後、その質問に答えた。

「……………僕の居場所はもうない。完全に破壊されてしまったから」「破壊された？」

歩の言葉を反芻するようにオウム返しに答えると、彼はまたも一拍置いてから短く簡潔に答えた。

「僕が壊した」
「……………」

それだけ言うとまたも黙って虚ろな目で空を見上げる。
克也の時と違って感情の浮き沈みが浅すぎて何を考えているのか分からないが、嫌な事に触れてしまっていたような気がした。

「そ、その…ごめんなさい！ 気になって、つい……！」

「そんなに気にしなくても良いよ。それに、今の僕にはああ言う居場所がある」

麗奈が聞いてしまった事に対して謝ると、歩は大して気にした素振りを見せる事なく、ある一か所を指差しながら質問の続きを答えた。

歩が示した方向には、ディボルグに奮闘するこの世界の二人のライダーがいる。彼が言っているのはきつとサイクロン…楓の事だろう。

「今の僕には、家族みたいな人がいる。その関係は、あそこにいる二人と似た様な物？ だから」

「何で大事な部分だけ疑問形なんですか？」

何故か最後の部分だけ自信なさげに答える歩に、思わずツッコンでしまった。そこは自信を持って答えましょうよ……。

「向こうがこつちをどう思ってるか分からないからね。確信が持てない限り断言できない」

どうもこの青年はかなり引っ込み思案な性格らしい。

彼の言う人物が一体どう言った人なのか分からないが、家族と言っているくらいなのだからもう少し期待しても良いのではないだろうか？

そう思っていると歩は更にその人の事について続けた。

「それに、無理矢理連れ回してるようなものだし、僕が彼女の世界に立ち寄らなければ、こんな計画に巻き込む事もなかった……。その所為で、彼女が別の世界に連れ去られてしまった…本当に悪い事をしたと思ってる……」

まるで肅罪の言葉を述べる様に、彼は淡々とその人の事を吐露した。先程の楓の弱音と言い、これでは自分がシスターになった錯覚さえも覚えてしまいそうだ。

だが、彼が思い悩んでいる事が分かって、少しだけ安心した。歩と初めて会った時、この青年には感情と言う物が一切ないように思えていた。

それはまるで、心を持たない機械や人形が何の起因もなく勝手に動いているかのような不気味さを醸し出している印象だった。

しかしこうして話してみればどうだ？彼も悩みを抱え、他人の事を考える一人の人間だと実感させられる程に人間味を帯びている。

先程歩が自分の世界を壊したと言っていたが、少なくともそんな事をするような人には見えないし、歩が話している人物も、そう簡単に彼を裏切る様な真似はしないだろう。

それなのに彼は自信が持たなくてこうして内側に溜め込んでしまっている。それなら赤の他人である自分から言える事は一つだ。

「歩さん…貴方はもつと周りに頼っても良いと思います」

「……？」

麗奈が話しかけると、歩はチラリとこちらを見て何の話をしているのか分からないと言った雰囲気で軽く首を傾げた。

麗奈はその見た目と動作のギャップに内心苦笑しながらも、促されるように更に続ける。

「周りに頼る事は別に悪い事ばかりじゃないんです。確かにヴァンさんに戦う事を協力してもらってたりもしますが、アレは頼ると言うよりも効率を考えた理論的な判断…と言った感じですよ。もう少

しくらい、誰かに甘えても良いんですよ」

そう言い切ると、歩は僅かに微笑んで近くにいないと聞き取れないほどに小さな声で呟いた。

「そうか……。前にも彼女…亜由美にも似た様な事を言われたよ…」

歩はここに来てようやくその人の名前を口にした。ある程度自分に心を許したと言う事なのだろうか？

現に今の彼は何処かつつかえが取れたような雰囲気だ。しかしそれだけでも言ってみた甲斐があったと言っものだろう。

「アタックライド…ディメンション！」

「ッ！楓！二手に分かれるぞ！」

「分かったわ！」

ふと前を見ると、ディボルグが「ディメンション」を発動させて無数の槍を床から生成して、周囲一帯を槍の草原に変えていた。

それに対してジョーカーがサイクロンに散開する様に指示を出して、二人はその場から離れて難を逃れる。

やがて槍の生成限度が来たのか突き出す槍が現れなくなったのを境に、ジョーカーとサイクロンが同時に槍の合間を掻い潜りながらディボルグに迫ってほぼ同じタイミングで殴り付けた。

「凄い……」

その戦いを見て思わず麗奈はそう驚嘆の声を零した。

一部の戻った記憶の中でも、少なくとも自分のいた世界にある既存

の兵器でも歯が立たなかつた程なのだ。アレを倒す事は容易ではない筈なのに、あのデИБルグを二人がかりとは言え圧倒している。一体何故……？そう思っているのは歩の同様に、その戦いを状態を起こして食い入るように見つめている。

「良く見とけよ、若手の仮面ライダー達」

「例えどんなに強い奴でもね……」

デИБルグが数瞬遅れて槍を振るうが、ジョーカーとサイクロンは後ろへジャンプして悉くかわすと、ジョーカーが正面を向いたまま此方に話し掛けてきて、それに続く様にサイクロンも紡ぎ出す。

「街を…守るべき物を壊そうとする奴には……」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

サイクロンの後に続きながら、ジョーカーはドライバーからジョーカーメモリをマキシマムスロットへ挿し込んでマキシマムドライブを発動させる。

「絶対に屈しない」

「サイクロン！マキシマムドライブ！」

更にサイクロンもそれに続いてジョーカーと同じく自身のガイアメモリをマキシマムスロットに挿し込むと、ジョーカーが左手をスナップさせるのと合わせて、右手を軽くスナップさせる。

「それが……」

「私達……」

『仮面ライダーだ!!』

最後に声を合わせて互いにスナップした手でディボルグに指差すと同時に、サイクロンのマキシマムドライブの効果で周囲に突風が逆巻き、ディボルグの動きを牽制する。

その風に乗る様に、二人の仮面ライダーは息の合ったジャンプで高く跳び上がる。

「行くわよ、駆」

「何時でも良いぜ、相棒」

サイクロンのマキシマムドライブ時に発生する突風によって傍にいるジョーカーにも風による恩恵が与えられてサイクロンと同等の高度まで上昇し、やがて最高到達点まで舞い上がると、サイクロンの問い掛けにジョーカーが頷き返した。

『ライダー・ダブルキック!』

これまた同時に技名を叫びながら左右対称に飛び蹴りに態勢に入り、風に乗ったライダーキックを放ち、ディボルグへ目掛けて直撃して吹き飛ばした。

やがて二人が着地すると、二つ同時のマキシマムドライブを受けても尚、立ち上がるディボルグの姿を見た。

「クソッ!まだ駄目か…!」

「ならもう一度……」

ジョーカーが未だに戦闘を続けようとするディボルグに毒吐き、サ

イクロンがもう一度マキシマムドライブを発動させようと構えた時、それは起こった。

「デiboldグ損傷ダメージ、超過シマシタ。フリーズシマス」

デiboldグドライバーからそんな報告がなされた。

フリーズ…つまり動きが止まると言う事だ。そしてその言葉の通りにデiboldグの動きが完全に停止し、デiboldグドライバーから小さく「カチリ」と言う何かが外れた音が聞こえた。どうやらセキユリティが緩んだようだ。チャンスは今しかない。

「楓！今だ！！」

「了解！」

ジョーカーが一番素早く動けるサイクロンに指示を出すと、彼女は超スピードでデiboldグに迫ってバツクルを掴んで無理矢理引き剥がした。

するとデiboldグの身体がダークブルーのノイズに包まれて消えて行き、やがて装甲を纏っていた克也が露わになって呪いの鎧の呪縛から解放されると、彼はそのまま膝を突いて倒れた。

「う…ぐうう……。まさか、こんな結果になっちまうとはな……」

（装着者の肉体が分解されていく…神童さんの話だと、マキシマムドライブで消えない様にしていると言っていた筈だけど…どうやらバ―サーカーシステムの負担は除外されてたみたいだね……）

どうやらまだ意識が残っているようで、倒れた克也の口からそんな小さな声が漏れるが、彼の身体から塵が噴き出し始めて徐々に身体が消えていくのを見ながら歩は推察していた。

いくら神童による細工と言えど、ディボルグへの変身による負担は耐え切れなかった様だ。いや、正確には敢えてそこまでを範疇に入れずに細工をしたのだろう。

そうすればこの世界を破壊した後に装着者である克也がまたディボルグドライバーを使うという危惧が無くなるのだから。

「ぬ…うおあああああ…！！！」

しかしそれでも尚、克也は動かない筈の身体を無理矢理動かして立ち上がると、ジョーカーとサイクロンを荒々しく息を乱しながら睨んだ。

「はあ…はあ…！！！」

「コイツ…まだやるつもりなの…？」

「当たり前…前だ…！こんな形で…消えるつもりは…ねえ…！！！」

サイクロンの呟きに克也は身体が消えていく痛みに苦しみながらも、声を絞り出した。

やっと駆との因縁の対決にけじめを付けて三度目の死を全うする筈だったのに、こんな無様な…駆と俺を生き返らせた奴等の娘なんか

に助けられた上で消えるつもり等さらさらない！

しかし今尚自身の身体からは分解して塵へと変換された肉片が大気中へと散っていく。

まだこんな所で消えたく…死にたくない！！

「……………少し、良いですか？」

ふと声のした方を克也と仮面ライダー二人が見ると、そこには第三者である別の世界の仮面ライダーとも言える人間の一人が、感情の籠ってなさそうな声色でこちらに覚束無い足取りで歩いて来た。

「何の…用だ…！？俺にはもう…時間が…！！！」

「これは、貴方のメモリですか？」

克也の次の句を無視してその駆と同じファッションの男は懐から一本の白いガイアメモリを取り出した。

そのメモリに描かれていたイニシャルは“E”。間違いなく、自身が持つべき運命のメモリ・エターナルメモリだった。

「何故…貴様がそれを……………！？」

「理由は分かりませんが、エターナルを倒した後、このメモリを持つて行った方が良いかと思いましたが、今まで持ってたんです」

人とメモリは惹かれ合う…何時かそんな話を聞いたのを思い出した。

理論はよく分からないが、ガイアメモリに内包されている記憶が適合者と惹かれ合い、その人物の下へ自然と集まって行くのだそうだ。

剛や健にメモリを与えた時だって、二人は迷うことなく自身に適合

できるメモリを選び、ドーパントへと変わった。

そして自分の目の前にも、運命とでも言うべき現象が起こり、この男が自分の下まで届けに来てくれたのだ。

「変身していれば、しばらくは持つ筈です。コレを使って、まだ戦いますか？」

「アンタ、何言ってるの！？そいつはこの街を壊そうとしたのよ！？そんな奴に今更ガイアメモリなんか渡しても、被害が広がるだけよ！！」

何の因果か、この男は自分をもう一度仮面ライダーとして駆ともう一度戦わせようとエターナルメモリを克也の前に差し出すも、この男の行為に反発するかにようにサイクロンが批判の意を唱えた。

まあそれも当然の事だろう。自分は最早害悪以外の何物でもない、ただの悪魔だ。

そんな人間とも言い難い奴に、メモリを使わせる事を許すわけがない。

「いや待て、楓」

「え…？」

しかしジョーカーがサイクロンの前に遮るように手を出してそれ以上言わせるのを止めた。何のつもりだ一体…？

サイクロンがその行動に呆気に取られていると、ジョーカーは自身の意見を紡ぎ始めた。

「アイツはちゃんとした形で落とし前を着けたいんだ。その気持ちは俺も同じさ…だから頼む。アイツを、正真正銘の仮面ライダーとして死なせてやってくれ」

それを聞いたサイクロンは黙り込んでしまいが、一拍置いてから軽く溜め息を吐いて変身を解くと、ロストドライバーをジョーカーに手渡した。

「しょうがないわね…でもその代わりに、自分でも満足できる様にけじめを着けないと、もうアンタのご飯作ってやらないわよ」

「おっとお、そいつは勘弁だな。今度こそ、ちゃんとケリは着けるさ」

冗談交じりにそんな会話を交わすと、ジョーカーはこちらへ向かって手に持ったロストドライバーを投げ渡した。

本当に自分をエターナル…仮面ライダーとして葬るつもりらしい。

そう思うと今までは違う笑みが零れて来た。

自虐的な笑みでも狂気に満ちた笑みでもない…“嬉しい”と言う感情から現れる笑みだ。

「フ…フッフッフ…こんな気持ちになったのは…本当に久しぶりだ……」

克也は込み上がる歓喜の感情を出来る限り抑えつつ、白スーツの男の手から掻っ攫う様にエターナルメモリを受け取り、今度はロストドライバーを腰に装着した。

「駆…ここからが俺達の、真正正銘最後の勝負だ。俺はお前を殺すつもりで掛かるから、お前も俺を殺すつもりで来い」

「エターナル！」

エターナルメモリのスイッチを押してガイアウイスパーを鳴らす。

それによってガイアメモリを起動させ、更にロストドライバーのスロットへ挿し込む。

そして、これでもう二度と言う事もなくなるであろう最後の合い言葉を、残りの命をすべて捧げる勢いで高らかに叫んだ。

「変身！！」

「エターナル！」

克也の叫びにガイアメモリが呼応して、ドライバーのスロットが自動的に斜めに傾き、克也の姿をまた別の姿へと変える。

白い体躯に靡く黒いローブ。

両腕の蒼い炎の刺青に三本の角飾り。

それは十年前に忽然と姿を完全に消した風都を守っていたもう一人の仮面ライダー……。

風都の人間はその白い怪人をこう呼ぶ……。仮面ライダーエターナルと。

「ふう…少しは楽になった……。これならお前とも決着を着けられそうだ」

「ああ。だがこちらもうとくに身体にガタが来てるからな。一瞬で決めるぞ」

「分かってるさ」

変身する事で一時的に肉体を強化してなんとか消滅を防いだ事で身体への負担が消えるが、それも長くは持つまい。ジョーカーの言う

とおり一瞬で決める必要があるだろう。

「エターナル！マキシマムドライブ！」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

どちらからともなく互いのガイアメモリを、それぞれのベルト、またはコンバットナイフに備え付けられたマキシマムスロットへ挿入し、その付近に設けられたスイッチを押してマキシマムドライブを発動させる。

「駆…これで本当に最後だ……」

「行くぜ克也…いや、相棒……」

エターナルがナイフを構え、その先端に巨大な蒼い光球を生成しながら最後の一撃を放つ宣言をすると、ジョーカーは昔の時の様に、もう一度自分の事を相棒と呼んだ。

まったく、何処までも優しい男だな、お前は……。

「さあ来い駆っうううう！！」

己の全てを懸けた叫びと共に、触れた物質を粉碎するエターナルの必殺技・「ネバーエンディングヘル」を、ナイフを振るって投げ飛ばした。

「ライダー…キック……」

対するジョーカーは何の小細工もないただただ純粹な、ジョーカーメモリのエネルギーを纏っただけの右足による飛び蹴りを、全てを粉碎線とする光球とエターナル目掛けて真正面から迎え撃った。

「ぬうう…はあああああ！！」

「な…うぐあああああああ！！」

ジョーカーのキックと光球がぶつかり合った瞬間、ジョーカーは身体を捻ってキックに回転を加えると、光球を貫いてそのままエターナルへと直撃した。

そして最後に、ジョーカーの…最高の相棒からの手向けの言葉が耳に入った。

「これで決まりだ。小野塚克也、永遠に眠れ……」

ジョーカーによるマキシマムドライブによって身体中がスパークしながらも、エターナルはその言葉に小さく答えた。

「ああ…そうさせてもらおう……」

そして次の瞬間、仮面ライダーエターナル…小野塚克也は爆発を起こして本当の死を迎えた。

爆炎が晴れるとそこには変身を解いた駆のみが立っていた。

エターナルに変身していた克也の姿はどこにもなく、代わりにエターナルメモリとロストドライバーが落ちているだけだ。

「……………」

駆は黙ってメモリとドライバーを拾い上げると、麗奈と歩の傍まで

歩み寄った。

今の駆の表情は帽子の所為でどうなっているのかよく分からないが、その雰囲気からはどこことなく哀愁を感じさせていた。

「ワリいな、世話掛けちまって」

「別に気にしなくても構いません」

「そうですよ。これは私達の問題でもありませんから」

駆の謝罪の入った礼に対して、歩と麗奈は謙遜しながら答えると、彼は今思い出したのか、もう一人の別の世界の仮面ライダーの事を思い出した。

「そついや、もう一人いなかったか？緑色の剣持った奴……」

「あ、そうでした！歩さん、ヴァンさんはどうしたんです!？」

「彼なら下の方で僕達を待ってます。かなり重症を負ってましたから、早く病院にでも連れて行かないと……」

「そいつぁヤバいな。俺が送ってやるよ。せめてもの礼だ」

何故だろうか…何時も通りのお気楽な言葉使いであるにも関わらず、目元が見えない為かどこか無理をしている感じがした。

「駆……」

「楓、帰るぞ」

楓が言い切る前に、駆は帽子を被り直しながらその先を言わせないように口を挟みながら自分が着けていた方のロストドライバーを押し付ける様に手渡し、その場を後にしようと入口へと歩き始めた。

「待って!」

今度は大きな声で相棒を呼び止める。

楓には一つ言っておきたい事があったのだ。彼の相棒として、言っておきたい事が……。

「駆、今は…今だけは、泣いても良いんじゃない？」

その言葉を聞いた途端、駆は進めていた足をピタリと止めた。それを皮切りにするかの様に楓は更に続ける。

「私、アイツの事何にも知らないけど、少なくともアンタの相棒だったんでしょ？ だったらいなくなっただけで悲しいんじゃないの？ 辛いんじゃないの…？」

駆とは長い付き合いだから良く分かる。

彼はどんな事があっても決して仕事に私情を挟まない。それが彼の信条でもあり、ハードボイルドでもある由縁だ。例え親しい人が死んだとしても泣かないし弱さを誰にも見せない。

それは元相棒の克也だろうが自分だろうが決して揺らぐ事はない。しかしそれが自分にとって一番辛いのだ。

彼は自分にとって最高のパートナーであり、同時に最愛の人でもある。

そんな彼が例え相棒でもある自分にさえも弱さを見せてくれない、委ねてくれない事が、頼りにされていない様で何だか寂しい。

「……………」

駆はこちらに振り向く事もなく、ただただ黙って立ち止まっているだけだ。

楓はそんな彼に歩み寄ると、後ろから優しく抱き締めた。

「お願い、お願いだから…私にだけは、本当の気持ちをを見せて？私の、最高で最愛なパートナーさん？」

「……ッ！…う…く………ッ！！」

抱き締めた体が震え、楓の頭上から嗚咽の声が漏れ始めた。

やがて嗚咽の声は徐々に大きくなりながら膝を突いて倒れた。

駆の頭の位置が低くなった事で見えたその表情は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっており、精悍な顔が台無しになっていた。

「ほらほら、折角のカッコいい顔が台無しよ？」

「ウル…ゼエよ…ひっ……。お前が、泣けっ…言っただろうが………っ…うあああああああ！！」

その顔に思わず苦笑しながら宥めるように言う楓に、駆は嗚咽混じりに楓の腕に手をやりながら言い返す。

しかし涙腺が限界を迎えてしまったのか、堰^{せき}を切ったかのように泣き叫んだ。

そして彼の心を現すかのように、日が完全に沈んで辺りを暗闇に染めた。

こうして、この街の仮面ライダーと、別の世界からやって来た仮面ライダーによってこの事件は幕を閉じた。

そしてこの事件は後に「風都タワー倒壊事件」として世間に知れ渡る事になるが、事件の真相を知る者はこの事件に関わったほんの一握りの人物だけとなり、謎のまま闇へと葬られた。

第四十八話：Aの悩み／これで決まりだ！（後書き）

加奈「加奈と！」

皐月「皐月の！」

加奈・皐月「あとがき〜ラジオ〜!!」

加奈「次でいよいよW編最終回！」

皐月「長かったな〜。なんつうかW編って、歩が主人公じゃないってイメージがあるよな」

加奈「確かに、楓さんやヴァンさん達が主役って感じがしてたわね」

カンペ（まあ私の作品では、ある意味「全員が主人公」って言うのを主軸にして書いてますからねf（^^*））

皐月「まあそのおかげで全員キャラが濃いんだけどな」

加奈「ところで作者、気になったんだけどエターナルが最後に放った必殺技。アレって劇場版で最後に使ってた技よね？何で色が蒼くなってるの？」

皐月「そう言えば劇場版の方は確か緑色じゃなかったっけ？」

カンペ（そこは私のオリジナル解釈です。劇場版でエターナルが放った必殺技は、私の頭の中では「エクスピッカーによるエネルギーが複合した結果緑色になった」と解釈しているので、私なりにアレンジさせて頂きましたm（）（）m（）

加奈「成程、それなら合点がいくわね」

皐月「よくそこまで思い付いたな。そしてやっぱりカプト編には麗奈を連れて行く予定なのか？」

加奈「麗奈さんが変身したディボルグか〜、でもまた暴走しちゃう

んじゃない？」

カンペ（そこは次回の更新でその辺を何とかしていく話が出てきますので楽しみにd（^^）（

皐月「って事は暴走が無くなるのか…ちょっと残念な感じだな」

加奈「でもその方が麗奈さんの為にもなるでしょ。それではみなさん」

加奈・皐月「その物語の真実を、見逃すな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6130t/>

仮面ライダーディージェント～破壊の代行者～

2011年12月11日18時52分発行